

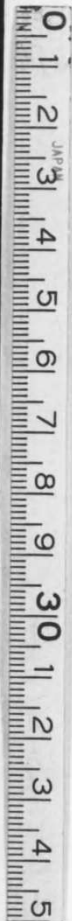
續國譯漢文大成

文學部

十三

309  
65

巻  
八



始



續國譯漢文大成

吉田特郎氏 寄贈本

文學部第十三册 (第四帙の一)  
杜少陵詩集 上の一



杜少陵詩集 上卷 目次

序.....一

例言.....二

總說.....一〇六

卷一

遊龍門奉先寺.....	一	已上人茅齋.....	一三
望嶽.....	二	房兵曹胡馬.....	一四
登兗州城樓.....	四	畫鷹.....	一五
題張氏隱居 二首.....	六	過宋員外之間舊莊.....	一七
劉九法曹鄭瑕丘石門宴集.....	八	夜宴左氏莊.....	一八
與任城許主簿遊南池.....	一〇	臨邑舍弟書至苦雨.....	二〇
對雨書懷走邀許主簿.....	二	假山.....	二四

目次

蘇園精舍丈人題

龍門……………六  
 李監宅 二首……………七  
 贈李白……………三  
 重題鄭氏東亭……………三  
 陪李北海宴歷下亭……………三  
 同李太守登歷下古城員外新亭……………三  
 嵯山湖亭奉懷李員外率爾成興……………六  
 贈李白……………元  
 與李十二白同尋范十隱居……………四  
 鄭駙馬宅宴洞中……………四

卷 二

飲中八仙歌……………七  
 高都護肥馬行……………八  
 冬日洛城北謁玄元皇帝廟……………八

冬日有懷李白……………四  
 春日憶李白……………四  
 送孔巢父謝病歸游江東兼呈李白……………四  
 今夕行……………五  
 贈特進汝陽王二十韻……………五  
 贈比部蕭郎中十兄……………五  
 奉寄河南韋尹丈人……………六  
 贈韋左丞丈濟……………六  
 奉贈韋左丞丈二十二韻……………六

故武衛將軍挽詞 三首……………八  
 贈翰林張學士珣……………九  
 樂遊園歌……………九

卷 三

同諸公登慈恩寺塔……………一〇  
 投簡咸華兩縣諸子……………一〇  
 杜位宅守歲……………一〇  
 敬贈鄭諫議十韻……………一〇  
 兵車行……………一三  
 前出塞 九首……………一八  
 送高三十五書記十五韻……………二八  
 奉留贈集賢院崔子二學士……………三三  
 貧交行……………三五

奉陪鄭駙馬韋曲 二首……………一五  
 重過何氏 五首……………一七  
 陪諸貴公子丈八溝納涼 二首……………一八  
 醉時歌……………一八

送韋書記赴安西……………一七  
 女都頭歌寄元逸人……………一八  
 曲江三章 章五句……………一八  
 奉贈鮮于京兆二十韻……………一八  
 白絲行……………一八  
 陪鄭廣文遊何將軍山林 十首……………一八  
 麗人行……………一八  
 韋國夫人……………一七  
 九日曲江……………一七

城西陂泛舟……………一九  
 漢陂行……………一九  
 漢陂西南臺……………一九  
 與鄆縣源大少府宴漢陂……………二〇

贈田九判官梁丘	二〇一	秋雨嘆 三首	二〇四
投贈哥舒開府二十韻	二〇四	奉贈太常張卿垆二十韻	二〇四
寄高三十五書記	二一〇	上韋左相二十韻	二一一
送張十二參軍赴蜀州因呈楊五侍御	二二二	沙苑行	二二七
贈陳二補闕	二二三	橋陵詩三十韻因呈縣內諸官	二六一
病後過王倚飲贈歌	二二五	送蔡希魯都尉還隴右因寄高三十五書記	二七〇
送裴二虬尉永嘉	二三〇	醉歌行	二七〇
贈獻納使起居田舍人澄	二三二	陪李金吾花下飲	二七八
崔駙馬山亭宴集	二三四	官定後戲贈	二八〇
示從孫濟	二三五	去矣行	二八一
九日寄岑參	二三八	夜聽許十一誦詩愛而有作	二八五
嘆庭前甘菊花	二三二	戲簡鄭廣文虛兼呈蘇司業源明	二八六
沈東美除膳部員外郎阻雨未遂馳賀	二三三	夏日李公見訪	二八七
苦雨奉寄隴西公兼呈王徵士	二三七		

卷 四

天育驪圖歌	二九一	月 夜	二九九
聽馬行	二九四	哀王孫	二九九
魏將軍歌	二九九	悲陳陶	三〇〇
白水明府別宅喜雨	三〇三	悲青坂	三〇六
九日楊奉先會白水崔明府	三〇四	避 地	三〇六
自京赴奉先縣詠懷五百字	三〇五	對 雪	三〇九
奉先劉少府新畫山水障歌	三〇八	元日寄韋氏妹	三〇八
奉同郭給事湯東靈湫作	三一三	春 望	三一三
後出塞 五首	三二八	得舍弟消息 二首	三二五
塞端薛復筵簡薛華醉歌	三三七	憶幼子	三三五
晦日尋崔微李封	三三一	一百五日夜對月	三三五
白水崔少府十九翁高齋三十韻	三四五	遣 興	三三七
三川觀水漲二十韻	三五五	塞廬子	三六〇

○ 哀江頭……………三五

雨過蘇端……………三九

卷五

大雲寺贊公房 四首……………三六

喜晴……………三九

送率府程錄事還鄉……………四〇

送楊六判官使西蕃……………四九

鄭尉馬池臺喜遇鄭廣文同飲……………四〇

哭長孫侍御……………四九

自京竄至鳳翔喜逢行在所 三首……………四七

奉贈嚴八闈老……………四四

送樊二十三侍御赴漢中判官……………四二

月……………四五

送韋十六評事充同谷防禦判官……………四六

留別賈嚴二闈老兩院補闕……………四六

述懷……………四三

晚行口號……………四六

得家書……………四三

獨酌成詩……………四九

送長孫九侍御赴武威判官……………四九

徒步歸行……………四〇

送從弟亞赴河西判官……………四三

九成宮……………四三

送靈州李判官……………四八

玉華宮……………四六

奉送郭中丞兼太僕卿充隴右節度使三十韻……………四〇

羌村 三首……………四六

○ 北征……………四五

行次昭陵……………四九

收京 三首……………五〇

重經昭陵……………四九

送鄭十八虔貶台州司戶……………五二

彭衙行……………四九

臘日……………五二

喜聞官軍已臨賊境二十韻……………五〇

奉和賈至舍人早朝大明宮……………五八

卷六

宣政殿退朝晚出左掖……………五二

曲江 二首……………五四

紫宸殿退朝口號……………五三

曲江對酒……………五七

奉宿左省……………五五

曲江對雨……………五九

晚出左掖……………五六

奉答岑參補闕見贈……………五四

題省中院壁……………五七

奉贈王中允維……………五四

送賈闈老出汝州……………五九

送許八拾遺歸江寧觀省……………五四

送翰林張司馬南海勸碑……………五二

因許八奉寄江寧旻上人……………五七

曲江陪鄭八丈南史飲……………五三

題李尊師松樹障子歌……………五九

得舍弟消息……………五二  
 送李校書二十六韻……………五三  
 偈側行贈舉四曜……………五九  
 贈舉四曜……………五三  
 題鄭十八著作丈故居……………五四  
 瘦馬行……………五八  
 義鶴行……………五七  
 畫鶴行……………五七  
 端午日賜衣……………五九  
 酬孟雲卿……………六一  
 從左拾遺移華州掾與親故別因出此門……………五二  
 寄高三十五詹事……………五八  
 贈高式顏……………五五  
 題鄭縣亭子……………五七  
 望岳……………五九

早秋苦熱堆案相仍……………五九  
 觀安西兵過赴關中待命二首……………五九  
 九日藍田崔氏莊……………五九  
 崔氏東山草堂……………五七  
 遣興三首……………五九  
 獨立……………六二  
 至日遣興奉寄北省舊閣老兩院故人二首……………六四  
 路逢襄陽楊少府入城戲呈楊四員外綰……………六七  
 湖城東遇孟雲卿復歸劉顥宅宿宴飲散……………六九  
 闕鄉姜七少府設餽戲贈長歌……………六二  
 戲贈闕鄉秦少府短歌……………六一  
 李鄠縣丈人胡馬行……………六八  
 觀兵……………六二  
 憶弟二首……………六三  
 得舍弟消息……………六四

不歸……………六六  
 贈衛八處士……………六七

洗兵行……………六〇

序

孔子は興於詩といひ、不學詩、無以言といひ、朱子の『小學』を編するや詩篇を選入せんとし、門人劉子澄に書を與へて、古樂府、及杜子美詩、意思好、可取者多、令其喜諷詠、易入心、最爲有益也、といひ、近代清の黎庶昌は議を著はして、楚辭・文選・杜詩・韓文を以て毛詩に次ぎて之を學官に立つべし、とい入り。前賢の詩を重んずるや此の如きものあり。杜甫は其人詩聖と稱せられ、其集は詩史と稱せられ、其の意は忠厚、其の體は兼該、古今詩人の冠冕、百世の標準たり。予の詩を重んずるや、竊に前賢に比し、杜詩に於ては推尊の意特に厚し。此に自ら揣らず、聊かその章句文義を尋ぬ。未だ以て作者眞意の在る所を發揮するに足らずと雖も、庶幾くは好學同志の攻錯の一端に資するを得んことを。

昭和三年戊辰四月

文學博士 鈴木虎雄 撰



①一編の要するを得んことを  
一、本書は清の仇兆鸞撰する所の「杜詩詳註」を以て底本とせり。但本文に於て字誤、又は非是と考へたる字には、必しも従はざるものあり。  
一、解釋は余が「總說」中に列擧せる諸書、及び其他に就き、斟酌して妥當と考へらるるものを探りたり。  
一、余の私見に屬するものは其旨を記して他と區別せり。  
一、原作の意義を解釋するため、必要に應じて章段を分ちたるも、構造上の説明は一一には之をなさず。構造上の研究は自ら一事に屬するを以てなり。  
一、作物の價値に關する評論はすべて之を爲さず。是、評論は文義解釋以後の事なりと信するが故なり。評論は亦自ら一の専門をなすべし。  
一、杜詩の評論について知らんと欲するものは、「總說」中に擧げたる評書、及び古今の詩話・論文の語を參照して熟思せられんことを望む。  
一、余は解釋に際して「知るを知るとなし、知らざるを知らずとなす」の態度を取りたり。但、學淺く、識陋に、自ら知り得たりとなせる所に於ても、或は誤謬なきを保し難し、又或は疑を存し、

例言

一、本書は清の仇兆鸞撰する所の「杜詩詳註」を以て底本とせり。但本文に於て字誤、又は非是と考へたる字には、必しも従はざるものあり。  
一、解釋は余が「總說」中に列擧せる諸書、及び其他に就き、斟酌して妥當と考へらるるものを探りたり。  
一、余の私見に屬するものは其旨を記して他と區別せり。  
一、原作の意義を解釋するため、必要に應じて章段を分ちたるも、構造上の説明は一一には之をなさず。構造上の研究は自ら一事に屬するを以てなり。  
一、作物の價値に關する評論はすべて之を爲さず。是、評論は文義解釋以後の事なりと信するが故なり。評論は亦自ら一の専門をなすべし。  
一、杜詩の評論について知らんと欲するものは、「總說」中に擧げたる評書、及び古今の詩話・論文の語を參照して熟思せられんことを望む。  
一、余は解釋に際して「知るを知るとなし、知らざるを知らずとなす」の態度を取りたり。但、學淺く、識陋に、自ら知り得たりとなせる所に於ても、或は誤謬なきを保し難し、又或は疑を存し、

杜少陵詩集  
或は未だ解を得ざる所尠からず。此等の點については、竝に大方君子の指教是正を賜はらんことを冀ふ。

著者誌

# 杜少陵詩集總説

## 一、杜詩を推奨する理由

杜甫は唐の玄宗、肅宗、代宗の朝にわたりて生存せる詩人なり。元稹が詩人以來、未だ子美の如き者あらずと評せし以後、彼に對する評價は確定せり。秦少游は推して孔子大成となし、鄭尙明は周公制作となし、黃魯直は詩中之史となし、羅景倫は詩中之經となし、楊誠齋は詩中之聖となし、王元美は詩中之神となせり。以上秦少游以下の評語は「詩史」の語は「新唐書」本傳に見えれば黃魯直の前よりあり、「詩聖」の語は誠齋に楊誠齋に本く、詩人之詩、唐云、李杜、宋言、蘇黃、蘇似李、黃似杜、蘇李之詩、子列子之御風、無待乎神、有待而未嘗有待者、聖と相通せざることを無き、或は制作の力を具ふるもの之謂なり、楊氏の評（同人玉房卷十四、引楊誠齋文集）聖とは通せざること無き、或は制作の力を具ふるもの之謂なり、楊氏の意蓋し詩の極致を得たるもの、第一人者といふが如き義にとれるなるべし。詩人に對しては此以上の讚辭は有らざるなり。

竊かに案ずるに道德と文學とは各、獨立せる立場より見るときは互に衝突して相容れざる所あり。例せば或る戀愛に關する詩歌の如き、道德上よりすれば許す可らざるものも文學としては棄つ可らざるものあり、山水花鳥風月等の天然美をうたへるもの、即ち繪畫の區域に近きものの如きは直接善

と關することなし、而して道德的感情がうたはるるものに於ては實に全く相一致す、作者自身の道德的感情が文學となりて溢れ出づるときに吾人は最も善美の合致に感動せしめらる。詩人的技能に於て杜甫は支那古今幾多の詩人中に傑出せるものなるも、予が杜甫を推さんとするは其技巧に加へて作物中に善美の合致を見出すを以てなり。固より杜甫の抱懐せる道德觀念は儒教に根基するものなり、謂はゆる五倫の道を重んずるものなり。彼は時として佛門に入り其の法を修めんと欲し、又時として道教を慕ひ、仙を求め藥を採り、丹砂を鍊らんと欲することを言はざるに非るも、是多くは其の憂悶奈何ともしがたき際にて發するものにして、其の常態に出づるものに非るなり。支那思想の特有物として價值あるものは儒教なるべし、而して儒教の思想を單に道理としてには非ずして感情として傑出せる詩人的技能によりてあらはしたるものは悉くは杜甫の詩に論ゆるものあらざらん。彼の生涯の多くは饑寒漂泊を以て終始せり、而して志は高遠に、東坡の謂はゆる「一たび飯するにも未だ嘗て君を忘れず、其君を堯舜に致さんことを期せり、實に忠君の念に滿ち充ちたり、而もそれが眞實の衷情より發するものにして、決して多くの者が爲す如き表面上形式的になすものに非ず。或る場合には一身の安危を度外に置きて天子を直諫せしことすら之あり。之に次ぎては國を愛し民を憂へ、(賢才を進め、勇武を論す亦忠君より出づ) 妻子に親しみ、朋友に教く、甚しきに至りては草木蟲魚の微なるに至るまで之に對して非常の同情を有せり。仁、博愛の情が奕奕として光彩を放ちつつあり。此の如

き詩人は、一ありて二なしといふも不可なからん。是子が平生彼の詩を愛讀し之を推獎する所以なり。以下事項を追ひて記述し、彼の詩を領會するの助となさんとす。

### 二、唐の時代

唐の太宗は太原山西省太原府より崛起し高祖を扶け隋を滅して之に代り天下を統一せり。唐一代の規模は太宗の貞觀中に備はれり。唐の疆域は東は海より今の朝鮮に及び、南は林州即ち林邑今越南西は沙漠葱嶺を越え北は沙漠を包括せり。太宗は之を十道に分てり。後更に睿宗は二十四都督府を置き、玄宗は十五道を分ち、採訪・按察等の使を置き、疆際邊境の地は節度使・經略使等によりて之を管轄せり。交通は西は西域諸國より波斯に達し南は印度に及び、極北を除きては殆ど全亞細亞の諸國人の往來を見たり。制度としては官制はもとよりのこと律令を定め租稅、徵兵、官吏登用の方法等皆成り。政治の方面よりいはば太宗の貞觀中は魏徵、房玄齡、杜如晦、長孫無忌、其他の名臣ありて其治比稀なりと稱せらる。次の高宗は初は尙治道を失はざりしが晩年より皇后武氏の專權あり、中宗の嗣聖以後武后の世となる。武后は後、中宗を廢し、弟睿宗を立て遂に自立し睿宗をも廢し帝位に即き國を周と號す。武后私行修らざるも文化の上には觀るべきものあり。中宗のち位に復せしも其皇后韋氏權を專にす。武・韋二后と附帶しては太平公主武后安樂公主の亂行あり。玄宗は韋氏及び其の黨

を誅し一時睿宗を奉じ、ついで其の讓りをうく。玄宗に至り唐の文化は其の極點に達せり。開元・天寶にわたり宋璟、姚崇の如き名相あり國富み民安かなりしが、天寶の末に玄宗が由て奚・契丹を控制せしめんとせし安祿山の叛亂あり。之より河北安からず。肅宗は玄宗に繼ぎしが東北には史思明の亂あり、西には羌、西南には吐蕃の亂あり。代宗の時又西北、西南、河北に於て騷亂を絶たず。此より藩鎮の跋扈を啓く。又玄宗・肅宗・代宗三朝並に宦官の權を用ふるあり、此後と雖も復び貞觀、開元の治平を見る能はず。教化の方面よりいはば高祖は即位の初より既に學校を中央・地方に設けしめたり。貞觀十四年二月には太宗自ら國子監に幸して釋奠を觀、學舍千二百間を増築し、學生を増して二千二百六十員に満たしめ、武人にも經を授け、高麗、百濟、新羅、高昌、吐蕃の諸會長までその子弟を遣はして國學に入らしむ、講筵に升るもの八千餘人に至るといふ。太宗は又武徳の末九年弘文殿に於て四部子集の書二十餘萬卷を集め、殿の側には弘文館を置き、天下文學之士、虞世南、褚亮、姚思廉、歐陽詢、蔡允恭、蕭德言、等を精選して學士を兼ねしめ、更る更る招直せしめ、之と前言往行を講論し、政事を商榷せり。

太宗又た孔穎達等の諸儒をして南北の學派を折衷して五經の注釋を作らしめ之を正義といひ學者をして之を習はしむ。玄宗亦た開元五年、冬十二月、秘書監馬懷素の奏に本きて逸書を搜訪し編校刊正せしめ、又た或は九載、李林甫の請に従ひ侍書徐浩等に、詔し小楷を以て九經を長安に石刻せしむる等のことあり。天寶初ら「孝經」に注し八分を用て之を石碑に刻し、石經、儒學を重じたり。試験に於ては明經の科にて

ては九經を試み、天寶十三載以後には進士の科にては經、策の外に詩賦、書、唐に於ては儒學のみならず佛敎も亦た盛なり。玄奘は貞觀三年に支那を發し印度に至り經典六百五十餘部を將來し千三百餘卷を編譯せり。律宗、淨土宗、禪宗、密敎の如きは、皆唐に盛行せり。華嚴、法相も此時に出づ。道敎も亦た流行す。道敎は戰國の末より方士が神仙を説き長生不死を説くより始まり、後漢の末、三國の初よりその名あり、老子の説を引きて之に附會す。唐は李氏にして老子と姓を同じくするより之を崇び、武徳三年五月己に晉州羊角山(平陽府浮山縣南)に老子廟を立てたり、高宗は乾封元年亳州(安徽潁州府亳州治)の老君廟に謁し、老子を追尊して太上玄元皇帝となす。上元元年武后は明經の試験に老子を用ひしむ。玄宗に至りては親ら「道德經」に注して之を習はしめ封演見聞記、開元注道德經、令「史記」の列傳につきて老子・莊子を升して伯夷傳の上に置きかへ唐會要、開元二十三年、數升老兩京諸州に詔し各、玄元皇帝廟及び崇玄學を置かしむ(長安志、引禮閣新禮曰、開元二十九年、始詔兩京及諸州、京諸州各置玄元皇帝廟并崇玄學、置生徒、令習老子莊子列子文字、每年准明經例考試、舊唐書、玄宗紀、天寶元年二月、莊子說爲南齊人、文字說爲通玄真人、列子說爲沖虛真人、庚桑子說爲洞虛真人、其四子所著書、改爲真經、崇玄學置博士、助教各一員、學生一百人、唐書、等のことあり、其後も尊崇已ます、彼の長生殿朝元閣の如きは皆道敎を貴ぶの餘に成れり。祇敎、景敎の如きも入り来る。之を藝術の方面よりみるに建築の如き長安に於ける大明宮(東内)、大極殿(西内)、興慶宮(南内)、洛陽の太初宮、上陽宮、驪山の華清宮の如きはいづれも宏壯を極めたり。佛寺道觀の類尠からず、武后の建てたる明堂は方三百尺、高二百九十四尺、三層にして上は圓蓋、上

には高一丈の鐵風を置く。明堂の北には更に五級の天堂を建て、夾紵の大像(麻圭)を貯ふ。天堂の第三級に至れば既に明堂を俯視すといふ。武后又た銅鐵を鑄て天樞を作る高百五尺、徑十二尺、之に大周萬國頌徳天樞と刻す。塑像の如き、崖石を鑿ちて佛像を造ることも此時に行はる。書は太宗の時に虞世南、褚遂良、歐陽詢等あり、玄宗の時には李邕、李陽水、徐浩、顔真卿の如きあり。畫も亦た吳道玄、李思訓、王維、鄭虔等竝に玄宗の時にあり。次に歌舞音樂について見ん。

樂府は周漢に盛なりしが、魏晉の代までは猶古樂の正聲を傳へたり。晉の永嘉(元年は西紀三〇七、距今一六二一前)時代に五胡中原に亂入し元帝都を江南に遷すや樂も亦た一部分江南に入る。後、宋の武帝(劉裕)が關中を定めて其聲伎を收めて歸るや、西晉の遺樂は乃ち南朝に入れり。南朝の宋、梁の時代は文物隆盛にして樂も亦た新聲を生ぜり。北魏の孝文・宣武、南朝と争ひ、兵を淮・漢に用ひて或は南朝の樂を得るや之を清商樂と名けて保存せり。隋は北朝の系統を受け先づ北方を平げ、次に南朝の陳を滅せしが清商樂なる官術を設けて南樂を存し、總て之を清樂と稱せり。唐は隋の後をうけ高祖のときには隋の協律郎祖孝孫を擧げて雅樂の改良を圖らしめ、太宗の時には張文收をして之に當らしむ。貞觀中に於て凡そ十部の樂ありしが清樂はその一たり。尋て高宗、則天武后の時には竝に雅樂の制定あり。玄宗の朝に至りては益々樂舞の變革を行ひたり。此時代に於ては支那本土の南北を統一せるのみならず、東は高麗・百濟、北は鮮卑・吐谷渾・部落稽、南は扶南・天竺・南詔・驩國、西は高

昌・龜茲・疏勒・康國・安國等の諸國の伎樂をも輸入するに至り、當時に於ける殆ど世界の樂曲を合せ得たり。加ふるに玄宗自身は音樂に於ては一聲の誤をも必ず知るほどの天才にして羯鼓は最も長ずる所なり。玄宗は樂を分ちて立部伎(凡八種、堂下に之を奏す)坐部伎(凡六種、堂上に之を奏す)とし(坐部は立部より優るものを用ふ)坐部の子弟三百人を選びて禁苑の梨園に於て隋以來傳はりし法曲を教へ、大常には供奉の新曲を教ふる特別の教院(左右教坊)を設け、道教にちなみて、特に道曲(道調)なるものを製せしめたり。玄宗自ら新曲を製すること四十餘、又た新しき樂譜をも製せり。此外に又散樂百戲あり、天子此の如くなるを以て地方の武官等も(特に外國に接せる地方)亦た往往新曲を獻するものあり。民間に於ても亦た自然に歌曲の流行を致したり。其の最も盛に歌はれしは絶句なり。又た古詩・律詩の類も之を節略して絶句の如くし、塞外傳來の曲調に合はせてうたひたるものあり、彼の「詩餘」の如きも實にその或る曲調を寫したるもの遺なるべく察せらる。唐代の歌曲誠に盛なりといふべし。

### 三、杜甫の時代に至るまでの唐の文學

杜甫の出づる以前唐代の文學は如何なりしか、之を述ぶるに先ちて唐以前の文學特に韻文に關して沿革を略述すべし。

支那上古の状態は詳に知る能はず。孔子編する所の「詩經」によつて殷周の詩を窺ふを得、周の

詩凡を三百篇あり。四言の體を用ひ人情景物能く其の真を寫せり。降つて戰國の中頃より散文と韻文とは接近し、新に騷賦を生ず、騷賦の句法は通例四言乃至八言に至るものを用ひ明韻に便なるものなり。漢に至りて四言詩の外に五言詩、七言詩起れり。又た特に詩歌を音樂に合せて奏すべく、樂府の設立ありて此に樂府體なる詩風を生ず。樂府の體は五言を用ふるもの多きも、三、四、七、其他不定數の字を用ひたるものもあり。其性質は敘事的(敘事詩)なるもの多し。騷賦は更に變化して漢賦を生じ、漢賦發生の副産物としては駢體文即ち對句、典故等を多く使用する文體を生ぜり。後漢に於て賦は殆ど同じ運動を繼續し駢體文は益々盛なり。詩は七言詩時に生ぜしが五言詩著しく發達せり。魏は兵亂の際なりしも特別に文學の保護者あり、文學は政治、道德の綱紐を脱して獨立し、七言詩は完成せられ五言詩は從來比なき盛況を呈せり。晉・宋、亦た各々特種の發達をなせり。文章は漢末魏初より散文すたれて駢體文は更に四六體に近づきたり。齊・梁の時代は文學上の大革命期にして音韻の説起り詩には新體(齊梁體)又た新體詩を生じて律詩の起原をなし、文章には純粹の四六體成れり。「文選」の編は梁にあり。陳は齊梁の範圍を脱せず。魏と時を同じくする吳、及び東晉・宋・齊・梁・陳は世に之を六朝といふ。北朝に於ては北魏・北齊・北周等の文學各々或は秦漢、或は勁健、或は華麗に南朝に對して多く譲らず。隋は北に起りその陳を滅して南北を統一するに及び、北の雄勁に加ふるに南の優麗を以てし、文學は程よき調和を見んとせり。唐は此の隋を承けて起る。唐は我推古天皇二十六年



(西紀六一八)より醍醐天皇延喜六年(九〇六)に至る。通常之を四期に分つ、初唐(唐初より玄宗開元の初に至る、六一八—七一三頃まで)盛唐(玄宗開元初頃より代宗太暦初頃まで、七一三頃—七六六頃まで)中唐(代宗太暦初頃より文宗太和の初頃まで、七六六頃—八二七頃まで)晚唐(文宗太和の初頃より唐末まで、八二七頃—九〇六頃まで)以上の區分をなすことは、文學の變遷を見るに於て頗る便利なり。

さて唐は隋を承けて起りしが、初唐に於ては文學は猶ほ南朝の習氣を脱せざる時代なり。而して初唐に於ては、更に太宗時代と則天武后の時代とを分別し得べし。太宗時代の作者は隋末より唐に入りしもの多く、又た南人よりは北人多く、南朝の綺麗を貴ぶも、北方の勁健なる氣味を帯ぶる所より、將に文質彬彬たる域に進まんとす、例へば魏徵・王績・虞世南・李百藥・楊師道・許敬宗・上官儀(此内虞・許は南人、他は北人)の如き然らざるはなし。武后の時代に於ては、南朝の綺麗を加味することは同様なるも音節の上に於て圓轉流麗を旨とし、又た極めて清新なる初唐特有の詩風を生ぜり。之を代表するものは彼の王・楊・盧・崔・李・王勃・楊炯・盧照隣・駱賓王の四傑を首となす。彼等は長篇に於て蟬聯の格を用ふるに於てその所長を發揮せり。此風は初唐末(景龍より開元の初)に於ても包融・賀知章・張旭・張若虛の吳中四士によりて繼承せられたり。(融・旭は現存の詩篇少し)武后の時、更に齊梁の新體詩に原本して、唐の律詩を完成するに功ありしものは沈佺期・宋之問の二家あり、同時に文章四友と呼ば

れたる李嶠・蘇味道・崔融・杜審言あり、嶠の七言律、審言の五言律は沈・宋と同じく律詩の完成に功あり、(嶠)又た五言律をもよくす)審言は實に杜甫の祖父なり。武后の時又た陳子昂あり、杜甫甚だ之を重んず。子昂の古風を帯びたる律詩は唐律の正格と稱すべく、杜甫之より得る所ある推察するにたへたり。猶杜甫の先驅とみなすべき幾多の作者あり、此くして愈盛唐に入る、盛唐となりて唐固有の詩風確立し詩形、詩趣、具備し、其盛なること前後に絶す、杜甫と相前後して起りたる幾多の詩人中最も特色あるものを見るに、先づ自然の美を寫すに長ずるものあり、此中にも山水を寫すに長じたる王維、行旅を寫すに長じたる孟浩然、江湖の景を敘するに巧なる常建、田家を拙くに妙なる儲光羲等あり、又た邊塞從軍の情を寫すに長じたる高適、岑參の如きあり、又た能く兒女の情を敘ぶる所の崔國輔・崔顥・王昌齡等あり、其他或一體に秀で一長を有するもの指を屈するにたへず。此等諸多の詩家中嶄然頭角を露はし、古今推して詩人の大宗となすものは則ち李白と杜甫となり。李白は暫く之を措く、杜甫は實に上は風騷より中は漢魏、下は六朝及初唐まで歴代の所長を取り之を我が胸中に鎔鑄し融會し、其獨得の機軸を以て之を織り出せるものなり。謂はゆる「集めて大成する」の一語は杜甫に於て之を見るなり。周より唐初に至るまで堆積せる文學の根幹が、盛唐に至りて其花を開き杜甫に至りて其實を結びたるの觀なくんばあらず。又た譬へば杜甫は山腹に於ける大瀟水池の如く、其の上方幾多の源泉は皆落ちて此池に貯へられ、此池は更に下方の原野に向つて灌溉の用をなすべく水を注ぎつつあり。

### 四、杜甫の傳記

先づその家系を述べん。

#### (一) 家系



杜甫自らの言によれば杜氏は遠く伊祁氏より出でその後陶唐氏となる。陶唐氏は則ち帝堯なり。周  
 に於ては唐杜氏となり。遠系之より出づ。その後降つては彼の「春秋經傳集解」を以てあらはるる晉の  
 當陽成侯杜預を以て遠祖とす。宋の蔡夢弼の見たる杜氏家譜なるものによれば、杜氏に五派ありて杜  
 甫の一派は其中にあらず、甫が家中に徴にしてその中より省かれしならんといへり。然れども杜預を  
 以て祖となす時は則ち甫の家系は五派の一なる襄陽の杜氏より出で、襄陽の杜氏は杜預の子尹より出  
 づ、甫自ら預の十三葉孫と稱せり。「通典」の著を以て知らるる唐の杜佑亦た此系より出づ。杜預を第  
 一代とし第八代に至り杜叔毗あり、叔毗の子某は隋の河内郡司功、獲嘉縣令たり、某の子に依藝あり、  
 唐の監察御史、洛州、鞏縣令となる、實に杜甫の曾祖父なり、依藝以後鞏縣(今河南の縣)の人とな  
 りしが如し。鞏は偃師と近く偃師は杜預の墳墓の地なり。杜甫が偃師に莊業を有するは或は依藝の力  
 によるに非るか。依藝の子を審言といふ、即ち杜甫の祖父なり。審言は武后の時膳部員外郎となり、  
 中宗の時に修文館直學士となる。五言詩を能くし書翰に工なり。彼、崔、李、蘇と共に四友の目あり。  
 沈宋と律詩に功ありしこと前に之をいへり。審言の五言律詩、「送崔融」、「和康五庭芝望月有懷」  
 及び五言排律「和李大夫嗣真奉使存撫河東」等の作は竝に以て杜甫が詩學の由來する所を窺ふ  
 べし。甫が詩は吾家事といへるも、其詩の格律の審言に負ふ所あるをいふものなるべし。杜甫の氣質  
 も亦た審言に類似せるが如し、左の二逸話あり。

乾封中、蘇味道爲天官侍郎、審言預選試、列數、謂人曰、蘇味道必死、人間其故、審言曰、見吾列、即當自產死矣(舊唐  
 書卷百九十一上、文苑上(不傳))

又審言人曰、吾之文章、合得周宗一作衡言、吾之書詩、合得王羲之北面(同上)

以て其性の審傲矜誕なるを見るべし。

審言又た嘗て事に坐して吉州司戸參軍に貶せらるるや州僚と叶はず、司馬周季重等審言が罪狀を構  
 へて之を獄に繋ぎ之を殺さんとす。審言の第二子升なるもの府中の醜聞なるに乗じて季重を殺し己  
 も亦た殺さる。時に年十三。人之を孝童といふ。升は審言の剛なる處を承けしものなり。審言の妻を  
 薛氏といふ。長子は閑、次は升、次に專、登あり。閑は杜甫の父なり。閑は嘗て兗州(山東)司馬と  
 なり、又た奉天令(陝西、乾州治)となつて卒す。杜甫は如何の人物なりしや詳ならず。閑の妻を崔  
 氏といふ。崔氏は唐の太宗の孫義陽王李恹といひし人の外孫女にして即ち杜甫の母なり。支那人の記  
 する所多く父系に詳にして母系に略なり、今竝に明示すること別表の如し。

是に據れば杜甫の外祖父崔某は高祖の曾孫にあたり、その外祖母は太宗の曾孫にあたり、杜甫の  
 身體には即ち高祖及太宗の血液が流通しつあるなり。彼が唐の皇室、唐の天下を以て自己の休戚と  
 なすもの偶然に非るなり。又た杜甫の交遊の中には宗室には汝陽王璣、漢中王瑒、蔡王房炎の如き、  
 天子の女婿には大常卿張垠、鄭駙馬(濟暉)、崔駙馬(惠童)の如き徒少からず。甫嘗て宮中行樂秘、少



有外人知といへるも、行樂の秘も亦た之を知るの機會あり、政治の裡面には深く通じ居たるが如し。故に彼が天寶の亂以後に際會して遷きたる涙は、眞實胸底より迫り出されたる熱涙にして、詩人の尋常一様の虚涙に同じからず。

(二) 幼時より仕宦以前

杜甫字は子美、睿宗の太極元年、先天元年、即ち皇朝元明天皇和銅五年、西紀七一二、李白に後ること十一年、白樂天に先つこと六十一年に生る。甫は何れの地に生れしや、詳ならず。彼常に杜陵老又たは少陵老を以て自稱するを以てみれば少陵に生れしならんか、或は河南に生れしか、詳ならず、長安の南四十里に杜陵あり漢の宣帝を葬る地なり、其南原に宣帝の許后を葬る、陵制差小なるにより、之を少陵といふ、後皆少陵と稱すといふ。少陵の南に樊川あり、東は即ち杜曲にして西は即ち杜甫の家せし處なり、更に西すれば韋曲あり、二曲は共に名勝の地たり。杜甫はその母につきて記する所なし。見時嘗て病みしに其姑(叔母)萬年縣君の子も亦た病めり、縣君之を女巫に問ふに室の東南隅に置けば吉なりと答ふ、因て其子を移し杜甫を東南隅に置き遂に其子は卒せしが、杜甫は生くることを得たり、杜甫は之を縣君の墓誌中に記せり。彼は記憶の性強かりしが如く、玄宗の開元三年に鄭城(河南許州の屬縣)に於て公孫大娘が劍器を舞はすを見しことを記せり。彼は幼にして其母を喪ひ六七歳頃にはその外家崔某の家に養はれしことあるに似たり。七歳には已に詩を作ることを解し、

その著作の七歳より始まることをいへり。九歳にして大字を書し著作は藝に滿てり。十四五歳にしては既に文學者の羣に入り、時の名士より稱揚せられたり、當時已に酒を嗜み、老成人と交り、眼中一世を空しくするの概あり。壯遊詩に曰く、

性豪業嗜酒、嫉惡懷剛腸、脫略小時輩、結交皆老蒼、飲酣視八極、俗物多茫茫、

と、然れども一面には尙童心を失はず樹に上りて梨棗を食ふ等のことをなしたり。百憂集行に曰く、

憶年十五心尙孩、健如黃犢走復來、庭前八月梨棗熟、一日上樹能千回、

し。

昔、司馬遷は天下の名山大川を跋涉し大に文氣を養ひしといへるが、杜甫亦た二十歳にして遊歴の途に上れり。先づ北山西の地に至り、次に東南吳越即ち江蘇、浙江等の名勝舊蹟を周遊せり。事は「壯遊」の詩に詳なり。此遊のためには凡そ四五年を費したり。開元二十三年(七三五)、杜甫二十四歳)河南鞏縣より選拔せられ長安に至り禮部の試験を受けしが落第せり。之より五六年間齊趙(山東、直隸)の地方に遊びたり。二十九年春には洛陽に歸り杜預を祭れり。之より天寶三載(七四四)、甫年三十(三)まで洛陽にあり。凡そ甫が洛陽に居るといふは何の地に居りしなるや、詳ならざるも彼偃師の北、首陽山に近く陸渾莊なるものを有せるを以て、恐くは其地にありて洛城に往來せしものならん。天寶三載李白翰林より放たる。杜甫が李白を知るは此時にあり。又た高適をも知り遂に共に梁、宋、齊、魯(河

南・山東)に遊ぶ。彼等が壯年血氣を以て酒を飲み詩を賦し、時あつてか狩獵をなし傍若無人の状なりしは彼等の作に詳なり。杜甫の「昔遊」、「遺恨」、李白の「秋風孟諸」夜歸置酒單父東樓「觀妓」、高適の「必公琴臺」三首、「同羣公秋登琴臺作」、「同羣公出獵海上作」等は竝に當時のことを記せるものなり、四歳には濟州(濟南府)にあり、李白・高適と共に太守李邕を見その寔にあづかる。天寶五載長安に歸る。之より十三載まで凡そ九年間長安に在り。六載(七四七、甫年三十六)詔あり、凡そ一藝あるものは數下に至り試せしむ。杜甫、元結等と共に試に應ず。宰相李林甫尚書省に命じて皆之を落第せしめ野に遺賢なしと賀す。甫は退下の後一時近畿の地に流浪せしが如く此時彼の消息を問ひくれしものは河南尹韋濟なり。これ甫が濟に於て深く知己の感ある所以なり。八載甫は嘗て東都に至れり。當時甫或は更に去つて齊に遊ばんとせしものか「奉贈韋左丞丈二十二韻」に於て告別の意をのべ又た「今欲東入海」の語あり、此詩は彼の抱負の大、自任の重、性格の淳樸にして氣度の宏闊なることを示して餘蘊なし。冬、「謁玄元皇帝廟」作あり。九載(甫年三十九)長安にあり。明年十載玄宗將に三大禮を行はんとするにより、杜甫三大禮賦を作りて之を獻す。(三大禮は十載に行はれしが賦は前年に獻せられしに似たり)即ち朝獻大清宮賦、朝享太廟賦、有事於南郊賦、是なり、即ち老子、宗廟、天を祀ることを頌するものなり。玄宗之を奇とし制を集賢院に待たしめ又た學官に委して文章を試みしめ又た有司に送り隸せしめて選序に參列せしむ。蓋し獻賦の一事は天子及朝廷の識者を

驚かせしも未だ官に採用せらるるに至らず。十載より十三載に至る數年間屢窮困を訴ふる語あり。饑臥動即向一句、散衣何曾聯百結(投簡成華兩縣諸子)有儒愁餓死(贈鮮于京兆)等の語以て見るべし。十三載(甫年四十三)封西嶽賦を進む、當時、揚雄更有河東賦、唯待吹噓送上天、(贈由舍人澄)の語あれば賦により仕進を希ひしもの如し。此年霖雨あつて米穀涌貴し杜甫は殘林冷炙、貧苦愈甚し。杜甫の妻は弘農の人司農少卿楊怡の女なり。婚姻せしは何年なるや詳ならざれども、此年秋の時に稚子無憂走風雨(秋雨賦)とあれば、或は天寶八九載の頃にあらんか、杜甫今や妻子のために計らざる可らず。

天寶十四載(七五四、甫年四十四)秋杜甫は奉先縣(陝西、同州、蒲城縣)に往き、其の家族を置き更に北して白水に其の舅(叔父)崔十九翁を訪ひたり。恐くは此の舉は生活に逐はれたるためにして、崔翁の助を得たるものならん。當時の時に荒歲兒女瘦、暮途涕淚零、或は主人念老馬、麻子容秋登、(竝に橋陵詩)等の語あり。

(三) 仕宦

尋で長安に還り河西の尉を授けられしが之を辭したり。改めて太子右衛率府の兵曹參軍事(從八品下、掌衛士之名簿、及其番上差遣之法式、兼置公私馬及雜畜之簿帳)とせらる、之を仕宦の始とす。時に「官定後戲贈」の作あり、曰く

不作河西尉。凄凉爲折腰。老夫怕趨走。率府且逍遙。耽酒須徵祿。狂歌託聖朝。故山歸興盡。回首向風颺。(官定後戲贈)

此時杜甫の家族は十口なりしが尙腰を折ることを屑とせずして尉官を辭し(蓋し尉官を辭せしは河西の長官の人となり好まざりしに由るなるべし、折腰は假言なり)暫く徵祿を得て酒に耽らんがために兵曹となれり、此歳冬十一月甫は奉先の家族を訪はんと欲し、長安より東し、途驪山の華清宮を過ぐ。驪山は温湯のある所、玄宗は毎年十月を以て此に寒を避く。杜甫、楊貴妃及外戚等の驕貴を見て憤懣にたへず、惡税の誅求を痛罵して人民に同情を寄せたり。又た奉先の家に到るやその幼兒已に餓死すときき、自ら父たるの至らざるを愧ぢ更に又た思を馳せて天下失業の徒に及べり。公私の情共に激越慘憺を極む。これ即ち「自京赴奉先縣詠懷五百字」の大作となれり。

瑤池氣鬱律。羽林相摩戛。君臣留懽娛。樂動殷膠葛。賜浴皆長纓。與宴非短褐。彤庭所分帛。本自寒女出。鞭撻其夫家。聚斂貢城闕。聖人寬儲恩。實欲邦國活。臣如忽至理。君豈棄此物。多士登朝廷。仁者宜戰慄。況聞內金盤。盡在衛霍室。中堂有神仙。烟霧蒙玉質。煖客貂鼠裘。悲管逐清瑟。勳客駝蹄羹。香橙壓金橘。朱門酒肉臭。路有凍死骨。榮枯咫尺異。惆悵難再述。

(赴奉先詠懷)

末段に曰く、

考妻寄異縣。十口隔風雪。誰能久不顧。庶往共饑渴。入門聞號咷。幼子餓已卒。吾事捨一哀。里巷亦嗚咽。所愧爲人父。無食致天折。豈知秋禾登。貧窶有倉卒。生常免租稅。名不隸征伐。

撫跡猶酸辛。平人固騷屑。默思失業徒。因念遠戍卒。憂端齊終南。瀕澗不可撮。之より先き天寶七八載の頃、玄宗、哥舒翰をして兵を吐蕃に用ひしむ。杜甫がために「前出塞」九首、「兵車行」等の作ありしが、天寶の末年に至り安祿山をして范陽節度使と河東節度使を兼ねしめ、奚、契丹に備へんがため頻に兵を促がして東都より薊門に赴かしむ、杜甫乃ち從軍者に代るの言を爲して「後出塞」五首を作る。此作中には主將の驕傲と從軍者の忠義の志を敘し祿山に對して隱微の言あり。或は杜甫已に祿山の異謀を推察せしやも知るべからず。安祿山は杜甫が奉先縣に赴きしと同じ月即ち十一月の甲子の日に兵を擧げて反せり。十二月祿山は東京(洛陽)を陷る。翌十五載六月祿山の將更に西に進む。朝廷哥舒翰をして潼關を守らしむ。此歳夏五月杜甫は家族と共に白水の崔氏に依りしが、更に北に進みて家族を鄭州の羌村に寓せしめたり。蓋し賊亂を避けしめんがためなり。(當時の状況は後年作りし「彭衙行」に見ゆ)六月九日、潼關破れ十二日玄宗は蜀に幸せんと欲して延秋門より脱れ出づ。その時宮中にあらざりし妃主王孫等は皆之を委して去る。杜甫貴公子の流浪するを見て「哀王孫」の作あり。七月玄宗の太子亨は郭子儀に擁せられて靈武(今甘肅、寧夏府、靈州)に即位す、即ち肅宗なり。至徳と改元す。杜甫は肅宗の行在に詣らんとし鄭州を出でしが、賊兵の中に

陥り遂に長安に滯留せり。十月房琯三軍をなして賊を攻め、その中軍北軍は咸陽の東、陳陶斜に敗れ南軍は青坂に敗る。杜甫ために「悲陳陶」、「悲青坂」の作あり。彼また月夜鄜州の家族を思ひて「月夜」の作あり。時に曰く、

今夜鄜州月。閨中只獨看。遙憐小兒女。未解憶長安。香霧雲鬢濕。清輝玉臂寒。何時倚虛幌。雙照淚痕乾。(月夜)

と。閨中の境想ふべし。

聖年至德二載(七五七、年四十六)杜甫は猶長安の賊中に在り、「春望」、「哀江頭」は當時の作なり。「春望」に曰く、

國破山河在。城春草木深。感時花濺淚。恨別鳥驚心。烽火連三月。家書抵萬金。白頭搔更短。渾欲不勝簪。

此歲二月肅宗は彭原(甘肅慶陽府)より鳳翔に至る。夏四月杜甫は長安より竄れ出で鳳翔に至りて肅宗に謁見し左拾遺を授けらる。「喜達行在所三首」、「述懷」等の作あり。五月宰相房琯は先きに敗軍せしことと其門下の琴客董庭蘭なるものに不正の行爲ありしことによりて位を貶して太子少師とせらる。杜甫疏を上つて小罪のために大臣を免す可らざるをいふ。肅宗怒つて甫を三司(三司とは御史臺、中書省、門下省なり、三衙の吏會して推問す)に下して推問せしめしが、宰相張鎰等の救によ

りて推問を赦さる。六月一日「奉謝口敕放三司推問狀」あり。又た詩もて當時のことを敘して曰く、

備員竊補袞。憂憤心飛揚。上感九廟獎。下憫萬民瘡。斯時伏青蒲。廷諍守御牀。君辱敢辭死。

赫怒幸無傷。(壯遊)

と。拾遺の官は従八品上に過ぎず、然れども唐制によれば、

左補闕拾遺、掌三供奉、諷諫、扈從乘輿、凡發令舉事、有不便於時、不合於道、大則廷議、小則上封、若賢良之遺滯於下。忠孝之不聞於上、則條其事狀、而薦三言之。(唐六典、卷八)

とあり、又た中書門下及三品以上の官が閣(太極殿東西兩廡の閣)に入り、事を議するときは諫官に命じて之に隨ひ、失あれば輒ち諫めしむるの制あり、其の關係する所小ならず。杜甫が諫官たるの故を以て一身の安危を顧みず、房琯を救はんとしては、其の大節の在る所を知るに足れり。後ち房琯の死せしとき杜甫は文を作りて之を祭り崇敬悼惜の意を致せり。(房琯死、在代宗廣德元年、七六八、八月四日、奉天州會、年六十七歲、祭文作、在廣德元年九月二十二日)此月杜甫は其の友岑參を補闕の官として薦めたり、蓋し後任者として擬せしものなるべし。先きに杜甫の拾遺の官に任せられしや、歸省せんと欲せば得べかりしも未だ之を實行するに至らざりしが、八月に至りて鄜州に歸ることを許さる。乃ち賈至(中書舍人)嚴武(時に給事中)等に別を告げ一日鳳翔より發す。(途懷にいふ、滯漢受拾遺、汝離主恩厚。柴門雖得去、未忍却開門。北征に曰く、皇帶二載秋。開八月初吉。杜子將北征、蒼茫問家室)鳳翔を發するとき「留別賈嚴二閣

老の作あり、それより購遊を過ぎては「九成宮」の作あり、邠州を過ぎては李嗣業に馬を借らんとし  
て「徒步歸行」の作あり、醴泉には「行次昭陵」、白水の西には「彭衙行」、宜君には「玉華宮」あり、遂に  
邠州の羌村に達せり、(楊注、邠州國都、州治洛交縣、羌村、洛交村城、又云、元和郡縣志、隋開皇十六年、分三川、洛川二縣、  
置二番交縣)前後旅行の始末を敘して「北征」の大作あり、當時戦亂を経たる道路荒涼の狀、貧窮を極め  
たる妻子生活の困苦の狀、而して之を經緯するに思君愛家の熱涙を以てせる、文字縦横錯落して悲壯  
沈痛の雄篇となる、此の如き文字は支那詩中前後に匹すべきものを見ず。又た短篇「羌村」三首あり、  
同じく羌村歸家の生活を敘したり。「彭衙行」は、その作は今にあるも事は昨年(七五八)にあり、即ち昨年白水  
の崔氏を辭し家族を率ゐて邠州に赴かんとせしとき同家窪なる地を經過して故人孫宰の家に宿せし事  
を追憶して記せる者にして一飯の徳をも忘れざる友情は此詩に見ゆ。以上の北征以下諸作は杜甫の忠  
孝の情を寫して至れるものなり。九月廣平王(代)等、朔方等の軍、回紇、西域の兵十五萬を率ゐて鳳翔  
を發し長安を回復せんとす。杜甫官軍の已に賊境に臨むをききて之を喜ぶ二十韻の詩あり。王等の長  
安を復するや「收京」三首あり。十月肅宗長安に入る、杜甫は十一月を以て邠州より長安に入れり。

(四) 長安時代

乾元元年(七五八、年四十七)杜甫は長安にあり左拾遺たること舊の如し。此時賈至岑參並に朝廷  
にあり、唐の宮殿出入に關する莊重典麗の律詩は此時に成れり。杜甫は此時必しも満足し居りしも  
のに非りしも、彼にとりては此年の上半期は小康を得たるの時なり。六月に至り房琯は出されて邠州  
の刺史とせられ杜甫亦た出されて華州の司功參軍とせらる。此時彼は試進士策問五首を發す。其の間  
ふ所は又た唯だ君を愛慕に致し民を仁壽の域に驅るの法如何といふにあり、尋常の試問と大に異なる  
を見るべし。冬彼は任地華州を離れて洛陽に至れり。翌二年(七五九、甫四十八歲)春華州に歸れり。  
此時郭子儀等九節度の軍は祿山の將、安慶緒を鄴(相州、今河南彰德府臨漳縣)に圍みて敗北す。之よ  
り先き杜甫は「洗兵馬」(七古)の詩を作り賊軍の全滅せしことを豫期せしに今や官軍の大敗あり。彼は  
洛陽より華州に歸る途すがら兵亂の際に於ける人民悲慘の狀況を目撃して遂に三吏三別の作あり、即  
ち「新安吏」、「潼關吏」、「石壕吏」、「新婚別」、「垂老別」、「無家別」是なり。此等の作は字字皆血淚、  
當時の慘狀誰か能く寫して此に至らん。或は此に至るも誰か能く杜甫の如く之がために熱涙を灑ぐも  
のぞ。嗚呼杜甫の如きは詩人ありて以來未だ嘗て之あらざるものなり。此秋長安附近に飢饉あり、杜  
甫は官を罷めて秦州に往かんとす、立秋後題(五古)の作は其決意を示せり。此詩(第七句)によれ  
ば他より罷官を餘儀なくせられたるに似たり、曰く、

日月不相饒。節序昨夜隔。玄蟬無停號。秋燕已如客。平生獨往願。惆悵年半百。罷官亦由人。

何事拘形役。(立秋後題)

と。此後杜甫は長き旅程に上り、遂に復び長安洛陽を見るの機を失したり。

(五) 秦州及同谷

杜甫が秦州に赴きたるは知己に阮防、贊上人、姪佐の徒ありて之を助けしによるが如し。秦州にては西枝村といふ處に居りしかと察せらる。「西枝村尋置草堂地、夜宿贊公土室、二首」(五古)あり。贊上人は長安の大雲寺の主にして房瑠の客なりしが此地に嗣せられしなり。杜甫と交厚く甫は贊公が房に宿する詩及之に寄する詩等あり。秦州にては高適、岑參、李白、賈至、嚴武、鄭虔等の舊友に與へたる大作多し。「佳人」の作も此時に成る。又た「秦州雜詩二十首」(五律)を始として五律に佳篇多し。當時杜甫の寂寥なる生活は、阮防が糲三十束を贈れるを謝し、人より小胡孫(猿)を宛めて兒童の玩弄となし、或は姪佐の病を訪ふを喜び、或は友人薛據、畢曜等の榮進をききて、遙かに之を賀する等のことによりて之を察し得べし。

杜甫は秦州に於ても亦た生活を遂ぐる能はず。秦州の西南成州同谷の地が葭瑣、崖蜜等の食物得易しと聞き、十月(浦氏に従ふ)贊上人に別を告げ同谷に向つて出發せり。「發秦州」詩の末段にいふ、  
日色隱孤戌。烏啼滿城頭。中宵驅車去。飲馬寒塘流。磊落星月高。蒼茫雲霧浮。大哉乾坤內。吾道長悠悠。

宛も孔子が天生德于予といへる如く、窮すと雖も樂む所を知るに似たり。秦州より同谷に至る間の山水紀行の諸作五古十二篇あり。風景刻劃、造化の工を譽ふのみならず時時刻刻に於ける彼の性情

情歷然として字句の間に顯はる。同谷に至りては寓居の七歌(七言短古)を作る。「歲拾橡栗隨狙公」。「短衣數挽不掩脛」といふ類、窮苦骨に徹すといふべし。又弟妹を思ひ君を思ひ舊知を思ふ、悲歌低昂、杜鵬裂帛の聲をきく所思あり。杜甫は同谷に居ること幾くもあらず、十二月初を以て其地を去つて成都に向ふ。杜甫は今年の春洛陽より秦州に回リ、秋華州より秦州に往き、冬秦州より同谷に來り今又た同谷より成都に赴かんとす。是に於てかその同谷を發せんとするや「一歲四行役」の語あり。天の此の詩人を續走せしむること何ぞそれ急なるや。同谷より成都に至る間の山水紀行に關する詩亦た十二篇(五古)あり、謂ゆる蜀の棧道は山石の險奇を以て鳴るもの、此の大詩人の作は彼の秦州同谷間の諸作の如く排冪雄險を極む。

(六) 成都時代

成都に著するや「成都府」(五古)(十二篇の第十二の作あり。先づ浣花溪の某寺に寓す。時に高適蜀の彭州の刺史(彭州は今四川成都府彭縣治)たり、詩を贈る、甫之に酬ゆる五律あり。翌年上元元年(七六〇、甫四十九歲)杜甫は浣花溪上に草堂を卜築す、溪は成都の西郭外にあり、當時犀浦縣に屬せり、一に百花潭ともいふ、萬里橋之に架す、草堂は橋の西にあり、城南凡そ八里、極めて閑靜の地なり、草堂經營の資は表弟王司馬の遺る所なり、移植の草木及器具等に關しては諸家より寄贈を受けたり、堂を卜する時、草木を栽するとき、堂の成れるとき、各一詩あり。上元二年(七六一、甫五十

歲) 杜甫草堂にあり、時時新津(今、四川成都府新津縣治、唐屬劍南道蜀州) 青城(今、成都府灌縣西四十、唐屬蜀州) の間に往來して生計を謀れり。此時代の詩は近體は時時疎宕狂漫の語を爲すと雖も、概して悠悠自適、自然の妙あるもの多し。間、妻子に關する詩句あり、家庭和樂の狀、推察するに足れり。二年の秋草堂の老枿樹(枿、音南) 風雨のために抜かれ、茅屋も爲めに破らる、之を歎する詩(七古) あり。

寶應元年(七六二、甫五十一歲、四月以後、代宗廟立) 春、杜甫草堂にあり、嚴武、東川より來つて西川節度となり(東川節度、治梓州、唐梓州、今四川潼川府三臺縣治、西川節度、治成都府) 成都尹となり御史中丞を兼ね。武時時草堂を訪ふ、杜甫之と互に唱和の作あり。此等の篇を見れば二人の交情は互に極めて敬愛せるものなるを知る。(「雲溪友議」に本きて「新唐書」の嚴武、杜甫の各傳に武が屢、甫を殺さんと欲せしといへるは妄人の妄談なるを知るべし) 秋七月嚴武は中央の官吏に任せられ召されて歸朝す。杜甫之を送りて綿州に至る、詩數首あり、又打魚を觀る詩(七古) あり。幾くもなくして西川の兵馬使徐知道反す、杜甫亂を避けて梓州に入る。梓州に於ては李使君、及留後章彝に依る所ありしもの如し。冬晚には梓州の屬邑なる射洪(今同名) 通泉(射洪東南七十) に遊び陳子昂、郭元振等の故宅を訪ひ又た山水を觀る。此年十月僕固懷恩等、賊軍史朝義が兵を破り、其將を降し、相、衛、恒、趙等の州を取る。杜甫、關三官軍收河南河北(七律) を賦し狂喜の情を述ぶ。此時よりして蜀より出でんと欲する意あり。

り。冬晚弟占をして成都の草堂に至り、妻子を迎へて梓州に伴ひ來らしむ。(蒲起龍の説に従ふ) 代宗廣德元年(七六三、甫五十二歲) 杜甫は梓州にあつて璽亭(今、今同名) 漢州(今、成都府漢州治) に行く。秋、閬州(今、四川保寧府閬中縣治西北十) に至り、冬、梓州に還る。(九月房相國を祭る文あり) 梓州に於て嚴武留後に陪して遊ふ詩あり、冬狩行、「桃竹杜引」(竝に七古) は當時出色の作なり。此冬、吐蕃は長安を陥れ代宗は陝州に幸す。吐蕃又た蜀の松、維、保三州を陥る。時に高適成都の尹たり。廣德二年(七六四、甫五十三歲) 春杜甫復た閬州に行く。昨冬郭子儀長安を回復し代宗京に還りしが、杜甫此春に至りて始めて之を聞き「收京」(五律) の作あり。又た玄宗、肅宗の昔時を憶ひて「憶昔」二首(七古) あり。當時杜甫は意、蜀を去りて荊州の方に赴かんと欲す。(將、赴荆南、寄別李劍州、七律一首あり) 偶々嚴武再び來つて成都の尹となる。杜甫乃ち成都に還る。此時先づ嚴武に寄する作數篇あり、(七律五首及其他) 家族を率ゐて成都に向ふ詩あり、(五律三首) 草堂に歸り来るや、「春歸」(五排)、「歸來」(五律) あり、而して彼の徐知道、反亂以來の兵卒暴虐の狀を述べ、象て草堂に歸りし喜びの情を述べたる大作は「草堂」(五古) 是なり。又た草堂の舊物たる桃樹、四松、水檻、破船等を見るや、各之に繫くるに詩篇を以てせり。六月杜甫は嚴武が薦を以て節度參謀、檢校工部員外郎となり緋魚袋を賜ふ。是よりして嚴武が幕賓となれり。當時の雄篇としては曹霸が畫馬に題する詩(七古) 二篇あり、嚴武が廳事の「岷山沱江圖」を見る詩(五古) あり、其他題畫の詩に富めり。杜甫嚴武が幕中にありしも、老境を

以て壯年に伍する其間に感情の和せざるものありしが如く、杜甫は務めて和を貴びしも、少年輩或は猜疑を逞くせしものあり、此の意屢、詩中に見ゆ。此冬舊友蘇源明、鄭虔等相繼いで歿するるとき之を哭する詩あり、悲絶を極む。二人は杜甫の最も心に相許せし友なりしなり。永泰元年(七六五、甫五十四歳)正月、杜甫は嚴武が幕僚たるを罷めて浣花溪上に歸り、春間少しく閒遊することを得たり。四月に至りて嚴武卒せしが、杜甫は嚴武の死に先ち(甫起程の說に従ふ)峽中を出づるの目的を以て成都を去れり。「去蜀(五律)」の詩あり。

遂に戎州(今、敘州)、渝州、忠州等に轉寓し、忠州にては高適が死を聞きて詩あり、又た「禹廟(五律)」、「哭嚴僕射歸櫬(五律)」あり、「旅夜書懷(五律)」の飄飄何所似、天地一沙鷗といへるは、當時依る所なきの境を寫したるなり。秋、雲安に至りて寓居す。(雲安、今豐州府雲陽縣)翌大曆元年(七六六、甫五十五歳)春、杜甫は雲安より夔州に移り、所謂西閣に寓す。

(七) 夔州時代

夔州には寓居すること凡そ三年、此時代は杜甫が晩年掉尾の一振を試みたる時にして、古體詩には「古柏行」、「大食刀歌(竝に七古)」等、「八哀」、「壯遊」、「昔遊」、「遣懷」、「往在(以上五古)」等あり、近體詩には夔府書懷四十韻(五排)、夔府詠懷一百韻(五排)、諸將五首、秋興八首、詠懷古跡五首、(諸將以下竝に七律)、洞房、宿昔(竝に五律)以下の佳篇に富み、所謂「晩年漸於三詩律」細なるもの、此

時期に於て之を見るなり。

大曆二年(七六七、甫五十六歳)春、杜甫は一時赤甲(山の名)に居り、暮春には瀘西に居る。此時甫は少許の果園菜園を有し屢、之に關する詩あり。秋、東屯の農莊に至りしが幾くもなく瀘西に歸れり。此時期には夔州の柏都督なる人の庇護をうけたるもの如し。此年秋冬の交にあるべし、甫は半耳を聳せり。十月、「觀公孫大娘弟子舞劍器(七古)」あり。大曆三年(七六八、甫五十七歳)一、二月、尙夔州にあり、三月始めて峽中を出でて江陵に向ふ。辭するに當つて出峽の詩四十二韻(五排)あり。

(八) 出峽及び南行

江陵(今、湖北荊州府)に於て夏頗に苦熱の言あり、秋、荆南敍懷三十韻(五排)あり。更に江陵を去りて公安(江陵の正南にあり)に移る。冬又た公安を去りて南す、「舟楫眇然自(此去、江湖遠適無(前期(晩發公安、七律))とは當時の實境なり。杜甫出峽以後死に至るまで多く舟居せり。歲暮岳州(今、湖南岳州府)に至る、「歲晏行(七古)」、「登岳陽樓(五律)」あり、親朋無一字、老病有三孤舟とは、當時の境なり。大曆四年正月(七六九、甫五十八歳)岳州より潭州(今、湖南長沙府)に往く。清明には右臂偏枯の病にかかると。更に南して衡州に至る。此間諸處舟行紀遊の作あり。杜甫蓋し漸漸南進して衡州に至りて炎熱に苦み、留るを欲せず更に北に向へり。「同禱(五排)」の詩あり。大曆五年春潭州にあり、高適が人日の詩に追酬する作(七古)あり、王評事が南海に使するを送る詩(五古)あり、李龜年に逢ふ詩(七



絶)あり。此年夏潭州にては賊攻なるもの亂あり、甫亂に因つて復び衡州に入る、杜甫亂を記せる詩あり、「入衡州(古排)、更に當時郴州(衡州の南)の吏たりし舅氏崔偉に依らんと欲す、衡山縣に至りて文宣王廟の新學堂に題する詩(五古)あり、未陽(衡山の南)に至りて水に阻せらる、縣令孫某酒肉を贈る、甫之を謝する詩(五古)あり。(杜甫未陽の令より贈りし牛肉白酒を略ひ一夕にして卒せりといふ話は「明皇雜錄」と稱する小説に出で舊、新唐書、遂に竝に其の謬を承けたり)杜甫は南方の炎熱を嫌ひしにや又た他の原因ありしにや暮秋には南下することを能め、北して秦(長安)に歸らんと欲し、湖南幕府の親友に留別する詩(五律)あり。

(九) 湖南の客死及び殯葬

杜甫此年秋冬の際、潭州より岳陽に向つて北航しつつかある舟中に於て疾に臥したり、「風疾、舟中伏」枕書懷、三十六韻、奉呈湖南親友(五排)の作あり、詩の末段に曰く、

萬洪尸定解、許靖力還任、(遺或作難)家事丹砂訣、無成涕作霖、(公堂詞、葛許二人、或得丹訣、或濟家

能、獨我二事無成、此其所以爲涕也)

と。甫或は自ら久しからずして没せんとするを知りしものか、此詩は杜甫の絶筆なり。曠古の詩聖杜甫は遂に此の如くして旅行中に卒せり。年五十九。今昭和三年(一九二八)を距る千五百五十八年前なり。當時岳陽に殯す。杜甫子あり宗武といふ、宗武の子を嗣業といふ、憲宗の元和八年(八一三)に

至り、嗣業始て其の父の柩を啓き、之を河南の偃師縣首陽山前杜氏の塋域に葬る。

五、杜甫の集、竝に其の注評書

「舊唐書」杜甫傳に集六十卷あることを記し、「新唐書」藝文志にも杜甫集六十卷を録せり。是より後、歷代の書志、諸家の藏書の録を閲するに、杜集に關し編注評釋せる書籍非常に多し。今少しく其の由來を尋ね且參考とすべきものについて略述すべし。

杜甫の如き大才も其の當代に於ては少數有識者に認められし外、比較的世俗に重んぜられず、其名聲は到底李白に及ばず、然れども其集は間もなく世に行はれ、其價值を認めしもの稀には之あり。唐の涇州刺史樊晃は甫と近き時代の人なるが、彼は杜工部小集六卷を刻したり。書亡、其の序文に曰く、文集六十卷、行於江漢之間、と、又曰く、江左詞人、所傳誦者、皆公之戲題劇論耳、曾不知君有大雅之作、當今一人而已、又曰く、今探其遺文、凡二百九十篇、各以事類、分爲六卷、且行於江左、又曰く、君有子宗文、宗武、近知其所、在、漂寓江陵、冀求其正集、續當論次云、と。之に據るときは、樊晃の時已に杜甫の文集六十卷ありて江漢の間に行はれしも、江左の詞人未だ杜甫に大雅の作あるを知らざるを以て、遂に自ら六卷二百九十篇の杜工部小集を撰びたるなり。而して謂はゆる大雅の作は、此の小集には未だ盡きざるものがあるが故に、更に杜甫が適子たる宗文・宗武に就

きて正集を求めて之を續論せんといふなり。正集は即ち杜氏の家傳の原本ならむ。見は杜甫の知己なるも、之を世に顯揚するに於て、幾何の勢力ありしや今知りがたし。

之に次では憲宗の時代に於て、元和八年（西紀八一三）に元稹が杜甫の墓銘を作り、詩人以來、未有如予美者といひ、或點に於ては李白も其の藩翰をだも歴る能はずと評せしことと、同時代に韓愈が「調張籍詩」中に於て、李杜文章在、光儀萬丈長、といひて二家を推獎せしことは杜甫のために千古の斷案を立定せり。後ち宣宗の大中十年（八五六）に顧陶年昌四なるもの唐詩類選二十卷書亡を撰し凡詩一千二百三十二首を録するや、杜甫の詩をも選入せり。堂詩集跋 唐代に於ける杜集の消息は此の如し。

五代に於ては晉の開運二年（九四五）の官書本なるものありしこと南宋吳若の杜工部集後記に見ゆ。北宋時代に於て蘇舜欽は仁宗の景祐年間（一〇三〇）に當時傳はりたる三種の杜集を集めて老杜別集と爲したり、彼の記する所によれば當時の通行本は二十卷なりしといへり。之に次では仁宗の寶元二年（一〇三九）王洙字原の集めたる杜工部集二十卷あり、詩十八卷、賦筆雜著二卷より成り、編年の體によれり。前の吳友芝の題字知見傳本書目に影宋本の無註の王洙編其原本とせる所は宋の祕府竝に諸家の藏本にて九十九卷ありしものなりしが、洙は其中にて詩は重複を省きて千四百五篇を存したり。王琪字君はこの王洙本に元稹作の墓誌をそへ、仁宗の嘉祐四年（一〇五九）姑蘇に於て之を刻し、英宗の治平中（一〇六〇）に太守

婁煥は更に遺文九篇を附刻せり。王安石は仁宗の皇祐四年（一〇五三）鄆州に令たりしとき、杜詩二百餘篇を得て之を刻し、又杜・韓・歐・李の詩を選びて四家詩選十卷とせるあり。仁宗の末年（一〇六二）呂大防は成都に尹となり、杜甫の草堂を舊址地在今上に作り、其上に像を繪き之を表彰し、又爲めに杜詩の年譜を作りたり。哲宗の元符三年（一一〇〇）黃庭堅山谷は丹稜今四川の楊素の請によりて杜甫の在蜀時代の詩を書し、秦之を石碑に刻し、堂を作りて之を保護し之を大雅堂と名けたり。徽宗の時、黃長齋字伯思、宣和二年は洛下に官となり、御府の定本及び諸家の本を以て校讎して、校定杜工部集二十二卷とし詩千四百四十七首を存し、別に雜著二卷九首をなす、編年の體を用ふ、紹興六年（一一三六）に至りて李綱ために之に序せり。以上を北宋時代に於ける概況とす。

南宋に入りては紹興三年（一一三三）に、建康の通判吳若なるもの建康府學に於て杜工部集未詳を刻す、頗る諸家の書を校讎す。除大學正、上書、論李邦彦吳敏楚邪、被斥、見北堂會編、紹興二十三年（一一五三）には丹丘の魯巖字冷齋なるもの編年體により杜工部詩を編次す、豈又た杜工部詩年譜一卷を作る。其後趙次公字材の杜詩注四十九卷龍虎光業所記、文獻通考云、あり、この書は古・律・詩を以て雜へて之を次第し、又意を以て其の誤字を改定すといはる。孝宗の淳熙八年（一一八〇）成都の郭知達なるもの、王安石・宋祁・黃庭堅・王洙・蘇少符・杜田・鮑彪・師尹・趙次公、九人の注を集め大字を以て之を刻す、即ち九家集註杜詩三十六卷これなり、古體近體を分ち、其中にて編年を用ふ、此書は理宗の寶慶元年（一二三三）に至り曾噩之を

南海の清臺に摹刻し、清朝に至り、武英殿にて更に之を覆刻せり。寧宗の嘉泰四年(二〇四)建安の蔡夢弼傳は魯齋の編次なる杜詩を本とし、之に注を施し草堂詩箋四十卷を作る。版の内函書目には元版及本邦庶昌の古逸叢書本は四十卷の外に外集一卷補遺十卷、傳序碑銘一卷、目錄二卷、年譜二卷、詩話二卷あり、此書最の嘉定九年(二二六)黃鶴は其父黃希が原本によりて黃氏補注杜詩三十六卷を成す、此書は原と補千家集注杜工部詩史と題せりといふ、蓋し當時坊間に行はれし千家注本を廣めんがためなりしといふ。

元に至りて大德年間(三〇七)に高楚芳なるもの坊間に行はれし千家注杜詩を刊削し、劉辰翁(頌溪)の評語なるものを句間に散附し、集千家注杜詩全集二十卷を作る。我が内閣に元正八年刊、宋徐居仁編、黃鶴補あり、又更に文二卷あるもの一部あり、又元版及邦版の宋劉辰翁評點の集千家注杜詩工部集(詩二十卷、首一卷、年譜一卷、附錄一卷)あり、又元高楚芳編、明許自昌校、集千家注杜詩工部集二十卷あり、余は嘉靖丙申(十五年)五凡山人校刻大字本の賈九年嶺南黃芳の序ある同書あり。

明代諸書出づと雖も全集に就きて各篇の字句と篇の大義とを並び釋せるものは邵寶(國賢)成化の杜詩分類集註二十三卷、目一卷、周子文の序あり、一五九二なり、此書紀行類・述懷類等以下五十餘種の部門を設けて、各類の中にて又詩體を分てり。之より先き宋時已に分門集注杜工部詩二十五卷あり、此書の宋刊本近世刊中月門・星河門より雜賦門に至る七十二門を分てり。邵氏の分類は大略之に本きたるものならむ。

清朝に入りて良書甚多し。而して世に定評あるものは錢謙益の杜工部集箋註二十卷、首一卷、錢謙益著、清康熙六年、あり、此書の本文は宋の吳若本を主とせしものなること王士禛之をいへり、帯經堂詩

注家、佛典關係及史事に於て發明する所多しと稱せらる。之と殆ど同時に朱鶴齡の杜工部集輯注二十卷、水一巻、廣あり、朱氏自ら年譜を製し、詩篇を之に配したり。其の注、詳贍なり。その後仇兆勳の杜詩詳註二十五卷、附編二卷出づ。康熙三十二年、一六九三、仇氏の書、朱氏の長所を網羅して典故の説明は更に細密を極む、固より猶ほ疑ふべき箇所尠からざるも、杜詩の出典の説明に於ては蓋し最も詳備なるものといふべし。吳見思の杜詩論文五十六卷、康熙十一年、一六七二の如き文義を尋ぬるに於て一長なきに非るも、到底仇氏と比すべくもあらず。朱氏・仇氏の二書詳博なるを以て、二書及他書の諸長を探りて之を簡約となせるものは、楊倫の杜詩鏡銓二十卷、附錄文集註解二卷なり、文の注は張潛の讀書草堂杜詩註解三十七年宋準の序あり、康熙の文注をそのまま採れり。

古來の杜集の體裁を見るに、純粹の編年體によるか、草堂箋、千家註の如し、是實單に古體と近體とを分ちてその各部に編年の意を寓するか、吳若本、郭氏詩の内容によりて部門分けとするかに歸す、而して吳若本が最古とすれば古近二體に分てる形が古きものにして今日吾人の見る編年の書は後人の復舊せる姿とみざる可らず、予寡陋にしてなほ宋元舊刊各種の杜集につき、その實物を見ざるもの多く集の源流系統を正す能はざるを遺憾とす。ただ製作の實質よりいへば、杜詩は王洙本の千四百五篇、黃長善本の千四百四十七首は多しといふべし、而して吳若本以下の書は必ずやそれ等を包含せしものならん、今吳若本に本くといはるる錢謙益本をみるに凡千四百七十二首あり、杜詩は宋以後殆ど完全に

傳はりたるものと見て可なり。唐本六十卷の首數幾何なりしやは知る能はざるも、必ずや逸せしもの多からざらむ。

杜詩を評せしものは元の劉辰翁の千家註本に附加せられしを始とすといはるるが、之に對する毀譽の評は區區たり、ただ杜詩の評は劉に始まるに非ず、已に述べたる唐の元稹・韓愈以來、宋・元・明にわたりて苟も詩を論せんほどの人にして杜詩に觸れざるものは有らざるなり。此に近時の書にして價値あり且つ獲易きものをあげれば、清の浦起龍の讀杜心解六卷雍正二年、一七二四、あり、此書は特に分段章法の解析に力を致せり。乾隆の時、沈德潛の杜詩偶評四卷乾隆十二年、一七四七あり、又た乾隆敕選の唐宋詩醇乾隆十五年、あり、その杜詩の部、儒臣梁詩正等の選評なるべきも資すべき言多し。劉澹の杜詩集評十五卷嘉慶七年、一八〇二、阮元は清の王士禛・王士禛・錢謙・朱彝尊・李因篤・潘耒・查慎行・何焯・宋荦・陸嘉淑・申涵光・愈瑒・吳農祥・許昂霄・許燦凡十五人の評を集めたり。五家評本社工部集二十卷詩十八卷、道光十四年、一八三四、盧坤の序あり、は明の王世貞・王慎中、清の王士禛・宋荦・邵長蘅、五家の評を集め色を以て之を分てり。方東樹の昭昧詹言二十卷、續二卷、附錄一、道光十九年、一八三九、一八四一、著者の序あり、は、杜詩の構造上に關して犀利なる解剖をなし、評言亦た人をして發明せしむるものあり。尚伊氏詳註本の凡例に「歷代註杜」、「近人註杜」其他の條項あり、好學者、宜しく就て餘師を求むべし。

### 六、内容上より見たる杜詩

(一) 杜詩に見えたる思想、感情、人格

杜甫が如何なる思想、感情、人格を有するや、讀者は傳中既に述べし所によつて大半を了せられしならんも、此には詩篇に基きてよく詳に其の實際を観察すべし。杜甫は特別の場合に於て佛教又は道教を求めたり、然れども其の思想の根柢をなせるものは儒教なり。杜甫は多くの僧友を有し又た屢々寺に遊び佛教を求めんとせり。一例をいば、

願聞第一義。回向心地初。云云、(關文公上方)

の如き是なり。特に禪に關しては、

身許雙峰寺。門求七祖禪。(靈府詠懷)

の語あり。甚しきは妻子を割きて戒律を守る能はざるを數じ、或は又た佛教の教理を軍人に説ききかせ之を慰撫せんことをいへり。尙、佛教に關して之を慕ふの意を述べたる詩句は甚多し。

道教に關しても其道の清淨を慕ひ、不老不死を慕ひ、藥を采り丹を鍊ることをすら爲さんと欲したることあり。道教の思想は六朝より唐へかけて流行し、特に唐代に盛にして名流にして此術を求めざるもの稀なり、杜甫亦一面に於て時人と其の趣向を同じくせり。然れども此は特別の場合、即ちそ

の憂悶を排遣するに途なきにあたりて之を求むるものにして、詩人一時の興と見做すも不可なかるべし。但し老顔を惡むの一事は、彼實に其情ありしが如し。

杜甫の本領は儒に在りといはざる可らず、彼はその父祖を儒家といひ自らを儒と稱し、自らは謙遜して「老」又は「腐」の字を加へたり。

法自儒家有。(偶題)

乾坤一腐儒。(江漢)

干戈送老儒。(寄鄭審)

といふ如きは是なり。是明かに儒を以て自ら任ずるものなり。

傷時愧孔父。(通泉縣南去……作)

聖有不煖席。(登同谷縣)

といふは、孔子の棲棲遑遑を以て自ら師とするものに非ずや。衡山縣の孔子廟の學堂に題して、

周宣宜中興。孔門未應棄。(衡山縣文宣王廟新學堂呈陸宰)

といひ、其子宗武を戒めて、

應須飽經術。(又示宗武)

といひ、曾參と子游・子夏とをあげて標式を示せる如きは、其の孔門に傾倒せることを見る可きなり。

又た

人生貴是男。丈夫重天機。未達善一身。得志行所爲。(陳簡)

といふは、孟軻氏の獨善兼善の説に本くものなり。以上は一端に過ぎざるも、彼の思想の孔孟に基くものなるを知る可し。彼の思想が儒教的なることは、下に説く所によりて一層明白となるべし。

杜甫は如何なることを以て理想となせるか、余は

君聖、臣賢、民安

の六字に在りと答へんとす。此六字は大綱にして、諸種の細目は皆之より出づ。此意を明かに述べたるものは「華州試進士策問」中の言なり、曰く

二三子議論引正、詞氣高雅、……雖遺明主、必致之於堯舜、降及元輔、必要之於稷尚、驅蒼

生於仁壽之域、反淳樸於羲皇之上、自古帝王立極、大臣爲體、眇然坦途、利往何順、子有說否、  
と、即ち君は堯舜の如くならしめ、臣は稷契の如くならしめ、之によりて人民をして淳樸ならしめ、  
之をして仁壽の域に至らしめんとするなり。彼の製作の大部分は此意を敷衍すといふも可なり。

詩に於て、

致君堯舜上。再使風俗淳。(奉贈韋左丞丈二十二韻)

の語あり。風俗をして淳ならしめんとする意は謙處に見ゆ。臣たるの理想としては稷契・風后・力牧・伊

尹・周公等の古代の賢者をあげ、自己をば稷契を以て許し、后・牧・伊・周等を以て之を他人に望みたり。さて君の聖にして臣の賢なるを望むは、もと民の安からんことを思ふより出づ。彼は民を重んじ特に農民を重んじ、一般に人人の業に安んせんことを欲したり。詩句に、

邦以民爲本。(送顧文學)

幾時高議排金門。各使蒼生有環堵。(香柏學士林居)

安得務農息戰闘。(養夢)

尙思未朽骨。復視耕桑民。(別蔡著作)

の如きあり。「鸞轂行」一篇の主旨亦同じ。彼の傷時憂亂の諸作は要するに民を愛するの至情より出づ。次に道徳的感情についていはん。君、國、人民、妻子(僕)、朋友知己、物の順序によりて説かん。杜甫が唐の天子に對して抱きたる忠誠は、彼が自ら太宗の血統なりと知れるによりて尋常形式的なるものに非ず、眞に熱烈なるものあり、此れ傳中にも已に言及せし所なり。彼は高祖に對して、

余亦忝諸孫。(別李嗣)

の句あり。彼が忠誠を示す句は一にして足らず。

生逢堯舜君。不忍便永訣。……。葵藿傾太陽。物性固莫奪。(赴奉先縣詠懷)

長懷報明主。(推背)

の如き是なり。其の最も詩的なるは、杜鵑が蜀帝の魂なりといへる傳説に本きて、之を拜せることなり。彼れ「杜鵑」の詩あり、中に

我見常再拜。重是古帝魂。(杜鵑)

の句あり。

追憶の言としては、

去年今日侍龍顏。(重日遺興、第二)

安否を氣遣ひては、

中原消息斷。黃屋代宗時今安否。(將進吳楚留別)

自己の贖責については、

雖乏諫諍姿。恐君有遺失。(北征)

君の過惡は之を中外に露揚せんことを恐れて、

避人焚諫草。(送左丞)

といふ、何等の美しき情ぞ。

彼は天下泰平を目的とするが故に、君に對しても望む所あり、

周宣中興望我皇。(憶昔、第二)

といひ、

不過行儉德。盜賊本王臣。(有感、第三)

顧聞哀痛詔。端拱問瘡痍。(同、第五)

といふは、君に向つて儉徳を行はんこと、民の疾苦を念とせんことを求むるものなり。もとより文武の大官に向つては之を戒め之を責めたり。

炎風朔雪天王地。只在忠良翊聖朝。(諸將、第二)

獨使至尊憂社稷。諸君何以答昇平。(同、第四)

の如きはなり。

憂國憂民も彼の一生を貫ける感情なり。

向來憂國淚。寂寞灑衣巾。(獨先主廟)

欲陳濟世策。已老尙書郎。(題瀟西草屋、其五)

窮年憂黎元。歎息腸內熱。(赴奉先詠懷)

蒼生未蘇息。胡馬半乾坤。(建都)

の如き、集中到る處に此等の句あり。

默思失業徒。因念遠戍卒。(赴奉先詠懷)

嗟爾遠戍人。山寒夜中泣。(龍門觀)

此等は人民の失業と戍人に同情せるものなり。寡婦を見ては、

哀哀寡婦誅求盡。慟哭秋原何處村。(白帝)

といふ。彼は最も人民の苛斂誅求せらるることを憐みたり。之に關する詩句甚多し。彼は征賦を減せられんこと、賦役の公平ならんことを求め、之がためには地方には有徳の人を用ひざる可らざること主張せり。

誰能叩君門。下令減征賦。(宿石屯)

衆寮宜潔白。萬役但平均。(送陵州路使君之任)

恐乖均賦斂。不似問瘡痍。(聖府書懷、四十韻)

使臣精所擇。進德知歷試。(送顧文學)

といふ是なり。これ彼は人民生活の問題にふれ、其の苦を除くの方法にまで想到して之に同情せるものなり。尙此意は彼の「同元使君春陵行」なる一篇に詳なり。

杜甫の如く妻子に對する詩篇詩句の多き詩人は少し。支那詩人の悼亡、憶内、寄内子等の作は、純粹に道德的ならざるもの多きが、杜甫に於ては全く純潔なる愛の發露なり。彼は貧窮なりし故に貧苦の言多し。

妻兒待米且歸去。明日杖藜來細聽。(別李秘書)

これは止觀經を聞きつつありて急に妻兒を思ひ出したるなり。我が山上憶良の歌を想像せしむ。

別居の時には傳中に已に引きたる「月夜」の如き、或は家書抵三萬金の如き句あり、別後相會すれば、

生還對童稚。似欲忘饑渴。(北征)

の句あり。

山深苦多風。落日饑童稚。(赤谷)

癡女饑咬我。啼畏虎狼聞。懷中掩其口。反側聲愈噴。小兒強解事。故索苦李餐。(彭衙行)

は旅行中の狀なり。平居無事なるときは、

晝引老妻乘小艇。晴看稚子浴清江。(通鑑)

老妻畫紙爲棊局。稚子敲針作釣鉤。(江村)

女長裁褐襪。男大卷書勻。(贈王契)

汝啼吾手戰。吾笑汝身長。(元日示宗武)

の如く、彼が常に一家と苦樂相共にするの狀を見るべし。

彼が其の僕の勞を慰めしは「信行遠修水筒」及「課伐木」詩等に見ゆ。

弟妹についても同じ。

兄弟分離苦。形容老病催。(送韋處士)

弟妹悲歌裏。乾坤醉眼中。(九日登梓州城樓)

の如き「同谷歌」の第三、第四の如き其他少からず。

同族に對しても然り、

同姓古所敦。(示從孫濟)

の語あり。

故郷を思ふの情も亦た猛烈なるものあり、嘗て、

不死會歸秦。(奉送嚴公入朝)

の句あり、此人にして潭岳の間に客死せしは、終天の恨測るべからず。

朋友知己に對しては、彼に

常擬報一飯。(奉贈韋左丞丈二十二韻)

の句あり、韋濟の恩に感するなり。又た「雨過蠶端」、「彭衙行」、「贈衛八處士」等皆友情と感恩の意

をのべたり。彼の心友李白・高適・鄭虔等に關する幾多の詩篇は、皆純粹の友情を見るべし。

落月滿屋梁。猶疑照顏色。(夢李白)

は憶友の故事をなすに至る。



高李に對しては、又た

常恐逢撫孤。(遺情)

の言あり。友人のために孤子を撫育せんといふは、情誼の厚きを見るべし。

非情の物に對しても「白小」の時に、

生成猶拾卵。盡取義何如。(白小)

といひ、鳥にも卵を保護すといへば、魚も之を取り盡すの義なきをいへり。又た

築場憐穴蟻。(復遼東屯)

といひ、

盤餐老夫食。分減及溪魚。(秋野、第一)

といふは、いづれも微物を愛するなり。其の物を愛護するの念は、

易識浮生理。難教一物違。(秋野、第二)

に至りて極まれり。一物をもその所を得しめずんば已まざらんとするなり。

天地萬物一體の説は我嘗てその語を聞く、杜甫に於て其實を見る。

杜甫の思想感情を精察するときは、彼は決して單に盜賊を憂へ、亂離を痛み、慷慨悲憤の涙を灑ぐ

詩人に非ず、一面に道を體し、命を知り、悠悠自得する所あるを見る。試に次の諸句を見よ。

江山如有待。花柳更無私。(後遊)

水流心不競。雲在意俱遲。(江亭)

寂寂春將晚。欣欣物自私。(江亭)

無名江上草。隨意嶺頭雲。(南楚)

百鳥各相命。孤雲無自心。(西閣)

水深魚極樂。林茂鳥知歸。(秋野、其二)

岸花飛送客。橋燕語留人。(登潭州)

花亞欲移竹。鳥窺新捲簾。(入宅、其一)

牛羊識童僕。既夕應傳呼。(反照)

好鳥知人歸。(甘林)

憑几看魚樂。(白鷺)

洩雲高不去。隱几亦無心。(滄小巖觀新果林)

此等を見るときは真も善も美も合一することを知るべし。宇宙人生に對する大觀を有するものにして始て此等の詩句を得べし。杜甫は自然と動靜を共にす。吾余をして少しく所好に阿るの評を下さしめば、余は自然は寧ろ小にして彼は大自然なり、自然は此の詩人の胸中に在りと言はんと欲す。

次に杜甫の人格についていはん。

人格なるものは思想、感情、意志の統一さるる處に存するものなれば、杜甫の思想感情を了解せばその人格も已に大半を了解し得べし。然れども尙少しく他の方面より之を窺ふべし。

剛直は彼の公的生活にあらはるる性格なり。私的生活に於ては彼の性格は如何、余は此方面を彼の日常生活より見んとす。彼が家庭に於て好好遊なりしことは、已に彼の妻子に對する感情の條に於ていへるが如し。彼の嗜好は如何、彼は常に酒を嗜みたり。

誰能更拘束。爛醉是生涯。(社役宅守歲)

莫思身外無窮事。且盡生前有限杯。(絕句、滬興)

の句あり。「飲中八仙歌」中の人人は盡く酒豪なり。歌中になき高適・鄭虔、亦た並に酒徒なり。古人に於ては陶淵明を以て未見の知己とせり。

彼は醉へば則ち歌ひ或は吟じ或は舞へり。又た醉後直言して人にいとほるる等のことあり。自らも之を知りて、

生涯酒賦歎。(慶府言懷、四十韻)

の言あり。

次に騎射・狩獵も頗る好む所なりき。是皆彼の豪なる性格をみるべし。次に遊興の物物たりしこと

も豪格の一面をみるに足る。彼が壯年天下を周遊せしことは傳に於ても之をのべしが彼は支那本土を狭しとして満足せず海に浮び扶桑を窮めんことを欲せり。扶桑は東海の一島と考へられし地にして日本にはあらず、何となれば彼に「巴陵洞庭日本東」の句あれば日本は日本として知り居たればなり。

詩卷長留天地間。釣竿欲拂珊瑚樹。(送孔巢父歸江東)

とは、友人孔巢父についていへる語なるも、彼自らも此意あり。彼に又た

詩盡人間興。兼須入海求。(西園)

の語あり、即ち彼は未知の海に入りてまで、詩興を求めんと欲せしものなり。

次に彼の悠長なる性格は釣と碁とを好みたり。釣を好むは孟浩然と兩雄なるべし。草堂時代は特に釣りに耽り、之に關する句多し。碁についても同様なり。嗜好の程度よりいふときは、酒と同じく好めるは詩にして、多くは詩酒を並稱せり。

寬心應是酒。遣興莫過詩。(可惜)

の如し。詩成れば仔細に之を論じ、不穩當なる處を改定し、改定し罷むや自ら之を長吟せり。此點に於て彼は決して粗漫ならず、細心の注意を怠らざりし。

細論文。(春日憶李白)

新詩改罷自長吟。(解悶、第七)

といふ是なり。

愛情の表現として彼は犬を愛したり。

奮犬知我歸。低徊入衣裾。(車堂)

善く犬の意態をいへり。

竹、松、桃等の植物も大に之を愛護せり。

平生憩息地。必種數竿竹。(客堂)

といふ位にして屢竹の消息を問ふ語あり、松に於ても然り、桃は草堂に於ては桃生せしために、その樹を避けて逕を開きしといふほどなり、非常に物を愛護するの情あるを知るなり。

次に貧窮に處して彼は如何なる態度を持せしか、彼は「有儒愁餓死」(奉齋鮮于京兆)といひ、饑借家

米」(兼日荆南逢僕)といひ「脱粟朝未餐」(別董相)といひ、今にも餓死せんかりの境遇にありて「干調

傷直性」(早衰)と稱し、謂はれなく權門の助を假らざりき。彼の貧に居るや、肉體上には不満足を感じ

たるも精神上には満足せり。

勿於朱門是。陋此白屋非。(甘林)

萬物附本性。約身不願奢。(樂門)

の語あり、張舍人が織成褥段を遣れるときは、

留之懼不祥。(太子舍舍人、遺織成褥段)

といひて之を還へしたり。

最後に余は杜甫の道德上の責任の念の如何に嚴肅に、いかに強大なりしか、其仁愛の情のいかに深かりしかをいはん。

彼の責任の念の強大さと嚴肅さを見ざるべきは、彼は其主張を死を以て守るにあり。此、彼が房瑄

に對する關係に於て實行せし所なり。

君辱敢愛死。(壯遊)

といふ是なり。又た

濟時敢愛死。(歲暮)

ともいへり。

傷時愧孔父。(通泉碑…作)

とは自ら任する頗る重し。

妻に對し飄泊の生活を愧ぢては、

飄飄愧老妻。(自閬州杜鵑)

幼子を餓死せしめしとき。

所愧爲人父。無食致天折。(赴奉先縣詠懷)  
の語あり。友人吳郁を救ふ能はざりしを自ら責めては、

至死難塞責。(兩宮縣吳十侍御江上宅)

といへり。又た

廷争酬造化。(由果唐峽游道江陵)

朗鑒存愚直。皇天賞照臨。(風疾舟中伏枕……)

の語あり。凡そ自己の所爲を以て造化若くは皇天に報い、その照臨を待つといふに至つては、心地の高明にして責任觀念の強大なる、之を讀するに辭なきに苦しむなり。

仁愛の深さは窮人に對する同情に見ゆ。

棗熟従人打。(秋野、第二)

遺種及衆多。(兼望補相睦水歸)

拾遺許村童。(復還東屯)

減米散同舟。路難思共濟。(解憂)

の如き句あり。「呈吳郎」の一篇も貧婦をして自由に自家の棗を采ることをえしめんがために作れり。住居に關しては、

安得廣厦千萬間。大庇天下寒士俱歡顏。風雨不動安如山。嗚呼何時眼前突兀見此屋。吾廬獨破受

凍死亦足。(茅屋爲秋風所破歌)

の言あり。自己を忘却して他を救はんと欲するなり。

彼の仁を行はんとするは名譽心のためにあらず、他人の苦を見るに忍びざればなり。彼が夔州時代少しく田地を有せしが、その地の收穫を以て之を散せんことを思ひたり。曰く、

西成聚必散。不獨陵我倉。豈要仁里譽。感此亂世忙。(兼望督使東屯清泥船、云云)

と。此に至つて彼の行爲は、それ自身に目的にして誠に最高善に止まるものといふべし。

以上述ぶる所少しく多岐にわたりたるも、杜甫の思想、感情、公私兩面にあらはれたる彼の性格の如何は之を略述せり。之によりて彼の人格を見るに彼は殆ど儒教に説く所の聖賢に近き人格を有す。之に加ふるに、彼は古今に互るの大詩才を有せり。此意味に於て彼は實に詩聖といふべし。

(二) 人事及び天然を描寫したる杜詩大要

杜詩の包含する所の事柄は非常に廣し。明の邵實は其の「杜詩集註」に於て、詩の表はす事柄の性質に従つて紀行類、述懷類、懷古類等の如く、以下順に凡そ五十餘類を分ちたり。或はより細かなる分類をなすことを得ん。

杜詩を敘情、敘事、敘景等の如く分つことも一の方法なるも、此も亦た不十分なり、何故とならば

實際一の詩は情、事、景を兼ねたるもの多ければなり。今此に(甲)人事を主とするものと、(乙)天然を主とせるものを分つ。

(甲) 人事を主とするもの

甲の中にてまた 1. 自己を中心とするもの、2. 世應民情を中心とするもの、3. 特定の人を寫すもの等を分つ、(乙)に於て(一)山水、(二)園林、田野、(三)時令、氣象に分つ。

1. 自己を中心とし、(イ)現在を記し其事の一身一家より君國に關係あるものは五古「自京赴奉先縣詠懷五百字」及び「北征」を推す、此の二篇は最も善く杜詩を代表するものにして、古今何人にも依傍せず、何人の追隨をも許さざるものなり。謂はゆる集大成は、ただこの二篇を見ても尚之を知ることを得るなり。七古にては「哀江頭」、「同谷歌」の如きあり。

自己を中心とするものには長篇にては、(ロ)過去の追憶にかかもの多く、而して感慨之に係る。此の如きもの五古にては「壯遊」、「往在」を推す。「壯遊」は杜甫の自敘傳ともいふべく、少年文學者の羣に入りしより、壯年天下の周遊をなせしことを敘し、房琯を救ひしことに至り、蘄州客居を以て終れり。「往在」は安祿山の亂に長安の宮廟の燒かれしことを敘するに始まり、末段吐蕃の亂を記し、代宗の徳を修め民を安んせんことを希望して之を結び。其の感慨無量なるのみならず、作法に於て章法變化の妙を極めたり。

七古に於ては感慨の妙あるものは「冬狩行」、「舞劍器行」を推すべし。前者は章義の亂狩を敘し、事力武力をば賊を平ぐるために用ひんことをすめたり。後者は舞を見るによつて開元の盛時を追想せり。彼の有名なる七律「秋興」八首も蘄州に於て長安を追憶せるもの多し。又た詠物の作と雖も多く感慨を述ぶ。例へば「蕃劍」、「銅瓶」(以上五律)の如きあり。「古柏行」(七古)は柏を以て自ら比し、又た彼に多く見る「畫馬」、「畫鷹」の詩も、往往馬、鷹を以て自ら比せり。

2. 世應民情を中心とするものに於て先づ説くべきは、(イ)樂府體の作のとなり。樂府體の作とは敘事詩の體をいふ。漢代に音樂の府ありてここに敘事詩を掌りしにより、その體によるもの之を樂府體の詩といふ。これは他人の行事狀態を客觀的に敘するを主とし、作者悲喜の情を言辭に表はさざるを通例とす。(固より裏面には作者の情あり得べし)此の如き體にて杜詩中最も著はるものは五古にて「三吏」「三別」(新安吏・潼關吏・石壕吏・新婚別・垂老別・無家別)「佳人」、七古にて「哀王孫」の如き是なり、已に傳にていへる如く、此等は天寶以後の亂離の際に於ける貴賤の板蕩酸鼻の極を畫けり。次には、(ロ)時事を詠じたるもの、杜詩は「詩史」と呼ばるるほど時事に關する作多し。七古にて「兵車行」、「洗兵馬」、「悲陳陶」、「悲青坂」等、五古にて「留花門」、「塞蘆子」其他上の樂府體も時事なり。又た「草堂」の詩に徐知道の反を敘し、「入衡州」の詩に臧玠の亂を敘する等も時事を敘す。此の如き類は甚だ多し。

時事を詠するものにては軍旅に關するものを出色とす。五古に「前出塞」九首、「後出塞」五首あり。前者は哥舒翰が功を吐蕃に貪るがために發し、後者は祿山が邊功を立て天子の寵を求めんと欲し、洛陽方面より直隸方面へ兵を驅り赴かしめんとせしがために發せり。今此れ及び其他の詩に本きて、杜甫の戰爭及び軍人に對する思想を説くべし。

戰爭に關しては、杜甫は朝廷の権力ある野心家が、その功名心を満足せしめんがために兵を用ひ邊地を開拓せんとすることを排斥せり。「兵車行」は役夫の語を借りて、戰爭の慘をのべたるものなるがその中に、

邊庭流血成海水。武皇開邊意未已。

の語あり、語は婉曲なるも、邊を開くことを以て非となしたるや明かなり。

又た高適が哥舒翰の書記となりて、河西に赴かんとせしとき之を送りて、

鞍馬小麥熟。且願休王師。請公問主將。焉用窮荒爲。(登高三十五書記、十五韻)

といへり。これは彼が哥舒翰を好まざりしにもよるべきも、窮荒の地を得ることを務むることを非となせるなり。又た後に彼自身河西の尉に初めて任官せしめられしときにも、之を辭して就かざりき。此皆無用の戰爭を排斥するものなり。

然れども彼は決して戰爭其物を非とするものに非ず、彼の戰爭并に武人の道德に關する觀念を最も

明白に知りうるものは、前・後出塞の作なり。兩者共に從軍者の意中を寫すものなるも、作者自身の意中を寫せしや明かなり。

誓開玄冥北。持以奉吾君。(後出塞、第三)

といふは、君のためには北地を開拓せんといふなり。

丈夫誓許國。憤惋復何有。功名圖麟閣。戰骨當速朽。(前出塞、第三)

は戰死を厭はざるをいふなり。

虜其名王歸。繫頸授輶門。潛身備行列。一勝何足論。(前出塞、第八)

とは、戰功を立てしかも功に誇らず、却て行列の間に潛むをいふなり。

衆人貴苟得。欲語羞雷同。(前出塞、第九)

も亦た上と同じく賞を貪らざるをいふ。武人にして此の如きは其の簡人的道德の極致に達せるものといふべし。

戰爭の目的は人を多く殺すにあらず、人の國土を侵略するにも在らず、ただ敵の侵陵を制するにありとなす。彼之を明言せり。曰く、

殺人亦有限。立國自有疆。苟能制侵陵。豈在多殺傷。(前出塞、第六)

と。國際道德も此に外ならざるべし。

以上の理想は實に彼の儒教思想よりして當然達すべき地點なり。彼は之を盡く或る勇士の自述として賦したるなり。次に、

3. 特定の人を寫せるものに就ていはん。此點に於て杜甫は司馬遷と比較せらるるが、遷は散文を用ひて箇箇の人を寫すに箇箇の筆致を以てし、その箇性を紙上に活躍せしめたるが、杜甫は韻語を用ひて同じく箇性を發揮せしめたり。其の代表的の作は夔州時代に成りし「八哀」(五古)なり、「八哀」は王思禮・李光弼・嚴武・汝陽王李璣・李昌・蘇源明・鄭虔・張九齡の八人を傷める詩にして、同時に各人の傳ともいふべし。思禮・光弼は武將なり、嚴武は武人にして文を兼ね、杜甫が恩遇をうけし人なり。李璣は宗室にして酒交ありし人なり、李昌は先輩にして知遇をうけし人なり、蘇・鄭二人は莫逆の交友なり、張九齡は名宰相にして文章道德竝に卓越せり。此等各種の人物をその世系、行事、自己との關係等を錯綜して寫し出せる筆力は、真に太史公と雄を争ふものなり。

又た晩年湖南に於て「送王旅評事使南海」の作あり、此作亦た送別の作なるも一種の敘事を兼ね、初は王旅との姻誼を敘して旅が高祖母の逸事を寫し、次に自己が同州避難當時旅が己を保護し給へし往事を敘し、終りに旅が嶺南に赴くにより己も亦た南遊の意あることを敘して結尾とせり。此作傳記の如く小説の如くにして、筆力沈著雄壯、散文を以てするも、此の如く變幻離奇を極むることは難かるべし。杜集中に於ても有數の作となすべし。

(乙) 天然を主とするもの

杜詩萬象を網羅し殆ど在らざる所なし。今其中に於て、(一)山水、(二)園林・田野、(三)時令・氣象に關するものについて略述すべし。固より純粹に天然を寫すに止まらず、多少の情と事とを夾敘せるを多しとなす。

(一) 山水に關せるは其の紀行諸作を主なるものとす。杜甫の旅行は傳にいへる如く凡そ五期あり。第一は壯年時、東南の周遊にして之に關しては追敘の言多し。第二は乾元二年秦州より同谷に赴くときの紀行五古十二首あり。第三は同年冬同谷より成都に赴くときの紀行五古十二首あり。第四は永泰元年成都を出でてより太暦三年江陵に至る間、江峽に關する諸作、但し此間山水の狀は多くは排律の中に散見し専門紀行の篇なし。排律例せば「秋日夔府詠懷一百韻」の峽東滄江起より野店引山泉に至る一段、或は「出瞿唐峽將適江陵四十韻」の老向巴人裏及び不有平川決の前兩段の如き是なり。最後は第五、太暦四年湖南に入りてより岳、潭、衡諸州往來の途上、舟行紀遊の作二十餘首是なり。第一を除き四者の中に第四は斷片的なり。第五は能く水行を寫すも亦た人事を夾み、感慨にかかもの多し。筆力亦た秦蜀時代の作に比して遜色あるに似たり。情と事とを夾敘し、兼ねて能く山水を寫せるものは第二期第三期を最とす。第二の「青陽峽」、第三の「飛仙閣」、以て一斑を見るべし。

杜甫亦た畫山水に題せる詩篇多し。其の作法は常に實物より畫に、畫より實物に至り、時として實

物と畫とを區別する能はざらしむ。妙篇に富めり。

(二)園林を寫して其妙を極むるものは、長安時代に「陪鄭廣文遊何將軍山林」十首(五律)、「重遊何氏」五首(五律)なり。又たやや多く情を斂したるも其の草堂を寫したる「將赴成都寄嚴鄭公」五首(七律)の如きあり。五古「柴門」は夔州の住居を寫して自得の趣あり。田野生活を斂し自得の趣あるは「秋野」五首(五律)、「課小豎鋤研舍北果林」三首(五律)なり。五古「甘林」は自得の趣を斂し、兼ねて貧にして食なきものを憐みたり。「行官張望補稻畦水歸」及び「秋行官張望督促東渚耗一作稻」(竝に五古)は共に農業を斂して憐民の情に及び。等しく田家の詩なるも陶淵明、王維、儲光義等が單に素樸の情態を寫せるものと同じからず。

次に、(三)時令・氣象を寫せるものは其の多きにたへず。時令は季節なり、季節に關する詩は各其の節物、氣候を寫すこと、我が俳句の季節に於ける如し。今は之を措き氣象に關するものについて一言すべし。

氣象に關するものは、例へば「雷」(五古)、これは早して空雷のみきこゆることを斂せり。又た「火」(五古)は大旱にあたり山を焚き雨を求むることを斂す。能く其の状をいひ又た其の土俗を寫し議論を夾めり。又た五古、「牽牛織女あり、詩中に星のことより忽ち夫婦のこと、又た更に君臣の關係に論及せり。又た「雨」の作(古・近體一ならず)甚だ多きが各其時、其處に應じて雨の異なる状をいへ

り。又た「月」に關しても「八月十五夜」、「十六」、「十七夜」の各詩(五律)あり。其の情景は各其相同じからず。又た「時」に關しても「曉望」、「日暮」、「暝」、「晚」、「夜」(五律)等と題するもの各其境を盡せり。以上「雷」以下の諸作は、すべて夔州時代の作なるが、これ其の一端をあぐるに止まれり。他の時代のものに於ても同様なり。讀者は宜しく原作によりて其の描寫の妙を窺ふべし。

### 七、技術上より觀たる杜詩

杜甫は儒教的の思想感情を有し之を表現する大詩才を有したり。この詩才は一半は天稟一半は努力勉學より得たり。讀書破萬卷、下筆如有神、とはこの關係を善くあらはせり。彼の詩には經史・諸子・佛典・雜説等の廣き材料をとり、之を消化し必要に應じて之を驅使し、之を我が機軸を以て織りて一篇の詩となせり。文學の書に關しても、彼は歴代の製作を讀み、各其の長所を採れるものなり。これは彼の製作に於ても彼の詩論に於ても、之を窺ふことを得べし。此に少しく彼の詩論を説くべし。彼は先づ文學の歴史的觀察をなすことを怠らず。彼は「詩經」の詩を重んじ、次に屈原・賈誼等騷人の作を重んじたり。風騷といひ騷雅といひ彼は之を併稱せり。次に漢人の賦に於ては司馬相如、枚乘、枚阜、揚雄を推獎し、暗に自ら比せり。次には「文選」の學を重んじたり。「文選」は周より梁に至る文學の精華を集めたる書なり。「文選」を推すことによりて知らるる如く、漢魏・六朝の大家は皆之を



推したり。就中彼の詩句中に散見するものをあぐれば、魏の曹植・劉楨、六朝にて晉の陶淵明、宋の謝靈運・顏延之・鮑照、齊の謝朓・梁の沈約・何遜・江淹、陳の陰鏗、北周の庾信等あり。之に對して彼は各時代、各人の特長を貴びたり。唐の時代に於ては初唐の王・楊・盧・駱・沈・宋を始とし、張九齡をあげ、同時の交友中、苟も長所あるものは之を推獎せり。其の家學に關しては、其詩の祖父杜審言に負ふ所あるをいへり。「轉益多師是汝師」とは蓋し彼自身の訓言なり。

杜甫は詩に於て何如なる點を標的とせるか、彼は時に「清新」といふことをいへり。清とは恐くは冗ならず潔なるをいふが如く、新は意匠の新なるをいふが如し。韓退之が陳言を去るの義も之に近からん。この外に音調の精切、魄力の雄大なることをいへる場合、多く比喻を以て之をいへり。

才力應難跨數公。凡今誰是出羣雄。或看翡翠蘭若上。未擊鯨魚碧海。

の如きは、最も綺麗に満足せずして雄大を以て自ら期するを見るなり。作者の典會入神の處をいへるは甚だ神秘的の語を用ひたり。

神融飄飛動。

といひ、

意愜關飛動。篇終接混茫。

といふが如きはなり。自らも、

詩應有神助。

といひ、之を自己以外の力に歸せんとせり。是に至りては宜しく悟入すべくして説明すべきにあらず。詩人が句を作るや、其の場合に最も適當なる文字を選択して之を使用するに苦心す。如何なるものが最も適當なるやは豫め定む可らず。我我は天才の使用の跡を見て、僅に其の然る事を後より發見するに止まるなり。此に一の「受」の字あり。

能事不受相促迫。

脩竹不受暑。

の如きに於ては、尙通常の用法なるを見るも、

輕燕受風斜。

野航恰受兩三人。

一雙白魚不受釣。

の類に至りては、其の微妙なる詩的用法なることを知るに足らん。此の三例に於て若し「受」の字の代りに他の字を使用せんか、決して此句の如き妙味を感ずる能はず、是、此際「受」の字の最も適當なるを以てなり。文字の選擇の最も嚴密なるは即ち精鍊にして其の最も適當をうるものが即ち妥當なり。杜甫の如き天才の詩句は、常にこの妥當を保つものなるが、今範圍の廣汎に失するを避け、主とし

て形容詞及び動詞（靜と動とを示すべき）につきて其例を擧げ、併せて少しく其他に及ばんとす。

自動詞につきて見るに、

翡翠鳴衣桁。蜻蜓立釣絲。

の「立」の字の自然なるを見る。又、

春色浮山外。天河宿殿陰。

の「浮」の字、「宿」の字の共に自然を得たるを見るべし。

青蟲懸就日。朱果落封泥。

「就」「封」二字の自然なるを見る。

仰蜂粘落絮。行蟻上枯梨。

江動月移石。溪虛雲傍花。

落月去清波。

吳楚東南坼。乾坤日夜浮。

此等「粘」「上」「移」「傍」「去」「坼」諸字の自然にして且つ巧妙なるを知るべし。

妥當を得るためには、事柄の權衡（釣り合ひ）を保たざる可らず。上例に就て言へば、「就」「封」は

「懸」「落」と、「粘」「上」は「仰」「行」と、「移」「傍」は「動」「虛」と、「去」は「落」と、互に相待ちて始

て適當なるなり。又た

風起春燈亂。江鳴夜雨懸。

の場合に「起」と「亂」、「鳴」と「懸」と相待つものなり。

次に他動詞の例を見ん。

暗水流花徑。春星帶草堂。

山河扶輪戶。日月近雕梁。

の句に於て試みに「帶」の字を「繞」又は「接」の字に易へんか、如何にその平凡となるかを知ら

ん。又た「扶」の字は「山河」を擬人視して之をして靈あるかの如くならしむ。

山虛風落石。樓靜月侵門。

この場合には「落」「侵」の如き他動詞を用ひ、而かも却ていよいよその靜かさを示すに效あり。

花妥鶯捎蝶。溪喧獭趁魚。

「捎」の一字最も妙なり。

穿花蛺蝶深深見。點水蜻蜓款款飛。

「穿」の字、「點」の字、最も「蝶」と「蜓」とに切なり。

粘石防隄圻。開林出遠山。

雜說

「出」の字に無限の精神あり。

次には形容詞、

兩行秦樹直。萬點蜀山尖。

「直」の字、「尖」の字は、之によつて秦樹蜀山の特色を發揮す。

野船明細火。宿鷺立圓沙。

の「細」「圓」の各字は能く「火」「沙」の形を寫す。

暗水流花徑。

晴雪落長松。

風花高下飛。

の「暗」「晴」「風」皆形容語として用法の妙を極む。

形容詞も亦た事柄の上の權衡を保つを要す。例へば、

重巖細菊斑。

圓荷浮小葉。細麥落輕花。

微風燕子斜。

に於て「微」「斜」「圓」「小」「細」とは互に相應す。「重」「細」「斑」亦た互に配合の宜しき

を得たり。

次に副詞の例を言はん。

副詞の用法は、動もすれば平凡に陥り、單に字數を填充するに過ぎざるものとなる。杜甫の

葉稀風更落。山迤日初沈。

の「更」「初」の如き、特に「更」の字の妙なるを見る。

古牆猶竹色。虛閣自松聲。

の「猶」「自」の如き、此等は或種の動詞を裏面に省略したる用法なるが、誠に千鈞の力ありといふべし。

疊字の副詞に於ては、句をして遲緩ならしむるの恐あるものなるが、杜に於ては然らず、已に引き

たる穿花、點水の聯中の「深深」「款款」の如き、又た

短短桃花臨水岸。輕輕絮點人衣。

無邊落木蕭蕭下。不盡長江滾滾來。

江天漠漠鳥雙去。風雨時時龍一吟。

の諸聯に於ける「短短」「輕輕」「蕭蕭」「滾滾」「漠漠」「時時」の如き、いづれも用法の靈妙なるを歎せざる能はず。

用語の妥當を得て此に一句の詩趣、句の品格を生ず。句品は畢竟人格に本く。詩趣に於て杜甫が殆ど細大漏さざることは古人已に之を言へり。試に明の胡應麟の擧ぐる所を借るに次の如きものあり。飛星過水白、落月動沙虛、は吳均・何遜の精思なり。春色浮山外、天河宿殿陰、は庾信・徐陵の妙境なり。山河扶繡戶、日月近雕梁、碧瓦初寒外、金莖一氣旁、は高華秀傑にして楊・盧も下風なり。冠冕通南極、文章落上台、詔從三殿去、碑到百蠻開、は典重冠裳にして沈・宋も退舍す。耕鑿安時論、衣冠與世同、在家常早起、憂國願年豐、は神奇を古澹に寓す、儲・孟も能く前を爲す莫し。片雲天共遠、永夜月同孤、落日心猶壯、秋風病欲蘇、は瀾大を沈深に含む、高・岑も其後に陞乎たり。退朝花底散、歸院柳邊迷、花動朱樓雪、城疑碧樹煙、は王右丞も其の稷庭を失ひ、地平江動蜀、天瀾樹浮秦、日月低秦樹、乾坤繞漢宮、は李太白も其の豪雄を邁る。岸花飛送客、橋燕語留人、に至ては則ち錢・劉・圓暢の祖なり。兩行秦樹直、萬點蜀山尖、は則ち元・白・平易の宗なり。兩邊山水合、終日子規啼、は盧同・馬異の渾成なり。山寒青兕叫、江晚白鷗鷺、は孟郊・李賀の瑰僻なり。凍泉依細石、晴雪落長松、は烏・可・幽微の從て出づる所なり。竹齋燒藥甕、花嶼讀書林、は籍・建・淺顯の自て來る所なり。兩拋金鎖甲、苔臥綠沈槍、は義山の組織纖新なるなり。圓荷浮小葉、細麥落輕花、は用晦の推敲密切なるなり。杜の集大成せることは、五言律は尤も見る可き者なり。(詩數内編卷四)

杜の七言句、壯にして瀾大なる者は二儀清濁還高下、三伏炎蒸定有無。壯にして高拔なる者は藍水遠從千澗落、玉山高竝兩峰寒。壯にして豪宕なる者は五更鼓角聲悲壯、三峽星河影動搖。壯にして沈婉なる者は三年笛裡關山月、萬國兵前草木風。壯にして飛動せる者は含風翠壁孤雲細、背日丹楓萬木稠。壯にして整嚴なる者は江間波浪兼天湧、塞上風雲接地陰。壯にして典頌なる者は紫氣關臨天地澗、黃金臺貯俊賢多。壯にして禮麗なる者は香飄合殿春風轉、花覆千官淑景移。壯にして奇峭なる者は窗含西嶺千秋雪、門泊東吳萬里船。壯にして精深なる者は織女機絲虛夜月、石鯨鱗甲動秋風。壯にして瘦勁なる者は萬里悲秋常作客、百年多病獨登臺。壯にして古淡なる者は百年地僻柴門迥、五月江深草閣寒。壯にして感愴せる者は錦江春色來天地、玉壘浮雲變古今。壯にして悲哀なる者は雪嶺獨看西日落、劍門猶阻北人來。結語の壯なる者は關塞極天惟鳥道、江湖滿地一漁翁。體語の壯なる者は高江念峽雷霆闕、古木蒼藤日月昏。拗字の壯なる者は側身天地更懷古、回首風塵甘息機。雙字の壯なる者は江天漠漠鳥雙去、風雨時時龍一吟。凡そ以上の諸句は、古今の作者、範圍を出づること無きなり。(詩數内編卷五)

右の例は未だ杜の變化を盡くすに足らざるも、亦た以て其の大體を窺ふに足らん。句品については類似の句意あるものを取り、他の人の作と比較するときは自ら其間の差異あることを知るに足る。

例

薄雲巖際出。初月波中上。 嵇何遜

薄雲巖際宿。孤月浪中翻。 杜甫

岸花臨水發。江燕逸橋飛。 何遜

岸花飛送客。橋燕語留人。 杜甫

山隨平野濶。江入大荒流。 李白

星垂平野濶。月湧大江流。 杜甫

泉聲咽危石。日色冷青松。 王維

凍泉依細石。晴雪落長松。 杜甫

氣蒸雲夢澤。波撼岳陽城。 孟浩然

吳楚東南坼。乾坤日夜浮。 杜甫

句法の變化、對句の種類に於て杜甫は甚だ富めり。

今一句内に於ける異様の句法を示さんに、

委波金不定。照席綺逶迤。

は金波、綺席を分離して備かしたるものなり。

露從今夜白。月是故鄉明。

は白露、明月を分ち、之を倒置して備かしたるものなり。

綠垂風折笋。紅綻雨肥梅。

これ綠笋、紅梅の綠、紅の色彩を實物より引き離して用ひたるものなり。又た前の聯なる風折、雨肥

の如きも尋常の位置を倒用せり。

文字の位置移換の極端なる例は左の例、甚だ有名なり。

紅豆啄餘鸚鵡粒。碧梧棲老鳳凰枝。

これは尋常ならば、

鸚鵡啄餘紅豆粒。鳳凰棲老碧梧枝。

ともいふ可きものなり、然るに粒を鸚鵡に枝を鳳凰に屬せしめ、粒、それは鸚鵡の啄みたる粒、枝、

それは鳳凰の棲みたる枝、といへる所に奇巧を弄したるなり。

他の句と關係しての用法に於ては倒裝の例を著しとなす。甲句より意を承けつぎて、乙句に順に接

屬するは通常の句法なり。倒裝の法は句を通常の順序によりて置くことなく、前後を逆にする仕方

をいふ。

倒裝(倒點)の例

律詩の對句に於て、

(甲)幾時杯重把。(乙)昨夜月同行。

(甲)更爲後會知何地。(乙)忽漫相逢是別筵。

の如き、是は時の順序よりいはば、甲句と乙句とは互に前後すべきものなり、然るにかかる位置に之を用ひたり。

古詩に於ける例

「麗人行」の

就中雲幕椒房親。賜名大國號與秦。

又た同詩中の末尾なる

炙手可熱勢絕倫。慎莫近前丞相嗔。

といへるは魏、秦の國號を賜はりたる椒房の親、丞相に近かば手も熱すべからん、といふ可き處を此を前後して言ひ、前後して言ふことによりて、より多く面白味を生ずるなり。

「垂老別」に於て、

(甲)孰知是(美)死別。(乙)且復(我)傷其(美)秦。(甲)此去(我)必不歸。

(乙)還(我)聞(美)動(我)加餐。

とある、甲、乙の各句は互に前後したる句法なり。

倒裝を篇中の結構に用ひて成功せるものは「送重表姪王欲許事使南海」詩に、

上云(云)云

次間最少年。虬髯十八九。子等成大名。皆因此人手。下云風雲合。龍虎一吟吼。

顧展丈夫雄。得辭兒女醜。秦王時在座。真氣驚戶牖。

とあり。この虬髯云云の少年は秦王なれどもそれを説破せず。後に至りて之を點出せるは一種の倒裝にして、此の二句を得て前後皆振ふの概あり。

詩句に倒裝あるは書法に逆筆あるが如し、諸篇中到處に見出し得べし。

句が句を承けて進む際には、換言すれば作者の意が意をうけてすすむ、即ち其の情意の進行の仕方は平にならかに進行するときもあり又た然らざるときもあり。平にならかに進行せざる場合とは意が急激に轉換しゆくことをいふものなり。之を句にていへば、句(或は意)(句は客觀的にみたる名にして主觀的にいへば作者の情意なり)の曲折なり、平にならかなるは我我は之を流暢といひ、之を形あるものを以て比すれば直線(——)の如く、又た曲線(~~~~)の如きものなり、之と異なつて平にならかならざる句句曲折するものは則ち曲折線(~~~~)をなすものなり。その意の轉換の速度、程度如何によりて、この曲折の状態に變化あるべし。即ち角度及び其の高さの高低

に變化あるべし。 ) 實例を以て言はば、白樂

天の詩の如きは、我我は之を圓轉流麗と稱するは、その句意のうつりゆき滑かなるを以てしかいふなり。杜甫の如きは然らず、そのうつりゆきは極めて急角度の屈折をなすものなり。例をあげん。

句と句とが直接に接続せざるか、接するも密ならざるものあり。

(一) (甲)漢運初中興。(乙)平生老耽酒。沈思歡會處。恐作窮獨叟。

(二) 聖人館簡恩。實欲邦國活。(丙)臣如忽至理。(丁)君豈棄此物。

此例に於て甲、乙二句は直接には接せず、丙、丁二句は接せざるに非れども甚だ密ならず。

是は屈折の寧ろ拙なる例なり。其の巧妙なるものは次の如きものあり。

「觀公孫大娘弟子舞劍器行」に於て、初に大娘の舞とその弟子たる李氏のことをいひ、次に先帝侍女八千人云云といふより局面を開き、梨園弟子散如烟、女樂餘姿映寒日、といふに至りて李氏のこと合し、又次に、

(玄宗) (自己) (觀舞) (感) (意)

仙果堆南木已拱。飄塘石城草蕭瑟。玳筵急管曲復終。樂極哀來月東出。

「前二句敘自己、題外拓放無礙」

老夫不知其所往。足跡荒山轉愁疾。 といへり、「金粟」以下四句は句句屈折し、「樂極」の句は一句中更に屈折せり、結二句は題外に拓放し

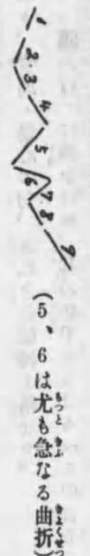
去れり。此種の拓放は、若し物理的の形を以て示すならば、拋物線( ) 的なりといふべし。更に予が曲折の好例と信するものは「冬狩行」の作なり。

此作の初、君不見東川節度兵馬雄、の句より何爲見羈虞羅中、の句までは狩のことを敘し、次に章奔が侍御、留後たることをいひ、さて自己に入り、

(1) 飄然時危一老翁。(2) 十年厭見旌旗紅。(3) 喜君士卒甚整肅。(4) 爲我回轡擒西戎。

(5) 草中狐兔盡何益。(6) 天子不在咸陽宮。(7) 朝廷雖無幽王禍。(8) 得不哀痛塵再蒙。

(9) 嗚呼得不哀痛塵再蒙。



といへり、殆ど句句曲折すといふも可なるも、その意のやや繼續する所によりて圖示すれば上線の如きものあらん。

次に頓挫について一言せん。

古人李白を飄逸、杜甫を沈鬱といふ、これはその性格の詩にあらはるる所をさす。同時に杜甫は沈鬱頓挫に長ずといはる。この頓挫については古人の説、明瞭を缺くも予を以て之を観るに概して已に

述べ來りたる筆勢を急に抑ふることを言ふに似たり。

例一、「憶昔」の詩に前半開元の盛時太平にして物價やすく、よく治まれることを敘して、その次に

「方東樹云、轉地頓挫、(昔) (今) 豈聞一絹直萬錢。有田種穀今流血。洛陽宮殿燒焚盡。宗廟新除狐兔穴。

「方東樹云、頓挫、

傷心不忍問者舊。復恐初從亂離說。

とあり、豈聞・傷心の句、方氏之を頓挫と稱せり。

例二、「驪馬行」に馬をほめ、其の必ずあらはるべきの日あらんことをいひて、さて次に

「方東樹云、以下除餘頓挫、

時俗造次那得致。雲霧晦冥方降精。近聞下詔喧都邑。肯使麒麟地上行。

といへり。蓋し時俗以下一轉急言するによりて、方氏之を頓挫と評す。

例三、五古「往在」の前半、宗廟の燒かれしをのべ、代宗時の吐蕃の亂に及び、終りに「安得自西

極、申命空山東」より「歸號故松柏」まで凡二十五句、太平の希望をのべ、最後に「老去苦飄蓬」

の一句を以て結べるは、是の「老去」の一句は頓挫の例とすべし。

頓挫は曲折の一の場合とみるべし。故に方東樹は、

大約詩章法、全在句句斷、筆筆斷、而真意貫注、一氣曲折頓挫、乃無直率死句合掌之病。

(附註卷百續四)

といひ、意貫き一氣曲折して句句斷ゆるものとなし、杜が「寄曼上人」七律、「收河南北」七律、「古柏行」七古、等を擧ぐ。

例四、

「方云、頓挫、不直率、不見曼公三十年。封書寄與淚潑潑。舊來好事今能否。老去新詩誰爲傳。

(因許八奉寄江寧曼上人七律前半)

「方云、起四句比著頓挫、劍外忽傳收薊北。初聞涕淚滿衣裳。卻看妻子愁何在。漫卷詩書喜欲狂。

(開官軍收河南北七律前半)

.....

憶昨路繞錦亭東。先主武侯同閭宮。崔嵬枝幹郊原古。窈窕丹靑戶牖空。

落落盤踞雖得地。冥冥孤高多烈風。扶持自是神明力。正直元因造化功。

(古柏行)

此外諸家の評して頓挫となす所のものも亦た類推するに足る。



次に律詩の章法につき一言せん。律詩は中二聯對句を作る、是に於て往往對句に妨げられて組織密ならざるものあり。杜の如きは然らず。

例 題終明府水樓 七百律第二首

宓子彈琴邑宰日。終軍棄繻英妙時。〔承第二句〕承家節操尚不泯。〔承第一句〕爲政風流今在茲。

可憐賓客盡傾蓋。何處老翁來賦詩。楚江巫峽半雲雨。清簾疎簾看弈棋。〔後聯承第四句風流〕

八月十五夜月 五百律第一首

滿目飛明鏡。歸心折大刀。〔前聯承第二句〕轉蓬行地遠。攀桂仰天高。

水路凝霜雪。林棲見羽毛。此時瞻白兔。直欲數秋毫。〔後聯承第一句〕

西 郊

時出碧雞坊。西郊向草堂。〔承第一句及西郊〕市橋官柳細。江路野梅香。

傍架齊書帙。看題滅藥囊。無人覺來往。疎懶意何長。〔承中二聯〕

秋興八首 第二首

夔府孤城落日斜。每依北斗望京華。聽猿實下三聲淚。奉使虛隨八月查。

畫省香爐逢伏枕。山樓粉堞隱悲笳。請看石上藤蘿月。已映洲前蘆荻花。

右は前六句夔府と京とを對説して末二句變を以て結べり。

此外種種なる結構あり、讀む者各篇に就て思はざる可らず。事實は渾然たり、分説は其の渾然を寫す手段のみ。極致は渾然として分つ可らざるに在り。

排律或は長律は杜甫の獨擅場なり。これには彼、多く雙管竝下の法を用ふ。之を形を以て示さば、

(イ)



(ロ)



(ハ)



の如くなるべきか、兩事を對立せしめて進行するなり、文章に合傳の法あるが如し。

此の適例は「寄賈司馬殿使君兩閣老五十韻」なり。此篇、賈・殿二人のことを分説し合説し、自己をも雜へて敘せり。

又た「送郭中丞兼太僕卿充隴右節度使三十韻」あり、第一段の「詔發山西將」より「鎮靜示專征」までは郭が隴右に屯するを言ひ、第二段の「燕薊奔封豕」より「忍淚獨含情」までは郭に勸めて節鉞を回へし、動王の功を成さしむるを言ひ、第三段の「廢邑狐狸語」より「莫作後功名」に至る八句は、

前二段を總括し、而してその末尾二句の「安邊仍扈從、莫作後功名」の「安邊」は第一段を謂ひ「仍扈從」は第二段を謂ひ、ただ五字を以て前文を該括せるは、用意周匝、敘述齊整を極むといふべし。杜詩に就きて講究すべき事項は甚だ多し、今ただ大要を擧げて讀者の注意を求めんと欲するのみ。

昭和三年四月中浣

鈴木虎雄識

# 杜少陵詩集 卷一

文學博士 鈴木虎雄 譯解

## 遊龍門奉先寺

龍門の奉先寺に遊ぶ

已從招提遊、更宿招提境。

已に招提の遊びに従ひ、更に招提の境に宿す。

陰壑生虛籟、月林散清影。

陰壑に虚籟生じ、月林清影を散す。

天關象緯逼、雲臥衣裳冷。

天關に象緯逼る、雲に臥すれば衣裳冷やかなり。

欲覺聞晨鐘、令人發深省。

覺めんと欲して晨鐘を聞く、人をして深省を發せしむ。

【字解】(一) 龍門、地名、一に伊闕といふ。河南省洛陽の西南三十支那里にあり、伊水によりて斷たれたる峽なり。(二) 奉先寺、龍門の北岸にあり、南、香山寺と對す、今も遺址存せり。(三) 招提、寺院ないふ、梵語の拓闢提舍を略して招提といひ、招の字を更に寫し訛りて、招となるものなりといへり。(四) 壑、城域の内ないふ。(五) 陰壑、北向きの日なうけぬ、たに。(六) 虚籟、音がた見えずしてきこゆるひびき、草木などの風にふれて鳴るおと。(七) 月林、月光をうけたるはやし。(八) 清影、きよき影。

(九) 天關、天の門、これは斷峽のそびえたるなたとてかくいふ。(一〇) 象緯、象はすがた、緯は機のこと、天にては二十八宿を總とし、五星を緯とす、象緯とは星象の組織の義なるも、單に星辰のことに用ひたり、此句は又天關象緯とも解し

うべし。【一】雲臥 作者が臥するなり、雲とは高麗なればしかいふ。【二】覺 めざむる。【三】晨鐘 あしたのかげの音。  
【四】入 聞く人一般を言ひて自己は其中にあり。【五】發 わ、こすなふ。【六】深省 省は大悟することなふ。

【題義】作者が龍門の奉先寺に遊びて、そこに宿したることをのべし詩なり。製作時は或は開元二十四年後とし、或は同二十九年後とす、一定しがたし。

【詩意】さて自分は今日十分此の寺にての遊びに従事したが、そのうへにも此の寺の境内にとまつてしまつた。とまつてみると北のたには、がさがさと物の音がして、月光を浴びた林は清き影を地上に散亂せしめる。天の門かと怪まるるこの高處には、上から星象が垂れ近づくやうであり、雲の降りてゐるところに身を横へて寝ぬれば衣裳も冷やかに感ずる。又あけがた目のさめんとするころ、あさの鐘の音をきくときは、なにとなく之を聞く者をして深き省悟の念をおこさしめる。

望嶽

嶽を望む

岱宗夫如何、齊魯青未了。  
造化鍾神秀、陰陽割昏曉。  
盪胸生曾雲、決皆入歸鳥。

岱宗夫れ如何、齊魯まで青未だ了らず。  
造化神秀を鍾め、陰陽に昏曉を割かつ。  
胸を盪かして曾雲生ず、皆を決して歸鳥に入る。

會當凌絕頂、一覽衆山小。

會當に絶頂を凌ぎて、一たび衆山の小なるを覽るべし。

【字解】【一】嶽 五嶽の一たる東嶽即ち泰山をいふ。【二】岱宗 泰山をいふ、泰山は五嶽の長なるゆゑ之を宗といふ、今山東省泰安府の北境にあり、海拔四千餘尺。【三】齊 春秋時の國名、今の山東青州府地方。【四】魯 春秋時の國名、今の山東省兗州府の地方。【五】未了 盡きざるをいふ。【六】造化 造物主、天然の主宰者。【七】鍾 あつむ。【八】神秀 すぐれたる氣、神とは靈妙不可測なるをいふ。【九】陰陽 陰は山北、陽は山南をいふ、陰陽を直に月日の義とく解あれども今從はず。【一〇】割 區別し、わかつなふ。【一一】昏曉 昏は山北、曉は山南をいふ、陰陽を直に月日の義とく解あれども今從はず。【一二】盪 盪はうごかす、胸をうごかすとは心曠を助悻せしむるをいふ。【一三】曾雲 會は層と同じ、かさなれるくも、此句は雲が生ずるために胸がとどろくことを、結果と原因とを連にのべしものなり。【一四】決皆 かならず、断然の語なり。【一五】入 どこまでもその方へついてゆくをいふ。【一六】歸鳥 鳥かへりゆくこと。【一七】會 かならず、断然の語なり。【一八】衆山小 孔子が泰山に登りて天下を小とせられしといふこと「孟子」盡心上、「揚子法言」學行篇に見えたり、作者其事を借り用ふ。

【題義】泰山を遠望して作れる詩なり。製作時は開元二十五年頃かといへり。  
【詩意】さておとに名だかき泰山といふ山はいかやうぞといふに、その山の青き色は遠く離れた齊だの魯だのの地方までいつてもまだ無くなりきらぬ。此の山は造物主もここに神秀の氣をあつめたるかとおもはるる靈山であり、その高大さといはば山南と山北とで夜と晝とが別れるといふほどである。この山からむらむらとかさなつた雲が湧きたつので我が胸はとどろかされ、まなじりのはりさげんばかり眼をみひらいて歸りゆく鳥をみおくる。自分は他日必ずこの山の絶頂をつきぬけて孔夫子のやう

に「と脚下のむら山の小さくみえるのをながめるであらう。

登兗州城樓

兗州の城樓に登る

東郡趨庭日南樓縱目初

東郡庭に趨する日、南樓目を縱つ初。

浮雲連海岱平野入青徐

浮雲海岱に連り、平野青徐に入る。

孤嶂秦碑在荒城魯殿餘

孤嶂には秦碑在り、荒城に魯殿餘る。

從來多古意臨眺獨躊躇

從來古意多し、臨眺して獨り躊躇す。

【字解】(一) 兗州、今の山東省兗州府臨沂縣治。(二) 東郡、都より東にあたる郡、兗州をさす。(三) 趨庭、趨とは歩調をばやめて小またにあること、庭とは家のにはをいふ、孔子の子の孔鯨が趨而庭、孔子より詩の歌をうけしこと、「論語」季氏篇に見ゆ、ここは父に省侍するをいふ。(四) 南樓、兗州城の南門の樓。(五) 縱目、ほしいままに見やること。(六) 初、初といひ日といふは單にそのときといふこと。(七) 海岱、海は東方の海、岱は泰山をいふ、北にあり。(八) 入、そこまですつとつらなりこと。(九) 青徐、青州・徐州、青は北に徐は南にあり。(十) 孤嶂、孤立せるやま、これは鄒縣の嶧山をさす。(十一) 秦碑、秦の李斯が始皇の徳をほめてかきたるいしぶみ。(十二) 兗城、あれたるしる、これは鄒縣の嶧山をさす、そこには漢の時常帝の子、魯の共王が封ぜられたり。(十三) 魯殿、魯の共王が建てたる靈光殿をいふ、この宮殿の壯麗なるさまは後漢の王延壽が作れる賦にみえたり。(十四) 從來、これまで、前かたから。(十五) 古意、古代をなつかしむこころし。(十六) 臨眺、高き處より平遠なる地にましかかつてながめる。(十七) 躊躇、ためらふ、にはかに立ちまかりかゆるさま。

【題義】作者兗州の城樓にのぼり、景を眺め古を懐ひて作れる詩なり。杜甫の父杜閑は兗州の司馬たり、開元二十五年、甫落第の後齊趙の地に遊びし當時、父のもとを尋ねしころの作なるべし。

【詩意】自分はこの東郡で家庭の訓を奉ずるをりから、城の南樓にのぼつてながめをほしいままにする。みれば浮べる雲は海の方、岱嶽の方につらなつてをり、平かなる原野は青州徐州の方まではひりこんでをる。孤立せる嶧山には秦代の碑がのこつてあるし、曲阜の荒城には漢代魯王の宮殿がのこつてある。自分はこれまでとても古昔をなつかしむ念は多かつたのであるが、今ここにさしかかつてながめると、特に立ち去りかねてただひとりここにためらひつつある次第である。

【餘論】孤嶂二句、舊説の如く秦碑魯殿が存在するものとして解けり。然れども作者の李潮八分歌に嶧山之碑野火焚とありて嶧山の李斯の碑のやけしこと彼之をいへり、又靈光殿が唐の時に存在せざることも明かなる事なり。然るに前解の如くすれば作者は事實を無視することとなりて甚だ都合なり、因て予は作者の意は孤嶂秦碑在、荒城魯殿餘、といへるものに非るかと思ふ、在とは書ては在りしが今は無しの意なり、荒城魯殿餘とは今望む曲阜の荒れ城も昔日雄大なりし共王の宮殿の殘餘なりといふ意にみる。讀者以て如何となす。

題張氏隱居 二首 張氏が隱居に題す 二首

春山無伴獨相求。

春山伴無く獨相求む。

伐木丁丁山更幽。

伐木丁丁として山更に幽なり。

澗道餘寒歷冰雪。

澗道の餘寒に冰雪を歴。

石門斜日到林丘。

石門の斜日に林丘に到る。

不貪夜識金銀氣。

貪らずして夜金銀の氣を識り、看る。

遠害朝看麋鹿遊。

害より遠ざかりて朝に麋鹿の遊ぶを

乘興杳然迷出處。

興に乗じて杳然として出處に迷ふ、

對君疑是泛虛舟。

君に對すれば疑ふらくは是れ虛舟を

泛ぶるか。

【字解】「一」張氏、何人なるや詳ならず、或は竹溪六逸の一人張叔明ならんといひ、又社市の「歌述」に見えたる張叔卿と同一人かそれとも兄弟かなどいふも孰れも臆説のみ、詩中の「石門斜日」の句によれば、其人石門山に隱れ居たる者なるを知る。【二】伴、つれ。【三】相求、求とはその人を尋ねにゆくこと、相とは必しも相互的ならず、あひてがありさへすれば可なり、こゝはこちから先方を求むるなり。【四】丁、音、木を伐る音なり、字面は「澗道」の伐木篇にみゆ。【五】澗、たにぞひのみち。【六】餘寒、春の殘寒。【七】石門、石門は山の名ならん、石門山は曲阜縣の東北五十里にあり、李白の集に魯郡東石門重別社市詩あり、李社の集に石門といへるは同一地をさすものなるべし。【八】斜日、よこにさす日光、夕日ないふ。【九】林丘、ばやしあるなみ、張氏の棲む處をいふ。【一〇】金銀氣、地下に金銀あればその氣自ら上騰す。【一一】暮、くじか。【一二】乘興、おもしろさののりきになる。【一三】杳然、わくふかきかたち。【一四】出處、立ち出づべき處、出と處と二つにみて出づべきか、處(處)るべきかの二つとみるも可なるべし。【一五】君、張氏なます。【一六】泛虛舟、莊子山木篇に舟で何れをわた

るとき虛舟(人の居ぬからふれ)が來てぶつつかつたなら、いくらいこちの人でも怒らぬといへる語あり、こゝは張氏の自己といふもの無き人がらなたとへていへり。

【題義】張氏とよぶ人のかくれがにかきつけたる詩なり、開元二十四年後齊趙に遊べる當時の作。

【詩意】春の山をだれもつれがなく自分一人で尋ね入ると、木びきの音がさらさらときこえて山は音あるためにいつそうしづかにおぼえる。餘寒のをりにたにぞひの道をたどつて氷や雪のある處をすぎたりして、石門に夕日かたむくころやつと君の住める林丘にたどりつく。君の人品はすこしも貪慾の念は無いが夜となれば靈地に埋藏してある金銀の氣はおのづからそれとわかり、害に近づくことなくして朝にはつねに麋鹿のたぐひの遊んでゐるのをみとめる。動物も君を友どちとなせるに似たり。かかる場所へ來てみるとおもしろくつていかにふかく仙境にわけ入つたかとおもはれ、歸りにはどう出てよいか迷ふ。君と相對してゐるときの感じをたとへてみれば、君は「莊子」の謂はゆる虛舟を泛べたるが如き者でその無心さがなんともしへぬのである。

之子時相見遊人晚興留。

之子時に相見、人を遊へて晚興に留む。

霽潭鱸發發春草鹿呦呦。

霽潭に鱸發發たり、春草に鹿呦呦たり。

杜酒偏勞勸張梨不外求。

杜酒偏に勸むるに勞す、張梨外に求めず。

前邨山路險。歸醉每無愁。前邨山路險なるも、歸るとき酔ひて毎に愁ふる無し。

【字解】(一) 之子、張氏をさしていふ。(二) 遊人、人とはひろく言ひて自己をふくむ。(三) 曉興、夕方のおもしろさ。(四) 留、ひきとむること。(五) 露、あまのれのみち。(六) 鐘、なまづの類。(七) 盤、びちちはれるさま。(八) 咄、鹿のなくさま。(九) 杜酒、むかし杜康なるもの酒を造りしといふ、因て杜酒といふ。(一〇) 勞、骨折つてすすめる。(一一) 張梨、張家の梨、うまさ梨ないふ、昔の潘岳が閭居賦に張公大谷之梨の語あり。(一二) 外求、他處に於て求める。(一三) 歸醉、酔ひてかへるといばんがこし。(一四) 無愁、酔へるために心配ごとなし。

【題義】この詩は張氏にひきとめられて酒興を盡すことをのぶ。前詩と同時の作には非ず。

【詩意】この張氏とは時時面會するのであるが、この人は夕方の興に乗じて自分をむかへてひきとめる。ちやうど雨あがりのふちになまづがはねたり、春のわか草に鹿がひよひよ鳴いたりしてゐる。主人は一生懸命に自分に酒をすすめてくれるし、肴代りに出してくれる梨も、自園のもので事たりである。向ひの村の山路は険しいのであるが自分はこのかへりには酔うていつも心配ごともなく上へ下へもどるのである。

劉九法曹鄭瑕丘石門宴集 劉九法曹鄭瑕丘石門の宴集  
秋水清無底蕭然淨客心 秋水清くして底無し、蕭然客心を淨くす。

據曹乘逸興鞍馬到荒林 據曹逸興に乗じ、鞍馬荒林に到る。

能吏達聯壁華筵直一金 能吏聯壁に達ふ、華筵直一金。

晚來橫吹好泓下亦龍吟 晚來橫吹好し、泓下にも亦龍吟す。

【字解】(一) 劉九法曹、法曹とは法曹參軍事とよぶ官名なり、これは兖州の法曹ならん、劉は其人の姓、名は詳ならず、九とは其人の從兄弟間の順位の数なり。(二) 鄭瑕丘、鄭は其人の姓、名は詳ならず、瑕丘は縣名、兖州府治の西二十五里に在りしもの、鄭は其地の長官なり。(三) 石門、即ち題張氏隱居詩に見えたる石門と同一地にして、曲阜の東北の石門山を指すならん。(四) 無底、深きないふ。(五) 蕭然、しづかなさま。(六) 泓、きよらかにする。(七) 客心、旅客としての心、作者自らの心ないふ。(八) 據曹、據は屬官ないふ、據曹は蓋し劉をさす。(九) 逸興、すぐれたる興。(一〇) 亂筆、亂筆にはえたとし。(一一) 龍吏、伎能ある吏、これは劉、鄭二人をさす。(一二) 連壁、聯壁は二つならべたるたま、能吏連壁は連能吏之聯壁と同意にして連は作者が之にあふないふ、能吏が連ふと誤解すべからず。(一三) 華筵、うつくしき酒のむしろ。(一四) 直、直と同じ。(一五) 一金、黄金一斤、または一錠のこと、凡三十兩なり。(一六) 橫吹、吹は名詞、吹きものの義、橫吹は「よこぶえ」なり。(一七) 泓、水の深き處、これは題張氏隱居詩の後首の「舞潭」の潭にあたるならん。(一八) 龍吟、この龍は寶物をいふ。

【題義】兖州の法曹をしてゐる劉氏、瑕丘縣令をしてゐる鄭氏と共に、石門で會して宴せることをよめる詩なり。時代は開元二十四年以後。

【詩意】この石門の地には秋の水がすみわたつて底しれぬ深さをもつてゐる、これを見るところとして旅の身の上ながら我が心が清淨になる。そこへ劉法曹は興に乗じて鞍馬に跨つてこの自然林へ

やつてきた。また鄭瑕丘も来たので自分はこの二人の能吏にあふことができ、そのうへうつくしき酒宴のむしろは大金を費したもてなしである。(我が樂しさを知るべしである) まして夕かたまで吹きいださるる横笛の音もおもしろく、ふちのそこなる龍も亦それに和して吟じてゐる。

與任城許主簿遊南池

任城の許主簿と南池に遊ぶ

秋水通溝洫城隅進小船

秋水溝洫に通ず、城隅より小船を進む。

晚涼看洗馬森木亂鳴蟬

晚涼に洗馬を見る、森木に鳴蟬亂る。

菱熟經時雨蒲荒八月天

菱は熟す時を経たるの雨、蒲は荒る八月の天。

晨朝降白露遙憶舊青氈

晨朝白露降らむ、遙に憶ふ舊青氈。

【字解】(一)任城、縣の名、唐の時兗州に屬す、今山東濟寧州治。(二)許主簿、許は姓、主簿は記録を掌る官。(三)南池、濟寧城の東南隅にもと存せしものなりといふ。(四)秋水、水と溝洫にたたる水といふ。(五)溝洫、田間の掘り割りの水、廣さ深さ四尺なるを溝といひ、廣さ深さ八尺なるを洫といふ。(六)進、進行させること。(七)洗馬、馬に行水をさすこと。(八)森木、森はしげり立てるさま。(九)菱、兩角あるひし。(一〇)蟬、久しきにわたること。(一一)蒲、ガヤ。(一二)氈、枯れたり折れたりするさまといふ。(一三)晨朝、あしたのこと、但し、こゝにては明朝の意なり。(一四)降白露、白露がおりるといふは白露となることといふ。(一五)舊青氈、昔の王獻之が故事、嘗て夜、氈あり獻之が書齋に入る、獻之これにむかひて、青毛氈だけは

我家の舊物なれば置いてゆけしと言ひしことあり、こゝは作者自己の故郷にのこせし氈をいふ、由つて懷郷の情を託したるなり。

【題義】任城縣の主簿許氏とともに縣城の南にある池にあそびしことを作る。開元二十五年頃の作。

【詩意】秋の水が田間の掘り割りに縦横に通じてゐる、それでその水を利用して縣城の隅から小さな船を進めて南池の方へでかける。途中では夕がたの涼しきをりから人が馬を洗うてやつてゐたり、しげり立つた木にはかしましく蟬が鳴いたりしてゐる。またこのごろ長くつづいた雨のために菱は成熟し、八月の秋そらに蒲などは枯れかかりつつある。かんがへてみるとあしたはもはや白露のおりる時節であるが、はるかにおもひいでらるるは故郷の書齋にのこしてあるあの青まうせんのことである。

對雨書懷走邀許主簿

雨に對して懷を書し、走らせて許主簿を邀ふ

東嶽雲峰起溶溶滿太虛

東嶽雲峰起る、溶溶として太虛に滿つ。

震雷翻幕燕驟雨落河魚

震雷に幕燕翻へり、驟雨に河魚落つ。

座對賢人酒門聽長者車

座に對す賢人の酒、門に聽かんとす長者の車。

相邀愧泥濘騎馬到塔除

相邀ふる泥濘を愧づ、馬に騎つて塔除に到る。

【字解】(一)書懷、我が胸にいたくおもひをかきつける、これは主として第六句をさす。(二)走邀、走とは使者を走らせやる

與任城許主簿遊南池 對雨書懷走邀許主簿

【一】許主簿 卽ち任城の許主簿なり。【二】東嶽 泰山をさす。【三】雲峰 峰のさましたる雲。【四】  
 滄海 水のたたふる如きさま。【五】太虛 おほそら。【六】孤雲 とどろくかみなり。【七】暮燕 暮ちかく巢くへるつばめ。【八】  
 暝雨 にわかあめ、夕立。【九】落 龍巻きなどにあひ虚空にのぼりて更に地上に落つるなり。【一〇】河魚 河に棲めるうを。【一一】  
 賢人酒 鶴の曹操の時酒を禁じたるに世の人口に酒といふをばかり白酒（にこりさけ）を賢人といひ清酒（すめるさけ）を衆人とい  
 ひしといふ。【一二】門羅 長者車 漢の陳平が故事を用ふ、陳平いまだ貧しくくらせしときにその門外には長者（すぐれた人）の車の  
 轡多かりしといふ、この轡とは實際さくに非ず、心まちにきくなり、故に「きかんとす」といふほどの意なり、長者は許主簿にあてて  
 いふ、これ題に謂はゆる書懷なり。【一三】相邀 先方をむかへること。【一四】泥濘 めかるの、夕立のあとゆゑ路わろし。【一五】  
 騎馬 許主簿が馬にのりてくるなり。【一六】塔除 塔はきざばし、除は塔のそばのどえん、作者の寓する家の増除をいふ。

【題義】 雨をながめながらおもふところをかきつけて、使ひを走らせ許主簿をむかへしことをのぶ。  
 製作時は開元二十五年頃ならん。製作の地は作者兗州に在りて事を以て兗州に來り居りし許氏をむか  
 へしともみられ、或は作者事を以て任城に赴き某處に寓し居りて許氏をむかへしともみらるべし。前  
 に任城の南池に同遊せる詩あれば蓋し任城にての作とみるべきか。

【詩意】 泰山の頂に雲の峰がわきおこつたかとおもふとそれがなみなみとおほそら一面にひろがつ  
 た。ごろごろととどろく雷とともに暮のあたりの燕は身をかはして飛び、ざあつとふりそそぐ雨にか  
 はうをがふつてくる。このとき自分は座席でどぶろくにうちむかひながらだれか長者の車の音が門べ  
 にきこえてくれたらいいにとかんがへる、（それで使ひを走らせたのであるが）早くも君は馬に騎つて

我が家の増除までやつてこられた、まことにおむかへをするにつけて途中さぞぬかるみでおこまりで  
 あつたらうと愧ぢいる次第である。

巴上人茅齋

巴上人の茅齋

巴公茅屋下、可以賦新詩。

巴公茅屋の下、以て新詩を賦す可し。

枕簟入林僻、茶瓜留客遲。

枕簟林の僻なるに入り、茶瓜客を留むること遅し。

江蓮搖白羽、天棘蔓青絲。

江蓮白羽搖ぎ、天棘青絲蔓る。

空忝許詢輩、難酬支遁詞。

空しく許詢が輩を忝くするも、支遁が詞に酬い難し。

【字解】 【一】巴上人 其人詳ならず、巴は其名の一字をとらるなり、菩薩一心に阿耨菩提心を行ひて散亂せざるを上人といふ  
 とぞ、上人は僧を敬ひていへり。【二】茅齋 かやぶきの書齋。【三】賦 つくること。【四】枕簟 簟はタカムシロ。【五】入林  
 僻 僻はかたよる、奥にひっこみたる處なるをいふ、僻の字林の字へかかる。【六】遲 久しきないふ。【七】江蓮 舊注なし、蓋  
 し江南産の蓮をいふならん。【八】白羽 蓮花のしろきをたとへていふ。【九】天棘 また麒麟といふ、天門受のことなりといへり。  
 【一〇】蔓 はびこる、つるになつてさがるをいふ。【一一】青絲 葉の細く散じたるをたとへていふ。【一二】空忝 空とは徒らに  
 といふの類、忝とは先方をけがすといふこと、敬語なり。【一三】許詢、支遁 許は俗人、支は僧、共に晉の世の人にして親交あり、  
 許を以て自ら比し、支を以て巴上人に比したり。【一四】詞 ただ言語をいふに非ずして、必ずや上人が示せる詩をさしていふなら  
 ん。



【題義】 已上人が茅齋にあそびて作れる詩なり。開元二十九年頃の作、作地は不明。

【詩意】 已公が住んでをられるこの茅屋のもと、ここでは詩を新しく作つたりするにふさはしいのである。公は奥まつた林中に客をみちびいて枕簟を供してねむらせ、または茶だの瓜だのを供して客をながくひきとめられる。茅齋の庭先きでは江南の蓮花が白羽のやうにゆらいだり、天門冬の葉が青絲のやうにぶらさがつたりしてゐる。公はもつたいたなくも自分を許詢が輩としてもてなされるが、残念なことには自分は支遁ともみなすべき公の詞に對してむくいることができぬのである。(實は公の詩に對して此詩をつくりしものなれども謙遜してかくいふ)

房兵曹胡馬

房兵曹が胡馬

胡馬大宛名 鋒稜瘦骨成

胡馬大宛の名あり、鋒稜瘦骨成る。

竹批雙耳峻 風入四蹄輕

竹批ちて雙耳峻しく、風入りて四蹄輕し。

所向無空濶 眞堪託死生

向ふ所空濶を無す、眞に死生を託するに堪へたり。

驍騰有如此 萬里可橫行

驍騰此の如き有り、萬里橫行す可し。

【字解】 房兵曹 房は姓、名は諱ならず、兵曹は兵曹參軍事の官をいふ。胡馬 胡は塞外の地方をさす、ここは外國

産の馬をさして胡馬といへり。【一】大宛名 大宛は國の名、漢の西域地方に在りし國なり、漢の武帝大宛より天馬を得たることあり、名とは名を負へる駿馬なるをいふ。【二】鋒稜 みれ、とがり、骨のすがたをいふ。【三】瘦骨 肉やせし骨、馬は肉の肥えたるを貴ばず、筋骨たくましきを貴しとす。【四】成 十分にできあがる。【五】竹批 批はリツなり、竹の幹をばすかひにそぐないう、耳の尖りたる形容なり。【六】雙耳 左右二つのみみ。【七】峻 さかし、するどし。【八】風入 風が入りこむ、馬走るときは風おのづから四足の間に生ず。【九】四蹄 蹄はヒツメ。【一〇】空濶 空濶とはひろびろとした處、百里千里の平野をさす、無とは無視するをいふ。【一一】託 この馬にまかせる。【一二】死生 のりての死生なり。【一三】驍騰 驍は勇武なること、騰ばをどりあがる、馬のいさましさすがた。【一四】橫行 ほしいままにゆく。

【題義】 兵曹參軍事たる房氏が乗りしろたる外國産の馬についてのべたる詩なり。

【詩意】 房兵曹がもつてゐる胡馬は漢代大宛國からでた名馬のやうな駿馬であつて、その肉おちた骨格はふしこぶだつて十分できあがつてゐる。左右一對の耳は竹をそぎたるやうにさかしくとがり、その走るときは四本の脚に風が生じて踏からうである。この馬の向ふ所千里の曠野も眼中に置くに足らず、かかる馬こそ眞に死生を之に託することができる。かほどまでいさましくをどりあがる馬であれば萬里の遠きも自由にあるさちらすことができる。

畫鷹

畫鷹

素練風霜起 蒼鷹畫作殊

素練風霜起る、蒼鷹畫作殊なり。

房兵曹胡馬 畫鷹

搜身思狡兔側目似愁胡。  
 條鑑光堪摘軒楹勢可呼。  
 何當擊凡鳥毛血灑平蕪。

身を搜てて狡兔を思ふ、目を側てて愁胡に似たり。  
 條鑑光り摘むに堪へたり、軒楹勢呼ぶ可し。  
 何か當に凡鳥を撃ちて、毛血平蕪に灑ぐべき。

【字解】(一) 素練、しろきまぎぬ。(二) 風雷起、胡面の白さと鷹の勢より霜を連想するなり。(三) 香塵、こまじほの羽色のまか。(四) 畫作、畫のできぐあひ。(五) 珠、尋常ならぬ。(六) 搜身、搜は心に從つて體に作るべし。字の誤なり、體は體に同じ、そびやかす、身をそびやかすとは肩を怒らすやうにすること。(七) 狡兔、するいりやせ。(八) 側目、よこめににらむ。(九) 愁胡、心配さうなかほつきした胡人、鷹の目つきを愁胡にたとふることは晉の孫楚が鷹賦にみえたり。(一〇) 條、さなだひも。(一一) 鑑、ろくろ仕掛けの金鏡、これは鷹の足をさなだひもにてくりこの鏡につなぎおくなり。(一二) 光堪摘、光とは鑑のうごくにつれひかるるをいふ、摘の字は疑はしきも舊注は解去の義とく、つまみてとりさるるをいふ。(一三) 軒楹、のきは、はしら。(一四) 勢、鷹の猛き勢。(一五) 可呼、呼ぶとはこの鷹にかけこみして獵せしむるをいふ。(一六) 何當、何は何時の義。(一七) 凡鳥、鳥雀の類。(一八) 平蕪、蕪とは荒野をいふ。

【題義】鷹の畫についてよめる詩なり。作時、作地共に詳ならず。

【詩意】ここに鷹をかいたるさなだひがあるが、この絹面から風や霜が起るかと思はれる、このたかのできばえは非常なものである。このたかは肩を怒らせて兎でも手どりにしたいとおもつてゐるらしく、そのよこめにねめつけてゐるさまは愁へてゐる胡人に似てゐる。このすがたをみると活きた鷹をつくりで、これをつなぎとめてあるさなだひもやろくろ仕掛けの鏡などは十分とりすててやるによさはしく、またのきはやはしらのあたりで獵に呼びだしてもいいやうな勢をしてゐる。果していつ凡鳥をうちすゑて平野に毛血をそそぐことができるであらうか。

過宋員外之間舊莊

〔原注〕員外季弟執金吾見知於時故有下旬。

宋公舊池館零落首陽阿。

宋公の舊池館、零落す首陽の阿。

枉道祗從入吟詩許更過。

道を枉げて祗入るに從す、詩を吟じて更に過るを許す。

淹留問耆老寂寞向山河。

淹留して耆老に問ひ、寂寞山河に向ふ。

更識將軍樹悲風日暮多。

更に識る將軍の樹、悲風日暮に多きを。

【字解】(一) 宋員外之間、宋は姓、之間は名、姓名の間に員外をほさむ。宋之間は字は延濟、魏州弘農の人、中宗の貴寵中に考功員外郎となる。(二) 舊莊、ふるさ別莊、これは首陽山の下に在りしものなり、宋之間と杜甫の祖父杜審言とは武后の時俱に修文館學士たり、世世の交あり、杜甫は開元二十九年首陽山の下に室を築き遠祖當陽君(晉の杜預)を祭れり、蓋し當時亦因て之間が莊によきりしなり。(三) 宋公、之間をさす。(四) 池館、池ややかた。(五) 零落、おちぶれる。(六) 首陽、山の名、河南省偃師縣の西北二十五里にあり、杜甫の居は偃師縣の尸郷に在り、そこより首陽の方へと來りしなり。(七) 阿、をが。(八) 枉道、わざわざよこみへはひりこむ。(九) 祗、祇と同じ。(一〇) 從入、從はまかす。(一一) 吟詩、この題詠の詩を吟するをいふ。(一二) 淹留、ひさしくとどまる。(一三) 問耆老、耆老は附近の父老をさす、問とは之間が家の其後の事情につきたづめるなり。(一四) 將軍樹、

向山河 向ふと我が之に對するまいふ。【三】將軍樹 後漢の馮異戰功あり、功を論するとき異國り樹下にしりぞきなら、軍中之を大樹將軍といふ、これ會りて之間が弟之傳をさす、題下原注の員外季弟執金吾とは蓋し之傳をいふ、之傳は勇力あり、開元中に右羽林將軍より出でて益州長史・劍南節度使・兼採訪使となり、ついで太原尹に遷りし者。【二】應風多 多とは樹上に多く吹くをいふ、これによれば時に之傳已に没せしことを知る。

【題義】 考功員外郎宋之間のふるき別莊によりて作れる詩なり。

【詩意】 昔しありし宋公之間のやかた、それは今首陽山のをかにおちぶれつつある。番人もきびしからぬゆゑ、よこみちをしてここをたづねると勝手ににはひることができ、また詩を題せんとして今日再びここに過ぎることも許される。自分はややひさしくここにゐのこつて附近の老人たちに宋家の様子を問ひたづね、心さびしく寂寞たる山河にうちむかふのである。之間公があとのあればたばかりでなく、その弟君、之傳公のいこはれしとおほしき大樹にも、夕方悲しき風が多く吹きわたるのをしるのである。

夜宴左氏莊

夜左氏の莊に宴す

風林纖月落衣露淨琴張

風林纖月落つ、衣露に淨琴張る。

暗水流花徑春星帶草堂

暗水流花徑に流れ、春星草堂を帶ぶ。

檢書燒燭短看劔引杯長

書を檢して燭の短きを燒き、劔を看て杯を引くこと長し。

詩罷聞吳詠扁舟意不忘

詩罷みて吳詠を聞く、扁舟意忘れず。

【字解】

【一】左氏莊 左氏の何人なるや詳ならず、その莊の所在も詳ならず、或は河南に在るならんといへり。【二】風林 風わたるけやし。【三】纖月 ほそりたる月、三日月なるべし。【四】衣露 衣上におくつゆ。【五】淨琴 塵埃をとどめぬこと。【六】張 琴の絲をはる。【七】暗水 くらがり水。【八】花徑 花さけるこみち。【九】帶 とりかこむこと。【一〇】檢書 檢ばしらへること。【一一】燭短 短の字は燭へかかる。【一二】引杯長 引とは口もとへひきよせること、長とは時間の久しきにわたるをいふ。【一三】詩罷 席上にて、此詩の如きものをつくりをばること。【一四】吳詠 吳は今の江蘇省地方、吳詠とは江南の香調で詩をうたふこと。【一五】扁舟 小ききひらべたきふね、これは開元十九年作者年二十歳にして、吳越に遊びしことを憶ひ起すなり。

【題義】 夜左氏の別莊に宴せしことをのぶ。此詩の製作時も明ならず、ただ詩中に聞吳詠の語あり、開元二十三年以後に在ることを知るべし。

【詩意】 そぞろに風わたる林にかほそき新月も落ちてしまふたとき、衣に露をやどしながらきよらかな琴の絲を張りて一曲をかなでる。莊外では花さくこみちにくらがり水ながれ、草堂をめぐりて春の星あはくかかる。或は短き蠟燭をともして書籍をしらべ、或は劔をめでつついまでも酒杯をひきよせる。座客たまたま詩を賦し了りて吳音もて之を詠するものあり、之を聞けば我が往年吳越に遊歴して扁舟に棹せし當時のこといまなほ記憶からはなれずにある。

臨邑舍弟書至苦雨黃河泛溢隄防之患簿領所憂因寄此詩用寬其意

臨邑の舍弟の書至る、苦雨あり、黃河泛溢し、隄防の患、簿領の憂ふる所なりといふ、因つて此の詩を寄せ、用て其の意を寬にす。

二儀積風雨百谷漏波濤。二儀風雨積み、百谷波濤を漏らす。  
聞道洪河圻遙連滄海高。聞道洪河圻けて、遙に滄海に連つて高しと。  
職司憂悄悄郡國訴嗷嗷。職司憂へて悄悄たり、郡國訴へて嗷嗷たり。  
舍弟卑棲邑防川領簿曹。舍弟邑に卑棲し、川を防ぎて簿曹を領す。  
尺書前日至版築不時操。尺書前日至今、版築時あらず操ると。  
難假龍鬣力空瞻烏鵲毛。龍鬣の力を假り難し、空しく烏鵲の毛を瞻る。  
燕南吹吹畝濟上沒蓬蒿。燕南吹畝を吹き、濟上蓬蒿を沒す。  
螺蚌滿近郭蚊虻乘九臯。螺蚌近郭に滿ち、蚊虻九臯に乗る。  
徐關深水府礪石小秋毫。徐關水府深く、礪石秋毫小なり。

白屋留孤樹青天失萬艘。白屋孤樹を留め、青天萬艘を失すと。

白屋孤樹を留め、青天萬艘を失すと。

吾衰同泛梗利涉想蟠桃。吾衰へて泛梗に同じ、利涉蟠桃を想ふ。

吾衰へて泛梗に同じ、利涉蟠桃を想ふ。

却倚天涯釣猶能擊巨鼉。却て天涯の釣に倚りて、猶ほ能く巨鼉を撃せむ。

却て天涯の釣に倚りて、猶ほ能く巨鼉を撃せむ。

【字解】【一】臨邑、縣の名、山東濟南府臨邑縣北三十五里にありしもの。【二】舍弟、我家の弟、これは杜預を言す、預は時に臨邑の主簿たり。【三】書、てがみ。【四】吾雨、ながあめ。【五】泛梗、あふれる。【六】龍鬣、破綻の災難。【七】蟠、主簿の役向きなまふ。【八】用、以と同じ。【九】寬、ゆるやかならしむる、くつろがす、くよくよおぼはれやうに慰めること。【一〇】其意、氣がこころ。【一一】二儀、天地をいふ。【一二】積、積みたくはふるをいふ。【一三】百谷、多くのたに。【一四】滄海、外へ出ること。【一五】聞道、道は「いふ」、聞道とは「人のいふなきに」といふこと。此の二字は次句までかゝる。【一六】郡、外へ出ず河、黃河を言す。【一七】圻、ひらく、まぐ。【一八】遙海、ひろらかなうみ。【一九】職司、治水の官を言す。【二〇】悄悄、うれふるかたち。【二一】郡國、地方をいふ。【二二】嗷嗷、がやがやかましくいふ。【二三】卑棲、ひくき枝にすむ、島についでの語なり。【二四】邑、臨邑を言す。【二五】防川、川の水のあふれることをふせぐ。【二六】領簿曹、領は支配しあづかる、曹とはその分課をいふ。【二七】尺書、長さ一尺の手紙。【二八】版築、版は定規、築はいしづきあるきね。【二九】不時、定まれるときなく。【三〇】操、とる、版築のわざを言す。【三一】假、か。【三二】龍鬣、うみがめ、よろひがめ。【三三】烏鵲、からす、かささぎ、周の穆王が龍鬣を叱して墜とせしこと「竹書紀年」にみえ、烏鵲が河をうづめ、橋をなして織女を渡せしこと「淮南子」にみゆ。【三四】燕南、燕は六國の時の國の名、今の直隸省順天府の地方。【三五】吹、蓋し風雨がふきつけるをいふ。【三六】畝、みぞ、うね、畝畝を吹くとは種まつけを害するをいふ。【三七】濟上、濟水のほとり、今の山東濟南府兗州府等の地をいふ。【三八】螺蚌、よもぎ、しろよもぎ。【三九】蚊虻、ほらのかひ、からすがひ。【四〇】近郭、城ちかくのくるわ。【四一】秋毫、みつ

臨邑舍弟書至苦雨黃河泛溢隄防之患簿領所憂因寄此詩用寬其意

ち、つのかなきたつ。【三】樂のぼる。【九】九阜「詩經」の鶴鳴の時に據れば九阜とは九重の奥にひつこみたる「まば」なり、樂すといへば、杜甫或は九層のなかと解したるか。【徐】徐圖 今の山東濟南府淄川縣の西にあり、春秋時代よりありし關なり。【四】水府 龍宮のたぐひ。【五】碣石 山の名、今の渤海海峽島のあたりに在りしもの。【六】小秋毫 秋毛は秋になりればほそし、小秋毫とは秋毫の如く小なりといふこと。【七】白屋 蓋し白紙にてかこひたる家をいふ、或は曰く茅屋をいふ。【八】留孤樹 家は水に押し流されるか、没するかして、ただ一本の樹木だけをのこす。【九】青天 青は蒼をいふ。【一〇】失萬載 失とは影だに見えざるをいふ、萬載とは多くの船をいふ、このふれば糧食を運搬するものをなます、洪水のため、この船も来らざるをいふ。「販菜」の句より此句まで弟の書中の意をいふ。【一一】泛梗 水にうかぶ桃梗をいふ、桃梗とは桃の枝を刺し（蓋し人物を刺せるならん）災厄をよけるために使用せるものなり、土偶と桃梗とが問答すること「戰國策」の「説苑」等にもみゆ。【一二】利涉「易」の利涉大川に本づくも、詩人が利涉といふときは「都合よくわたる」義に用ふ。【一三】蟻 東海に度索山といふ山あり、その山に三千里に盤屈する大桃樹ありといふこと「十洲記」にみゆ、蟻は根幹のわたかまる義。【一四】却ては上の義の字と應ずる語なり「衰へてはなるがしがし」といふこと。【一五】備 それをたよりにする。【一六】天運釣 天のはてに於て釣りをする。【一七】擊 ひきとどめる。【一八】互擊 おほがめ。「列子」に歸墟の中に五山あり、帝（天のかみ）互擊十五をして之を擊せしむ、龍伯國の大人一たび釣りて六壺を運ぬ、是に於て二山北極に流るといへる話あり、此詩末二句は其意を用ふ。戯れに大言をはきて弟を戲むるなり。

【題義】臨邑にゐる弟の處から手紙がきた。それによると長雨がつづいて黄河の水があふれだし、いつ隄防がされるかわからぬので自分の職掌が心配してゐることであるから、此の詩を寄せて弟の心をくつろげるやうにした。此詩の作時不明なるも開元二十九年に黄河の大水あり、因て同年の作ならんといへり、然らば作者河南に在りての作か。

【詩意】天地の間に風雨が久しくたくはへられ、いろいろの谷谷からわきたつ波の水がはきだされた。聞くところによれば黄河の隄防もやぶれて、その水ははるかに海までつらなつて高くかさばつてゐるさうだ。治水のかかりの官はいろいろ心配をし、水害關係の地方では、どうにかしてもらひたいと口やかましく訴へてゐる。わが弟は臨邑にて低き地位に居て、川水を防ぐために主簿の役向きをあづかつてゐる。前日、弟から手紙がきたが、それによると時も定めず土功のわざをしてゐること、龍運の力をかりて梁をかけることもできず、いたづらに烏鶴の羽毛をみつめるばかりである。燕の南の地では田島が風雨にふきつけられ、濟水の近傍では雜草の上まで水がかよまつてゐる。城の近いくるわにははらがひや、からすがひが一ぱいになり、みづちの類がたかいかのうへまでのぼつてゐる。徐關の地は龍宮の奥ほど深くなり、碣石の山は茫茫たる水面をへだてて秋の毛すぢのやうに小さくみえる。一般の民家は見えすしてただ一本の高い樹のこり、はれたる青空にも糧食をはこび来る船は一艘もみえぬとのことである。自分は身體が衰へて昔話にある水にういてゐる桃梗と同様であるが、あはよくば都合よく水をわたつて東海の山にありといふ蟻桃のある處へでもいつてみたいとおもふ。いくら衰へたとて彼の龍伯國の大人のやうに天のはてで釣りをたるることによつて、今でもおほうみがめをひきするぐらゐのことはできるつもりだ。

【餘論】此詩は排律なり、排律また長律ともいふ律詩の長きものなり、起り二句と尾の二句とを除き

中間の句はすべて對句を用ひ、且句句盡く平仄の法を守る體なり、此の詩起二句も對句を用ひたり、中間時あつて不對の句もあれども大體に於て律法に従ひたり。

假山

假山

天寶初南曹小司寇舅於我太夫人堂下壘土爲山一匱盈尺以代彼朽木承諸焚香資甌甌甚安矣旁植慈竹蓋茲數峰嶽峯嫺娟宛有塵外致乃不知興之所至而作是詩。

天寶の初、南曹の小司寇舅、我が太夫人の堂下に於て、土を壘ねて山を爲る。一匱尺に盈つ。以て彼の朽木に代へ、諸の香を焚く資甌を承く、甌甚だ安かなり。旁に慈竹を植う。蓋し茲の數峰、嶽峯嫺娟娟として、宛も塵外の致有り。乃ち興の至る所を知らず、而して是の詩を作る。

一匱功盈尺三峰意出羣。

一匱功尺に盈つ、三峰意羣を出づ。

望中疑在野幽處欲生雲。

望中野に在るかと思ふ、幽處雲を生せむと欲す。

慈竹春陰覆香爐曉勢分。

慈竹春陰覆ふ、香爐曉勢分る。

惟南將獻壽佳氣日氤氳

惟れ南將に壽を獻せむとす、佳氣日に氤氳たり。

【字解】【一】假山 つきやま。【二】天寶 唐の玄宗の年號。【三】南曹小司寇舅 舅は母方のなぢをいふ、其の人詳ならず、南曹とは京都省の南曹にて兼官なり、小司寇は舅の本官なり。【四】太夫人 作者の祖父、杜審言の繼室盧氏をます、盧氏は天寶三載五月陳留に卒す。【五】壘 或は累に作る。【六】甌 或は甌に作る、兩字相通す、モッソ。【七】朽木 くらたれる木、普通ならば香爐の臺などは木にて造るなり。【八】承 うく、のせること。【九】資甌 すまものつば。【一〇】安 おちつきよし。【一一】慈竹 しだけの類。【一二】數峰 土山の峰をいふ。【一三】嶽峯 山のけはしきさま。【一四】嫺娟 竹のうつくしきさま。【一五】致 おもむき。【一六】所至 至とは極まるをいふ。【一七】功 土盛りをいふ。【一八】三峰 土山の數。【一九】壘 峰を活物としてみる。【二〇】出羣 同類よりわけいづる。【二一】在野 堂下とはおぼえぬをいふ。【二二】幽處 おくふかきところ。【二三】春陰 春時のくもり。【二四】曉勢 勢とは香煙の勢をいふ。【二五】惟南 南は南山をいふ、「詩經」に如南山之壽とみゆ。【二六】佳氣 めでたき氣、山の氣をいふ。【二七】氤氳 もやもやしてあるさま。

【題義】天寶の初に自分のをちて小司寇の官で東部の南曹を兼ねてゐた人が祖母君の堂の下で土をかさねてつき山をこしらへた。その山は土を一つこおいたもので高さは一尺ばかりで、普通に造る木製の臺に代へて香を焚くせとものつばをのせるのだ。のせてみるとつばのすわりが非常にいい。そのそばに慈竹をうゑた。つき山の峰の高くそびえたくあひ、竹の色のあざやかなぐあひ、さながら塵埃世界の趣がある。そこで自分ははてなきおもしろさをおぼえてこの詩を作つた。

【詩意】一つこの土を盛りあげて一尺あまりの山をつくりあげた。その山の三つの峰は他の羣峰より

りも傑出してゐるかと思ゆる。之をながめると曠野にでもゐるのかと怪まれ、その奥ふかき處からは雲がわきおこるかとおもはれる。慈竹は春のくもりを以て平地をおほひ、香爐からは暁の煙がいくすぢかわかれてたちのぼる。この土山は彼の南山のやうにその壽を祖母君にたてまつらんとするかの如く日日その周圍にめでたい氣をただよはせてゐる。

龍門

龍門

龍門横野斷驛樹出城來、龍門野に横りて斷ゆ、驛樹城を出でて來る。

氣色皇居近金銀佛寺開、氣色皇居近し、金銀佛寺開く。

往來時屢改川陸日悠哉、往來時に屢改まる、川陸日に悠なる哉。

相関征途上生涯盡幾回、相関す征途の上、生涯幾回にか盡く。

【字解】(一) 龍門、巴に前に見ゆ。(二) 横野、驛とは龍門の峽が斷絶するをいふ、横野とは遠く平野に連なりてみゆるさま。(三) 驛樹、龍門の驛につらなるな少木をいふ。(四) 出城來、城は洛陽城をいふ、出城來とは並木が城中より城外驛道に接續するをいふ。(五) 氣色、氣象をいふ。(六) 皇居、天子のおほす宮殿をいふ。(七) 金銀、寺の裝飾をいふ、龍門には多くの寺あり。(八) 往來二句、此二句對をなせども一貫してみるべし、往來とは蓋し往來の路途をいふ、改とは路途が變改するをいふ。(九) 川陸、川水と陸地、川とは伊水なます。(一〇) 悠哉、悠悠として長く存続するをいふ。(一一) 相関、しらべてみる。(一二) 征途、たび

【題義】(一) 東都(洛陽)にありて龍門に遊びしときの處をのべし作、作時は不明。

【詩意】平野に横はつて龍門の險峽が斷絶してをり、そこに通ずる並木は城中から城外へかけてずつとつながつてゐる。氣象をうかがへば東都の皇城はまぢかにあり、その處に於ては金銀を以て飾つた寺院があらはれてをる。自分のはたびたび此處へ遊ぶのであるが、往來の途は時としてしばしばかはつてしまひ、附近の陸地や川水のみがいつも存續してゐてかはらぬ。たびちに於てここをとほる幾多の人をみてみるに、一生のうちここへはいくたびくることができるのであらうぞ。

李監宅二首

李監の宅二首

尙覺王孫貴豪家意頗濃、尙ほ王孫の貴きを覺ゆ、豪家意頗る濃かなり。

屏開金孔雀褥繡芙蓉、屏は開く金孔雀、褥は繡る芙蓉。

且食雙魚美誰看異味重、且つ食ふ雙魚の美なるを、誰か看ん異味の重なるを。

門闌多喜色女婿近乘龍、門闌喜色多し、女婿近ごろ龍に乗せり。

【字解】(一) 李監、其の人詳ならず。或は「靈怪錄」に載する所の李令問ならんかといへり。李令問は開元中に秘書監となり、

美服珍饈を好み奢りを以て聞えし人なり、或は題を「李監」に作るといふ、鹽鐵とは鹽鐵を掌る官なり。【二】王孫、公子王孫などいふは貴族の子孫といふことなり、亦監を敬ひていふ。【三】豪家、富める家。【四】室顔、人を遇する意の厚きこと。【五】屏、屏風。【六】金孔雀、金色の孔雀、畫幀様なり。【七】神、しとね。【八】體、よる。【九】綺芙蓉、おひとりせる蓮の花、屏、屏は等なしてなす真なり。【一〇】雙魚、一對の鮭魚。【一一】誰看、こゝ以外には何人がみるぞといふなり。【一二】吳味重、めづらしい御膳走をいくつもいくつも。【一三】門開、開は「ませ、てすり。【一四】喜色、うれしげなありさま。【一五】女婿、むすめのむこ。【一六】近、近來の意。【一七】乘龍、後漢の太尉桓焉が女二人孫期・李元禮に嫁す、時の人兩女俱に龍に乗すといへり、龍とは得のすぐれしなたとへていふなり。本文は文法上よりいへば女婿乗龍となりて女が乗することにならざるも、作者の意は女が乗するなにいふにあり。

【題義】李監の宅にて作れる詩なり。詩意を見るに李監女婿を得しとき其の宴に招かれしをりの作とみえたり。作時は天寶の初年ならんといへり。

【詩意】主人、李監はやつぱり王孫の貴さがあつて、富豪の家がらとして他人を待遇せることはその意甚だ濃厚なものである。すなはちお婿どののためには金孔雀を畫いた屏風を開いてたてならべ、芙蓉をぬひとりにしたしとねによらしめる。自分はその御披露の宴にあづかつて種種の御馳走にあうたうへに雙魚のうまきをたべた、またそのうへに色色の珍珠の數數があるのを見るが、ここの宅以外でだがこのやうなものを見ることができやうぞ。この御宅では門のてすりのあたりにもめでたくうれしさうな氣がただようてゐる。それは近來お迎へになつた婿どのが、昔人の謂はゆる乘龍とよ

びしほどの人がらであるからだ。

華館春風起 高城煙霧開。

華館春風起る、高城煙霧開く。

雜花分戶映 嬌燕入簾回。

雜花戸を分つて映じ、嬌燕簾に入りて回る。

一見能傾座 虛懷只愛才。

一見能く座を傾け、虚懷只だ才を愛す。

鹽車雖絆驥 名是漢庭來。

鹽車驥を絆すと雖も、名は是れ漢庭より來れり。

【字解】【一】華館、うつくしきやかた、李宅をさす。【二】高城、洛陽城をいふならん。【三】煙霧開、すつきりはるるをいふ。

【四】雜花、さまざまの花。【五】分戶映、戸ごと戸ごとにつらふ。【六】嬌燕、あいらしきつばめ。【七】入簾回、すだれのなかへはひりてまた外へひきかへす。【八】一見、ただ一度の面會。【九】傾座、一座の賓客の心を自己の方へかたむかしめる。【一〇】虛懷、自己をむなしくする、成程らむこと。【一一】才、人の才節。【一二】鹽車、驥(千里の馬)が鹽をつんだ車を引つづつて失坂をのぼると、ぐづぐづしてかち棒になひながら前へ進むことができぬといふこと、戰國策にみゆ、車の字或は官に作る、鹽官といはば直ちに李をさす、車の字よろしからん。【一三】絆驥、上記の故事、驥に鹽車をひかすは驥の足をなばにてしげるやうなものなり。【一四】名、これは「胡馬大宛名」とある如く千里馬といふ名の義ならん。【一五】漢庭、漢の朝廷、漢代のことをさす。末二句は李監が高き地位を得ざるを惜む。

【詩意】このうつくしいやかたに春風がおこり、洛陽の高い城にも煙や霧がひらけてすつきりはれわたつた。さまざまの花が戸ごと戸ごとにうつろひ、あいらしい燕は簾をのぞいてはまたもどつていく。



主人は「たびその人にあへば、一座のものをしておのが方に心を傾けしむるに足り、自己といふものをなくしてひたすら他人の才能を愛される。かかる人物でありながらまだ高い地位を得られぬのは千里の驥にしは車をひかすやうに、その駿足をなはでしはる如くであるが、千里の驥は千里の驥であつて、その名は漢代以來つたへられ來つてゐるのである。

贈李白

李白に贈る

二年客東都所歷厭機巧

二年東都に客たり、歴る所機巧を厭ふ。

野人對腥羶蔬食常不飽

野人腥羶に對す、蔬食常に飽かず。

豈無青精飯使我顏色好

豈青精の飯の、我が顏色をして好からしむる無からむや。

苦乏大藥資山林跡如掃

苦だ大藥の資に乏し、山林跡掃ふが如し。

李侯金閨彦脫身事幽討

李侯は金閨の彦なり、身を脱して幽討を事とす。

亦有梁宋遊方期拾瑤草

亦た梁宋の遊あり、方に瑤草を拾はむと期す。

【字解】「二年」此の二年といふ数字は方からぬ。詩人が幾年といふは多くかぞへどしてある。かぞへどしなら天寶二載三載と東都に居たことになる。しかるにたとひ中途どこぞへ往つたことがあるとみても杜甫は開元二十九年、天寶元年、二載、三載と

東都に居た。「二年」の二といふ数字は疑問である。【一】東都 洛陽。【二】所歷 經歷する所なり、人事上の經驗をいふ。【三】機巧 たくみな手段を用ふること。【四】野人 自らを謙遜していふ。【五】腥羶 魚や肉のなまぐさき食物。【六】蔬食 菜食をいふ。【七】青精飯 或種の草木の葉煎皮等を煮たる汁にて米をひたし飯とし、さらしては蒸すこと三たび、蒸すことにその汁をかけ青くならしむ、かかる飯を青精飯といふと、蓋し仙家の食なり。【八】苦乏 苦ば「はなはだ」。【九】大藥 貴重薬。【一〇】資 材料をいふ。【一一】跡如掃 如掃とは足跡をたちて印せぬこと、苦乏山林の二句は前後置きかへてみる。【一二】李侯 李白をさす、侯は敬語、君といふがごとし。【一三】金閨 江淹が別賦にみえたる語、金馬門のこと、金馬門は漢の時臣下官を授けらるるの詔を得つ處なり、李白は翰林の供奉官なればかくいふ。【一四】彦 すぐれたる人。【一五】脱身 官界からわけである。【一六】幽討 幽は幽遠の意、討は求むること、幽討とは山林にわけ入り蕪草などをさがすこと。【一七】亦 此の亦は「我がごとく彼も亦」の義。【一八】梁宋 梁は汴州、今の河南省開封府、宋は宋州、今の河南省歸德府南邱縣。【一九】瑤草 玉芝草。

【題義】李白に贈つた詩である。杜甫が李白を見たのは、天寶三載八月李白が長安から逐はれて梁宋の方へ遊びにゆかうとして、洛陽を通過したときである。因つて此詩も天寶三載の作だらうといふのである。

の趣をたづぬるを仕事とせられる。君も亦我と志を同じくするとみえて、これから梁宋の地方へあそんで瑤草を拾ひとらんとまらかまへてをられる。

【餘論】此の時は完結せる篇に非るに似たり。然るに前賢却て之を推賞する者あるは何ぞや。

重題鄭氏東亭 [原注] 在新安界 重ねて鄭氏が東亭に題す

華亭入翠微 秋日亂清暉 華亭翠微に入り、秋日清暉亂る。

崩石欹山樹 清漣曳水衣 崩石山樹欹き、清漣水衣を曳く。

紫鱗衝岸躍 蒼隼護巢歸 紫鱗岸を衝いて躍り、蒼隼巢を護せんとして歸る。

向晚尋征路 殘雲傍馬飛 晚に向つて征路を尋ねれば、殘雲馬に傍ひて飛ぶ。

【字解】(一) 鄭氏 崩馬鄭潛龍なりとの説あり、確ならず。(二) 東亭 其家の東にあるものならん。(三) 新安 河南府新安縣。(四) 華亭 今つくしきちん、東亭をほめていふ。(五) 翠微 山の半腹をいふ、そのあたり翠色かすかによこたはるを以ていふ。(六) 秋日 日は太陽をさす。(七) 清暉 すめるひかり。(八) 崩石 くづれかかつた石。(九) 欹 かたむく、横になる。(一〇) 漣 さざなみ。(一一) 水衣 みづかげ。(一二) 紫鱗 紫色のさかな。(一三) 蒼隼 一ましの羽色のはやぶさ。(一四) 護 巢の香をする。(一五) 征路 たびち 我がかへりち。(一六) 殘雲 ゆふへの雲。(一七) 傍 そよ。

【題義】新安に在る鄭氏の東亭に、再びかきつけたる詩。天寶三載作者洛陽にありしころの作ならんし。

【詩意】うつくしい亭が山の半腹になつてゐて、秋の太陽のすんだひかりがちらちらしてゐる。亭のそばの崩れかかつた石には山の樹が横に傾いてゐるし、池の清きさざなみは泛べるみづ苔をひきつつある。その水にすんでゐる紫色の魚は躍つて岸に衝突し、その樹には隼が巢をみまもるために歸つてくる。自分は晩になつて此處を辭し去らうとしてゆくての路をたづねると、殘りの雲が我がのる馬につきさそうて飛ぶのをみとめる。

陪李北海宴歷下亭 時邑人寒處士輩在坐

李北海に陪して、歴下の亭に宴す。時に邑人寒處士が輩坐に在り

東藩駐皂蓋 北渚凌清河 東藩皂蓋を駐め、北渚清河を凌ぐ。

海右此亭古 濟南名士多 海右此亭古りたり、濟南名士多し。

雲山已發興 玉珮仍當歌 雲山已に興を發す、玉珮仍りて當りて歌ふ。

脩竹不受暑 交流空湧波 脩竹暑を受けず、交流空しく波を湧かす。

蘊眞愜所遇 落日將如何 眞を蘊みて遇ふ所に愜ふ、落日將に如何にせむとする。

貴賤俱物役從公難重過

貴賤俱に物に役せらる、公に従ふ重ねて過り難し。

【字解】(一) 李北海、李邕をいふ、邕は廣陵の人、天寶の初、汝郡・北海の太守となる、六年李林甫に忌まれて殺さる。北海は青州なり。(二) 歷下、今の山東濟南府、歷山の下にあるを以て歷下といふ。(三) 亭、この亭は歷山の臺上にありしといふ。(四) 東藩、青州をさす、東にありて京都のまもりとなるが故に東藩といふ。(五) 註、とどむ。(六) 皂蓋、黒色の車のかさ、太守は之を用ふ。(七) 北橋渡清河、諸説紛紛たり、予は邕が此地に來りしことをいふものとみる。北橋とは北方のなき、北方とは亭よりさしていふ。彼とはしのぎわたつて來たこと、清河は清河をさすとの説あり、李邕がわたり來りし何をさす。(八) 海右、支那の左右は天子南面の位置よりいふ、故に西方を右とす、海右は海西なり、歷下(濟南)は海より西にあり。(九) 濟南、即ち歷下。(一〇) 名士、題注の裴處士が輩、そのとき集まりし人人をさす。(一一) 雲山、雲のある山、亭よりみゆる所のもの。(一二) 發興、興をおこす。(一三) 玉環、玉にてつくられるおびもの、これは酒宴のおあひてをする女の身のかざりなり、玉環というて之を帯びたる女をさす。(一四) 仍、よりて、そのうへにも。(一五) 當歌、當は對當の義、當歌をいふ、宴席にてお客のむかひにすわつてといふこと。(一六) 竹、せのたかき竹。(一七) 不受著、竹葉しげりあへるゆゑ暑氣をうけつねぬ。(一八) 交流、歷山の河下より歷水出で深水と共に鵝山湖に入るといふ、交流は諸水の合流をいふ、これは遺望についていふ。(一九) 空、徒らにといふの類、徒らにとは元來水流あれば暑氣を退くる功あり、今已に竹葉あるを以て水流を待たざるをいふ。(二〇) 蘊興、謝靈運が詩句にみえたる語、眞趣をつつむ、此亭の風景が眞の趣きを蘊有するをいふ。(二一) 能、かなふ、氣にいらる。(二二) 所遇、我がであふところ、蘊興と所遇とは同一事なり。(二三) 落日、太陽の没せんとするころ。(二四) 將如何、ことを去るを惜むなり。(二五) 貴賤、貴は李邕をいひ、賤は自己をいふ。(二六) 物役、事物のために使役せらる。(二七) 從公、公とは李をさす。

【題義】北海太守李邕のお相伴をして歷下の亭に宴せしことをのぶ。天寶四載の作ならんといふ。

【詩意】李邕公は東藩ともいふべき青州にその黒き車蓋をとどめてをられるのであるが北藩を歴て清河をわたつてこの歷下へ來られた。歷下の此の亭は海西に於ては古く有名なものであり、またこの濟南の地方には今日ここにみる如く名士が多く居らるのである。この亭で雲山をながめるだけでもはや興をおこしたのであるが、その上にまた玉環の佳人が向ひにすわつて歌をうたつてくれる。かたへの竹林は高くしげつてをるので暑氣などはうけつせず、合流しゆく諸水もいたづらに波をわかしてゐる。この眞趣をもつてゐる境地にであうた事は自分の大に氣にいつた所であるが、日もくれかかつて立ち去らねばならぬ、どうしたらよいだらう。さて人は貴きも賤きもそれぞれ事物に使役せられ閑暇の少ないものであるから、李公のお伴をしてここに二度經過することはむつかしいことである。

同李太守登歷下古城員外新亭

李太守が歷下の古城の員外の新亭に登るに同す

新亭結構罷隱見清湖陰、  
 跡籍臺觀舊氣冥海嶽深、  
 圓荷想自昔遺堞感至今、  
 芳宴此時具哀絲千古心。

新亭結構罷む、隱見す清湖の陰。  
 跡は臺觀の舊なるに籍る、氣冥くして海嶽深し。  
 圓荷昔よりするを想ふ、遺堞今に至るに感ず。  
 芳宴此の時具る、哀絲千古の心。

主稱壽尊客筵秩宴北林。主は稱して尊客に壽す、筵秩北林に宴す。  
不阻蓬華興得兼梁甫吟。蓬華の興を阻てず、梁甫の吟を兼ぬることを得たり。

【字解】(一) 同。同すとは他人の時に和して作るをいふ。(二) 李太守。前時にみえたる北海太守李邕なり。(三) 歷下古城。歷下古城とは今の濟南府歷城縣治の西にありし者といふ、員外とは翼部員外郎李之芳をさす、新亭とは前時の歷下の亭とほちがひ李之芳が新につくりし亭をさす、李邕の詩の序に「亭對鵝湖」とあれば新亭は鵝湖に近き所にありし也、鵝湖は鵝山湖にして今の歷城縣北二十里にあり。(四) 結構。くみたてること。(五) 隱見。氣象の明晦によつてみえたりかくれたりする。(六) 清湖。鵝山湖をさす。(七) 陰。水の南を陰といふ、亭は湖の南にあるなり。(八) 跡。亭の地址をいふ。(九) 籍。籍と通ず、よる。(十) 臺觀。高地にある道觀のてら。(十一) 氣冥。亭のあたりを往来する雲煙等の氣くらし。(十二) 海嶽深。東海、東嶽、深とは深遠なるをいふ。(十三) 開荷。まろきはちす葉、湖中の物なり。(十四) 遺珠。のこれる城のひめがき。(十五) 芳宴。芳とは酒肉芬芳なるをいふ、宴は宴事をいふ。(十六) 具。具備する、不足する所なきなり。(十七) 哀絲。哀しき琴のいと。(十八) 千古心。漢古の心をうかすをいふ。(十九) 主稱。主は主人、李之芳をさす、稱は口にてとなへること。(二十) 壽。その人のために萬年をことほぐ。(二十一) 登客。李邕をさす。(二十二) 筵秩。筵席の秩序あること。(二十三) 宴。宴飲をなすをいふ。(二十四) 北林。北の林、亭は湖の南に在れば北林は湖に面する位置なり。(二十五) 不阻。阻は阻隔すること、不阻とは近づくるをいふ。(二十六) 蓬華興。蓬戸幕門の興なり、蓬戸はよぎにてあめ戸、幕門はいばら、竹をもつて織りたる門、いぶせきふせやのこと、蓬華興とは、作者自家の興をいふ。(二十七) 得兼。兼とは一事えなせるがうへに更に他事をなすをいふ。(二十八) 梁甫吟。諸葛亮(孔明)が受命せる詩篇、其辭に曰く、步出齊東門、遙望海陵里、里中有三墳、營壘正相似、問是誰家墓、田橫古冶子、力能排南山、文能絕地紀、一朝被讒言、二桃殺三士、誰能爲此謀、相國齊晏子、と。梁甫は泰山の下の小山の名、孔明山東に耕して此詩を好みて吟せしといふ、其意晏子の險謀を惡むに在るがごとし、杜甫の詩中に屢「梁甫吟」を爲すといふこと見ゆ、故に此の全篇を錄す。杜甫が今此に梁甫吟といへるは自己の作たる此の詩篇をさすものならん。

【題義】李之芳が造つた歷下の古城の新亭にのぼつて李邕が詩を作つた。此の詩はそれに和したものである。

【詩意】新しい亭がこのたびできあがつて、それが清らかな鵝山湖の南にみえかくれしてゐる。亭の設けられた場所は、もとからあつた臺觀のあとへそつくりまうけたものであり、そのあたりには雲氣がくらくして遠く海嶽がよこたはつてゐる。水中の荷葉を見ては、これも昔からはえてゐるだらうとおもひ、ひめがきののこつてゐるのを見ては、よくも今日までこれがのこつてゐるよと感ずるのである。このとき御馳走が十分に設けられ、席上に奏せらるる哀しき琴音は千古の情をそる。主人たる李之芳君は辭をのべて尊客たる李邕公に萬年の壽を獻せられ、賓客みな秩序を亂ることなく北林に於て酒を飲む。御親切にも主人は自分の如き貧家の者の興をも阻隔せられざりしたために、宴に陪し兼ねて拙詠を吟することさへできるのである。

【附錄】杜集に附載せらるる李邕の原作は左の如し。

登歷下古城員外孫新亭亭對鵝湖時李之芳

自尙書郎出齊州製此亭

李 邕  
吾宗固神秀、體物寫謀長、形制開古迹、曾冰延樂方、太山雄地理、巨壑眇雲莊、

同李太守登歷下古城員外新亭

高輿泊傾促、永懷清典常、含弘知四大、出入見三光、負郭喜稔稻、安時歌吉祥、

暫如臨邑至嵯山湖亭奉懷李員外率爾成興

暫如臨邑（一）至嵯山湖亭（二）奉懷李員外（三）率爾成興（四）  
暫如臨邑に如かんとして、嵯山の湖亭に至り、李員外を懷ひ奉り、率爾興

野亭逼湖水歇馬高林間

野亭湖水に逼る、馬を歇む高林の間

鼉吼風奔浪魚跳日映山

鼉吼えて風浪を奔らせ、魚跳つて日山に映す

暫遊阻詞伯却望懷青關

暫遊詞伯に阻たる、却望青關を懷ふ

靄靄生雲霧惟應促駕還

靄靄として雲霧生ず、惟應に駕を促して還るなるべし

【字解】（一）如、ゆく。（二）臨邑、前にみゆ、弟頭が主簿として在る地。（三）嵯山、即ち嵯山湖。（四）湖亭、即ち前詩の新亭。

【字解】（一）李員外、即ち李之芳。（二）率爾、ふと。（三）野亭、田野にある亭。（四）逼、ちかきなり。（五）湖木、嵯山湖の水。（六）歇、やすませる。（七）鼉、よるひがめ。（八）日、日光、これは波間の日光とみえたり。（九）詞伯、伯は朝なり、詞伯とは文辭の世界に覇を稱ふるものをいふ、李之芳をさす。（一〇）却望、ひとあしさがつてながめる。（一一）青關、青州の關、李之芳が往きし地、太守李邑にても遙かにゆきしならん。（一二）靄靄、もやもや。（一三）惟、唯と同じ。（一四）促、促駕、いそぎ車に馬をつないでもどりくる。

【題義】弟の任地たる臨邑へ行かうとして嵯山湖の新亭まで来て、李之芳員外に別を告げやうとしたが、員外は青州の方へ往つて不在である。（その事は詩中にみゆ）因つて員外をおもうてふと詩興がわいた。天寶四載の作ならんといふ。

【詩意】嵯山湖の水のまじかく野亭がある、そのそばの高い林に自分は馬をやすませる。見るとよろひがめが吼えて風が浪を狂奔させ、魚が水面に跳つて日光が山にうつろうてゐる。自分はこれからちよつと臨邑へでかけるので文豪たる君とかげはなれんとする。（それであひに來たのだが君は不在であるので）一歩退き身をかはして君の居らるる青州の關の方をながめておもふ。その方向に今もやもやと雲霧がおこつてきた。これで見ると君は我と情意暗合してすみやかに車馬の用意をさせておかへりになるのであるであらうか。

【餘論】末句の解、余は推量の辭とみる。仇氏の説は李の早還を望むとせり。又蔡夢弼は之を作者にかけ、自分は臨邑などへでかけずはやくかへるべきものなり」ととけり。併記して疑を存す。

贈李白

李白に贈る

秋來相顧尚飄蓬

秋來相顧れば尚ほ飄蓬

未就丹砂愧葛洪

未だ丹砂に就かず葛洪に愧づ

【字解】相顧、おたがひに自己の境況いかにとふりかへつてみる。（二）飄蓬、風にひるがへるよもぎの如く漂泊生活をなす。（三）葛、

暫如臨邑至嵯山湖亭奉懷李員外率爾成興 贈李白

痛飲狂歌空度日、痛飲狂歌空しく日を度る。

飛揚跋扈爲誰雄、飛揚跋扈誰が爲めにか雄なる。

丹砂の生ずる地に就くをいふ。【一】丹砂、葛洪、晋の葛洪字は稚川、年

老いて交趾に丹砂を出だすとき、

【二】痛飲、鳥の飛揚する如くなるをいふ。【三】跋扈、跋はふみはだかること、扈は魚をとるための竹籠なり、小魚は籠にさへぎ

られて捕へらる、大魚はそれをなとりこゆ、魚のあはれるさまを跋扈といふ、この飛揚跋扈が自己をもふくむことは「社位宅守護」

時に飛揚跋扈などあるによりて知らるべし。【四】爲誰雄、しかく雄雄しくふるまふはだれのためぞ、だれかに其の器材をみと

められ用ひらるめあてでもあることか（さるめあてあるにはあらず、いたづらにかくするといふなり）

【題義】李白に贈れる詩なり。天寶四載の秋の作ならんといへり。

【詩意】秋からかけてお互に身のうへをながめてみるに、やつぱりこれまでどほりいまだに風にとぶ

よもぎのやうな境遇に在つて、丹砂の産する地方に就くこともできずにあるのは、葛洪に對してはづ

かしい次第である。さうして毎日ただ痛飲し狂歌しながら時間をすごしてゐるが、そんなに元氣であ

ばれまはつてゐるのは何人のためにするのであるか。（だれのためといふこともないのである。）

【餘論】此詩諸家の解一ならず、或は四句共に李白についていふとし、或は前二句は自己に就いていひ、

後二句は李白についていふとし、其他首肯し難き說種種あり。余は此詩は作者が李白と共に居りしと

き之に贈れるものとなす、従つて四句共に自己と李白兩人共同のさまをのべたるものと解するなり。

與李十二白同尋范十隱居 李十二白と同じく范十が隱居を尋ぬ

李侯有佳句、往往似陰鏗、李侯佳句有り、往往陰鏗に似たり。

余亦東蒙客、憐君如弟兄、余も亦た東蒙の客、君を憐むこと弟兄の如し。

醉眠秋共被、攜手日同行、醉眠秋被を共にし、手を攜へて日に同行す。

更想幽期處、還尋北郭生、更に想ふ幽期の處、還た尋ぬ北郭生。

入門高興發、侍立小童清、門に入れば高興發す、侍立小童清し。

落景聞寒杵、屯雲對古城、落景に寒杵を聞く、屯雲に古城に對す。

向來吟橘頌、誰與討尊羹、向來橘頌を吟す、誰か與に尊羹を討めむ。

不願論簪笏、悠悠滄海情、簪笏を論ずるを願はず、悠悠たり滄海の情。

【字解】【一】十二、十、姓の下の数字は日に説明せしごとく從兄弟間の生れた順番を示す、李白は十二番に生まれ、范は十番めに生まれし人なり、范氏の名は詳ならず。【二】隱居、かくれが。【三】李侯、李君に同じ。【四】陰鏗、陳時代の文學者、五言詩を善くす。【五】東蒙客、東蒙とは東方なる蒙山といふこと、蒙山は山東沂州府蒙陰縣にあり、兗州府の東にあたる、作者は兗州地方に寓する故に名山をあげて東蒙の客といふ。【六】君、李白をさす。【七】被、かいまき。【八】幽期、この期は隱居の期の如く心に期待する義なるべし、従て幽期は幽心の如き義をしつ、こゝは幽靜の心をもつ人をいふ。【九】還、また、俗語なり。【一〇】

北郭生 黃鶴の注に、范は任城(山東濟寧州治)の北郭に居るといへども、李白の集に「尋魯城北范居士、失道落君耳中」詩あるに據れば魯城(兗州)の北郭なるべし、北郭生とは范をさす。【一】門 范が家の門。【二】清 きれいなこと。【三】帶 帶、夕日のひかり。【四】寒 寒、まむげな袴のおと、袴は衣をうつに用ふ。【五】屯 屯、あつまれること。【六】古城 魯城をさす。【七】向來 これまで。【八】橋頭 楚の屈原の作れる賦なり、橋の性正直にして地を易ふるも移らざることをほむ、本性を狂げざる點にあやかりて之を吟するならん。【九】誰 誰、誰ともしには非ず、與は爲のごとし。「ために」と訓ずべし、誰か我がためにの義、或は「誰與」を「誰欲」に作る、惟欲は唯欲なり。【一〇】計 もとむ。【一一】尋 尋、晉の張翰(字季鷹)が故事、張翰は吳の人、官に仕へしが時運の非なるを見、秋風の起るに樂じ、故郷の菘菜・蓴魚鱸を思ふといひて歸り去れり。尋與はじゆんさいのあつもの、之をしもむといふは仕宦に意なきをいふ。【一二】暫 暫、かんざし(冠をとめるに用ふ)、しやく、二者は官服をきる者の用ふる所なり。【一三】悠悠 ばるか、いつまでもつづくさま。【一四】滄海 ひろさうみ、滄海情とは海に流れさらんと欲する情なり。

【題義】李白といつしよに范といふ人のかくれがをたづねし詩なり。天寶四載頃の作ならんといふ。【詩意】わが李君はよい詩句をつくる、それは往往昔の陰鏗に似てゐる。自分は君と同様、この山東の蒙山近地の客となつてゐるが、君を愛することは兄弟のやうであつて、酔うて眠るときは、秋一枚のかいまきをいつしよにきて寝ね、手をたづさへて毎日同じくあるいてゐる。君とふたりではなは足らず、更に幽靜の心をもつてゐる者のある處をとかんがへて、また北郭の范生をたづねてみた。范が門にはひるとおもしろい興趣がわきおこる、そばに立つてゐる童兒さへいと清らかにうつくしい。ここでゆつくりはなしこんで、はや日の落ちかかるころ寒さうな砧うつ杵の音をきき、雲のくらくあつまり來るとき古城に對してゐる。これまで自分たちは屈原の如く橋頭を吟じて、おのれの本性の枉

げられぬのを費んできたが、だれが自分たちのために菘菜のあつものを求めてくれるか。「惟欲」に従へば「菘菜のあつものを求めやうとおもふばつかりだ。」役人くさい、管だの笏だのの事を論ずることは願はない、ただ滄海に流れ去らんとおもふところがいつまでもつづくのである。

鄭駙馬宅宴洞中

鄭駙馬が宅にて洞中に宴す

主家陰洞細煙霧  
留客夏簾青琅玕  
春酒盃濃琥珀薄  
冰漿椀碧瑪瑙寒  
悞疑茅堂過江麓  
已入風磴看雲端  
自是秦樓壓鄭谷  
時聞雜佩聲珊珊

主家の陰洞煙霧細やかなり。  
客を留むる夏簾は青琅玕。  
春酒盃濃にして琥珀薄く、  
冰漿椀碧にして瑪瑙寒し。  
悞つて疑ふ茅堂江麓に過ぐるかと。  
已に風磴に入れば雲端に露る。  
自らは是れ秦樓鄭谷を壓す。  
時に聞く雜佩の聲珊珊たるを。

鄭駙馬宅宴洞中

四三

【字解】一 鄭駙馬 駙馬都尉 鄭滑をいふ、滑は杜市の親友鄭度が姓にあたり、玄宗と皇甫淑妃との間に生れし臨晉公主といふ姫宮を娶りたり。滑の父は鄭高約、母は睿宗の姫宮代國長公主(名は華、字は華純)なり。二 宅、洞 諸家の注、この宅及洞は長安の神禾原にある蓮花洞に在りしものなりといへり。果して然らば、此詩は杜甫天寶五載長安に歸りし以後の作にして、開年の次よりいはず、退けて更に後に在らしむべきものなり。若し又然らずして前の「重題鄭氏東亭」詩と

同じく新安に在る鄒潛曜の宅をますならば、此處に置くも妨げなし。その場合には天寶四載夏洛陽を去らざる時の作と見なすべきなり。【一】洞中。夏時あつきが故洞穴の中に安すこと少ゆ。【二】主家。公主の家。【三】陰洞。日光のあたらない洞穴。【四】留客。客とは自己をます。【五】樽。たかむしろ。【六】青琅玕。青きくだだま、これはむしろを刷みたる竹の色をたとへていふ。【七】春酒。春できの酒。【八】酒。酒のこきをいふ。【九】琥珀。琥珀は即ち玉の材料なり。【一〇】冰漿。氷をいれた飲料。【一一】珊瑚。珊瑚は樹の材料。【一二】快。眼に同じ。【一三】過江龍。江龍とは江邊の山龍をいふ。【一四】風磴。磴は石段の路、風磴とは磴高くして風をうくるをいふ、けだし洞を出て一層高き丘上に向ふなるべし。【一五】土ふる。灰の如く細き土粉が風にあふられ雨の如くふりそそぐなり。【一六】雲。高き處をます。【一七】自是。もとより。【一八】秦樓。秦の穆公女あり弄玉といふ、弄玉、鐘の名人蕭史を愛す、穆公之を妻はす、二人日日樓上に於て蕭を吹き風の鳴くがごとし、風來りてその屋に止まる、一旦夫妻皆風に隨つて飛び去る。蕭樓とは弄玉のすむ樓をいふ、以て鄒晉公主の居樓に比す。【一九】麗。高くそびえ下方を麗する如くなるをいふ。【二〇】都谷。漢の都樓、字は子真、長安の谷口に耕す、賢を以て開け、以て鄒潛曜のこの洞宅に比す。【二一】雜佩。さまざまな佩びもの、婦人の衣裳につける飾り、これは公主の佩びたまふものをいふ。【二二】珊瑚。玉などの鳴るおと。

【題義】 贈馬都尉鄒潛曜が宅にて、洞穴の中で宴せしことをのぶ。

【詩意】 公主のお宅のすすしい洞穴には煙や霧が細かに飛んで夏知らずであるが主人はそこへ賓客をひきとむるため青琅玕のやうな竹むしろをしいてくれる。薄い琥珀の盃に濃い春酒がもられ、寒さうな色した珊瑚の碗につめたい飲料が君にそそがれる。洞邊の茅堂を過ればあだかも江邊の山龍をとほつてゐるのではないかと怪まれ、洞外更に高處に攀ち、涼風をうくる石段の路へかかれれば雲のゐる邊に土粉あめふる。原來ここには鄒谷を麗するばかりに秦樓が高くそびえてゐるのであつて、時時珊瑚

として仙女の雜佩の音が頭上にきこゆるのである。(人間の凡境とちがふのである。)

冬日有懷李白

冬日李白を懷ふ有り

寂寞書齋裏終朝獨爾思。

寂寞たり書齋の裏、終朝獨爾を思ふ。

更尋嘉樹傳不忘角弓詩。

更に嘉樹の傳を尋ぬ、忘れず角弓の詩。

短褐風霜入還丹日月遲。

短褐風霜入る、還丹日月遅し。

未因乘興去空有鹿門期。

未だ乘興に因つて去らず、空しく鹿門の期あり。

【字解】 【一】終朝。朝ちう。【二】爾。なんぢ、李白をます。【三】尋。さがしてよむ。【四】嘉樹傳。角弓詩。「左傳」(昭公二年)にみえたる故事を用ふ。魯の昭公二年に晉の韓宣子使ひに来る、昭公之を享應せられしに韓宣子は「詩經」小雅の角弓詩をうたひたり、角弓の詩は兄弟仲よくすべきことをいへり。以て魯晉兩國相親むべしとの意をほめかす。又た魯の手武子が家に宣す、武子が家に嘉樹(うつくしい樹木)あり、宣子之を譽む、武子因て此の樹を大切にそだてて君が角弓の詩をうたひし志を忘るることなからんといへり。此詩にては宣子・武子の交情をかりて自己と李白との交情をあらはす。【五】短褐。褐は粗木な毛織りもの。【六】風霜入。破れきもので寒き身に入り来るをいふ。【七】還丹。九轉還丹なり、いくたびとなくぐるまはしてはじめてできる靈藥なり。【八】日月遲。遅ば久なり、丹がでるまでに時間が久しくかかる、容易にできざるをいふ。【九】乘興去。乘興とは晉の王子猷が戴安道を雪夜にたづねし故事、王は戴を訪ひて門前までゆきまたひきかへしたり、そのとき乘興而來、興盡而返、何處見戴、といへり。此詩にては興に乘じて李白の居る江南の方へゆくをいふ。【一〇】空有。空とは未だ果さざるをいふ。【一一】



【題義】 鹿門は山の名、湖北襄陽府にあり、後漢の時龐參公といへる賢人妻子を捕へてその山に登り藥を採つて返らざりしといふ、  
期は期約なり、ここは作者李白と共に山に隠れんとするをいふ。

【詩意】 冬の日に李白を懐ふことありて作る。天寶四載の冬、杜甫未だ洛陽を去らず、李白は江南に遊ぶ、これ別後の作なり。

【字解】 白也。白は李白の名、名をよびかけたるは親しむの意あり。【一】敵 匹敵するもの。【二】飄然 凡俗を超越し拘束せられぬまをいふ。【三】思 詩の思想。【四】不羣 羣は羣衆、世間なみの衆人、不羣とは羣に超ゆるをいふ。【五】清新 清らかにあたらし、まつぱりとして陳腐でない。【六】參軍 北周の庾信、信が官位は驍騎大將軍・開府儀同三司なり。【七】鮑參軍 鮑參軍 劉宋の鮑照、照は臨海王の前軍參軍となる。【八】江東 清水の北、但し北の字拘泥すべからず、清水の附近をさしていふ、清水是長安の北に在り、これは作者の居る處。【九】江南 江南と同じ、揚子江の東南、これは李白の居る地方をいふ。【一〇】細 一まかに、くはしく。【一一】論文 文學上の製作物について語りあふ。

春日憶李白

春日李白を憶ふ

白也詩無敵、飄然思不羣。  
白や詩敵なし、飄然として思羣ならず。

清新庾開府、俊逸鮑參軍。  
清新は庾開府、俊逸は鮑參軍。

渭北春天樹、江東日暮雲。  
渭北春天の樹、江東日暮の雲。

何時一樽酒、重與細論文。

何時の時か一樽の酒、重ねて興に細かに文を論せし。

【題義】 春の日に李白をおもて作れる詩なり。これは天寶五載の春作者已に長安に歸りて後の作、李白は時に江南に在り。

【詩意】 李白よ、君はその思想が自由不羈で凡俗を超越してゐて、詩に於てはだれも匹敵するものがない。君の詩風を古人と比較していふと、清新なること北周の庾信の如く、俊逸なること宋の鮑照の如くである。今僕は渭北の春天の樹をながめ、君は江東の日暮の雲に嘯き、南北相隔つてゐるが、いつまた一樽の酒を酌みながら、以前のやうにふたたび君とくはしく作物について語りあふことができたらうか。

送孔巢父謝病歸游江東兼呈李白

孔巢父が病と謝して歸り、江東に遊ぶを送り、兼ねて李白に呈す

巢父掉頭不肯住

東將入海隨煙霧

詩卷長留天地間

釣竿欲拂珊瑚樹

深山大澤龍蛇遠

春寒野陰風景暮

蓬萊織女回雲車

指點虛無引歸路

自是君身有仙骨

世人那得知其故

惜君只欲苦死留

【字解】孔巢父、巢父、冀州の人、韓幹、李白、裴政、張叔明、陶翰と山東の徂徠山に隱居す、時にこれを竹溪の六逸と號す。

李白の友なり。謝病歸、病と謝して歸るとは「たがひ出で仕へ、病に託して官をやめて故郷にかへるなり。」

【一】江東、江南のこと、江は揚子江。呈李白、呈とはまじあけるといふこと。之によれば當時李白が江南に在るときなり。

【二】掉頭、かぶりかぶる、人の言ふことをきかぬまなり。【三】住、一處に住止するをいふ。【四】拂、之に觸ることなをいふ。【五】珊瑚樹、海底に生ずるもの。【六】大澤龍蛇、

富貴何如草頭露

蔡侯靜者意有餘

清夜置酒臨前除

罷琴惆悵月照席

幾歲寄我空中書

南尋禹穴見李白

道甫問訊今何如

「左傳」襄公二十一年に深山大澤、實在龍蛇とあり、こゝは龍蛇を以て巢父に比す。【一】草車、此の一句は別れんとするときの氣象をのぞかす。【二】蓬萊、海中の仙島なり。【三】織女、織女は天河の河にあつて雲錦を織るものなり、今早に仙女の意に用ふ。【四】回雲車、回とは先方より巢父が方へとひきめぐらすこと、雲車は五色の雲

富貴は草頭の露に何如。

蔡侯は靜者意餘り有り。

清夜酒を置きて前除に臨む。

琴を罷め惆悵すれば月席を照す。

幾歲か我に寄せむ空中の書。

南禹穴を尋ねて李白を見れば、道へ甫問訊す今何如と。

たなびく草。【一】指點、ゆびさししめす。【二】虛無、煙霧靜とたなびく海の奥をいふ。【三】引、みちびくこと。【四】歸路、巢父がかへるべき路。【五】自是、もとより。【六】那、なんぞ。【七】其故、留らぬわけ。【八】惜君、惜は愛惜。【九】苦死、義力をだしてといふこと。【一〇】留、ひきとむる。【一一】富貴、此一句は巢父が心中なり、巢父の語とみなして可なり。【一二】何如、比較の辭なり、富貴は草頭の露とどうだ、どうだとはそれにも及ばぬをいふ。【一三】草頭露、はかなく消え易きなるものをいふ。【一四】意有餘、別を惜むの意盡きざるをいふ。【一五】前除、除は階下の土えん、前とは南面をいふ。【一六】罷、琴は席上之を彈するものあるなり。【一七】惆悵、いたたまさま。【一八】空中書、雲中の書、天邊の書といふの類、非常に遠方ゆゑみかくいふ。書はてがみのこと。【一九】禹穴、勳江省和興府の會稽山にあり、禹の葬處、これに李白の客遊したる地をあぐ。【二〇】

道いへ、命令の辭【三〇】孤 たづれる。【七〇】何如 李白の近況如何。

【題義】孔巢父が病氣に託して官をやめてかへり、これから江南の方へでかけるのを送り、同時に李白におくるために此詩を作つた。蓋し天寶五載春、作者已に長安にかへりて以後の作。

【詩意】一應ひきとめてはみたが、このたび孔巢父は、かぶりをふつてどうしてもとどまらうとはせず、東の方海中に入つて煙霧のあとを追ひ神仙でもたづねやうとする。彼はその名作を載せた詩巻をば、永久に天地の間にのこし、その身は釣竿を弄んで海底の珊瑚樹を拂はうとおもつてゐる。巢父がこれから去るは、龍蛇が遠く深山大澤へ逃かんとする如くである。彼が行を送らんとすれば、春寒く野もくもり、あたりのけしき暮れかかつてゐる。このとき蓬萊島の仙女が五雲の車をもつてこちらへ迎へに来て、海上虚無のあたりをさして君がゆく手を案内する。原來君がからだには仙人の骨があるのである。世間の凡人はどうして君が人世富貴の境にとどまらぬわけを知ることができやう。凡人の心ではただあくまで君をひきとめやうとおもふが、君は富貴は草のうへの露よりはかないものだとかんがへてゐる。蔡君は沈靜の人で君を惜むの意極らず、別宴を開き、清夜に乗じ南階に酒を置く、坐上彈琴罷みてうらめしくも月光の席を照らすに對す。君これより去らば幾歳をへて我に天涯の書を送るや。君もし南の方禹穴の迹をたづね李白に面會することあらば、このわたしが「おまへは今どうしてゐるか」と問うたといひつたへてもらひたい。

今夕行

今夕行

今夕何夕歳云徂。

今夕何の夕ぞ歳云に徂く。

更長燭明不可孤。

更長く燭明かにして孤なる可からず。

咸陽客舍一事無。

咸陽の客舎一事無し。

相與博塞爲歡娛。

相與に博塞して歡娛を爲す。

馮陵大叫呼五白。

馮陵大叫して五白を呼ぶ。

租跳不肯成臯盧。

租跳肯て臯盧を成さず。

英雄有時亦如此。

英雄時有つてか亦た此の如し。

邂逅豈即非良圖。

邂逅豈即ち良圖にあらずや。

君莫笑劉毅從來

君笑ふこと莫れ劉毅從來布衣の願。

布衣願。

家無儋石輸百萬。

家に儋石なきも百萬を輸す。

とないふ。その名稱が鼻なり、鼻がでるときは倍の勝ちとするなり。是は古代の六博の法に於ける名なり。盧の方は五木(さいころ五

【字解】(一)今夕 詩中の首の二字を取りて題となす。(二)行 行、吟といふが如し。(三)歳云 徂 大晦日をいふ。(四)更長 夜ふくるをいふ。おほみそかには夜あかしたるなり。(五)不可孤 孤は獨りなること、不可孤とは一人に

てはならぬといふなり。(六)咸陽 關 關名、長安と渭水を隔てて水の北にあり。(七)博塞 塞はさいころ、博塞とはさいころにてばくちをすること。(八)馮陵 意氣凌揚のさま。(九)五白、臯盧 雙解の「租跳の六博(こま六箇を用ひて行ふ遊戯)のべし句に、成り臯盧を呼ぶ五白二粒とあり、注に、倍勝爲す半、五白博也とあるによれば、五白とは、さいころのめが五つ白くであることなり。

今夕行

簡を用ひて行ふに於けるでめの名なり。程大昌の演繁露によれば、さいころ五箇あり、各二面あり、一面は黒くぬり数を畫き、他面は白くぬり数を畫く、五箇のさいころを投じて五面皆黒なれば之を盧と名づけ最高のでめとす。四黒一白を雉と名け、これは盧の次等なり、二白三黒を雉と名く、あしきでめなり、云云といへり。「晉書」の劉毅傳に見えたる劉毅劉裕の博をなせし五木の法なり。杜甫は六博と五木とに於ける名稱を併用せるに似たり。【一〇】祖暅 かたはだぬぎ、はだし、こればくちにならぬすがた。【一一】英雄 草の秀づるものを英といひ、獸の特出するものを雄といふ。かりて人のすぐれたるものをいふ、即ち下文の劉毅の輩をさし、暗に自己を以て之に比す。【一二】邂逅 偶然人とであふこと。【一三】良圖 よい分別、工夫。【一四】劉毅 晉代の人、殷東堂に於て博を誦し、數百萬錢の勝負をなすとき雉を得て大に喜ぶ、曰く盧する能はざるに非ず、此を事とせざるのみと、劉裕之をにくみ、ややしばらく五木を手にもみて之を擲つ、四子俱に黒くして一子躍りて未だ定まらず、裕座を屬まし之を喝すれば即ち盧と成る。【一五】布衣 孤人してゐること。【一六】借石 借は債、かめのこと、二斛を受くといふ、石とは斗・石の石、米のわづかな分量をいふ。【一七】蟻 ばくちにまけること。【一八】百萬 百萬錢。

【題義】 今夕といふことについてつくられるうた。此時は作者天寶五載長安に歸りて以後の作、五載の歲末にあるべし。詩句によれば咸陽に在りて作る。

【詩意】 今夕はいかなる夕ぞ、おほみそかて今夜かぎり一年がすぎさる時だ。蠟燭をかんかんあかるくして夜ふけまで起きてゐるのだがこんなときどうして一人でゐられやう。この咸陽のやどやでなんにもすることがないので人人よりあうてさいころでばくちをしてたのしみをやる。『みなみな大元氣で大聲を出して五百だぞと呼はつたりし、はだぬぎ・はだしになつてまで身をいれてやつてゐるが、なかなか鼻だの盧だのといふよいめはでてこぬ。英雄と稱せらるるものでも時と志を得なければ、ば

くちをしてひまをつおすぐらゐることである。我がここで偶然よりあうてこんなことをして歳送りをするのも、よいふんべつではあるまいか。』諸君笑ふことなかれ、彼の劉毅の平生浪人としての願ひは家には一斗一石の米さへなくても、百萬錢のばくちにまけて平氣であつたことではないか。(自分の今もそんなもんだとの意)

贈特進汝陽王二十韻

特進汝陽王に贈る二十韻

特進羣公表 天人夙德升

特進は羣公の表、天人夙德升る。

霜蹄千里駿 風翻九霄鳴

霜蹄千里の駿、風翻九霄の鳴。

服禮求毫髮 惟忠忘寢興

禮に服して毫髮を求む、惟れ忠にして寢興を忘る。

聖情常有眷 朝退若無憑

聖情常に眷ることあり、朝より退けば憑る無きが若し。

仙醴來浮蟻 奇毛或賜鷹

仙醴浮蟻來る、奇毛或は鷹を賜ふ。

清關塵不雜 中使日相乘

清關塵雜ならず、中使日に相乗す。

晚節嬉遊簡 平居孝義稱

晚節嬉遊簡なり、平居孝義稱せらる。

自多親棣萼。誰敢問山陵。  
 學業醇儒富。辭華哲匠能。  
 筆飛鸞鸞立。章罷鳳鸞騰。  
 精理通談笑。忘形向友朋。  
 寸長堪繾綣。一諾豈驕矜。  
 已忝歸曹植。何如對李膺。  
 招要恩屢至。崇重力難勝。  
 披霧初歡夕。高秋爽氣澄。  
 樽疊臨極浦。鳧雁宿張燈。  
 花月窮遊宴。炎天避鬱蒸。  
 硯寒金井水。簷動玉壺冰。  
 瓢飲惟三徑。巖棲在百層。  
 膠持蠶測海。況挹酒如澠。

自ら多とす棣萼に親みしを、誰か敢て山陵を問はむ。  
 學業醇儒富み、辭華哲匠の能あり。  
 筆飛べば鸞鸞立し、章罷れば鳳鸞騰す。  
 精理談笑に通ず、形を忘れて友朋に向ふ。  
 寸長繾綣に堪へたり、一諾豈に驕矜せむや。  
 已に曹植に歸するを忝くす、何如ぞ李膺に對せむ。  
 招要恩屢に至る、崇重力難勝へ難し。  
 霧を披く初歡の夕、高秋爽氣澄めり。  
 樽疊極浦に臨む、鳧雁張燈に宿す。  
 花月遊宴を窮め、炎天鬱蒸を避く。  
 硯には寒し金井の水、簷には動く玉壺の氷。  
 瓢飲惟だ三徑、巖棲百層に在り。  
 膠で持す蠶の海を測るを、況や挹む酒の澠の如くなるを。

鴻寶寧全秘。丹梯庶可凌。  
 淮王門有客。終不愧孫登。

鴻寶寧ぞ全く秘せむ、丹梯庶くは凌ぐ可けむ。  
 淮王門に客有り、終に孫登に愧ぢず。

【字解】(一) 特進 文官の散階正二品を特進といふ。(二) 汝陽王 李暹なり。睿宗と肅明皇后との間に李王暹(初名成器、開元二十九年十一月薨、年六十三)あり、暹の子が暹なり、暹は蓋し天寶三載に特進を加へられ、而して九載に卒せり。(三) 特進 李暹其人を言す。(四) 軍公 多くの王公。(五) 表 儀表、めじるしなるをいふ。(六) 天人 天上界の人、暹は皇族なるゆゑかくいふ。(七) 夙 夙は早なり、夙暹とは少くして早くすでにできあがりたる暹をいふ。(八) 升 軍公の上ののぼるをいふ。(九) 雲梯 雲をふむびつめ、馬にたとふ。(一〇) 風扇 風にうつつたれば、扇にたとふ。(一一) 九重 九重のそら。(一二) 巖 おほとり。(一三) 服 服とは身につけること、従ふをいふ。(一四) 志 志とは愛の十分の一、共にすこしばかりの意をいふ。(一五) 惟忠 惟はへりみる、めをかけて愛する。(一六) 朝退 朝廷よりさがる。(一七) 若無 天子の側よりみる説と汝陽王の側よりみる説とあり、前説によれば天子がたよりなしとせらるるとみる。後説によればたのみ所がない、貴位を挨んで威張つたりせむこととみる。(一八) 仙體 仙は飾りの體、體は甘酒、玉室よりくださる甘酒を仙體といへり、漢の世に楚の元王が申公、穆生といへる學者を敬禮し、體を設けたりとの故事あり。(一九) 浮蟻 酒の名、けだし泡立てるありまより名づく。(二〇) 奇毛 奇特な毛色。(二一) 濟園 園とは門をいふ。(二二) 龜不龜 ぼ、りかたにたせぬ、俗客と交はらざるをいふ。(二三) 中使 禁中よりの御使ひ。(二四) 乘 馬にのりてくる。(二五) 晚節 中年以後を言す。(二六) 婚遊 他賓客とのあそび。(二七) 簡 證儀を簡略にするをいふ。(二八) 又案、南齊書文惠太子傳の在宮內、簡於遊玩弄、の簡と同じく、選擇する義か。(二九) 平厝 平生。(三〇) 孝義 孝は父に對する道、義は兄弟に對する道についていふ。(三一) 自多 みづから多とする、自らとは汝陽王についていふ、多とすとはその點を十分なりとして満足すること。(三二) 聖懷 懷尊は兄弟の義に用ふ、常棣の詩に棠棣之華、萼不韞韞、とあり、不は附と同じく、さいふりの花は花に花と。

のあしがうるはしくついである。之を兄弟むつまじきことにたとふ、親とは玄宗が孝王に對し親しまれしことをいふ。【三】同山の陵、汝陽王の父孝王の墓するや以て讓皇帝といひ、稱陵の傍に葬り、惠陵と號す、王、表を上りて顯赫す、孝王は睿宗の太子として帝位に即ぐべき人なりしが讓られしなり、汝陽王が父を重く葬ることを辭するはこれ山陵を問はざるなり。【四】道、道の正しき備者。【五】官匠、すぐれた名人。【六】筆飛、文字を書するをいふ。【七】雙、鳳、並に字形の形。【八】靈、あがりしき備者。【九】精、精微なる道理。【一〇】通談笑、通とは共に存在するをいふ。【一一】忘形、形骸のうばを忘れ、精神を以て突ける。【一二】寸長、わづかな長所。他人の。【一三】體、糸のしつれる親交の情につきいふ。【一四】一語、漢の季布が故事、季布は俠客なり、その一語を得るは黄金百斤を得るよりもまるといはる、王が他人のたのみをひきうけらるるをいふ。【一五】關外、わごり、ほころ。【一六】香、かたじけなく、謙遜していふ。【一七】歸曹植、曹植は魏の曹操の次子、文辭に長ず、文士王業が徒之に歸す、こは曹植を以て汝陽王に比し、王業を自己にたとふ。【一八】李膺、後漢の賢人、杜密と親交あり、李杜と稱せらる、こは李膺を王に比し、杜密を自己に比す。【一九】招要、要は邀むかへるなり、王が作者をむかへること。【二〇】思、力、王の思、自己の力。【二一】崇重、王が作者をたつとぶこと。【二二】披、初對面をいふ、昏の葡萄酒といふ者樂廣を見しとき、見此人、若し彼世帯二而觀、青天。と百へりとぞ。【二三】初歌、初めて王とうちとけて語る。【二四】高秋、天高き秋。【二五】爽氣、さわやかな氣。【二六】鶴、大きな酒つば。【二七】花月、此句春をいふ。【二八】炎天、此句夏をいふ。【二九】鬱蒸、むつとしてむしあつき。の四句は前年の秋につき敘す。【三〇】花月、此句春をいふ。【三一】炎天、此句夏をいふ。【三二】鬱蒸、むつとしてむしあつき。玉壘氷、玉壘中にあるが如き美しき氷といふこと、氷柱をいふ。【三三】許由が故事、むかし許由にて水を飲みしに人之に一瓢をおくる、由飲みほりて木の上に掛くるに風吹くとさきひようひようとも、由うるさして瓢をすつ、こは許由が道棲に似たるをいふ、或は顔回の一瓢飲にて貧をあらはすとみるも可ならん。【三四】三徑、後漢の許邈といふもの隱居して門を塞ぎ舍中にただ三すぢの徑を開きたりとの故事、隱者を學ぶをいふ、此句は自己をいふ。【三五】躡、此句曹植に上句と同じく自己の體をいふとす。然れども余は此句は汝陽王の仙人生活についていふものとみる、下にも見ゆる如く王を漢の淮南王劉安に比したるなり、劉安は八公の徒と共に仙を學び「招隱」を賦したり。【三六】鶴、鶴とは隱辭、持とは抱きもつをいふ。【三七】靈海、廣遠東方朔傳にみゆ、靈は靈なり、靈員にてつくりし杯を以て海の水の多少をはかる、海とは王の識見度量の深きをたとふ。【三八】抱、くむ。【三九】酒如瀉、左傳（昭公十二年）にみゆ、瀉は川の名、瀉の如しとは多きをいふ、王の饜應に預りその思のあつきをいふ。【四〇】鴻寶、靈符の名、劉安に純中鴻寶靈符ありしといふ、蓋し神仙・黃白（錬金術）の事をかきしもの。【四一】丹梯、梯は、ぼしこ、これは赤色の土の山路をさしていふ、此句は上の殿樓百層の句と應ず。【四二】授、しぐ、なかしてのぼること。【四三】淮王、漢の淮南王劉安、以て汝陽王に比す。【四四】春、自己をいふ。【四五】懷孫登、魏末に孫登、汲郡の北山に居る、魯康、之に従つて遊ぶこと三年、別れんとするとき登、康に謂つて曰く、子は才多きも謙恭し、今の世に於て爾より免るること難しと。康は後命に死せり、死に臨み爾時を作る、曰く昔登、柳下、今懷孫登と。柳下は柳下惠なり、柳下惠は治世にも亂世にも出でて仕へたり、孫登は亂世と知りて隱遁して出でざりしなり。魯康は二人の如くなる能はず、故に之に對して慙愧すといふなり。

【題義】特進の位にある汝陽王李璣に贈れる詩なり。天寶五載ごろの作ならん。  
 【詩意】我が特進李璣公は多くの王公のあるなかにもそのめじるしとなる人で、天上の人としてつとにできあがつた徳は諸公のうへにたかくいでてをつた。之を物にたとへていへば秋の霜に露をふみとどろかす千里の駿馬か、九重の天に風にはばたきする鵬鳥のたぐひである。汝陽王はよく禮儀にしたがひ、その瑣細な點までをも求められる。また一すぢに忠誠であつて之がためにはねたりおきたりすることさへ忘れられる程である。だから聖天子のみこころからいつもお目をかけて御寵愛になり、王が朝廷より退出せられると、天子はたよりを失うたやうにおぼしめされた、(或は王は朝廷から退

出されても私の場處では自己の貴顯な地位をたのんでおぼるやうなことは無い様であつた。王の處へは天子から浮蟻の如き甘酒が來たり、又時としては奇特な毛色を有する鷹を賜はることもある。王邸の門は清かにして塵の雜ることなく閉靜であり、宮中からのお使ひが毎日馬にのつてくる。王は中年後は他人との交遊に禮儀を至つて簡略にされたが、平生は孝義ある人物として世間からいはれてゐる。王は嘗て玄宗が寧王の生前に、之と血筋をわけた兄弟として特にむつまじくせられたといふことだけで已に十分満足されてをり、父が死後特に優禮を以て葬られんとせる時には山陵などはいかやうでもよろしいふ風に謙遜されてゐる。王の學業の富めることは醇正なる儒者の如く、その文辭の華やかなことは専門のくらうとぐらゐの技能がある。文字をかくために筆を飛ばせば鸞鳥がそびえ立ち、一章をかきをはれば鳳凰がとびあがるの勢がある。談笑の際にもいつも精微な道理が存在してをり、朋友に對しては形骸を忘れ精神を以てむかはれる。その交る人物に苟も一寸の長所があればそれと親密にして離れられぬといふほどの情合ひがあり、なにか人の事について、よしと引きうけてやつたからとて、それにつきまはつたりほこつたりする様なことはない。わたくしは昔の王樂のやうなもので、已にかたじけなくも曹植ともいふべきあなたに身を託するやうになりましたが、杜密でもないわたくしがどうして李膺ともいふべきあなたに對することができませう。私を招きむかへてくださる御恩命がたびたび私の處へきますが、私をひどくたふとびくださるので、私の力はそれにはた

へきれませぬ。あの雲霧をおしのけて青天をながめるやうな心地した初めておあひした夕には、秋の天高く爽やかな氣がすみわたつてゐた。泉池の遠き浦わにのぞんで酒樽を設け、燈をかかげたそばには鹿や雁がとまつてゐた。次の歳には春は花月の下で遊宴をきはめ、夏は炎天にむしあつさを避け、秋は金井から汲んだ水を硯に寒く滴たらせ、冬は玉壺中の氷かともみがふ水柱のきばにかかりはじめた。わたくしは許由又はの如く瓢で水を飲み、蔣詡の如くただ三徑を開いて閉居してゐますが、あなた(王)は巖穴に棲まれ百層の高處に居られる。わたくしがあなたの胸中をおしはかるは螺杯で海水を測るやうなものであるが、さやうなかんがへをいだいてゐる。まして平生あなたの供せらるる如く酒の酒をくみつつあるに於てをや。あなたは鴻寶の秘籍をも私に對して全くおかくしになりはしますまい、私は丹梯をよちてあなたの高きお住居へちかづけると希望してゐる。淮南王に比すべきあなたの門にははしかるべき賓客ごときがあるのである。私は決して嵇康のごとく半隱半仕で孫登に愧づるやうなことをせぬのである。

贈比部蕭郎中十兄

〔原注〕甫從姑之子。比部の蕭郎中十兄に贈る

有美生人傑。由來積德門。

有美人傑を生ず、由來積德の門。

漢朝丞相系。梁日帝王孫。

漢朝丞相の系、梁日帝王の孫。

贈比部蕭郎中十兄

蘊藉爲郎久魁梧秉哲尊。

蘊藉郎爲ること久し、魁梧哲を秉る尊し。

詞華傾後輩風雅靄孤鶩。

詞華後輩を傾く、風雅靄として孤鶩す。

宅相榮姻戚兒童惠討論。

宅相姻戚を榮にす、兒童にも討論を恵む。

見知眞自幼謀拙愧諸昆。

知らること眞に幼よりす、謀拙にして諸昆に愧づ。

漂蕩雲天闊沈埋日月奔。

漂蕩雲天闊なり、沈埋日月奔る。

致君時已晚懷古意空存。

君を致す時已に晩し、古を懷ふ意空しく存す。

中散山陽鍛愚公野谷邨。

中散が山陽の鍛、愚公が野谷の邨。

寧紆長者轍歸老任乾坤。

寧ぞ長者の轍を紆らさむ、歸り老して乾坤に任せむ。

【字解】(一) 比部郎中、刑部尚書に屬する官名、會計檢査を掌る。(二) 蘊、その人の姓。(三) 十、從兄弟間の生れの順位。

【從姑】 乃ば、從姑之子とは作者のいとこ。(四) 有美、詩題に有美一人とあり、有美の二字を切りはなして用ふ、美は美なる人ないふ、從姑をさす。(五) 靄、靄門、代代徳をつみし家門。(六) 孤鶩、漢の丞相蕭何をさす。(七) 詞華、漢の詩。(八) 帝

王、漢の武帝蕭衍をさす。(九) 風雅、人からのむとなし。(一〇) 惠、惠、尊の偉大なさま。(一一) 討論、討論の事、討論に能く乗る言の語あり、言は言なり、心に智ある所をとりまゝるを兼言といふ。(一二) 詞華、文辭の華やかさ。(一三) 靄、靄門、代代徳をさす。(一四) 風雅、これも文章風雅の進ないふ。(一五) 孤鶩、孤鶩に當るないふ。(一六) 沈埋、ひとりあがりとよ。

【宅相】 晉の魏舒が故事、魏舒少くして孤となり、母かたの夢氏に變はる、夢氏宅を起せしとき宅を相する者云ふ、貴明を出だすならんと、舒曰く、我は此の宅相を成就せしめんと。蕭十が官途に榮達せるは魏舒が宅相をよくと似たり。(一七) 知、知、謙の關係にある親族。(一八) 兒童、作者のこどものときないふ。(一九) 惠、賜はるといふが如し、自己のためにさやうにしてくれるといふこと。(二〇) 討論、議論して是非を究むるないふ。(二一) 見知、蕭十から知らるるなり。(二二) 謀拙、謀とは世わたりの謀ないふ。(二三) 諸昆、昆は兄なり、これは蕭氏の兄弟をさす。(二四) 謙、ただよふ貌、身の漂泊しておちつかぬさま。(二五) 雲天、雲のうかぶそら、これは青雲の地位と隔たるないふならん。(二六) 沈埋、沈論といふが如し、卑賤の地位にしづんであること。(二七) 日月奔、時の早くすぎるること。(二八) 致君、天子を堯舜の如き聖人の地位に致すこと、これは天子に事へてはじめてできることなり。(二九) 愚公、古は古代、即ち堯舜の唐虞時代をさす。(三〇) 意空存、そのころだけはある、結果はなし。

【中散山陽鍛】 魏末に晉康は魏の宗室と婚して中散大夫に拜せられ、山陽(河南懷慶府修武縣西北三十五里)に居る。性絶だ巧にして鍛を善くす、夏月にはつれに柳樹の下にて鍛せしといふ。(三一) 愚公野谷邨、齊の桓公廬を逐ひ、谷中に入りしに一老人を見る、之に何の各ぞと問ふに愚公の各なりと答ふ、そのわけを語りていふ、臣は牛を畜ひ子をうませ、之を賣りて馬を買ひたるに少年等の曰く牛は馬を生む能はずとて馬をもち去れり、隣人臣を以て愚なりとし、かく名づけたりと。(三二) 寧、なんぞ。(三三) 紆、めぐらす、迂回してこちらへくるないふ。(三四) 長者轍、漢の陳平が故事、「對兩書實定遷許主簿」詩にみゆ。(三五) 歸老、歸りてそこに老年をすこす、此語によれば長安より河南の方へかへり豊居せんとか人がへたるに似たり。(三六) 任乾坤、天地間の生息の成りゆきにかかす。

【題義】 比部郎中の官をしてゐるとこゝにあに蕭といふものに贈る詩。天寶六載落第以後の作。

【詩意】 我が從姑はりつばな人で蕭君の如き人傑を生んだ、これは一朝一夕の故ではなく原來代代徳を積み來つた家柄であるからである。蕭姓の祖先を探つてみると漢朝では丞相蕭何があるが君はその系統である、また梁の時には武帝蕭衍があるが君はその末孫である。君の人柄はおとなしいので郎中



となつて日も久しく、君の容貌は偉大であつて尊くも智を守つて失はない。君の文辭の華やかさは後輩どもを壓倒し、君の風雅の趣は豊富であつてただひとりもぬけてとびあがつて居る。君は昔の魏舒のやうに宅相を成す人であつて我我親族のはしくれまでを榮譽あらしめ、我我兒童にまで道理をわけて討論をしてくださった。わたくしが君に知られたのは實に幼少のときからであるが、今成長しながら世渡りにへたであるのは君たち兄弟に對してはつかしいのである。自分は今漂泊生活で青雲の居る高い地位とは大分へだたりがある。下位にうづもれてゐるが月日は遠慮なく奔つてすぎ去る。我が天子を堯舜の地位に致さうとしても時はもはやおそい、ただ古の聖世を懷慕するころばかりはいたづらにのこつてゐる。自分は稽中散(康)が山陽で鍛冶をしてくらした如く、また愚公が野谷の村で牛をかつてゐた如く、故郷の方へかへつて隱居してしまひ、天地の運命のまにまに身をまかせやうかとおもふ。漢の陳平のやうに長者とよばれる人たちから、わざわざ鶴をまげてわが家をたづね來てもらふことはいらぬのである。

奉寄河南韋尹丈人 (隱居甫故廬在偃師承韋公頻有訪問故有下句)

有客傳河尹、逢人間孔融。客有り河尹、人に逢へば孔融を問ふと傳ふ。

青囊仍隱逸、章甫尚西東。青囊仍は隱逸、章甫尚は西東。

鼎食分門戶、詞場繼國風。鼎食門戶を分ち、詞場國風を繼ぐ。

尊榮曠地絕、疎放憶途窮。尊榮地の絶たるを曠る。疎放途の窮せるを憶ふ。

濁酒尋陶令、丹砂訪葛洪。濁酒陶令を尋ね、丹砂葛洪を訪ふ。

江湖漂短褐、霜雪滿飛蓬。江湖短褐を漂はす、霜雪飛蓬に滿つ。

牢落乾坤大、周流道術空。牢落乾坤大なり、周流道術空し。

謬慙知蒞子、眞怯笑揚雄。謬つて慙づ蒞子を知るに、眞に怯る揚雄を笑はむことを。

盤錯神明懼、謳歌德義豐。盤錯神明懼る、謳歌德義豐なり。

尸鄉餘土室、誰話祝雞翁。尸郷土室を餘す、誰か祝雞翁を話せむ。

【字解】(一) 奉寄 寄といへば地隔り、地方より寄せるなり。(二) 河南韋尹 河南尹韋濟なり、尹は河南府の長官、從三品なり。(三) 丈人 蓋し席間面丈より出でしならん、その人と對面するに中間席一丈を隔つる人、長者を尊敬していふ稱なり、又、易、師の卦の王劉の注には丈人は嚴莊之稱とせり、韋濟は天寶七載に河南尹となり、また尚書左丞に遷る。(四) 有客 客とは或人をさす。(五) 河尹 後漢の李膺をさす、以て韋濟に比す、李膺河南の尹となり、袁りに士に接せず、孔融年十歳、門にいたりて共に交はる。(六) 孔融 上にみゆ、融を以て自ら比す。(七) 青囊 晉の郭璞、樂を鄭公に受け、青囊の書九卷を得、遂に五行に通ず。(八) 仍 仍な

ほ、よつて、これまでどほり。【六】隱逸。世からかくれられる。【七】章市。股代の冠の名。莊子に宋の人が章甫を冠りて越にゆきしに越の人は髪を断れずみをしてあるため、その冠は無用となりしとの話あり。「青蠶」二句は上の句の對する答とみる。之を問ひの文句とする解あるも、問辭としては仍、尙の二字不穩當なり、故に取らず。【八】鼎食。鼎を列べて食すること。鼎は物を煮るもの、之を列ぬるは美食を多く作るなり、章濟の門地をいふ。【九】分門戶。一族大にして幾派にもわかれてあるをいふ。【一〇】詞場。文學の社會。【一一】園風。「詩經」の園風の詩をいふ。【一二】尊榮。章濟が尊く榮ゆること。【一三】職。作者がみること。【一四】地絕。章の居る地が高くしてかけはなれてあること。【一五】羅放。作者の心のしまりなきをいふ。【一六】惜。章濟がおもふなり。【一七】送窮。魏の阮籍が故事、轡はふと車にのりてでかけ途の窮まれる所に至れば痛哭してかへりしといふ、上句の尊榮は地絶へかかり、此句の羅放は送窮へかかる。【一八】陶令。彭澤縣令陶淵明。【一九】丹砂。葛洪。已に「贈李白」七言絶句にみゆ。【二〇】源。ただよはす、さまよふこと。【二一】短褐。すそみじかい粗末な毛織物、自己の衣をいふ。【二二】飛蓬。秋風にたぶよもぎ、髪を亂れしをたとへていふ、「伯兮」の詩に自、伯之東、首如飛蓬とあるに本く。【二三】零落。零落のさま。【二四】周旋。あちこちうつりあるく、孔子に比す。【二五】道術。道を行ふのすべ。【二六】謬題。章に對する謙辭。【二七】知。章が知るなり。【二八】菊子。後漢の劉子驥をいふ、彼は神異の道を知り京師に到るや公卿以下數百人の訪問をうく、これは自己に比す。【二九】怯。おそる。【三〇】笑。他人が笑ふ。【三一】揚雄。漢末に揚雄、太玄經を草するや、人、玄の尙白きを笑ふ、以て自己に比す。【三二】盤錯。盤根錯節の略、後漢の盧昭歌(地名)の長となる。曰く、不遇盤根錯節、何以別利器と。その器がきれいかを區別するには樹木のわたかまつた根や、いりまじつた節にてあはなければわからぬ、人も難事にてあはればその才能があらはれぬ、盤錯二字にて章が盤根錯節を斷つ利器なるをいふ。【三三】神明懼。鬼神も畏るといへんがごとし、章の政治の能力の人間以上なるをいふ。【三四】謳歌。人民が章の徳をうたふ。【三五】德義。章の徳義。【三六】尸鄉。尸鄉は地名、河南偃師縣の四二十里にあり、此に疑ふべきは此句は作者眞に尸鄉に土室を有すといへるものなるか、單に故事として借用せるかといふことなり、借用とするならば偃師縣の「土室の舊莊」のことをあててきたなり。察するにこゝは祝辭をもちださんがために、尸鄉を借用せるものにて、實際意味する地は土室ならん。作者に「風」五言言「實」土室舊莊。詩あり、後に出づ。【三七】土室。穴居の場所。【三八】離話。他に話するものなく章のみ語するをいふ。【三九】祝辭翁。洛陽の人にして尸鄉の北山の下に居り、百年あまり無干頭をかふ、みな名字あり、之を呼べば名ざされしもの種を別ちて來りしといふ。一種の仙人なり、祝と雖もよふ聲なり、期、衆、祝、みなチユツチユツといふ音字なり。祝辭翁は自己をたとへていふ。

【題義】河南の尹たる章濟どのに寄せ奉れる詩。天寶七載長安に在りての作。

【詩意】或る人があつて河南尹李膺ともいふべきあなたが人にあふごとし孔融ともいふべき私のことをお尋ねになると傳へてくれた。私の近況を申せば青囊の書を探つてやつぱり隱逸のすがたでをり、世にはやらない章甫の冠をつけていまだに西東とさまよつてをります。あなたは鼎を列ねて食ふといふ富貴の家で一族數多の門戶にわかれてをられるし、あなたは文學の社會に於て其の製作は園風の詩を繼ぐ程であられる。私はあなたの尊榮なるを仰いであなたの居られる地位がよほど高くかけはなれてゐるのを見るのである、しかしてあなたはよくも此の私が疎放にしてゆく途の窮まれる事を御思ひくだされる。私は濁酒を愛する陶淵明を尋ねたり、丹砂を鍊る葛洪を訪うたりして隱逸を學び、江湖の地に短褐の身をさまよはせ、霜雪が已に頭の亂れた髪に一ぱいになつてゐる。この大なる天地の間におちよれつつ、あちらこちらうつりゆくが身には何等の道術もそなはつてゐない。あなたが藟子剛に比すべきこの私をお知りくださるのはおはづかしいことで、私は世人がこの揚雄めいた私を笑

ふ事をほんたうに恐れてゐるのである。』あなたは盤根錯節を断つ利器で、その治才の偉大なるは神明もおそれる、あなたの徳義はゆたかであつて人民は之を謳歌する。私は昔の祝雞翁の如く戸郷に土室をのこしてをりますが、あなたならではだれが祝雞翁のことを話してくれるものがあるませう。(あなたの御親切はかたじけない)

贈韋左丞濟

韋左丞濟に贈る

左轄類虚位、今年得舊儒。  
 相門韋氏在、經術漢臣須。  
 時議歸前烈、天倫恨莫俱。  
 鶴原荒宿草、鳳沼接亨衢。  
 有客雖安命、衰容豈壯夫。  
 家人憂几杖、甲子混泥塗。  
 不謂矜餘力、還來謁大巫。

左轄類りに虚位なり、今年舊儒を得たり。  
 相門韋氏在り、經術漢臣を須つ。  
 時議前烈に歸す、天倫俱にする莫きを恨む。  
 鶴原に宿草荒る、鳳沼亨衢に接す。  
 客あり命に安んずと雖も、衰容豈壯夫ならむや。  
 家人几杖を憂ふ、甲子泥塗に混す。  
 謂はざりき餘力に矜りて、還來つて大巫に謁せむとは。

歲寒仍願遇、日暮且踟躕。  
 老驥思千里、饑鷹待一呼。  
 君能微感激、亦足慰榛蕪。

歲寒仍ほ願遇す、日暮且つ踟躕す。  
 老驥千里を思ひ、飢鷹一呼を待つ。  
 君能く微しく感激せば、亦た榛蕪を慰むるに足らむ。

【字解】【一】韋濟、即ち前詩の河南尹韋濟なり。【二】左丞、韋濟は河南尹より尙書左丞に遷りしなり、尙書省は内閣の如く吏、戸、禮、兵、刑、工の六部省を總ぶ、尙書省の長官を尙書令といひ、その副を左、右僕射といひ、又その次位を左丞、右丞とす、左丞は正四品上、六官の備を辨じ、省内を正し、御史の舉の不當なる者を劾する事を掌る。吏部、戸部、禮部をば左丞之を總ぶ。【三】左轄、左丞の職をさす、唐六典に左、右丞掌「皆三輔省事、糾察憲章」とあり、總は「くさび」皆轄は要をとりしまること、左丞なるを以て左轄といふ。【四】虚位、其の地位を滿たす人がかけること。【五】舊儒、舊來からの儒者、韋濟をさす。【六】相門、宰相のである家から、韋氏は則天武后の時に開臺臺鳳閣三品韋思謙あり、思謙の子承慶、嗣立、父子三人皆宰相に至れり。【七】經術、儒者の學問治術をいふ。【八】漢臣、漢の章帝は禮、尙書に通じ、詩を以て教授し、鄭書の大儒と稱せられ、七十餘歳にして相となる。賢が少子玄成また繼に明かなるを以て位を歴て丞相に至れり。【九】須、まつ、さやうな人がいりようだといふこと。【一〇】時議、當世の議論、世上の評判。【一一】歸前烈、烈とは功なり、前功ある人とは韋濟の兄をさす、韋嗣立三子あり、韋學、韋愷、韋濟これなり、學は左司員外郎に至り、愷は福山令、殿中侍御史、權右道河内縣使となり、陳留太守たり、赴任せずして卒す。濟が左丞に遷りしときに愷已に卒せしならんといふ。歸とはそれに歸着するをいふ。【一二】天倫、「殷鑒傳」に兄弟天倫也とあり、注に兄は先、弟は後なるは天の倫次なりといへり。ここは濟の兄愷をさす。【一三】英俱、生存を俱にせざるをいふ。【一四】鶴原、「常棣」の詩に鶴鳴在原。兄弟急難とあり、野合の鳥は水上に棲む者なるも處を失ひて原上にあれば飛鳴して其類を求む、兄弟が急難にあたりて互に相救ふ事せざればと似たり。此の鶴原とは兄の罪地をいふ。【一五】宿草、前年以來生ぜし草、「禮記」檀弓篇に曾子曰、朋友之墓、有宿草而不哭とみゆ。

【六】風流 風流他のこと、中書省に風流他ありしにより晉の荀勗以來中書のことを風流風流などといふ、唐にては光宅元年に中書省を改めて鳳閣といふ、韋濟の父祖はみな鳳閣に官たり、故に之を用ふ。【七】接字 享壽は通路なり、天上の通路なり、官位の高き處をさす、即ち上の鳳閣の地位、語は「易」大畜卦上九の何天之喬、及び靈光殿殿の何天喬、以元亨に本く、接とはそれにつづかないふ。【八】有客 客は自己をさす。【九】安命 天命に安んじてゐる。【一〇】衰容 おとろへたすがた。【一一】壯夫 わかもの、元氣盛んなもの。【一二】家人 一家のもの。【一三】愛几杖 几杖のことについて心配する、几は膝息、よりかかつてやすむもの、杖はつゝみ、からだをささへるもの、几と杖とは老人の要する器具なり。【一四】甲子 甲は甲乙等、子は子丑等、生れた幹支をいふ、こゝは多くの甲子をへたことないう。【一五】泥塗 塗も、どろしなり、甲子。泥塗は「左傳」に本く。【一六】餘力 の、れる力。【一七】大巫 吳志「張欽傳の注に本く、陳琳といふ者、張欽に書を與へてその文章をほめ、自己の軟に於けるは小巫が大巫を見ることきものなりといへり。巫は「みこ」、小大は幼老をいふ、こゝは韋濟を大巫に比す。【一八】歲暮 歲暮をいふ。【一九】願 願は眷屬、めをかける、懸は接遇、してなすこと、韋濟がするなり。【二〇】踟躕 ためらふ、たち去りかゝるさま。【二一】老驥千里 魏の曹操の詩句に、老驥伏櫪、志在千里、烈士暮年、壯心未已とあり、驥は日に千里をばしる馬。【二二】健鷹 陳登が呂布にいへる語に、曹公（曹操）曰、將軍（呂布）をさす、譬如健鷹、健鷹鷹用、健鷹鷹去とみゆ。【二三】一呼 人がよぶ。【二四】君 韋濟をさす。【二五】感激 作者の憐むべき境遇に對して感動する。【二六】襟燕 はりのき、くさやぶ、自己貧窮の状をいふ。

【題義】 向書左丞韋濟に贈れる詩。天寶七載冬、長安に在りて贈る。

【詩意】 ちかごろ左丞の地位はしきりに其人がかけてゐたのだが、今年に幸に舊來からの儒者（韋濟）を求める事ができた。先づ代代宰相を出す家からとしては韋氏といふものがあるのであるが、經學治術のそなはつた人としては漢の韋賢父子のやうな臣でなければならぬ。世論をきくと此の地位は從來

已に功烈のあつた人（韋賢）を充てるがよいといふことに歸着したのであるが、残念なことには其人は已に歿してゐるので、兄弟（濟より）一緒に此世に生存し得るのである。其人の墓には舊草があればこつてゐるとき、あなたは世論の如く此の地位にのぼり、父祖以來の中書の地と路を接することになつた。自分は如何なる境遇にならうとも天命におちついてゐるのであるが近頃の老衰の形容はどうして往年の壯夫のすがたがあらうや。家内のものは自分に對して脇息だ杖だといつて心配してくれる、かくして幾へりかの甲子を卑賤の地にゐて泥塗にまじりながらすごす。それがまだ用ふべき力がこつてゐると得意氣になつて、また大巫のやうなあなたにお目にかかりに來やうなどは意外なことである。この歲暮の時節にあなたが從前どほり私にめをかけてくださったので、日暮になつても私は未練がましく、あなたのそばから急には立ち去りかねてゐます。自分は老いたる驥馬のやうなもので、今にも千里を走らうとおもうてゐる、また饑えた鷹のやうなもので他人がかけ聲して自分を用ひてくれるのを待つてゐる。あなたがもしすこしく私の境遇に同情して感激してくださることができれば、私もそれで今の荒廢生活を十分慰めうるであります。

奉贈韋左丞丈二十二韻

韋左丞丈に贈り奉る、二十二韻

執袴不餓死、儒冠多誤身。

執袴餓死せず、儒冠多く身を誤る。

丈人試靜聽。賤子請具陳。

丈人試に靜に聽け、賤子請ふ具さに陳せむ。

甫昔少年日。早充觀國賓。

甫昔少年の日、早く觀國の賓に充てらる。

讀書破萬卷。下筆如有神。

讀書萬卷を破る、筆を下せば神あるが如し。

賦料揚雄敵。詩看子建親。

賦は料る揚雄の敵なりと、詩は看る子建が親なるを。

李邕求識面。王翰願卜隣。

李邕面を識らむことを求め、王翰隣を卜せむと願ふ。

自謂頗挺出。立登要路津。

自ら謂へらく頗る挺出す、立ろに要路の津に登り。

致君堯舜上。再使風俗淳。

君を堯舜の上に致し、再び風俗をして淳ならしめむと。

此意竟蕭條。行歌非隱淪。

此意竟に蕭條たり、行歌す隱淪に非ず。

騎驢三十載。旅食京華春。

驢に騎る三十載、旅食す京華の春。

朝扣富兒門。暮隨肥馬塵。

朝に富兒の門を扣き、暮に肥馬の塵に隨ふ。

殘杯與冷炙。到處潛悲辛。

殘杯と冷炙と、到處に悲辛。

主上頃見徵。欷然欲求伸。

主上に頃ろ徵さる、欷然伸を求めむと欲す。

青冥卻垂翅。踏踏無縱鱗。

青冥卻つて翅を垂る、踏踏として鱗を縱にする無し。

甚愧丈人厚。甚知丈人真。

甚だ愧づ丈人の厚きに、甚だ知る丈人の真なるを。

每於百僚上。猥誦佳句新。

毎に百僚の上に於て、猥りに佳句の新なるを誦す。

竊效賁公喜。難甘原憲貧。

竊に賁公が喜に效ふ、原憲が貧に甘んじ難し。

焉能心快快。祇是走踈踈。

焉ぞ能く心快快として、祇是れ走つて踈踈たらむ。

今欲東入海。卽將西去秦。

今東海に入らむと欲す、卽ち將に西秦を去らむとす。

尙憐終南山。回首清渭濱。

尙は憐む終南山の山、首を回らす清渭の濱。

常擬報一飯。況懷辭大臣。

常に一飯にも報いむと擬す、況むや大臣を辭するを懷ふ。

白鷗沒浩蕩。萬里誰能馴。

白鷗浩蕩に沒す、萬里誰か能く馴さむ。

をや。

【字解】(一) 章左丞、前詩のそれと同じく左丞章濟をいふ。(二) 丈、丈人の略。(三) 執事、執は素ききぬ、將ははかまし、貴族の子弟のきしものなり。(四) 備冠、備者のつける冠。(五) 猥身、一身處世の方を撰る。(六) 丈人、已に前にみゆ、章濟をさす。(七) 賁子、いやしきもの、自己の諱稱。(八) 具陳、つぶさにのべる。(九) 少年日、開元二十三年、作者二十四歳。(十) 讀書破萬卷、易、親身に國之光、利用賓に於王、とみゆ、觀國賓とは觀國光之賓なり、これは作者京兆(長安)にいで東部の孝功郎の下にて試験九うけし、とみます、都にては國光を觀るなり、受験者は王者の賓なり。(十一) 破、讀破の義、しりぬくこと。(十二) 如有神、神助あるがごとし。(十三) 料、おしはかる。(十四) 揚雄、前漢末の賦の作家なり、司馬相如と並稱せらる。(十五) 子建、魏の曹植、字は子建、五言詩の作家なり。(十六) 李邕、已に前にみゆ、唐の北海太守。(十七) 王翰、唐

の晉蘭の人、字は子蘭、詩を以て名あり。【三〇】卜。吉か凶かのうらなひをしてとなりずまひする。【三一】提出。わけである。【三二】立。たちどころに、すぐに。【三三】要路津。津と要路とは同物なり、津とは「わたりば」にて衆路のあつまるるところ、故にまた要路なり。【三四】致。致くといふがごとし。【三五】鴻輝。昔の帝王。【三六】上。以上。【三七】再。唐に於てまた。【三八】摩まじりけなく正し。【三九】此意。前段の「自開」以下四句の意。【四〇】曹休。さびしきさま、志を行はぬゆゑまじりしといふ。【四一】行歌。あるきつづいたふ、多く隠者などの爲すことなり。【四二】隱論。論は「しづむ」、隱論は隱避して世間からうづもれてあるものをいふ。【四三】歳。ろば。【四四】三十載。仇光業は開元二十三年京兆貢舉に赴きし歳より天寶六載詔試に應ぜざる歳までながざへて十三載とし「三十」を「十三」の誤となせり。しかし此時に年数をしかく精密にかぞへしや否やは疑問とすべく、若し文字を改むるを許すならば三十載の「三」は「巳」の訛なるべく、「巳十載」とありしものとかがんがふ、もとより十載とは「十載ばかり」といふくらゐの義にて十とかざるに非ず。【四五】京華。都會文明の地、長安をさす。【四六】相。叩と同じ。【四七】富兒。かれもち。【四八】肥馬。富貴の人ののる馬。【四九】冷突。ひえたあぶりにく。【五〇】主上。天子、おかみ、支宗なり。【五一】頃。このころ。【五二】見微。めざる、天寶六載天下に昭して一箇あるものは都にいたりて試をうけしむ、李林甫尙書に命じて皆之を落第せしむ、杜甫、元結等は落第者なり。【五三】飲餒。たちまち。【五四】求伸。「易」の象辭下に「尺蠖之屈、以求伸也」とみゆ、これまで身を屈めてゐたのをばさんとする。【五五】青冥。あかぞら。【五六】垂翅。つばさをたれるとは勢を失ひしさま、鳥にたとふ、これは落第せし事をいふ。【五七】閉。勢を失へるさま。【五八】縱騎。うろこをほし、いまにして泳ぐ、これは魚に喩ふ。【五九】厚。自己を待遇するの意厚きをいふ。【六〇】眞。心の眞實にして虚偽なきをいふ。【六一】百僚。多くの同僚。【六二】限。みだりに、謙遜していふ。【六三】佳句。杜甫のつくれる詩のよき句。【六四】竊。ひそかに、謙辭。【六五】致。ならふ。【六六】賈公喜。漢の王吉、字は子蘭、賈典と親友なり、時に王師在位、賈公孫冠の說あり、魏冠とは冠の座をばらうて將に出で仕へんとするなり。又、劉孝標の廣絶文論に王陽登則賈公喜とみゆ。賈典は王吉が位に在るを喜ぶなり、こゝは李濟を王吉に、自己を賈典に比す。【六七】原道。賈原道は孔子の門人、實を以て有名なり、自己をたとふ。【六八】怏怏。不平の貌。【六九】嗟。ただ。【七〇】談。走る貌。【七一】

海。東海をいふ。【三〇】去。兼。兼は長安をさす。【三一】終南山。長安の南五十里にあり。【三二】渭水。渭水は長安の北にあり、水清し。【三三】驅。まぢかまへる。【三四】第一。第一。范曄傳に「第一之思必償」とみゆ、又、淮陰侯傳に「願母の飯を與へし思に報せし等のことあり。【三五】大田。堂濟をさす。【三六】鳴。かとも。【三七】清。清。清波のひろくうごくさま。【三八】鳴。動物をならしてなづけること、鳴を以て自己に比す。

【題義】尙書左丞韋濟に贈れる詩。作者天寶六載詔に應じて試みられ退けらる、此詩は七載長安にての作なるべし、詩によれば將に長安を去りて東海に赴かんとするの意あり。  
【詩意】執袴をはいてある貴族の子弟は餓えて死することは無いが、我我のやうな儒者の冠をつけたものは儒冠をつけしがために身のふりかたを誤つてしまふのである。あなたは試みにその次第をしづかにおききください、わたくしは以下委しくそれをのべませう。私は昔少年であつたとき早くも都の受験生にあてられた。書物は萬巻を讀破し、筆を下して詩文をつくる時は神の助けがあるかのやうで、賦ならば揚雄に敵するに足るとおもひ、詩ならば曹植に近いものとかんがへた。現代では李邕も私のかほをしりたいと求め、王翰も私の隣に住みたいと願つた。それだから自分でおもふには、「自分はよほど他の衆人よりも傑出してゐる、すぐさま樞要な地位にのぼることができ、我が君を堯舜以上の地位に高め、數千年の後我が唐に於て再び天下の風俗を淳正ならしめることができるであらう」と。上述のかんがへも畢竟なしとげられずさびしく終ることになり、隱遁者でもないのにならうと。

るきながら歌をうたうてゐるさまだ。みすばらしくも早や十年ばかりも驢馬にのつて都の春にたび住ひをしてゐる、朝にはかねもちの門を叩いたり、暮には他の權貴がとばす肥馬の塵のあとからくつついてゆく、彼等が興へる飲み残しの酒杯、つめたくさめた焼き肉、そんなものをあてがはれて到るところ自分は内心に悲みつらさをいだいてゐる。近いころ我が君からおめしにあづかり試験をおゆるしになつたので今度こそはとにはかにいままでの屈まりを伸べやうとおもつたのに、事志と反して此の大鳥は青空に羽うつのでなく、そこからつばさを垂れることになり、此の大鳥は巨壑に自由に泳ぎまはるのではなく、勢なく鱗を氣ままに振ふことができないやうなことになつた。あなたのお手あつにはまことに愧ぢいります、あなたの御眞實なおころは十分わかつてゐます、あなたはいつも多くの役人たちの席で私のつくつた詩のめづらしいことを、やたらに口ずさんでおほめくださつてをる。さやうなあなたが顯要な地位に居られるのは私はよろこばしくおもふ、賈禹が王陽の位に在るのを喜ぶまねさへもいたすのであるが、私も原憲のやうな貧窮にいつまで甘んじてゐることはむづかしい。どうしてただいたづらに終日ぼとぼと奔走して心に快快と不平ばかりもつてすごしてゐることができませう。これから私は西の方秦の地をはなれて東の方海中に入りこまうとおもひます。しかしさすがに見なれた終南山の山の色は愛すべくみえ、清き渭水のほとりでもふりかへつてそれをながめるのである。私は平生一飯の恩をうけたものにさへ報いたいとまらかまへてゐるのである。ましてただな

らぬ大臣たるあなたに御暇乞ひをして去らねばならぬことをおもふに於てをや、(私の衷情はいかばかりくるしいかお察しください)ただ私は去ることに決心してをります、去つて海上に至り、浩蕩たる煙波の間に出没する白鷗の如くなつたならば、萬里の遠き何人かよく之を馴らすものがあらう。(これにもならされず自由の天地を樂しむことができる)





終

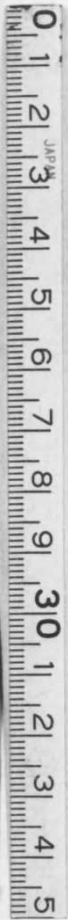
續國譯漢文大成

文學部 十四

309

65

映  
入



始



續國譯漢文大成

文學部第十四册 (第四帙の二)

杜少陵詩集 上の二

吉田静郎氏

寄贈本



杜少陵詩集 卷二

飲中八仙歌

知章騎馬似乘船  
眼花落井水底眠  
汝陽三斗始朝天  
道逢麴車口流涎  
恨不移封向酒泉  
左相日興費萬錢  
飲如長鯨吸百川  
銜杯樂聖稱避賢  
宗之蕭灑美少年

飲中八仙の歌

知章が馬に騎るは船に乗るに似たり。  
眼花さき井に落ちて水底に眠る。  
汝陽は三斗始めて天に朝す。  
道逢麴車に逢うて口涎を流す。  
恨むらくは封を移して酒泉に向はざ  
るを。  
左相は日興萬錢を費す。  
飲むことは長鯨の百川を吸ふが如し。  
杯を銜み聖を樂み賢を避くと稱す。  
宗之は蕭灑たる美少年。

【字解】

仲間の八人の仙とよばれるもの、即  
蘇晉(開元二十二年卒)、賀知章(天寶  
三載卒)、李適之(天寶五載卒)、李璣  
(天寶九載卒)、崔宗之(裴旭・魚豨・李  
白(寶應元年卒)等をいふ。【一】知  
章、賀知章なり、會稽水興の人、自ら  
四明狂客と號す、太子賓客、秘書監と  
なる、天寶三載疏を上げて海に歸る、  
玄宗詩を賦して之を送る。【二】樂、  
船、ゆらゆらする醉意をいふ、知章  
は南人にて船に乗す、故に之を用ひ  
て騎馬の狀をいふ。【三】眼花、醉  
眼にてみるとき現象のちたつくをい  
ふ。【四】蕭灑水底眠、これを「眠

飲中八仙歌

舉觴白眼望青天。

皎如玉樹臨風前。

蘇晉長齋繡佛前。

醉中往往愛逃禪。

李白一斗詩百篇。

長安市上酒家眠。

天子呼來不上船。

自稱臣是酒中仙。

張旭三杯草聖傳。

脫帽露頂王公前。

揮毫落紙如雲煙。

焦遂五斗方卓然。

高談雄辯驚四筵。

るが如し」として醉態の形容とよく  
脱あり、今取らず、實事とみるをよし  
とす。知章は奇人なれば必ずや嘗て  
かかることありしならん。【一】 蘇  
晉 汝陽王季海なり、已に前にみゆ。  
【二】 三斗 飲む酒の量をいふ。【三】  
朝天 朝廷へ参内する。【四】  
總車 かうぢを載せた車。【五】 泥  
よだれ。【六】 移封 封は領地をい  
ふ、移は場所がへする、汝陽よりほか  
の地へうつしてらふこと。【七】  
酒泉 漢の時の郡名、今甘肅省肅州、  
これは地名を活用せるなり。【八】  
左相 李邕之なり、天寶元年牛仙客  
に代つて左丞相となり、五載罷め、  
七月、邕を仰いで卒す。【九】 日  
興 毎日の酒興。【一〇】 貴角 錢  
唐の時の酒價は一斗三百錢、萬錢を  
以ては三石三斗餘りを買ひ得べし。

【一】 白眼 身のたけのながいくどら。【二】 百川 多くの用水。【三】 獨杯 獨とは口にくはへること、會と異なり、會は口の  
中へ入れておくことなり。【四】 樂聖稱獨賢 通之が和をやめしとき氣交を措き詩を賦して曰く、逸賢獨相、樂聖且獨杯、  
爲門前客、今朝獨個來、と。此の聖、賢の文字には兩義を帶用せるならん。魏の時酒を禁じたるに醉客の間に清酒を獨人といひ獨  
酒を賢人といへり。前詩は表には通常の獨人賢人の義を、裏には清酒獨酒の義をもたせたるなり。杜市の詩にては通之が詩語を用ひ  
しも清酒獨酒だけの義にて通ずるかとおもふ。【五】 宋之 世宗之なり、宋之は崔日用の子、齊國公に封ぜらる。また侍御史  
となりしことあり。【六】 曹璠 さつぱりしたさま。【七】 船 しかづき。【八】 白眼 魏の阮籍が故事、籍は俗人を見るとき  
には白眼をむきだす。【九】 皎 しろさま。【一〇】 玉樹 うつくしい樹、魏の夏侯玄かつて毛曾と並び坐せしに時の人々を驚か  
し玉樹といひしといふ、玄のうつくしきをいふなり。【一一】 臨風前 風の前立つてなる。【一二】 蘇晉 蘇刺が子なり、先天  
中に中書舍人たり、玄宗が監國たりしときの制命は晉と賢會との筆に成れり。東部、戸部の侍郎を歴て太子庶子に遷れり。【一三】 長  
齋 一年中ものいみをしてゐる。【一四】 繡佛 わびとりしてつくれる佛像、これは六朝以來ありしものなり。【一五】 逃禪 禪のな  
かから他方へ逃れて出ることと説くものあり、此は酒を飲むこと破戒なれば教外へにげだすとみるなり。また一説に禪のなかへ逃れ  
て入ることと説くものあり。禪ににげこむとは禪定に入るがごとくなるをいふ。(げだし居眠りにてもなすならん)余は後説を取る。  
前説は上に「醉中」とある語に通貫せず、醉前ならざらざる、既に醉中にありながら教外へにげだすとは文章をなます。【一六】  
酒家眠 李白已に翰林供奉となりしも常に市上に酔ふ、玄宗嘗て沈香亭に坐し白をして樂章をつくらしめんと欲す、白を召して入ら  
しむれば白已に酔ふ、左右水を以て面にそそぎ解く。【一七】 不上船 玄宗白蓮池に泛び白を召して序をつくらしむ、白已に翰  
苑にありて酒を被る、高力士に命じて白を扶けて舟に登らしむ。【一八】 蘇晉 吳郡の人、右中書長史となる、草書を善くし、酒を  
好む、醉へば號呼狂走し筆をもとめて揮灑す、又或は大醉して面壁を以て水盂の中をかきまはして之を書す、さて從自ら觀て神異  
となすといふ。【一九】 草聖傳 草書の聖人として世間に傳説せらるること。【二〇】 脫帽露頂 帽をいたたくが證なり、之をわが頂  
をあらはすは禮儀を無視するさま。【二一】 王公 地位高き人。【二二】 揮毫 毫はけ、筆をいふ。【二三】 雲煙 草書さま。

【元】魚池 其人の事蹟詳ならず、其郊の「甘澤園」に陶瓶開元中家、於眉山、自製三舟、客有前進士孟彦深、進士孟雲卿、布衣魚池、各置僕妾、共載遊山水、とみゆ。【四】卓然 意氣の高くあがるさま。【五】高談 高聲にてかたる。【六】地脚 カづよい脚音。【七】西園 滿座、一坐。

【題義】八人の酒友のことについてのべし詩なり。製作時については或は天寶五載といひ十三載といふも定めがたし。ただ天寶中、長安にての作なるべし。

【詩意】賀知章が酔ふと馬にのつてはゐるが船にのつてゐるやうにゆらゆらしてゐる。或るときは酔うて目先がちらついて、誤つて井の中に落ちこんで水底に眠つたりする。汝陽王李璣は酒を三斗ばかりのんでからやつと朝廷へまかりでる。途中でかうち車にでもあはうものなら口からよだれをながす。汝陽などに封せられず酒泉へでも場所がへしてもらつたらよからうに、さうでないのは恨むべきことだ。左丞相李適之は日日の酒興に萬錢を費す、その酒を飲むことは大鯨が百筋の川水をすふ様でがぶがぶとのむ、彼は杯を口にくはへながら清酒を樂みながら味ひ、濁酒の方は御免だといつてゐる。崔宗之はさつぱりと垢抜けのした美少年で、さかづきをもちあげてちよつと青空を白眼でにらむ様子をする。その容子が月の光りかまがふやうな玉樹が風前に立つてゐるかと思ふやうに見える。蘇晉は佛教信者でぬひとりした佛像をかかけてその前で年中ものいみをしてゐるが、酔のなかでもときどき禪定に入ること好む。李白は酒を一斗のむうちに詩百篇もつくる豪者のもので、長

安の市街へでかけて酒家で眠る。天子から呼びよせられても酔はらつて船にものぼりきらず、自分は酒中の仙人だなどと氣樂な事をいうてゐる。張旭は三杯くらゐ酒を飲ひと草書がうまくなる、世間では草書の聖人といひつたへるほどだ。彼は王公の前でも無頓着に帽子をぬぎいださるゝあらはし、筆をふるうて紙上に落すとできあがつた文字が雲や煙のわきおこつたやうに見える。焦遂は五斗の酒を傾けてやつと意氣があがつてきて、その高談雄辯はあたりを驚かすのである。

高都護聽馬行

安西都護胡青驄

高都護の聽馬の行

聲價欻然來向東

安西都護の胡の青驄

此馬臨陣久無敵

聲價あつて欻然として來て東に向ふ

與人一心成大功

此の馬陣に臨みて久しく敵無し

功成惠養隨所致

人と一心大功を成す

飄飄遠自流沙至

功成りて惠養致す所に隨ふ

雄姿未受伏櫪恩

飄飄として遠く流沙より至れり

雄姿未だ伏櫪の恩を受けず

高都護聽馬行

【字解】 高都護 安西都護

高仙芝なり、唐の貞觀十七年に安西都護府を西州に置く、顯慶三年治み龜茲國城(今の新疆省の庫車)に移す、子國以西、波斯以東の十六都護府は之に隸す。高仙芝が少勃律を平げしは天寶六載にあり、是の年大食の請部七十二國皆降附し、仙芝八載に入朝す、此時に飄飄遠自流沙に至、又、長安健兒不取騎、といふは正に其時なり、九載には仙芝石碣を討ち其王を俘にして以て獻す、是の年は

【一】猛氣猶思戰場利。

猛氣猶ほ思ふ戰場の利。

腕促蹄高如踏鐵。

腕促まり蹄高くして鐵を踏むが如し。

交河幾蹴曾冰裂。

交河幾びか曾氷を蹴つて裂く。

五花散作雲滿身。

五花散じて作す雲滿身。

萬里方看汗流血。

萬里方に看る汗血を流すを。

長安壯兒不敢騎。

長安の壯兒敢て騎らず。

走過擊電傾城知。

走過擊電傾城知る。

青絲絡頭爲君老。

青絲頭に絡ひて君が爲めに老ゆ。

何由卻出橫門道。

何に由てか卻つて出でむ橫門の道。

【一】猛氣 馬のたけき元氣。【二】伏櫪 老驥伏櫪、志在千里。【三】踏高 高とは厚きないふ、險に耐ふ。【四】如踏鐵 蹄の堅きをいふ。【五】五花 居延驛、即ち新羅省ロプノル湖の地方、安西より來るには、こゝを經過す、此の功成、凱凱の二句は倒裝法を用ふ、前後を置きかへてみるべし。【六】萬里 安西と長安との大凡の距離。【七】方看 眼前實際に之を見るをいふ、單に馬の能力を説くに非ず。【八】汗流血 漢の時大宛國の天馬は石をふみ血を汗にすと傳ふ、この馬もそれと似たり。【九】不敢騎 のりきらぬ。【十】元氣 驥は「ひく」、馬の走るとき快速非常にして電光をひくがごとし。【十一】傾城 城中の人ごとく。【十二】青絲 面づらの繩に用ふる青色のきぬいと。【十三】絡頭 あたまたからがく。【十四】君 高仙芝をさす。【十五】出 外へでる。【十六】橫門 長安の西北の第一門の名、この門を出でて西域の方へ向ふなり、結尾の二句直に馬の心ないふ。

【題義】安西都護高仙芝の騎れる驥馬の歌。天寶八載長安にての作。  
【詩意】安西都護高仙芝の乗り料たる胡産の驥馬、それは聲價あるものとうはさびにのみ聞いてゐたがにはかに東の方長安の方へむかつて來た。この馬は戰陣に臨んでは久しい前から敵するものがなく、騎り手と心を同一にして大功を成した馬である。この馬が飄飄とかけて遠く流沙の地方からやつてきた、すでに大功を成した馬だからどんな手あつて飼養の方法でも馬がしたいとおもふままである。ところがこの馬はまだ雄雄しい姿をしてゐて老驥がうけるやうな踏み板にへたばつて物をもらふまねはせぬのみか、その猛烈な元氣はいまだに戰場の勝利の事をかんがへてゐるのである。この馬は腕の長さがつまり蹄はあつく之をふみとどろかすときは堅くて鐵をふむやうである、この蹄で幾たびか交河のあたりでかさなつた氷を蹴てくれた。からだは梅の花がたが散らばつて雲が一ぱいにひろがつてゐるやうだ。我は眼前この馬が萬里の道中をして來て血の汗を流すのを見るのである。この馬が

走り過ぐるときは電光をひくやうにはやいことは長安城中のものだれも知らぬものはない、それで長安のわかものもこの馬にはよりのりきらぬ。この馬がいたづらに鄭重に飼はれ頭には青絲をまきつけて飾られて爲す事なくして老いゆく。が馬の心ではどうしたら今の無爲の境を脱して横門の道から外へでられるだらうかとかんがへてゐる。

冬日落城北謁玄元皇帝廟 (原注) 廟有吳道子畫五聖圖

冬日落城北にて、玄元皇帝の廟に謁す

配極玄都闕、憑高禁籟長。極に配して玄都闕づ、高きに憑りて禁籟長し。

守祧殿具禮、掌節鎖非常。守祧殿に禮を具ふ、掌節非常を鎖す。

碧瓦初寒外、金莖一氣旁。碧瓦初寒の外、金莖一氣の旁。

山河扶繡戶、日月近雕梁。山河繡戸を扶け、日月雕梁に近し。

仙李蟠根大、猗蘭奕葉光。仙李蟠根大に、猗蘭奕葉光る。

世家遺舊史、道德付今王。世家舊史に遺さるるも、道德は今王に付す。

畫手看前輩、吳生遠擅場。畫手前輩を見るに、吳生遠く場を擅にす。

森羅移地軸、妙絕動宮牆。森羅地軸を移す、妙絶宮牆に動く。

五聖聯龍袞、千官雁行列。五聖龍袞を聯ぬ、千官雁行列す。

冕旒俱秀發、旒旒盡飛揚。冕旒俱に秀發す、旒旒盡く飛揚す。

翠柏深留景、紅梨迥得霜。翠柏深くして景を留め、紅梨迥にして霜を得。

風箏吹玉柱、露井凍銀床。風箏玉柱に吹かれ、露井に銀床凍る。

身退卑周室、經傳拱漢皇。身退きて周室に卑し、經傳りて漢皇に拱せらる。

谷神如不死、養拙更何鄉。谷神如し死せずんば、拙を養ふ更に何の郷ぞ。

【字解】 (一) 冬日。天寶八載の冬日。(二) 洛城。洛陽城。(三) 玄元皇帝廟。老子の廟なり、唐の高宗の乾封元年に亳州(安徽省潁州府壽州治)に幸して老君廟に謁り、老子を追尊して玄元皇帝となす。玄宗の開元二十九年詔して兩京諸州に各一玄元皇帝の廟を置かしむ、天寶二年三月壬子、親ら玄元廟を祀り、西京(長安)の玄元廟を改めて太清宮となし、東京(洛陽)の廟を太微宮となし、天下のものを兼徵宮となす。廟を宮と改めしは巳に天寶二年に在るに此時の題に玄元皇帝廟といふは舊稱によれるなり。詩中に五聖聯龍袞とある事實は天寶八載閏六月の事なり、題の「冬日」といふは其歲冬なることを知る。九載には作者長安に歸りて三大禮賦を獻じ、洛陽には在らず。(四) 配極。極とは北極星なり、廟は洛陽城北にあるゆゑ極に配すといふ。(五) 玄都。道藏に道君(老子神)處大玄都、坐高蓋天。「三洞經」に玄都上有九曲殿層風臺、瓊房玉室、處於九天之上、玉京之陽とみゆ、玄都は即ち老子神の住む都なり、廟地をみたててかくいふ。(六) 闕。とは深く閉づるなり。(七) 畫高。高きによる、廟は北邙山の上のあり、







【題義】 冬の日に洛陽の城の北にて玄元皇帝(老子)の廟に謁して作れる詩。天寶八載冬洛陽にての作。  
 【詩意】 北邙山上に老子廟があるがこれ北極に配してここに天上の玄都の世界をかこひおくものである。ここは高き地勢によつて妄りに人の出入りを禁する竹矢來が長くつらなつてゐる。守祧の官は嚴重に禮をそなへてこれを守り、掌節の官は符信によつて人あらためをして非常の場合の急變を鎮壓せんとしてゐる。うち見るところ冬日の初寒を冒して碧の屋根瓦が聳え、元氣天上にわたる傍に銅柱が高く突つたつてゐる。周圍の山河は此の廟の繡戸をたすけるが如く、日も月も此の廟の雕刻した梁木に近くかがやいてゐる。老子以後神聖なる李樹はその蟠屈せる根はますます大きく、またうつくしい蘭がその葉をつぎつぎとだして光つてゐるやうに後代になつて盛になつてきた。老子から我が唐までの系譜がどんなにして脈絡をひいて來たかのすぢみちは舊來の史官から遺忘されかきしるされてゐぬからよきはわからぬがともかく老子が説いたやうな道德そのものはりつばに我が今の天子(玄宗)に附與せられてゐる。(別説を用ふれば「史記」には老子世家は遺失されたが道德經の注釋は我が玄宗に附託された。)此の廟に牆壁にかけた畫がある。畫家にもいろいろあるが前輩と稱せらるる人人をも見わたしてみるに吳道子こそは現代に於てのみならず遠く過去へかけてみても畫壇の獨り舞臺をする者だ。彼がかいた森羅せる萬象はそれを見ると大地から抜けでてここへ移されたかとおもはれその非凡の妙はこの廟の牆面に活動してゐる。高祖以下の五人の聖天子はその袞龍の御衣をおならべになつて

ゐるし、また多くの官吏たちが雁の行列のやうにはすかひにつらなつてをり、冕旒の色彩はいづれも飛びたつ様に見える、旌旒のたぐひもことごとくまひあがつてゐる。庭さきをみると翠の柏樹が深深としてげつて綠影をたもつてゐるし、梨の紅葉ははるかに霜をおびてゐるのがみえる。玉柱にはふうりんが風に吹かれてちりんちりん鳴つてゐるし、屋根なし井には銀飾の木架が凍つてゐる。老子は生前自分と自分の身をひきこめて周室に於て卑賤な地位に甘んじてゐたが、その書きのこした「道德經」五千言は後代まで傳はつて、漢の天子(文帝・景帝のごとき)から敬禮を以て迎へられた。老子自身がいたやうに谷神といふものがあつてそれがほんたうに死なぬものとすならば、老子の谷神は今日も存在してゐるだらうが、その神はどの地方で拙を養ひつつあるだらうか。

故武衛將軍挽詞 三首 故武衛將軍の挽詞 三首

嚴警當寒夜前軍落大星。嚴警寒夜に當る、前軍大星落つ。

壯夫思敢決哀詔惜精靈。壯夫敢決を思ひ、哀詔精靈を惜む。

王者今無戰書生已勒銘。王者今戰無し、書生已に銘を勒す。

封侯意疎濶編簡爲誰青。封侯意疎濶なり、編簡誰が爲めにか青き。

故武衛將軍挽詞

【字解】【一】故、死せし人なるをいふ。【二】武衛將軍、官名、其人詳ならず、唐には左・右武衛大將軍各一員、將軍各一員あり、宮禁警衛の法を統領するを掌る。【三】輶車、輿をひきながらうたふたふたことば、死者を送る歌なり。【四】嚴警、宮禁を嚴かに警衛する。【五】前軍、落大星、諸葛亮（孔明）の死せしときの故事を用ふ。孔明晩年魏と戦ひしときその前軍は五丈原にあり、その死なんとき赤色にして芒角ある星あり、東北より西南に往きて孔明の營に投ず、俄にして孔明卒せり。今將軍の死するや之と似たりといふなり。【六】壯夫、部下の兵卒をいふ。【七】戰決、將軍の勇敢、果決なりしこと。【八】哀詔、天子が將軍をお悼みになる詔。【九】精靈、將軍のたましひ。【一〇】王者、王たるもの。【一一】無敵、淮南王の書に王者之師、有て征無と戦といへり、戦とは對等の語、征とは天子が有罪をただすために之をうつなり。【一二】書生已勅路、後漢の賈逵、匈奴を征伐せしとき班固燕然山の銘を作り之を石に勒しほりつけ功を紀す、此句は上句のつぎにて一事をのぶ、勅路を將軍の遺詔をほる事とく説あり、今取らず。【一三】封侯、戰功により侯に封ぜられる。【一四】意、將軍の意なり。【一五】疎濶、まどほなるをいふ、意ありて切ならざるをいふ。【一六】勳簡、簡は竹にてつくりしふだ、古人は青竹をわり之をあみて表面に漆を以て字を書せり。【一七】爲誰青、青とは簡の青きをいふ。爲誰青とは書すべき事功がないのに何人のために青いのか、徒らに青い色して手もちぶまたでないかといふなり。

【題義】死せる武衛將軍のためにつくれる喪の歌辭。天寶六七載頃長安にての作ならんといふ。

【詩意】寒い夜にあたつて將軍はいつものやうに宮禁の警衛をしてゐたところが前軍に大きな星が落ちて將軍はこの不吉の前兆とともに歿してしまつた。それで従前部下であつたわかもめたちは將軍の在りし日の勇敢果決であつたことを深く思ひ、聖天子はかなしげな詔を發せられて將軍の靈魂の返らざるをお惜みになる。今日は班固の如き書生がはやくも山上の石に戰功を紀して銘をほりつけるといふやうな治まつた御代で、王者の代だから戦ひなどいふものはない。戦がないから將軍も平生功を

たてて侯に封せられたりなどの意はすこぶるうすかつた。だから簡をあんだ記載する物はあるが記載すべき事功は無い、簡が青いのはだれのためにしやうとて青い色をしてゐるのか。

【一〇】

【一一】

舞劍過人絶、鳴弓射獸能。

劍を舞すは人に過ぐる絶し、弓を鳴らし獸を射るを能くす。

銛鋒行愜順、猛噬失蹻騰。

銛鋒行らすこと愜順なり、猛噬蹻騰を失す。

赤羽千夫膳、黄河十月冰。

赤羽千夫の膳、黄河十月の冰。

横行沙漠外、神速至今稱。

横行す沙漠の外、神速今に至つて稱せらる。

【字解】【一】舞劍、劍を以て舞ふ。【二】絶、絶はなはだ。【三】能、よくす、できる。【四】銛鋒、劍のするときほこまき。

【五】行、めぐる、運行すること。【六】愜順、かなひしたがふ、意のままにそのとほりになること。【七】猛噬、たけくかみつくもの、上の獸をうけていふ。【八】蹻騰、壯んをどりあがるさま。【九】赤羽、旗なり、孔子家語に子路曰、願得白羽若月、赤羽若日とみゆ。【一〇】千夫膳、千人の壯夫に膳をそなへ食せしむる。【一一】神速、兵を行ふことの不思議にはやきこと。

【詩意】將軍は劍を舞はすことは非常に人よりもこえてをり、弓を鳴らしては獸を射とめることを能くした。劍をまはす場合にはそのするどいほこまきが意のままにめぐらされるし、弓を射るときにはいかにたけく噬みつゝ猛獸もその折角のをどりあがる力を失つてしまつた。この將軍が生前には十月

ごろ黄河の氷をふみわたり、赤羽旗の陣中で部下千人の壯夫に餅食せしめ、遠く沙漠の外まで自由に横行した、その兵を行くことの神速なりしことは死後の今日までも人の稱する所である。

(三)

(三)

哀挽青門去新阡 絳水遙

哀挽青門より去る、新阡絳水遙かなり。

路人紛雨泣 天意颯颯風颺

路人紛として雨泣す、天意颯颯颺たり。

部曲精仍銳 匈奴氣不驕

部曲精にして仍つて鋭に、匈奴氣驕らず。

無由觀雄略 大樹日蕭蕭

雄略を觀るに由なし、大樹日に蕭蕭たり。

【字解】 一 哀挽、かなしく恨をひく。 二 青門、長安の東面最南、霸城門の別名、其門青きにより青門といふ。 三 新阡、阡は墓道なり、將軍の故郷のそれをいふ。 四 絳水、山西省絳州絳縣の西南に出づる川、之によれば將軍は絳州の人なるべし。 五 紛、みだるる貌。 六 雨泣、雨ふる如く涙をおとしてなく。 七 天意、天のころ、想像していふ。 八 颯、風のおとなり。 九 颯颯、颺は下より吹きあぐるかぜ。 一〇 部曲、曲とは部に屬する小分隊の名。 一一 精、えりぬき。 一二 仍、よりて、やつぱり。 一三 銳、ほこさき下るとし。 一四 匈奴、北狄の名。 一五 觀、みる。 一六 蕭蕭、いさましいばかり、と。 一七 大樹、馬異が故事、已に前に見ゆ、墓邊の樹をいふなるべし。 一八 蕭蕭、さびしきさま。

【詩意】 將軍の柩はかなしくひかれて青門からでかける。それははるかかなたの絳水のながるる地方の新しい墓道に向ふのである。みちばたの人たちも紛紛として雨のやうに涙をおとしてなき、天の意

もかなしいとみえて、吹きまくる風がさつと音をたてる。嘗て將軍に屬してゐた部隊は、いまもやつぱり精銳であつて、之あるがために匈奴の北狄も威張らぬのである。が、遺憾ながら將軍は死んでしまふたからその雄略をみるすべがなく、ただ將軍を表象する墓邊の大樹が日に日にさびしく立つばかりである。

贈翰林張四學士泊

翰林の張四學士泊に贈る

翰林逼華蓋 鯨力破滄溟

翰林華蓋に逼る、鯨力滄溟を破る。

天上張公子 宮中漢客星

天上の張公子、宮中漢の客星。

賦詩拾翠殿 佐酒望雲亭

詩を賦す拾翠殿、酒を佐く望雲亭。

紫誥仍兼綰 黃麻似六經

紫誥仍りて兼ね綰ぐ、黃麻六經に似たり。

內頒金帶赤 恩與荔枝青

内より金帶の赤きを頒つ、恩與荔枝青し。

無復隨高鳳 空餘泣聚螢

復た高鳳に隨ふ無し、空しく餘す聚螢に泣くを。

此生任春草 垂老獨漂萍

此の生春草に任かす、垂老獨り漂萍。

儻憶山陽會 悲歌在一聽

儻くは山陽の會を憶はば、悲歌一聽に在り。

【字解】 翰林學士。「新唐書」百官志によるに、玄宗初め翰林待詔を置き四方の表疏の批答、應和の文章を掌らしむ、既にして又文學の士を選び翰林供奉と號し集賢院學士と制詔書敕を分掌せしむ、開元二十六年又翰林供奉を改めて學士と爲し、別に學士院を置いて専ら内命を掌らしむ、其後選用益々重くして禮遇益々親しく親して内相となすに至る、内宴には宰相の下、一品の上に居るといへり。開元二十六年翰林學士を置きしとき太常少卿張垵、起居舍人劉光謙等を首として之に居らしむ。垵は玄宗の女弟親公主の婿なり。【一】張垵、玄宗の驛臣にして宰相たる張垵二子あり、均といひ垵といふ、皆文を能くす。四は從兄弟間の順位。(このこと以下註せず。【二】翰林、學士の地位をいふ。【三】通、近きをいふ。【四】華蓋、天文に大帝(星名)の上の九星を華蓋といふ、大帝の座をおほふを以ていふ。【五】斝、文章の才の雄なるをたとへていふ。【六】波、波をよぶ。【七】滄溟、ひろきうみ。【八】天上、地位の高きをいふ。【九】張公子、漢の成帝微行して張放が家人なりと稱す、時に宣詔ありて之を張公子といふ、字面は之に本くもこは張姓の貴公子といふことにて垵をさす。【一〇】漢客星、客星は使者をいふ、漢の張騫武帝の使となりて天の河に至りし語あり、杜市の「贈太常卿張垵」詩の節事聞重譯、嘉賓及遠客の句によれば垵は嘗て外國に使せしことあるに似たり。又徐陵が詩に張星舊在天河上、出來張姓本連天とあるによれば垵の姓の點よりしても張氏を星と呼びうるなり。或は垵は玄宗の女弟なれば俗に女弟を嬌客とよぶ如き意にて之を客星といへるなりとの説あり、定説を得がたきも今暫く使者の義とみる。【一一】拾翠殿、殿の名、大福殿の東南にあり。【一二】佐酒、酒をつぎまはる助けをする。【一三】望雲亭、亭の名、景福臺の西にあり。【一四】紫駝、駝は駝命のおかきつけ、之を對するには紫色の泥を用ふ、故に紫駝といふ。【一五】仍、よりて。【一六】象船、船はつなぐ、制詔はもと集賢學士の領する所、今翰林學士之を分掌するを以て象船といふとの説あり、翰林學士に他の職務ありて乙事を分掌するならば分掌し象船といひ得べけんも、本來制詔等を掌るが翰林の職務ならば他と分掌せりとて之を象船といふ理由はなし、因つて考ふるにこの象船は下の黃麻に對する語ならん、紫駝を掌るうへに黃麻をも象船す、その黃麻は六經に似たりといふ文法ならん。【一七】黃麻、黃麻白麻は紙の種類なり、詔書を寫すに黃麻紙を用ひ、制に白麻紙を用ふといふ、しかしまた詔に白麻紙を用ふといふ、時によりて變易ありしなるべし、こは詔をかく紙をいふ。【一八】似六經、詔の文が典義な、六經の文章と似てゐる。【一九】内領、宮中に變易ありしなるべし、こは詔をかく紙をいふ。【二〇】似六經、詔の文が典義な、六經の文章と似てゐる。【二一】内領、宮中の内廷からわちらぐこと。【二二】金帶赤、黃金を飾つた赤い色の帶、四品官の緋服、五品官の淺緋服は金帶を用ふ。【二三】恩命、恩命により與へらるるもの。【二四】荔枝、龍眼内に似たる果物の名、南方暖地に産す、楊貴妃之を好み早飛脚にて北へ傳送せし話あり。【二五】高風、高くとぶ風皇、垵をたとへていふ。【二六】春草、晉の車胤が故事、胤は家貧しくして油なく夏は螢をあつめ籠にいれその光にてらして書を讀む、自己の貧なるをいふ。【二七】在春草、解しがたき句なり諸家明解なし、愚案するに「楚辭」の王孫遊兮不歸、春草生兮萋萋を用ひしならん。即ち春草は生ずるも自己の流浪して故郷に歸らざるをいふ。【二八】垂老、老いかかつて。【二九】懶、ただよへるよもぎ、流浪のさま。【三〇】元、儘、もしくは、萬一、ひよつと。【三一】山陽會、魏の魯廣河内の山陽に高居し王戎、向秀と同遊す、今借り用ふ、此句作者嘗て垵等と同志の交遊をなせしことあるによりて言へるものなるべし。【三二】悲歌、この詩をさす。【三三】在、重要な點がそこにあるといふこと。【三四】一聽、ひとたびきく、垵がきくなり。

【題義】 翰林學士張垵に贈れる詩なり。天寶九載河南より長安にかへりしときの作ならんといふ。【詩意】 君の居る翰林學士の地位は、大帝星を蔽ふ華蓋星座に近きほど天子に接近した高處にある。君の文筆の力は鯨の力がひろうみの波浪を破つてすすむやうな強さである。君は天上界の張公子なりといふべく、君は宮中に於ける漢の使者の星にも比すべきものである。君は拾翠殿で詩を賦したり、望雲亭で酒をつぐおあひてをしたり、紫駝を起草する上に黃麻の詔を草することをまかね、その詔文は六經の文のやうである。君は天子から御寵愛をうけて赤色の金帶を賜はつたり、青い荔枝の實をくださつたりする。自分はあれ以來再び高く飛ぶ鳳皇ともいふべきあなたに隨ふことなく、いたづらに車胤の如く聚めた螢の前で泣いてゐるといふありさまである。我が生涯は流浪していたづらに故郷

の春草しゅんそうの生なずるにまかせ、この老境らうきやうにさしかかつてただひとりうきよもぎの如く水みづにただようてゐるのである。あなたが萬一まんいちむかし我われ我われ同志どうしが一いっしよにゐた山陽さんやうの會かいのことをおもふならば、今いま自分おれがうたふこの悲かなしい歌うたをただひとたびきいてくださることを切望きつぼうする。

樂遊園歌 (原注) 晦日 賀蘭楊長史筵醉歌 樂遊園の歌

樂遊古園峯森爽らくいうこえんさうしんすわう、

煙綿碧草萋萋長えんめんしやくそうせいせいちやう、

公子華筵勢最高こうしけわてんせいせうがうち、

秦川對酒平如掌しんせんたいしゆへいじやう、

長生木瓢示ちやうせいぼひょうし、

眞率しんそつ、

更調鞍馬狂歡賞まうてうあんばきやうかんしやう、

青春波浪芙蓉園しゆんしゆんはうたふくわうふくわう、

【字解】 【一】 樂遊園。また樂遊

原といふ、唐の京兆萬年縣の南八里

にあり、杜市の居りし社殿の西北に

在り、「西京記」に樂遊園、漢宣帝所

立、唐長安中、太平公主、於原上二置

亭遊賞、其地四望寬敞、每三月上巳、

九月重陽、士女戲遊、此、就觀登、高、

欄幕雲布、車馬填塞、虹影映日、羅香

滿路、朝士朝人賦詩、翌日傳於京

師、とあれば其の遊賞の盛なりしこ

と思ふべし。 【二】 晦日。唐にては

正月晦日・三月三日・九月九日な三令

白日雷霆夾城仗はくじつらいげいさつじやう、

閶闔晴開詠蕩蕩かんかんせいけいえいたうたうた、

曲江翠幙排銀榜くわじゆすいあくはいぎんぼう、

拂水低回舞袖翻ふきすいひていゝまいしゆくはん、

緣雲清切歌聲上えんぐんせいせつかせうじやう、

卻憶年年人醉時よくいふねんねんじんさいじ、

只今未醉已先悲ただいまみさいいせんせい、

數莖白髮那拋得たぐいばくはつななげうた、

百罰深杯亦不辭ひやくばつしんぱいよくふし、

聖朝亦知賤士醜せいしやうよくちせんししう、

一物自荷皇天慈ひとつよりかみんてんじ、

此身飲罷無歸處こみんしんぱいむききよ、

獨立蒼茫自詠詩どくりつそうぼうじようし、

白日雷霆夾城の仗。

閶闔晴れ開いて詠として蕩蕩たり。

曲江翠幙銀榜を排す。

水を拂うて低回舞袖翻へり、

雲に縁つて清切歌聲上る。

卻て憶ふ年年人酔ふの時。

只今未だ酔はざるに已に先づ悲しむ。

數莖の白髪那を抛ち得む。

百罰深杯も亦た辭せず。

聖朝亦た知る賤士の醜なるを。

一物自ら荷ふ皇天の慈。

此の身飲み罷みて歸する處なし。

獨立蒼茫自ら詩を咏す。

節となす、これ正月晦日をさすなら

ん、今の太陽曆の三月頃なれば草も

萌え出づるなり。 【一】 賀蘭楊人

の姓名ならん。 【二】 長史。官名、

長史の官は諸官府に之あり、この人

いづれの官府の長史なるや明かなら

ず。 【三】 樂遊古園。樂遊園は古昔

よりある處なれば古の字をばさみ用

ふ。 【四】 翠。シュツ、ソツの二音

あり、山の危峻なる貌。 【五】 森爽

木立ちならび氣さわやかなり。 【六】

煙綿。綿とは連綿の綿、連なるをい

ふ。 【七】 萋萋。くさのしげる貌。

【八】 長。のびる。 【九】 公子。賀蘭楊長史をさす。 【一〇】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【一一】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【一二】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【一三】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【一四】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【一五】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【一六】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【一七】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【一八】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【一九】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【二〇】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【二一】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【二二】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【二三】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【二四】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【二五】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【二六】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【二七】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【二八】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【二九】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【三〇】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【三一】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【三二】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【三三】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【三四】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【三五】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【三六】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【三七】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【三八】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【三九】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【四〇】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【四一】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【四二】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【四三】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【四四】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【四五】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【四六】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【四七】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【四八】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【四九】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【五〇】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【五一】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【五二】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【五三】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【五四】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【五五】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【五六】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【五七】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【五八】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【五九】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【六〇】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【六一】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【六二】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【六三】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【六四】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【六五】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【六六】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【六七】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【六八】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【六九】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【七〇】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【七一】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【七二】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【七三】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【七四】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【七五】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【七六】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【七七】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【七八】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【七九】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【八〇】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【八一】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【八二】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【八三】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【八四】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【八五】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【八六】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【八七】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【八八】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【八九】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【九〇】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【九一】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【九二】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【九三】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【九四】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【九五】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【九六】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【九七】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【九八】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【九九】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。 【一〇〇】 聖朝。賀蘭楊長史をさす。

ら、まつたひらなるをいふ。【二】長生木。木の名、之を以て酒をつくる。【三】酒をいれるふくべ。【四】示。本文の示は「文苑英華」に樂とあれば樂かもしれず、樂字の草體が示となりしか、示眞申ならば奇形の酒をぶらさげありのままた人にみせながらの意なるべし。【五】眞申。心を飾らすありのままたにしておくこと、飲器などにとんちやくせぬをいふ。【六】馬をのりならず。【七】狂。やたらにするをいふ。【八】青春。はる、五行の考にて春の色を青とす。【九】芙蓉園。長安城の東南にあり、曲江の西南に位す、これと香園とは秦の宜春下苑の地なり、園内に芙蓉池あり。【一〇】雷聲。かみなり、いかづち、これは車馬音楽等の音をたとへていふ。【一一】夾城。伏。伏は天子行幸の儀仗はたましものをつらねし行列をいふ、夾城とは道壁を以てはさまたる道路なり、開元二十年に大明宮より芙蓉園までこの道路を築けり。【一二】雷門。天の門なり、これは宮城の門をさす。【一三】歌聲。漢の郊祀歌に見ゆ、如淳の解に天體清聲之狀といへるも其義を得ず、蓋し城門のがたついでとどろくさまをいふならん。【一四】曲江。下にみゆ、「青春」の句よりこの「曲江」の句までは曲江と宮城とを交互に敘したり。【一五】翠帳。みどりのまく。【一六】排。排列する。【一七】銀鑿。銀字でかいたかんばん、これは遊覽者の座次をあらはすため帳の外へ貴族などが家名爵號等を書きたるかんばんをなだすなり。【一八】低回。ゆらつくさま。【一九】綠雲。たかくのぼるをいふ。【二〇】清切。すみわたつてみにしむやうに。【二一】上。のぼる、下より空さまにたちのぼる。【二二】御。前段は遊樂をのぶ、こは一轉す、故に「御」といふ。【二三】只今。現在をいふ。【二四】數聲。聲は本といふの類。【二五】那。なんぞ。【二六】地。棄て去るといふ類。【二七】百罰深杯。杯の深いので百杯も罰してのませる、桑父が故事。【二八】醉。醉退する。【二九】聖朝。今の朝廷。【三〇】誰士。誰士とは作者自らいふ、誰とは老饒なるをいふ。此語によれば老饒なるを以て首途にのぼされぬといふなり。【三一】一物。一箇の事物にても、これは廣くいふ、誰とは老饒なるをいふ。此語に「一物」とは酒を指すとの解は余之を取らず。【三二】若花。竟放のさま、これを物然歎の興のさまと解するは余之を取らず。【三三】題義。樂遊園のことをうたへる歌、みそかに長史賀蘭楊なる人の筵席に於ける醉時の歌なり。作者天寶九載に賦を獻じ、未だ用ひられざりしときの作、蓋し天寶十載正月晦日の作ならん。

【詩意】樂遊園のこのふるにはは高くそびえて木立ちしげり氣象さわやかな處だが、もはや春になつたから煙がたなびき碧の草が萋萋としげりのびてゐる。ここに賀蘭公子が設けたうつくしい酒のむしろは一ばん高い地勢に據つてゐるので、ここからみると我が手にする酒と對して秦川の水面が手のひらのやうにみえる。一座の人人は天然のままの長生木の瓢をぶらさげながら、さらに鞍おいた馬をのりこなしながら正氣のさたとおもはれぬほどあちらこちらとよろこんでながめまはる。遠くはこの春にあたつて波をたたへてゐる芙蓉園のあたり、そこにはまひるであるのに雷聲がとどろくかとおもはれるやうな音をたてて夾城の路に天子の儀仗がおなりになる、御所の御門が晴天にをどろをどろに開かれると貴族たちも我も我もと出かけて來て曲江では翠帳をはりつらね外面に銀字のひかりあざやかに某殿某殿と座席のふだが排列せられる。美人の舞の袖はゆらつきながら水をはらうてひるがへり、すみきつた歌の聲はたかく雲によりそうてのぼる。ひるがへつておもふ毎年毎年いまごろ衆人の酔ふ時節にあたつてゐることを、いつもはおもしろく自分も酔うたのだに今日は酔はぬうちからはや悲しくなる、いつのまにか生じた四五本の白髪はすて去ることもできぬ。この愁をまぎらすには深い杯を幾盃罰せられても辭退せぬつもりだ。今日の聖代ではたとひ一物の微なるものも皇天の慈愛を蒙つてゐるのだが、その聖代にかかはらず自分は自分の如き賤士は老饒で（もはや世用に適せぬもので）あることを知つてゐる。さてこのからたは酒をのみをはつたところどこへとも歸著すべき

揚塵をもたぬのだ、しかたなくばんやりとさびしく一人立ちとまつて自分みづからかやうな詩をうたふのである。

同諸公登慈恩寺塔 (原注) 時高適薛據先有作

諸公が慈恩寺の塔に登るに同じくす

高標跨蒼穹。烈風無時休。  
 自非曠士懷。登茲翻百憂。  
 方知象教力。足可追冥搜。  
 仰穿龍蛇窟。始出枝椽幽。  
 七星在北戶。河漢聲西流。  
 羲和鞭白日。少昊行清秋。  
 秦山忽破碎。涇渭不可求。  
 俯視但一氣。焉能辨皇州。

高標蒼穹に跨る、烈風時として休むことなし。  
 曠士の懐に非るよりは、茲に登らば百憂を翻さむ。  
 方を知る象教の力、冥搜を追ふべきに足るを。  
 仰いで穿つ龍蛇の窟、始めて出づ枝椽の幽なるを。  
 七星北戸に在り、河漢聲西に流る。  
 羲和白日に鞭ち、少昊清秋に行る。  
 秦山忽ち破碎す、涇渭求むべからず。  
 俯視すれば但だ一氣、焉ぞ能く皇州を辨せむ。

廻首叫虞舜。蒼梧雲正愁。  
 惜哉瑤池飲。日晏崑崙丘。  
 黃鶴去不息。哀鳴何所投。  
 君看隨陽雁。各有稻粱謀。

首を廻らして虞舜に叫ぶ、蒼梧雲正に愁ふ。  
 惜い哉瑤池の飲、日は晏い崑崙の丘。  
 黃鶴去つて息まず、哀鳴何の投する所ぞ。  
 君看よ隨陽の雁、各稻粱の謀有り。

【字解】(一) 同。他人の作時に和してつくること。(二) 諸公。高適・薛據等をさす。(三) 慈恩寺。長安志に慈恩寺在。萬年縣東南八里。「兩京新記」に京城東第一街通昌功慈恩寺、隋無漏寺故地、西院浮屠六殿、高三百尺、永徽三年、沙門玄奘所立とあり、現今も陝西省西安府城の城外東南に巍然として存す。(四) 塔。塔に同じ、即ち上文の浮屠なり、或は之を大雁塔といひ、塔の南面に精進良の書せる「雁塔聖教序」の碑を拊す、唐の時には進士に及第せるものこの塔上にのぼりて姓名を題する習俗あり。原註に見えたる薛據の詩は亡びて傳はらず。  
 高適の詩は左の如し。

同諸公登慈恩寺浮圖

高適

香界說。羣有。浮圖豈。諸相。登臨。孤高。披拂。欣。大壯。言。是。羽。翼。生。週。出。虛。空。上。頓。疑。身。世。別。乃。覺。形。神。王。當。關。皆。戶。前。山河。盡。蒼  
 向。秋。風。昨。夜。至。秦。塞。多。游。騎。千。里。何。蒼。蒼。五。陵。豈。相。望。感。時。暫。既。步。未。忘。知。周。防。輪。效。獨。無。因。斯。焉。可。遊。放。  
 高適また同諸公登慈恩寺浮圖見南山作あり、其辭に曰く  
 南山鬱初舞。曲江流不流。若臨瑤池前。想望崑崙丘。廻首見。綠。色。渺。然。波。上。秋。深。沈。鬱。靜。曉。前。邊。延。阻。管。連。潭。高。木。影。抽。岸。千  
 巖。巖。香。飄。信。綠。澗。商。輪。無。暗。投。片。雲。對。漁。父。獨。鳥。隨。虛。舟。我心。寄。青。霞。世事。數。白。頭。得。意。在。乘。興。忘。懷。非。外。求。良。辰。自。多。暇。欣  
 興。數。子。遊。

同諸公登慈恩寺塔



同時岑參の作は左の如し。

興高適薛據一登慈恩寺浮圖

岑

參

塔勢如涌出。孤高聳天宮。登臨出世界。證道懸虛空。突兀壓神州。嵒巖如鬼工。四角礙白日。七層摩蒼穹。下窺指高鳥。俯視聞驚風。蓮山若波濤。奔浪似朝東。青槐夾馳道。宮館何玲瓏。秋色從西來。蒼然滿關中。五陵北原上。高古晉陵梁。穆理了可悟。勝因民所宗。晉將挂冠去。楚遣資無窮。

又儲光羲の作は左の如し。

同儲光登慈恩寺塔

儲光羲

金刹起真宇。直上青雲垂。地勢我亦開。登之秋清時。蒼葦宜春苑。片碧昆明池。誰道天潢高。逍遙方在茲。虛形質太極。拙手行翠雲。雷雨傍各冥。鬼神中護記。靈變在倏忽。莫能窮天涯。冠上圓閣開。屋下鴻雁飛。宮室低迴過。羣山小參差。俯仰宇宙空。庶隨了義歸。儲男非大度。久居亦以危。

此詩の題高適の題によれば「諸公と同じく」と同じく可なるに似たるも、岑參が詩題によれば「興高適薛據」とありて他の人の姓名無ければ杜甫儲光羲は果して同時共に登りしや否や決しがたし、故に同和の義とみなしおくなり。

- 【一】高標 たかきめじらし、塔をさす。【二】時 またがる。【三】蒼穹 あなきらりの天井、そらなをいふ。【四】曠土 胸中のひろさひと。【五】懷 胸中、心。【六】茲 塔をさす。【七】翻 ひるがへす、逆さたせること。【八】象教 佛教をいふ、象は像なり、形像をつくりて人を教ふるなりといふ。【九】道 古人の跡をおふ。【一〇】冥搜 ふかくまぐる、幽奇の境地をまぐり求むるなり、孫綽が天台山賦序にみゆ。【一一】龍蛇窟 塔内の螺旋狀の升り路をたとへていふ。【一二】枝樛 交木なり、路をさまへるため材木をくみてあるなり。【一三】幽 おくまかくくらつばい。【一四】七星 北斗七星。【一五】北戸 塔の北面の戸。【一六】河漢 あまのがは。【一七】犀西流 あまの河に聲は無けれどもも有る如く感するをいふなり、西流とは東から西へとながれること。【一八】俄和 太陽は車にのり、その車は俄和によつて馬を御すと考へらる。【一九】少昊 秋を掌る神。【二〇】行 めぐる。

- 【一】泰山 關中の山山。【二】破碎 錯雜せるをいふ。【三】濯濯 二水の名、濯水は濁り、清水は清し。【四】不可求 清濁求めて分ちがたきをいふ。【五】辨 區別する。【六】皇州 帝都の地方をいふ。【七】虞舜 帝舜有虞氏、古代の聖君。【八】蒼梧 地名、舜の葬られし地、此二句古聖君を思ふをいふ。【九】堦池飲 周の穆王、崑崙の邸に升り、遂に西王母に賓となり堦池の上に膳すとの話「列子」にみゆ、此の二句は玄宗の楊貴妃に溺るるをいふ。【一〇】雲 雲、おとし、暮れかかること。【一一】巖崑丘 上にみゆ。【一二】黃鶴 高く飛ぶ鳥、以て自己に比す。【一三】去 此の去の字は下の雁と關係してみる。【一四】息 息止する。【一五】何所投 我が身を投ずる所の地は何處ぞ。【一六】隨陽雁 尙書「禹貢」に隨陽の語あり、注に隨陽之鳥、鴻雁之屬、とあり、鴻雁は陽氣の寒暖に隨つて、或は南し或は北す、此の二句は一飯衣食のために權勢に附き餘位を貪る人人に比す。【一七】稻粱謀 稻粱を求むるばかりこと、梁はよき米なり。

【題義】多くの人人が慈恩寺の塔に登つて作つた詩に自分も和して作る。作詩の時期は不明なるも、蓋し天寶十載の秋ならんか。

【詩意】高い高いめじるしが青空にまたがつて立つてゐる。そこには烈しい風がいつも吹きすすんで休止する時ではない。よほどの胸中の溷大な人でないかぎりはこの處へ登つたならばさまたまの憂ひの心をわきたたせることであらう。だが佛教の力によつてこそ古人のなしたごとく我我も幽奇なる境地を探ることが十分できるといふものだ。先づ上を仰ぎながら龍蛇のいはやのやうなうねり路をくぐり、それからやつと支柱の組み合はせのうすぐらい所からぬける。北方の戸には七星が懸つてゐる。天の河が聲をたてて西へ向つて流れてゐる。太陽の御者羲和は馬に鞭をくれて日車をはし

同儲光登慈恩寺塔

らせる、秋の神少昊は秋にあたつて巡行をはじめてゐる。忽ち關中の山山は紛亂して破砕せるが如く、涇水・渭水の清濁もわからなくなり、下を見おろせばただ一氣がたちこめてゐるばかりでここが帝都の在る處であるかどうかもさつぱり見わけがつかぬ。」自分は上のさまを見て首を回らして古の聖君舜にむかつてさげふ（舜出でよかしとの意）が蒼梧の方面は雲が愁はしげにとざしてゐる。惜むべきことでないか、穆王（玄宗をいふ）が瑤池で西王母と酒を飲んでゐる、そのまに崑崙の邱に日はくれかかつて來てゐるといふことは。黃鶴はすんすん飛んでいつてしまふ、（我が身の如く）彼はかなしうに鳴いてゐるがどこへ身をおちつけるつもりなのであらう。諸君看よ、陽氣につれて南北する雁といふものがあるが、これはそれぞれ稻梁を求めするために謀をめぐらしてゐる。（これは黃鶴とは類を異にするものだ）黃鶴はそんなものには目もくれす千里の遠くへ飛び去るのである。

投簡咸華兩縣諸子 咸華の兩縣の諸子に投簡す

赤縣官曹擁才傑 赤縣の官曹才傑を擁す。  
軟裘快馬當冰雪 軟裘快馬冰雪に當る。  
長安苦寒誰獨悲 長安苦寒誰か獨り悲む。

【字解】 〔一〕投簡 簡は書簡なり、投簡とはてがみを先方へぶつけてやること。〔二〕咸華 咸陽、華原、ともに長安近くの縣の名、簡本に咸を成に作れるは誤なり、仇亮輩之を正して咸とせり。〔三〕諸子 交遊ある人人。〔四〕赤縣 京都の治所のある地の縣を赤縣とし、京の旁邑を畿縣とす。唐の縣には赤・畿・望・華・上中・下等の階級あり、京兆府に就ていへば長安・萬年等は赤縣にして咸陽・華原等は畿縣なり、この本文の赤縣は長安をさす。〔五〕官曹 曹は讓司をいふ、官曹とは諸役人のこと。〔六〕擁 ださかかへる、抱有すること。〔七〕才傑 才能あるすぐれた人物。〔八〕軟裘 やはらかな毛がけの着もの。〔九〕快馬 ばやく走るうま。〔一〇〕當 堪抗する意、對する。〔一一〕長安 都城をさす。〔一二〕苦寒 ひどい寒さ。〔一三〕杜陵野老 杜陵は萬年縣の東南二十里にあり、漢

杜陵野老骨欲折 杜陵の野老骨折れむと欲す。

南山豆苗早荒穢 南山の豆苗早く荒穢。

青門瓜地新凍裂 青門の瓜地新に凍裂す。

鄉里兒童項領成 郷里の兒童項領成る。

朝廷故舊禮數絕 朝廷の故舊禮數絶ゆ。

自然棄擲與時異 自然棄擲せられて時と異なり。

況乃疎頑臨事拙 況や乃ち疎頑事に臨みて拙なるをや。

饑臥動即向一句 饑臥動もすれば即ち一句に向ふ。

敝衣何啻聯百結 敝衣何ぞ啻百結を聯ぬるのみなら

君不見空牆日色晚 君見すや空牆日色晩し。 〔一〕 〔二〕 〔三〕 〔四〕 〔五〕 〔六〕 〔七〕 〔八〕 〔九〕 〔一〇〕 〔一一〕 〔一二〕 〔一三〕 〔一四〕 〔一五〕 〔一六〕 〔一七〕 〔一八〕 〔一九〕 〔二〇〕 〔二一〕 〔二二〕 〔二三〕 〔二四〕 〔二五〕 〔二六〕 〔二七〕 〔二八〕 〔二九〕 〔三〇〕 〔三一〕 〔三二〕 〔三三〕 〔三四〕 〔三五〕 〔三六〕 〔三七〕 〔三八〕 〔三九〕 〔四〇〕 〔四一〕 〔四二〕 〔四三〕 〔四四〕 〔四五〕 〔四六〕 〔四七〕 〔四八〕 〔四九〕 〔五〇〕 〔五一〕 〔五二〕 〔五三〕 〔五四〕 〔五五〕 〔五六〕 〔五七〕 〔五八〕 〔五九〕 〔六〇〕 〔六一〕 〔六二〕 〔六三〕 〔六四〕 〔六五〕 〔六六〕 〔六七〕 〔六八〕 〔六九〕 〔七〇〕 〔七一〕 〔七二〕 〔七三〕 〔七四〕 〔七五〕 〔七六〕 〔七七〕 〔七八〕 〔七九〕 〔八〇〕 〔八一〕 〔八二〕 〔八三〕 〔八四〕 〔八五〕 〔八六〕 〔八七〕 〔八八〕 〔八九〕 〔九〇〕 〔九一〕 〔九二〕 〔九三〕 〔九四〕 〔九五〕 〔九六〕 〔九七〕 〔九八〕 〔九九〕 〔一〇〇〕

此老無聲淚垂血 此の老聲無く涙血を垂る。

の宣帝の陵あり、杜陵の南十八里に少陵原あり、宣帝の許皇后の陵あり、杜甫は少陵の附近に住す、故に「杜陵野老」といひ、又「少陵野老」といひ、野老とは田野の老夫の義なり。〔一〕骨欲折 寒の甚しきをいふ。〔二〕南山豆苗 南山は終南山なり、

漢の楊惲志を得ず退きて産業を治む、歌うて曰く、田、彼南山、蕪穰不治、種一頓豆、落而爲其、と。此詩は其意を用ふ。【一〇】青門、瓜、青門は漢の朝城門、漢の初に邵平といふものと秦の東陵侯なりしが門の近地に隠れて瓜をうう、其色五色なりし。詩は其事を用ふ。【一一】地里有童、世に時めく人たちを見くだしていふ。【一八】項領、うなじ、えりくび。【二〇】成、成就する、くびすちが成就するとは蓋し強項ないふ、他人に頭を屈せぬほどの一人前の地位ができたことないふ。【二二】朝廷、朝廷、むかしの知人にして現に朝廷に仕へてなるもの。【二三】禮敬、禮儀のこと、自己に對する禮儀。【二四】爲、爲さざるをいふ。【二五】兼、兼、他人からうすすてておかれる。【二六】與、與、時、時、世俗ないふ、異とは別物になつてゐること。【二七】疎、疎、世事に遠かり、かたくな。【二八】事、事にあつて。【二九】抽、抽、やりかたがまづい。【三〇】儼、儼、はらをへらしてゐること。【三一】動、動、やよしすれば。【三二】旬、旬、十日間。【三三】曾、曾、ただ、何曾とはそれにとどまらぬをいふ。【三四】百結、百結、たくさんつなぎあはせる。【三五】空、空、さびしきかき。【三六】曉、曉、おそし、くれかか。【三七】此、此、此老、この老人、自己をさす。【三八】無、無、無聲、黙して泣く。【三九】血、血、の涙。

【題義】咸陽・華原の二縣にをる知りあひの人人にてがみとしてやつた詩。これは天寶十年お召しにより試験をうけしもの、更に當局のものに命じて選任を待たしめられし時の作なるべし。  
 【詩意】長安の諸役人には才能ある人物が多くゐる。彼等は氷結び雪降るの時にも之に對するにはやはらかな委や足の早い馬をもつてゐる。之に反して長安の極寒の時だれがひとり悲むかといへばそれは自分である。この杜陵の野老は寒さのため骨が折れんばかりである。楊惲のやうに南山に豆ばたけを作つてみたが、豆の苗は早くも雜草にあらされてしまつた。邵平のやうに青門に瓜を作つてみたが瓜ばたけは最近に凍つてひびわれがした。郷里の小兒だとおもつてゐたものどもは一人前の首す

ちをしてゐるやうになつたし。朝廷に居る舊知のものどもは自分に對して何等の禮意をもつてくれない。そんなぐあひで自然と自分は他人からうすすてられて世俗と別物になつてゐる、まして自分の性質が世事に疎く頑固で事にあたるごとにまづいに於てをや。食糧が無いからひもじいままねたきりともすると十日にもならうとすることがある。著物といへばばらばらで百結をつづりあはせたところのさたではない。諸君見てくれたまへ、我がやのさびしいかきに日の暮れかからうとすると、このおやちはしのびねに泣いて血の涙を垂れてゐるのでありますぞ。

杜位宅守歲

杜位が宅にて歳を守る

守歲阿戎家、椒盤已頌花。  
 盞簪喧榼馬、列炬散林鴉。  
 四十明朝過、飛騰暮景斜。  
 誰能更拘束、爛醉是生涯。

【字解】【一】杜位、作者の從弟なるべし、宰相李林甫が將なりといふ。【二】宅、作者、寄杜位詩あり、題下の原注に依京中宅、近西曲江とあり、すなはち其宅の曲江の東にありしことを知る。【三】守歲、おほみそかの夜、よあかしをすること。【四】

阿武、或は晉の王戎、阿はつけことばなり、阮籍、王戎が父王渾と友たりしが、渾の所に來るごとに二十歳ばかりとしたの王戎が  
 とくに話しにゆき、渾に向ひて共嘲言、不知共阿戎、阿戎といへりとぞ、これは阿戎の典故なり。すぐれた青年をまして阿戎とい  
 ふなり、此時にては社位をさす。【二】椒盤、山椒をもつた大ざら、その山椒をつまんで酒に入れてのむ、元日にのむならばなる  
 が時によればとしりの夜にものむとみゆ。【三】頰花、晉の劉琨が妻陳氏元且に椒花頰を獻ぜしといふ、頰とはほめてつくる頰語  
 なり、こは必ずしも社位がさる文を作りしことをいふにあらで、單に親意を表するをいふなるべし。【七】盞、周鼎の象卦  
 の九四に勿疑、朋盞簪とありて王朗の註にては盞、合也、簪、疾也、と解きたり。此の時下句の「列炬」と對せしめれば晉を冠晉の  
 義として疾速の義となさざること明かなり、盞簪とは晉（かんざし、冠をかむるとき髪にさしこむもの）をあつむる義。【八】喧、  
 まびすし、やかまし。【九】鞭馬、鞭はうまやのこみ板、鞭馬とは鞭をふむ馬をいふ、馬は朋友等の乗り來りしもの。【一〇】列炬、炬  
 はマイマツ、柱の木を用ひてつくる、多くたくゆゑ列といふ、これは庭さきにてたく。【二】明朝過、あすになればこゑすぎる、即  
 ち四十一となる。【三】飛騰、元氣激刺たるさま、これは從來のままをいふ。【三】暮景斜、景は日のひかりをいふ、暮景は夕日  
 のひかり、斜とはかたむきかゝること、老境に入らんとするをたとへていふ。【四】指東、我が身をさしける。【五】爛醉、よほど  
 れになる。【六】生涯、生活をいふ。

【題義】社位が宅にておほみそかに夜明かしせしことをつくれる詩。天寶十載作者四十歳のとき長安にての作。

【詩意】自分は阿戎ともいふべき社位が宅で歳こしの夜明かしをする。おほみそかであるがはやくも  
 已に椒盤をもちだして椒花のほめことばをのべたててくれる。この夜はぐれきれきの友だちも多く集  
 つて來てそのためうまやの板をよみならず馬の聲もやかましく、庭先にはたいまつを多くならべて、

そのため林の鶏も驚いて飛びちつてしまふ。(晩近く諸客散らんとする意あり。盞簪二句に風刺の意  
 ありとの説余は之を取らず) わたしはあしたは四十の坂をこえてしまふ、もはや今までの飛騰した態  
 度も晩方に近づいたといふものだ。老いさきも知れたことだ、だれにこの身をしばらくられるのか、せ  
 い一ぱい酒をのんで酔ひどれになる、それがわたしの生涯なのだ。

敬贈鄭諫議十韻

敬んで鄭諫議に贈る十韻

諫官非不達、詩義早知名。

諫官達せざるに非ず、詩義早く名を知らる。

破的由來事、先鋒孰敢爭。

破的は由來の事、先鋒孰か敢て争はむ。

思飄雲物外、律中鬼神驚。

思は飄る雲物の外、律中りて鬼神驚く。

毫髮無遺憾、波瀾獨老成。

毫髮も遺憾なし、波瀾獨老成す。

野人寧得所、天意薄浮生。

野人寧ぞ所を得むや、天意浮生を薄くす。

多病休儒服、冥搜信客旌。

多病にして儒服休し、冥搜客旌に信す。

築居仙縹緲、旅食歲崢嶸。

居を築く仙の縹緲たるに、旅食して歲崢嶸たり。



分は病氣がちなために備者の服をつけながらはたらかすにをり、幽勝の地などをさがしてよらぶら旅客のはたをとばしあるいてゐる。王門の仙界雲氣たなびく處に居所を築いたりはするが、たびすまひのうちいつか歲月はたかくつもつてしまふ。せつかく魯君の使者が顔閭を求めた如く、玄宗皇帝から試験にお召しになつたのに、ごれきれきの人たちが昔曹操等が彌衡をきらうた如く自分をすかれぬのである。自分は君から身の上のことについて一つうんとおひきうけを待ちうけたくおもふ。それにはかかき自分をして胸中をすつかり君にむかつて傾倒させるに至らしめたのである。君は自分が途窮つたところで慟哭してゐるのをごらんになつてゐる、しからは既籍ともいふべき自分について御心配くださつてもしかるべきことではありませぬか。

兵車行

兵車行

車轉機馬蕭蕭。行人弓箭各在腰。耶孃妻子走相送。塵埃不見咸陽橋。

車轉機たり、馬蕭蕭たり。行人弓箭各、腰に在り。耶孃妻子走つて相送る。塵埃には見えず咸陽橋。

【字解】(一)兵車、いくさぐるま、此の詩兵車の動く塵をきき感じて作る、故に兵車行と題す。詩中の且如今年冬、未休關西卒の二句が此篇の製作年代を決定す。之に對して錢謙益は「通鑑」の天寶九載十二月に關西進軍使王繼德が吐蕃を撃ちて

衣頓足攔道哭。

衣を牽き足を頓して道を攔りて哭す。

哭聲直上千雲霄。

哭聲直に上りて雲霄を干す。

道旁過者問行人。

道旁の過ぐる者行人に問ふ。

行人但云點行頻。

行人但云ふ點行頻りなり。

或從十五北防河。

或は十五より北河を防ぎ、

便至四十西營田。

便ち四十に至つて西田を營む。

去時里正與妻頭。

去る時里正與に頭を妻む。

歸來頭白還成邊。

歸來頭白還た邊を成る。

邊庭流血成海水。

邊庭血を流して海水を成す。

武皇開邊意未已。

武皇邊を開く意未だ已まず。

君不聞漢家山東。

君聞かずや漢家山東の二百州。

二百州。

千邨萬落生荆杞。

千邨萬落荆杞を生ず。

兵車行

五橋に克ちし事實を引けり。余は其腹に能ふ。(一)機、車のがらなるおと。(二)蕭蕭、しめやかにしづかなるさま。(三)行人、兵役に赴くひと。(四)在、こしにおびてゐる。(五)耶孃、同じチチ。(六)成、成。成陽は縣の名、渭水をへだてて長安より北の岸にあり、橋は咸陽へわたるためのはしなり、或は西渭橋なりといひ、或は中渭橋なりといふも、まだかならず。(七)妻、女。ゆく人をやらじとひく。(八)頓、足。足にてトントンと地をふむ、おだんだふむ、慟哭のときするさま。(九)備道、道路をさへざる、ゆくてのじやまになること。奉、朝、備、哭、みな耶孃妻子等の爲す所なり。(一〇)干、をかす。(一一)帶、ちんぞら。

縱有健婦把鋤犁。

禾生隴畝無西東。

況復秦兵耐苦戰。

被驅不異犬與雞。

長者雖有問。

役夫敢伸恨。

且如今年冬。

未休關西卒。

縣官急索租。

租稅從何出。

信知生男惡。

反是生女好。

生女猶得嫁比鄰。

縱有健婦把鋤犁を把る有るも、

禾は隴畝に生じて西東無からむ。

況んや復た秦兵苦戦に耐ふと。

驅らるること犬と雞とに異ならず。

長者問ふ有りと雖も、

役夫敢て恨を伸べむや。

且つ今年の冬の如き、

未だ休せず關西の卒。

縣官急に租を索む、

租税何れより出でむ。

信に知る男を生むは悪しく、

反つて是れ女を生むは好きことを。

女を生めば猶比鄰に嫁せしむるを得。

【二】 遺旁過者 ちらなとほりすや

もの、第三者をいふ。【三】 點

行 點とは人名の頭に筆を以て點を

つける、すなはち點つけをしてしら

べるなり、行とは兵行なり、點行

は兵役に赴かしめることについて點

檢するなり、此の「點行類」より最

後の「聲歌賦」まで行人の答辭なり。

【四】 十五、四十 開元十五年に十

五歳のものならば天寶九載に至つて

三十八歳なり、四十といふは成數を

舉ぐるなり。【五】 防河 河は黃

河、河を防ぐとは夷狄の侵入を黃河

の邊に至りてふせぐをいふ、開元十

五年に吐蕃が密をなすを以て關中の

兵萬人を領して臨洮に集め、秋を防

がしめしことあり。【六】 營田

耕田のしことをする、これは屯田す

るをいふ、屯田しながら吐蕃の防備

生男埋沒隨百草。

君不見青海頭。

古來白骨無人收。

新鬼煩冤舊鬼哭。

天陰雨濕聲啾啾。

男を生めば埋沒して百草に隨ふ。

君見ずや青海の頭。

古來白骨人の收むる無し。

新鬼は煩冤舊鬼は哭す、

天陰り雨濕ふとき聲啾啾たり。

【一】 年よるをいふ。【二】 題、また、俗語なり。【三】 成邊、邊は邊境、くにさかひ、吐蕃の地方をいふ、これは長安より西方にあたる、營田と成邊とは同一事なり、「去時」の句は「十五」の句を承け、「歸來」の句は「四十」の句を承くるくみたてなり。

【四】 邊境、關境にちかき戰場。【五】 成海水、多くのふれる。【六】 武皇、漢の武帝をいふ、武帝は西域地方まで侵略して邊境を開拓せし人なり、唐の玄宗をたとへていふ。【七】 開邊、邊境をひろげて我が方へとつりいれるの意、開邊のころ。【八】 漢家、漢の國家、唐の國家のことをいふ。【九】 山東、華山より東といふ説と、太行山より東といふ説とあり、後説を取る。【一〇】 二百州、唐にては關谷關より東に七道、二百七十七州あり、二百とは大凡をいふ。【一一】 千營萬落、落は散在してある民居をいふ、やはり「千營萬落」の意。【一二】 紀くべ、【一三】 健婦、強健なをんな、夫の留守をするものなり。

【一四】 把、手にとる。【一五】 鉤犁、鉤に「すき」。【一六】 禾、すべて種をたす植物をいふ、むぎ、きびの類。【一七】 隴畝、なか、うね。【一八】 無西東、西も東もなしとは行列正しからず亂雑なるをいふ。【一九】 秦兵、秦とは地理上よりいふ、長安の地方、即ち今此の行人の出生地、この兵は昔より強きを以て著ける。【二〇】 耐苦戰、なんきなたたかひにたへることが出来る。【二一】 驅、あとからわひたてる。【二二】 長者、年うへのわかつた、行人より道旁列者、即ち質問をした人をます敬稱。【二三】 役夫、兵役に従ふ

もの、行人自らを護衛してかくいふ。【一〇】仲恨、うらみの心を十分にほらすやうにする。【二〇】今年、前にのべし如く天寶九載、王維得が吐蕃を撃ちしときをさす。【三〇】休、休息、歸休。【四〇】關西卒、關西即ち關西なり、關西卒とは關西吐蕃にてはたらく兵。【五〇】軍官、或は天子をさし、或は國家をさす、彼の辭による、軍官は國家の代表なり。【六〇】素、はたる。【七〇】租、唐の税制は租・調・庸の三より成る、租は穀を出し、調は兵を出し、庸は絹を出す。【八〇】從何、何處から。【九〇】信知、二句、漢の帝皇后の歌に、生男無所喜、生女無所怒、又民間の歌辭に、生男勿喜女勿悲、君今看女作門楣、陳琳が詩に、生男慎其舉、生女嗚用、などあり、古來女を生むを喜べるうたあり、唐にては楊太僕外傳に當時の語をのせて曰く、生女勿悲、生男勿喜、又曰く、男不封侯女作門楣、(云君看女却是門楣)と。作者は唐時代のやりうたについていへるならん。【一〇】嫁、よめにゆく。【一五】比鄰、並に五家をいふ。【二〇】埋沒、死して土中にうづめらる。【二五】隨、まにまに。【三〇】百草、種種の花。【三五】青海、今の甘肅省と西藏との中間に横ばる地、その地に湖あり青海といふ、唐の時の吐蕃の地なり、吐蕃の居る處。【四〇】白骨、戰死者のさらされたはれ。【四五】收、とりかたづける。【五〇】新鬼、舊鬼、鬼とは人の死者をいふ。左傳、文公二年に新鬼大、故鬼小、の語あり。【六〇】煩冤、心もたえて不平なるさま。【六五】新鬼、舊鬼、鬼とは人の死者をいふ。左傳、文公二年に新鬼大、故鬼小、の語あり。【七〇】收、とりかたづける。【七五】新鬼、舊鬼、鬼とは人の死者をいふ。左傳、文公二年に新鬼大、故鬼小、の語あり。【八〇】收、とりかたづける。【八五】新鬼、舊鬼、鬼とは人の死者をいふ。左傳、文公二年に新鬼大、故鬼小、の語あり。【九〇】收、とりかたづける。【九五】新鬼、舊鬼、鬼とは人の死者をいふ。左傳、文公二年に新鬼大、故鬼小、の語あり。

【題義】兵車の聲をききて感じて作れるうた。天寶九載の作ならん。

【詩意】車の音ががらがらする。馬はしとやかにすすむ。でかける人人をみるとめいめいがそれぞれ腰に弓箭をたづさへてゐる。父、母、妻、子が、そのあとからかけながら送つてゆく。ちりほこりがまつくろにたちあがつて威嚇への橋さへ見えぬ。見送るものどもが出発者の衣をひつぱり、ちだんだふみつつ、道路のじやまになりながら哭する。その哭する聲がただちに雲やそらををかしうはさまに響く。』とほりかかりのものが出かける人に「あなたはどこへ何をしにゆかれるのか」と問ふと、

出かける人はただ次のやうに答へる。今は兵役にやられるしらが頻りとなされるのだ。或者は十五のときから北の方黄河の防備にゆき、いま四十ばかりになつてまた西の方へ屯田にゆかうとする。防河にゆいた時は壯丁になりたてであつたから、村長さんが本人のために鉢巻きをしてくれたが、せつかくもどつて來たとおもふと、頭が白くなつてゐるのにまた國境を成りにやれる。國境では他國との土地争ひのため戦争をするので、死者の流す血は海の水のやうにあふれてゐるが、それでも武帝(玄宗)の領土開拓のみところはまだやまない。お聞きにはなりませんか、彼の漢(唐)の山東の二百餘州では多くの村落では耕作の手が不足だから、田野にはイバラやクオがはえてゐる。いくら腕づぶしのつよいをんなが留守をしてすきをしたところで、田岡のうねにはえる作物には方向も何もあつたものではない。それにまた我がこの長安地方の兵は強壯で苦戦にたへることができるといふので、大や難と同じやうにおひたされて戰場へ送りだされる。』あなたはあたづねくだされるが、わたくしはどうして胸中の恨を十分言ひ盡すことができませうぞ。(但し、長者雖有問、役夫敢伸恨の二句は、行人自己の語中にあひてに物いひかけ、ひといきしてまた下の話をつづけるために置きたり。また問・恨の二字前段と韻をかへて用ふ)まあことしの冬の如き、いまだに關西地方へいつた卒を歸休させずにおく。おかみからは、急に租税をだせとせがまれるが、租税がどこからませう。男の兒を生むより女の兒を生む方がよいと申すことだが、今始めてはんにさうだとわかりました。なせ



なら女なら近所へよめにやる事ができるが、男ならどうせ戦死してくさばの下に埋められてしまふばかりである。』ごらんさい、青海のほとりではむかしから戦場に白骨が横はつてゐるが、だれもかたづけてくれるものはない。新しい戦死者は不平をいだき、ふるい戦死者は慟哭し、くもつてしめつばい天氣のをりなど彼等のなきごゑが啾啾ときこえてゐる。

前出塞 九首

前出塞 九首

威威去故里悠悠赴交河。

威威として故里より去り、悠悠交河に赴く。

公家有程期亡命嬰禍羅。

公家程期有り、亡命すれば禍羅に嬰る。

君已富土境開邊一何多。

君已に土境に富めり。邊を開くこと一に何ぞ多き。

棄絶父母恩吞聲行負戈。

父母の恩を棄絶し、聲を吞みて行くゆゑを負ふ。

【字解】【一】前出塞。あとに「後出塞」五首あり、「後」ができてからそれと區別するために「前」をつけ加へたるものにて始に「出塞」とありしはすなり。塞は「とりで」長城のことといふ、長城をこえて出るにより出塞といふ。【二】威威。うれふる貌。【三】故里。故郷。【四】悠悠。はるか。【五】交河。縣の名、今の新疆省の吐魯番の附近。【六】公家。官家、おかみ。【七】程期。置程期限、いつまでにどれほどの路をあるくべしとのきまり。【八】亡命。命は名なり、姓名をかきたる悔籍をいふ、亡とは名籍から脱して逃亡するをいふ、「命より亡する義」。【九】嬰。かがる。【一〇】禍羅。羅はアメのこと、禍のあみとは刑罰にふるさなをい

ふ。【一一】君。天子。【一二】土境。領土といふ。【一三】開邊。邊境を開拓する。【一四】棄絶。ふりすてる。【一五】吞聲。すすりなきする、こゑをたてぬ。【一六】戈。ほこ。

【題義】此詩は天寶の末年哥舒翰が吐蕃に兵を出して戦功を貪るにつき、從軍者の心もちになりてうたへるものなり。

【詩意】ものがなくおもひながら故郷からはなれて、はるばる交河縣の方へと赴く。おかみにはいつまでどこへつくといふきまりがあるし、途中でにげたりすれば刑罰のあみにひつかかる。我が君は已に領地をたんとおもちになつてゐるのだが、なんでまだそんなに多く邊地を開拓しようとなさるのであらうか。しかたがない、わかれともない父母の恩愛をふりきつて、しのびなきしながら戈をせおうてゆく。

〔一〕

〔二〕

出門日已遠不受徒旅欺。

門を出でて日に日に遠し。徒旅の欺を受けず。

骨肉恩豈斷男兒死無時。

骨肉恩豈に斷えむや。男兒死するに時無し。

走馬脱轡頭手中挑青絲。

馬を走せて轡頭を脱し、手中に青絲を挑げ。

捷下萬仞岡俯身試擐旗。

捷く萬仞の岡より下り、身を俯して試に旗を擐る。

【字解】(一) 出門、門は家の門。(二) 徒旅、徒は成卒、旅とは衆なり、衆本を徒旅といふ、なかまのもの。(三) 歎、歎悔の義、だますことに非ず、あなごることなり。(四) 骨肉、親子兄弟をいふ。(五) 思復、ふりさらうとしても實はたされぬをいふ。(六) 無時、一定の時なきをいふ、いつでも死すべき時には死なねばならぬ。(七) 駭頭、頭とは馬腹(馬のはな)はなは、おもしろなり、駭とは驚しかけてある頭からはつすことなり。(八) 徒、かかや。(九) 青絲、これは髻頭からつづく手綱をいふ。(十) 徒、はやく、(十一) 初、八尺。(十二) 俯身、からだを地面へむけてうつむく。(十三) 率、ぬきとる。

【詩意】わが家の門を出てから日に日に距離が遠くなつた、陣中のしごとにもなれるからななかまのあなどりをも受けぬやうになる。親子兄弟の恩愛のほだしは今でも断ちきれぬのではあるが、男兒と生れた以上は時をえらばず死の覚悟はもつてゐねばならぬ。自分は馬を走らせておもづらの鐵をはづして青絲のたづなを手中にたぐりあげ、すばやく萬仞の高い岡からかけくだり、地面に身を俯しながら旗をぬきとるけいこをしてみる。(かかるとはなれわざもだいぶうまくなつてきた)

(三)

磨刀鳴咽水水赤刃傷手

刀を鳴咽の水に磨けば、水赤くして刃手を傷く。

欲輕腸斷聲心緒亂已久

斷腸の聲を輕んせむと欲するも、心緒亂ること已に久し。

丈夫誓許國憤惋復何有

丈夫誓つて國に許す。憤惋復た何ぞ有らむ。

功名圖麒麟戰骨當速朽

功名麒麟に圖せられむ。戰骨當に速に朽つべし。

(四)

【字解】(一) 鳴咽水、磨斷聲、「三秦記」に云ふ、隴山頂有泉、清水四注、東望秦川、如四五里、俗歌「磨頭流水、鳴咽斷腸」と、隴山は今の陝西省鳳州の西北にあり、ここを経て甘肅の方へ赴く、長安地方の隴道これよりたゆるゆるの如き歌あり、鳴咽の水とはせびなくやうな水流をいふ。磨斷聲とは水自身に人をして腸をたらしむるやうなこゝろあるをいふ。(二) 水赤刃傷手、事實は刃が手をきつづけるから血が染まつて水が赤くなるのであるが、我々があふ経験からすれば水が赤いのはつとどろいてみると刃が手をきつづけてゐることが知られる。(三) 輕、輕く願ふ、なんでもないものと見なさうとすること。(四) 心緒、心の糸ぐち、さまざまのものおほひ、このおほひのみだれが手をきつづけしむけなり。(五) 丈夫、ますらを、自らをいふ。(六) 許國、心身をままげること國に對して許す。(七) 憤惋、いさどほり、おどろきうらむ、憤惋復何有とは復何有憤惋といふが如し、憤惋すべき理なきをいふ。(八) 功名、自己の戦功をたてた名。(九) 圖、畫かれること。(十) 麒麟、間の名、漢の宣帝の甘露三年に大將軍霍光等十二人を麒麟間にふかく。

【詩意】隴山までくるとむせびないてゐる水が流れてゐる、その水で刀をみがく。水の色がさつと赤くなる、刀の刃が自分の手をきつづけたのだ。自分はこんな腸を断たせるといふ水の音などは屁ともおもはぬつもりなのだが、家と國とのことをかんと以前から思ひがちにみだれてゐるのだ。(それがつい誤つて手をきつづけたのだ)しかし大丈夫たるものが心に誓つて一身を國のために許した以上は、女女しく憤りうらむべき道理はない、奮つて戰場へでかけて功名を立て、自分の姿を麒麟閣上に畫かれやう、戦死したあとの骨など速にくちはつるがいい。骨はくちても芳名が千歳にのこるのだ。

〔四〕

〔四〕

送徒既有長遠成亦有身。生死向前去不勞吏怒嗔。路逢相識人附書與六親。哀哉兩決絕不復同苦辛。

徒を送るに既に長あり。遠く成るに亦た身あり。生死前に向つて去る。吏の怒嗔することを勞せず。路に相識の人に逢ふ。書を附して六親に與ふ。哀い哉兩ら決絶す。復た苦辛を同じくせず。

【字解】 〔一〕送徒。徒は即ち徒黨の徒、成卒をいふ、送とはこれを引きつけて吐蕃の方へ送りどけるなり。〔二〕長。かしら、引率者。〔三〕遠成。遠地のまじりにゆく。〔四〕身。身體、自己の身體をいふ、此句に不平の氣満ちたり、やたらに暇などあてられてはならぬといふなり。〔五〕生死。生死にかかはらすの意。〔六〕向前。前方へと。〔七〕不勞。勞はわづらはす、苦勞をかける。〔八〕軍吏。即ち上句の「長」。〔九〕嗔。氣を盛にしていかる、吏の怒るは途中にて立ち断したり手紙をたのんだりするについてなるべし。〔一〇〕相識人。ふだん知りあひの人。〔一一〕附書。附は附託、書けてがみ。〔一二〕六親。父母兄弟妻子をいふ。〔一三〕兩。彼我の兩方、六親の方と我の方と。〔一四〕決絶。わかれさる。〔一五〕復。ふたたび。〔一六〕同苦辛。なんきなともにする。

【詩意】 我我成卒を送つてゆくには長官といふものがあるが、千里の遠方へまもりにてでかける我我にはまた我我の身體といふものがある。我我は我我の自由意志で生死にかかはらす前に向つてゆくのである。一一軍吏からおこりつけられるお世話はいらぬことである。自分は路で知りあひのものにてあうたのでその男に家族へやる手紙をあづけた。ああ哀いことである、これで彼我の間がながのわか

れきりとなるのだ、彼等ともう一べん一しよになんきなめをしようとしてもできぬのだ。

〔五〕

〔五〕

迢迢萬里餘領我赴三軍。軍中異苦樂主將寧盡聞。隔河見胡騎候忽數百羣。我始爲奴僕幾時樹功勳。

迢迢萬里餘。我を領して三軍に赴く。軍中苦樂異なり。主將寧ぞ盡く聞かむや。河を隔てて胡騎を見る、候忽數百羣。我始めて奴僕たり、幾時か功勳を樹てむ。

【字解】 〔一〕迢迢。はるばる。〔二〕領我。自分をひきつけて。〔三〕三軍。古の軍制は上・中・下の三軍に分つ、こゝは主將の居る本隊をさす。〔四〕異苦樂。兵卒たる者はその部隊長の人物如何によりて苦と樂とのちがひあり、此句によれば今のこの成卒の屬せし人は寛仁の人物に非ずして苦の多かりしことを知る。〔五〕主將。總司令官をいふ。〔六〕寧。なんぞ。〔七〕聞。苦樂の狀を聞きしる。〔八〕隔河。河は交河、吐蕃の西にあり。〔九〕胡騎。えびす、吐蕃の騎兵。〔一〇〕幾。たちまち。〔一一〕始。やつと今。〔一二〕爲奴僕。「漢書」の公孫弘傳贊に「爲奴僕」とあり、武帝の大將軍衛青は奴僕の賤しい身分からふるひおこつて榮進せりとこへり。〔一三〕幾時。何時と同じ。〔一四〕樹。たてる。〔一五〕功勳。いさをし。

【詩意】 我が部隊長ははるばると萬里あまりも我我をひきつけて本隊の方へと赴く、軍中では所屬の部隊長次第で苦樂のさまがちがふのであるが、(自分は苦しい方に屬してゐる) 總司令官はどうしてそれをすつかり聞き知つてゐられやうか。河の彼岸に敵の騎兵が見える、みるまに幾百人と羣をなして

きた。これがいくさのしはじめだが、自分は今やつと奴僕の身分であるのだ、いつになったら大功をたてて相當の地位に出世することができるのだらうか。

〔一六〕

〔一六〕

「用ふべし。」

挽弓當挽強、用箭當用長。

弓を挽かば當に強きを挽くべし。箭を用ひば當に長きを

射人先射馬、擒敵先擒王。

人を射ば先づ馬を射よ。敵を擒にせば先づ王を擒にせよ。

殺人亦有限、立國自有疆。

人を殺すも亦限り有り、國を立てるに自ら疆有り。

苟能制侵陵、豈在多殺傷。

苟も能く侵陵を制せば、豈に多く殺傷するに在らむや。

【字解】〔一〕挽 ひく。〔二〕強 つよき弓。〔三〕長 ながきや。〔四〕擒 いけどりにする、初めの四句に於て擒王の句が主にて前三句は之を言はんがためのまへおきなり。〔五〕有限 一定の限界がある、人はことごとく殺しつくせるわけのものでない。

【詩意】弓をひくなら強い弓をひくべきだ。箭を用ひるなら長い箭を用ひるべきだ。人を射るなら先づ馬を射たふすがいい、敵をいけどりにするなら先づその王さまをいけどりにせよ。(事の肝要なところをつかまねばいけない) 國と國との間の戦争でも道理は同じだ。人を殺すにもみんなは殺せぬ、そこに限界がある。國がそれぞれ一國を立ててゐるには自然と國疆といふものがあつて彼我の範圍をき

めてゐるのだ。戦争はただ敵が侵してくるのを抑制し得ればそれでよいので、敵を多く殺傷する處に目的が存在してゐるのではない。

〔七〕

〔七〕

驅馬天雨雪、軍行入高山。

馬を驅れば天雪を兩らす。軍行いて高山に入る。

逕危抱寒石、指落曾冰間。

逕危くして寒石を抱く。指は落つ曾氷の間。

已去漢月遠、何時築城還。

已に去つて漢月遠し。何時か城を築きて還らむ。

浮雲暮南征、可望不可攀。

浮雲暮に南に征く。望む可くして攀ぶ可からず。

【字解】〔一〕用 あめふらす。〔二〕逕 こみち。〔三〕抱 崖の土が石をばらんで今にもおちさうにある。〔四〕指落、こきえておちる。〔五〕曾氷 曾は層と同じ、つみかさなつたこほり。〔六〕去 離れ去る。〔七〕漢月 漢の月とは唐の月、本國の月をいふ。〔八〕南征 南とは故郷のある方位、征はゆくこと。〔九〕攀 よちのぼる、よちて南へつれていつてもらふなり。

【詩意】我が軍隊が馬を驅つてでかけると天から雪がふつてきた。このとき軍隊は高い山のなかへ入りこんだ。山中のこみちはあぶなさうで冬の石をはらんでゐるし、寒氣のために凍傷にかかつて指がかさなつた氷のあひだに落ちる。もはや本國をはなれてから本國の月とは遠くへだたつてゐる、いつになつたら此處に城を築き終へて本國へかへることができるのだらう。みれば天にかんだ雲は夕方

南故郷の方へとうつりゆくが、それはただながめられるだけでそれによちのぼつてのせていつてもらふことはできぬのである。

【八】

【八】

單于寇我壘。百里風塵昏。

單于我が壘に寇す。百里風塵昏し。

雄劍四五動。彼軍爲我奔。

雄劍四五動き、彼の軍我が爲めに奔る。

虜其名王歸。繫頸授轡門。

其の名王を虜にして歸り、頸を繋ぎて轡門に授く。

潛身備行列。一勝何足論。

身を潜めて行列に備はる。一勝何ぞ論するに足らむ。

【字解】 【一】 單于、匈奴の酋長なり、こは吐蕃の王をいふ。 【二】 寇、あだする、こちらへ侵入してくる。 【三】 雄劍、むかし吳の王閻闔、干將といふ者に二本の劍を造らしむ、その一を干將といふ、雄劍なり、他の一を莫邪といふ、雌劍なり、雄劍は長劍なり。 【四】 四五動、四たび五たびふりうごかす。 【五】 虜、とりこにする。 【六】 其、單于の軍をさす。 【七】 名王、單于の部下の有名の王。 【八】 繫頸、くびすぢを繩にてつなぐ。 【九】 授、ひきわたすをいふ。 【一〇】 轡門、軍營の門、むかしは陣營の門は車の柁棒をあひむかひにならべてつくりしといふ。 【一一】 潛身、からだをこっそりひっこめる。 【一二】 備行列、部隊の行列のなかへくばはつてゐる。 【一三】 何足論、論じてことごとしくいひたてるに足らぬ、これは全體を得るまでは得意にならぬをいふ。

【詩意】 敵の酋長が味方のとりでに侵入してきたので凡そ百里ばかりのあひだ風はこりてまつくらになつた。それといふので味方から飛びだして長劍を四たび五たびふりうごかすと敵軍は我がはたらきのためににげ奔つてしまつた。自分は敵の名王をとりこにしてもどり來り、王のくびすぢを繩でくつてそれを我が軍門にひきわたした。そしてこつそり行列のなかへもぐりこんで知らんかほをしてゐる。一べんぐらゐ勝ちいくさをしたとてなんでことごとしくいひたてるねうちがあるものか。

【九】

【九】

從軍十年餘。能無分寸功。

軍に従ふこと十年餘。能く分寸の功無からむや。

衆人貴苟得。欲語羞雷同。

衆人苟も得るを貴ぶ。語らむと欲して雷同を羞づ。

中原有鬪爭。況在狄與戎。

中原にすら鬪争有り、況んや狄と戎とに在るをや。

丈夫四方志。安可辭固窮。

丈夫四方の志、安ぞ固窮を辭す可けむ。

【字解】 【一】 能無、能はせぬことし、反語によむ。 【二】 分寸、すこしをいふ。 【三】 苟得、かりにも利得にさへなればよいとする。 【四】 雷同、雷聲の發生するや諸物同時に之に應じて起る、故に他人にあひつちをうつことを雷同といふ。 【五】 中原、黄河流域、文明の行ばるる本土の中央。 【六】 在、於てといふがごとし。 【七】 狄、戎、西方、北方のえびす。 【八】 四方志、「禮記」射義に男子生、桑弧蓬矢六、以射天地四方、天地四方者、男子之所有事也とあり、男子は生れて天下四方にはたらく志を有するものとかながへらる。 【九】 固窮、「論語」衛靈公に君子固窮とあり、もとより困窮するなり。

【詩意】 自分は十年あまりもいくさに従つてゐる、なんで、ちつとやそつとの功が無いことがあらうや。しかし多くの人人はなんでも自分の利得になりさへすればよいと賞を争ふことを貴しとしてゐる。

から、自分じぶんは自分の功いさを口くちに出いさうかとはおもふがまた彼等かれらと一しよになるやうだからそれをなげなんにもいはずにゐる。文明ぶんめいとよばれる本國ほんこくの地ちでさへたたかひのあるものを、まして戎狄じゆんてきに於おてはなほさらのことではないか。丈夫ちゆうぶたるものは生れおちてから四方しやうほうにはたらく志こころざしのあるものである。恩賞おんしょうなどもらはず困窮こんきゆうなめにであふとてそれを辭いすることがどうしてできやう、困窮こんきゆうに甘んじてゐるべきである。

送高こう三十五書記十五韻

高こう三十五書記を送る、十五韻

崆峒こうとう小麦熟せうばくじやく且願かつげん休きゆう王師わうし

崆峒小麦熟す、且つ願ふ王師を休めむことを。

請公問しんこうもん主將しゆしやう焉や用もち窮荒きゆうかう爲な

請ふ公主將に問へ、焉んぞ窮荒を用つて爲さむと。

饑鷹きゆうとう未飽みぼう肉側にくがは翅は隨したが人飛ひとと

饑鷹未だ肉に飽かず、翅を側て人に随つて飛ぶ。

高生こうせい跨また鞍馬あなま有似ありに幽井ゆうへい兒こ

高生鞍馬に跨る、幽井の兒に似たる有り。

脫身だつしん簿尉ぼゑい中始ちゆうしゆう與とも捶楚ちゆうそ辭い

身を簿尉の中より脱す。始めて捶楚と辭す。

借問しやくもん今何官いまなんのくわん觸熱しゆくねつ向武威むゑい

借問す今何の官ぞ、熱に觸れて武威に向ふや。

答云たふ一書記いしやくき所媿しよゑい國士こくし知し

答へて云ふ一書記、媿づる所は國士として知らると。

人實じんじつ不易ふいぎ知し更須さら慎しん其儀ぎ

人實に知り易からず、更に須らく其の儀を慎むべし。

十年じゆんねん出幕府しゆくぼくふ自可みづか持もち旌麾しやうゑい

十年幕府より出でなば、自ら旌麾を持す可し。

此行ここのち既特達すで足以もつ慰なぐさ所思しよし

此の行既に特達す、以て所思を慰むるに足る。

男兒なんに功名こうめい遂亦すゐ在あ老大らうだい時とき

男兒功名の遂ぐるは、亦た老大の時に在り。

常恨つねに結驩けつわん淺あは各在天おのづか一涯いつげい

常に驩を結ぶことの淺きを恨む。各、天の一涯に在らむ

又如また參與さんじゆん商慘しやうせん慘せん中腸ちゆうちやう悲ひ

又參與商との如くならむとす。慘慘として中腸悲しむ。

驚風けいふう吹ふ鴻鶴こうかく不得えざ相追あひ隨したが

驚風鴻鶴を吹く、相追隨することを得ず。

黃塵わうじん翳おほ沙漠さつぱく念おも子何當なんに歸かへ

黃塵沙漠に翳し、子が何か當に歸るべきかを念ふ。

邊城へんじやう有餘力あま早寄はや從軍じゆん詩し

邊城餘力あらば、早く從軍の詩を寄せよ。

【字解】(一) 高こう三十五書記。高こうは高適こうていなり、適てい、河西節度使かへいせつどし番舒翰ばんしゆくわんが家書記けしやくきとなりて河西かへいに赴おもむかんとするを送るなり。河西節度使かへいせつどしの府ふは涼州りやうしゆう武威郡わいけいぐん（今甘肅涼州府治）に在り。

(二) 崆峒こうとう。山の名、臨洮りんたう（甘肅省岷昌府岷州）に在り。任所に近き地の名山を擧げていふなり。

(三) 小麦熟せうばくじやく。初夏しゆげの候こう。

(四) 且願かつげん。作者さうしやが願ふなり。

(五) 休きゆう。休息きゆうし。

(六) 王師わうし。唐たうの官軍くわんぐん、即ち番舒翰ばんしゆくわんの部兵ぶへい、翰くわんは此兵こゝのへいを用ひて吐蕃とつぱんと戰爭せんじやうす、作者さうしや吐蕃とつぱんとの戰いくさを喜よろこぶるなり。

(七) 焉や。公こう。高適こうていをさす。

(八) 主將しゆしやう。適ていの主人しゆじんなる大將たいしやう、番舒翰ばんしゆくわんをさす。

(九) 窮荒きゆうかう。焉やとは無用むじゆうなるべしとの意い。

(一〇) 窮きゆう。不毛ふもうの地ちを窮きゆうめつくすをいふ。

(一一) 捶楚ちゆうそ。二句にく。高適こうていをたとへてい

ふ、魏志に陳登が曹操の語なりとして呂布に告げたる言あり。曹操は呂布を許して、譬如養鷹、鷹則爲用、飽則去、と。逸も鷹鷹のごとく肉のために飽の部下とならんとす。【三】 劍翅 はねをそばだてる。【四】 高生 適をさす。【五】 幽并兒 幽州(直隸省北部)并州(山西省)の少年兒、此の地方は遊俠を出す、晋の山簡が詩句に、舉鞭問葛強、何如并州兒とみゆ。【六】 脫身 からだみぬけた。【七】 韓尉 韓は州縣の書記、尉は警察官、高適は嘗て封丘尉となりしことあり、故にかくいふ。【八】 始、人どはじめて。【九】 插楚 插は撃つこと、楚は荆狄(いばらのむち)なり、唐の時、參軍、功曹、尉、尉等の卑官は上司よりむちうたるることあり。【一〇】 辭 辭去するなり、いとまごひする、それから遠ざかるをいふ。【一一】 僧問 かりにとふ、作者が問ふなり、次の句までかかる。【一二】 觸熱 夏をいふ。【一三】 武威 即ち涼州府にして河西節度使の所在地。【一四】 答云 高適の答、次のは哥舒翰から知られるをいふ。【一五】 人賞(二句) 以下又作者よりいふ。【一六】 懷其德 德は威儀、自己の品位をいふ。【一七】 十年 限りて言ふに非ず、大凡をいふ。【一八】 幕府 河西節度の府をいふ。【一九】 持旌麾 旌はハダ、麾は軍を指揮する采配、之を持するは軍務の長官となるをいふ。【二〇】 特達 自己一人の力にて其の地位に達せしこと。【二一】 所思 作者の思ひをいふ。【二二】 老大時 十年後を想像していふ、老大は老成の時をいふ。【二三】 結驥 驥は駿に同じ、よろこび、結驥とはなかくよく交るをいふ。【二四】 又如 如とは如くならんとするをいふ。【二五】 參商 星の名、兩星は容易にめぐりあはぬといへり。隔りて逢ひがたきをたとへていふ。【二六】 鶻 鶻は鷹、ものがなしきさま。【二七】 驚風 がまつく風。【二八】 浦 おほとり。【二九】 鶴、うのとて、二鳥は高適に比す。【三〇】 追隨 あとにつきしたがふ。【三一】 騎 かげらくおほふ。【三二】 何 何時なり。【三三】 邊城 河西地方の城をさす。【三四】 有餘力 軍務にはたらく以外のあまれる力。【三五】 從東時 魏の王侯に名高き從軍の時あり。

【題義】 哥舒翰の書記たる高適が武威(涼州)に赴かんとするを送る。製作時明かならざるも天寶十一載哥舒翰の入朝以前にあるべし。

【詩意】 いま君が赴かんとする崆峒山のあたりでは夏になつて小麦が熟してきたが、自分はしばらく官軍を休息させて戦などせぬやうにしたいと願つてゐるのだ。君は君の主人におたづねになるがよい今日吐蕃と事を構へてあくまで邊方不毛の土地をとりこまうとする必要がどこにあるかと。うゑた鷹が肉に飽かないときは、はねをそばだてて人にくつついて飛ぶものだが、君もそんなものだ。君が鞍馬にまたがった様子は幽并地方の健兒に似て勇ましい。その君が河西の書記となつたから、これまでの主簿や尉官の境遇から脱げでて、やつとこんど上官からむちうたれることを免れることになつた。いつたい君は今いかなる官となつたとて、この熱氣にふるる夏の時節に武威あたりの遠方へ向つてでかけるのか。君は答へていふに、一の書記として任命されたに過ぎないが、はづかしながら先方(哥舒翰)から國士としての知遇をうけたのだと。君はそんなに自負してゐるが人物といふものはなかなか知りにくいものだ。(先方が君を果してそれほど知りぬいてゐるかは疑問だ)君はこれまでよりもつと平生の自己の品行をつつしまねばならぬぞ。君はこれからすつと辛抱して十年もたつてから幕府から外へ出かけたならば自然に采配を手にもつ一方の軍長となることができるだらう。このたびの旅立ちも君の独自の榮達で僕の物思ひを慰めるに足るのだが、更に前途をおもへば男兒たるもの功名の志の遂げらるるのは年ふけてからのことで、十年以後の君が今から想像されるのだ。(この豫想はあたりて高適は後に蜀州の刺史、西川の節度使とまでなりたり。)自分は平生君とおもしろく

親しみあふことがまだ浅いことを恨んでゐるのにこれからめいめいが天のはてに居らうとしてゐる、又参や商の星のやうにめつたに逢へないやうにならうとしてゐるので腸のながかものがなくしてならぬ。今がさつく風が鴻鶴を吹き送つて遠方へやつてしまふが、自分はそれにつきしたがうてゆくことができない。黄色のほこりは沙漠の天をくらくおほうてゐる。君がいつになつたら歸ることができるとかとかんがへる。君はあちらへついで餘力があつたなら早く王業のやうな從軍の詩をつくつてよこしてくれたまへ。

奉留贈集賢院崔國輔于休澣二學士

集賢院の崔、于、休澣、二學士に留贈して奉る。

昭代將垂白途窮乃叫闕。昭代將に垂白ならむとす。途窮して乃ち闕に叫ぶ。  
氣衝星象表詞感帝王尊。氣は衝く星象の表、詞は感せしむ帝王の尊。  
天老書題目春官驗討論。天老題目を書し、春官驗して討論す。  
倚風遺鷓鴣路隨水到龍門。風に倚りて鷓鴣路に遺さる、水に隨つて龍門に到る。  
竟與蛟螭雜空聞燕雀喧。竟に蛟螭と雜る、空しく聞く燕雀の喧しきを。

青冥猶契闊凌厲不飛翻。青冥猶は契闊たり。凌厲すれども飛翻せず。  
儒術誠難起家聲庶已存。儒術誠に起し難し。家聲庶くは已に存せむ。

故山多藥物勝槩憶桃源。故山藥物多し。勝槩桃源を憶ふ。  
欲整還鄉旆長懷禁掖垣。還郷の旆を整へむと欲して、長く懷ふ禁掖垣。

謬稱三賦在難述二公恩。謬稱三賦在り、述べ難し二公の恩。

【字解】【一】留澣 長安より去り故郷に歸らんと欲して此篇をとどめおくるなり。【二】集賢院 集賢殿書院なり、開元十三年に集賢殿修書所を改めて集賢殿書院とす、書院の官は五品以上を學士とし六品以下を直學士とす。【三】崔國輔 吳郡の人、初、許昌令を授けられ、集賢の直學士・禮部員外郎に累遷す。【四】于休澣 開元の初の進士、秘書省正字より集賢殿學士に累遷し比部員外郎に轉ず、末尾二句の下の作者の自注によれば崔・于の二人は作者の三大禮賦を賞し之を推舉せしものに似たり。黃鶴が注に「此時は天寶十一載の作なるべし」といひ、又「作者三賦を賦せしに玄宗之を奇なり」として召して文章を試む、崔・于の二學士は試むるの官なるべし、作者の詩に、集賢學士如堵牆、觀我落筆中書堂とあり」といへり。【五】昭代 天子の徳の明かなる御代、玄宗の朝をさす。【六】垂白 白は白髪をいふ、白髪を垂れるとは老いたるをいふ。【七】途窮 阮籍が故事、ここは進境に居るをいふ。【八】叫闕 闕は天子の宮門、叫とはさげしめるなり、賦を獻じしことをいふ。【九】氣衝 氣は意氣、衝はつく。【一〇】星象表 星象はほしのすがた、表はうへ。【一一】天老 黃帝に七人の輔あり、その一を天老といふ、天老とは宰相をいふ。「官定後禮贈」時の「草堂詩集」の注に宰相陳希烈が試みたりといへり。【一二】題目 採用すべき人



物可否の題目をいふ。【一】春官 禮部省の官をいふ、禮部侍郎が試験に關係す。【二】論討論 論はしらべる、討論とはその可否を論じあふなり。【三】借風(一句) 左傳に六國退飛、過宋都也とみゆ。大風吹きしたため六羽の鶴といふとりがあとしざりにとんだといふのだ。こは借聲せしこといふ。借は借韻、あてにすること、借は遺棄。【四】馬 鶴と同じ、馬路とは鶴の飛ぶべき路。【五】開水(一句) 龍門は陝西省同州府韓城縣の黃河に在る龍つせなり、その龍つせを鯉魚がのぼれば化して龍となる、のぼれなければ龍を鳴らし雲を點して退くといへる話あり。水に隨つて龍門に到るといふは鯉魚のやうに龍になるつもりできたといふなり、此句と、借風の句とは前後置きかへて見るべし。【六】雙鶴 としに龍のたぐひ、人を害する權奸をます。【七】燕雀 凡庸の人をます。【八】青芙蓉 芙蓉をそら、天。【九】笑園 本來は勸告のまをいふ、こは調絶(かけへたたる)の義とす。【一〇】波風 波はしのぐ、風は疾く飛ぶ。【一一】儒術 儒者の學術、二字は副詞として用ふ。「儒術にては」の義。【一二】鶴起 起とは身を起して仕進するをいふ。【一三】家聲 杜氏一家の名聲、祖父杜審言詩名ありしことをます。【一四】鹿 鹿麋に同じ。【一五】故山 洛陽の偃師縣の故居をます。【一六】勝地 すぐれた景色。【一七】桃源 武陵の桃源をいふ、仙郷なり。【一八】整遺 遺 是たなととのへるとはかへりしたくをする。【一九】禁披壇 禁中の披壇、披壇とは正面の門に非ず側面のかきないふ、蓋し集賢殿の在る方面をます。【二〇】聖稱 聖とは自ら尊稱していふ、ほむべきほどの價值なき賦を二君がほめてくれればあやまつてかくしたまひといふなり、稱は稱讃すること。【二一】三賦 三大禮賦をいふ。【二二】難逢 のべつくしがたきをいふ。【二三】二公 崔と子をいふ。【題義】 長安を去らんと欲して集賢殿書院の學士崔國輔と于休烈とにとどめおくれる詩。天寶十一載の作ならん。【詩意】 自分は明けきみよに生れてやがて白髮をたるる老人とならうとしてゐる、それにまだ逆境に居るのでそこで賦を獻じて宮門にさげんでみた。その時の自分の氣はたかくのぼつて星宿の上をもつき、自分の文辭は幸にも帝王の尊きをも感動せしめた。そこで宰相は意見を附して自分の姓名を書

し、禮部の官は之をしらべて可否を論じあうた。自分は鯉のやうに龍にならうと水について龍門までやつて来て、風をあてにしてしかも退飛させられるやうな龍路に遺棄せられ、とうとう蛟蟻のやうなわるものと難居することになり、徒らに燕雀のやうな小人どものがやがやいふのを耳にすることになつた。めざすあをぞらはまだはるかにとほくへだたつてをり、自分は空をしのぎ羽をふるうてとく飛ぼうとしながら少しもとべずにをる。自分ごときものは儒術を以てしてはとも身を起すことはむづかしい、が家門の名聲だけはこれでもはや保存しようとながふのである。故郷の山には藥物も多くあるし、景色のよいことも桃源の仙郷を憶ひだすのである。よつて故郷へかへる準備をしようとおもふが、それにつけてもいつまでも禁中の側面の御輪のあたり(集賢殿の地)を思つてわすれられぬ。わすれられぬも道理ではないか。自分には響つて稱讚していただいた三大禮賦といふものが存在してゐる。この賦の在るかぎり、二公の御恩はとも自分には述べやうとしても述べつくしがたいのである。

貧交行

貧交行

翻手作雲覆手雨  
紛紛輕薄何須數

手を翻へせば雲と作り手を覆せば雨  
紛紛たる輕薄何ぞ數ふるを須む

【字解】【一】翻手 たなごころを上にむける。【二】雲、雨は蓋し交遊の變化なきまなたとへて

君不見管鮑貧時交。君見すや管鮑貧時の交り、  
此道今人棄如土。此の道今人棄つること土の如し。

いふ。【一】 覆手 たなごころを下にむける、覆はくくつがへすなり。【二】 翻覆、反覆の義は入聲、音韻なり。

【一】 輕薄。交情の輕薄なるをいふ、今日親しくすと見れば明日は疎くすといふ類。【二】 何須説。かぞへたるを要せぬ、無量なるをいふ。【三】 君。世間一般人をさす。【四】 管鮑貧時交。管は管仲、鮑は鮑叔牙、この二人善く交り、管仲は叔牙のすすめにより齊の桓公に用ひられ桓公をして霸業をなさしめたり。管仲の語に「我を生むものは父母、我を知るものは鮑叔なり」といへり。【五】 此道。管鮑の如き交道をいふ。【六】 棄如土。棄ててかへりみざるをいふ。

【題義】 貧賤なりしとき交りあるもの富貴となりてのちその交りをすててかへりみざることをなげきて作れる詩。作者頌を獻じて後久しく長安に寓居するにその舊友之を念ふものあるなし、故に此作あり、或は之を天寶十一載の作とす。

【詩意】 今世上朋友の交りをみると手のひらを上下にひけかへる間にも雲となり雨となり變化はかられぬ。その紛紛とみだれた輕薄のさまはかぞへたてるといふほどなくさんある。諸君見たまはざるや、彼の管仲と鮑叔との貧しかりしときの交りのさまを、今の世の人は彼の如き交道をまるで義士の如くすててかへりみぬのである。

送韋書記赴安西

韋書記が安西に赴くを送る。

夫子歎通貴。雲泥相望懸。

夫子歎も通貴なり。雲泥相望懸る。

白頭無藉在。朱紱有哀憐。

白頭藉在無く、朱紱哀憐有り。

書記赴三捷。公車留二年。

書記三捷に赴く、公車留まること二年。

欲浮江海去。此別意茫然。

江海に浮び去らむと欲す。此の別意茫然たり。

【字解】 【一】 韋書記。韋は姓、名は未詳、書記は安西都護府の書記の官、安西都護府は唐代の龜茲國、今の新疆省の庫車に治所を置きたり、天寶十一載に封常清安西副大都護となり、御史中丞を攝し、節を持って安西四鎮節度、經略度支營田副大使、知節度事に充てらる、韋は必ず常清が書記となれるならん。【二】 夫子。韋をさす。【三】 歎。たちまち。【四】 通貴。世間にしらるる貴位。書記の地位必しもさほど貴きに非るも先方をほめていふ。【五】 雲泥。雲は天上に在るもの、泥は地中に在るもの、上下へだたるをたとへいふ。【六】 相望。相望は相互のながめ、懸は懸隔、ながめてみるとすつとかけはなれた。【七】 白頭。自己の老齒をいふ。【八】 藉在。借藉といはんがことし、たよりにするものないふ。【九】 朱紱。韋書記の官服をいふ、紱は革につくりしまへたれ、朱はその色なり、唐制にては御史の官は金印朱紱を賜はる。韋書記は必ず御史を兼ねしなるべし、故にかいふ。【一〇】 哀憐。こちらをきのとくがつてくれること。【一一】 赴三捷。「詩經」采芣詩に豈敢定居、一月三捷とあり。一ヶ月に三たびちからいくすれば一箇處には定住してかれぬといふなり、こゝは軍務の多忙なることをいふ、赴三捷とは三捷のために赴住するといふこと。【一二】 公車。漢の時天子に上書せんとする者の集まる所なり、こゝは作者集賢殿に制を持たしめられしことをさす。【一三】 留二年。これは天寶十年十一年の二箇年ならんといへり。【一四】 浮江海。江南か東海かへ舟に乗じて去る。【一五】 意茫然。茫然はとりとめなきさま。

【題義】安西都護府の書記官といふ人が任地へ赴くを送る詩。天寶十一載の作ならん。  
 【詩意】あなたははかに貴顯の地位にのぼられたさうだが自分とは雲と泥との如く高下がかけはなれてしまった。自分は白頭となつてたよるべきものとはなく、ただあなたのやうな朱紱の人がきどくがつてくれられるばかりである。あなたは書記として一月三捷といふせはしい軍務のために赴かれるが、自分にはや集賢殿に仰せを待つてゐることが二年にもなる。(それだになんの仰せいださるもない)だから都から退いて江海の水に浮び去らうかとおもうてゐるところだ。それ故このたびのお別れはただの別れとちがつて自分のころもちは一層ばんやりしてはありあひなく感せらるる。

玄都壇歌寄元逸人

玄都壇の歌。元逸人に寄す

故人昔隱東蒙峰。故人昔隱る東蒙峰。  
 已佩含景蒼精龍。已に佩ぶ含景の蒼精龍。  
 故人今居子午谷。故人今居る子午谷。  
 獨在陰崖結茅屋。獨り陰崖に在つて茅屋を結ぶ。  
 屋前太古玄都壇。屋前太古の玄都壇。

【字解】玄都壇、玄都とは道家のかんがへた一の仙都なり、十洲記に玄洲に北海、去岸三十六萬里、上有太玄都、仙伯真公所治と。玄都壇は漢の武帝の築く所にして長安の南山の子午谷の中に在り。元逸人はここに隠れしなり。【三】元逸

青石漠漠常風寒。青石漠漠として常に風寒し。  
 子規夜啼山竹裂。子規夜啼いて山竹裂け、  
 王母晝下雲旗翻。王母晝下りて雲旗翻る。  
 知君此計成長往。知る君が此の計長往を成すを、  
 芝草環玕日應長。芝草環玕日に應に長するなるべし。  
 鐵鏤高垂不可攀。鐵鏤高く垂れて攀ぶ可からず、  
 致身福地何蕭爽。身を福地に致す何ぞ蕭爽なる。

人 李太白の集に元丹邱といふ人あり、蓋し逸人と同一人ならん。【二】故人、舊知の人、元逸人をます、作者と逸人とは山東時代(開元二十三、四年頃)よりの知己なり。【一】太白、勳。范曄居二詩の余亦東蒙客、猶若知二弟兄、昔遊詩の東蒙社二書體、尙憶同志樂はみな東蒙時代に關する句なり。【三】東蒙峰、蒙山をいふ、蒙山は山東省沂州府蒙陰縣の西南にあり、魯(兗州曲阜縣)よりすれば東にあ

たるを以て東蒙といふ。【二】含景蒼精龍、諸説紛たり、景は影と同じ、日影なり。【一】日かげを含むつぎ。【二】日月のひかりを身につけ隠にのる。【三】すがたかくしのおまじりのふだ。第三説を取る。(潘鴻曰、抱朴子、遺衛諸經、可以却惡防身者、有數千法、如含景龍形等)この含景といふは日光をのみこみて暗くする法かとおもはる(不可勝計、又云、諸大神、出於老君、其中有青龍符等、行用之、可以得仙、此符已佩含景蒼精龍、即所謂青龍符耳)【二】今、作詩の時をいふ。【三】子午谷、長安縣南の山中にあり、長さ六百六十里、北の口を子といふ、西安府の南百里にあり、南の口を午といふ、漢中府洋縣の東百六十里にあり。【一】陰崖、北むきのがけ。【二】復漠、廣く平かなる處。【三】常、いつも、或は常を松に作る。【一】子規、ほととぎす。【二】山竹裂、裂帛、裂竹みな聲の形容なり。【三】王母、鳥なりとの説あるも今取らず、西王母をいふ、周の穆王が王母と瑤池に會せしとき、雲霧霓裳、擁護して天より下るとの語あり。【三】雲旗、くもはた、仙人の行列なり。【二】此計、此の山中生活のほか

玄都壇歌寄元逸人

【一】成良往。長往とは人間界を棄てて永久に歸らざるをいふ。【二】芝草琅玕。共に仙樂なり、「漢武内傳」に玉母曰、太上之藥、有芝草、琅玕、碧海琅玕。【三】長。生長する。【四】鐘。鐘は鎖に同じ、くさり。【五】高堂。高き處からたれる、これは樓の所在の地の高きをいふ。【六】秋。秋とほそ、に置くないふ。【七】福地。道家に洞天福地の説あり、「神仙訣」に洞天、地仙、三十六洞天、八十一福地、由地仙、積善功行、遂超昇天仙、といへり。樓の在る所は道家の謂ゆる福地なりとの意。【八】蕭爽。しづかにさわやか。

【題義】玄都壇のさまをのべた詩。之を以て元逸人に寄す。天寶十一載の作ならん。

【詩意】我が舊友たる君は昔東蒙峰にかくれてゐた頃から已に委隱くしの御守りふだなどを佩びて仙人じみてゐたが、今は子午谷に住んでゐてただひとり北向きの崖に於て茅屋を結んでゐる。その茅屋の前には太古からあるらしい玄都壇があつて、青色の石が平べつたく横はり、吹さくる風はいつもいつもつめたい。夜にはほととぎすが啼いて山の竹が裂ける様な聲をだし、晝は雲旗をひるがへして西王母が天から下つてくる。君のかかる山中の生活を計らるるは永久人間界を棄てたものである。そこではさだめし芝草や琅玕の仙草が日日生長してゐることであらう。凡人がそこへゆかうとしてもそこは懸崖絶壁で鐵のくさりが高く垂れてゐてよちのぼることもできぬ。さやうな福地に身を置くといふは何たる蕭爽な氣もちのことであらう。

曲江三章 章五句 曲江三章 章ごとに五句

曲江蕭條秋氣高。曲江蕭條として秋氣高し。

菱荷枯折隨風濤。菱荷枯折して風濤に隨ふ。

遊子空嗟垂二毛。遊子空しく嗟す二毛を垂るるを。

白石素沙亦相蕩。白石素沙亦た相蕩す。

哀鴻獨叫求其曹。哀鴻獨り叫びて其の曹を求む。

【字解】曲江。長安の東南にあり、第二章「弟姪何傷」の句に依るに作者の弟姪曲江の附近に住する者あり、そこに寓居しての作なるが如し、社位宅守。詩の作者の自注に社位の宅は曲江の東に在ることを見れば蓋し社位が宅に寓せしならん。舊注は至德二載賊中に陥りしときの作とし、仇亮高秋の氣、天高く横はる。【一】菱荷。ひし、ばす。【二】隨。それにつれて。【三】遊子。自己をさす。【四】二毛。黑白二色の毛髮。【五】亦相蕩。この亦の字は上の菱荷に對する語なり、風濤のために菱荷も折れたが沙石も播蕩するといふなり、蕩はうごくこと。【六】曹。なかも。

【題義】曲江秋時の感をのぶ。天寶十一載の作ならん。

【詩意】曲江の今はさびしくて秋の氣が高く横はり、風濤のまにまに菱や荷が枯れたり折れたりしてゐる。このとき客遊の境にある自分はいたづらに年老いて頭髮がしらがまじりになることをなげく。みれば江邊の白い石やしろい沙も亦た風濤にゆりうごかされ、哀しさをなげく鴻のとりがなかまを求めて

獨りさげんである。

【餘論】此詩の第三句「遊子空嗟垂三毛」は單句として通例よりは一句多くなりをもるものなり。下の二章の第三句も之に同じ。

【一】

【二】

即事非今亦非古。

即事今に非ず亦た古に非ず。

長歌激越揜林莽。

長歌激越林莽を揜す。

比屋豪華固難數。

比屋の豪華固に數へ難し。

吾人甘作心似灰。

吾人甘んじて心の灰に似たるを作す。

弟姪何傷淚如雨。

弟姪何を傷みてか涙雨の如くなる。

【詩意】自分は眼前の事によれて今様でもなく古様でもなくどちらつかずの歌をつくつてそれをながくうたひだすと、その歌調が激越であたりの林やくさむらをうごかささんばかりである。自分は貧窮で

【字解】【一】即事 眼前の事に

ついでといふこと、即興などいふに同じ。【二】非今、非古 今古は此の歌の體の今古をいふ、此篇五句を一章として單句など用ひたるは古體に似たり、七言を一句とせるは今體に似たり、非今非古は下句の「長歌」といふへつづく。【三】長歌 聲をながくしてうたふ、連章連歌をいふと

あるが自分等の周圍の人人のやなみに豪華なのはどうか、そんなことを一かぞへたてることはできぬ。吾吾は甘んじて心を死灰のやうにしてゐてそれでいいのだ。弟姪等よ、汝等は何事を傷んでそんなに雨のやうに涙をおとすのか。

【一】

【二】

自斷此生休問天。

自ら此の生を斷つ天に問ふを休めよ。

杜曲幸有桑麻田。

杜曲幸に桑麻の田有り。

故將移住南山邊。

故に將に南山の邊に移住し、

短衣匹馬隨李廣。

短衣匹馬李廣に隨ひ、

看射猛虎終殘年。

猛虎を射るを看て殘年を終へんとす。

【字解】【一】自斷此生 衷心に決する所ありて此の生涯に於ける仕進の意を斷絶するをいふ。【二】休問天 天命に安んずるが故に天に問ふの要なし。【三】杜曲 杜曲は草曲と共に長安の南、樊川の水曲の名にして名勝なり、杜市の居宅は杜曲に在り。【四】桑麻田 「くば」や「あさ」をつくるはたけ。【五】故 故は「それゆゑに」、將は「まさに云云せんとす」なり、「終殘年」までにかかる。【六】移住 これは杜曲よりいふに非ずして曲江よりいふなり。【七】南山 終南山、南山邊とは即ち杜曲をさす、李廣が實際虎を射たる山は藍田縣の南山なり、今混じていへり。【八】李廣 漢の武帝の時の大將軍なり、關雲田の南山中に屏居し射獵せしとき、草中の石を見て虎となし之を射る、矢石に殺す、之を觀れば石なりしと。【九】殘年 老いまさき。

【詩意】自分は此の世の生涯に望みを斷つてしまつたから運命の窮通について天に問ふ必要もない。

杜少陵詩集 卷二  
 幸に杜曲には桑麻を作りうる田地がある、だから此處(曲江)から南山ちかく(杜曲)へひきうつつて短い衣をきて一匹の馬にまたがり、李廣のやうな男のあとについて猛虎でも射るのをみながらこの老いさを終らうとおもふ。

奉贈鮮于京兆二十韻  
 鮮于京兆に贈り奉る。二十韻

王國稱多士賢良復幾人。  
 異才應間出爽氣必殊倫。  
 始見張京兆宜居漢近臣。  
 驕驕開道路鸚鵡離風塵。  
 侯伯知何算文章實致身。  
 奮飛超等級容易失沈淪。  
 脫略礮溪釣操持郢匠斤。  
 雲霄今已逼台袞更誰親。

王國士多しと稱せらる。賢良復た幾人ぞ。  
 異才應に間出すべし。爽氣必ず殊倫なり。  
 始めて見る張京兆、宜しく漢の近臣に居るべし。  
 驕驕道路開く、鸚鵡風塵を離る。  
 侯伯知る何算、文章實に身を致せり。  
 奮飛等級を超え、容易沈淪を失す。  
 礮溪の釣を脱略して、郢匠の斤を操持す。  
 雲霄今已に逼る。台袞更に誰か親まむ。

鳳穴雜皆好龍門客又新。  
 義聲紛感激敗績自逡巡。  
 途遠欲何向天高難重陳。  
 學詩猶孺子鄉賦忝嘉賓。  
 不得同晁錯吁嗟後却詵。  
 計疎疑輸墨時過憶松筠。  
 獻納紆皇眷中間謁紫宸。  
 且隨諸彥集方覲薄才伸。  
 破膽遭前政陰謀獨秉鈞。  
 微生霽忌刻萬事益酸辛。  
 交合丹青地恩傾雨露辰。  
 有儒愁餓死早晚報平津。

鳳穴雜皆好し、龍門客又新なり。  
 義聲紛として感激す。敗績自ら逡巡たり。  
 途遠くして何くはむと欲する、天高くして重ねて陳べ難し。  
 詩を學ぶは猶ほ孺子なりき。郷賦嘉賓を忝くす。  
 晁錯に同じきを得ず。吁嗟却詵に後れたり。  
 計疎にして輸墨を疑ひ、時過ぎて松筠を憶ふ。  
 獻納皇眷を紆らす。中間紫宸に謁す。  
 且く隨ふ諸彦の集るに、方に覲ふ薄才の伸びむことを。  
 破膽前政の、陰謀獨り鈞を乘るに遭ふ。  
 微生忌刻に霽ふ。萬事益々酸辛なり。  
 交は合す丹青の地、恩は雨露を傾くる辰。  
 儒有り餓死せむことを愁ふ。早晚平津に報せむ。

【字解】「二」鮮于、鮮子は姓、名は仲通、蜀の富豪にして揚州忠に資を給せしため、國忠に徳とせらる。仲通は天寶九載に劍南  
 奉贈鮮于京兆二十韻 一四五

御度副大使たり、十一歳に至りて京兆尹に拜す、楊國忠が相となりしは、十一歳十一月にして仲通の京兆尹となれる其後在らんと  
 といふ。【二】京兆 京兆尹なり。【三】王國 天子の國をいふ。【四】多士 人物多し。【五】賢良 かしこくよき人物。【六】  
 復讐人 殺人とば復讐人がある、あまり多くばあるまじといふなり。【七】異才 特別非凡の才。【八】間出 まじはりいでる。  
 【九】喪氣 氣象のさつぱりした。【一〇】殊倫 特殊の傑出せるたぐひ。【一一】張京兆 漢の京兆尹張敞をいふ、名官なり、以て  
 仲通に比す。【一二】漢近臣 漢は唐を意味す、近臣は天子のおそばちかくつかふる臣。【一三】驕驕 千里の馬。【一四】閑 身のゆ  
 くべき道が前にあらはれるをいふ。【一五】嘲調 たかのたぐひ、嘲は嘲より大なり。【一六】龍鳳座 下界をはなれて空高くとぶ。  
 【一七】侯伯 諸侯をいふ、唐の時諸侯なし、地方の節度使をさしてかくいふ。【一八】何算 いかんが算せむ、算なきをいふ、多く  
 あること。【一九】我身 身を高位に致す。【二〇】先沈論 上の超等級と同じことを反面より言へるまでなり。【二一】脱略 眼中  
 におかぬこと。【二二】曠淡釣 周の呂尚(太公望)が故事、太公は渭水の右、曠淡水の姓、曠に釣を垂れてゐて文王に迎へられて老年  
 にしてその師となる。【二三】操持 手にとる。【二四】屈臣斥 仇氏の説に鉞鉞の利をいふといへるは余之を取らず、これは文章評  
 論の類をとることを言ふならん。屈臣の事は「莊子」に出づ、屈(楚)の都の人に鼻のあたりに白髪をぬりたるものあり、屈の匠(大工)  
 石といふもの斤(まさかり)をふりまはしてその型をけづりとするに少しも鼻を傷けずといふ、尺度が一分一厘もくるはめをいふなり。  
 【二五】雲霧 そら、高き地位をいふ。【二六】台登 三台、袞衣なり、三公は天の三台星に比す、又三公は袞(龍のつきたる衣)をかき。  
 暗に楊國忠をさすならん。【二七】更階級 仲通ほど之と親しきものはだれもなし。【二八】風穴 山海經に丹穴の山に五采の鳥あ  
 り、名を鳳凰といふとみゆ。風穴とは鳳凰の住する處をいひ、こは鮮于氏の家門をさす。【二九】龍 龍ひな。鳳凰の兒をいひ、因て  
 仲通が子等をさす。【三〇】龍門 黃河にある龍門の名、陝西省同州府韓城縣にあり。龍魚がこの瀑をのぼれば化して龍となるにより  
 龍門といふ。後漢の李膺時の名士にして人、膺より應接せらるるものあれば世之を登龍門と稱せしといふ。龍門とは鮮于氏にあて  
 ていふ。【三一】客 賓客、作者自らをいふ。【三二】義舉 義侠なりとの評判、これは鮮于氏の諸子についていふ、この句によれば  
 作者は蓋し諸公子と交際ありしなり。【三三】感感 作者がほげしく感動する。【三四】賦類 左傳に大に崩るるを賦類といふとみ

ゆ、いくさに大まげすること、こは作者試験に失敗せしことに用ふ。【三五】途遠 ためらひて前へ進んでゆこと。【三六】途遠  
 目的とする處までの距離遠し。【三七】天高 天は有形の天をいふも表面には天子の居をさす。【三八】氣味 かまれて言ひのべる。  
 【三九】學詩 家庭にて詩をまなぶをいふ。【四〇】孫子 童子。【四一】地賦 地方にて試験の試験をうくるをいふ。【四二】香露  
 香は辱くする、謙遜の辭、露はよき賓客なり、唐の制度にては地方の試験に及第すれば、地方官が之を賓客として招き宴し、詩  
 經(小雅)の「風鳴」の詩をうたひ京師へ送る。【四三】見題 漢の文帝の時、賢良文學の士を舉ぐ、時に見題は百餘人のうちにて高等  
 を以て及第し中大夫に遷はれたり。【四四】吁嗟 ああ、歎息の辭。【四五】後 おくる。【四六】初試 晋の泰始中に賢良直官の士  
 を舉げしとき、及第は上等の及第を以て議郎に拜す。【四七】計疎 己の計りに手ぬかりあり。【四八】疑論 論議は衆議なり、  
 文辭のことをさす、疑とはその價值につきて疑ふなり、文辭すぐれたる者は及第すべきはずなるに及第を得ず、是に於て疑生ず。【四九】  
 時過 時節をばづること。【五〇】松筠 松は竹色をいふものなれども竹を意味す、松竹とはその歳晩になりても變易せざる青松の  
 色につきいふ、不變の色は之を人の節操に比す。【五一】賦納 三大禮の賦を獻せしことをいふ。【五二】軒 軒同の軒なり、わざわ  
 さこちらへむけてくださる、敬語となる。【五三】皇眷 皇は天子(玄宗)をさす、眷は眷顧、めをかけてくださること、ふりむきしめぬ  
 といふは愛する余なきなり、ふりむくは寵愛の念あるなり。【五四】中間 そのうちに。【五五】紫宸 正殿の名。【五六】諸彦 も  
 ろしるのひいでた人、その時作者と同じく召したされしものをさす。【五七】撰 寫と同じ、うかがふ、また、こひひがふ。【五八】  
 薄才 淺薄な我が才能、謙遜していふ。【五九】職驚 驚くこと。【六〇】前政 前の政權をとりし人、即ち前宰相李林甫をいふ、作  
 者は前の京師の試験にも、この天子の召試にもみな李林甫の訪害によりて及第することを得ざりしなり。【六一】除謀 かげのたく  
 らみ。【六二】乘釣 「詩經」(節南山)に乗國之均とみゆ、釣均通ず、均は平なり、公平なるをいふ、宰相たる者は一國の公平を手  
 するものなり。【六三】微生 あるかなきかの生活、自己の生活をいふ。【六四】爾 此の字正解を得ず、その餘波をうけしことはい  
 ふならん。【六五】忌刻 猜忌にして殘忍なること。【六六】萬事 一身上の諸事。【六七】離辛 づらきこと。【六八】交合 合とは  
 一致すること、交際がくひらがひにならずびつたりとあふこと。【六九】丹青地 公卿の地位をいふ、「鹽鐵論」に公卿者、神化之丹

青、とみゆ、公卿なるものは造化神明の手でまがきだされたものだといふのである。【三】思、鮮子から作者に対する思慕。【四】  
傾雨、雨降は思慕をたとへていふ、傾くとは我が方へよむまけること。【五】辰、時と同じ、韻字なり、かろくみるべし。【六】  
有留、留とは自己をなます。【七】早晩、いつしか。【八】報、我が恩遇についてつけしらせる。【九】平津、漢の公孫弘をいふ。  
弘は丞相となり、平津侯に封ぜられ、東園を開いて賢士を延きたり。こゝは時の宰相楊國忠をなます。

【題義】京兆尹鮮于仲通に贈れる詩。天寶十一載十二月の作ならんといふ。

【詩意】我が唐の天子の御國では人物が多いといはれてゐるが、賢良とよばれるほどの人は幾人ある  
かさほど多くはあるまい。そのあひだに特別非凡の人才もまざつて出でるであらうが出ればその人の  
さわやかな氣象は傑出せるものであるにきまつてゐる。こんどはじめて漢の京兆尹張敞の如き人がで  
たが、こんな人は漢の天子のおそば近くつかへるのにはにつかはしいことだ、例へば千里の馬の前に  
進むべき道路が開けた様なもの、又下界の風塵をはなれて鸞鶴の猛鳥が空高くとぶ機なものである。』  
今の節度使輩は幾人居るか無数だが君は自己の文章の力を以て身を高位に致したのである。即ち奮ひ  
飛んで同等の級をとびこえ、たやすく下位に沈んでゐることから免れた。君の出世は早いからかの太  
公望の如きは眼中に置かずともよいし、今の地位に居る君は公平な文柄を握ること彼の野匠の斤を  
とるが如きものがある。君は今雲霄の高位に近くよつてゐる。三公等には誰が君ほど之と親しいもの  
があらうぞ。』(風穴雜皆好、以下四句は上を結びて下を起す、鮮子と自己との連絡のつけ處なり。丹穴

の風穴ともいふべき貴家の公子等は皆よい方であり、龍門にも比すべき貴門には新に自己のごとき  
ものまで賓客として容れられてゐる。諸公子の義俠なりとの評判には自分は心もつるまで感激して  
ゐるのであるが、さりとてこのごろの不首尾にであうてはあつかましくも進みでて身邊の事について  
お願ひするといふ態度にもでられずにおます。』(途遠欲何向、以下は開元中の落第のことにつきい  
ふ。)めざす前途ははるばる遠いからどちらの方向へむいたらよからうか。天は高くして叫ぶ聲もとど  
きかねたればいまさら事情をのべることもむつかしい。こどものときから家庭で詩を學んで、やつと  
地方試験に及第してもつたいたなくも賓客のとりあつかひをうけて都へ送られることになつたが、不幸  
にして兎蹇と同じやうに及第することもできず、またなげかはしくも鄧誥よりもおかれてしまつた。  
自分のする計がてぬかりあるために遂には文辭といふものの價値にさへ疑をばさみ、落第つづき  
で時節はづれになつてしまつては仕進をやめてただ松竹の如く晩節を保たうかと思つた。』(獻納紆皇  
眷、以下は賦を獻せしため玄宗より召し試みられしことをのぶ。)さうかうするうちに三大禮賦を獻じ  
たために天子からお目をかけられて紫宸殿で謁見を仰せつけられ、しばらく他の英才の人人の集りに  
随伴し、やつとこれでいささかの才能をのばすことができるかとこひねがうた。ところが驚いたこと  
には前宰相(李林甫)がただひとり國權を握つて陰謀をたくましくするといふのであつた。自分の  
微少な生活もこの人の猜忌にふれてそれから百事ますますつらいことになつてきた。』(交合丹青地、



以下は解子に向つて自己を援助せんことを請ふなり。あなたは公卿の地位の人人と交際親密であられ、人に對しては雨露を傾げん許り多くの恩恵を注ぎかけられるお方である。今ここに儒者(自分の操な)があつて餓えて死にはしないかと心配してゐる。この有様をいつ今の宰相(平津公ともいふべき)におしらせして下さるであらうか。

白絲行

白絲行

繰絲須長不須白、  
越羅蜀錦金粟尺。  
象牀玉手亂殷紅、  
萬草千花動凝碧。  
已悲素質隨時染、  
裂下鳴機色相射。  
美人細意熨貼平、  
裁縫減盡針線跡。

繰絲を繰るには長きを須ふるも白きを  
越羅蜀錦金粟の尺。  
象牀玉手殷紅亂る。  
萬草千花凝碧を動かす。  
已に悲む素質の時に随ひて染まるこ  
鳴機より裂下すれば色相射る。  
美人細意熨貼平かなり。  
裁縫減し盡くす針線の跡。

【字解】【一】繰絲 繰は織から絲

をたぐりだすこと、絲は絹いと。【二】  
須長 須は「まつ、いりようなどい  
ふこと。【三】越羅 越の國(今の浙  
江省地方)でできるうすき絹。【四】  
蜀錦 蜀の國(今の四川省地方)で  
できるにしき。【五】金粟尺 尺は、も  
のさし、長短をはかる器なり、金粟  
はものさしの分、寸の度をもるとこ  
ろにめじるしとして黄金の星點を附  
するなり、この第一句と第二句とは  
直接につながらず、足らざる所は意  
を以て補ひてみる外なし。【六】裁縫

春天衣著爲君舞、  
蛺蝶飛來黃鸝語。  
落絮遊絲亦有情、  
隨風照日宜輕舉。  
香汗清塵汗顏色、  
開新合故置何許。  
君不見才士汲引難、  
恐懼棄捐忍羈旅。

春天衣著して君が爲めに舞ふ。  
蛺蝶飛び來つて黃鸝語る。  
落絮遊絲も亦た情有り。  
風に随ひ日に照されて輕舉に宜し。  
香汗清塵顏色を汗せば、  
新を開き故を合ちて何の許にか置く。  
君見ずや才士汲引せらるると難きを。  
棄捐せられむことを恐懼して羈旅を

忍ぶ。

そめらるるを見て悲しみしいふ話あり。【一】時世のはやりにしたがうてそめらるる。【二】裂下 成れる織物を刀に  
てきりたておろす。【三】鳴機 織り機をたててある「ばた」。【四】色相射 草花の色互ひにうつろひあふ。【五】美人 これ  
は貴麗なす美人、上の織女と同一人にてても可なり。【六】細意 こまかにこころをくばる。【七】熨貼 なくする。【八】針線跡 ばりといとをばこびし痕跡。  
【九】春天 ばるのそら。【一〇】衣者 衣の字去聲、動詞なり、さることなり、君と同じ。【一一】君 あひてなます、だれにても  
よし。【一二】裁縫 こてふ。【一三】黃粟 うぐひす。【一四】落絮 おちちる物の花。【一五】遊絲 いとゆふ、かげろふ。【一六】  
有情 風情あるをいふ。【一七】隨風照日 結絮のさま。【一八】宜 ふさはし、につかふ。【一九】羈旅 無ふとき衣裳のひらひ

らするをいふ。【三】香汗。美人の「あせ」。【四】清露。かるきちり。【五】汗。けがす。【六】顔色。衣裳の模様の色をいふ。【七】開新合故。新故は新衣舊衣をいふ、開合とはその衣をいれる筋をひらきとづることをいふ、開新は新衣を筋からだしてきること、合故は舊衣を筋にかたづけしてしまふこと。【八】置何許。許とは處といはんがことし、何許は何處なり、この三字は故衣についていふ、故衣などどこにおくか、置き場所もわからぬほどにしまひこむをいふ。【九】君不見。諸君見たまはざるや。【十】才士。才能ある人物。【十一】波引難。波引とは浪水引、難なり、その如く甲が乙をひつぱりよせることをいふ、漢書「劉向傳に、禹稷與皋陶一備相波引、不爲比周とみゆ。難の字仇氏は「かたんず」、「はばかる」義にときたる、今從はず、普通の難易の難とみて可なり、むつかしいこと。【十二】棄捐。我を用ひる人からうちすてらるる。【十三】羅襪。羅は苧なり、故は苧なり、たびすまひのこと、仕宦せず都に寓居しつづつあるさまなす。

【題義】白絲染められて彩絲となり、彩絲織られて羅錦となる、羅錦さらに裁縫を経て美人の舞衣となる。ただ衣の新しきもの用ひらるるもふるびて汗れば直ちに放棄せらる。士の人に用ひらるる亦此の如きものあり、たとひ本性を變化して時俗に迎合すともやがては棄てらるべき運命にあり、故にむしろ旅境の貧賤を忍びて其の節操を身へす。これ一篇の趣旨なり。此詩は天寶十一・十二載、長安に客寓せしときの作。

【詩意】織り物の地に用ひる絲は長くさへあればよいので白いのいりようはない、白いのよりか色彩のうつくしいのが却て貴ばれる。その色絲で越羅や蜀錦が織られるので、その長短をば金の星の塵盛りのついたものさしではかりながら織る。美人が象牀に坐つて玉手をはこぶと千花の深紅の色がみだれ、また萬草の静かな碧色がゆらぐのである。元來白いはすの絲地が時好にそうて染めてしまはれることは悲しむべきものであるが(そんなことには頓着なく)その織物を機から切り下すと模様の色がうつくしげにうつろひあふ。之を美人は裁縫して衣裳に仕立て、仕立ててから細心な注意を以て火のしをかけてのばしてしわを平にし針線を運んだ痕跡をなくして目に見えぬやうにする。このうつくしい衣裳を春ぞらに身につけて諸君のために立ち舞へば蝴蝶も飛び來り、うぐひすもさへづり、まことの草花ともみまがふらしく、いとゆふも、おちちる柳の花輪も心あるらしく、風のままにまたただよひ、日の光に照らされて軽らかにまひあがる衣裳のさまとつかはしい。けれども香ばしき美人の汗や、輕清なるちりはこりがその衣裳の色をけがせば、すぐに新しいきを筒から出してふるいきものはどこかへかたづけられてしまふのである。諸君見たまはざるや、才能の士も他の人からひつばつて用ひてもらふことはなかなかむつかしいものであるといふことを。(我が眞價を知りぬいた人からでなくてはひきたてもらひ得ぬものである)だから自分も容易に用ひらるればまた容易に棄てられるものだといふことを恐れて今日の客寓貧賤の境遇をしのびこらへてゐるのである。

陪鄭廣文遊何將軍山林 十首 鄭廣文に陪して何將軍の山林に遊ぶ 十首  
不識南塘路、今知第五橋。 識らず南塘の路、今知る第五橋。

陪鄭廣文遊何將軍山林

名園依綠水野竹上青霄。

名園綠水に依り、野竹青霄に上る。

谷口舊相得濠梁同見招。

谷口舊より相得。濠梁に同じく招かる。

平生爲幽興未惜馬蹄遙。

平生幽興の爲めには、未だ馬蹄の遙かなるを惜まず。

【字解】(一) 鄭廣文 鄭康成なり、處は天寶九載廣文館の博士となる。作者の親友なり。(二) 何將軍 何は姓なり、名は詳ならず。

(三) 山林 園林なり、林中山あり、故に山林といふ、杜市の住居は少陵原に在り、何將軍の山林は少陵原の西南にありしといふ。

(四) 南華 地名、所在詳ならず、ただ章句(少陵原の南に流るる興川の(興曲の名)の附近にあらんといふ。(五) 第五橋 橋名、第五は姓なり、姓によりて橋の名となる、章句の西にありしといふ、橋といひ橋といひ共に山林に至る途中經過の處なり。

(六) 名園 有名な園、何氏の園をさす。(七) 依 依りそふこと。(八) 野竹 野生の竹。(九) 上 上のぼる。(一〇) 青霄 あをそら。

(一一) 谷口 漢の鄭子真賢人にして長安の南子午谷の口にかくれ耕して、その名長安にまで著はれたり、こゝは同姓の故事を借りて鄭康成をさす。(一二) 濠 濠、ふるくよりの溝。(一三) 相得 心を相得る意、交りの親しきをいふ。(一四) 濠梁 濠は水の名、梁は石橋、莊子「秋水篇に莊子が蕙子と濠梁の上に遊びし問答あり、今此の園にあそぶことに比す。(一五) 幽興 幽静の興趣。(一六) 未惜 惜は愛惜すること、をしむ。(一七) 馬蹄 馬蹄蓋 とはく馬足をばいふこと。

【題義】 廣文館博士鄭康成とともに何將軍の山林にあそびて作れる詩。作時は天寶十一・二載にあり。

【詩意】 これまで南塘の路がどこやらしらずにわたが今はそこを經過してさらに第五橋までも知ることになつた。かくでかけて来てみると何氏の名園が綠水によりそうて横はつてをり、野生の竹が空をしのぐばかりにそびえてしげつてゐる。谷口の鄭子真にも比すべき鄭康成と自分とはふるくから心を許

しあうたなかであるので、今回の何氏園への遊び(莊子の濠梁の遊びにも比すべき)にも一輪に招かれたのである。自分は平生から幽静を愛好するからその趣味のためならば決していくら路程が遠くても馬の足に御書券をかけることをも惜んだことはないのである。

(一)

(二)

百頃風潭上千章夏木清。百頃風潭の上、千章夏木清し。

卑枝低結子接葉暗巢鶯。卑枝低れて子を結び、接葉暗くして聲を巢しむ。

鮮鯽銀絲鱠香芹碧澗菜。鮮鯽銀絲の鱠、香芹碧澗の菜。

翻疑柁樓底晚飯越中行。翻つて疑ふ柁樓の底、晩飯越中に行かんと。

【字解】(一) 百頃 頃凡百畝の面積をいふ。(二) 風潭 風ふきわたるふち。(三) 上 ほとり。(四) 千章 千木。(五) 卑枝 低くいただ。

(六) 低 下さまにさがる。(七) 子 木の實。(八) 接葉 くつつきあうた葉。(九) 暗 葉かげくらし。(一〇) 鮮鯽 新鮮なフナ。(一一) 銀絲 銀の絲すぢのやうなほそづくりのなます。(一二) 香芹 かんばしきセリ。(一三) 碧澗 みのりの岩間の水。(一四) 菜 菜、あつしの、お汁。(一五) 翻 かへつて。(一六) 柁樓 かしをとり船橋。(一七) 底 その。

(一八) 越飯 夕の食。(一九) 越中 越の國、今の浙江省地方、作者は二十歳の頃に興越の地方に周遊せり。

【詩意】 百頃ばかりの面積の風をうけたふちのほとりに千本ほどの夏木立が清らかにしげつてゐる。その木立ちの卑い枝はたれさがつて實をむすんでゐるし、くつつきあうた葉かげは暗くしてそこには



るを正解とすべし、水車のうすの水の流れあしにうづまく所のうづまきないふ。【七】夜馬 馬をかくすほど、これは夕方馬に水をつかはせるものあるべし。【八】塵葉 ふちづる、塵葉のものなり。【九】詞賦 詩文や賦。【一〇】工無益 工は巧、無益とは文章に長ずるも作者の如く不遇にては何のやくにもしたためなり、これは憤激の辭なり。【一一】山林 閑林をいふ。【一二】跡未驗 驗は「ばるか」、ばるかならずとは近いといふこと。【一三】拈 拈にてつまみとること。【一四】爾東家 爾(汝)とは何氏をさす、東家とは孔子を「東家の丘」とよぶことあり、そのころもちにて何氏の家をさしていふ。實際の東西に拘らず見て可なり。

【詩意】園内の高竹がとなりのいへの方まではひつづいてゐる。境の目あらなまがきには夕げの花がつづられてゐる。水車からの流れあしにうづまくうづまきは、深くて馬の背まで見せなくしさうであり、靡ぶるはひねくりまがつてそこには蛇がかくされてゐる。かんがへてみると詞賦などはうまくても何の役にもたたぬものだが、山林はそこへはひりこまうとおもへばそんなに遠くないところにあるのである。(現にこの何氏の園のやうに)だから自分はずつかり書物などはとりだして賣りはらつてしまひ、ここへきておまへのこの東家をおとれやうとおもふのだ。(此の篇園のいづこの部分につき敘せしかにつき古人明解を興へず、余は何氏園の鄰舍とのかきねのあたりを中心としてのべしものとみる、上の四句是なり、後の四句は感をのぶ。)

〔五〕

〔五〕

刺水滄江破殘山礪石開

刺水滄江破れ、殘山礪石開く。

綠垂風折筍紅綻雨肥梅

綠は垂る風に折る筍、紅は綻ぶ雨に肥ゆる梅。

銀甲彈箏用金魚換酒來

銀甲彈箏に用ひ、金魚酒に換へ來る。

興移無灑掃隨意坐莓苔

興移つて灑掃無し。随意に莓苔に坐す。

【字解】【一】刺水 あまりの水。【二】滄江 あなき江水。【三】殘山 のこれる山。【四】礪石 海中石門の名、今の渤海灣華島島の附近にありしもの。【五】綠 筍の色。【六】綻 たげの。【七】紅 梅實の色。【八】綻 ほころぶ。【九】肥 實の肉のよとること。【一〇】銀甲 銀にてつくりし箏ひき用の爪。【一一】金魚 黄金にてつくりし魚形の佩びもの、官員が身分によりて佩用するなり、こゝは何氏の物。【一二】換酒 金魚を實におきて酒ととりかへる。【一三】興移 おもしろまがうつりかはる。【一四】灑掃 ほこりをばらひ水をふりそそぐ。【一五】隨意 ころのまま。【一六】莓苔 莓、けい。

【詩意】この園林中の水たるやわづかのあまり水の横であるがあをあとした大江の水が破れいでたものであり、また園林中の残された山はあだかも礪石の石門の残りがあらはれいでてゐるかとおもはれる。林中には筍が風に吹き折られて綠のかしらを垂れ、梅の實が雨にふとつて紅の肉が裂けかけてゐる。かかる景物に對して美人は銀製の爪をとりて之を箏をひくに用ひ、將軍は黄金の佩魚を質屋へやつて酒にとりかへてこさせる。だんだん興味がうつりかはれば庭のはきさうちなどはせず、めいめいかつてに苦むしろのうへに坐するのである。

〔六〕

〔六〕

風磴吹陰雪。雲門吼瀑泉。

風磴に陰雪吹き、雲門瀑泉吼ゆ。

「ひと欲す。」

酒醒思臥簟。衣冷欲裝綿。

酒醒めて簟に臥せむことを思ふ。衣冷にして綿を装は

野老來看客。河魚不取錢。

野老來つて客を見る。河魚錢を取らず。

祗疑淳樸處。自有一山川。

祗疑ふ淳樸の處、自から一山川有るか。

【字解】 〔一〕風磴 風わたる石段の路。 〔二〕陰雪 つめたき雪、雪とは實物をいふにあらず下句の瀑泉の飛沫を形容していふなり。 〔三〕雲門 雲の横はる門とは、すなはち瀑泉のかかれる斷崖をさす。 〔四〕吼 音をたててなる。 〔五〕瀑泉 たきのいづみ。 〔六〕簟 たかむしろ。 〔七〕裝綿 綿入れの衣をかまされてきる。 〔八〕野老 田野の老人。 〔九〕看客 客とは自己等をさす。 〔一〇〕河魚 河でとつた魚。 〔一一〕不取錢 贈り物としてただでわいてゆく。 〔一二〕祗 ただ、字形示偏をよとす。 〔一三〕淳樸 まじりけなく、かざりけなく性質の天眞のままのこと。 〔一四〕一山川 別天地といふの類。

【詩意】 風わたる石段路につめたい雪を吹きつけて、雲ふかい懸崖に瀑泉が吼えくるうてゐる。酒が

さめかけてゐるのでひややかな竹むしろにでもねたいとおもふが、こんなにきものが冷かでは綿入れ

さへまとひたいくらゐだ。たまたま田野の老人がお客様があるとて様子をみにきたが自分の捕つた河魚

をただでおきみやげにしてゆく。こんな人情淳樸な處をみるとこは自然に他の世界とちがつた別

の一の山川があるのでないかと疑はれるのである。

〔七〕

〔七〕

棟樹寒雲色。茵蔯春藕香。

棟樹寒雲の色、茵蔯春藕香し。

脆添生菜美。陰益食單涼。

脆は生菜の美を添へ、陰は食單の涼を益す。

野鶴清晨出。山精白日藏。

野鶴清晨に出で、山精白日に藏る。

石林蟠水府。百里獨蒼蒼。

石林水府に蟠る。百里獨り蒼蒼たり。

【字解】 〔一〕棟 此の字多く轉に作る、白色のものが棟、赤色のものが横(スミ)なりといへり、轉はカラマチなり。 〔二〕寒雲 色 冬の雲の如くすずしげな色、これば樹色を見たてていふ。 〔三〕茵蔯 蔴なりといふ、根をたべるものとみゆ。 〔四〕春藕香 脆は蓮根なり、これも茵蔯をたとへていふ。 〔五〕脆 とけるやうなうまみ。 〔六〕生菜 なまの野菜、即ち茵蔯をいふ。 〔七〕美 ままこと、此句は第二句を承く。 〔八〕陰 かげ、棟(或は轉)樹のなげかくるかげ。 〔九〕益 益ます。 〔一〇〕食單 單は布單なりと、食事のとき地にしく布なり。 〔一一〕野鶴 たづ。 〔一二〕清晨 すんだあきげ。 〔一三〕出 現れる。 〔一四〕山精 山のおぼけ、人の形して一本足を有し身のたけ三四尺、山の靈を食ひ、夜は出で晝は藏くるものなりと。 〔一五〕石林 石が叢生して林の如くなるものをいふ、案ずるにこれ即ち棟(或は轉)樹の生ずる地なるべし。 〔一六〕蟠 わだかまる、山の根しとが水底にまではびこるをいふ。 〔一七〕水府 水底の世界、龍宮の類。 〔一八〕百里 遠方より望むをいふ。 〔一九〕獨 此の石林だけ。 〔二〇〕蒼蒼 蒼々あなを、上に樹叢生するを以てなり。

【詩意】 この篇意義甚だ解しがたし、石山あり、上に棟(蔴)叢生す。作者その下にて朝食せしとき

のありさまを敘せしものとして見るべし。

附編廣文選何將軍山林

一六一

石山の棟樹はみごとにしげつて寒雲がかうかんでゐるやうだ。その下で茵蔯をたべると春の蓮根の香ばしさがあつた。茵蔯の脆い味はこのなまの野菜のうまささをさらにつけくはへ、棟樹の緑りのかげは食籃の敷布の涼しさをさらにもよす。このときすんだあさげに乗じて田鶴がのそのそ出かけてきてあるく、之に反し山精などいふおぼげは太陽の光りに形をかくしてしまふ。我がかく席を占めつつある石山はその根は龍宮までもはびこつてゐるので之を百里の遠くから望んでみればただこの山だけが蒼蒼としてみらるるのである。

〔八〕

〔八〕

憶過楊柳渚。走馬定昆池。

憶ふ楊柳の渚を過ぎ、馬を走らす定昆池。

醉把青荷葉。狂遺白接羅。

酔うて青荷葉を把り、狂しては白接羅を遺す。

刺船思郢客。解水乞吳兒。

船を刺す郢客を思ひ、水を解す吳兒を乞ふ。

坐對秦山晚。江湖興頗隨。

坐ろに秦山の晩に對して、江湖興頗る隨ひき。

【字解】【一】憶、この一字全篇を貫く。【二】楊柳渚、所在詳ならず、下の定昆池の附近にあるならんといふ、地名とせず、ただ楊柳の生じたるなぎさともみも解し得らる。【三】定昆池、唐の梁安公主のうがらたる池の名、華陽の北に在りといふ。【四】把、とる、之をとりてあそぶなり。【五】青葉、はすの葉。【六】狂、狂意をいふ。【七】遺、おきわすれる。【八】白接羅、首の山籠がかぶりしといふ白巾の帽子。【九】刺船、刺の字仇氏本に別、匠造切を用ひたれども刺に作るべし、刺はふれをつくことなり。【一〇】郢客、郢の舟人、郢は楚の都せし地、今の湖北荊州府。【一一】解水、水性をよく知ること、泳ぐに巧みなるをいふ。【一二】何氏にむかつてこそしてくれとたのむなり。【一三】吳兒、吳のうまれの男、これも船夫をいふ、吳は今の江蘇省蘇州府の地方。【一四】秦山、終南山をいふ。【一五】江湖、江湖とは支那南吳楚の地方をさす、船あそびをするゆゑ江湖の興といふなり。【一六】隨、自己に伴ふをいふ。

【詩意】この一篇は定昆池の水遊をなして後日さかのぼりて追憶を記したるものなり。今から憶ひだすことは楊柳渚を經過して定昆池の方へと馬を走らせた。さうして酔ひては青いはすの葉をとつてもあそび、狂態を呈しては白い帽子を置きわすれたりした。船をつくについては楚の船頭があればよいとおもふたり、つひには泳ぎを知つてゐる吳産の水夫をよこしてくれとたのんだ。かくしてそのまま終南山の晩景にうちむかひ、身は北にありながらすこぶる南方江湖の興趣が自分たちに伴ひ生じた。そのことが今からおもひいだされる。

〔九〕

〔九〕

牀上書連屋。階前樹拂雲。

牀上書屋に連なり、階前樹雲を拂ふ。

將軍不好武。稚子總能文。

將軍武を好まず、稚子總て文を能くす。

醒酒微風入。聽詩靜夜分。

酒を醒まして微風入る。詩を聽けば靜夜分る。

絳衣掛蘿薜。涼月白紛紛。

絳衣蘿薜に掛く。涼月白くして紛紛たり。

【字解】【一】林上 林は坐榻をいふならん。【二】書 書籍。【三】連屋 屋根の方までつらなる、高くつまれてあるをいふ。【四】贈 きざし。【五】掃雲 雲をはらうてそのうへまでそびえる。【六】將軍 何氏をさす。【七】稚子 おまなご、何將軍の兒をいふ。【八】聽詩 詩を誦するなきくなり、誦するものは必ず何氏の子弟ならん。【九】夜分 分とは前日と翌日との中分することにて夜半になるをいふ。【一〇】綺衣 綺はほそくこまかく織りたるくづ布なり。綺衣は暑さのとききる衣。【一一】掛扇 扇はつたかづらの類なり、掛とは我が衣をぬぎてそれにひきかくるをいふ。仇氏は羅扇の影が我が衣上にかかると説けり。【一二】涼 月 すずしまうな月のひかり。【一三】勸勸 葉葉にます月光のゆらいでみだれるさま。

【詩意】椅子のあたりから屋根うらあたりまで書物がうづだかくつまれてあり、堂階の前面には老樹が雲を拂うてそびえてをる。將軍は武人でありながら武を好まれず讀書すきである。そのためかをさなごまでみんな文事がよくできる。ここにをると酒の酔ひをふきさますかの如くそよけき風がはひつてくるし、お子さんたちの詩を誦せられるのをきいてゐるとしづかな夜も夜半ちかくなる。酒興の餘りきてゐるかたびらをぬいで庭邊のつたかづらにひつかけると、葉や蔓がうごいてその上にさすすしい月の光さへ白くみだれちる。

〔十〕

〔十〕

幽意忽不愜 歸期無奈何  
出門流水住 回首白雲多  
幽意忽不愜は、歸期無奈何ともする無し。  
門を出でて流水に住まる。首を回せば白雲多し。

自笑燈前舞 誰憐醉後歌  
自笑燈前舞、誰か憐まむ醉後の歌。  
紙應與朋好 風雨亦來過  
紙應に朋好と、風雨にも亦た來り過るべし。

【字解】【一】幽意 幽靜にふけるころ。【二】愜 かなふ、ころの歎するとほりになるはかなふなり、歎するとほりにならぬはかなぬなり。【三】歸期 我家にかへるべき時期。【四】無奈何 いかんともするなし、どうすることもできぬ、どうしてもかへられぬをいふ。【五】出門 何氏の門からである。【六】流水住 住とは自分かたるとまると、水の流るるところでちよつとたるとまると。【七】同首 何氏の園の方へと首をふりかへつてみる。【八】自笑 この二句は園中での前日のことを追憶していふ。【九】燈前舞 夜、燈火の前で舞をしたこと。【一〇】誰憐 何氏の園に在つては何氏が憐んでくれたが、今園を去つての後であるからだが憐んでくれやうか。【一一】醉後歌 これも自己が園中にて歌ひしことをいふ。【一二】紙應 ただまきに云云すべし。【一三】朋好 なかのよいとしたり、暗に鄭夷を意味す。【一四】來過 この何氏の園へたづねくる。

【詩意】此の篇は歸途につくことと將來の希望とをのべたり。

いままで十分幽靜の興にひたつてゐたころもちが急にさやうなわけにゆかなくなつた。いつまでもここのお客となつてもをれず我が家へかへるべき時期がきたのでそれをどうすることもできない。已に門外へふみだしたが未練がのこるので水の流るあたりでちよつと立ちとまり、ふりかへつてみると山林にはただ多く白雲がとざしてゐる。あの燈前で舞ひだしたことなど考へると自分ながらをかしくもあるが、我が醉後の歌は今はだれが愛憐してくれやうか。いやこのたびはここを立ち去るけれどもただただ親友といつしよに風雨のをりだともここへまたたづねてこなければならぬ。



麗人行

三月三日天氣新

長安水邊多麗人

態濃意遠淑且真

肌理細膩骨肉勻

繡羅衣裳照暮春

蹙金孔雀銀麒麟

頭上何所有

翠微鬢 匍葉垂

背後何所見

珠壓腰 穩稱身

就中雲幕椒房親

麗人行

三月三日天氣新なり。

長安の水邊に麗人多し。

態濃に意遠く淑にして且つ真なり。

肌理細膩にして骨肉勻し。

繡羅の衣裳暮春を照す。

蹙金の孔雀銀の麒麟。

頭上には何の有る所ぞ。

翠微鬢葉垂に垂る。

背後には何の見る所ぞ。

珠腰褱を壓して穩に身に稱ふ。

就中雲幕椒房の親。

【字解】

【一】三月三日 陰曆の桃節句にて唐時士女の遊覧盛なり。

【二】天氣新 天色新に晴れわたりたるをいふ。

【三】水邊 曲江の水のほとりをいふ。

【四】麗人 うつくしい婦女。

【五】態 意。人品に美ありてけだかし。

【六】意遠 人がらくく眞實の意あり。

【七】肌理 肌のきめ。

【八】細膩 こまかにすべすべ。

【九】骨肉勻 骨と肉と平均にありて、やせすぎず、やせすぎざるをいふ。

【一〇】繡羅 ぬひとりをいたうすきぬ。

【一一】暮春 暮れなり、照とはあたりまはに伊ひにかがやくをいふ。

賜名大國號與秦

紫駝之峰出翠釜

水精之盤行素鱗

犀筋厭飲久未下

鸞刀縷切空紛綸

黃門飛控不動塵

御廚絡繹送八珍

簫管哀吟感鬼神

賓從雜選實要津

後來鞍馬何遶巡

當軒下馬入錦茵

楊花雪落覆白蘋

青鳥飛去銜紅巾

名を賜ふ大國號と秦と。

紫駝の峯翠釜より出で、

水精の盤に素鱗をやる。

犀筋厭飲久しく未だ下さず。

鸞刀縷切しく紛綸たり。

黃門鞍を飛ばして塵を動かさず。

御廚絡繹として八珍を送る。

簫管哀吟鬼神を感せしむ。

賓從雜選要津に實つ。

後來の鞍馬何ぞ遶巡たる。

軒に當り馬より下りて錦茵に入る。

楊花雪のごとく落ちて白蘋を覆ふ。

青鳥飛び去つて紅巾を銜む。

麗人行

炙手可熱勢絶倫。手を炙らば熱す可し勢絶倫なり。  
慎莫近前丞相曠。慎みて近前すること莫れ丞相曠らむ。

【三】就中、それらの多くの遊覽美人のなかに於て。【三】雲霧、雲霧の如く多く設けたるま。【三】

椒房親 椒房とは椒(山椒の粉)を泥にまぜて壁にぬりたるへやなり、后妃の室はかくする故に后妃のことを椒房といふ、椒房の親とは皇后方の親戚のこと、即ち楊貴妃の身よりの人人をさす。【三】賜名、名とは國號をいふ。【三】大國、即ち下の魏國・秦國をさす。【三】魏與秦、楊貴妃の大姉は魏國夫人に封ぜられ、三姨は魏國夫人に、八姨は秦國夫人に封ぜらる。(三姨とは三番目の姉妹、八姨とは八番目の姉妹)。【三】紫駝之峰、紫色の駝駝の峰肉(駝背の隆起せる肉)なり、それをあぶり肉としてくらふ。【三】出翠蓋、出とはあぶられ調理されてそこからだされること、翠は蓋の色なるべし、蓋は「カマ」。【三】水精、ガラスのこと。【三】盤、ひらたき大皿。【三】行、客のまへへもちだすをいふ。【三】素調、銀白色のうるこをした魚、これはその肉をいきづくりなどにせるもの、紫駝・水精の二句、前者は食物上において器物下になり、後者は器物上において食物下になり、かくして句法の變化を露りしものなり。【三】犀筋、犀のつのにて作りしはし、筋は筋なり。【三】取飲、たべものにあく。【三】下、箸を下すをいふ、はしをつけること。【三】雙刀、刀の柄の環に「すず」のまがつてゐる刀、料理のとき之を用ふればすずの音がふるふとさの調子をよくする。【三】揀切、いとすぢのやうにはそく肉をきる。【三】空粉輪、粉輪は肉片のみだるるま、強しくは後らにと同じ、切つてお客から食はるれば切りしかひあれども食はれば骨折りはむだことなり。【三】黃門、大奥につかふる宦官をいふ、宮中より使ひにくるなり。【三】飛駝、駝は馬の口ばみにあたるつなをいふならん。【三】不動塵、ちりを立てぬ、馬のあしをうまくはこぼせるなり。【三】御前、おだいどころ、大膳職。【三】船舞、船舞、たえまなく、ひきつづいて。【三】遊こせらへおくりこす。【三】八珍、八種の珍味、そのことは「周禮」の膳夫の條、「禮記」の内則篇に見ゆ、煩なれどもこゝに説くべし。一、淳熬、臘肉を煮て御飯のうへにのせそれに香なかけたもの、二、淳母、同上にて「きび」のうへにかけたもの、三、炮炙、四、炮炙、臘はアム、臘はチヒツロ、二物の方法相通する故併せてとく、アム(又はチヒツロ)の臘を割り臘物とりだし臘の中につ

め、臘のむしろにて包み泥にてうはぬりをしてまるやきとす、泥かわきたるのち之をまり手をあらひてすかばみ去る、別に煮にてどろどろのものをつくりおきてそれをぬり、たつぷりと香にて煮る、さて之をこまにきり、之を香料ともし小き餅の中に入れて、又大釜に湯をわかしこの小餅をそのまま釜にいれ三日三夜落す、かくて臘肉、臘菜をあへて用ふ。五、糖珍、牛又は羊等のひれにくを他のものとまぜてよくつき、すぢを去りよく煮てすかばみとり肉を茶かにす、六、漬、殺したての牛肉を筋目を真角にうすきり、うまき酒にひたし、一夜づけとして用ふ、臘菜、又は梅しるをあへものとす、七、熬、牛肉をよくつき、すかばみ去り、臘のむしろのうへにならべ、桂、薑(はじかみ、しやうが)のくづ切りをふりかけ、臘につけ、かわかして用ふ。八、肝膏、物の肝をとりその腸の脂にていため、こげかげんにする、臘は加へずして用ふ。【三】簪管(管一作鼓)、簪のくだ、鼓ならば簪と太鼓となり。【三】哀吟、かなしくあはれな音をさす。【三】感鬼神、神をさへ感動させる。【三】寶從、お客たちや、お伴のもの。【三】推選、こみあふこと、選字の音音。【三】寶、みつ、いづべいになる。【三】要津、かなめなわたしはのとこ、津の字必しもわたしはなにいふにあらず、臘をふむ字なればかくいへり、要處といふほどの意なり。【三】後來、あとから来る。【三】鞍馬、くら置きたるうま、楊國忠の馬なり。【三】途遥、ためらふ貌、これは狭くゆかすゆつくりやつてくるさまをいふ。【三】富軒、この軒は軒梁なりといへり、蓋し帳幕をひきめぐらして内部に簡單なる御舎の類あるなるべく、その舎のきば、土階にあたるあたりを軒といへるなり。【三】錦茵、茵にしているあるにしきのしとれ。【三】楊花、楊柳の花。(葉をいふ)。【三】雪落、雪のやうに落ちたる、雪の字は副詞として用ふ。【三】覆、おほふ、かぶさる。【三】白頰、頰はあまぎの頬、白き花さく水草なり。【三】青鳥、仙女西王母の使ひなりといへり、この美人等を仙女に比して故事を借り用ふ。【三】柳紅巾、柳は「ふくむ」、口にてくはへること、紅巾は婦人の用ふる領のかざりのきれ、青鳥もなれしたしむをいふ。【三】炙手可熱、唐時の俗語に權勢赫灼たるものを火類のさかんなるにたとへてかくいへるなり、「手をあぶればやけどしやうだ」といふなり。【三】勢絶倫、權勢の強盛なることたぐひなし。【三】近前、前の字動詞として用ふ、前へすすみであること、近前は近づき進みであること。【三】丞相、右丞相楊國忠をいふ。【三】曠、この字或は曠に作る、曠は感氣貌なり、曠は目をみはりて眩るなり、楊國忠は魏國夫人とは從兄妹あひにて私通

せるものなり、青島云といへるはそれとなく不義の行ありて人に見られてはならぬやうのことあるをほのめかせしか。

【題義】長安城南の曲江の邊に春遊を試むる美人のさまをうたへり。但し楊國忠一門の豪者を寫しいだす。作時は天寶十二載の春なるべし。前年の十一月に國忠は右丞相となる、詩中に「丞相」の言あり。

【詩意】（この最初の十句は麗人の體貌服飾の美をいへり。）三月三日に天氣が晴れあがつて長安の曲江の水邊には美人が多くあそんでゐる。その人人は姿美しく氣高くしとやかに眞實があり、肌のきめこまかになめらかに、骨と肉とのつりあひもよろしい。衣裳はとみればうすぎぬに金のより絲で孔雀、銀のより絲で麒麟をぬひとりしたのを著けて暮春のそらをてりかがやかしてゐる。頭にいたたく飾りものは何かとみれば造花の葉を翠羽で飾つたのを髪のはとりに垂れてゐるし、背のあたりはどんなものが見えるかといふと、腰帯のあたりになくさんの眞珠がついてゐてそれがしつくりとからだにあらうてゐる。（就中雲幕以下始めて楊氏の一門を出す。）それらの美人たちのうちでも幕を雲のやうに張りつらねた皇后様の御親類すぢのお方方、それは魏國だの秦國だのといふ大國の國號を賜はつてゐる貴夫人方である。そのお方方の花見がてらのめしあがりものはとみれば、翠色の釜から紫色の駱駝の峰肉がやきものに調理して出され、水精の大皿には銀鱗の魚のなますが盛られてもちだされる。かかる御馳走をすぐめしあがるかといふとさうでない、犀の角で作つた箸をなかなかつけやうとはな

らぬ、そこで料理人が腕のさえを見せやうとすすのついた料理刀をふるうて細作り肉を切るには切るがその肉片はいたづらにみだれて横はるばかりだ。そこへ宮中大典からの使番が塵もたたせず馬の口手綱をとばして来て大膳職からひつきりなしに入珍の御料理を送りこされる。この筵席で奏せられる簫管の音は鬼神をも感動させるほどあはれに妙であり、賓客といひ僕従といひ要處要處にこなごないつばいになつてゐる。（後來鞍馬以下は一行のしんがりに楊國忠がやつてくることをいへり。）最後にやつてくる鞍馬はどうしてあのやうにゆつくりとくるのか。やがて糧舎ののきのところへくると馬からおりて錦のしとねの方へはひりこむ。その傍では楊柳の花が雪のやうに落ちちつて水面の白麩におほひかぶさる。また青鳥が飛び去つて美人の紅巾をくはへたりしてざれてゐる。いやその權勢というたらとてもすばらしいもので、もし手をおふるならやけどでもしさうだぞ、めつたに進みちかついてはならぬぞ、ちかづけば丞相どのから大目玉を頂戴するぞ。おそろしとおそろし。

魏國夫人

魏國夫人

魏國夫人承主恩

魏國夫人主恩を承く。

平明上馬入金門

平明馬に上りて金門に入る。

魏國夫人

【字解】

【一】魏國夫人 是即ち

前詩に見えたる魏國夫人の三番目の節

なり。【二】主恩 主人（天子）の

恩。【三】平明 夜のしらしらあけ。

【四】金門 うつくしき御門。【五】

卻嫌脂粉澹顏色。 澹掃蛾眉朝至尊。

卻嫌嬌媚脂粉の顏色を澹すを。 澹く蛾眉を掃うて至尊に朝す。

脂粉 あぶら、おしろい。【一】【二】【三】 顔色 自然のほほえみ。【四】 澹 あはく、あつさり。

【一】 舞はけてはらふ。【二】 蛾眉 美人のまゆをいふ。蠶の蛾はうつくしきまゆをもつによりていふ。【三】 至尊 最上の尊者、即ち天子。(玄宗をいふ) 朝廷へまかりでる。【四】 五章 最上の尊者、即ち天子。(玄宗をいふ)

【題義】 魏國夫人の素顔自慢のことをのべたり。此の詩或は張祜の作とせらる、祜は中唐の人なり、唐の樂史の「楊太真外傳」には杜甫の詩として引けり。果して杜甫の作なるや否も知りがたし。作時不明ならず。

【詩意】 魏國夫人はその君の恩寵をうけてゐるので、夜の白あけにもはや馬の背にのつて御所の門へとはひる。その時は普通人とは反對にあぶらおしろいが素顔のうつくしさをよごすのをきらうて、ただあつさり蛾眉をうけてはらうただけのすがたで御前へまかりでるのである。

九日曲江

九日曲江

綴席茱萸好浮舟 菡萏衰 百年秋已半 九日意兼悲

席に綴りて茱萸好し。舟を浮ぶれば菡萏衰ふ。百年の秋已に半なり。九日の意兼ねて悲し。

江水清源曲 荆門此路疑

江水清源曲。荆門か此の路疑はる。

晚來高興盡 搖蕩菊花期

晚來高興盡く。搖蕩す菊花の期。

【字解】 【一】 魏國 此の語によれば唐の時には「魏」をかくの如くせしとみゆ、魏席ばむしろにつづるなり。【二】 茱萸 ゲミなり、仙人費長房が故事によりて九月九日にはゲミを絡頭に盛りにて臂に懸け、高き處に登りて菊花をうかべたる酒を飲み厄ばらびとす。【三】 浮舟 曲江の水面に舟をうかべるなり。【四】 遊君 遊の花をいふ。【五】 百年秋已半 百年は人の一生をいふ、作者時に年四十二歳、大凡の處にて半といふ。【六】 九日意兼悲 兼悲とは秋を悲みまた老を悲むなり。【七】 江水 曲江の水。【八】 清源曲 清源とは曲江の清き水源をいふ、曲とは此處に至りて屈曲するをいふ。【九】 荆門 山の名、湖北省江陵にあり、その山の東に晉の孟嘉が九日に帽を吹き落されしといふ有名な龍山あり。【一〇】 此路疑 此の句は此路荆門疑といふべきを「此路」と「荆門」とを並におきかへたるなり。【一一】 高興盡 盡なる興味を十分つくす。【一二】 搖蕩 ゆらゆらと舟遊びすることをいふ。【一三】 菊花期 九日をいふ。

【題義】 陰曆九月九日即ち菊節句のときの曲江のさまをのべたり。作時は天寶十二載の秋なるべし。

【詩意】 席につづられたゲミの實もにつかはしいが、水面に舟を浮べてみるともはや遊の花は衰へてゐる。人生百年の秋の半分を自分もはや過した。この九日の意は時節と我身とのふたつにかけて悲しくおぼゆるのだ。しかしこの江はその清き源がここへ來て曲つてをり、このあたりは荆門山のあたりにもまがふのであつて、夕方までには十分おもしろさをつくした、此の菊花の時期にゆらゆらと舟あそびをしたために。

杜少陵詩集 卷三

奉陪鄭駙馬韋曲二首 鄭駙馬に韋曲に陪し奉る 二首

韋曲花無賴 家家惱殺人 韋曲花無頼なり、家家人を惱殺す。

綠樽須盡日 白髮好 綠樽須らく日を盡すべし、白髮好し春に禁る。

禁春

石角鈎衣破 藤梢刺眼新 石角衣を鈎して破る、藤梢眼を刺して新なり。

何時占叢竹 頭戴小烏巾 何時か叢竹を占めて、頭に戴かむ小烏巾。

【字解】【一】鄭駙馬 駙馬都尉鄭潛曜なり、前に見えたり。【二】韋曲 長安城南の樊川にそひたる名勝、杜曲とならび稱せらる。少陵原よりは東にあたり。【三】無頼 あてにならぬこと、物を賣らんとするげなるさまを戯れに罵りていふ語なり。【四】惱殺 非常になやまず、之を愛するの極、なつむをいふ。【五】綠樽 (或は綠樽)は清酒をもしりたるをいふ。【六】盡日 一日のあらかぎりをあそびつひやす。【七】白髮 老境をいふ。【八】禁春 禁は富るなり、脚ふるなり、對抗するころもちなり。【九】石角 石のかど、この二句は酒席の附近の事物を統す。【一〇】鈎 かぎにかけるやうにひつかける。【一一】藤梢 ふぢのこすゑ、これは蔓のわか芽などないふなるべし、花にはまだ早し。【一二】刺眼 特に眼をひくをいふ。【一三】占 接りたもつこと。【一四】

東竹 城の西側の竹やぶ。【一】鳥巾 まつくりいづきん、老人のかぶりもの。

【題義】 鄭潛曜に陪從して韋曲に遊びしことをのぶ。作時は詳ならず、仇氏は之を天寶の季祿山の亂未だ起らざるときとし、之を次の「重過何氏」詩の前に置きたるは、蓋し天寶十三載春の詩とみなせしならん。

【詩意】 韋曲に輕薄無頼の花めがさきをつて、どの家でもどの家でもきやつのがたがそれを看る人間をうちなやます。自分のやうな白髮の老人が春に對抗するにはいい酒樽を相手として一日を暮らすべきである。さて飲んでゐると石の角で衣がひつかけられて破られたり、こづらにくくも藤梢のわかい蔓がわが眼をささんばかりに新芽をだしてゐる。いつになつたら自分もこんな場所である竹やぶを所有して、のんびりとかしらに小さい黒頭巾でもいただいでゐることができたらうか。

【一】

【二】

野寺垂楊裏 春畦亂水間

野寺垂楊の裏 春畦亂水の間

美花多映竹 好鳥不歸山

美花多く竹に映す 好鳥山に歸らず

城郭終何事 風塵豈駐顔

城郭終に何をか事とせむ 風塵豈に顔を駐めむや

誰能與公子 薄暮欲俱還

誰か能く公子と 薄暮俱に還るを欲せむや

【字解】 【一】野寺 郊外の寺。【二】春畦 畦は田畠のうれをいふ。【三】亂水 縱横にながれてゐる水。【四】映 色のうつりあふこと。【五】好鳥 羽毛聲音のうるばしき鳥。【六】不歸山 山からこの里へかけて来てそれなり山へかへらぬ、といふはこの里がよいからなり。【七】城郭 長安の城郭をいふ、郭はそとくるわ。【八】終何事 けつきよく何しする仕事なし、試験には第し官には召しだされぬをいふ。【九】風塵 人間世界のちりほこり、ちりは風に吹きとばされるものゆゑ風塵といふ。【一〇】駐顔 顔とは少壯の顔色をいふ、駐とは同じ場所にはきとめて置くこと、駐顔とは年よりならず、仙人のやうに同じ若さであることなをいふ。【一一】誰能 此の二字次の句までかかり反語となる。【一二】與 或は共に作る。【一三】公子 鄭君をさす。【一四】薄暮 たそがれ、薄は迫り、せまる、くれにせまる。【一五】俱還 いつしよに城中へしとる。

【詩意】 したれやなぎのうちに野中のお寺が見える。あつちこつち方向もきまらず流れてゐる水流のあひまに春のはたけのうねが見える。竹林のある處として美しい花は大抵竹林とうつろひあうて一層はでに見えるし、いい鳥どもはここへ來たが最後山へはかへらずにゐる。自分は城中へいつたところなんにも仕事があるではなし、風塵中に奔走したとて仙人のやうにいつまで若さを保てるでなし、だれがこのたそがれにこのきんだち(鄭をいふ)といつしよにもどりたい(城中へ)とおもふことができやうぞ、できはしない。

重過何氏 五首

問訊東橋竹將軍有報書

問訊す東橋の竹、將軍報書有り。

重過何氏

倒衣還命駕高枕乃吾廬。衣を倒にして還命を命ず。枕を高うすれば乃ち吾が廬なり。  
 花安驚捎蝶溪喧獺趁魚。花安にして驚蝶を捎め、溪喧くして獺魚を趁ふ。  
 重來休沐地眞作野人居。重ねて來る休沐の地。眞に野人の居と作る。

【字解】【一】倒衣。此句より末句までを報書中の意を述べたるものとみる説あるも今從はず。てて作者がけよりいふとみる。倒衣は倒衣裝（詩經の句）に本づく、いそぐために上衣と下裳とをりちがへてくるをいふ。【二】還。また、俗語なり。【三】命駕。車馬の用意をいひつける。【四】高枕。枕を高くして臥すること、これは圖に到着後をいふ。【五】花安。圖中の人「隨つる」ことを安といふとの説を用ふるものあり、今從はず。安穩の安にて可なり。おだやか、さしはりなきをいふ、花が隨つるには頗る物騒ならずや。【六】驚捎蝶。捎は掠めること、驚が蝶とすれちがふをいふ。【七】溪喧。かばなを。【八】獺。おふ、あとからつきまとも。【九】趁。重來。再來なり。【一〇】野人。作者自ら稱す。

【題義】前に何將軍の山林に遊びし詩十首あり、これはふたたび遊びて作れるなり。製作時、前遊は夏に在り。此遊は天寶十三載の春にあるべし。

【詩意】將軍のところへ東橋の竹の様子はいかがでござるかとなつてやつたら、將軍から竹は無事だ遊びにこぬかとの返事があつた。それで喜んで大急ぎできものをさかさまにつけたりしてのりものを用意をさせてでかけたが、圖へ到着して枕を高くしてねころんでみると他人の廬ともおほえぬのである。木の間で鶯が蝶とすれちがつてゐるが花が蹴らされるでなし、溪川の水がごちやごちやいうてさわがしいとおもふとそれは鶯がさかなをおひまはしてゐるのだ。將軍の安息所へこれで二度めに來たのだがほんたうにこは自分ごとき野人の住居となつたかの感がある。

(一)

(二)

山雨樽仍在沙沈榻未移。山雨樽仍在在り。沙に沈みて榻未だ移されず。  
 犬迎曾宿客鴉護落巢兒。犬は迎ふ曾て宿せし客。鴉は護る巢より落ちんとする兒。  
 雲薄翠微寺天清皇子陂。雲は薄し翠微寺。天は清し皇子陂。  
 向來幽興極步屨向東籬。向來幽興極まる。歩屨東籬に向ふ。

【字解】【一】仍在。やつぱり、もの如く存在す、前年の酒樽が存在するをいふに非ず、このたび来て酒樽中、前日もちだされし酒樽が今日してあるといふなり。【二】沙沈。雨水のため沙に沈埋せらるるをいふ。【三】榻。こしかけ。【四】移。ばしよがへする。【五】曾宿客。前年かつてとまつたことのあるお客、作者自己をさす。【六】鴉護兒。落の字、落成（できあがつた）生落（うみおとした）等の解あれども今從はず、蓋し護落の義なるべし、ただし落ちてしまつたに非ず、「落ちんとする」なるべし、兒は「ひな」をいふ。【七】雲薄。はれかかれるさま。【八】翠微寺。長安の南、高年縣外、終南山の上にあるといふ、圖中より短少する寺なるべし。【九】皇子陂。つつみの名、章曲の西に在り。【一〇】向來。まきほどより。【一一】步屨。ぎょり、スリッパの類。

【詩意】雨ばれのさまを敘して圖中より圖外に及べり。

山雨がかかつたのにきのふからのみさしの酒樽が依然雨ざらしのまままだ庭上に横はつてゐる。雨水におしながされた沙でうづめられながらこしかけもうつされずにある。犬はおなじみで前にもとまつたことのあるお客(自分)を迎へてくれる。鶉は巢から落ちかからうとするひなを大事さうにみまもつてゐる。すこし遠く園外をながめると翠微寺のあたりには雲がうつすりのこつてをり、皇子殿のあたりはそらがすつきりはれわたつてゐる。草履をつつかけながら東のまがきの方へとでだして遠景をみると、さきほどからの幽静の興が極點に達する。

【三】

落日平臺上、春風暖茗時。

落日平臺の上、春風茗を暖る時。

石欄斜點筆、桐葉坐題詩。

石欄斜に筆を點じ、桐葉坐がら詩を題す。

翡翠鳴衣桁、蜻蜓立釣絲。

翡翠衣桁に鳴き、蜻蜓釣絲に立つ。

自今幽興熟、來往亦無期。

今より幽興熟す。來往にも亦た期無からむ。

【三】

【字解】【一】平臺 平な高臺地。【二】暖 する。【三】茗 石のてすり、その上に硯を置くなり。

【四】斜 石欄に對してはすかひに。【五】點筆 點とは硯の墨池へチコンチコンと筆さきをつけること、因て筆をうるはずなり。

【六】翡翠 かはせみ。【七】衣桁 衣をはす木のけた。【八】蜻蜓 あきつ、とんぼ。【九】立 立ちてとまる。【一〇】釣絲 釣糸。

つりいと、第五・六の二句は水滸のまよ。【三】熟 十分箇中の興になれたことをいふ。【四】來往 我が家から往つたり來つたりする。【五】無期 定まれる時期なきをいふ。

【詩意】平な高臺で日の落ちかかるころ、春風に吹かれながら茗茶をすする。石欄においてある硯に自分の席からはすかひに筆をうるはし、ひながら桐の葉に詩をかきつける。衣桁には翡翠が鳴いてゐるし、釣絲にはとんぼがとまつてゐる。自分は十分箇中の幽興は熟知したから、これからはここへは來るにも去るにも定期なしといふことにしよう。

【四】

頗怪朝參懶、應耽野趣長。

頗る怪しむ朝參の懶なるを。應に野趣の長きに耽けるなり。

兩拋金鎖甲、苦臥綠沈槍。

兩には拋つ金鎖甲。苦には臥す綠沈槍。

手自移蒲柳、家纔足稻梁。

手自ら蒲柳を移す。家纔に稻梁足る。

看君用幽意、白日到羲皇。

看る君が幽意を用て、白日羲皇に到ることを。

【四】

【字解】【一】怪 作者之を怪しむなり。【二】應 朝參へ參内すること、主人將軍が參朝するなり。【三】懶 ものうし。

【四】應 まさに云云なるべし、想像していふなり。【五】耽 耽 耽 耽、主人がふける。【六】野趣長 田野の趣の盡きざるをいふ。

【七】抛 投げうつ、ほつたらかす。【八】金鎖甲 くらりなどのよろひ。【九】臥 臥 臥 臥、わかつてゐる。【一〇】綠沈槍 ふかみどり



色のうるしぬりのやり、雨池二句は「朝夢頓」を承けていふ。【一】移、移植すること。【二】蒲柳、楊柳のこと。【三】葉、葉のよきいれ。【四】君、作者から主人をさす。【五】用、用意、幽静を愛好することをもつて。【六】白日、まはるなか。【七】劉、劉、義皇とは上古の帝王伏羲氏をいふ。晉の陶淵明は夏日本意の下に晝寝をして現代を超越して遠く羲皇以上の人となれること、ちすといへり、その故事を借り用ふ、劉とはころもちがその地にとどくことはいふ。

【詩意】主人はいつかうぶせうもので朝廷への参内などを不思議なほどなまけてゐるが、それはおほかたこの園の野趣盡きざるところにふけてゐるためであらう。くさりをどしのよろひも雨中にはふりだしてあるし、よかみどりの漆ぬりの槍も苦のうへにねかしてある。楊の移植は自分自身の手でやるし、それでゐて家の經濟はやつとたべるだけのいねがあるばかりだ。ほんに君は陶淵明みたいな人であつて、わたしは君が幽静を愛する心から晝寝しながら伏羲氏以上の世界に遊ばるるのをみうける次第である。

【五】

【五】

到此應常宿相留可判年  
蹉跎暮容色 悵望好林泉  
何日霽微祿 歸山買薄田  
斯遊恐不遂 把酒意茫然

此に到つては應に常に宿すべし。相留めて年を判す可し。  
蹉跎たり暮の容色。悵望す好林泉。  
何の日か微祿に霽ひて、山に歸りて薄田を買はむ。  
斯遊恐らくは遂げざらむ。酒を把つて意茫然たり。

【字解】【一】此、園をさす。【二】常宿、いつしとまる。【三】相留、こちらを引きとむること。【四】判年、判は判の字と通ず、拵は「ヌツル」なり、拵年とは一年の久しきをすてさるをいふ。【五】蹉跎、つまづく貌、失意のまま。【六】暮、暮年、老年をいふ、作者今年四十三歳なり。【七】容色、すがたかほつき。【八】悵望、ちちめしさうにながめる。【九】好林泉、この園をさす。【一〇】霽、霽、官に仕へすこしばかりの俸祿にありつく、霽は「うるほふ」、その恩典にうるほふをいふ。【一一】歸山、山は故郷の山をいふ。【一二】薄田、地味よくない田地。【一三】斯遊、この山林でのあそび。【一四】不遂、なすとげることができぬ。【一五】把酒、酒杯をとる。【一六】茫然、ぼんやり。

【詩意】この篇は此の園に別れんとするところをのぶ、之によれば作者は長安を辭して河南の方へかへらんとする意の動きつつあるを見る、其の別れの情の深きこと知るべし。  
此の園へ来ては自分はいつでもそこに宿泊するはずであつて主人からひきとぬらるれば一年の長きをも費すことができるのだ、(しかしそんないつまでもは居られぬ) 自分は當世に志を得ないので晩年の容色すこぶる振はないし、ここを去らうとしてただうらめしくこのいい庭園を眺める。いつになつたら少しばかりの官祿にありついて故郷の山へかへつて瘦せ田地でも買ふことができるのか。今ここを去ればこのたびのやうな遊びは恐くはなしとげることができないかもしれぬ。だから酒杯を手にながら心中はただぼんやりしてゐる。

陪諸貴公子丈八溝攜妓納涼晚際遇雨 二首

諸貴公子に陪して、丈八溝に、妓を攜へて涼を納る。晚際に雨に遇ふ 二首

落日放船好。輕風生浪遲。落日船を放つ好し。輕風浪を生ずる遅し。

竹深留客處。荷淨納涼時。竹は深し客を留むる處。荷は淨し涼を納るるの時。

公子調冰水。佳人雪藕絲。公子氷水を調し、佳人藕絲を雪ふ。

片雲頭上黑。應是雨催詩。片雲頭上に黒し。應に是れ雨の詩を催がすなるべし。

【字解】 〔一〕丈八溝、ほりわりの名、天寶元年に韋堅の作れる所にして下杜城の西にありといふ、少陵より遠からぬ處とみゆ。

〔二〕晚際、くれまぢか。〔三〕生浪遲、遅とはそろそろと浪をおこすをいふ。〔四〕竹、曲上の物。〔五〕荷淨、この荷はほすの花をいふ。〔六〕調氷水、氷水をこしらへること、飲むとするなるべし。〔七〕佳人、美人、即ち妓。〔八〕雪、拭ふことなり、きよめること。〔九〕藕絲、蓮根のいとすぢ、これは食物。

【題義】 もろもろの貴公子たちに陪伴して丈八溝にて歌妓をたづさへて涼をとり、くれがたちかく雨にであうたときの作。作時は詳ならず、天寶の末、祿山の亂未だ起らざりしときの詩なり。

【詩意】 日の落ちかかるころ船をくりだすのはぐあひがよろしい。風が軽く吹きわたつて浪の生じかたもゆつたりしてゐる。賓客をひきとめておく岸邊には竹がふかく生ひしげつてゐるし、水面ですず

しさをとつてゐるとき、傍には荷花がきよらかにたちならんでゐる。公子たちは氷水をこしらへるやら、美人どもは蓮根の掃除をするやら、そのうちに一片の雲が頭の上でまつくろに見えて來たが、これは雨がふるから早く詩を作れといふご催促なのであらう。

〔一〕

〔二〕

雨來露席上。風急打船頭。雨來つて席上を濡はし、風急にして船頭を打つ。

越女紅裙濕。燕姬翠黛愁。越女紅裙濕ひ、燕姬翠黛愁ふ。

纜侵堤柳繫。幔卷浪花浮。纜は堤柳を侵して繫ぎ、幔は浪花の浮べるに巻く。

歸路翻蕭颯。陂塘五月秋。歸路翻つて蕭颯たり。陂塘五月秋なり。

【字解】 〔一〕船頭、へまさき。越女、浙江省の女。〔二〕紅、はかま。〔三〕燕姬、直隸省の女、越は南、燕は北、諸國の美女あるなり。〔四〕翠黛、みどりのかまきり。〔五〕愁、としづな。〔六〕船、船にほりしまく。〔七〕陂塘、なみの花。〔八〕纜、かへつて。〔九〕蕭颯、まつばりした貌。〔一〇〕陂塘、いけつづみ。〔一一〕五月秋、五月の季節で秋のやうにすずしい氣候。

【詩意】 雨がやつてきて席上をうるほすし、風は急に吹いて船のへさをうつつ。越女は紅のはかまをしめらしてしまふし、燕姬は眉根にしはをよせて心配してゐる。船をただよはさぬやうに纜で堤上の柳へかけてつなぎつける。浪のしぶきのちるところ幔幕はすつかり巻きあげてゐる。夕立ちで一時は

こんなさわぎをしたが歸りみちはかへつてさつぱりした。何となれば我等の船のとほる池づつみでは五月なのに拘らず秋のやうなすずしい氣候になつたから。

醉時歌 「原注」貯廣文館博士鄭度。醉時歌

諸公袞袞登臺省。諸公袞袞として臺省に登る。  
廣文先生官獨冷。廣文先生官獨り冷かなり。  
甲第紛紛梁肉。甲第紛紛梁肉に厭く。  
廣文先生飯不足。廣文先生飯足らず。  
先生有道出羲皇。先生道有り羲皇よりも出づ。  
先生有才過屈宋。先生才有り屈宋よりも過ぐ。  
德尊一代常坎軻。德一代に尊くして常に坎軻たり。  
名垂萬古知何用。名萬古に垂るるも知らず何の用ぞ。  
杜陵野客人更嘔。杜陵の野客人更に嘔ふ。

【字解】 諸公 當時仕官の人人をます。 袞袞 相續いて絶えざる貌なり。 臺省 蓋は御史臺をいふ、臺院、殿院、察院の三屬あり、省は中書、尚書、門下の三省をいふ、臺省の官は清要の職なり。 廣文先生 鄭度をます、天寶九載に國子監に廣文館博士一人、助教一人を置き、生徒の進士たるものを領せしむ、これは玄宗が鄭度を優遇せんがために設けたるなり。 坎軻 官調冷 冷とは熱の反對、人が衆く附せざるを冷といふ。 甲第 上等の邸宅。 紛紛 多くある貌。 梁肉 よきこめ、にく。

被褐短窄鬢如絲。被褐短窄鬢如絲の如し。  
日糶太倉五升米。日に糶ふ太倉五升の米。  
時赴鄭老同襟期。時に鄭老が襟期を同じくするに赴く。  
得錢卽相覓。錢を得れば卽ち相覓む。  
沽酒不復疑。酒を沽うて復た疑はず。  
忘形到爾汝。形を忘れて爾汝に到る。  
痛飲眞吾師。痛飲眞に吾が師なり。  
清夜沈沈動春酌。清夜沈沈春酌を動かす。  
燈前細雨簷花落。燈前細雨に簷花落つ。  
但覺高歌有鬼神。但だ覺ゆ高歌鬼神有るを。  
焉知餓死填溝壑。焉ぞ知らむ餓死して溝壑に填するを。  
相如逸才親滌器。相如逸才なるも親ら器を滌ふ。  
子雲識字終投閣。子雲字を識るも終に閣より投ず。

【注】 有道 道義を身に具する。  
【一】 出 超出するをいふ。 【二】 糶 糶 伏義氏をいふ。 【三】 有才 才は文才をいふ。 【四】 屈宋 楚の屈原、宋玉、並に騷賦の作家なり。  
【五】 坎軻 坎或は軻に作る、同じ、不遇の職なり。 【六】 知何用 知は不知の意、何の用あるやを知らず、用なしといふなり。 【七】 杜陵野客 作者自ら稱す、杜陵は即ち少陵なり、官に仕へず故に野客といふ。  
【八】 人 他の人。 【九】 嘔 我をわらふ。 【一〇】 被褐 きてある粗末な毛織りもの。 【一一】 短たけみじかし。 【一二】 卑 みはばせまし。 【一三】 如絲 しらがのやうす。 【一四】 日 毎日。 【一五】 滌 洗かひいれる。 【一六】 太倉 天子の御米ぐら。 【一七】 五升米 一家の

先生早賦歸去來、先生早く賦せよ歸去來。

石田茅屋荒蒼蒼、石田茅屋蒼蒼荒れむ。

儒術於我何有哉、儒術我に於て何か有らむ哉。

孔丘盜跖俱塵埃、孔丘盜跖俱に塵埃なり。

不須聞此意慘愴、須みず此を聞いて意慘愴なるを。

生前相遇且銜杯、生前相遇ふ且つ杯を銜め。

【一】得錢 以下四句少しく疑ひあるも喜説により杜甫よりいふとみて説くべし。

【二】沽酒 杜甫が酒をかふなり。

【三】不復疑 不疑とは避疑せざるをいふ、ぐづぐづせずぐま買ふ。

【四】忘形 精神互に契りて外形を忘る。

【五】到爾汝 爾汝の間がらに逢する、爾汝の語は孟子にみゆ、親友となればお互に「うぬ、貴様」といひあふものなり、親友がそこまでに到るといふなり。

【六】痛飲 ひどく酒をのむ。

【七】沈沈 しづかなる貌。

【八】動 爲しはじむるをいふ。

【九】驚花 のきはより雨のしたたるまを花にみたてていふとする解あり、また作者の「白花蒼外染」なる句をひき、花の實物なりとくものあり、決定しがたし。

【一〇】高歌有鬼神 作者の句に詩成覺有神とあり、詩成るに鬼神の助あるかと疑ふないふなり、こも同意なるべし、歌に不思議の力ありといふには非ず。

【一一】填溝壑 死して骨をみぞやたにうづめること。

【一二】相知 漢の司馬相如、卓文君と私通し臨邛に走り酒店をひらき、文君を「」にらしめ、自らふんどしをつけて無役をなし飲食の器物をすぐ。

【一三】秀才 文學にすぐれた才。

【一四】歡器 べつべつとした食器をあらひすぐこと。

【一五】子雲 漢の揚雄、字は子雲、玉琴のとき鐘疑により更より捕へられんとす、時に雄は天賦閣上にて書を授せしが使者の車をみて胸より身を投じてほとんど死せんとす。

【一六】擲字 擲は大學者にして特に古代の文字に精通せり。

【一七】歸去來 晉の陶淵明彭澤の縣令となり官途に意なく八十餘日にして「歸去來辭」を賦して官を辭す。

【一八】石田 石ころのあるわい田也。

【一九】荒 草などを生ひしげること。

【二〇】儒術 儒者の學術。

【二一】何有哉 何の数があらんや、なし。

【二二】孔丘 孔子、大聖人なり。

【二三】盜跖 大泥棒なり。

【二四】俱塵埃 聖も盜も善惡の無端なるに拘らずつまりはともに死してちりほりに化するのみ。

【二五】不須 必要なし。

【二六】此 此の歌なす。

【二七】慘愴 慘愴かなしくいたむ。

【二八】相知 相知己のものあひであふ。

【二九】且 且かつ、まあまあとはいふこと。

【三〇】銜杯 酒杯を口にくはへる。

【題義】 辭へるとききの氣もちをうたへる作。作者の親友たる廣文館の博士鄭處に贈りしもの。作時は天寶十三載の春ならん。

【詩意】 今、仕官してゐる方方は續續として臺や省の官廳へのぼらるるが、我が廣文先生（鄭處）はひとりだれもよりつかぬやうなさびしい官に居られる。また他の諸官員は上等の邸第を無數にかまへて榮肉の御馳走にあききつてをるが、我が廣文先生はご飯も足らぬ程である。先生は身に道義を具有することは伏羲氏以上の世の人の如くであり、また文才をもつてをらるること屈原や宋玉よりもまさつてをられる。先生は道徳が一代に尊くあつてもいつも不遇でをられる、之を見ると萬古に美名を垂れても何の役に立つかといふやうな氣もちがする。自分に至つてはいつそ他人から笑はれてゐる。自分のきてゐる毛織物は短くてはばがせまく、鬢の毛は白絲のやうである。毎日御米倉から五升づつの米をかひいれ、時あつてか同志たる鄭處老先生のところへでかけるのである。自分は錢を得さへすれ

ばすぐ先生をもとめ、何等のためらふことなく酒をかふ。さうして外形を忘れて貴様とよびあふほどになる、その痛飲する所真に吾が師とすべき人である。』けふもこの清らかな夜にあたり、人の寢静まるころ春酒を酌みはじめた。燈の前には雨がほそほそとふりをそいで簷の花がはらはらちる。典に乗じて聲高に歌をうたひだすと鬼神の助があるかと覺ゆるのだ、あすにも餓死してみぞやたにに屍をうづめるかも知れぬなどの念はちつともおこらぬ。司馬相如ほどのすぐれた才人も窮したときには自分みづから食器あらひをしたではないか。揚子雲ほどの字を知つた學者でも結局高い閣から地上に身を投げたではないか。『こんなわけだから、先生も陶淵明のやうに早く歸去來辭でもお作りなさい、故郷の石田や茅屋には青むけなどがはびこつてしまふであらう。儒者の學術などは我我にとつて何の效があらうぞ。聖人孔子も大盜跖もひとしくともに死して塵埃に化するのみではないか。こんなことをいうたとしてそれをきいてかなしみいたむ必要はありませぬぞ、おたがひ生前にかく知己がであうたうへはまあまわ杯を口になさるがよろしい。』

城西陂泛舟

城西の陂に舟を泛ぶ

青蛾皓齒在樓船

青蛾皓齒樓船に在り。

【字解】 城西陂 陂は池をいふ、次に樓船の詩あり、城西の陂とは樓船ならん。【二】青蛾 蛾は

横笛短簫悲遠天

横笛短簫遠天に悲し。

春風自信牙樁動

春風自ら牙樁の動くに信す。

遲日徐看錦纜牽

遲日徐ろに看る錦纜の牽くを。

魚吹細浪搖歌扇

魚は細浪を吹いて歌扇搖ぎ、

燕蹴飛花落舞筵

燕は飛花を蹴つて舞筵に落つ。

不有小舟能蕩槳

小舟の能く槳を蕩かす有らすれば、

百壺那送酒如泉

百壺那ぞ送らむ酒泉の如くなるを。

日。【一】 横笛 横笛のしきのこと。【二】 幸 幸ひく、船をひつづること。【三】 推歌扇 推とは扇影が水中にてゆらぐをいふ。

歌扇は妓女がうたふとき面をささふるうちけなり。【四】 牽 けちらすこと。【五】 舞筵 船中の舞ひのむしろ。【六】 不有 下句の「那」と應ずる語なり。【七】 小舟 樓船とは別のこぶねなり。【八】 蕩槳 蕩はうごかすこと。槳はかひぼうなり、かひぼうはうごかすば舟をこぐこと。【九】 百壺 多くの酒壺。【一〇】 酒如泉 泉とは水の湧くこと多くことをたとへていふ。

【題義】 長安城西の大陂に舟を泛べてあそびしことを敘す。製作時は漢陂行と同じく天寶十三載なるべし。

【詩意】 青蛾皓齒の美女が樓船にのせられてある、その船から起る横笛短簫の音は遠方の天まで悲しむべし。

横笛、美人の眉をいふ、背とは舞の眉の黒の色をいふ。【一】 皓齒 白きば。【二】 樓船 二階のついたふれ、大船なり。【三】 横笛 よこびに吹くふえ。【四】 短簫 たけのみじかき簫。【五】 悲遠天 悲は音のかなしげなるをいふ、遠天はとほきそら、遠方をいふ。【六】 自信 信は任なり、まかすなり。【七】 牙樁 象牙などをかざりとせるほしら。【八】 遲日 暮るることおそき事。

げにひびく、かくして春風に乗じて牙櫓の移動するにまかせ、暮ることしらぬなが日にそろそろと  
錦標がふねをひつばつてゆくをみる。水面には魚は細かい浪を吹きだし、歌扇の影その上にゆらぎ、  
船中には燕のけちらす飛花が舞席に落ちきたる。そのうへに巧みにこぐ小舟が別にあるので泉の如き  
酒百盞がどしどし自由にこの親船の方へと送りこまれるのである。

【餘論】此詩の春風二句の平仄は常式に反せり。

漢陂行

漢陂行

岑參兄弟皆好奇。  
攜我遠來遊漢陂。  
天地踈慘忽異色。  
波濤萬頃堆琉璃。  
琉璃汗漫泛舟入。  
事殊興極憂思集。  
鼉作鯨吞不復知。

岑參兄弟皆奇を好む。  
我を攜へて遠く來つて漢陂に遊ぶ。  
天地踈慘として忽ち色を異にす。  
波濤萬頃堆琉璃し。  
琉璃汗漫舟を泛べて入る。  
事殊に興極まりて憂思集まる。  
鼉作り鯨吞まじも復知らず。

【字解】(一)漢陂、つつみの名、鄂縣の西五里にあり、終南山の諸谷より出て胡公泉を合して陂となる。

【一】岑參、作者の親友にて當時の詩の大名家なり。【二】好奇、非凡を愛す。【三】事殊、くらつぱく陰氣なるをいふ。【四】異色、今までとは色がかはる。【五】萬頃、頃には百畝の面積をいふ。【六】堆琉璃、るりの色をうづだかくしたる如しとは深き水のすみわたれるをいふ。天地、波濤

惡風白浪何嗟及

惡風白浪何ぞ嗟及ばむ。

主人錦帆相爲開

主人錦帆相爲めに開く。

舟子喜甚無氛埃

舟子喜ぶ甚し氛埃無きを。

亮鷹散亂棹謳發

亮鷹散亂棹謳發る。

絲管啁啾空翠來

絲管啁啾として空翠來る。

沈竿續綬深莫測

竿を沈め綬を續ぐも深くして測る。【莫し。】

菱葉荷花淨如拭

菱葉荷花淨くして拭ふが如し。

宛在中流渤澥清

宛も中流に在りて渤澥清く。

下歸無極終南黑

下歸無極にして終南黒し。

半陂以南純浸山

半陂以南純ら山を浸す。

動影裊窈冲融間

影を動かすこと裊窈たり冲融の間

船舷嘆夏雲際寺

船舷嘆に夏す雲際の寺。

水面月出藍田關

水面月出づ藍田關。

の二句は倒裝なり、前後置きかへてみるべし。【一】汗浪、ひろい浪。

【二】事殊、前と事柄がちがつてきたこと。即ち晴れが陰りになつたこと。【三】興極、興起が盛りの極に達してゆきつまりになる。【四】天地踈慘、惡天候についての心配。【五】事殊、おほかめがあられたす。【六】鼉作、復た鼉り知るべからず。【七】何嗟及、なげいたとておひつけぬ、どうとすべきぬ。【八】主人岑參みさす。【九】錦帆、にしきのほ。【一〇】相爲開、我がためにかかけてのりたすこと。【一一】舟子、舟子ふなご、せんとう。【一二】氛埃、もや、ほこり。【一三】異、カモ。【一四】結、ふなうた。【一五】發、おこる、はじまる。【一六】絲管、いとたけの

此時驪龍亦吐珠。

此の時驪龍亦た珠を吐く。

馮夷擊鼓羣龍趨。

馮夷鼓を撃ち羣龍は趨る。

湘妃漢女出歌舞。

湘妃漢女出でて歌舞す。

金支翠旗光有無。

金支翠旗光り有無。

咫尺但愁雷雨至。

咫尺但だ愁ふ雷雨の至らむことを。

蒼茫不曉神靈意。

蒼茫曉らず神靈の意。

少壯幾時奈老何。

少壯幾時ぞ老を奈何せむ。

向來哀樂何其多。

向來哀樂何ぞ其れ多き。

一 九 四  
音。【三】嘯。やかましきさま。

【六】空翠。空中翠色の氣、嵐氣。

【七】龍。龍はつるいとなり、鼓はつり鐘にそれをつぎたすをいふ。

【八】雨。水のふかき。【九】宛。あたかも、さながら。【一〇】湘。湘の名。【一一】下。下無極。そこは

はてしらず。【一二】終南。山の名、

彼のほとりに在り。【一三】牛。牛、

彼の牛面嶺。【一四】以南。南へか

けて。【一五】純。もつばら。【一六】

浸山。山影をひたす。【一七】動影。水面に山影をただよばす。【一八】

【一九】。鼓。ふなばた。【二〇】

雲陰寺。晉説に寺名とす、雲陰山

大定寺は雲陰東南六十里にありといへり、されど、恐らくは水上の鼓聲の到り得べき地に非ず、雲中の寺をさすものとおしはる。

【二一】。董田。董の名、漢説よりは東南にあり、これは月の出でしあたりを想像していふもの故向

眼にば見えざる地なれども用ひて訪なし。【二二】。龍。くろき龍、龍の下の珠ありといふこと、莊子「列禦寇嘗」にみゆ、水面の月影を龍珠とみてていふなるべし。【二三】。馮夷。また水神といふ、何を掌る水神なり、馮夷擊鼓のことは晉書の洛神賦

にみゆ。【二四】。龍。はしる。【二五】。湘妃。湘水の女神、奥の二女にして舜の妻たりし人、舜の南征を追ひて湘水に溺り舜已に死すと

さき湘水に入りて神となる。之を湘君、又湘妃といふ。【二六】。漢女。鄭玄謂漢水にあそびて二女を見、偶を許ふ、二女偶を解きて

之に興ふ、二女は蓋し漢水の女神なり。【二七】。金支翠旗。漢の房中歌に金支秀華、庶幾翠旗、の語あり、金支は黄金色の枝、秀華は

その光きにふさふさの華がつきたるものなり、飾は牛尾にて作れる「ばた」、翠旗とはそのまきに五色の羽をふさふさにして旗とせる

ものなり、詩の翠旗は即ち翠旗なるべし、然らば金支翠旗は共に樂器につける飾りのものなり。【二八】。光有無。あるが如く無きが

如く光り恍惚たるをいふ。龍龍以下の四句は詩人の空想とみるべし、一之を實景に就きて求むべからず。【二九】。咫尺。八寸、一

尺、わづかの距離をいふ。【三〇】。但。ただ。【三一】。蒼茫。はつきりせぬさま。【三二】。神靈。かみ。【三三】。少壯。一句。漢武帝の

秋風辭に、歡樂極兮哀情多、少壯幾時奈老何とみゆ、わかき時はいくばくもなし、やがて老ゆるをいかにとしがたしといふなり。【三四】。向來。前よりこのかた、之を是時に限りてみる説と從前の生涯を通じてみる説とあり、今前説に據る、然るときは此の一日の

中に就てのみいふ。【三五】。哀樂。この一日に就てのみいふときは哀とは天候の險惡となりし場合をさし、樂とは天候快晴となりし

場合をさしていふ。此段の咫尺二句、少壯二句は竝に倒裝としてみるべし。

【題義】漢波の水面に舟遊びせしことを敘す。製作時は天寶十二載の夏なり。

【詩意】友人の岑參兄弟はいづれも奇を好む人間で、自分をつれてこんなに遠い漢波まであそびに来

た。初は波濤萬頃のさまで琉璃をつみかさねたかとおもはれた好天氣がにはかに色あひが變つて天地

もまつくらになつてきた。初はひろびろとした琉璃状の水面へ舟を泛べてはひりこんだのだが、今

は事情ががらりとかはり、興趣もゆきつまりとなり、胸に心配があつまつてきた。大がめがあはれだ

し、鯨が舟を呑んでしまふかもわからない。猛惡な風、白くみだれくるふ浪。いまさらなげいたとて

おつづくことではない。」こまつたと思つたが天候もなほつたので主人は我我のために錦帆を張り、舟人たちもはやほこりがなくなつたことを非常によろこぶ。ふなうたが始まつて驚いて鳧鷖のたぐひがみだれちるやら、やかましく絲竹の音がして山の方から空翠の色が飛んでくる。」釣り竿をしづめてその絲につる糸をたしてみても波の水の深さは測ることができないほどふかい。そこに菱の葉や荷の花がふきとつたやうにきよらかに生じてゐる。舟はさながら中流にうかんで潯灤の清き海にうかんでゐるやうであり、水は下の方底しれぬところまで達して終南山の山影が水底に黒く横はつてゐる。」この波の南岸の半分は専ら山影をひたしてゐる。その山影は水面の沖融たる間にたをやかに動かされてゐる。たそがれに鳴る船べりのぎつこんぎつこんいふおとが山上の雲中の寺のあたりまでひびく、水面に月が出る、それは藍田關ともおもはるるあたりからでたのである。」このときには水底の淵にひそめる黒龍も珠を吐きだせるかと疑はれ馮夷は太鼓をうちだし、多くの龍影がはしる。湘妃・漢女の女神もだまつてをれずでてきて歌ふやら舞ふやら、周圍にならぶ樂器の金支・翠旗の裝飾の光りもまばゆし。」こんなには晴れておもしろいが、さて神靈の意といふものははつきりとはわかりかねるものであるから、またさつきみたやうに面前咫尺のまぢかに雷雨がやつてこやうも知れぬといふのが心配でならぬ。さきほどから一陰一晴すこぶる哀樂の情をうごかしたが、かくしつつかあるまに我は少壯時をすぐ失うてしまひ年老いてしまふのである。これはいかんともしがたいのである。

漢陂西南臺

漢陂の西南の臺

高臺面蒼陂六月風日冷

高臺蒼陂に面す。六月風日冷かなり。

兼葭離披去天水相與永

兼葭離披として去り、天水相與に永し。

懷新目似擊接要心已領

新を懷ひて目撃たるるに似たり。要に接して心已に領せり。

仿像識鮫人空濛辨漁艇

仿像鮫人を識り、空濛漁艇を辨す。

錯磨終南翠顛倒白閣影

錯磨す終南の翠。顛倒す白閣の影。

窳岑增光輝乘陵惜俄頃

窳岑光輝を増す。乘陵俄頃なるを惜む。

勞生愧嚴鄭外物慕張祁

生に勞するは嚴鄭に愧づ。物を外にするは張祁を慕ふ。

世復輕驕驢吾甘雜鼃

世復た驕驢を輕んず。吾甘んじて鼃に雜はる。

知歸俗所忌取適事

歸を知れば俗忽にす可し。適を取るは事並ぶもの莫し。

莫竝

身退豈待官老來苦便靜

身の退くは豈に官を待たむや。老來苦だ靜なるを便とす。

況資菱茨足庶結茅茨迥

況んや菱茨の足るに資る。庶くは茅茨の迥なるを結ばむ。



從此具扁舟彌年逐清景 此れより扁舟を具し、年を彌りて清景を逐はむ。

【字解】【一】面、むかつてある。【二】蒼波、水のおない大池。【三】風日、風と太陽。【四】雲霞、アカアツ、ヨシ。【五】離披、みだれたるさま。【六】去、遠方まで速りてゆくをいふ。【七】天水、そらと水と。【八】氷、はてしなくつづくをいふ。【九】懐新、新しくめづらしき景色をおもふこと。【一〇】目似擊、目擊に似たりといふの意なり、目擊とは我が目の視覚が外方より衝動をうくるをいふ、ひとめで感心するをいふ。【一一】採要、その景色のいちばんよい要所にふるるをいふ。【一二】心已領、我が心にてそれを領有する。【一三】彷彿、彷彿といふ類、鮫人は有るものか無いものかばつさりせぬもの故に彷彿といふ、彷彿とはおぼろげに、それとなく、などの義。【一四】鮫人、南海に鮫人なるものあり、水中に居る、魚の如し、機を織りて時時水中より出て人家に寄り絹を賣るとの話あり、搜神記に見ゆ。【一五】空涼、ぼんやり。【一六】辨、みわけける。【一七】池艇、艇は小にして長き舟をいふ、漁とは魚を取るをいふ。【一八】銷磨、みがく、こする、これば山が水にうつりて、山水互にすれあふに似たるをいふ。山影の淡ふことをいふ。【一九】翠、翠色。【二〇】顛倒、影がまかしまにうつるをいふ。【二一】白閣、終南山中の峰の名、紫閣・白閣・黃閣等の峰あり。【二二】昔翠、山の峻しき貌。【二三】増光輝、水面にうつるがためにかがやきを増す。【二四】乘波、波は、しのごし、乗波とはこの高臺にのぼることをいふ。【二五】俄頃、しばしのみ、時久しからざるをいふ。【二六】勞生、生きるために骨を折る。【二七】嚴、漢の嚴道、字は君平、鄭模、字は子真、故に隱居身を保ちし賢人なり。【二八】外物、世間の事物を外におく。【二九】聖、謝靈運が遊書園作の中にみゆ、李善之に註して聖良、聖良谷とせり、二人共に足ることを知りて官をやめし人なり、或は聖を聖仲賢とす、仲賢も隱居の高士なり。【三〇】驪駒、千里の馬、すぐれた人なたとていふ。【三一】兼、まじりて居る。【三二】靈、靈也。【三三】青、青壯なり。【三四】知歸、己の歸退すべき所を知る。【三五】俗所忌、所忌にては上語と貴かず、可愈をよしとす、俗可愈とは俗事を輕視することができるといふ、能は「ゆるがせ」にすること。【三六】取適、己が意に適することを取る、氣ままにすること。【三七】事、事其故、その事が第一、他の事でそれとならぶべきものなし。【三八】登得官、官についてから退くまでもない、これは當時任官の候補にありしゆみにいふなり。【三九】苦、苦、苦は「ばなばなし」、便靜とは靜なるを便とす、靜なるを愛好するをいふ。【四〇】資、よる、とる、それをもととするをいふ。【四一】夢天、ひしの實。【四二】茅茨、かやぶきのやれ。【四三】遊、はるか、城よりしていふ。【四四】從此、いままら。【四五】具、そなふ。【四六】扁舟、小さき舟。【四七】彌年、彌は「わたる」、年をわたりにしては年中といふこと。【四八】逐、あとをおふ。【四九】清景、清き景色。

【題義】之は漢波の西南方の高臺より眺望せる様をのぶ。作時は前詩と同じく天寶十三載の夏なり。【詩意】(初め十二句は臺より望みし景物を敘す。)高い臺地が漢波の蒼き水にむかつて聳えてゐる。そこへのぼると六月の節であるのに風も太陽のひかりも冷かである。天と水とがはてしなくながくつづいて渚のあしやよしの草がしどろにすつとあちらへつらなつてゐる。自分は新しい景色をみたいとおもうてゐたがここを見てはひとめで感心した。またこの臺地からの眺望といふ要所にふれたのでこの景色はすつかり心のなかにとりこんでしまつた。ここできながめてゐると話にきいてゐる南海の鮫人とかいふものがそれとなく現にめのまへに居ることがわかり、おぼろげのうちに魚をとる小舟などが見わけられる。水面には終南山の翠が磨擦されつつあり、白閣峰の影がまかしまにういてゐる。この水を得て山峰のけはしいすがたも光輝を増してゐるが、惜しい事には自分がこの臺にのぼつてゐるといふことが長時間ゆるされぬことだ。(勞生、嚴鄭以下は景をみしにつけての情をいふ。)自分は生活に勞してをる點では、生活に勞しなかつた漢の嚴君平や鄭子真に愧づるが、事物を度外視する

點ては張良(或は張仲蔚)や厚曼容を慕うてゐるものである。今の世間では千里馬の如き人材を輕蔑するから自分は甘んじて蛙のやうな連中と雜居してゐる。自分が自分の歸退すべき所を悟つてをれば俗世間の事はなんでもないのである。我が身の隱退するのは必ずしも官を授けられるのを待つてからべるべきほどの何ものもないものだ。我が身の隱退するのは必ずしも官を授けられるのを待つてからでなくてもよい、老いかかつてこのかたははなはだ閒靜なるのを愛好するやうになつてゐる。ましてこの池邊なら、菱花がたくさんあるからそれにたよることとして、どうか世間からはなれたここへ茅屋を結びたいものだ。さうしてこれから一つの小舟をそなへつけて年が年中清らかな風景をおひまはしてあるかう。

【餘論】此詩は古人も評せる如く、極力謝靈運の詩風を模倣せる者にして平生の作と少しく異なり。

與鄂縣源大少府宴漢陂

鄂縣の源大少府と漢陂に宴す

應爲西陂好金錢一餐 應に西陂の好きが爲めなるべし。金錢一餐に盡す。

飯抄雲子白瓜嚼水精寒 飯は雲子の白きを抄す。瓜は水精の寒きを嚼む。

無計廻船下空愁避酒難 船を廻して下るに計無し。空しく愁ふ酒を避くるの難きを。

主人情爛漫持答翠環玕

主人の情爛漫たり。持して翠環玕に答ふ。

【字解】(一)鄂縣 長安の西南にある縣の名、今も鄂と稱す、昔の夏の時の右展氏の國なりといふ。(二)源大少府 源は姓、名は詳ならず、大は源姓の家の長男にあたる人なるをいふ、少府は縣の尉官(警衛を掌る)に對する敬稱なり。(三)西陂 長安の西の陂の意、漢陂をいふ。(四)好 風景のよきをいふ。(五)嚼 つくす。(六)一餐 一回の食事。(七)抄 船にてかきまはす、すくひあげる、摘にもるときのさまをいふ。(八)雲子 雲母のこなをいふ。(九)嚼 かむ。(一〇)水精 水晶、ガラスの類。(一一)計 工夫。(一二)廻船下 船をひきかへして退去する。(一三)避酒 主人のすすむる酒からにげさける。(一四)無計 まかんなるさま。(一五)持答 この詩を持して之に答へる。(一六)翠環玕 みどりのくだだま、後漢の靈衡の四愁詩に美人贈我青瑣玕、何以報之雙玉盤、とあり、この詩の翠環玕は即ち青瑣玕なり、主人源君の厚情の貴きを環玕を以てたとへていふ。作者自身の詩かたとへて環玕といふとの解あり、今從はず。

【題義】鄂縣の尉なる源某君と漢陂に宴せしことを敘す。前詩と同年の作なるべし。

【詩意】この漢陂の風景がよいためであらう、主人源君は一回の飲食のため十分の金錢をつかひつくされた。即ち響應の中に於て飯は雲母の粉の如く白いのをもつてもらつたし、瓜は水晶のやうにつめたいのをかむことができた。そのうへ酒はうんと飲まされ、船をひきかへして去つてしまひたいがうまい計略もなく、ただいたづらにその酒の避けにくいことを心配するばかりである。かほどまで主人の厚意がさかんであるから、聊かこの詩を以て、その環玕の貴さにも比すべき厚意にお答へするのである。

贈田九判官梁丘 田九判官梁丘に贈る

崆峒使節上青霄 崆峒の使節青霄に上る。

河隴降王歎聖朝 河隴の降王聖朝を歎く。

宛馬總肥秦一作首稽 宛馬總て肥ゆ秦の首稽。

將軍只數漢嫖姚 將軍只だ數ふ漢の嫖姚。

陳留阮瑀誰爭長 陳留の阮瑀誰か長を爭はむ。

京兆田郎早見招 京兆の田郎早く招かる。

麾下頼君才竝美 麾下君に頼つて才竝に美なり。

獨能無意向漁樵 獨り能く意の漁樵に向ふ無からむ。

【字解】田九判官梁丘 田は姓、梁丘は名、九は從兄弟間の順位の數、判官は官名、天寶十三載に吐谷渾の蘇毗王、塞を歎きて來り降り好みを通す、唐より哥舒翰に留して磨環川に至り之と應接せしむ。翰は河西節度使にして梁丘はその判官として事を以て朝廷へ出むき來りしものとみゆ。舊註に梁丘が翰に従つて入朝せるをいひ、陳延敬其非なることを辨せり。

崆峒使節 崆峒は山の名、甘肅省鞏昌府岷州にあり、隴右節度使の管内にあり、其地の名山をあげて其地の代表とす、崆峒使節とは隴右兼河西の節度使たる哥舒翰よりの使者即ち田梁丘をさしていふ。【一】上青霄 青霄はあをそらなり、あをそらにのぼるとは梁丘が朝廷へ出て來りしことをいふ。【二】河隴降王 蘇毗王をさす、河隴とは河西隴右をいふ。【三】歎聖朝 塞の門をたたきて唐朝へおとづれ來るをいふ。【四】宛馬 大宛國の馬、こゝは吐谷渾、吐蕃などの西夷の馬をさす、哥舒翰は天寶十二載には吐蕃を撃つて九曲部落を收めたり。【五】秦 秦とは關中、長安地方をいふ。唐の京師の近地をさす、首稽はモグシユク、一うまこやしといふ草なり。宛馬が秦の草に肥ゆるといふは西夷が唐に降りし故西夷の馬も唐の草をたべて肥ゆるをいふなり。【六】漢嫖姚 漢の武帝の時霍去病といふも

の名將にて嫖姚校尉となれり、こゝは哥舒翰を之にあてていふ。【七】陳留阮瑀 魏の阮瑀、字は元瑜、陳留の人なり、文筆の才あり、こゝは高適をさす、作者しばしば高適を比するに阮瑀を以てせり、高適は河西節度の書記として哥舒翰が幕下にあり、次の句によれば高適を翰にすすめしものは必ず梁丘なりしならんといふ。【八】爭長 技師の雄長をあらそふなり。【九】京兆田郎 從前田の田郎をいふ、田郎、郎となり、將領正なり、入りて事を奏するや皇帝之を目録して因つて柱に題して曰く、堂堂乎長(田郎)見(田郎)京兆田郎、と、こゝは田梁丘をさしていふ。【一〇】早見招 此句前句とつづけてみるべし、見招の主格となるものは前句の阮瑀なり、見招とはまねきいたされしをいふ。【一一】麾下 哥舒翰の指揮下をいふ。その幕府をさす。【一二】君 田をさす。【一三】才竝美 人才みなうるはし、美を入に作れば人才がすべて麾下に入りたりとの義となる。【一四】獨能無意向漁樵 能無は反語にして登無の意となる。【一五】意向漁樵 梁の何遜の贈范雲詩に、高門盛遊侶、誰肯進漁樵とみゆ、此時句それと近し、漁樵とは漁樵の生活をする者にして作者自己をさす、向とはこゝらにその意をむけるをいふ、むけるとは之を應めんがためなり。

【題義】河西節度の判官田梁丘に贈れる詩。作時は天寶十三載なるべし。

【詩意】君は崆峒山地方即ち河西の使者として公用で朝廷へでてこられたが、時は河隴方面の降服した蕃王が我が唐の聖朝を訪ふといふめでたい時である。このたび大宛國の外馬も秦の内地の草をたべて肥ゆるに至つたが、これは將軍中の將軍ともいふべき漢の嫖姚校尉霍去病の如き人(哥舒翰)あつてのことである。かの文才を以てしてはたれも之と雄長を争ふ者もないといふ陳留の阮瑀(高適)も早くも京兆の田郎ともいふべき君のために將軍の幕下へ招きよせられたのである。將軍の麾下は君のおかげでその人才がみなどれも美なるものが集つてゐるのである。してみればどうして獨り君の意が今漁樵生活をしてをる自分に對して向けられぬといふことがあらうか、きつと向けられることと信ずるの

である。

投贈哥舒開府翰二十韻

今代麒麟閣、何人第一功。

君王自神武、駕馭必英雄。

開府當朝傑、論兵邁古風。

先鋒百戰在、略地兩隅空。

青海無傳箭、天山早挂弓。

廉頗仍走敵、魏絳已和戎。

每惜河湟棄、新兼節制通。

智謀垂睿想、出入冠諸公。

日月低秦樹、乾坤繞漢宮。

胡人愁逐北、宛馬又從東。

哥舒開府翰に投贈す、二十韻

今代麒麟閣、何人か第一の功なる。

君王自ら神武、駕馭必ず英雄なり。

開府は朝に當るの傑、兵を論する古に邁ぐる風あり。

先鋒百戰在り、略地兩隅空し。

青海箭を傳ふること無く、天山早く弓を挂く。

廉頗仍りて敵を走らす。魏絳已に戎に和す。

毎に惜む河湟の棄てらるるを。新に兼ねて節制通す。

智謀睿想を垂る。出入諸公に冠たり。

日月秦樹に低れ、乾坤漢宮を繞る。

胡人逐北を愁ふ。宛馬又た東に従ふ。

受命邊沙遠、歸來御席同。

軒墀曾寵鶴、敗獵舊非熊。

茅土加名數、山河誓始終。

策行遺戰伐、契合動昭融。

勳業青冥上、交親氣槩中。

未爲珠履客、已見白頭翁。

壯節初題柱、生涯獨轉蓬。

幾年春草歇、今日暮途窮。

軍事留孫楚、行間識呂蒙。

防身一長劍、將欲倚崆峒。

命を邊沙の遠きに受く。歸り來つて御席同じ。

軒墀曾ねて鶴を寵す。敗獵舊し非熊。

茅土名數を加ふ。山河始終を誓ふ。

策行はれて戰伐を遺す。契り合して昭融を動かす。

勳業青冥の上。交親氣槩の中。

未だ珠履の客と爲らざるに、已に見る白頭の翁なるを。

壯節初め柱に題す。生涯獨り轉蓬。

幾年か春草歇む。今日暮途窮す。

軍事孫楚を留め、行間呂蒙を識る。

防身の一長劍、崆峒に倚らむと將欲す。

【字解】【一】投贈 此の詩篇を投じ贈る。【二】哥舒開府 哥舒は姓、名は翰、突騎施の首領、哥舒部將の後なるを以て哥舒を姓

とす、天寶十一載に開府儀同三司を加へられ、同十三載には河西節度使を加へられ西平郡王に封ぜらる。翰は蓋し十二載の冬に入朝せ

しならんといふ。【三】今代 唐なます。【四】麒麟閣 漢の武帝麒麟を獲て麒麟閣を作りそこに功臣を畫く。宣帝の甘露三年にも大

につけること、取は馬をあつることなり、人物を馬に比していふ。【一〇】**英雄** 人傑をいふ。【一一】**開府** 哥舒翰をさす。【一二】**當朝** 朝廷に於ての豪傑。【一三】**臨兵** 兵隊のことを議論する。【一四】**遇古風** 遇は過ぐる、こゆるをいふ、風とはすがたをいふ。【一五】**先鋒百戰** 哥舒翰は初、河西節度使王暉が部下にあり又王忠嗣が將校となりて西邊に武功をなしたるなり。【一六】**略地** 略は取るなり。【一七】**兩隔** 二方の邊地、即ち下の天山・青海をさす。【一八】**空** 敵人なきが如くなるをいふ。【一九】**青海** 今の新疆省の青海の地方。【二〇】**無傳箭** 兵を起すときは箭(命令)のしるしを信號としてつぎつぎと命令を傳へる、箭を傳ふるなしとは兵をやむるをいふ。哥舒翰は天寶六載に王忠嗣に代りて隴右節度使となり青海のほとりに神威軍を築き吐蕃を破る、又青海の中の龍駒島に城を築く、吐蕃跡をしりぞく。【二一】**天山** 即ち鄯善山とも白山ともいふ山、唐の交河縣(今の吐魯番地方)の北二百二十里にあり、輪、吐蕃の石堡城を攻む、麾下の將高秀敏、張守瑜を以て進攻せしめ旬日ならずして之を拔く。【二二】**挂弓** 弓をかくとは戦なき故弓を用ひざるなり。【二三】**康順** 戰國時の趙の良將。【二四】**魏絳** 春秋の時の晉の悼公の臣、絳、公に説くに或と和するに五利あるを以てし、遂に或と和す。【二五】**每惜** 作者の心にてつねに之を惜むなり。【二六】**河湟** 河は黄河、湟は湟水なり、湟水は青海の東の亂山中より出で東南流して蘭州の西南に至りて黄河に入る、今、甘肅省の西寧府城北を東南流して黄河に入る、此の地方常に唐と吐蕃との爭奪の目的となれる處なり。【二七】**棄** 棄人の手にすつるをいふ。【二八】**新章節制** 天寶十二載に翰は封を涼國公に進められ、河西節度使を加へられ、吐蕃の洪濟・大漠門等の城を破り、悉く九曲の地を收め、其地に洗脚郡を置き、神策・砲秀の二軍を築く、節制を變ぬとは之をさす。【二九】**通** 節制のゆきわたるをいふ。【三〇】**智謀** 翰の智謀なり。【三一】**聖智** 聖智とは天子のおんおもひをいふ、聖るとは想をかけることを教ひていふ。【三二】**出入** 翰が朝廷に出入するをいふ。【三三】**冠諸公** 冠とは首位になるをいふ、諸公とは文武の顯官をさす。【三四】**日月低垂樹** 垂樹とは關中の樹木、常樂の樹木をいふ、日月の光りがこの樹木に向つて上から下へと照らしかけるといふは帝業のかがやくことをこめていふ。【三五】**乾坤** 乾坤は天地なり、天地が唐の宮殿をめぐるとは、この地球上の廣がりごとくも唐のものとなれるさまをいふ。此の二句は實に壮大なる句といふべし。【三六】**胡人** えびす、吐蕃をさす。【三七】**逐北** 北するを逐ふとは唐の軍が南方より勝つて北へまぐるをいふ。【三八】**宛馬** 又從東、漢の武帝の時大宛國を伐ちて天馬を得、天馬の歌を作る、その歌に、天馬來、歷無草、躡千里、騰黃道、とあり、從東とは從東道之意なり、西方の地より東方なる支那本土の方へと道にそつてやつてくるをいふ。こゝにては吐蕃等西或唐へ降りしを以て、その馬が唐へくることをいふ。【三九】**受命** 天子より入朝すべしとの命令をうくるなり。【四〇】**邊沙遠** 邊方沙漠の遠き地、河西をさす。【四一】**歸來** 朝廷にかへり來る。【四二】**御席** 天子臨宴の座。【四三】**軒車** のきば、どえん。【四四】**會** 會と同じ。【四五】**龍駒** 「左傳」に龍の靈公駒を受す、駒に大夫の軒にのるものあり、この故事を用ふ、之がため馬の字を車に改めんとするものあり、思はざるの甚しきものなり、故事は軒車なるも作者は軒駒として用ひしなり、又たこれは安祿山・安思順が君位を得しことを指すとの説あり、これも今取らず、予は此句は下句と共にみな哥舒翰をさすものと見る。軒駒の故事は通例は尸位素餐の徒に對し用ふるもこゝは善意に用ひしなり。【四六】**歌** 歌、すなどり、かり。【四七】**非龍** 此は文王が太公望を得しときの故事なり、文王獵せんとし之を卜したるに、獲る所は非龍非虎、非虎非龍、乃霸王之輔とありしと、果して太公を得てかへりたり。龍を龍として用ひたり。唐の李淵の「聖書」に呂望非龍の語あり、「後漢書」祖國傳の李賢注にも「史記」を引きて非龍非虎といひたり。唐の「史記」は非龍とありしものありしを知るべし。哥舒翰を太公望に比したるなり。【四八】**茅土** 茅土とは領地を與ふるをいふ。古代天子が諸侯を封するときはその地方の東西南北如何によりて其の方位の色(東は青、西は白、南は赤、北は黒)の土を與へて社(土神を祭る)を立てしめ、その土は之を直くに白き茅を以てし、黒くに黄土を以てす、白茅はその潔白なる義を取り、黄土は王者四方を覆ふの義を取る、天寶十二載九月に隴右節度使涼國公哥舒翰は封を西平郡王に進められ實封五百戸を食す、名教とは名位度数にして、名位とは官爵をさし、度数は名位に相應したる階級数(五百戸といふは職数なり)をさす。【四九】**山河** 山河、山は岳、河は水、高祖が功臣を封するときは嘗て曰く、使黄河如帶、泰山若礪、固以永存、愛及苗裔と。黄河が細りて帶のやうになり泰山が碎けてといしのやうにならうとも故の國は永久に存在して子孫まで及ばしめやうといふのである、誓始終とは始終不變易あるまじと誓ふなり。【五〇】**策行** 翰の邊境處置のばかりことが行はれる。【五一】**遺戰伐** 遺とはすておきて用ひざるをいふ。【五二】**契合** 君臣の間の契りがしつくりとあふこと。【五三】**前明** 詩大雅、既醉、歸に昭明有融の語あり、周の成王の遺、光大にして晝だ長きことをいふ

【五四】**役替** 哥舒翰開府二十韻

と説きたり、こは蓋し天子の御光をいふならん、勳とは感動せしむるをいふ、仇兵が昭明を輪に屬せしめ勳を後勳と解せるは余之を取らず。【三】勳業、勳の勳功事蹟。【四】青英、あなぞら。【五】交親、自己との親交。【六】氣韻中、氣韻は氣節をいふ、輪は氣節あるを以てその中に自己との親交をたもつといふなり、この終りの二句は「勳業」の句にて上を結び「交親」の句にて下の一段を喚び起し自己を説き出だす段附とす。【七】曉風、曉國の時、楚の春申君の食客三千餘人、其の上客は皆珠の履を履みたりといふ、こは作者が未だ諸侯の幕客とならざるをいふ。【八】壯年期の節操、壯年期の節操。【九】屈柱、漢の司馬相如が故事、相如は蜀の人、故郷を出でんとするとき昇仙橋の柱に題して曰く、調馬の車に乗らざれば復び此の橋を過らず、と。後ち果して其言の如くなり。【十】轉蓬、蓬の草は秋風に吹かるるままにとびて移轉しあるく、之を以て漂泊生活をたとへていふ。【十一】春草、春草は衰歇の義、花芳が衰へてやんでしまふことをいふ、春草の芳がやむといふことは、空しく春をすごして而かも故郷に歸らざることをいふ。これは唐人の慣用なり、出典は「楚辭」の王孫遊兮不歸、春草生兮萋萋の句に本づく。【十二】暮途、晩年の道途。【十三】孫楚、晉の時、石苞が參軍となりし人、其だ傲慢なる人にて始めて苞が處に至るや天子命我、參軍軍事、といひたりとぞ。【十四】行伍、(兵卒のこぐみ)の間をいふ。【十五】呂蒙、三國の時の吳の孫權の臣なり、孫權・呂蒙は輪が幕府中の英才をます、錢謙益は嚴武・呂蒙・高適・蕭昕・王思禮・郭英父・曲瓊等の人人を列舉せり。【十六】防身、身をふせまじしる。【十七】倚燈、倚の字は上句の長劍をうけていふ、宋王大言賦に、長劍耿耿、倚天外とみゆ、峭峒は山の名、甘肅省鞏昌府岷州治の西二十里にあり、河西の地の名山。

【題義】開府僕同三司・河西節度使哥舒翰に贈れる詩。作時は天寶十三載ならん。

【詩意】今の唐の世で麒麟閣上に畫かれる功臣も多くあらうが、誰がいつたい其中の第一の功あるものであるか。我が君(玄宗)におかせられてはひとりてに神武の徳を具へられたお方で、その勳業遊ばさるる者は英雄ときまつてゐる。(開府當朝傑以下、翰が關右の武功をのぶ)あなたは朝廷に於ける

豪傑であり、兵を論ずる時には古人に過ぎたる風がある。陣にのぞんで先鋒となつては百回も戦つた事實が存在してをり、敵地を略取するに於ては二方の逸閑無人なるが如き君があつた、即ち君あるが故に青海地方には箭を傳へて兵を召す事もなく、天山の地方も吐蕃降服して早くも弓を掛けて用ひざるに至つた。丁度むかし趙の將廉頗が敵を走らした事そのままであり、また魏絳が早くも戎夷と和盟を結んだと同じやうである。(可惜河湟棄、以下は翰が河西地方を恢復せしことをのぶ)自分はいつも河湟の地方が蕃人の手へ放棄されてあつたことを惜んでをつたが君が新に河西節度使を兼ねられてからその軍隊の節制がよくゆきわたるやうになつた。君の智謀に對しては我が君におかせられてもおんおもひをよせられ、従つて君寵もあつたため、君は高位高官にとりたてられ、出入に當りては文武諸顯官の上位にをられる。今や日月の光りも帝殿の樹木に向つて照しかけ、唐の宮殿をめぐるて天地が廣く横はつてをる、かかる勢で吐蕃のえびすはただ我が唐から逐ひまくらればすまいかと心配し、遂に彼等は我が唐に降参してその馬は我が唐の方へやつてくる事になつた。(受命邊沙遠、以下は翰が入朝して王に封せられしことをのぶ)この時君は邊方沙漠の遠き地に在つて天子からの命を受けて中央朝廷の方へもどつてこられ、天子と同席で宴を賜はつた。君が君寵をになふことは恰も衛の懿公の鶴の如く頻りに御殿ののきば土練ちかくで可愛がられ、又文王が獵りした時熊に非るものを獲たやうに、君も我が君に獲られたのである。君は領土を授與されてそれになうた名數を加へられ、山河

帶彌云云の語を以て始終變易することあるまじと我君から誓ひをたまはつた。君のはかりごとが行はれるによつて戰伐は無用として遺棄せらるるほどであり、君臣間の意氣投合して、その結果は君徳の光明にも感動するに至つた。君の勲業は實にあをぞらのうへに高くぬきんでてをる。かかる君が氣稜ある人なればこそその中に自分のやうな者までを親交者として有してをる。「未爲珠履客、以下は自己を出だし、この詩を投贈する意を明かにす。」自分はまだ諸侯に聘せられて珠履をふむの客とならぬうちに白頭の老人となつてしまつた。わかいときはこれでも司馬相如のやうに故郷の橋に、驢馬の車に乗らざれば「云云とかきつけて出かけたのであるが、自分の生涯はただひとり蓬のころがつてあるくやうなありさまである。いたづらに旅すまひをしながら春の芳草の衰へゆくのを見たことも幾年だらう。今日では晩年ゆくべきみちがまつたくゆきつまつてしまつた。君は軍事に於ては部下に孫楚の如き人とどめておかれるし、また行伍の間から呂蒙の如き人物を識りわけて之を拔擢して用ひられてゐる。自分もできるならば身を防ぐの一長劍を横へて君の管轄地にある嵯峨山の天に倚らうとおもふのであるがどんなものでござらうか。

寄高三十五書記

高三十五書記に寄す

歎息高生老新詩日又多。

歎息高生老ゆるを。新詩日に又た多し。

美名人不及佳句法如何。

美名人及ばず。佳句法如何。

主將收才子嵯峨足凱歌。

主將才子を收む。嵯峨凱歌足る。

聞君已朱紱且得蹉跎。

聞く君が已に朱紱すと。且蹉跎を感むるを得たり。

【字解】(一) 高生 逸なます。(二) 新詩 最近に作りし詩。(三) 美名 文學についてのよき評判。(四) 人不及 他人之に若かず。(五) 佳句 詩篇のよい句。(六) 法 佳句を作りだすしかた。(七) 主將 主人たる將軍、哥舒翰をさす。(八) 收 我が方へとりいれる。(九) 才子 文才ある人、逸なます。(一〇) 嵯峨 已に見ゆ。(一一) 足 十分に富むをいふ。(一二) 凱歌 たのしきうた、いくさにかちてかへるときうたふ歌。(一三) 君 逸なます。(一四) 朱紱 朱色のかほのまへだれ、五品官のさる腰服なり。(一五) 且 まづまづ。(一六) 蹉跎 自己の失意のさま。

【題義】友人高適が哥舒翰の幕下にありしに寄せたる詩なり。製作時は未詳、天寶十二載以後にあるべし。

【詩意】なげかほしいことに君もだんだんと年老いてゆく、それにかかはらず君が作る新詩は日多し。君の文學についてのよい評判は他人が及ぶことはできぬ。いつたい佳句を作りだす方法はどんなものであるか、(ちと教へてくれぬか)君の主將(哥舒翰)も君のやうな才子を幕賓に收めたことは幸であつて嵯峨(即ち河西をさす)に於ては戰捷ごとに凱歌に不足はあるまい。きけば君はもはや朱紱をさる身分になつたさうだね。まあそんなことがやつと自分の今の失意のころもちを感め得るのだ。

送張十二參軍赴蜀州因呈楊五侍御

張十二參軍が蜀州に赴くを送り、因て楊五侍御に呈す

好去張公子、通家別恨添。好し去れ張公子。通家別恨添ふ。

兩行秦樹直、萬點蜀山尖。兩行秦樹直く、萬點蜀山尖る。

御史新驄馬、參軍舊紫髯。御史新に驄馬、參軍舊紫髯。

皇華吾善處、于汝定無嫌。皇華には吾善く處せり。汝に于て定めて嫌ひ無からむ。

【字解】張十二參軍 張は姓、名は彪ならん、作者「寄張十二山人」詩あり、豈その人か。參軍は蜀州の參軍事の職をいふ。

蜀州 今の四川省成都府の西、崇慶州。楊五侍御 楊は姓、名は暉ならん、作者「寄楊五桂州」詩あり、其人なるべし。侍御は官名、侍御使をいふ、楊は侍御を以て隨遣の使となりたりしものならん。

好去 よし去れ。張公子 漢の成帝の時の宣帝に燕燕尾風云とあり、中に張公子、時相見の語あり、張公子とは張放をいふ、成帝は豫行することを好み、そのときには自ら張放が家人なりと稱せり、後世の詩人張姓の人なすすにしばしば張公子の語を用ふ。こゝはかりて張十二をさす。

通家 先代以來交際ある兩家を通家といふ、張家と杜家とは先代以來の交りありしものと見ゆ。別恨添 別離の恨みがくはばる。

兩行 左右二列、重み木をさす。秦樹直 秦樹とは京畿の道路の樹をいふ、直とはまっすぐ立つてゐること。萬點 山のさきを遠方よりみてほつちりとせるさまを點といひなしたり、萬とは無數に多くあるをいふ、尖とは峰頂が鋭かつたをいふ。

御史 侍御史をいふ、楊五をさす。驄馬 驄馬はあなうま、後漢の桓典が故事、桓典侍御史となり常に驄馬に乘る、時人語して曰く、行行且止、避驄馬御史と、驄馬はつひに御史の故事となる、其人が實に驄馬にのると否とにかかはら

ず、新とは楊五が新にこの官となるをいふ。【三】 紫髯 紫髯の參軍は晉の鄒超が故事、超、祖暉が參軍となる、府中之を號して參軍といふ。此句は張十二をさす、書とは古の鄒超のごとくなるをいふ。【四】 皇華 朝廷よりの使者のこと、詩小雅に「皇皇者華」篇あり、草木の華の煌煌とかがやくをいふ、其時は君たるもの使者を遣るとき詩なり、よりて使者を皇華といふ。侍御使は天子の使者として地方にさしつかはされてあるものとみるなり、これば楊五をさす。【五】 善處 相好處といふの類、その人に對してうまく處置してあるといふなり。【六】 汝 張をさす。【七】 無嫌 嫌疑なくうちとけるをいふ。

【題義】張某君が蜀州の參軍となつて赴任するにつけて楊侍御に呈する詩。此詩は張を楊に紹介する作なり。天寶十三載の作ならん。

【詩意】よし、ゆきたまへ張君よ。君の家と我が家とは先代から交際がある家だけがに別れのうらみがくははる。君が蜀に向つてゆくときは京畿ちかくの道路では左右兩側に樹木がまつすぐに立つてをり、遠方蜀の山山の尖つてゐる頂が無數に點點とみゆるであらう。蜀につけば楊御史は新に驄馬にまたがつてゐるだらうし、君は參軍として都超そのまの紫髯の人である。自分は天子の使者たる楊君に對してはうまくとりなしてゐるから、楊君は君に對して何等の嫌疑なくうちとけてくれらるであらう。

贈陳二補闕

陳二補闕に贈る

世儒多汨沒、夫子獨聲名。世儒多く汨沒たり。夫子獨り聲名あり。

唐張十二參軍赴蜀州因呈楊五侍御 贈陳二補闕



獻納開東觀。君王問長卿。

獻納東觀開。君王長卿を問ふ。

皂雕寒始急。天馬老能行。

皂雕寒くして始めて急に、天馬老いて能く行く。

自到青冥裡。休看白髮生。

青冥の裡に到りし自り、白髮の生ずるを看ることを休めよ。

【字解】【一】世。世上の儒者。【二】泪。泪は「しづむ」泪とは世間の下流にしづんであること。【三】夫子。陳補闕を尊敬してかく稱す、陳は蓋し時の老儒とみえたり。【四】獻納開東觀。此句は不完全なる句なり、意の足らざる所を補ひ足してみるべし、獻納は「こちらが爲すことなり、開くは天子が爲すことなり、それを一緒にならべたるなり、意は東觀が開かれたためにこちらが獻納するといふなり。兩都賦序に、侍從之臣、朝夕論思、日月獻納」とあり、「思ひ」とは天子が深くお思ひになるべきことなり、獻納とはその思ひについてお爲めになるべきことを申しあぐるをいふ。侍從の臣の職移はかくの如し、補闕・拾遺等の官は天子に過失非違ありしとき之をお諫めまなす官なり、東觀は後漢の時の圖書を藏する所なり、唐にては集賢殿がそれにあたる、此句によれば陳は補闕にて集賢の職をしかれ奉りしものか。【五】君王。玄宗。【六】問長卿。長卿は漢の司馬相如が字なりと答ふ、帝嘗き召して相如を問ふ、この人と時を同じくしたしといはれしに陳蓋し補闕といふ者、これば臣が邑人司馬相如の作なりと答ふ、帝嘗き召して相如を問ふ、こは陳を相如に比す。【七】皂雕。くろくまだが、唐の王志愔左監御史となりしに人之を皂雕とよびたりといふ、御史も補闕も非違を彈劾する長るべき官なればかくたとへていへり。【八】寒始急。急とはその勢の急急なるをいふ、寒とは秋より冬にかけていふ、そのころから「たか」は勢がつよくなる。【九】天馬。大宛の名馬なり、これも陳をたとへていふ。【一〇】青冥。あまぞら、高き地位をいふ。【一一】休看。看るとは氣にしてみるをいふ、看るをやめよとは氣にするな、老いをわすれて職務につとめよといふなり。

【題義】補闕の官職にある陳某におくれる詩。製作時は天寶十三載ならん。

【詩意】世間の儒者は多く位を得ずして下流にしづんでゐるが君は獨り名聲がさかんである。漢の武帝が司馬相如のことを問はれたやうに君も我が天子からおたづねを被り、東觀を開かれてその職を帯び、侍從の臣として、日に月に天子のおためになることをささげたてまつることになつた。之を物を以てたとふればくまだかが寒天にあうて始めて勢が急になつてきたやうであり、また天馬がたとひ老いたとはいへなほ能く千里の道をあるくことができるやうなものだ。君のやうにあをぞらのなかまで高くへのぼつた以上は頭に白髮の生ずることなどは氣にしないでただただ自己の職務をつくすべきである。

病後過王倚飲贈歌

病後王倚に過りて飲み、贈れる歌

麟角鳳背世莫辯。麟角鳳背世辯する莫し。

煎膠續弦奇自見。膠に煎じ弦を續ぎて奇自ら見はる。

尙看王生抱此懷。尙は王生を看て此の懷を抱く。

在生於甫也何由羨。在(生)甫也に於て何に由てか羨まむ。

且過王生慰疇昔。且つ王生に過りて疇昔を慰む。

病後過王倚飲贈歌

二二五

【字解】【一】麟角鳳背。麒麟のつゝ、鳳凰のくちばし、此の二物を煮てまぜて膠を煎じるときはその膠は弦の斷えたるもの、劍の折れたるもの、などをしくつつけあはすことを得と稱せらる。【二】世莫辯。辯の字一に誤に作る、辯も職も「しり」わかることなり、世莫辯とは世人がその眞價をしるものなきをいふ。【三】煎膠續弦。煎はにつめること、

素知賤子甘貧賤。酷見凍餒不足恥。多病沈年苦無健。王生怪我顔色惡。答云伏枕艱難遍。瘡癩三秋孰可忍。寒熱百日相交戰。頭白眼暗坐有胝。肉黃皮皴命如綫。惟生哀我未平復。爲我力致美肴膳。遣人向市賒香粳。喚婦出房親自饌。

素と賤子が貧賤に甘んずるを知る。酷だ見る凍餓の恥づるに足らざるを。多病沈年健無きに苦む。王生我が顔色の悪しきを怪む。答へて云ふ枕に伏して艱難遍し。瘡癩三秋孰れか忍ぶ可けむ。寒熱百日相交戦す。頭白く眼暗く坐到胝有り。肉黄に皮皴だちて命綫の如し。惟れ生我が未だ平復せざるを哀み、我が爲めに力めて美肴の膳を致す。人をして市に向つて香粳を除らしめ、婦を喚び房を出で親く自ら饌せしむ。

膠はニカハ、糞は斷えたる弓づるをまたつづけること、角、背の二物を膠とともに煎じてそのニカハでゆみづるをつなぐ。【一】奇自見、奇とは二物の奇效(ふしぎなききめ)がはじめてひとりであらばれる、この起二句のたとへば煎膠のこと、以て交情を害にすることをいふとする盧元昌の解を正當と信す。【二】尙看王生抱此懷、此の句古來の注家疑をいだく、このまゝにては解しがたし。尙は尙かまたは吾の字の訛ならん、しからば尙看王生、(尙は尙來の義)或は吾看王生、の義ならんか。抱此懷、上の看もこの抱も共に作者が看、または抱くなり、此懷とは起りの鴈角二句をさす。【三】在於市也何由發、これは王生についていふ在の字必ずしも改むるをまたざれど

長安冬菹酸且綠。金城土酥淨如練。兼求畜豪且割鮮。密沽斗酒諧終宴。故人情義晚誰似。令我手足輕欲旋。老馬爲駒信不虛。當時得意況深眷。但使殘年飽喫飯。只願無事長相見。

長安の冬菹は酸にして且つ綠に、金城の土酥は淨にして練の如し。兼て畜豪を求めて且つ鮮を割く。密かに斗酒を沽うて終宴を諧ふ。故人の情義晩に誰か似たる。我をして手足軽くして旋せむと欲せしむ。老馬駒と爲る信に虚ならず。當時得意なり況んや深眷あるをや。但だ殘年喫飯に飽かしめば、只願ふ無事にして長へに相見むことを。

して稱す、いよしんもの。【一】廿、作者が甘んじてあるなり。【二】酷見、酷はハナハダ、スゴアルの意、見とは作者が自らみるなり。【三】沈年、終年の義、いちれんぢう。【四】無健、健康なことがない、病弱なるをいふ。【五】伏枕、臥病をいふ。【六】嗚、あまれし、おちなくてあふ。【七】瘡癩、おこりやまひ。【八】三秋、秋三箇月。【九】孰可忍、孰は孰誰のごとし、忍とは忍耐、がまんする。【一〇】寒熱、まじくふるひがた

り、また病熱がでたりする。【三】交頤、頤と頤とがあらそふ。【四】垂有肌、肌は皮が厚くなること、謂はゆる「たごでできる」をいふ、垂とは垂する所の部分の皮膚をいふ。【五】皺しわたつ。【六】命、生命。【七】如鏡、鏡は顔、ほそきいとすぢ、これは不漸如鏡の義、ほそきとつないである、いまにもきれさうだとの意。【八】惟生、惟は辭なり、生は王生。【九】平復、病がなほつてもどほりのからだになる。【一〇】力致、つとめてもちだす。【一一】美香膳、ごちそうの食膳。【一二】隙、なごのる、現金でなくかふ。【一三】香榖、榖、ともにワルシネ。【一四】婦、王生が妻。【一五】母、ハヤ。【一六】親自、自分で。【一七】酒食をそなへること。【一八】蕪、しほつけの野菜。【一九】醜、すい、これは酢加減のよいことないふ。【二〇】綠、菜の新鮮な色。【二一】金城、縣の名、今の西安府興平縣なり、咸陽の西にあたる。【二二】土豚、土地でできる牛羊の乳からつくるバタ。【二三】淨如練、きよらかにしてれりぎぬの如し、純白なるをいふ。【二四】煮、煮、かつてあるふた。【二五】割餅、餅は新鮮、殺したてをいふ、即ち上の蜜を殺して肉をまく。【二六】密沽、ひそかにかふ、お客に知らまぬやうに用意する、自己の心づかひを客にしらさぬ様にするなり。【二七】龍吟、龍は舞ふるなり、終宴は宴のはつること、酒を多く置きて宴の終るにぐあひのよき様にする、蓋し酒客は多くあとをひくものなればなり。【二八】故人、ふるなじみ。【二九】情義、朋友としての義理情あひ。【三〇】曉、晩年をいふ。【三一】龍、似とは王生に似るをいふ。【三二】欲旋、旋は旋轉、めぐらす、ふりまはすこと。【三三】老馬爲駒、老馬反爲駒、不顧其後、とは小雅「角弓」の詩にみゆ、文字はそれにくも時義はそれと關係なし。こは老馬が元氣づいてわかごまのやうになつたといふなり、上の手足輕快の語をうけていふなり。【三四】信不虛、虛は虚偽。【三五】當時、そのとき、現在、眼下、眼前の意、當の字去聲。【三六】得意、眞實、こもつたごちそうにあひて満足してなる。【三七】深眷、王生の深き愛顧、深眷を將來の深眷とみる説あり、余は之を取らず、現在の深眷をいふ。【三八】羸年、餘年、これからの老いさき。【三九】無事、平穩無事、病、災、其他の不幸などなきをいふ。

【題義】病みてのち、よくなつてから王衛がところをたづねて酒を飲み之におくりし歌。王衛の事迹詳ならず。作時は未詳。仇氏は天寶十三載ならんといへり。

【詩意】麒麟の角だの鳳凰の勢だのといふものがあるが、それが何のねうちがあるものか、世間の人はしりわけるものがない、しかし一旦それを脚に煎じて、きれた弓づるをつぎあはせてみると、そのもののふしぎなききめがひとりであらはれる、(王生の交情の眞實さは、この麟角鳳凰のやうなものである。)自分に向き(向き)とは病前にさかのぼりていふなり、王生を看たときからかやうな(起二句にのべし如き)かんがへをいだいてをつたが、いつたい王生はこの杜甫にいかなる羨むべき價値があつてかく自分との交りを親密にして斷絶せぬのであらうか、それはとにかくとして王生の處をたづねて平生の懐をなぐさめる、王生はふだんから自分が貧賤に甘んじてゐるものだといふことを知つてゐるのだ、自分は王生に對しては凍え餓えるといふことは、すこしも恥づるに足らぬことを知つてゐるが、病氣だけは閉口だ、年中病氣がちでたつしやなことのないのにはよわる。王生は自分を見ると、自分のかほつきのよくないのを怪しんでわけをきく、自分はそれに答へていふ、ながい病氣でいろいろな艱難をへつとした、秋三箇月おこりにかかつたのだが、その苦痛をだれががまんし得やうか、百日ばかりも寒と熱とがたたかひあうたのだ。頭は白くなる眼力はくらくなる、すわる足膝のあたりには肌ができる、肉は黄ばみ、皮はしわだち、やつとほそぼそといのちをつないであるばかりだ、王生は自分の病後のからだのなほりきつてゐないのをあはれんで、自分のために骨をつてごちそうをだしてくれた。人をまちにやつて香ばしいうるしねをかはせ、妻をよんで部屋からでて

こさせ、てづから食事しょくじをそなへさせたりした。長安ちやんあんでできた冬の野菜やさいづけは酸味さんみもよく色も緑きどでうつくしいし、金城きんじやうでできたバタは純白じゆんぱくでねりぎぬのやうだ。そのうへふたをさがし求めて新鮮しんせんなところを料理りやうりし、また内内ないない一斗いっとうの酒さけをかうておいてこの宴席さげしの終はらるのに都合あつぱよくしてくれた。自分の晩年ばんねんに於て舊友きうゆうの情義じやうぎでだれが王生わうせいに似たやうなものがあるか、ありはしない、自分はその眞實しんじつさをうれしくおもつて手足てあしが軽かろくなつて舞まひだしたいほどの氣きがする。老馬らうばも駒こまとなるといふ話はなしがあるが、まことにそのとほりで今の自分じぶんがそれだ。自分は今此いまこゝの席せきでごちそうにあひ十分得意じふぶんていぎであるが、まして王生わうせいの深き愛顧あいこあるに於てをや。自分の老いさきはただ飯いひさへ腹はら一ぱいにたべることができさへすれば、どうかこのやうにしておたがひ無事むじ息災そくさいでいつまでも會見かいけんのできるやうありたいとおもふ。

送裴二虬尉永嘉

裴二虬が永嘉に尉たるを送る

孤嶼亭何處天涯水氣中。

孤嶼亭何の處ぞ。天涯水氣の中。

故人官就此絕境興誰同。

故人官此に就く。絶境興誰とか同じくする。

隱吏逢梅福遊山憶謝公。

隱吏梅福に逢ふ。遊山謝公を憶ふ。

扁舟吾已傲把釣待秋風。

扁舟吾已に傲ひぬ。釣を把るには秋風を待つ。

【字解】裴二虬、裴虬字は深原、後ち大曆四年に道州刺史となる。作者「暮秋狂興道州手札」詩あり。又陳國大夫とゆる。

奉して工部尙書を贈らる。【一】尉、縣の警衛を掌る官、令の下官なり。【二】永嘉、今の浙江省温州府。【三】孤嶼亭、孤嶼は温州の水滸江中に在り、宋の謝靈運が江中孤嶼詩あり、後人手を其上に建つ。【四】故人、ふるなじみ、我をさす。【五】此、永嘉の地をさす。【六】絶境、塵世とかけはなれし境地。【七】興、風景をみてあそぶの興味。【八】隱吏、隱居者の性質を帯びたる吏。【九】梅福、漢末九江の人、南昌尉となる、王莽政を専にするや一朝妻子を棄て去つて會稽に隱る、人傳へて仙となす、こゝは我をあてていふ。【一〇】謝公、謝靈運をいふ、靈運は山水の遊を好み、山水に關する詩賦を以て著名なり。【一一】傲、やとふ、この字或は傲、具、買、などに作れり。【一二】把釣待秋風、把釣と待秋風とは倒置語なり、把釣とは釣竿を手にとらんとするをいふ。

【題義】裴虬が永嘉の尉に任せられて赴くを送る詩。作時は未詳。天寶十三載ならんといふ。

【詩意】謝靈運の遺蹟である孤嶼の亭はどここのあたりにあるであらう、それは天のはて、ただ水蒸氣のただよへるあたりにあるのである。わが友人たる君は今やそこへ官となつてゆく、あのかけはなれたところで君はだれとその風景を賞玩する興味を一緒にするのか。君がそこに任官するのは隱吏として梅福にであうた如きものである、同時にあの遊山好きであつた謝公を憶はずにはをれぬ。僕もはや扁舟を傲うてゐる。いづれ秋風の吹く頃を待つて南方へかけて釣竿を手にしようと思つてゐる。

贈獻納使起居田舍人澄

獻納使・起居田舍人澄に贈る

獻納司存雨露邊。

獻納司は存す雨露の邊。

題辭二虬尉永嘉

贈獻納使起居田舍人澄

【字解】獻納使、官名、唐に延恩賜といふ投書面の取付あり、一般人の上書、詩賦文章等をうけつけ、武后の選撰中より之を覽き讀

地分清切任才賢

地清切を分ちて才賢に任す。

舍人退食收封事

舍人退食封事を收め、

宮女開函捧御筵

宮女函を開きて御筵に捧ぐ。

曉漏追趨青瑣闥

曉漏追趨す青瑣の闥。

晴窗點檢白雲篇

晴窗點檢す白雲の篇。

揚雄更有河東賦

揚雄更に河東の賦有り。

唯待吹噓送上天

唯だ待つ吹噓送りて天に上すを。

と天子の恩澤をいふ、その恩澤の露のかるにちかきあたりを雨露と云ふ。獻納の司は外部にあるも舍人之をかゝるを以て舍人の地位より雨露といふ。【一】地分清切。清切とは清要切近なり、職務繁雜ならずして高く天子の側近にあるをいふ、清切とは雨露の語をうけ、舍人の地位についていふ、舍人を獻納の方へまたがらすにより分つといふ。【二】才賢。田澄の如き人物をさす。【三】退食。時に退食自公の語あり、公より退きて食をとることをいふ、ここは必しも食事するをいふに非ず、公務を了へ退隠することといふ。【四】收封事。封事とは他人にみられぬ紙に封じてある上書なり、收めるとはとりかたづけること、是は獻納使としてのしごとをなすことといふ。【五】宮女。宮中につかふる女官をいふ。【六】開函。函はハコ、即ち封書がつの函をいふ。【七】捧。捧まざる。【八】御座。天子の御座。【九】曉漏。漏は水時計、地漏とは朝の出仕の時刻をいふ。【一〇】追趨。ひとといつしよにこばしりして進む。【一一】青瑣闥。闥は小門、青瑣とはくさりをつらねし鐵の欄に青き飾具をのりたるをいふ。【一二】晴窗。晴

大夫・補闕・拾遺一人を以て屬に關することを牽らしむ、天寶九載にその官名を獻納使と爲す。【二】起居舍人。起居舍人田澄といふことなかくわけて書きなせるなり、起居舍人は天子の左右にあり、天子の起居注(日記)、政事に關する以下の議論などを筆記す、田澄は姓名なり、澄は起居舍人にして獻納使を兼ねしと少ゆ。【三】獻納司。即ち獻納使の職司をいふ。【四】雨露。雨露の職司をいふ。【五】雨露。雨露

天風のよきをりのまど。【七】點檢。點をつけてしらべる、その天子のお手もとへ出す價値あるや否をしらべるなり。【八】白雲。白雲。晴家の別區たり、或は漢の武帝の秋風辭の秋風起兮白雲飛、周の穆王の白雲歌の乘彼白雲、垂於帝鄉、を引き、舍人關する所の詔書をさすとなす、其說首肯しがたし。或は在野人の詩文を指すとして陶淵明が和郭主簿詩の虛室白雲、懷古意何深、郭士元の蜀道西樓詩の陶令好文章對酒、相和自白雲篇を引く。しかし陶詩に夏白雲の句ありとて何故にそれがひろく在野人の詩篇の義となるか、余は白雲篇は在野人の詩をさすものとするには異議なし、ただそれが陶詩に本くや否に就ては疑あり、陶弘景が齊の高帝に答へたる詩といふものにも山中何所有、嶺上多白雲、唯堪自怡悅、不堪持贈君とあり、これも亦一の白雲篇とみなして可なるべし、白雲篇を以て陶明の作と限るべからざるに似たり。【九】河東賦。漢の揚雄の作なり、作者已に三賦を獻じ、天寶十三載更に封西岳賦を奏す、これその作ありて田澄によりて之を獻せんと欲するをいはいんとするなり。【一〇】吹噓。後漢書に鄭泰傳に、孔公緒、游談公論、噓枯吹生、注に枯者噓之使生、生者吹之使枯とあるに本く、吹も噓もいきなふきかけることなり、吹の方には枯れしむる義あるもそれにかばらず噓して生ぜしむる方に重きを置きて用ふ。【一一】送上天。送りて天へのぼす、之を天子に進せしむるをいふ。

【題義】起居舍人にして獻納使たる田澄に贈れる詩。作時は天寶十三載冬「封西岳賦」を獻する以前に在るべし。

【詩意】獻納使の職は本来外部にあるのだが今は天子のめぐみのつゆのかかるおそばちかくにあることになった。すなはち舍人といふ清要切近の地位をわけて君のやうな才賢にその職をまかされたのである。君は舍人としての職務を了りて區から臣下の投じた封事を收める、宮女は函からそれを出だして之を御座にささげるのである。君は曉の時刻には起居舍人として他の人人といつしよに青瑣の闥にでむき、また獻納使としては晴窗の下で在野人等のたてまつる白雲の詩篇をしらべられる。揚雄(即ち

自己<sup>レ</sup>は已に賦をたてまつつたが更に河東賦<sup>レ</sup>封西岳賦<sup>レ</sup>を意味すがあつて、ただ君の吹嘘によつてそれを天まで送つてのばらせてもらひたいと待つてをるのである。

崔駙馬山亭宴集

崔駙馬が山亭の宴集

蕭史幽棲地、林間踏鳳毛。

蕭史幽棲の地、林間鳳毛を踏む。

汎流何處入、亂石閉門高。

汎流何處にかゝる。亂石門を閉ぢて高し。

客醉揮金碗、詩成得繡袍。

客酔うて金碗を揮ふ。詩成つて繡袍を得。

清秋多宴會、終日困香醪。

清秋宴會多し。終日香醪に困す。

【字解】(一) 崔駙馬、駙馬都尉崔惠童なり、玄宗の女晉國公主のお婿なり。(二) 山亭、崔惠童が山亭は長安城の東にありしといふ。(三) 蕭史、其のつどひ。(四) 蕭史、秦の穆公の女弄玉の婿なり、かりて崔惠童に比す。(五) 踏鳳毛、弄玉蕭史と鳳臺の上に住む、一日蕭史を吹くに鳳皇飛び来る、二人つひに鳳皇にしたがひて飛び去る、こゝは風去を以て公主の世を去りしことをいふ、鳳去りたればそのあとには毛などさらばり来る、今作者等賓客としてこの山亭に來りその毛を踏むといふは鳳の居たりし遺迹に歩することゝいへり。(六) 汎流、しぐりこみてながるる水。(七) 何處入、これはかつてありし泉水などの水のかれたることをいへるならん、こゝはひりこんでしまつたが。(八) 亂石、みだれ立つ石、この二字は高の字へかかる。(九) 閉門、門を閉ぢたるにといふなり、まびしきまなり。(一〇) 客、賓客。(一一) 揮金碗、揮ふとは他人に之をまさんとて酒のしづくをふるひておとすためなり、金碗は黄金の酒碗。(一二) 得繡袍、これは主人が賓客として繡袍(ぬいとりしたわたいれ)をだす、それをかちうるをいふ。

【三】 困、酒にあてらるるをいふ。【四】 香醪、醪はにこりまけ、かすのままのもの、こゝはたださけのことをいふ。

【題義】 駙馬都尉崔惠童が山亭の宴のつどひのことをのぶ。詩句によればこの時公主は既に世を去りしもの如し。作時は天寶十三載の秋ならんといふ。

【詩意】 我が君のお婿にあたる方のしづかなおすまひ、こゝへ來て林間で鳳鳥の毛をふむ(そのかみのさまがしのぼる)。地下にもぐりこんだ流れはどこへはひりこんだか水もかれがれにみえる。ただ門の閉ぢてある園内に亂れたる石が高くたつてゐる。それでも賓客は酔うて酒をさしあふために金碗をふるひ、詩成つては他人に勝つて繡袍の賞を得る。今、清秋の時節で宴會が多く、自分もひねもすうまいさけにあてられてゐる。

示從孫濟

從孫濟に示す

平明跨驢出、未知適誰門。

平明驢に跨つて出づ。未だ知らず誰の門にか適くを。

權門多噂沓、且復尋諸孫。

權門噂沓多し。且つ復た諸孫を尋ぬ。

諸孫貧無事、宅舍如荒村。

諸孫貧にして無事なり。宅舍荒村の如し。

堂前自生竹、堂後自生萱。

堂前自ら竹を生ず。堂後自ら萱を生ず。

崔駙馬山亭宴集 示從孫濟

萱草秋已死竹枝霜不蕃

萱草秋已に死す。竹枝霜に蕃らす。

淘米少汲水汲多井水渾

米を淘するには少しく水を汲め。汲むこと多ければ井水渾る。

刈葵莫放手放手傷葵根

葵を刈るには手を放にする莫れ。手を放にすれば葵根を傷つく。

阿翁懶惰久覺兒行步奔

阿翁懶惰久し。覺ゆ兒が行步して奔るを。

所來爲宗族亦不爲盤餐

來る所は宗族の爲なり。亦た盤餐の爲ならず。

小人利口實薄俗難具論

小人は口實を利す。薄俗具に論じ難し。

勿受外嫌猜同姓古所敦

外の嫌猜を受くる勿れ。同姓は古より敦くする所なり。

【字解】「二」從孫「左傳」宣公二十五年の疏に男子謂兄弟之孫爲從孫とみゆ。姪の子が從孫になる。然らば自己と從孫とは二代を隔つるはずなり。然るに唐の宰相世系表、顏真卿の神道碑によれば杜市は杜預の十三代の孫、杜濟は十四代の孫とあり、二者一代をへだつるのみ、暫く疑を存す。【二】濟、杜濟、字は應物、後給事中、東川節度使、兼京兆尹となれり。【三】不明、しらしらあけ。【四】適、ゆく。【五】權門、權力ある家。【六】嗔香、時、十月之交、霜にみゆ、朱子の解に、嗔、怒也、香、重也、多言以相説といへり、ことばかす多き義ととく、主人の氣に入るやうなことを多くいふなり。【七】請孫、自己と下へ二代をへだてたる列にある子弟ども。【八】竹、萱、たけ、クワン草、わすれなぐさ、萱は竹に兄弟類、自己をもこめしならん、萱は母にたとへたるならん、實食とたとへをかれていふ。【九】着、しげる、ふえる。【一〇】海、米を水にゆりながらあらふこと。【一一】節、にこる。【一二】葵、あひび、食物なり。【一三】敦手、この二字、從漢書、明帝紀（中元二年十二月朔）にみゆ、かつてはうだいに手をもち

ふることをいふ、此の海米、刈葵の二事は食事上の事について實食とたとへをせられたり、實食としてはただその事についての注意すべきことをいへるのみ、裏面のたとへとしては「根節を培養し、宗族を教誨にすべし」との意をふくめり。【一四】阿翁、阿は親しむ解、翁は老人、諸孫らがよぶべき辭を以て作者自ら稱す。【一五】覺、おぼゆ、しつてある。【一六】兒、杜濟等をさす。【一七】行步奔、老翁を如ふるために、海米、刈葵等の事のため奔走に勞するをいふ。【一八】所來、來る所以をいふ。【一九】宗族、一族の位を重んずるをいふ。【二〇】盤餐、大皿にもつた食物。【二一】利口實、口實とはその事をわが言はんとすることのたねにする。と、利は利用すること、杜市がしばしば來訪するは飲食のためなりなどいふ人のうばさな種にして同族離間のたねに利用する。【二二】薄俗、世間の輕薄ならはし。【二三】具論、一一論じたてる。【二四】外、一族以外の人。【二五】嫌猜、嫌疑、猜忌。【二六】古所、古來敦くして交りなかつた。

【題義】從孫なる杜濟に示したる詩。作時は天寶十三載なるべし。【詩解】夜がしらしらあけになるころ自分は驢馬にまたがつてでかけるが、さてだれの門をあてにゆくとも知れぬのである。權勢家の門はへつらひ手の口かすばかり多いし、それでやつぱりまあまあまた孫どもたちのところを尋ねるのだ。その孫どもは貧乏であるが無事に暮してゐる、その住居のあたりは荒れたる村のやうである。座敷の前には竹がはえてゐる。うしろには萱草がはえてゐる。その萱草（母親）は秋已に死んでしまつた、その竹（兄弟）からでた枝は霜にあうて蕃殖をせずにある。わしがくるとおまへたちは米をといだり葵を煮たりしてくれる。親切はかたじけなく思ふ、米を水にゆるには少しく水を汲んでおけよ、水を多く汲むと井の水がにごるものだぞ。（井の水をからすな）葵を

刈るときは亂脈な手のつかひかたをしてはならぬぞよ。亂脈につかへば葵の根をきすつけるものだがよ、(葵の根を大切にせよ)。(すべて事物の根源をまもることが肝要なりとのころ、人事に於ては宗族の關係)。「このちいさんは、すつと以前からのなまげ者だ。わしがくればおまへたちがあちこちたちはたらくことは知つてゐる。それにわしがここへやつてくるといふのは一族といふ關係からで決してごちそうをむさばるためにくるといふのではない。小人といふものはなにかあるとそれをたねに利用して人のあひだをそこなはんとするものだ、輕薄の世俗のことはあきれるばかり、まじめに一一それを論じたりすることはできぬ。おまへたちもそんな人言にまどはされて外部からの嫌疑やそねみをうけてはならぬぞ、同姓往來してその間の情誼を敦厚にするといふことは古來からさやうにしてあることであるのだ。

九日寄岑參

九日岑參に寄す

出門復入門、雨脚但如舊。

門を出て復た門に入る。雨脚但た舊の如し。

所向泥活活、思君令人瘦。

向ふ所泥活活たり。君を思へば人をして瘦せしむ。

沈吟坐西軒、飲食錯昏晝。

沈吟して西軒に坐す。飲食昏晝を錯る。

寸步曲江頭、難爲一相就。

寸歩も曲江の頭、一たび相就くことを爲し難し。

吁嗟乎蒼生、稼穡不可救。

吁嗟乎蒼生、稼穡するも救ふ可からず。

安得誅雲師、嚆能補天漏。

安んぞ雲師を誅することを得む。嚆か能く天漏を補はむ。

大明翰日月、曠野號禽獸。

大明日月翰み、曠野禽獸號ぶ。

君子強逶迤、小人困馳驟。

君子も強ひて逶迤たり。小人は馳驟するに困しむ。

維南有崇山、恐與川浸溜。

維れ南に崇山有り。恐らくは川浸と溜せむ。

是節東籬菊、紛披爲誰秀。

是の節東籬の菊、紛披誰が爲に秀づるや。

岑生多新詩、性亦嗜醇酎。

岑生新詩多し。性亦た醇酎を嗜む。

采采黃金花、何由滿衣袖。

采采す黄金の花、何に由つてか衣袖に満たむ。

【字解】(一) 出門・入門 出づるは岑參を訪はんと欲するなり、入るは往かれぬ故にまたはひるなり。(二) 如舊 もとどほりにふりつづく。(三) 所向 自己のさして往かんとする所。(四) 活活 水の流るる音。(五) 君 岑をさす。(六) 令人瘦 人とはひろく言ひて自己をそのうちにふくむ、瘦すとはものおしひのあまりなり。(七) 沈吟 しづんでつぶやく。(八) 西軒 西むきののきば。(九) 錯昏晝 錯は錯眼、とちがへるをいふ。昏は夕ぐれ、晝はひるとき、ひると夕ぐれなとちがへるとは雨にてくちき散なり。(一〇) 寸歩 わづかのあゆみ。(一一) 曲江頭 曲江は岑參の居る所なりと仇氏はいへり。(一二) 相就 こちらから先



方へゆく。【三】 呼喚乎 ああ、歌辭なり。【四】 蒼生 人民。【五】 稼穡 穀物の植付け、とりいれ。【六】 故人 人命を顧よりすくよ。【七】 安得 どうしたならばまやうにできるか、希望の辭。【八】 雲師 雲を司る神、屏藩、豊隆などの稱あり。【九】 晴雨。【一〇】 補天漏 雨の降るは天にすぎありてそこよりしれるものと俗信あるによりかくいふ、補とはそのすきまをおぎなひてふまぐをいふ。【一一】 大明 日のことをいふ、下に「日月」と月まで並用したればこは日月の光をさしていふ。【一二】 朝 つつむ、光をかくすこと、此句は文法上不完全の句なり。【一三】 曠野 ひろきのばら。【一四】 君子 地位高き人。【一五】 強寇 強盗はうれりくわたりたる貌、強とは無理にすること、君子は車馬の如き乗物ありてそれにのりて道路をゆくも、それでまへた無理にまがりくれば、はしる。【一六】 維南 維とはただ辭なり、南は半夢の住地より南の方をいふ。【一七】 崇山 たかき山、これは重陽節には登高とて高地にのぼり厄ばらひを爲すものゆゑ、或る高岡をさしていふなるべし。【一八】 浸 水をふかくたへたる處をいふ。【一九】 瀆 水の金にながるをいふ。【二〇】 是節 重陽の節をさす。【二一】 東籬菊 陶淵明が詩に采菊東籬下、悠然見南山、とある意を用ひたり、半夢が家のまがきの菊をいふ。【二二】 紛披 みだれたる貌。【二三】 爲誰秀 何人のために秀で立つや、とは己がたづねゆかねば半夢しその花をただ一人にてながめてをらばならぬ、かくては菊花もほりあひなからんといふなり。【二四】 半生 夢をさす。【二五】 醉酣 まじりけなきよ酒。【二六】 采采 重陽には菊酒とて菊花を酒に泛べて飲む、よりてその花をとる。これも半夢が採るをいふ。【二七】 何由誰 どうして一ばいにならうや、ならぬ、反語なり。物思ひに助けらるればなり。【二八】 袖 そで、此の末段は自己の想像をいはずして半夢に代りていへり。

【題義】 陰曆九月九日即ち重陽の節になるが雨のため友人の岑參をおもひて之に寄せたるなり。製作時は天寶十三載の九月九日の作。

【詩意】 君の處へ往かうとおもつて家の門から出かけてはまたはひりこむが、雨のあしはやつぱり前のとほりにふりつづいてゐる。どちらをさして往かうとしても、そこはみな泥水があが音たてて流れてゐてゆかれぬ、君のことをおもへば瘦せるばかりである。しかたなしにひとりつよやきながら西むきののきばに坐つてゐる。ものをたべても晝だか晩だかまぢがふ程である。一寸なりとも君のゐる曲江のほとりまで出かけてつきしたがふことができぬ。ああ人民ども、彼等は稼穡しても不作であらうからとてもその生命を救ふことはできぬ。どうしたならば雲の神を誅してしまふことができるだらう。だが天にゐてゐる穴をふさいでくれることができるだらう、大明の光を放つべき日月もその光をつつんでうすぐらく、ひろいのはらには禽獸が怪んでさげんでゐる。この雨この泥途では車馬のある身分高き人でもやつとむりにまがりくねりつつゆくので、卑賤の人間でははしることにひどくなんざする。君の所の南に高い山があるが、あの山も川や淵と一しよに急流ながれてゐることであらう。けふの節に君が家の東籬の菊も見人なしに亂れさいてゐることであらう。君は新作の詩篇も多くもつてゐるし、天性いい酒をこのんでゐる。この僕が尋ねてゆかねばいくらこの黄金の花を採つたところがとても袖一ばいとることはできぬであらう。

嘆庭前甘菊花

庭前の甘菊花を嘆す

庭前甘菊移時晚

【字解】 【一】 移時晚 移は移轉をいふ、晚は時節がおそきたるをいふ。【二】 青蓮 まだ黄ばむに至

青葙重陽不堪摘

青葙重陽に摘むに堪へず。

明日蕭條醉盡醒

明日蕭條醉盡く醒む。

殘花爛漫開何益

殘花爛漫開くも何の益かあらむ。

籬邊野外多衆芳

籬邊野外には衆芳多し。

采擷細瑣升中堂

細瑣なるを采擷して中堂に升す。

念茲空長大枝葉

念ふ茲空しく長す大枝葉。

結根失所纏風霜

結根所を失うて風霜に纏はるるを。

とは甘菊花をさす。【一】空長 空とはむだに、徒らに、の意、長は成長。【二】結根失所 移し植ゑたるにより甘菊はその根を  
動す本根の場所を失ひたるなり。【三】纏 つきまとはるる。

【題意】自家の庭前にある甘菊の花を見て感嘆したる詩なり。製作時は天寶十三載長安にありしとき  
の作。

【詩意】我が庭前の甘菊は、移植した時期がおそすぎたので、重陽の節には花莖がまだ青くとも摘  
むにたへなかつた。ところで翌日になつてさびしくも酒の酔もすつかりさめたころ、甘菊が十分さき  
さかりたる花を咲きのこしてもそれはなんにも役にはたたぬ。一體自分の家の籬のほとりや野外に

は、さまざまの草花が多くあるが、それ等は細瑣なつまらぬものでもつみとられて表座敷へのはされ  
る。それと比較してよかんがへてみるに、この甘菊はいたづらに大きな枝や葉をのばしてゐるだけ  
で人からは賞美されず、根のつき場所さへ失うて風霜にまとはるるの苦みをうけて居る。憐むべきも  
のだ。

【餘論】此詩自己の境遇を甘菊に託してのぶ。

承沈八丈東美除膳部員外郎阻雨未遂馳賀

奉寄此詩

沈八丈東美が膳部員外郎に除せらるるを承く、雨に阻てられ未だ馳賀を遂げ  
ず、此の詩を寄せ奉る。

今日西京掾

今日西京の掾

多除南省郎

多く南省の郎に除せらる、

通家惟沈氏調帝似馮唐

通家惟だ沈氏のみ、帝に調する馮唐に似たり。

詩律羣公問儒門舊史長

詩律羣公問ふ、儒門舊史長し。

承沈八丈東美除膳部員外郎阻雨未遂馳賀奉寄此詩

らざる青き花莖をいふ。【一】重陽  
陰曆九月九日の節。【二】摘 花を  
つみとること。【三】明日 重陽の  
翌日。【四】殘花 節過ぎてのちさ  
きのこれる花。【五】籬邊 十分さ  
かりなすぎしまま。【六】何益 益  
なきをいふ。【七】衆芳 さまざま  
の草花。【八】采擷 とりつまむ。  
【九】念茲 草花の細小なるをいふ。  
【一〇】中堂 正廳、表座敷。【一一】  
念茲 念の字下句までへかかる、茲  
移し植ゑたるにより甘菊はその根を

清秋便寓直列宿頓輝光

清秋寓直に便なり。列宿には頓に輝光あり。

未暇申安慰含情空激揚

未だ安慰を申ぶるに暇あらず。情を含みて空しく激揚す。

司存何所比

司存何の比する所ぞ。

膳部默懷傷

膳部なりと默して懷傷す。

貧賤人事略經過霖潦妨

貧賤人事略なり。經過霖潦に妨げらる。

禮同諸父長恩豈布衣忘

禮は諸父の長に同じ。恩豈に布衣にして忘れむや。

天路牽驥雲臺引棟梁

天路驥を牽き、雲臺棟梁を引く。

徒懷貢公喜颯颯鬢毛蒼

徒に貢公の喜を懐くも、颯颯として鬢毛蒼たり。

【字解】「二」承とは任官の報をうけたるをいふ。【三】沈八丈東美。沈東美は沈佺期の子なり、八とは排行をいふ、丈とは年長者を敬していふ。【四】除。任ぜらるること。【五】膳部員外郎。尚書省の膳部に屬せる官名。【六】阻雨。阻はじやませらるること。【七】暈とぐる、なしなほせる。【八】馳。先方へかけゆきていひを申す。【九】西京。京兆府の掾(下僚なり)をいふ。【十】南省。尚書省をいふ。【十一】郎。郎は正七品、郎は六品官なり。【十二】通家。父祖以來交りある家をいふ。作者の祖杜審言と東美の父沈佺期とは則天武后の時代に同じく修文館直學士たり、故に通家といふ。【十三】蜀唐。漢の文帝武帝時代の人、年九十餘にして始めて郎となれり、東美の郎となれるのおそきを以て奮りて比しむ。【十四】詩律。詩篇の聲律、唐の詩は沈佺期・宋之間等に至りて法律備はると稱せらる、東美は佺期の子ゆゑ詩律に通ずといふなり。【十五】驥公問。多くの貴人が

之に向つて問ふ。【十六】儒門。儒者の家す。【十七】舊史長。長とは久しいが如し、詩の律は遠くは漢の沈約等以準辦と云る、約はまた宋の歴史を修めたり、佺期の一門は約と同姓なれば約より出でし者と見なしてその舊史官たること今に始まらず遠く久しき以前よりすといふなり。【十八】清秋。氣の清らかなる秋。【十九】便。つがふよし。【二十】寓直。當番にて役所にねとまりするをいふ。【二十一】列宿。天上に懸れる星宿、天文に太微中の帝座の東北にあたり郎位等の十五星あり、因つて郎官を星にていふ。【二十二】申安慰。東美に對して慰安の辭をのぶるをいふ。【二十三】含情。情を口にいださず胸の中にもつてあること。【二十四】激揚。喜びて感發すること。【二十五】司存。應豆之事有司存とあり、司存とは有司存を省略していふ、その職掌の存する所をいふ。【二十六】何所比。所比何といふに同じ、何にくらぶべきであるか。【二十七】膳部。この二字は上句へつけてみるべし、膳部は膳部員外郎の官職にて杜審言の在任せし官をさす。注の甫大父といふは審言をさす。【二十八】懷傷。ものがなしくいたむ。【二十九】人事略。交際上の事に於て簡略なり、往き賈せざるをいふ。【三十】經過。先方の方へたづねゆくこと。【三十一】霖潦。ながあめ、あまみづ。【三十二】諸父。羣叔伯父の類をいふ、東美を比す。【三十三】長。年長をいふ。【三十四】布衣。仕宦せざる一箇の民、自己をさす。【三十五】天路。天上の道路、高い處にあるみち。【三十六】驥。千里を走る名馬。【三十七】雲臺。雲にそびゆる高きうつな。【三十八】棟梁。むなぎ、うつばり、天路雲臺は高き位置をいひ、驥棟梁は東美の材能をたとへていふ。【三十九】徒懷。いたづらにいだく。【四十】貢公喜。漢の王吉(字は子陽)と貢禹と親交あり、王陽、王吉がこと入仕、貢禹、貢禹の語あり、一方が官途にはひると他のものは冠のほころをもち抑うて自己をも推戴するならんと待ちかまへたりとなり、作者が東美の任官を喜ぶば貢禹が王吉の入仕を喜ぶが如くなるをいふ。【四十一】颯颯。風の吹きつけるさま。【四十二】蒼。こましば色。

【題義】沈東美が膳部員外郎に任せられたといふことをきいたが雨にじやまされて飛んでいつておいはひを申すことができぬによつて此の詩を寄せたてまつるのである。

【詩意】今日京兆府の掾屬の人人が多く尚書省の郎官に任命せられた。そのうち我が家との舊交ある

承沈八丈東美除膳部員外郎阻雨未遑馳賀奉寄此詩

家はただ君の家沈氏である。君が天子に謁見を仰せつかり今ごろ郎官となられるのはおそすぎるくらいでか。漢の馮唐にも似てゐる。君は詩律に通じてをられるから諸公から質問をうけられるし、君の家からは舊史官たる梁朝の沈約以來遠く久しいのである。今は秋氣清らかな時節で宿直をさるるに便利であらうし、天上の列星も君が郎官になられたのでおなかができたのをよろこぶかの如くにはかに光輝をましたかとおもはれる。自分はまだ御任官に對し御慰安の辭をのべるに暇がないがその事をきいただけで内部には情をいだいてただただ感激してゐるのである。このたびの御職掌の存する所は何を以て比してよいかといふと我が祖父(審言)がつとめた膳部だといふことで自分は感動してだまつてかなしむのみである。自分の現在に貧賤であつて交際上の禮儀も十分にはいたしかねる。そのうへそちらへゆかうとしても長雨や雨水にさまたげられる、實際往けぬのである。ただ君に對する禮は他の諸父長者に對すると同様の關係にあるのであり、布衣の身だからとて貴家に對する恩義はどうして忘れることができやう。君は天上の路に千里の馬がひかる如く、また雲にそびゆる高臺に棟梁の材木が引きよせられし如く高位にのぼられた。自分は之に對して徒らに貢禹が王陽に對してもつた様な喜びをいだいてはをるが、自分自身はといふと老衰の境に入りかけて秋風に吹きつけらるる鬣の毛はむなしく蒼然としてゐるのである。

苦雨奉寄隴西公兼呈王徵士 (原注)隴西公即漢中王瑀徵士即瑯琊

王徵士 雨に苦しむ、隴西公に寄せ奉り、兼ねて王徵士に呈す

今秋乃淫雨、仲月來寒風。

今秋乃淫雨、仲月寒風來。

羣木水光下、萬家雲氣中。

羣木水光の下、萬家雲氣の中。

所思礙行潦、九里信不通。

思ふ所行潦に礙げらる。九里信通せず。

悄悄素澹路、迢迢天漢東。

悄悄たり素澹の路、迢迢たり天漢の東。

願騰六尺馬、背若孤征鴻。

願くは六尺の馬を騰げ、背にして孤征の鴻の若く、

劃見公子面、超然慍笑同。

劃として公子の面を見、超然として慍笑同じからむ。

奮飛既胡越、局促傷樊籠。

奮飛せむとするも既に胡越なり。局促として樊籠を傷む。

一飯四五起、憑軒心力窮。

一飯に四五たび起つ。軒に憑りて心力窮まる。

嘉蔬沒溷濁、時菊碎榛叢。

嘉蔬溷濁に沒し、時菊榛叢に碎く。

鷹隼亦屈猛、烏鳶何所蒙。

鷹隼も亦た猛を屈す。烏鳶は何の蒙むる所ぞ。

式瞻北鄰居、取適南巷翁。

式で瞻る北鄰の居、適を取れ南巷の翁に。

苦雨奉寄隴西公兼呈王徵士

挂席釣川漲焉知清興終

席を掛けて川漲に釣らば、焉ぞ清興の終ることを知らむ。

【字解】【一】苦雨 雨のふりつづくことにこまる。【二】隴西公 睿宗の長子に李憲あり、この人天子となるべかりし人なるも弟の玄宗が即位せり、因て玄宗之に謀して曠皇帝といふ、曠皇帝の長子は汝陽王李瑋にして、第六子は李瑒なり、瑒隴西公に封ぜられ、後に天寶十五載には玄宗に從ひて蜀に幸し、漢中王に封ぜられたり。原注はあとから書きそへたり、この詩は隴西公たりしときに寄せしものなり。【三】王徴士 注に少ゆる如く壽郡の王徴といへるものなり、徴士とは官よりめしだされてしかし任官せざるものを稱す。【四】淫雨 ながあめ。【五】仲月 秋のなかの月、八月をさす。【六】羣木 多くの樹木。【七】水光下 大水たたへて樹木の影水にうつる、之を水光の下にあるといふなり。【八】萬家 多くの人家。【九】雲氣中 雨ふりつづくゆゑ雲氣多く、人家はその中にとざさる、羣木の二句は雨中の遠景をいふ。【一〇】所思 思ふ所の人をいふ、隴西公をさす。【一一】巖 さらまたげられる。【一二】行潦 行は道、潦はあまみづ、道路にあふるあま水を行潦といふ。【一三】九里 自家と隴西公の居所との距離の長さ。【一四】信 たより、消息。【一五】悄悄 心の憂ふる貌。【一六】羣産 産は川の名、長安の萬年縣に在り、東北に流るること四十里にして渭水に入る。羣は水色の白きないふ、蓋し水淺きなり、「玄酒羣産」の語あり、(渭も川の名)此句によればこのとき隴西公は産水の東の方に住みたりとみゆ。【一七】迢迢 ばるかなる貌。【一八】天漢東 天漢はあまのがは、舊注にこれは渭水をさしていふといへり、手案するに上旬のつづきにて産水の水量の増したるあまのがはらに比していへるならん。東とは公の居の位置をいふ。【一九】巖 此語は「懐笑同」までへかかる。【二〇】巖 などをさせること。【二一】六尺馬 せの高きうま。【二二】背 背にまたがるをいふ。【二三】若孤征鴻 鴻の鳥は數多くにてゆくときはゆるやかに、單獨にてゆるときは伴侶をおぼんがためにばやくゆくといへり、孤征鴻はひとりゆく鴻なり。【二四】對 すぢをひきかざることなり、「こははつきりといふほどの意ならん。【二五】公子面 隴西公のかほをいふ。【二六】船然 世間の俗埃からかけはなれるかたち。【二七】懐笑同 公としよによる、びわらふ。【二八】雲飛 上の鴻の字の兼語なり、ふるひとぶ、これほとばんとするをいふ。【二九】胡越 胡は北狄、越は南方の國なり、胡と越とは非常にかけはなれたる地なり、かりて自己と公との間の遠きをいふ。【三〇】肩従 せまきとこるにちぢかかる。

【三】笑顔 としに鳥がこないふ、自家以外に一步もふみだし得ざるはたとへば鳥がここのなかにちぢかかるがごとし。【四】羣軒のきばによる。【五】窮 つかれて勢無くならんとするをいふ。【六】高麗 よき野菜。【七】涸海 にごれる水。【八】時節 時節からまく。【九】掃 掃はりの木のやぶ。【一〇】天 塵華、まか、ムヤアサ。【一一】風猛 雨のために猛勢をちぢかめてある。【一二】鳥驚 カラス、トビ。【一三】何所 此の雨によつて如何なる影響を蒙つたか、食物の缺乏を招いたのみだ。【一四】式 式は「もつてしなり、ただ静なり、静は仰ぎみるをいふ、先方を尊敬していふ。【一五】北廓 王徴の住居をさす、作者の家より北にありしとみゆ。【一六】取適 適は意に通ふこと、快意をいふ、快意を我にとれかしといふなり。【一七】南巷 南の小路の老人、作者自己をさす。【一八】挂席 舟に席の帆をかけ張るをいふ。【一九】川漲 川のでみづ。【二〇】清興 まつぱりしたおもしろみ、釣の樂みをいふ。

【題義】なが雨にこまつたととき隴西郡公李瑒に寄せ奉り、兼ねて徴士王徴に呈した詩なり。製作時は天寶十三載の秋の作なるべし。

【詩意】ことしの秋はなが雨がつづいて八月にも寒い風が吹いてくる。遠くからながめると多くの樹木の影が水光の下にうつつてあるし、多くの人家は雲氣の中にかすんである。吾が心中に思ふ所の人があつても道路のあふれ雨水にさまたげられてわづか九里ほどの距離であるのに彼我の間の音信さへ通じない。心にうれはしくおもふ、かの白い産水のほとりの路ははるばるとあまのがはらの東にでもあるやうだ。どうぞ六尺の馬ををどらせてその背にまたがり、ひとりゆく鴻のやうにはやく飛んでいつて、はつきりと我が公子隴西公のおかほを見て、世塵からはなれていつしよにおもしろをかしく語

りあひたいものである。(以上は雨に苦しみ随西公を思ふことをのぶ。)  
 公の居へ飛ばうとはするが  
 兩地は胡と越との如くかけはなれてゆくことはできず、一家にのみとちこもりて鳥のやうにちぢかま  
 つてかこの窮屈さをいたんでゐる。「たび食事するときには四度も五度も起ちあがつてもう雨はやま  
 めかとみる、それで軒によつて心の力も盡きてしまひさうである。」てづくりの野菜はみな濁り水の  
 なかに没してしまひ、菊の花は櫛の木のやぶにくだけてしまふ。鷹や隼もいつもの猛勢を自由に出す  
 ことはできず、烏や鳶はこの雨のため如何なるめにあはされてゐるか。この時仰ぎてみやるのは北郷  
 に住んでをられる人(王徹)のことだ、どうかこの南巷の老人に於て快意を取られよ、すなはち小舟に  
 席帆を掛けてこの大水に釣りを垂れたならば、いつまでも清興のはてるといふことはないであらう。  
 (この終りの段は王徹土に關してのぶ)

秋雨嘆 三首

秋雨嘆 三首

雨中百草秋爛死。

雨中百草秋爛死。

階下決明顔色鮮。

階下の決明顔色鮮なり。

著葉滿枝翠羽蓋。

著葉滿枝翠羽の蓋。

【字解】【一】百草 ままぎまの

草。【二】爛死 濕氣のためくまり

ただれて枯死す。【三】階 さまは

し。【四】決明 草花の名、夏の初

に苗を生じ、葉は百葉(へうまごやし)に似て大、七月黄花をひらき角を結

開花無數黃金錢。

開花無數黃金の錢。

涼風蕭蕭吹汝急。

涼風蕭蕭として汝を吹くこと急なり。

恐汝後時難獨立。

恐る汝が時に後れて獨立し難からむ。

堂上書生空白頭。

堂上の書生空しく白頭。『ことを。』

隨風三嗅馨香泣。

風に隨ひて三たび馨香を嗅ぎて泣く。

【一】百草 ままぎまの草

【二】爛死 濕氣のためくまり

【三】階 さまはし

【四】決明 草花の名、夏の初

【五】翠羽蓋 葉の蓋

【六】白頭 髪が白くなる

【七】馨香 香

【八】泣く 泣く

【一】百草 ままぎまの草どもはこの秋にあたつて雨のなかでただれ死したが、階の下の  
 決明だけは鮮かな色でさいてゐる。枝ちうついてゐる葉は翠羽の車蓋かともゆるし、無數の開花は黄  
 金の錢のやうだ。いま涼しき風が急に汝を吹いてゐるが、自分は汝が時節に後れて咲きだしてゐる  
 ので獨立してゐることがむつかしくはないかと恐れる。だからいたづらに白頭となつてゐるこの堂上  
 の書生(自分)はおまへの境遇に同情して風にむかひてしばしばおまへのかをりをかぎながら泣くので  
 ある。

【題義】秋の雨にあひてなげきのこころを詠す。天寶十三載秋の作。

〔一〕

關風伏雨秋紛紛。

四海八荒同一雲。

去馬來牛不復辯。

濁涇清渭何當分。

禾頭生耳黍穗黑。

農夫田父無消息。

城中斗米換衾裯。

相許寧論兩相直。

〔二〕

關風伏雨秋紛紛。

四海八荒同じく一雲。

去馬來牛復た辯せず。

濁涇清渭何ぞ分つべけむ。

禾頭耳を生じて黍穗黒く、

農夫田父消息無し。

城中斗米衾裯に換ふ。

相許さば寧ぞ兩から相直るを論せむ。

【字解】〔一〕關風 關隘の風なりといへり、關隘とはしどろに吹くさまなり。

〔二〕伏雨 沈伏の雨なりといへり、沈伏とは蓋し高くあがらず低飛の状をいふ。

〔三〕八荒 八方のはて。

〔四〕同一雲 一雲は濃淡なく一色の雲なり、雨天なれば薄曇色の雲がとさしてあるなり。

〔五〕去馬來牛 ゆききする牛馬。

〔六〕不復辯 辯は區別して識るをいふ、此句は「莊子」の秋雨時至、百川灌河、兩涘清濁之間、不辨牛馬、とあるに本く。

〔七〕濁涇清渭 渭川、清渭、濁涇、渭とあるに本く。

〔八〕禾頭生耳 禾は穂をだす穀類の總稱、こは「きび」につきていへり、生耳とは穂先が病のために彎曲して耳状をなすこと。

〔九〕黍穗黒 黍はキビ、黒とは病のためなり。

〔一〇〕城中 長安の城中。

〔一一〕斗米 一斗の米。

〔一二〕衾 衣。

〔一三〕裯 衾はかいまき、裯はびとへのかいまき。

〔一四〕相許 交換すること、先方がゆるす。

〔一五〕寧 なんとぞ、反語によむ。

【詩意】しどろに吹く風やひくく降る雨がこの秋に紛紛とみだれて四方八方ただ一様の薄曇色の雲にとさされてある。ゆく馬もくる牛もそれが牛やら馬やらはつきりしないし、平生は清濁がはつきりわかれてある渭水や涇水もどちらにもごつて區別ができぬ。耕作に従事する農夫等はよそへ仕事にやられてたよりもないほどだから、はたけの黍の穂先は曲つて耳のやうになりまた色もまつくろくなつてをる。長安の城内では従つて米價が騰貴して衾裯などをもちだしてやつと一斗の米と交換するのありさまだ、それも交換を許してもらへればありがたい方で交換物の價がつりあふかどうかなどといふことは問題ではない。

〔三〕

長安布衣誰比數。

反鎖衡門守環堵。

老夫不出長蓬蒿。

稚子無憂走風雨。

雨聲颼颼催早寒。

胡雁翅濕高飛難。

〔四〕

長安布衣誰か比數せむ。

反つて衡門を鎖して環堵を守る。

老夫出でず蓬蒿長す。

稚子憂無くして風雨に走る。

雨聲颼颼早寒を催す。

胡雁翅濕ひて高く飛ぶこと難し。

【字解】〔一〕長安 長安にてはの意。

〔二〕布衣 作者自らいふ。

〔三〕比數 くらべてかぞへる、同類としてとりあげていふことをいふ。

〔四〕反 しりぞいてといふ程の意。

〔五〕衡門 衡は横なり、左右の柱に横木をかけたしたる門、隱者の門なり。

〔六〕守 じつとしてなる。

〔七〕環堵 方一丈の土界を堵といふ。さやうの土界にてぐるりとこ。

秋來未曾見白日。

秋來未だ曾て白日を見ず。

泥汚后土何時乾。

泥后土を汚して何時か乾かむ。

【詩意】 長安の城中では無官である自分ごときものをだれがとりあげてかぞへてくれるものか、だから自分はしりぞいて隠棲の横木の門をわざとぎして土塀で囲まれた一區域をじつと守つてゐる。自分外に出たこともないからよもぎの類はのびはうだいにのびてゐる。こどもは無心でそのあたりを風雨の中で走り廻つてゐる。雨聲のしゅうしゅうたるのはやがてそれが早寒をうながすのである。北地からはや雁が飛んでくるがそのつばさは雨にぬらされて高く飛ぶことはむづかしい。秋になつてから一ども太陽を見たこともない、大地は泥だらけに汚されてゐるがいつになつたら乾くことであらう。

奉贈太常張卿垆二十韻

太常張卿垆に贈り奉る、二十韻

方丈三韓外崑崙萬國西。

方丈三韓の外、崑崙萬國の西。

建標天地濶詣絕古今迷。

標を建つ天地の闊なるに、詣ること絶えて古今迷ふ。

氣得神仙迴恩承雨露低。

氣は神仙の迴なるを得、恩は雨露の低れたるを承く。

相門清議衆儒術大名齊。

相門清議衆、儒術大名齊し。

軒冕羅天闕琳瑯識介珪。

軒冕天闕に羅る。琳瑯に介珪を識る。

伶官詩必誦夔樂典猶稽。

伶官詩必ず誦す。夔樂典猶は稽ふ。

健筆凌鸚鵡銛鋒瑩鸞鷁。

健筆鸚鵡を凌ぎ、銛鋒鸞鷁に瑩たり。

友于皆挺拔公望各端倪。

友于皆な挺拔、公望各の端倪あり。

通籍踰青瑣亭衢照紫泥。

通籍青瑣を踰え、亭衢紫泥に照らさる。

靈虬傳夕箭歸馬散霜蹄。

靈虬夕箭を傳へ、歸馬霜蹄散す。

能事聞重譯嘉謨及遠黎。

能事重譯に聞こえ、嘉謨遠黎に及ぶ。

弼諧方一展班序更何躋。

弼諧方に一たび展ぶ。班序更に何くにか躋らむ。

適越空顛躡遊梁竟慘悽。

越に適くも空しく顛躡す。梁に遊ぶも竟に慘悽なり。

謬知終畫虎微分是醜雞。

謬知終に畫虎、微分是れ醜雞。

萍泛無休日桃陰想舊蹊。

萍泛休する日無く、桃陰舊蹊を想ふ。



吹嘘人所羨騰躍事仍睽

吹嘘人の羨む所、騰躍事は睽く。

碧海真難涉青雲不可梯

碧海真に涉り難く、青雲梯す可からず。

願深慙鍛鍊才小辱提攜

願深くして鍛鍊を慙づ。才小にして提攜を辱うす。

檻東哀猿叫枝驚夜鵲棲

檻に東ねられて哀猿叫び、枝に驚きて夜鵲棲む。

幾時陪羽獵應指釣璜溪

幾時か羽獵に陪せむ。應に璜を釣るの溪を指すなるべし。

【字解】

太常、太常卿の官なる張昺をいふ。太常の張昺卿といふ意なり。前已に卷二に贈翰林張四學士昺詩あり、昺は張昺の子にして天寶十三載に出されて盧溪司馬とせられしが年内に召還され太常卿に遷さる。詩は之に贈れるなり。

【一】 方丈

方丈以下の四句は次の神仙の句を言はんがための序なり。

【二】 建康

建康、めじるしをなてる、これは山のそばだてるをいふ、方丈と崑崙とをあはせていふ。

【三】 三韓

馬韓、辰韓、弁韓の三韓、今の朝鮮。

【四】 崑崙

崑崙、山の名、仙人住むと考へられし處。

【五】 建康

めじるしをなてる、これは山のそばだてるをいふ、方丈と崑崙とをあはせていふ。

【六】 崑崙

崑崙、山の名、仙人住むと考へられし處。

【七】 建康

めじるしをなてる、これは山のそばだてるをいふ、方丈と崑崙とをあはせていふ。

【八】 崑崙

崑崙、山の名、仙人住むと考へられし處。

【九】 建康

めじるしをなてる、これは山のそばだてるをいふ、方丈と崑崙とをあはせていふ。

【一〇】 崑崙

崑崙、山の名、仙人住むと考へられし處。

【一一】 建康

めじるしをなてる、これは山のそばだてるをいふ、方丈と崑崙とをあはせていふ。

【一二】 崑崙

崑崙、山の名、仙人住むと考へられし處。

【一三】 建康

めじるしをなてる、これは山のそばだてるをいふ、方丈と崑崙とをあはせていふ。

【一四】 崑崙

崑崙、山の名、仙人住むと考へられし處。

【一五】 建康

めじるしをなてる、これは山のそばだてるをいふ、方丈と崑崙とをあはせていふ。

【一六】 崑崙

崑崙、山の名、仙人住むと考へられし處。

【一七】 建康

めじるしをなてる、これは山のそばだてるをいふ、方丈と崑崙とをあはせていふ。

【一八】 崑崙

崑崙、山の名、仙人住むと考へられし處。

【一九】 建康

めじるしをなてる、これは山のそばだてるをいふ、方丈と崑崙とをあはせていふ。

【二〇】 崑崙

崑崙、山の名、仙人住むと考へられし處。

【二一】 建康

めじるしをなてる、これは山のそばだてるをいふ、方丈と崑崙とをあはせていふ。

【二二】 崑崙

崑崙、山の名、仙人住むと考へられし處。

【二三】 建康

めじるしをなてる、これは山のそばだてるをいふ、方丈と崑崙とをあはせていふ。

ていふ、昺の美質をりしにより之を太常卿に任ず。【三】 伶官、音楽を司る役人。【四】 豐樂、豊は舜の臣にて舜之に命じて樂を掌らしめしこと書經に少伊。【五】 典、つかさどること、書經舜典に豊命、文、典、樂、歌、匏、子、とあり、詩とは古の經典をかんがふるをいふ、昺が太常卿に任ずるについて慎重にせしことをいふ。【六】 體筆、たつしやな文筆、昺の文才をいふ。【七】 體翰、體翰の體翰を即座に作り一字を改めざりしといふ、體とはそれを授筆するをいふ。【八】 新鋒、新鋒、するどき切失き、これは新鋒を劍鋒を以てたとへていふ。【九】 雙、光潔なるさま。【一〇】 雙、雙、鳥のたぐひ、そのあふらば刀劍をみかくに遊せり、こゝはあふらの義を用ふ、鳥をいふに非ず。【一一】 友子、兄弟のこと、書經に孝乎維孝、友子兄弟とあり、友子の二字を切りとりて兄弟の義に用ふ。かかる用法六朝以來屢行はる、昺が兄均も刑部尚書となり琴連せり。【一二】 擬拔、なまからずつとわきんでる。【一三】 公望、三公の位をふんでもよろしとの世間の名望。【一四】 端倪、莊子に少伊、端倪、倪は眸なりと注す、いとぐち、さかひめ、の義、世評がとりとめなきことに非ず歸著すべき箇所あるをいふ。【一五】 通籍、此句より「嘉賓」の句まではさかひのぼりて事蹟をあげ、勳語二句に至りてまた現在に入る、籍とは二尺の竹ふだなり、それに本人の年齡・名字・容貌・風體などかきつけ宮門に掛く、本人宮に入らんとするときはふだと照らしあはせて役入るを許す、このふだを官籍へさしだし置くににより通籍といふ。【一六】 龍青頰、青頰は門の戸に青色を以てくまりがたの模様を染めあるにより名づく、青頰門は多く黃門侍郎のことに用ふるも、こゝは昺が翰林學士として制誥を掌りしときのことなをいふ。【一七】 字喬、易大畜卦の上九に何天之衢乎とあり、こゝは通達の路の義にて宮内のみちをさす。【一八】 照紫泥、天子の制誥は之を封するに紫色の泥を用ひてそのうへに印を捺す、學士は制誥の起草を掌るゆゑ紫泥をも使用す、その紫泥の色が宮路をてらすといふなり。【一九】 雲虬、雲成あるみづち、これは瀛洲の體をなす。【二〇】 夕箭、箭は瀛洲の刺を示すものなり、今の時計の針の如し、夕を報する箭が夕箭なり。【二一】 歸馬、家へとかへるうま。【二二】 散霧、霧は霜をふむひづめ、此句より上四句は翰林學士時代をいふ。【二三】 能事、文章の材能をいふ。【二四】 開重譯、重譯は言葉の通譯をいくたびもかまざる遠方の國をいふ、これ及び次句は盧溪司馬となりしことをいふ。【二五】 嘉賓、よきばかりこと、遠地を治めるについでのはかりことなり。【二六】 遠聲、遠方の人民。【二七】 勳語、書經の「皋陶謨」に謨明勳語の語あり、人君たるものが

古人の徳をふみ行ひ、自己の聰明を隠り廣くして己の政事を輔け整へることとせり。即ち朝議を政事を輔朝和諧することとく、これ人君の事に屬せり。【七】方一展 展とは事をのぶるをいふ、天子をして朝議をなましむることを得るをいふ。【八】班序 班序之序をいふ、位をわかつの順序次第、官位の階級なり。【九】更何願 願は「のぼる」、何は何處にかなり、官位すでに高ければそれ以外のにのぼるべき場所なしといふなり、實際然るには非れども高きことを誇張していへるなり。【一〇】遊越 遊、故事と自己の實際とを常用せり、作者壯年時代に越々今の浙江地方にも豫今(今の河南地方)にも遊歴せり、又故事としては「莊子」に宋人が取市といふ故の冠をかぶりて越にゆきしに越は野蠻國にして斷髮文身の風俗なりしかば冠は無用となりしとの語あり、又司馬相如は病身にて官をやめ豫に寄遊せり。【一一】願願 ひとつくりかへる、つまづく。【一二】懐懐 もがなし。【一三】誰知 知は始が自己を知つてくれしこと、誰とは豫遊の辭、それほどの村器に非るに先方が村器なりとして知つてくれしは誰か知つてくれしなりといへるなり。【一四】畫虎 後漢の馬援の語に畫虎不成反類狗といへり、自己が狗の如く眞の虎となり得ざるをいふ。【一五】微分 分は自分分限などの分、微は細小をいふ、豫遊の辭。【一六】隨離 ヤンカといへる蟲の類、「莊子」に孔子が虱問に向つて自己の道は隨離のごときか、といへりとの語あり、この蟲は葉の中にわき髪外のひろき世界を知らざるものなり、孔子の道の小なるをいへり。【一七】奔沔 うきくさの如く水にうかぶ、漂泊生活をたとへていふ。【一八】枕陰 枕の木のかけ、これは武段桃源の故事を用ひてしかも故郷の事に用ひたり。【一九】舊蹟 むかしながらの小みち。【二〇】吹嘘 いきをふきかける、自己を後援してくれること、此語によれば張伯は作者の人材たることを知りて従來之を推薦してくれたものなることを知るに足れり。【二一】駭駭 馬のをどる如く高くをどりあがる、地位の急進することをいふ。【二二】仍 仍、なほ。【二三】設 そむく、意に思ひしこととは反對の結果となるをいふ。【二四】碧海 碧色の水をたたへしうみ、これは海中に逃れ去るの意なり。【二五】青雲 天上の雲。【二六】梯 はしごをかけてのぼる、これは仙人となりて上天することをいふ。【二七】願 張伯の自己に對する眷顧なり。【二八】羸 羸は足らざるをいふ。【二九】先方をはつかしめる 豫遊の辭、かたじけなくすしと願す。【三〇】提攜 始が己と手をひきあふこと。【三一】櫻東 櫻は「てすり」、東は東韓なり。【三二】投驚 杖上に

て驚くなり。【三三】誰 誰かさまぎ。【三四】無時 何時に同じ。【三五】附羽 漢末の楊雄が故事、雄は成帝の羽儀に附從して羽儀をつくる。【三六】幽相 幽(ま)まに云云するなるべしは推測の辭なり、指はゆびです。【三七】釣瑣 太公望の瑣淡をいふ、周の文王が瑣淡(太公望の釣りを垂れし處)に垂りて太公望を見しとき望は之に答へて望、釣得玉瑣、刺目、飯受命、品位、檢、と、瑣は佩玉なり、釣瑣淡とは瑣を釣りし得たる漢、即ち瑣淡をいふ、此句自己を太公望に比し、自己の釣を獲る處に之を求めて應めよとの意を寓せり、すなはち始が薦を求むるなり。

【題註】太常卿張伯に送つた詩である。製作時は天寶十三載。

【詩意】方丈といふ山は三韓の外にあり、崑崙の山は萬國の西にあつて、天地の廣濶なる間にたかきめじるしをたててをるがしかしさやうな仙山へは實際ゆけることはないので古今ともにそれが果していづれにあるか迷うてゐるのである。しかるに君は天子の姫ごみのお婿ですでに凡俗を遠く離れた神仙の氣を得てをられるし、また天子の雨露の恩澤のそそがかるのをうけてをられる。それから宰相たる君の御家門に向つては天下の清議が多くあつまり君父子が儒術に秀でてをられるといふ點に於ては兩君とも同等であられるのである。軒車に乗り冕を戴く高位高官の人人は御所の門にたくさんつらなつてゐるが、その多くの琳琅ともいふべき玉の中で天子は大珪の玉をしりわけられ君を任用するに至つた。音楽の役人は必ず詩を朗誦するものである。その詩や樂をすべくくる長官(太常卿)を任命するには輕しくはできぬ。舜が妻に音楽を典らしむるに慎重でありしやうに今の天子も古昔の例を十分かんがへて君を任命されたのである。君は文筆がたつしやで編術の鸚鵡賦を即座に作つた以上、

であり、そのするどい筆さきは驚駭のあふらでみがきをかけられかやいてゐる。君の兄弟がたも皆  
 羣衆からづばぬけてをり世評に三公の位に居らしめてもよいといはれるほどの聲望があるがそれもと  
 りとめたところのある評である。これまで君は宮中へ仕籍を通じて青瑣の門をこえて奥まではひり、  
 宮中の道路をば君が掌る紫泥の光を以て照らした。(天子の制誥起草する職に居た。)さうして漏刻が  
 夕の刻をつたへる頃には馬に霜をふむひづめを散らさせながら家畜へもどつた。最近には君の文學の  
 才あることは通譯を重ねる遠方の蠻夷の地(盧溪)までもきこえ、君の政治上のよいはかりことはその  
 遠地の人民にまで及んだ。それがこんどは太常卿になつたので天子をして弼諧をなさしめ奉つる志を  
 やつと一たびのばすことができるやうになつた。かく高い地位についた以上はこの上もはやのぼるべ  
 き官階はないかのやうにみえる。自分は宋人の如く越にいつても空しくつまづき、司馬相如の如く  
 樂に遊んでもものがなしき心地のみした。自分は君から謬つて知遇を受けたが結局眞の虎ではないこ  
 とになつた。自分の如きものの本分は「うんか」蟲ぐらゐのところである。年中浮き草のやうにただよ  
 うて休止する日とはなく、故郷の桃の木にしたのむかしながらのこみちが想はれる。(そこへかへり  
 たい。)前に君から推薦してもらつたときは他人から羨まれたが、はねあがつて出世することはいすか  
 のはしとくひもがつかつた。碧海へでも逃れやうとおもふが海の水はわたることができず、仙人になつて  
 上天したいとおもふが青雲には梯かけてのばれぬ。君の恩顧が深いのに自分の鍛錬の足らぬのははづ

かしい、自分の才が小さいのに君が提攜してくださるのはかたじけない。自分はたとへばてすりにし  
 ばりつけられて猿が叫んでゐる如く、枝の上で驚きながら夜のかささがが木にとまつてゐる如きもの  
 だ。いつになつたら揚雄のやうに天子の羽獵をなされるおともしることができぬのか、それは天子  
 が釣瑣溪(即ち礪溪)を指さして人を求めらるるときであらう。(天子をして礪溪を指さしむるには  
 張洎の力を要するなり。此の末段は主として自己を敍せり。)

上韋左相二十韻

韋左相に上る、二十韻

鳳曆軒轅紀龍飛四十春

鳳曆軒轅紀す。龍飛ぶこと四十春

八荒開壽域一氣轉洪鈞

八荒壽域を開き、一氣洪鈞轉す。

霖雨思賢佐

霖雨賢佐を思ひ、

丹青憶舊臣(原注)公之先人、  
丹青、  
風餘烈、至今稱之、

丹青舊臣を憶ふ。

應圖求駿馬驚代得麒麟一作麒麟

圖に應じて駿馬を求め、驚代麒麟を得たり。

沙汰江河濁調和鼎鼎新

江河の濁れるを沙汰し、鼎鼎の新なるを調和す。

韋賢初相漢范叔已歸秦

韋賢初めて漢に相たり。范叔已に秦に歸る。

盛業今如此傳經固絕倫  
 豫樟深出地滄海潤無津  
 北斗司喉舌東方領搢紳  
 持衡留藻鑑聽履上星辰  
 獨步才超古餘波德照鄰  
 聰明過管輅尺牘倒陳遵  
 豈是池中物由來席上珍  
 廟堂知至理風俗盡還淳  
 才傑俱登用愚蒙但隱淪  
 長卿多病久子夏索居頰  
 回首驅流俗生涯似衆人  
 巫咸不可問鄒魯莫容身  
 感激時將晚蒼茫興有神

盛業今此の如し。經を傳ふる固と絶倫なり。  
 豫樟深く地を出づ。滄海闊くして津無し。  
 北斗喉舌を司り、東方搢紳を領す。  
 持衡藻鑑を留め、聽履星辰に上る。  
 獨歩才古に超え、餘波德鄰を照らす。  
 聰明管輅に過ぎ、尺牘陳遵を倒す。  
 豈に是れ池中の物ならむや。由來席上の珍なり。  
 廟堂至理を知らば、風俗盡く淳に還らむ。  
 才傑俱に登用せらる。愚蒙但隱淪す。  
 長卿多病久しく、子夏索居頰なり。  
 首を回らせば流俗に驅らる。生涯衆人に似たり。  
 巫咸問ふ可からず。鄒魯身を容るる莫し。  
 感激時將に晩からんとす。蒼茫興有神有り。

爲公歌此曲涕淚在衣巾

公の爲めに此曲を歌ふ。涕淚衣巾に在り。

【字解】 左相は官名、韋は姓、名は見素なり、韋見素の初めて相となりしは天寶十三載の秋にあり、左相となりしは至德二載にあり、ただ時中に「四十春」とあり、また絶えて亂を憂ふるの言なきによつて推せば、左相の二字は後より追記せしものならん。【一】 風扇 扇ないう、風を加へたるは扇は太古風鳥氏の掌る所なりしとの傳説に本く、「左傳（昭公十七年）に鄭子の語を引き、鄭子曰、我高祖少皞之立也、風鳥適至、故紀於鳥、爲鳥而鳥名、風鳥氏正也、風鳥が來りしより風鳥氏と稱し、扇を掌る長官となつたといふのである。【二】 軒轅紀 軒轅は黄帝軒轅氏をさす、黄帝は軒轅之丘に居りしにより軒轅を號とすといへり、紀は時のめじるしとせしないう、一句の意は扇は黄帝が用ひはじめたといふほどのことなり。【三】 龍飛 易動卦に飛龍在天とあり、これは玄宗の君臨をさす。【四】 四十春 開元元年よりかぞへて天寶十四載までは四十三年なり、四十といふは成數をあけていふのちながらしむるの世界をひろくをいふ。【五】 一氣 宇宙間の元氣をさす。【六】 轉洪鈞 洪は大なり、鈞は陶器をつくるときくりくりまはして同型をこしらへる器械なり、大鈞といふは造化の力をそれになとへていふなり、句意は宇宙間の元氣が造化の力によりて回轉せらるるをいふ、この起四句は新春の節、天下の太平なるさまにつきのべたり。【七】 雲雨 「書經」の説命篇に若大旱、用汝作霖雨」とあり、賢臣をひでりとよぶのあめとみるなり。【八】 賢佐 かしこき輔佐の意。【九】 丹青 漢の趙充國功徳あるを以て未央宮に畫かる、成帝のとき充國を追美し、楊雄をして圖について頌をつくらしむ。此句其の意を用ふ。丹青は圖畫像をいふ。【一〇】 畫區 畫を或は老に作る。畫區又は老區を仇氏は見素とみたるも作者の原注に、「公之先人」とある以上は是は見素の父海をさすとせざる可らず、海は開元中に彭城郡公に封ぜられ、太原の尹まで至りしといふ、「霖雨」二句は見素を言ひだすための序とみるべし。【一一】 應圖（二句）「漢書・梅福傳に欲以三代之法、取當世之士、新以伯樂之圖、求駿驥於市」とある意を用ふ。圖は伯樂がかいた馬の圖。【一二】 馳馬 すぐれたうま。【一三】 驚代 世を驚かす。【一四】 駑駘 名馬、見素をいふ。【一五】 沙汰 ふるひて

あらひおとす。【二六】江河。濁は水の穢濁をいふ、これは時に左相たりし陳希烈を指めしことをなす。【二七】調和。味をほどよくかげんする。【二八】鼎。鼎は鼎の大なるもの、かな(そのもの)ないふに非ず、その中の料理品をなす。【二九】韋賢。漢の宣帝の時相なり、同姓の故事を用ふ。【三〇】范叔。范曄なり、秦の昭王之相たり。【三一】歸秦。范曄は秦より外國へにげたりしにまた秦へしどる。【三二】盛業。宰相としての業をいふ、上の「范叔」の句をうく。【三三】傳經。韋賢、その子の韋玄成に經學を傳へ且つ相となる、此句上の「韋賢」の句をうく。【三四】絶倫。たぐひなし。【三五】瓊梓。くすの木の種類、大樹なり、蓋し見素の材器の大なるをいふ。【三六】淮海。ひろうみ。【三七】無非。わたりばなし、はてしらすひろきないふ、これは度量の大なるをいふならん。【三八】北平。李固傳に、北平爲天之喉舌、尙書亦爲陛下之喉舌、とあるに本く、人を星座にあててみる考なり、喉舌とは言語を出ししれする職をなすをいふ、韋見素は前に兵部尙書たり、由つて北平のことなひく。【三九】東方。東方朔神。一般に得神をひきあをいふ、東方には限らざることなり、東方といへるは「書經」康王之詔に畢公なる人が「東方諸侯を率ゐる」とあるを借り用ふ、得神とは符を神(大幣、禮服に用ふるもの)にはさむことなり、立派な官吏でもないふ。【四〇】持衡。衡ははかりの秤なり、衡を持つるとは人物の進否を天秤にかけてみるをいふ。これは韋見素が東部侍郎たりしことについていふ、東部は官吏登用を設備する所なり。【四一】高麗。あやあるかがみ、よく醜態を照らすをいふ。【四二】驪山。漢の鄒崇が故事、崇は哀帝の時尙書僕射となる、彼はいつも草の風をひきすつてあるいたから哀帝は我は鄒尙書の履屐を踏るといはれた。驪は天子にききしられること。【四三】上屋。屋版のある高きところまでのぼるをいふ、見素が相位にひきあげられしことをなす。【四四】獨歩。自己だけあゆみすすむ、他人の追隨を許さず。【四五】餘波。のこりの影響。【四六】德照。論語に德必有鄰とあり、こはその德の光が近鄰を照らすをいふ。【四七】會稽。鏡の時代の天文地理等に通じ兼書を善くせし人なり。【四八】尺牘。てがみ、こればてがみの筆迹をいふ。【四九】陳。前漢の尺牘を巧にかきし人。【五〇】池中物。欽聖傳「雲雨、終非池中物、」の語、吳志「周瑜傳、吾嘗劉元海傳に見ゆ。【五一】席上。陳記「德行篇に備有席上之珍、以待聘」とあり、鄭玄の注に「席上之珍」と訓ませたれども、作者が席上珍を池中物と對せしめたるを見るに「席上之珍」と解したるもの如し、席上之珍とは蓋し註疏の如き英玉をなす。【五二】廟堂。朝廷をなす。

【五三】知至理。至理は至治なり、治の字高宗の諱にて唐人は之を避けて理の字を用ふ。至治は至治に至るの術をいふならん、知の字は少しく妥當ならざる處あれども原文のままにみれば「よく知るならば」の意。【五四】淵。今は池潭の世なれどもとの津渡のさまへたちしどる。【五五】才。才は衆にすぐれし人才。【五六】登用。官定としてあげしふる。【五七】風。おほかのもの。(自己をなす)。【五八】議論。かくれしつひ。【五九】長卿。漢の司馬相如が、相如は消渴の疾あり。【六〇】子夏。孔子の門人、禮記「檀弓上に子夏の首を載す、曰く、吾嘗聞而素居、亦已久矣」と。鄭玄の注に「素居」といへり、素居とは朋友とはなればなれになりてなること、長卿。子夏は借りて自ら比す。【六一】流俗。世俗をいふ。【六二】衆人。一般の俗人。【六三】互成。古代の「みこ」なり、人の死生存亡禍福壽夭を知るものなり。【六四】不可問。問ひがたきないふ、問ひても未來はわからぬ故なり。【六五】都。都は孟子の生れし國、魯に孔子の生れし國、孔孟の漂泊を以て自ら比す。【六六】英。英は身を、身をそへいておけぬ。【六七】時。時、時とは人生の晩暮をいふ、我老に近きをいふ。【六八】香花。はつきりせぬ。【六九】異。異は感興なり、蓋しこの詩を賦せんとの念をいふ、神とは不思議の力をなす。【七〇】公。見素をなす。【七一】此曲。この詩篇をなす。【七二】中。はんげち。

【題義】韋左相に上つた詩。製作時は天寶十四載の初春の作ならん。  
 【詩意】むかし黃帝軒轅氏が紀したといふ鳳曆がつづいて今の天子が君臨されてざつと四十回の春が来た。世は太平であつて、八方のはてまで人人長壽を保つ世界が開かれ、造化の大自然はなめらかに宇宙間の元氣を回轉した。我が君(玄宗)は殷の高宗の如く大旱の霖雨にも充つべき賢き輔佐の臣を思はれ、漢の成帝の如く圖書によつて舊臣(あなたの父)を憶はれた。よつて駿馬を輔にかいてその輪にてらして駿馬を求められたが果して世を驚かすやうな驥驥と謂つべきあなたを得られた。これまでの江河の濁れる水をふるひだし(陳希烈を罷め)鼎の中の美味を新しく調和せしめられる(君と相

に任じて) ことにせられた。今や韋賢は初めて漢廷に宰相となつた。范叔は已に秦に歸つてまた宰相になつた。あなたの家は經學を傳へられて他にたぐひなき家すぢであるが今やまた盛なる業をたてるることかくの如くである。あなたの材器度量はたとへば豫樟樹が深く地からぬけてた如くまた大海のはてもない如くである。あなたはこれまで兵部尙書として北斗の如く喉舌をつかさどり、東方の稱神を領率された。また吏部侍郎としては平衡を持して鑑別のありし事述をとどめ、天子の親信を得て履の聲までききわけらるるほどになり星のある高いところまでのぼられた。あなたの獨歩の才は古昔にもこえ、そのなごりの徳の光は近郷までを照してゐる。あなたの聰明な事は管轄よりすぎ、尺牘の書のうまいことは陳遵を壓倒する。あなたはどうして池中にくすばつてゐるしろものであらうか、(必ず雲雨を巻き起して天へのぼる蛟龍である。) 元來が儒者が席上においておくといふ珪璋の如き珍玉である。あなたの如き人が廟堂にあつて天下の治を極點に致す術を知つてをらるるならば天下の風俗は必ずことごとく淳樸にたちもどることであらう。(才傑俱登用、以下は自己についてのお。) かかる世ゆゑ人傑たるものは皆官吏として登用せられるが自分のやうな愚な者はただ世間からかくれて沈淪してゐる。長卿は久しく多病であるし、子夏はしきりと朋友からはなれてくらしてゐる、(自分はその長卿子夏である。) 首を回らして考へてみるに自分は流俗のものに驅りたてられて自己の生涯はまるで凡人同様である。自己の運命如何は巫咸の如き豫言者に問ふこともならず、自己のからだは自己の

生園にさへ容れられない。だんだん老衰の境に近づくのでは心中感激せざるを得ぬ、この感激によりてはつきりとはしないが、或る種の不思議な感興がわきおこるのを覺ゆる。それで此の時を作つてあなたのために此の曲を歌ふと、ただなにとなく流涙が流れあふれてきものや手巾におつるのである。

沙苑行

沙苑行

君不見左輔白沙

君見すや左輔の白沙は白水の如し。

如白水。

繚以周牆百餘里

繚らすに周牆を以てすること百餘里。

龍媒昔是渥洼生

龍媒昔是れ渥洼より生ず。

汗血今稱獻於此

汗血今稱す此より獻せらるる。

苑中騾牝三千匹

苑中の騾牝三千匹、

豐草青青寒不死

豐草青青寒にも死せず。

食之豪健西域無

之を食ひて豪健なること西域にも無し。

每歲攻駒冠邊鄙

毎歲駒を攻むる邊鄙に冠たり。

【字解】(一) 沙苑 牧馬場の名なり。唐の時、同州

馮翊縣(今陝西省同州府大荔縣)の南十二里に置かる。東西八十里、南北三十里、

天寶十三載安祿山を以て戰事を絶べしむ。(二) 左輔

漢の時、京兆尹・左馮翊・右扶風・長安及其の附近の行政區域を三輔と稱したり。

同州は馮翊郡に屬したるを以て之を左輔といふ、左ば

東方を意味す。(三) 白沙 東方沙苑の白き沙をいふ。

王有虎臣司苑門

入門天廐皆雲屯

驪駒一骨獨當御

春秋二時歸至尊

內外馬數將盈億

伏櫪在垆空大存

逸羣絕足信殊傑

倜儻權奇難具論

彙彙埏阜藏奔突

往往坡陀縱超越

角壯翻騰麋鹿遊

浮深簸蕩龍置窟

泉出巨魚長比人

王虎臣有りて苑門を司る。

門に入れば天廐に皆雲のごとく屯る。

驪駒の一骨獨り御に當る。

春秋二時至尊に歸す。

内外馬數將に億に盈たむとす。

伏櫪在垆空しく大に存す。

逸羣絶足信に殊傑、

倜儻權奇具に論じ難し。

彙彙として埏阜に奔突を藏し、

往往坡陀に超越を縱にす。

壯を角しては翻騰麋鹿と遊び、

深きに浮びては簸蕩龍置の窟、

泉に巨魚を出だす長人に比す。

【一】如白水 沙色の白き、

と、水の白きがごとし。此

句、如白水、とよませ白水

を驪名となす説あるも今取

らず。【二】驪、めづらす。

【三】周鼎、ぐるりの土鼎。

【四】龍駒、龍性、漢書武帝

紀によれば、武帝の元鼎四

年（龍泉志には元鼎三年）に

馬、涇水水中に生ず、因つて

天馬の歌を作る。又太初四

年にも作る。涇水は水の名、

沙州（今の懷遠）の境にあ

り、龍駒は天馬をいふ。天馬

歌に天馬、龍之驥とみゆ、

龍駒の注にいふ、天馬は神

龍の類なり、今天馬已に來

りたるは此の龍の必ず來る

の數なり、と。天馬を以て

丹砂作尾黃金鱗

豈知異物同精氣

雖未成龍亦有神

丹砂を尾と作し黃金を鱗とす。

豈知らむや物を異にするも精氣を同じくす。

未だ龍を成さずと雖も亦た神有り。

【一】西戎傳に大宛國に善馬多くその馬は血を汗にすといへり、こは大宛の天馬の如き名馬をさす。【二】

なり、此とはこの沙苑の牧場をさす。【三】苑中、苑は沙苑。【四】龍駒、驪馬及び牝馬、驪とは馬の身長七尺なるものをいふ。

【五】豐草、しげつたぐさ。【六】寒不死、秋冬の氣候さむきとさにも枯死せず。【七】食之、之は草をさす、苑中の馬がしげつ

た草をたべる。【八】家健、馬のつよきこと。【九】西戎、大宛の如き西方の國。【一〇】攻駒、あらしこまを攻めつけて乗りなら

すこと、周禮の夏官廋人職に見えたり。【一一】冠、第一なるをいふ。【一二】邊郡、かたあなかの地方、牧場は處處にあるを以てい

ふ。【一三】王、天子。【一四】虎臣、勇武なる臣。【一五】天廐、天子のおうまや。【一六】雲駒、雲のごとくあつまる、多きなをい

ふ。【一七】驪駒、龍駒は驪なり、馬の頸すも之に似たるを以て名くと。【一八】一骨、一匹の駿馬をいふ。【一九】周鼎、御は天子のお用

ひになることなをいふ、當るとはかなふをいふ。【二〇】伏櫪、櫪はうまやのふみ板、櫪の背探の時に老驥伏櫪とみゆ、櫪に伏すとは老馬をい

ふ。【二一】逸羣、羣の數にみちる。【二二】在野、野はうまやのふみ板、櫪の背探の時に老驥伏櫪とみゆ、櫪に伏すとは老馬をい

ふ。【二三】在野、邑外を郊、郊外を野、野外を林、林外を垆といふとぞ、垆は國都をばなれたすつとの野外をいふ。「詩經」の「關」の時に

關關牡馬、在野之野、とあり。在野の二字之に本く、こは野外にある馬をいふ。【二四】空大存、空は「いたづらに」の意、大存と

は多數が存在すること、數のみ多くして數を乏しきをいふ。【二五】絶足、とびわけてはやく

走る足を有する馬。【二六】信、まことに。【二七】殊傑、特別にすぐれたもの。【二八】倜儻、權奇、漢の木一天馬の歌に、志倜儻、

精權奇の句あり、詩經之に本く、倜儻は倜儻なり、卓異の貌、權奇は奇蹟非常の意、竝に馬の神氣の非凡卓絶せるさまをいふ、「逸羣」

以下は苑中の馬についていふ。【二九】具論、一一くはしくとく。【三〇】彙彙、多くつながらるさま。【三一】埏阜、阜も埏も同地をい

ふ。【三】 漢、かくす、たくはへおく。【四】 奔突、馬のつきすんでほしること。【五】 峻陀、地形のなだらかに起伏せるま  
 だ。【六】 巖、はなつ、ほしいままにする。【七】 超越、馬の物をなどりこえること。【八】 角壯、角とは比べふふこと、角壯と  
 はどちらが壯勇なるかの競争をすること。【九】 龍騰、はねあがる。【一〇】 粟崖、粟（タジカ）崖ともにあそぶ。【一一】 奔  
 深、深は深き水をいふ。【一二】 龍窟、あふり、うごかす。【一三】 龍窟、おほがめ。【一四】 窟、いはや、あな。【一五】 泉、潤なり、  
 唐の高祖の跡を避けて唐人は潤を泉と書す。【一六】 巨魚、大魚。【一七】 長、みのたけ。【一八】 比人、人にちかし。【一九】 丹砂、  
 朱色なるをいふ。【二〇】 黄金、黄金を鑄と作すの意、黄色のうるこ。【二一】 異物、馬と魚と同物に非るをいふ。【二二】 同精氣、  
 精氣はその物を成す所の根本たる元氣をいふ、この元氣に於ては馬も魚も同様なり。【二三】 有神、不可思議靈妙の力あり。この末  
 段の神魚を持ちだせしについては、或は一時の異を記したるものとし、或は神魚を以て嶺山の反意あるに比していへるものとし、定  
 説なし。余は魚を借りて龍馬の神駿なることを形容せしものと考ふ。天馬歌に今安匹、龍爲友とあるをおもひあはずべし。

【題義】 沙苑の牧場のことにより感じて作れる詩なり。製作時は天寶十三載の作。

【詩意】 諸君見たまはざるや、長安の東方の郡部にあたる沙苑の白き沙は白水の如く白く、その區域  
 を土塼を以てめぐらすこと百里にあまつてゐる。昔、漢の世に龍媒と稱せられた天馬が渾注の川から  
 生じたといはれてゐるが吾が唐の今では汗血の名馬がこの沙苑の牧場から獻上せられるといはれてゐ  
 る。苑中では驥（七尺の馬）や牝が三千四もをり、年中草が青青と上げつて寒くなつても枯れずにあ  
 る。馬はその草をたべてその豪健なること西域の地方にも無く、毎年あらつばい駒を乗りならすこと  
 はどのぬなかの地にもまさつてをる。吾が天子には勇武虎の如き臣があつてこの苑の門をつかさど  
 つてゐる。門からはひればお殿に馬が雲のあつまつたやうにたくさんゐる。そのなかで驥といふべ

き一の駝骨だけが御用の馬となる。それを春と秋との二時期にここから天子の方へおとどけいたす。  
 凡そ内外の馬の數は儘にもみたんとしてゐるが、體に伏してゐる老馬だの、野外にはねてゐる凡馬だ  
 のは、いたづらにその多くの數のみが存在してゐるので實質のすぐれたものはない。がこの馬は羣  
 をぬきんで、づぬけたはや足で、ほんたうに特別の傑物であり、その神氣の卓絶してゐることとて  
 一一いふことはむづかしい。彼等（苑中の馬）のさまをみると、あるひは繁榮とつながつて高地のか  
 げにその奔突せるすがたをかくしたり、ときどきはなだらかな起伏地にきまみにをどりこえをやつて  
 ゐる。又、たがひに勇壯なることの競争をしてははねあがつて塵塵らとあそんだり、深い水に浮いて  
 は脚で大龜のすんでゐる窟をあふりたりたりしてゐる。この苑内の深淵から大きな魚が出たがその  
 身長は人間ほどある。尾は丹砂の如くあかく鱗は黄金の如くきいろである。なせかはわからぬが馬と  
 魚とは物は別だがそのもつてゐる精氣は同じことであつて、この魚は龍になりきつたものではないが  
 龍のやうな靈力をもつてをる。苑内の魚は魚でさへかく尋常ならざるゆゑ、その馬は最も神駿にして  
 他所の馬と同じからず、との意ならんか。

橋陵詩三十韻因呈縣内諸官

橋陵の詩、三十韻、因つて縣内の諸官に呈す



先帝昔晏駕茲山朝百靈  
崇岡擁象設沃野開天庭  
卽事壯重險論功超五丁  
坡陀因厚地卻略羅峻屏  
雲闕虛冉冉松風肅泠泠  
石門霜露白玉殿莓苔青  
宮女晚知曙祠官朝見星  
空梁簇畫戟陰井敲銅瓶  
中使日相繼惟王心不寧  
豈徒郵備享尙謂求無形  
孝理敦國政神凝推道經  
瑞芝產廟柱好鳥鳴巖局  
高嶽前嶺峯洪河左滙濼

先帝昔晏駕したまふ。茲山百靈を朝せしむ。  
崇岡象設を擁し、沃野天庭を開く。  
事に即きて重險壯なり。功を論すれば五丁に超ゆ。  
坡陀として厚地に因り、卻略峻屏羅る。  
雲闕虚にして冉冉たり。松風肅として泠泠たり。  
石門霜露白く、玉殿莓苔青し。  
宮女晚に曙を知り、祠官朝に星を見る。  
空梁畫戟簇る。陰井銅瓶を敲く。  
中使日に相繼ぐ。惟れ王心寧んせず。  
豈に徒備享を郵ふるのみならむや。尙謂ふ無形に求めむと。  
孝理國政を敦くし、神凝道經を推す。  
瑞芝廟柱に産し、好鳥巖局に鳴く。  
高嶽前に嶺峯たり。洪河左に滙濼たり。

金城蕃峻趾沙苑廻汀  
永與奧區固川原紛眇冥  
居然赤縣立臺榭爭岩峯  
官屬果稱是聲華真可聽  
王劉美竹潤裴李春蘭馨  
鄭氏才振古啖侯筆不停  
遺詞必中律利物常發硯  
綺繡相展轉琳琅愈青熒  
側聞魯恭化秉德崔瑗銘  
太史候鳧影王喬隨鶴翎  
朝儀限霄漢客思廻林垌  
轡軻辭下杜飄飄凌濁溼  
諸生舊短褐旅泛一浮萍

金城峻趾を蕃へ、沙苑廻汀交る。  
永く奥區と固し。川原紛として眇冥たり。  
居然赤縣立つ。臺榭争ひて岩峯たり。  
官屬果して是に稱ふ。聲華真に聽く可し。  
王劉は美竹潤ひ、裴李は春蘭馨し。  
鄭氏才古に振ふ。啖侯筆停らず。  
詞を遣れば必ず律に中り、利物常に硯より發す。  
綺繡相展轉す。琳琅愈々青熒たり。  
側に聞く魯恭の化、德を秉る崔瑗の銘。  
太史鳧影を候ふ。王喬鶴翎に隨ふ。  
朝儀霄漢に限らる。客思林垌を廻る。  
轡軻下杜を辭し、飄飄濁溼を凌ぐ。  
諸生舊短褐、旅泛一浮萍。

荒歲兒女瘦暮途涕泗零

荒歲兒女瘦せたり。暮途涕泗零つ。

主人念老馬麻署容秋螢

主人老馬を念ひ、麻署に秋螢を容る。

流寓理豈愜窮愁醉不醒

流寓理豈に愜はむや、窮愁酔うて醒めず。

何當擺俗累浩蕩乘滄溟

何か當に俗累を擺うて、浩蕩滄溟に乗すべき。

【字解】【一】 漢 唐の睿宗の陵なり、睿宗、開元三年六月崩じ、翌四年十月之を橋陵に葬る、橋陵は陝西省同州府蒲城縣の西北

三十里なる豐山にあり、陵置かれてより蒲城縣の名を奉先縣と改め、京兆府の管轄とし、官員の制も赤縣と同じくせり。赤縣とは縣の最高級のものをいふ、唐の縣には赤、畿、望、緊、上、中、下の七等あり、京都の治する所を赤縣とし、京の特色を畿縣とし、其

他は戸口の多少、實地の美惡を以て差をなす。奉先縣は陵を置かれたため特別に赤縣の特遇となり、官員もそれにつれて増し且つ優

秀なる人人を置かれしとみゆるなり。【二】 縣内諸官 縣に奉職する人人、即ち詩中に見えたる王劉李鄭等なり。【三】 先帝 睿宗をいふ。【四】 昔 開元三年六月をいふ。【五】 晏駕 晏は「おそき」なり、駕とは馬を車につけること、車駕の出のおそきが晏駕なり、天子崩御せらるれば車駕は出づることなし、然れども臣子の情として今しばしばまたば車駕の出づることしやあらんと心ま

ちにする、いまちきには出でぬがあとになつたら出るならんとする心から、天子崩御のことをなまして晏駕といふ。【六】 豐山 豐山

なます。【七】 朝 朝は拜禮にてむくをいふ。【八】 百頭 もるもるの神靈。【九】 崇岡 たかきなか。【一〇】 地 だきかかへる、

とりかこむ種子をいふ。【一一】 泉 泉は「覺解」の相類にみゆ、泉は泉とて説くもなり、其人生前の靈靈にかたどりにて泉を造

り説くをいふ、こは陵所の泉をさす、石馬の頭をさすといへる解は余之を取らず。【一二】 沃野 農作のよくできる平野。【一三】 天

庭 陵城内の殿庭、壇字の高きまましていふ。【一四】 前事 事について、事とはこの山陵を起すことをさす。【一五】 重

重 陵重のかまなりたる地形。【一六】 靈功 功とはここに陵をおくに至れる功をいふ。【一七】 五丁 五人の大力士なり。秦の惠王

鐵牛五頭を作り許りてこの牛一日に三斗の金を糞すと稱す、蜀侯之なき五丁をして山を開き秦に入りて牛を取らしむ、秦蜀間の路

之より通すと。又蜀に五丁ありて一王の死すること長き三丈重き千鈞の大石を立てて墓志となせしといふ。又秦王が蜀王に美女を

獻じたるに蜀王は五丁を遣はして女を迎へしむ、一大蛇の山の穴の中に入るを見て五丁共に蛇を引く、山之がために崩れ、秦の五女

はみな山にのぼり化して石となりしといふ、こは五丁の開山のことを用ふ。【一八】 坡陀 地形高低起伏のさま。【一九】 厚地 大

地をいふ。【二〇】 御略 あとしりのこと、こは山勢の峻後にひかへたるさまをいふ。【二一】 羅 づらなる。【二二】 披屏 さか

しき屏風。【二三】 雲間 間は左右の小門、これは陵の外方に近き門についていふならん、雲とは地勢高きにより雲中にあるをいふ。

【二四】 虛 なかのがらんどこと、壮大なるさま。【二五】 冉冉 漸漸なり、こは漸漸に高くなるさまをいふならん。【二六】 幽

幽 しづかなるをいふ。【二七】 神神 水のさらさらなるおとなり、風の音をそれに比す。【二八】 石門 これは陵墓に近きものをい

ふならん。【二九】 霜露白 秋なるをいふ。【三〇】 玉殿 陵所の寢殿なるべし。【三一】 華若 け。【三二】 宮女 陵に奉仕する女

をいふ。【三三】 曉知曙、朝見星 この句は謝靈運が詩の早聞夕聞念、曉見朝日歌とある句を學びしものならんといへり、謝が詩は

山中の鳥ふかく朝曉をとりしがへしやうの心地なるさまをいへるなり、今此時も同じ、曉かとおもへるにそれが曙なるを知り、朝か

とおもへるに夕星を見るといふなり。曉知曙の曉を曉に作れる本あり、そのときは曉知曙も朝見星も共に朝のことにて重れていひし

ことになる。【三四】 兩宮 陵の祭祀をつかさどる官。【三五】 空殿 だれもからぬ御屋のほり。【三六】 無畫戟 彩色を施した柵の

ほこがむらがりあつまる、これは夕の轉飾を殿にするなり、「兩宮」の句を承く。【三七】 陰井 蓋し北の位置にある井ならん。【三八】

翠銅瓶 あかがれのつるべをたたく、朝、水を汲むをいふ、けだし之を神靈に供するなり、「宮女」の句を承く。【三九】 中使 祭祀

に關して宮中よりのおつかひ。【四〇】 惟王 惟は辭なり、王は天子を安んずる。【四一】 幸 やすんずる、おちつくこと。【四二】

使 いたづらに、ただ。【四三】 脚 うれふる、心にかける。【四四】 備享 手おちなき獻供をいふ、幸はおそなへする飲饌のこと、

備とはその物缺くる所なくそなはりたるをいふ。【四五】 尙助 その上にも心でおかかんがへになる。【四六】 求無形 睿宗の神靈を無

形の見えざる處に求められんとする。【四七】 孝理 孝治なり、孝道を本として天下を治むること。【四八】 敦國政 敦は厚なり、國

家の政治を敦厚ならしめる。【一〇】神凝 志を一すぢにして諸方へくばれば精神ただ道の一筋にこりかたまる。【一〇】推道 老子の道徳經の主旨を推尊する、舊注に玄宗が天寶十四載に道徳經の注を天下に頒たれしことを引けるも十三載の詩に十四載のことばあてはまらざれば、此句はただ平生の推尊をいふものとみるべし。【二〇】瑞芝 芝といふめでたき草。【三〇】産蘭社、このおたまやの社にはえる。【四〇】好鳥 香いよきとり。【五〇】嵐岡 いはほのそば近くにある、「くわんぬき」、これはくわんぬきのみないふに非ずしてひろく山殿の門戸をさす。【六〇】高城 たかきだけ、華山をさす。【七〇】前 南方をいふ、奉先縣より見れば華山は南にあたる。【八〇】神岸 山のそびゆる貌。【九〇】洗河 大なる河、黄河をさす。【一〇〇】左 東方をいふ。【一一〇】灤 灤水のめぐる貌。【一二〇】金城 堅固なる城、これは奉先縣の東五十里にある秦時の長城をさす。【一三〇】峽 峽、けはしきどた。【一四〇】沙苑 前の「沙苑行」に注せり。【一五〇】交 交錯する如く見ゆるをいふならん。【一六〇】廻汀 めぐるみきば。【一七〇】異 險阻なる地域をいふ、秦國の西都賦に長安のことをのべて防禦之阻、則天地之隄防、といへり、隄は深險なるをいふ。【一八〇】川原 川及び原野。【一九〇】粉 草木などのみだれたつをいふ。【二〇〇】時笑 ばるかにくらし。【二一〇】居然 そのまま。【二二〇】赤驥立 赤驥は想下に注せり、立とは新に設置せしをいふ。【二三〇】臺 臺は高臺、樹は臺上に木を植ゑたるものをいふ、これは縣の建築庭園についていへるならん。【二四〇】指 たかき貌。「永興」以下の四句は句を隔てて對なせり。【二五〇】官屬 縣内諸官をいふ。【二六〇】稱是 稱は「かなふ」、是とは赤驥となれる事實をさす、舊注には「其の駉に稱ふ」とけり。【二七〇】聲華 名譽のうつくしきこと。【二八〇】可 可、耳を傾けてきくべしとある。【二九〇】王・劉・裴・李・董・張 その人の名はみな知るべからず、曠は春秋の學にて名ある賢助ならんかといへり。【三〇〇】美竹 竹は東南の美材と稱せらる、王・劉は或は南人か、劉とは光澤うるほひあるをいふ。【三一〇】春園 文辭の韻致あるをたとへしならん。【三二〇】振古 今古にふるふをいふ。【三三〇】曠侯 曠侯は君のごとく敬稱なり。【三四〇】聲不停 聲は「とどむる」、不停はとどみなく書きつづけるをいふ。【三五〇】遺詞 文辭を使ひだすこと。【三六〇】中律 音律にあたる、調子よろし。【三七〇】利物 よくされるもの、刀剣をいふ。【三八〇】豐明 「莊子」の刀刃若新、新銳は於鞘に本く。【三九〇】疑 疑ふなり、疑とはそこらもちだすこと。【四〇〇】特 文章のあやうつくしきこと。【四一〇】展 疑ふらくは光彩のうつくし

まをいふならん。【四二〇】琳瑯 美玉、これも文辭をほめていふ。【四三〇】青燐 青くして光あり。【四四〇】側聞 ほのかにきくわきからきく。【四五〇】魯悲化 魯悲は後漢の人、中牟縣の令となり、德化を以て民を治め刑罰を用ひざりしといへり。【四六〇】衆 衆をさす、自己の徳を保持すること。【四七〇】遺履 後漢の崔瑗の令となり座右銘を作る、句意は諸官がこの銘の如くに自徳を守るをいふ。【四八〇】太史 太史公の事、後漢の王喬が故事、喬、葉縣の令となり毎月一日と十五日とに都へ朝す、天子太史をして之をうかがはしむるに二匹の鳥あり飛び来るといふ、喬にて之をとらへみるに一對の鳥にして前年書て賜ひし所のものなりしと。【四九〇】王喬 王喬が故事、王子喬は周の靈王の太子晉なり、道人浮丘公に従つて仙を學び、七月七日に白鶴に乗じて緱氏の山頂にとどまる、ついに手を舉げて世人にいとまをつけてたち去れり、朝ば「朝霞」、太史二句は諸君に仙骨あるをいふ。【五〇〇】朝霞 朝霞の儀式。【五一〇】眼 眼、音はあなぞら、漢ばあまのがは、眼とは阻止せらるるをいふ、無官なれば朝儀とは縁故なきをいふ。【五二〇】容思 たびのおしひ。【五三〇】林 林、野外をいふ、こは都會の地に對してゐなかの僻遠の地、即ち奉先地方をさす。【五四〇】鶴 不遇の貌。【五五〇】下社 社殿の下の衆、作者の居は社殿に近き少陵にあり、下社といふは實は少陵の附近をいふ。【五六〇】眞 眞、身のただよへるさま。【五七〇】設 水をわたること。【五八〇】潤 潤、水をばにこれるにより潤といふ、長安より奉先へ赴くには北して渭水をわたり、更に東北して渭水をわたりてすむなり。【五九〇】諸生 書生をいふ、自己をさす。【六〇〇】書短 書は粗末な毛織物、舊來のままの短い裾。【六一〇】旅 旅、旅路にうかぶ。【六二〇】浮 浮、浮へるうきくさ、身境をたとへていふ。【六三〇】竟 不作のとしがら。【六四〇】兒 兒を瘦、食物足らず、榮養不良となるなり。【六五〇】暮 暮、晩年。【六六〇】湯 湯、湯を沸かす、湯は鼻水、潤はなみだ、零は落つる。【六七〇】主人 奉先縣の縣令をいふ、多分楊氏ならん。【六八〇】老馬 老馬とは自己を比す、「尊詩外傳」に田子方といふもの道に老馬を見て、少きときばたらき老いて棄てらるるは氣の毒なりとて之を顧うたりとの話みゆ。【六九〇】摩 摩、君の字或は字に作る、縣の役所の建物をいふ、此句によれば作者は一時役所の一部に寓居せしなり。【七〇〇】秋 秋、秋聲を存るとは聲そのものをいれるに非ず、秋聲を伴とし讀書するもの（自己）をいれるをいふ、晉の車胤の光にて書を讀みしといふ。【七一〇】沈 沈、他地からうつつて来て寓居する。【七二〇】理 理、理は意のかなふこと、理とは「道理に於て」の意ならん。【七三〇】戰 戰、戦國

趙の虞卿が故事、彼は貧窮にして悉の餘り書を著はしたりといふ。【三】 醉不醒 常に醉裡にあるをいふ、醉によつて態をまぎらすためなり。【二】 何當 何は「何の時か」、當の字は下の句へまでかかる。【三】 權 ばらふ、ふるひおとす。【三】 俗業 俗事のわづらひ。【三】 浩蕩 大なる貌。【三】 滄溟 大海をいふ。

【題義】 橋陵のことをのべ連關して縣内の諸友に寄せ、自己の感慨を敘したり。製作時は天寶十三載秋の作なるべし。此時歳がら不作にして長安の物價暴騰、作者因つて長安を去り奉先縣の縣令楊氏（名未詳）をたよりて赴きしとみゆ。詩中に安祿山のことを言はず、荒歲兒女瘦、麻累容秋盤、の語あれば十三載の秋なるを推すべし。

【詩意】 さきのみかど（睿宗皇帝）がおかくれになりしときこの山にはもろもろの神靈がみな拜靈にまかりでた。この地勢はたかい岡が寢殿をだきかかへてをり、天の庭ともいふべき高き殿廷を沃野にひらかれた。ここに御陵を起された點をみるとその險阻の形勢は壯なるものである、ここを開かれた功は五丁が山を開いたよりもこえてゐる。陵の在る所は高低起伏せる大地に因り、その背後にはさうしい屏風の如き山峰がならんでゐる。雲の居る峻關がいかにも大きくうつろにして、しだいに山の方へ高まれるやうにみゆる。陵道には松風がさらさらと音をたててゐる。さらに陵墓に近づけば石の門には霜や露が白く横はり、玉殿には青苔が庭にみちてゐる。この山陵に奉仕してゐるものは所からの奥ふかいため時刻をとりちがへるほどで、宮女は曉かとおもへるに實は曙であることを知り、祠官は

朝かとおもへるに實は夕の星を見るといふありさまである。夕になればだれも人なき室ではあるが晝戟がむらがつてきて警衛をする、曙になれば北の井では銅のつるべをたたき水を汲みて神靈にささげる。宮中からは祭禮のことについてお使が一日の中にもひきつづいて來り、天子の御心ではこれでも缺點がありはせぬかと不安におもはれてゐる。その御胸中ではいたづらに獻供物に手落ちがないかなどと御心配になるばかりではなく、父君（睿宗）の神靈を無形に求めて之におつかへしたいとおぼしめされてゐるのである。この孝道を基として國を治めらるる御主旨は國家の政治をも敦厚にならしめられるし、また平日つねに神思を凝らして老子の道を御推尊おそばされてゐる。その感應でもあるか、この御廟の柱にめでたい芝草が生えたり、音いろよき鳥が山殿の門戸のあたりに鳴いてゐる。高い華山は前面南方に聳えてゐるし、大なる黄河は左東方にうねりつつある。更に東には秦の長城が峻しき基をのこしてをるし、北の方では沙苑あたりに回曲した沙汀が交錯してみえる。この陵所は永久に他の險阻な地域とともに堅固であつて川といひ原野といひ紛然はるかにくらくみえる。かかる場所だからそのままここに赤縣が設置せられ、縣衙に屬する臺榭の類がまた競うて高く立つやうになつた。赤縣の新設とともに諸官員も之に相當したものが置かれ、それらの人人の光輝ある名譽はまことに耳を傾けてきくねうちがある。王、劉二君はその材質たとへば美竹の秀潤なるが如く、裴、李の二君は詞韻春の蘭のかんばしきに似たり、鄭氏はその才今のみならず古にさかのぼりてまでもふ

るひ、噴君は筆によどみあることなし、諸君が文辭を用ふればそれは必ず音律にあたり、詞鋒するどきことはとぎたての刃の如し。綺繡のあやつねにきらめきうごき、琳琅の玉のひかりいよいよかがやけり。きけば人民に昇しては魯恭の徳化の如きものあり、自己の守る徳は崔叢が銘に恥ぢざるものあり、その京師に朝するや王喬が躡屐をとばせしが如く、塵俗をはなるるや王子喬が白鶴に乗じて去れるに近きものがある。』自分の如き無官のものは朝廷の儀式などとは天上界のことで無關係であり、ただ旅客としてのものおもひが田舎の野外を駆けめぐる。それで不遇の境涯ながら下杜の地をたち去り、ふはふはただよひながら涇水をわたつてきた。諸生の身分で舊來からの短い毛織物を著、一のうきぐさの如くただようてゐる。ことしは凶年で子供等は飢餓のためやせはそつてゐる、自分はこれをみてはこの晩年にあたつてなみだがこぼれおつるばかりである。幸にもこの主人たる縣令君は老馬のやうな自分のことを念うて役所の一部の建物にこの讀書者を容れてくれた。さすがの身では道理上どうして自分の意に適したことはかりあらうや、自分は窮愁のあまり常に酒に酔うてさめずにある。(それでやつと燃めてをる。)いつになつたら俗事の煩累をはらひのけてひろびろとした大海の波に乗じて仙山へでも飛び去ることができのだからうか。

送蔡希魯都尉還隴右因寄高三十五書記 (原注) 時哥舒入奏勅

蔡子先歸

蔡希魯都尉が隴右に還るを送り、因つて高三十五書記に寄す

蔡子勇成辭、彎弓西射胡。

蔡子勇辭を成す。弓を彎きて西胡を射る。

健兒寧關死、壯士恥爲儒。

健兒寧ろ關つて死せむ。壯士儒爲るを恥づ。

官是先鋒得才緣、挑戰須

官は是れ先鋒にて得、才は挑戰に緣りて須つ。

身輕一鳥過、槍急萬人呼。

身輕くして一鳥過ぎ、槍急にして萬人呼ぶ。

雲幕隨開府、春城赴上都。

雲幕開府に隨ひ、春城上都に赴く。

馬頭金匱匣、駝背錦模糊。

馬頭金匱匣たり。駝背錦模糊たり。

咫尺雪山路、歸飛青海隅。

咫尺雪山の路。歸り飛ぶ青海の隅。

上公猶龍錫、突將且前驅。

上公猶龍錫、突將且つ前驅す。

漢使黃河遠、涼州白麥枯。

漢使黃河遠く、涼州白麥枯る。

因君問消息、好在阮元瑜。

君に因りて消息を問ふ、好在なりや阮元瑜。

【字解】(一) 蔡希魯、人名。(二) 都尉、唐の時諸府には折衝都尉、左右果毅都尉あり、これは其のいつれかなるべし。(三) 龍錫、

送蔡希魯都尉還隴右因寄高三十五書記

右 漢の名、今の甘肅地方はなり、哥舒翰之が節度使にして甘肅省四州府に駐在す。【高三十五書記】高適なり、適は已に翰が幕僚たり。【曹】哥舒翰。【入奏】京師（長安）に入り天子に軍務の事を上奏するなり、事は天寶十四載春にあり。【七】翰強ひて食する。【八】蔡希魯をいふ。【九】先鋒、この時哥舒翰途中にて病を得しため京師に留まる、因つて希魯をして先づ隨右へかへらしめしなり。【十】勇成鋒、勇壯なことをするが平生の習癖となつてゐる。【十一】弩弓、弓をひく。【十二】西射胡胡はえびす、吐蕃をさす。【十三】健兒、壯士のこと、軍人たるをいふ。【十四】軍門死、いつそたかうて死ぬのがましぢや。【十五】壯士、上の健兒と同じ、軍人たるをいふ。【十六】取貨儲、儲者になるはちとむしふ。【十七】官、都尉の官をさす。【十八】先鋒得、戰場で先鋒をつとめたために得たのである。【十九】才、或は村に作る、材器、伎倆をいふ。【二十】敵、よる。【二十一】挑、敵に對して戦を求むること、挑は「いどむ」。【二十二】須、まつ、そのいりようなるをいふ。【二十三】身、身體のはたらき強健なり。【二十四】一馬過、一つの馬が飛びすぎるやう。【二十五】拾金、金をにつきたす。【二十六】萬人呼、多くの人がそのわざに驚きまげぶなり。【二十七】雲幕、この雲幕は雲の横ばつてゐる幕といふことならん、幕府の幕をいふ、軍中にては幕を以て府となす。【二十八】隴門府、隴門は隴州節度使の位、哥舒翰をさす。【二十九】春城、春時の長安城。【三十】上都、長安をさす。【三十一】金匠匠、匠匠はぐるりと圍む觀なり、金とは黄金でかざりし鎧（馬面をからめるつな）をいふ。【三十二】駝背、らくだのせなか。哥舒翰は朝近へ使をだすときいつも白駝に乗りて一日に五百里を馳せしめしといふ。【三十三】錦旗、旗はおほろなるさま、錦とは錦にてつくりし馬の旗かけをいふ。【三十四】一尺、一尺は八寸、尺は一尺、一尺とはまちかとみなすをいふ。【三十五】雪山、天山をいふ、此句蓋し班超傳贊の祖步遺言、一尺尺餘の句意を用ふ。隴右はその實は遠きも遠からずとかんがへてゐるといふなり、一説に雪山は武威の南にある山をいふと、其説によれば尺尺とは實際に近きことをいふなり。【三十六】時、飛とははやくかへるをいふ。【三十七】青海、青海は隴右の近西にあり、隅はかたすみ。青を成は西に作る。【三十八】上公、公の上位なるもの、哥舒翰は開府の待遇をうくる故之上公といへり。【三十九】詩、詩。【四十】元、元とは天子より恩寵を蒙りて物をたまはるをいふ、實は病のため辭留せるをかく辭をかざりていへるなり。【四十一】且、且は「いまだに」の意。【四十二】榮、榮は榮を能くする將、蔡都尉をさす。【四十三】且、且は「しばらく」。【四十四】前、前は「さき」をさす。【四十五】黃、黃の雲幕武帝のために西域に使せり、それらをおもひあはせてかくいふ、蔡が唐の天子の使となりてゆくをいふ。【四十六】黃河、隴右は黃河の上流にあり。【四十七】涼州、甘肅省涼州府武威縣治、即ち河西節度使の駐在所なり。【四十八】白、白、白暮は涼州地方の產物、用ひて酒を醸すといへり、結とは成熟して稗（アヲ）の枯死するをいふ、けだし夏となるをいふ。【四十九】君、蔡をさす。【五十】消息、たより。【五十一】野、野は「おぼろ」にて「さるか」。【五十二】元、元とは「魏の版籍が父項、字は元瑜、曹叡の文章をよくす、作者つれに項を以て高適にたとへてよべり、他詩にも多く例あり。

【題義】隴右の節度使たる哥舒翰の部下なる都尉の官の蔡希魯が隴右へかへるのを送り、ついでに已に隴右に居る親友高適に寄する詩なり。製作時は天寶十四載春の作なるべし。

【詩意】蔡希魯は平生勇壯なことをするが習癖になつてゐて弓をひいて西の方胡のえびすを射る。彼は健兒であり壯士であつて、むしろたかかつて死ぬのをよしとするので儒者などになることを恥とかんがへてゐる。いま都尉の官であるがそれは戰陣で先鋒となつてはたらいたために得たものである。敵に對しては戦を挑むといふ大切なことがあるから彼の如き才能は大にいりようである。彼の身體の輕捷なことは一の鳥のすぐるが如くであり、彼が槍を急につきだす時には萬人が驚き呼ばはる。彼は雲幕に於て哥舒開府に隨つてゐたが長安の春の城に赴くことになつた。そのときは馬頭には黄金の絡頭（おもがり）を匠匠とめぐらし、駝駝の背には錦の帕（はらかけ）を縹糊とたれて來た。こんどはまた任地にかへることになつたのだが、彼の意氣では遠い雪山の路でも咫尺であるかのやうにかんがへて、青海のかたすみへとぶがごとく歸つてゆく。主人開府公はまだ天子の恩寵めでたくくださりも

のなどありておひきとめになつてをるので、馳突の將たる彼がとにかく前驅となつてひとあしききにゆくのである。漢の天子の使者ともいふべきおまへは遠く黄河の奥までゆくが、涼州のあたりはその頃は白麥が熟して夏になつてゐるのだらう。おまへがゆくついでに自分は友人の消息をたづねる、あの阮元瑜(高適)は達者であるのかどうか、と。

醉歌行 〔原注〕別從姪勳落第歸 醉歌行

陸機二十作文賦。陸機二十にして文の賦を作る。汝更少年能綴文。汝更に少年にして能く文を綴る。總角草書又神速。總角にして草書又た神速。世上兒子徒紛紛。世上の兒子徒に紛紛たり。驂駒作駒已汗血。驂駒と作つて已に汗血なり。驚鳥舉翻連青雲。驚鳥を舉げて青雲に連る。詞源倒流。詞源倒に流す三峽の水。筆陣獨掃千人軍。筆陣獨り掃ふ千人の軍。

【字解】〔一〕醉歌行 醉ひての歌を詩に作る。〔二〕從姪 いとこの子にいふ。〔三〕勳 其の人の名なり。一に勳を勳に作る。〔四〕陸機 西晉の太康・元康時代の文學者。〔五〕總角 二十歳。〔六〕草書 文學を簡したる賦なり。〔七〕汝 勳をさす。〔八〕更少年 後に十六七とあれば、勳は機よりし年わかなり。〔九〕驂駒 詩文をつくりつくる。〔一〇〕汗血 つかふ二つを一つにくくれるをいふ、少年のすがた。〔一一〕驚鳥 書體の名、走りかき。〔一二〕筆陣 ふしぎに筆をば

只今年纔十六七。只今年纔に十六七。

射策君門期第一。射策君門に第一を期す。

舊穿楊葉真自知。舊楊葉を穿つは真に自ら知る。

暫蹶霜蹄未爲失。暫く霜蹄蹶く未だ失へりと爲さず。

偶然擢秀非難取。偶然擢秀取り難きに非ず。

會是排風有毛質。會す是れ排風毛質有り。

汝身已見唾成珠。汝が身已に見る唾珠を成すを。

汝伯何由髮如漆。汝が伯何に由るか髮漆の如くならむ。

春光潭一作沱秦東亭。春光潭沱たり秦の東亭。

渚蒲芽白水荇青。渚蒲芽白くして水荇青し。

風吹客衣日杲杲。風は客衣を吹いて日杲杲たり。

樹攬離思花冥冥。樹は離思を攬して花冥冥たり。

酒盡沙頭雙玉瓶。酒は盡く沙頭の雙玉瓶。

只今年纔に十六七。〔一〕世上兒子世間の少年。〔二〕射策 射策のいたづらに多し。〔三〕驂駒 くり毛の馬、周の穆王の八匹の駿馬の一なり。〔四〕作駒 わかごまであるときから。〔五〕汗血 大宛國の天馬の如く血を汗にだす。〔六〕驚鳥 つよきとり。〔七〕驂駒 たちばね。〔八〕連青雲 たかくとぶをいふ。〔九〕詞源倒流 文章の力を江水を以てたとへたり。詞源は文章の湧きでる源をいふ。倒流とはさかさまに湧くがこと、必しも逆流と解せざるなり。〔一〇〕三峽水 三峽は江の上峽、明月峽、巫山峽、廣濟峽をいふ。〔一一〕筆陣 文學の世界を戰場を以てたとふ。〔一二〕獨掃 ひとりてなぎはらふ。〔一三〕千人軍 多くの軍勢

衆賓皆醉我獨醒。

衆賓皆醉ふも我獨り醒めたり。

乃知貧賤別更苦。

乃ち知る貧賤の別ること更に苦。

吞聲躑躅涕淚零。

聲を呑んで躑躅涕淚零つ。しきを。

【天】十六七。動が動をいふ。

【毛】射策。漢の試験に對策と射策とあり、對策は經義を以て顯はに問ふ、射策は雜問疑義を甲乙の策（ふだ）に書し、問題なくじ

をいふ。

【六】在來、從來の義。

【三】穿楊葉、「猿猴射」に見えたる楚の樂由基が故事、樂由基は柳葉を去ること百歩にして之を射、百發百中なりしといはるる弓の名人なり、動が文學に於ける樂由基の弓に於けるほどの技能ありといふなり、作者、柳を楊と改めて用ひたり。

【二】自知、自分自身を知つてゐる。

【一】智斷、これは人を馬を以てたとへいふ、上の「驕驕」の語を承く、動が解第したるは馬の霜をふむひづめがちよつとつまづいた様のものなり。

【三】失、過失、失策。

【二】搜秀、秀でたるを搜かるなり、及第するをいふ。

【五】取、搜秀といふことを取り得るをいふ。

【三】會、會話、「かならず」。

【七】排風、風をおしわけてよよ、上の「驚鳥」の語を承く。

【六】毛質、羽毛のつよき本質。

【五】汝身已見、已見汝身と同じ、見るとは作者が之を見るをいふ。

【四】唯成珠、莊子に水く、つばを吐いてもそれがみな珠玉になる、片言たりとも美なるをいふ。

【三】汝伯、伯とは叔父伯父の伯なり、作者は動が伯父の尊屬に居る人なり、汝伯とは自己をさす。

【二】何由、いかにして。

【一】楚知深、わかかへりて白雲がうるしのやうに黒くなる。

【六】東亭、城外の東亭。

【七】清浦、なきさに生えた浦。

【六】水行、「アサザ」。

【五】客衣、客とは動をさす。

【四】果果、太陽の樹上にかがやくさま。

【三】花冥冥、冥冥とは咲きまかりておほひかぶりくらきをいふ、花は即ち樹上の花。

【二】沙風、水邊の沙はらをいふ。

【一】雙玉瓶、一對の玉の酒瓶（さかがめ）。

【六】衆賓、衆人皆醉我獨醒、といへり、それを用ふ。彼は贊喻なり、これは實際別離の事しめたため他人は醉へども自己は醒はぬをいふ。

【六】貧賤別、貧乏生活のなかのわかれ。

【五】吞聲、しのびれになく。

【六】躑躅、行不進貌なり。

【六】涕淚、はなみづ、なみだ。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【六】零、落つる。

【題義】いとこの子杜勳が落第して故郷へ歸るを送り、別れの宴にて酔ひて作れるうたなり。製作時は天寶十四載の春、長安にての作なるべし。

【詩意】晉の陸機は年二十にして文賦を作つたといふが、汝はそれよりも若くて能く詩文をつづる。またつのがみ時代から草書を不思議なほどすみやかに書き、世間の子供等は汝にくらぶれば徒らにごたごた存在するのみで價なきものだ。驕驕の駿馬はわか駒のときから己に血を汗にするだけの素質はあり、猛鳥は翻を擧ぐればただちに青雲につらなる。汝の文章の力は詞源滾滾としてあふれ、三峽の水を傾倒しておしながすが如く、筆陣にたてば一人を以て千人の軍を掃却することができる。しかし今やつと十六七歳の少年で、朝廷に於て試験問題にお答へして第一の成績を得やうとするのだ。ふだん柳葉を射て百發百中の技能あることは自分（勳）自身を知つてゐる。ちよつと霜蹄がつまづいた（落第した）ぐらゐでは過失とするにはあたらぬ。時機さへよければ、偶然羣衆から拔擢されるの運命にありつけぬわけではなく、きつと汝は風を排して上るだけの猛鳥の本質はもつてをる。わしは汝が身は己に唾さへ珠を成すことを見とめてゐるが、わしはもはや年寄りになつた、どうしたらこの「をさ」はふたたび髪が漆のやうに黒くなることのできるだらうか。（それはできぬ）さて汝を見送らう



とすると、城東の亭では春の光りがゆたゆた動いて、なぎさの蒲の芽は白くめぐみ、あさぎの葉は青く水面にういてゐる。風はそよそよ故の旅衣を吹き拂うて太陽はかがやいてゐる。樹上の花は暗くおほひ咲きて我がわかれの思ひをかきみだす。沙はらにころがつてゐる二つの玉の酒瓶には酒がなくなつてしまつた。他のお客たちはみな酔はれたがわしだけは酔ふことができぬ。ここに至つて貧乏生活のなかの別れが特別に苦しいものであることがはじめてよくわかつた。いまはなにも言へず、しのびぬにむせびないで足のあゆみもすすまず、ただなみだがおつるばかりである。

陪李金吾花下飲

李金吾に陪して、花下に飲む

勝地初相引徐行得自娛。

勝地初は相引く、徐に行けば自娛するを得たり。

見輕吹鳥毳隨意數花鬚。

輕きを見て鳥毳を吹き、意に隨つて花鬚を數ふ。

細草偏稱坐香醪懶再沽。

細草偏に坐に稱ふ。香醪再び沽ふに懶し。

醉歸應犯夜。

酔うて歸るは應に夜を犯すなるべし。

可怕執金吾

可怕執金吾(或は李)

【字解】 李金吾 李は姓、金吾は爵名、金吾は左金吾大將軍なり、唐の制、左、右金吾衛ありて長官に大將軍各一人を置く、官

中及び京城の晝夜巡警の法を掌る。【一】勝地 景色のよき場所。【二】相引 李金吾にみちびかれてゆくをいふ。【三】徐行 しかるかに、そろそろとあるく。【四】自娛 他人をまたず自分自身でたのしむ、次の二句が自娛の事實なり。【五】見輕 鳥毛のかるらかなるを認める、どこからともなく春風に吹かれてとびきたるものをさす。【六】吹 口にておつとふいてみる。【七】鳥毳 鳥の腹に生えたに、やかな毛なり。【八】隨意 さまざまに。【九】花鬚 花房の中心にある雄蕊、雄蕊をいふ。【一〇】細草 細草はそきくま。【一一】偏 ひとへに、もつぱら。【一二】稱坐 坐するにふさはし。【一三】香醪 かをりよきにこりまけ。【一四】懶再沽 さらし酒をかふがおつてうである、これまでもはや十分飲みしゆふこのうへかふのが心すすまぬ。そのわけは更に次の二句にのよ。【一五】醉歸 酔うて家へしどること。【一六】犯夜 規則にて定められたる夜間通行の制限をこゆるをいふ。【一七】可怕 おそろしい、これは醉を帯びていふなり。【一八】執金吾 漢の時、執金吾の官あり、唐の金吾の名はそれを採る、執金吾ならば官名にていふことになり、李金吾ならば直接にその人をさすことになる。金吾は鳥の名なりといふ、また或は執金吾の吾は應にて執金吾の義なりといふ、前説はならん。

【題義】 左金吾大將軍李嗣業に陪從して花さける樹の下で酒を飲みしことをのぶ。製作時は天寶十四載の春の作なるべし。

【詩意】 このよい景色の場所へ初は人にみちびかれてきたが、そろそろとあるいてゐると他人をまたず自分みづからたのしむことができた。即ち鳥のにこ毛が軽らかに飛ぶのをみつけてはそれを口で吹いてみたり、咲いてゐる花のなかの花蕊の幾本あるかをさまざまにかぞへたりしてみる。さてそこで坐を占め酒を飲んだが、細い草がすわるに最も適當なやうにはえてゐるし、酒は十分のんでこのうへ二度買ふのもじやまくさい威がする。もしそんなに飲んだら酔うてもどるのは夜行の制限を犯すことに

なるだらう、こはいことこはいこと執金吾(或は李金吾)の君。

官定後戲贈〔原注〕時免河西尉爲右衛率府兵曹 官定まりて後、戲たはむらに贈る

不作河西尉淒涼爲折腰 河西の尉と作らざるは、淒涼腰を折るが爲めなり。

老夫怕趨走率府且逍遙 老夫趨走を怕る、率府に且つ逍遙す。

耽酒須微祿狂歌託聖朝 酒に耽るには微祿を須つ、狂歌して聖朝に託す。

故山歸興盡回首向風颺 故山歸興盡く、首を回らして風颺に向ふ。

【字解】(一)官定 任官が一定せしこと、作者にとつてこれが最初の任官なり。(二)戲贈 贈とは自己に贈るなり。(三)免 河西尉 免といへば已にその官になりて後に免ぜられし如し、其の名義ありて實務には就くに至らざりしものと見ゆ。河西尉は河西節度使の管下の尉官なり。(四)右衛率府兵曹 此は太子右衛率府兵曹參軍の官をいふ、從八品下といふ卑き官なり、元朝の杜君墓の右衛率府兵曹、與唐書 本傳の京兆府兵曹參軍、新唐書 本傳の右衛率府兵曹參軍、とあるは皆作者のこの詩の自注によりて訂正さるべきものなり。(五)淒涼 ものがなしき貌、二字折腰にかけてみる。(六)折腰 陶潛明が故事、陶明は五斗米のため腰を折りて長官につかふをいひたり。(七)老夫 自らいふ。(八)怕趨走 趨走とは事務のためあらちちと奔走するをいふ、尉官となるときはかかる煩累あり、それをおそれる。(九)且しばらく。(一〇)逍遙 ぶらぶらしてゐるさま。(一一)風颺 颺 わづかな勢がかりようである。(一二)狂歌 他人からみれば氣がひじみたやうなうたをうたふ、さまの詩歌をつくりたりすることなす。(一三)託聖朝 聖朝の朝廷におのがからだを託す。(一四)故山 故郷の山。(一五)歸興盡 今まで故郷にかへり

たいかへりたいというたが官が定まつてみるとかへりたいとの興もなくなつた、といふ。これは本心から官を慕ひて故郷を思はなくなつたには非ず、ちよつとそんな氣がすることなす。(一六)向風颺 颺とは下より吹きまくる風なり、必ずしも暴風をいふに非ず、風の義を取るなり。

【題義】河西尉たる空名の任官を免せられて太子右衛率府兵曹參軍事に任せられることにきまつたあとで、戲たはむらに自分自身に贈つた詩である。製作時は天寶十四載。

【詩意】自分が河西尉にならないのは上官に腰を折るといふかなしきがあるためなのだ。このおやぢ(自分)は尉などになつてあちこち奔走することはおそれるのであるから、まあまあこの右衛率府に置いていただいてふらりとしてゐやうといふのだ。酒にふけるにはちつとばかりの俸祿を頂戴する必要があるし、氣ちがひじみた歌をうたひながらありがたい朝廷にこの身をおあつらへしておくのだ。かうなると口ぐせにしてゐた故郷へかへりたいいかへりたいも興がさめたやうでただ風にむかつて遠く故郷の方向をふりむいてみるぐらゐのことである。

去矣行 去矣行

君不見鞞上鷹 君見すや鞞上の鷹、

一飽即飛掣 一たび飽けば即ち飛掣するを。

官定後戲贈 去矣行

二八一

【字解】(一)鞞 鞞(ゆがけ、臂にかぶせる革製の衣、鷹をすめるに皮膚を削でざるやうにこれを用ふ。(二)鷹 ヨカ。(三)飛掣 掣は

焉能作堂上燕

焉ぞ能く堂上の燕と作つて、

銜泥附炎熱

泥を銜んで炎熱に附かむ。

野人曠蕩無視顔

野人曠蕩として視顔無し、

豈可久在王侯間

豈に久しく王侯の間に在る可けむや。

未試囊中餐玉法

未だ試みず囊中の餐玉の法を、

明朝且入藍田山

明朝且つ入らむ藍田の山に。

【題義】作者右衛門府にありてそこより去らんと欲してこの歌を作る。去矣は「去らんかな」の意。

【詩意】諸君見たまはざるや、彼の臂のゆがけにすゑられた鷹は一たび食にあけばすぐさま電光の如く飛び去ることを。(我も亦その鷹の如くなるべしとの意。)どうして座敷の梁に集くふ燕となつて泥を口にくはへながら機勢といふ炎熱にくつついてゐることができやうか。自分のやうな野人は胸中

とりとめなく大きくあつて鐵面皮のもちあはせが無い、どうしてながく王侯などいふ貴族の間に居られやうか。囊中にたくはへてある玉をたべる法もまだ試みたこともないし、よい機会だから明朝にもなつたら、まあまあ藍田の山へでもはひりこんでみやう。

夜聽許十一誦詩愛而有作 夜許十一が詩を誦するを聴き、愛して作有り

許生五臺賓業白出石壁 許生は五臺の賓なり、業白くして石壁より出づ。

余亦師粲可身猶縛禪寂 余も亦粲可を師とす、身猶禪寂に縛せらる。

何階子方便謬引爲匹敵 何ぞ子が方便に隨せらるるや、謬て引かれて匹敵と爲る。

離索晚相逢包蒙欣有擊 離索晩に相逢ふ、包蒙撃つ有るを欣ぶ。

誦詩渾遊衍四座皆辟易 詩を誦する渾て遊衍なり、四座皆辟易す。

應手看捶鉤清心聽鳴鐘 手に應じて捶鉤を看、心を清くして鳴鐘を聴く。

精微穿溟滓飛動霹靂推 精微溟滓を穿ち、飛動霹靂推く。

陶謝不枝梧風騷共推激 陶謝枝梧せず、風騷共に推激す。

紫燕自超詣翠駁誰剪剔 紫燕自ら超詣、翠駁誰か剪剔せむ。

「ひく」、こは電の如く撃すの義にてすばやくとび去るをいふならん。【一】銜、ふくむ、口にてくはへること。【二】附炎熱、炎熱とは機勢の盛んなるたとへていふ。【三】野人、田野の人、自己をさす。【四】曠蕩、胸中のひろきをいふ。【五】視顔、眼によつきりと面目をだしてゐる貌、視顔は厚顔をいふ。【六】未試、未だにやつきりと面目をだしてゐる貌、視顔は厚顔をいふ。【七】王侯間、貴族のあひだ。【八】明朝、重

君意人莫知。人間夜寥闕。君君意人知。莫莫。人間夜寥闕。君君意人知。莫莫。人間夜寥闕。君君意人知。莫莫。人間夜寥闕。

【字解】【一】五臺。五臺は山の名、山西省代州五臺縣の東北にあり、佛教の聖地とせらる、實とは客分のこと、許生嘗てここに寓して佛教を學びしをいふ。【二】梁白。佛經に純黑業をなせば純黑報を得、純白業をなせば純白報を得といふ、十使十惡は罪に屬して黑業なり、五戒十善、四禪四定は善に屬して白業なりといへり、梁白とはその業が白即ち善に屬するをいふ。【三】出石壁。山中の石壁の場所から俗世界へ出て來るをいふ、蓋は道信に、道信は弘忍に傳へたりといふ。【四】樂可。竝に禪の高僧、樂は即ち塊、可は聲可をいふ。道磨は慧可に傳へ、慧可は樂に傳へ、樂は道信に、道信は弘忍に傳へたりといふ。【五】結。佛經に方便あれば慧解、方便なければ慧解、とあり、慧解は智慧がじやまになり、却つてそれにしはらるるをいふ、いま町の禪の悟りを得ざるゆゑ慧解に轉せらるといふ。【六】何階。階はそれを階梯にするをいふ、何階は何由といふが如し。【七】子。許生をさす。【八】方便。權宜にてだて。【九】聖引。導つてとは證道の辭なり、引はひきよせらるること。【一〇】匹敵。あひて。【一一】唯。唯草葉居を略していふ、朋友と別れ散じてあること。【一二】晚。晩年をいふ。【一三】包。有華。易蒙卦の九二に包蒙、上九に蒙蒙の語あり、包蒙とは蒙昧なるものを包容するをいふ、蒙蒙とは蒙昧なるものを蒙て其の蒙を強くないふ、此句は許生が自分(作者)の蒙を包蒙したた啓蒙するをいふ。【一四】許生。許生が自作の詩を朗吟すること。【一五】渾。すべて。【一六】遊衍。ゆつたりとくつろぐさま。【一七】四座。滿座の人人。【一八】許生。ひらきて所をかへる。【一九】應手。手をはたらかすにつれて、此二字は揮翰へかかる。【二〇】揮翰。【莊子】知北遊に、大馬之種、駒者、年八十矣、而不失其蒙、とあり、大馬は大司馬、種とはうつてきたへること、駒は駒の種類にてかぎの如くまがれるものなり、この八十の老人が駒をうつに妙を得てうたる駒の輕重がどれもこれも同一なりといへるなり。この用法は香、揮翰とあれど看るばかりに非ず聞くことならん、駒をうつ音をきくに似たりといふなり。【二一】許心。上句の手は許生が手なるも此句の心は作者の心なり、許とは他の安全をのぞくないふ。【二二】鳴鐘。かぶら失、これも上の揮翰とひとしく詩の聲についていふ。【二三】精微。詩の精微微妙。【二四】穿溪。溪は「莊子」には涉溪といへり、自然の氣をいふ、揮筆を穿つとは大自然の奥底まで貫通するをいふ。【二五】飛動。舞の飛動。【二六】推。推辭。いなづまのくだくるやう。【二七】陶陶。陶陶明、陶陶運、晉宋間の大詩人。【二八】披。披。くひちがふ、不披は詩題がそれと一致するをいふ。【二九】風。風。詩體の陶陶の詩當や、屈原の作つた騷體の韻文。【三〇】共。許生の作が之と共にいふこと。【三一】推。推。微字の用法少し苦しめるかと考ふ、意は「微賞するに足るしといふことならん、陶陶」二句は許生の詩の性質につきのお。【三二】樂。漢の文帝の良馬九匹、其一を樂、樂は馬については紫色をいふ、駉は色の不純なるをいふ、紫色にてぶちなるが駉駉なり、さやうなる馬をいふ。【三三】剪。剪はたてがみの毛をさること、剔は毛を剃くをいふ、剔剔とは毛なみをうるはしく整ふるをいふ。【三四】人。他の人。【三五】意。意。聞はおとなきをいふ。

【題義】許十一が夜、その詩を朗吟したのでをきいて、それをめでてこの詩を作つた。許十一を或は許十、或は許十損に作る。製作時は天寶十四載、長安にての作。

【詩意】許生は五臺山の賓客として佛教を學んだことがあつたが、その業は已に白く善なるものとなつて山中の石壁から俗界へ出かけて來た。自分も樂や可を師として禪の流れを汲んでみたが自分の修業は浅いもので身はなほ禪寂といふものに縛られてをる。それにどうしたおまへの方便によつたものであるかして、ふつつかものがまらがつておまへに引つぱられてそのあひてになつた。自分は親友と離れて心ばそかつたのだが晩年ながらおまへと逢ふことができ、おまへにこの愚蒙を容れられ、おまへからこの愚蒙を啓發されることをよろこぶのである。おまへが詩を誦するのをきくとすべてゆつたりとくつろいでをり、滿座のものみなあとしざりをする。さうしておまへの手のまにまに鉤を挿ち

きたへるのをみ、心をすましてかぶら矢のひびくやうな音をきく。おまへの誦聲の微妙な處は大自然の奥そこまでもつらぬくかとおもはれ、飛動するときはいなづまがくだれたかとおもはれる。おまへの時の趣はむかし陶淵明・謝靈運にも一致し、國風や離騷やと共に激賞するに足るものである。紫燕の名馬はおのづから凡馬から超越してゐる。翠駝の馬の毛並みはいつたいたれがきつたり刷いたりしたのであるか。(人しれず苦心せる結果に成れるものならんとの意なるべし。)おまへの奥のころは一般の他の人は知るものがない。(自分だけは知己のつもりだとの意ならん。)ただ夜がふけて人間界がひっそりしてゐるばかりだ。

戲簡鄭廣文度兼呈蘇司業源明 戲れに鄭廣文に簡し、兼て蘇司業に呈す

廣文到官舍繫馬堂階下。 廣文官舍に到る、馬を繫ぐ堂階の下。

醉則騎馬歸頗遭官長罵。 醉へば則ち馬に騎りて歸る、頗る官長の罵るに遭ふ。

才名三十年坐客寒無耗。 才名三十年、坐客寒くして耗無し。

頼有蘇司業時時乞酒錢。 蘇司業有るに頼りて、時時酒錢を乞ふ。

【字解】(一)簡 手がみなやる、この詩をやるなり。(二)鄭廣文 廣文館博士鄭廣其人なり。(三)蘇司業 關子司業蘇源明、鄭師の

二人に作者の親友なり。(四)廣文 廣文館博士鄭廣其人なり、前に見ゆ。(五)堂階 座敷のきざし。(六)騎馬 馬にのつて私宅へもどる。(七)官長 長官をいふ。(八)才名 才ありとの評判。(九)坐客 座を訪問する客で坐するもの。(一〇)寒無耗 寒は「まうせん」、まうせんがなからお客さまむい。(一一)頗る、おかげでといふこと。「さいばひに」と副詞のやうにみるも可なり。(一二)乞、これは音氣、興ふることなり。

【題義】 戲れに鄭度がもとに手がみにかへてつかはし、かねて蘇源明に呈したる詩なり。製作時は天寶十四載、安祿山の亂起らざりし以前。

【詩意】 鄭度が廣文館の官舎へくると馬をさしきのきざしあたりでつないでおく。それから酒を飲んで酔ふとまた馬にのつてかへつてしまふ、だからすむぶん長官からののしられる。度が人オだといふ名聲は三十年もひびいてゐるが、宅へ訪問するお客は坐するに「まうせん」さへないから寒がつてゐるほどである。ただ司業蘇源明があるおかげで時時は度に酒を買ふ錢をあたへてくれる。

夏日李公見訪 夏日、李公に訪はる

遠林暑氣薄公子過我遊。 遠林暑氣薄し、公子我に過りて遊ぶ。

貧居類村塢僻近城南樓。 貧居村塢に類す、僻にして城南樓に近し。

傍舍頗淳樸所須亦易求。 傍舍頗る淳樸、須つ所も亦た求め易し。

戲簡鄭廣文兼呈蘇司業 夏日李公見訪

隔屋喚酒家借問有酒不

墻頭過濁醪展席俯長流

清風左右至客意已驚秋

巢多衆鳥鬪葉密鳴蟬稠

苦遭此物聒孰謂吾慮幽

水花晚色靜庶足充淹留

預恐樽中盡更起爲君謀

屋を隔てて酒家を喚ぶ、借問す酒有りやなし。

墻頭より濁醪を過す、席を展べて長流に俯す。

清風左右より至る、客の意已に秋かと驚く。

巢多くして衆鳥鬪ひ、葉密にして鳴蟬稠し。

此の物の聒しきに遭ふに苦しむ、孰か謂ふ吾が慮幽なりと。

水花晚色静かなり、庶くは淹留に充つるに足らむ。

預め恐る樽中の盡きむことを、更に起ちて君が爲に謀る。

【字解】(一) 夏日。何年の夏の日なるや詳ならずれども感風の事も見えざれば天寶末年安祿山の反せざる以前なるべし。【二】 李公。一本に「李家令」とありといふ、李家令は太子家令李愛なりといふ。【三】 遠林。城中から遠くはなれた林。【四】 公子。李家令をさす。【五】 過我。過は過訪をいふ。【六】 貧居。自宅をいふ。【七】 村城。城は小さき陣壁をいふ。【八】 僻。かたよる。【九】 城南樓。長安城の南の樓、少陵は韋曲社曲などに近き地ゆまかくいふ。【一〇】 傍舍。あたりの人家。【一一】 涼蟬。人心がまじりけなく、かざりけなし。【一二】 所須。こちらのいりようなし。【一三】 隔屋。となりをいふ。【一四】 酒家。酒をうる家。【一五】 借問。試みにとよ。【一六】 不。いなる。【一七】 墻頭。土壁のうへ。【一八】 過。舞を、なせること。【一九】 西園。にこりさげ。【二〇】 展。のべし。【二一】 席。むしろ。【二二】 長流。これは興川の流れをいふならん。【二三】 客。李をさす。【二四】 驚秋。すずしきをいふ。【二五】 此物。鳥と蟬。【二六】 聒。かまびすし、やかまし。【二七】 幽。幽静。【二八】 水花。はすのはな。【二九】 庶。こころがはくば。【三〇】 充淹留。淹留はひさしく停留すること、充とはそれだけのれうちに充當するをいふ。【三一】 君。君の君子。

【題義】 夏の日、李公に訪はれたので作つた詩である。天寶末年長安にての作。

【詩意】 城外遠くの森林では暑氣も薄いので李公子は我が宅へ遊びに訪問された。我が貧乏すまひはまるで片田舎のをかの様なところで、かたよつてゐて長安の南の城樓と遠くない。近傍の人家の人情は淳樸で我がいりようなもの(酒をさす)もたやすく手にはひる。すなはち一軒越しに酒家をよんで「どうだ、酒があるかないか」とたづねる。すると酒家は土塀ごしににこり酒をこちらへよこしてくる。それを飲むため席をのべして長い川の流れを俯してみる。清らかな風は左右から吹いてくる、お客のころではすすしいのではや秋がきたのかと驚き怪む。樹木に鳥の巢がおほくてさまざまの鳥がたたかふし、木の葉が密にしげつてゐるから鳴く蟬もたくさんゐる、自分はこの機のものやかましいのにこまつてゐる。わしのいほりが幽静などとはだれがいふのか。ただ蓮の花はゆふがたしづかにたつてゐる、このながめは我がこの處に逗留するだけのねうちを十分もつてゐる。ゆつくりこの景色をめぐべきである。それにしても樽のなかの酒がなくなりはせぬかと氣づかはれるので、席から起ちあがつてあなたのために工夫をめぐらすのである。



終



續國譯漢文大成

杜少陵 十三  
文學部

十五

309

65

新  
入



始



# 續國譯漢文大成

文學部第十五冊 (第四帙の三)

杜少陵詩集 上の三

吉田孝郎氏

寄贈



杜少陵詩集 卷四

天育驃圖歌

吾聞天子之馬走千里

吾聞く天子の馬走ること千里なりと、

今之畫圖無乃是

今の畫圖は乃ち是なる無からむや。

是何意態雄且傑

是何の意態を雄にして且傑なり、

駸尾蕭梢朔風起

駸尾蕭梢として朔風起る。

毛爲綠縹兩耳黃

毛は綠縹を爲して兩耳は黃なり、

眼有紫焰雙瞳方

眼に紫焰有りて雙瞳方なり。

矯矯龍性含變化

矯矯たる龍性變化を含む、

卓立天骨森開張

卓立せる天骨森として開張す。

天育驃圖歌

【字解】(一) 天育 或は廐の名とし、或は天子所育の義とす。前説に従ふ。(二) 驃 黃馬受白色ものなり。(三) 圖 繪なり、或は圖を圖に作り驃圖とす、駸の字は用なきに似たり。(四) 天子之馬走千里 穆天子傳の語。穆王の八駿は一日によく千里を走る。(五) 今之畫圖 今ま眼前見る所の驃圖をいふ。(六) 無乃是 是とは上の千里馬をさす、乃ちこれてなからうか。(七) 是 圖の馬をさす。(八) 意態 馬の意氣態度。(九) 雄且傑 をなしくすぐれてある。(一〇) 駸尾 駸は鬣なり、たてがみ、尾はしっぽ。(一一) 蕭

伊昔太僕張景順 伊昔太僕張景順

監牧攻駒閱清峻 牧を監し駒を攻して清峻なるを閱す。

遂令大奴字天育 遂に大奴をして天育に字せしむ、

別養驥子憐神駿 別に驥子を養うて神駿なるを憐む。

當時四十萬匹馬 當時四十萬匹の馬、

張公歎其材盡下 張公其の材の盡く下れるを歎す。

故獨寫眞傳世人 故に獨り眞を寫して世人に傳ふ、

見之座右久更新 之を座右に見れば久くして更に新なり

年多物化空形影 年多く物化して空しく形影あり。

嗚呼健步無由騁 嗚呼健歩するに由無し。

如今豈無腰褭與 如今豈に腰褭と騁驪と無からむや、

時無王良伯樂死 時に王良・伯樂無く死して即ち休す。

騁驪 騁驪と無からむや、

拍 さわさわと風の起るさま。【三】

朔風 北風。【三】 綠縵 縵は黒

きないふ、縵は青黄色。【三】 紫烟

むらさきのほのけ。【三】 雙龍 一

對のひとみ。【三】 力 四角、菱形、

ひとみは馬と雖も四角に非るし、ま

ぶたの圍める處は菱形をなす、之を

「方」といへり。【三】 矯矯 うれ

うれとあがる貌。【三】 龍性 龍の

如き性質。【三】 含融化 いかやう

にも變化に應ずべき様子をもつてあ

る。【三】 卓立 たかくそびゆる。

【三】 天骨 天よりうけたる骨格。

【三】 騏 いかめしく。【三】 閑

鹿 のびやかにほつてある。【三】 閑

伊昔 伊とは辭なり。【三】 太僕

監牧與車を掌る官なり。【三】 盡量

閑 閑元時の人なり。閑元十三年張

駉の體右監牧頌德碑の序に、元年、

即休

牧馬二十四萬匹、十三年乃四十三萬

州都督、監牧都副使、張景順曰、吾馬幾何奪育、卿之力也、對曰、帝之力也、仲(王毛仲)之令也、臣何力之有焉、と、即ちこの張景順

なり。【三】 監牧 牧場を監督する。【三】 攻駒 あら駒をのりこなす。【三】 清峻 すこし峻せてひきしまつた様子ある馬。

【三】 大奴 身體長大なる奴、景順の下に居る牧馬奴なり。【三】 天育 字を守に作れる本あり、守「天育」とよむ。守は「みま

もる」をいふ、「字」のままならば「天育」なり、字は華乳をいふ、天育に於て馬に子を産せしむるをいふ。蓋し上句の「清峻」なる

を種馬として牝馬に産をなましむるなり。【三】 別養驥子 驥子以上の方法にて新しくうまれし千里馬の駒、即ち驪馬なり、別養は

他の天育の種馬とは別に養育するをいふ。【三】 神駿 ふしぎにすぐれたるをいふ。【三】 張公 景順。【三】 材 材質。【三】

下 劣るをいふ。【三】 腰褭 此の體だけにその前の姿を畫にうつす。【三】 座右 座席の右。【三】 久更新 いへまでみて

しめあたらし。【三】 年多 閑元より天寶末まで多くの年を經たり。【三】 物化 馬の實物が變化す、死去せるをいふ。【三】

空形影 空しく形影あり、實體はなくなり、いたづらに形や影がある、この畫すがたのみ存在するをいふ。【三】 健歩 すこやかな

あゆみ。【三】 騁 ばせる。【三】 如今 いま。【三】 驪馬 赤き鼻づらの黒馬、一日に萬里を行くといふ。【三】 驪驪 驪王

八駿の一。【三】 王良 戦國の趙簡子の時の人にして取を善くす。【三】 伯樂 孫陽がこと、秦の穆公の時の人にして善く馬相を

みる。【三】 休 やむ、をばる。

【題義】 天子のお殿たる天育殿にて養はれたる驪馬の圖をみて作れる歌。製作時は天寶の末年。

【詩意】 自分が聞く所に周の穆王の馬は日に千里走つたといふが、今ここにある畫の馬はすなはちそ

のやうな馬ではなからうか。その雄雄しく傑出した様子はなんとといふさまなのだらう、たてがみや、

尾からさわさわと北風が吹き起つてゐる。毛は綠と縵との二色をなし、兩耳は黄色である。眼から

は業のほのはをだし一對のひとみは菱形をしてゐる。嬌嬌とうねりあがる龍の如き本性はいかなる活動の變化をもするやうすをもつてゐるし、たかくそびえた天成の骨格がいかにしつとびやかにほつてゐる。昔、開元の頃太僕張景順は牧場を監督し、駒をならして、そのなかから肉やせてひきしまつた様子ある馬を閲しだして、遂にそれを種馬として牧馬奴に天育の腕で子を産せしめるやうにさした。そのうまれた千里馬の駒(驥)は他の馬と區別して之を養育して、そのふしぎにすぐれた點をかあいがつてそだてさせた。そのころ四十萬匹から馬の數があつたが、景順はその材質がどれもみなこれよりは劣つてゐることを歎惜した。だからこの驥だけの畫すがたをうつさせて世の人に傳へた。こした。座右で之を見てゐると、いつまで見てもめあたらしい。今では年數も多くなつた、馬そのものも死んでしまひ、いたづらにこの畫すがたにその形影をのこしてゐる。さうして生きてゐたときのやうなすこやかなあゆみをはせるよすがもない。ただ今ではまさか驥裏や驊騮の名馬がゐないわけでもないまいが、名馬を名馬としてみわけてくれる伯樂、駁してくれる王良がゐないから、名馬は有つても凡馬のあつかひをうけつづつ死んでそれでおしまひになるのである。

驥馬行 〔原注〕太常樂卿敕賜馬也李鄧公愛而有之命甫製詩 驥馬行

鄧公馬癖人共知 鄧公の馬癖は人共に知る、

【字解】〔一〕驥馬 青白色の馬

初得花驪大宛種、  
夙昔傳聞思一見。  
夙昔來左右神皆竦、  
雄姿逸態何崑崙。  
願影驕嘶自矜寵、  
隅目青燐夾鏡懸。  
肉駿礮礮連錢動、  
朝來少試華軒下、  
未覺千金滿高價、  
赤汗微生白雪毛、  
銀鞍卻覆香羅帕、  
卿家舊賜公取之、  
天廐眞龍此其亞。

初めて得たり花驪大宛の種を。  
夙昔より傳聞して一たび見むことを一思ふ、  
夙昔來れば左右神皆竦る。  
雄姿逸態何ぞ崑崙なる、  
影を願みて驕嘶し自ら寵に矜る。  
隅目青燐として夾鏡懸り、  
肉駿礮礮として連錢動く。  
朝來少しく試む華軒の下、  
未だ覺えず千金の高價に満つるを。  
赤汗微しく生ず白雪の毛、  
銀鞍卻つて覆ふ香羅帕。  
卿家の舊賜公之を取る、  
天廐の眞龍此其の亞なり。

なり。【一】太常樂卿 太常寺の卿といふ官の職氏、名は不詳。【二】李鄧公 鄧は封地の名、其人宗室なるべし、名は不詳。【三】有之 自分のものにした。【四】馬癖 馬を愛するといふくせ。【五】花驪 驥馬にして花紋あるなり、後に連錢といへる是れなり。【六】大宛種 大宛國の名馬の種。【七】夙昔 ばやき以前。【八】華來 馬をひいてくる。【九】左右 左右の傍觀の人人。【一〇】神皆竦 神は精神、竦は上なり、又驚とも通ず、毛髮のそばだつ様なるをいふ。【一一】雄姿 雄雄雄しきすがた、すぐれたやうす。【一二】崑崙 たくやうゆるさま。【一三】願影 馬が自己のかけなをへりみる。【一四】驕嘶 へびつていななく。【一五】矜寵 寵愛

晝洗須臾涇渭深。

【一】晝、日をうけてをすることをほふる。【二】須臾、瞬目の形なるをいふ。

夕趨可刷幽并夜。

【三】幽并、青くして光りかがやく。【四】幽并、左右よりさむかみ、兩眼をたとへいふ、甄延年が結白馬賦に雙瞳夾鏡の語あり。

吾聞良驥老始成。

【五】吾聞、此の馬數年人更に驚かむ。

此馬數年人更驚。

【六】此、此の馬數年人更に驚かむ。

豈有四蹄疾於鳥。

【七】豈、此の馬數年人更に驚かむ。

不與八駿俱先鳴。

【八】八駿、先づ鳴かざる有らむや。

時俗造次那得致。

【九】時俗造次、時俗造次に那ぞ致すことを得む。

雲霧晦冥方降精。

【一〇】雲霧晦冥にして方に精を降す。

近聞下詔喧都色。

【一一】近ら聞く詔を下して都邑に喧しと。

肯使駢地上行。

【一二】肯、肯て駢を地上に行かしめむや。

り。洗とは體や足を水にて洗ふこと。【一三】涇、涇川の名、涇は水の深きをいふ。【一四】夕、ゆふべにほふる。【一五】幽、はらふ、はく、よこしたまをほらひおとす、毛なみなきれにする。【一六】幽并、幽州并州の夜、幽は大陸に於て直隸省北部、并は山西省の地。【一七】良、よく千馬。【一八】老始成、年よりのち成熟する。【一九】豈有、この二字は下句までかかる。【二〇】四蹄、四蹄疾於鳥、四本のひづめが鳥よりはやく走る。【二一】八駿、周の穆王の八匹の駿馬、その名は赤驎、白驎、緑驎、白驎、驂騑、騄耳。【二二】先鳴、他の凡馬に先ちて聲をあげる、先づ用ひらるるをいふ。【二三】時俗、世俗の人。【二四】造次、急遽、あはただしさま。【二五】那、なんぞ。【二六】致、我が手とへまねきいたすをいふ。【二七】晦冥、まつくら。【二八】降精、この精は何の精をさすや明かならず、馬は或は月の精なりといひ、河水の精なりといひ、房風の精なりといふ、大宛の天馬も其國の高山の上に馬ありて得べからず因つて五色の母馬を其の下に置き交らしめて駒を生ましむと昔は傳へたるは、山上の馬を天より下りし馬とみしものなるべし。【二九】喧、喧とはやかましくさわきて音馬を求むるなり。【三〇】肯、肯て駢を地上に行かしめむや。【三一】駢、音く走る馬をいふ。【三二】地上行、地面の上をあるく。

【題義】もと天子から太常寺卿梁某に賜はつたもので、現在は李鄴公が自分の所有として愛してゐる驄馬について、作者が鄴公の命をうけて作れる詩なり。製作時は天寶十四載ならん。

【詩意】李鄴公が愛馬の癖あることは人がみな知つてゐるが、公は初めて大宛の種である花紋様ある驄馬を得られた。自分はその話をまへまへから聞いてゐたから一ど見たいとおもつてゐたが、今日見ることができた。之をひきだしてくると左右のものみなぞつとして畏敬の念を起した。その雄雄しいすがた、すぐれたさまはどうしてあんなにたくそびえてゐるか。その自己の影をふりかへりながら、むばつたやうにいななく様子は主人の寵愛をうけてゐることをほころかの如くみえる。その目は(駢

【一】晝洗、晝に洗ふ。【二】須臾、瞬目。【三】涇渭、涇河渭河。【四】幽并、幽州并州。【五】良驥、好馬。【六】八駿、周の穆王の八匹の駿馬。【七】先鳴、先づ鳴かざる有らむや。【八】時俗造次、時俗造次に那ぞ致すことを得む。【九】雲霧晦冥、雲霧晦冥にして方に精を降す。【一〇】近聞下詔、近ら聞く詔を下して都邑に喧しと。【一一】肯使駢地上行、肯て駢を地上に行かしめむや。

【一二】駢、音く走る馬をいふ。【一三】地上行、地面の上をあるく。

【一四】天子、皇帝。【一五】太常寺卿、太常寺の卿。【一六】賜はつたもの、天子から賜はつたもの。【一七】李鄴公、李鄴公の名。【一八】愛馬の癖、馬を愛する癖。【一九】命をうけて、作者が鄴公の命をうけて作れる詩なり。【二〇】製作時、天寶十四載。【二一】驄馬、花紋様ある馬。【二二】ひきだす、ひきだして。【二三】左右のもの、左右のものは。【二四】みなぞつとして、みなぞつとして。【二五】畏敬の念、畏敬の念。【二六】雄雄しい、雄々しい。【二七】自己の影、自己の影。【二八】ふりかへりながら、ふりかへりながら。【二九】いななく様子、いななく様子。【三〇】主人の寵愛、主人の寵愛。【三一】うけてゐる、うけてゐる。【三二】ほころか、ほころか。【三三】如くみえる、如くみえる。【三四】その目、その目。

【三】幽并、幽州并州。【四】良驥、好馬。【五】八駿、周の穆王の八匹の駿馬。【六】先鳴、先づ鳴かざる有らむや。【七】時俗造次、時俗造次に那ぞ致すことを得む。【八】雲霧晦冥、雲霧晦冥にして方に精を降す。【九】近聞下詔、近ら聞く詔を下して都邑に喧しと。【一〇】肯使駢地上行、肯て駢を地上に行かしめむや。

【一一】駢、音く走る馬をいふ。【一二】地上行、地面の上をあるく。

【一三】天子、皇帝。【一四】太常寺卿、太常寺の卿。【一五】賜はつたもの、天子から賜はつたもの。【一六】李鄴公、李鄴公の名。【一七】愛馬の癖、馬を愛する癖。【一八】命をうけて、作者が鄴公の命をうけて作れる詩なり。【一九】製作時、天寶十四載。【二〇】驄馬、花紋様ある馬。【二一】ひきだす、ひきだして。【二二】左右のもの、左右のものは。【二三】みなぞつとして、みなぞつとして。【二四】畏敬の念、畏敬の念。【二五】雄雄しい、雄々しい。【二六】自己の影、自己の影。【二七】ふりかへりながら、ふりかへりながら。【二八】いななく様子、いななく様子。【二九】主人の寵愛、主人の寵愛。【三十】うけてゐる、うけてゐる。【三一】ほころか、ほころか。【三二】如くみえる、如くみえる。【三三】その目、その目。

【三四】その目、その目。

【三五】その目、その目。

はの意。方形で青びかりをかかやかせて、左右からはさんだ明鏡がぶらさがつてゐる様であり、身をふるへば突起したたてがみの肉がゆれて鏡がたの模様が動く。主人は朝からかけて少しくこの馬をうつくしいのきばのそばで試乗された。或はうつくしい車をこの馬にひかせてみた。が、千金を出したのも高すぎるとはかんがへられない。試乗後は白雪の様な毛に赤い汗がすこし出たが、銀の鞍にはかへつて香はしきうすぎぬの腹かけをかけて之を保護してある。この馬は太常寺卿梁氏の家の拜領物であつたのを公が得られたのだが、この馬こそ天厩の龍馬のたぐひであるのだ。この馬こそ一日千里をゆくに足るものであるから晝は涇水・渭水の深き水に騰りあがつてその體を洗ひ、夕には已にはしつて幽州并州の夜に毛を刷ふ事ができるであらう。自分は聞いてゐるのに、よい千里馬は年よつて成熟するといふ。この馬も數年へたならば一層人が驚歎するに至るであらう。鳥よりはやい四足をもちながら天子の御たる八匹の駿馬といつしよに先づ鳴かぬといふことがどうしてあらうか。此の種類の馬は世俗の人がほしいからとてあわて得やうとしてもどうしてそれをもちたすことができるものか、雲や霧がとざしてまつくらといふ様なときはじめて天が精氣を降してかやうな馬を下界へ送るのである。ちかごろきくとお上から詔を下されて都も地方もがやがやかましく良馬を求められるといふことだ、まさか麒麟を地面の上にあるかせておく様なことはできはずまい。(きつと天上へひきあげてもつてゆかれるにちがひない、との意。「吾聞」以下は馬と人とを一つにし鄧公をたとへていへり)

魏將軍歌

魏將軍の歌

將軍昔著從事衫、  
鐵馬馳突重兩銜。  
被堅執銳略西極、  
崑崙月窟東嶺巖。  
君門羽林萬猛士、  
惡若哮虎子所監。  
五年起家列霜戟、  
一日過海收風帆。  
平生流輩徒蠢蠢、  
長安少年氣欲盡。  
魏侯骨聳精爽緊、  
華嶽峯尖見秋隼。

將軍昔著く從事の衫、  
鐵馬馳突して兩銜を重ぬ。  
堅を被り銳を執りて西極を略す、  
崑崙月窟東に嶺巖たり。  
君門羽林の萬の猛士、  
惡哮虎の若くなるは子が監する所。  
五年家を過ぎて霜戟を列し、  
一日海を過ぎて風帆收まる。  
平生の流輩徒に蠢蠢たり、  
長安の少年氣盡きひと欲す。  
魏侯骨聳えて精爽緊なり、  
華嶽峯尖りて秋隼を見る。

【字解】

【一】從事衫 裴斐英は之を褌衫(へものし)と服)と解き浦起龍は表衣(いくまころし)と解きたり。しかし幕府の從事(下僚)であつたことをいふならん、衫はうすいうばぎ。【二】鐵馬 介馬(よろほ)うた馬)なり。【三】重兩銜 銜は馬の口勒(くちばみ)のかねなり、重ぬとは二個をかませるなり、駿ふとき故、馬にも嚴重にしたくませる。【四】被堅 甲冑をきる。【五】執銳 するどき劍戟を手にとる。【六】時 土地を取ること。【七】西極 西のはての國。【八】崑崙、月窟 崑に西方にある山、地なり。【九】嶺巖 嶺巖は山石の高くけばしき貌、東には崑崙月窟は西地なれども將軍はそれよりも西のはてへ進むゆゑ崑崙月窟が東方に響ゆる如く見



星纏寶校當作金盤陀金盤陀。星のごとくに纏れる寶校紋金の盤陀、

夜騎天駟超天河。夜天駟に騎つて天河を超ゆ。

機槍焚惑不敢動。機槍焚惑敢て動かす、

翠蕤雲旂相蕩摩。翠蕤雲旂相蕩摩す。

吾爲子起歌都護。吾子が爲めに起つて都護を歌ふ、

酒闌插劍肝膽露。酒闌に劍を插みて肝膽露はる。

鉤陳蒼蒼玄武暮。鉤陳は蒼蒼として玄武は暮る。

萬歲千秋奉明主。萬歲千秋明主を奉せむ、

臨江節士安足數。臨江の節士安んぞ數ふるに足らむ。

過海 吐蕃の青海地方を過ぐるをいふ。【一〇】 草原 青海方面の亂しづまれるにより風にはらまされたる兵船の帆を収め巻いて都へかへる、五年、一日の二句置きかへてみるべし。【一一】 流軍 同軍。【一二】 遊獵 鳥のやうにうごめく。【一三】 氣壯 意氣前滅せんばかり。【一四】 健快 俊は敬稱、君の類。【一五】 精爽 精神。【一六】 累 ひきしまる。【一七】 華嶽 一旬 たへなり、華嶽は華山、五嶽の一、華州にあり。【一八】 秋車 車は、ばやぶさ、露の類。【一九】 星纏寶校 紋の字は鏡に作るべし、貞延年の騎白馬賦に寶鏡星纏とあるに本く、鏡は鞍勒などの馬具の裝飾なりといへり、星纏とは星の如くめぐるにて星をちりばめしやうなるをいふ。【二〇】 金盤陀 盤陀は破鏡、佛像、などを飾かして鑄たる金局、銅と金との雜りがれなり、金盤陀は裝飾の寶貨をいへり。【二一】 天駟 房星のこと、こゝは天駟の馬をさすならん。【二二】 天河 天上の河、宮苑の水をたとへていふ。【二三】 機槍 妖星。【二四】 焚惑 火星、上の星は兵亂の象なり。【二五】 不敢動 動きたまぬ、といふは兵亂の起らぬをいふ。【二六】 翠蕤雲旂 翠蕤とは龍象の羽のふさふさと垂れたるをいひ、旗のこと。雲旂とは雲の縹なるばたをいふ。旗は儀仗に用ふ。【二七】 蕩摩 うごきすれあふ、風塵、以下の四句は宿衛の軍容をいひ、將軍の威が調亂をしづむるに足るをいふ。【二八】 鉤陳 劉宋の時、武帝の丁都護歌に曾獲北征去、前鋒無不平、朱門重高蓋、永世揚功名とあり、宋の高祖の時、高祖の女、徐達之といふ者に嫁せしに達之は善射なる者に殺されたり。高祖因つて曾獲丁時に命じて達之が屍を収め之をかりうめせしむ。達之が妻丁時を呼びて葬りの事を問ふに、毎問丁都護と呼ぶ、その聲いと哀れなり、後人因て歌とす。作者は何人の作をうたひしか不明なるも武帝の歌の韻をうたひしならん。【二九】 酒闌 闌は「たげなば」さかりすぎ。【三〇】 插劍 このとき劍舞を爲し舞をやめて劍をさやにはさむなり。【三一】 肝膽露 心中をさらけ出す。【三二】 鉤陳、玄武 鉤陳は星宿の名、六星ありて天の紫宮の中におり、之れにかたどりて天子の殿前にも鉤陳の位置あり、玄武も星の名「漢書」天文志に、北宮には玄武虛危あり、其南に衆星あり、羽林天軍といふ」とみゆ、玄武星が毒に見ゆるは秋節なりと。此句は星宿をかりて宿衛のことをいひ兼ねて時侯をあらはす、又此句は單句（一句だけで獨立する句）なり。【三三】 蒼蒼 暮 此の二語は蓋し鉤陳と玄武とに共用の語なり、どちらも蒼蒼としてくるをいふ。【三四】 臨江節士 漢の景帝、太子を廢して臨江王となす、後自殺す。時の人を應みて歌を作る。「漢書」臨江王及び悉思の節士の歌詩四篇」とみゆ。是は臨江王が作れる歌と節士の作れる歌と二種あるなり。節士が臨江の人なるや否や不明なるも、節士は臨江王のことを思へる忠實の人とみゆ。【三五】 安足數 かぞへるれうちなし、將軍の忠實心は節士以上である。

【題義】 將軍魏某のことにつきてよめり。其名不詳。製作時は天寶末年、安祿山未ノ反時の作。【詩意】 魏將軍は昔、幕府の下官としての衫を着てよろはうた馬にのつて敵陣へ馳突し、馬の口には

ゆるやうになる。【一〇】 君門 天子の門。【一一】 羽林 天子直轄の軍の名、近衛兵の類。【一二】 萬、多きないふ。【一三】 恐若唯虎 恐は猛なること、詩經に虺虎の語あり、唯虎同じ、虎の怒りほゆるないふ。

【一四】 子 魏將軍をさす。【一五】 監 監督する。【一六】 起家 単き家の地位より起るをいふ。【一七】 列宿 宿はよくみがいて白くひかる刃の色をいふ、魏は「ほこ」三品へ三位）ほどの官になれば門に紫殿へ朝を彩色の漆油にてぬる）をならべる。【一八】 一日 一朝、一旦の類。【一九】



二重の口ばみをかませさへした。さうして堅い甲冑を被り、鋭い劍戟を執つて西極の地方を略取し、崑崙・月窟のはるか西までゆき、そこからみると崑崙や月窟の東にあつて高く聳えてみえるといふほどの處まですんだ。」天子の御門のなかの羽林軍には萬人もの猛士がゐて、その猛悪さは怒りほゆる虎の如くであるが、それ等のものどもは君の監督の下にあるのである。君は一朝にして青海地方を過ぎて其の威力を以て騷亂を鎮めて兵船の帆を巻いてしまひ、わづか五年の年月のうちに下位の家から起つて門に戟をたてならべるほどの身分になられたのである。」平生の同輩の者たちは徒らに蟲のやうにうごめいてゐる。長安の俠少年たちも君に對しては意氣消滅せんばかりである。君はまことに骨格はそびえて、精神は緊肅である、たとへば華山の峰の尖つたところへ秋の雉が飛んでゐる様このちがする。」君は雜金でつくつた馬具の裝飾の星の如くめぐつてゐる馬にのつて天上の河を越えられる。すると檣槍・突感の如き妖惡の星も靜かにして動くことなく、君の儀仗たる翠蓋・雲旗等の旗が互にうごいてすれあふ。(君の威力はすばらしいものだ。)自分は君のために起ちあがつて「丁都護」の歌をうたふ。さうして酒興もすがれになりかゝるころ舞ひの劍をさやにをさめて胸の奥をこまでをさらけだす。その時は鉤陳・玄武の星座いづれも蒼蒼たる色をして日はまつたく暮れてゐる。君は千年も萬年も聖明の天子を奉戴して忠勳をするであらう。かの臨江の節士などは君にくらべるとかぞへたてるだけのねうちもない。

白水明府舅宅喜雨 得過字 白水明府舅の宅にて、雨を喜ぶ、過の字を得たり

吾舅政如此 古人誰復過 吾が舅政此の如し、古人誰か復た過ぎむ。

碧山晴又濕 白水雨偏多 碧山晴れて又濕ひ、白水雨偏に多し。

精禱既不味 歡娛將謂何 精禱既に味ならず、歡娛將に何とか謂はむとする。

湯年旱頗甚 今日醉絃歌 湯の年旱頗る甚し、今日酔うて絃歌す。

【字解】 一、白水、縣の名、陝西省同州府にあり、奉先縣の北に在り。二、明府、縣の長官たる令を尊稱して明府といふ。

三、舅、母方のかぢをいふ、作者の母は崔氏、この舅は崔十九翁とよばれる人か。四、過、五歌の韻に属する字なり、衆と共に韻字をまぐりてこの字を得たるなり。

五、吾舅、崔氏をさす。六、政、縣の政治。七、如此、天地神明に感應して雨をふらすに至りしことをさす。八、晴又濕、蓋し一時大雨ありてあれしをいふ。九、白水、これは川をいふ、縣名はこの川の名より出でしなり。

一〇、精禱、精神をこめていのる。一一、不味、天地神靈の茫昧ならざるをいふ、こちらの誠を察して雨をふらしてくれたまひしをいふ。一二、歡娛、人間のよろこび、題の「喜」の字の意此にいたす。一三、謂何、なにといつてよいかわからぬ。

一四、湯年、殷の湯王の時、そのとき九年のひでりありしといはる。一五、旱、ひでり。一六、絃歌、琴をひきうたふ。

【題義】 白水縣の縣令崔十九翁が宅にて雨を喜びてつくれる詩。製作時は黃鶴は天寶十三年とし、仇氏は十四載としたるも確かならず。

【詩意】 吾が舅氏の政治は現に見る所の如くである、古の人でもだがこれ以上に出来ることができ

やう。大雨のあけく碧の山は晴れてはゐるがうるはうてゐるし、白水の川水は雨がひとへに多くて水量があふれてゐる。舅氏の精神こめたいのりによつて神靈は靈驗をあらはしたまうた。このよろこびは何というてよいかわからぬ。殷の湯王の時さへひでりがひどかつたといふのに、今日は人人みなよろこんで酔うて絃歌のさわぎをしてをる。

九日楊奉先會白水崔明府 九日、楊奉先、白水崔明府を會す

今日潘懷縣同時陸浚儀 今日本潘懷縣、同時の陸浚儀。

坐開桑落酒來把菊花枝 坐には開く桑落の酒、來りて把る菊花の枝。

天宇清霜淨公堂宿霧披 天宇清霜淨く、公堂宿霧披く。

晚酣留客舞鳧鳥共差池 晚酣客を留めて舞はしむ、鳧鳥共に差池す。

【字解】 楊奉先、奉先縣の令楊氏なり、奉先は同州府蒲城縣なり。白水崔明府、前時に見ゆ。潘懷縣、晉の潘岳をいふ、岳は河内懷縣の令となる。今日潘懷縣、同時の陸浚儀、浚儀、晉の陸機をいふ、機は浚儀の令となる。今日崔明府にあたり。坐、主人側をいふ。桑落酒、桑葉の落つるころでる酒なりといふ、晉の宣帝の時、美人この酒を飲ず、九日に之を百官に賜ふといへり。來、奉の側をいふ。菊花枝、九日には菊酒とて酒に菊花をうかべてのむ、故に枝をとる。天宇、字は、やれ、二字にてそをいふ。清霜、清き霜なり。公堂、廳の正廳をいふ。宿霧披、宿霧を披く。

前晩からのきりがわかれてはれる。【三】 晚酣、夕がたの酒の興たけなはなること。【四】 留客舞、客は崔明府、作者、などをいふ。【五】 鳧鳥、後漢の襄陽の令王喬が故事、潘懷縣の大史候鳥影の句下の註にみゆ。【六】 共、主客共に願合なれば、共にといふ。【七】 差池、たがひらがひになるさま、舞ふ故足どりが入りみだれるなり。

【題義】 九月九日に奉先縣令楊氏が自宅に宴席を設けて白水縣令崔氏を會合せしめた。作者も同席して作る。製作時は黃朝は天寶十四載の作なるべしとせり。奉先に在りて作る。

【詩意】 今日懐縣の令潘岳ともいふべき楊奉先が主人で、同時に浚儀の令陸機ともみなすべき崔白水が客としてをられる。主人はその坐に桑落の酒を樽からだしてもてなされる。客はここへでむいて來て節の物たる菊花の枝を把る。そらをみれば霜がきよらかであり、この正廳では前晩からの霧がすつかりはれた。夕方になつても酒興はさかんで主人は客をひきとめて舞ひをさせられるので、鳧鳥形をした鴈が主客いつしよにいりみだれる。

自京赴奉先縣詠懷五百字 京より奉先縣に赴き、懷を詠す、五百字

杜陵有布衣老大意轉拙 杜陵に布衣有り、老大にして意轉拙なり。

許身一何愚竊比稷與契 身を許すこと一に何ぞ愚なる、竊かに稷と契とに比す。

居然成濩落白首契濶 居然濩落を成せり、白首契濶を甘んず。

蓋棺事則已此志常觀鬱  
窮年憂黎元歎息腸內熱  
取笑同學翁浩歌彌激烈  
非無江海志蕭灑送日月  
生逢堯舜君不忍便永訣  
當今廊廟具構厦豈云缺  
葵藿傾太陽物性固難奪  
願惟螻蟻輩但自求其穴  
胡爲慕大鯨輒擬偃溟渤  
以茲悟生理獨恥事干謁  
兀兀遂至今忍爲塵埃沒  
終愧巢與由未能易其節  
沈飲聊自遣放歌破愁絕

棺を蓋へば事則ち已まむ、此の志常に鬱なるを觀ふ、窮年黎元を憂へ、歎息腸内に熱す。笑を同學の翁に取るも、浩歌彌々激烈なり。江海の志の、蕭灑として日月を送る無きに非るも、生れて堯舜の君に逢ふ、便ち永訣するに忍びず。當今廊廟の具、構厦に缺けたりと云はむや。葵藿太陽に傾く、物性固に奪ひ難し。願みて惟ふに螻蟻の輩、但自ら其の穴を求む。胡爲ぞ大鯨を慕うて、輒ち溟渤に偃せむと擬するや。茲を以て生理を悟るも、獨り干謁を事とするを恥づ。兀兀として遂に今に至れり、塵埃の沒を爲すに忍びむや。終に巢と由とに愧づるも、未だ其の節を易ふる能はず。沈飲聊か自ら遣る、放歌愁絶を破る。

歲暮百草零疾風高岡裂  
天衢陰崢嶸客子中夜發  
霜嚴衣帶斷指直不能結  
凌晨過驪山御榻在嵒嶮  
岨尤塞寒空蹴踏崖谷滑  
瑤池氣鬱律羽林相摩夏  
君臣留歡娛樂動殷膠葛  
賜浴皆長纓與宴非短褐  
彤庭所分帛本自寒女出  
鞭撻其夫家聚斂貢城闕  
聖人筐篚恩實願邦國活  
臣如忽至理君豈棄此物  
多士盈朝廷仁者宜戰慄

歲暮れて百草零つ、疾風高岡裂く。天衢陰りて崢嶸たり、客子中夜に發す。霜嚴にして衣帶斷ゆ、指直くして結ぶ能はず。晨を凌ぎて驪山を過ぐ、御榻嵒嶮に在り。岨尤寒空を塞ぐ、蹴踏すれば崖谷滑かなり。瑤池氣鬱律たり、羽林相摩夏す。君臣留まりて歡娛す、樂動いて膠葛に殷なり。浴を賜ふは皆長纓なり、宴に與かるは短褐に非ず。彤庭分つ所の帛、本寒女自り出づ。其の夫の家を鞭撻して、聚斂して城闕に貢す。聖人筐篚の恩、實に邦國の活せむことを願ふ。臣如し至理を忽にせば、君豈に此の物を棄てむや。多士朝廷に滿つるも、仁者宜しく戰慄すべし。

況聞内金盤盡在衛霍室  
 中堂有神仙煙霧蒙玉質  
 煖客貂鼠裘悲管逐清瑟  
 勸客駝蹄羹霜橙壓香橘  
 朱門酒肉臭路有凍死骨  
 榮枯咫尺異惆悵難再述  
 北轅就涇渭官渡又改轍  
 羣水冰從西下極目高岑兀  
 疑是崆峒來恐觸天柱折  
 河梁幸未拆枝撐聲窸窣  
 行李相攀援川廣不可越  
 老妻寄異縣十口隔風雪  
 誰能久不顧庶往共饑渴

況や聞く内の金盤盡く衛霍の室に在りと。  
 中堂に神仙有り、煙霧玉質を蒙ふ。  
 煖客貂鼠の裘、悲管清瑟を逐ふ。  
 客に勸む駝蹄の羹、霜橙香橘を壓す。  
 朱門酒肉臭し、路に凍死の骨有り。  
 榮枯咫尺異なり、惆悵再び述べ難し。  
 轅を北にして涇渭に就く、官渡又た轍を改む。  
 羣水(氷)西從り來る。極目高くして岑兀たり。  
 疑らくは崆峒より來るか、恐らくは觸れなば天柱」  
 河梁幸に未だ拆けず、枝撐聲窸窣たり。  
 行李相攀援す、川廣くして越ゆ可らず。  
 老妻異縣に寄す、十口風雪を隔つ。  
 誰か能く久しく顧みざらむ、庶くは往て饑渴を共にせむ。

入門聞號眺幼子餓已卒  
 吾寧捨一哀里巷亦嗚咽  
 所愧爲人父無食致天折  
 豈知秋禾登貧窶有倉卒  
 生常免租稅名不隸征伐  
 撫跡猶酸辛平人固騷屑  
 默思失業徒因念遠戍卒  
 憂端齊終南瀕洞不可撥

門に入れば號眺を聞く、幼子餓えて已に卒すと。  
 吾寧ぞ一哀を捨かむや、里巷も亦た嗚咽す。  
 愧づる所は人の父と爲りて、食無くして天折を致せしを。  
 豈に秋禾の登るを知らむや、貧窶倉卒たる有り。  
 生常に租稅より免かる、名征伐に隸せず。  
 跡を撫すれば猶酸辛なり、平人は固に騷屑たり。  
 默思す失業の徒、因て念ふ遠戍の卒。  
 憂端終南に齊し、瀕洞として撥ふ可らず。

【字解】

【字解】



【六〇】内金盤 内は大内、禁中をなす。金盤は黄金の大皿なり、食器の類。【六一】霜雪室 霜雪とは漢の霜雪、雪去病をなす。共に皇后の外戚なる故を以て貴位に居れり。こゝは用ひて楊貴妃の親戚楊國忠等に比したり。室は家をいふ。【六二】中堂 中堂、奥座敷。【六三】神仙 これは暗に楊貴妃等をなす。美しきこと仙人のこゝきを以てなり。【六四】煙霧 これは衣類のうすく美なるをたとへしならん。當時朝霞の衣などあり、或は曰く堂上焚く所の香の煙をいふと。【六五】家 かうむらす、おほふ。【六六】玉質 白玉の如き肌をいふ。【六七】煨客 あたたかな人、寒さ知らずの人、君寵をうけ貴き人をいふ。【六八】相鼠姿 、「てん」の毛皮のこみし。【六九】悲管 かなしきうな音をなす。【七〇】運 あとから節をおひしたがふ。【七一】清瑟 すんだ音をなす。【七二】勳客 客は賓客。【七三】駝蹄 らくだの蹄の肉を煮たあつもの。【七四】霜 霜を凝たたい。【七五】雁 一が他のうへにおしかぶさる、堆積の状をいふ。【七六】香楫 かんばしきみかん。【七七】朱門 富貴の家のあけの門。【七八】酒肉臭 臭とはあまりに多くある故、のこつて腐敗しきまきにはひないだす。【七九】骨 人骨。【八〇】榮枯 宮中の賜者は榮なり、路傍の凍死は枯なり。【八一】咫尺 八寸、一尺の距離。【八二】惻愴 うちめしき貌。【八三】再逢 二度言ひだす。【八四】北轡 車のかち轡を北へむける。【八五】涇渭 二つの川の名、長安から奉先へゆくには北に路をとり、この二水をわたる。【八六】官渡 官から設置してある渡りば。【八七】改轍 別な車道を通過する、或は出水のために官渡の位置がかはれるためならん。【八八】車水 水を或は氷に作る、余は氷に從ふ、車水は多くの氷なり。【八九】車丸 高く峻しき貌。【九〇】唳咽 甘肅省鞏昌府鞏州にある山の名。【九一】天柱折 「列子」湯問篇に共工氏が顛頂と帝たらんことを争ひ、怒つて不周の山に頭を觸れ、天柱を折り、地維を絶つ、云云とあり。【九二】阿暎 暎は「ふなばし」。【九三】拆 或は弄に作る、裂くること。【九四】杖屨 登臨恩寺塔時にみえたり、こゝはふなばしなさをへるつかへばしをいふ。【九五】帶車 車の安からざる貌。【九六】行李 行理なり、行理とは後我の間に聘問を遣する使者をいふ、こゝは一般旅客をなす。【九七】擗後 ちる、ひく。【九八】不可越 こえにくきをいふ。【九九】老妻 年よりの妻、楊氏をなす。【一〇〇】寄 寄寓。【一〇一】異縣 他縣、奉先をなす。【一〇二】十口 家族十人。【一〇三】風雪 時節のものをわぐ。【一〇四】顧 訪問してみまうてやること。【一〇五】庶 庶幾、こひわがはくは。【一〇六】入門 奉先に到着して我が寓居の門

にはひる。【一〇七】號曉 さげふ、なく、曉は男どものなきやまのをいふ字なれども、こゝは家人等がなくをいふ。【一〇八】車 なんぞ。【一〇九】拾一宜 拾はおく、やめて爲まざること、一宜は一たび宜しむこと、文字は「禮記」檀弓上にあつて、死に對して一宜を情まぬをいふ。【一一〇】甲巷 村の小路にある人。【一一一】亦鳴咽 むせびなきする、亦とは我と共にの義。【一一二】無食 食物なきこと。【一一三】致天折 わかじになまれく。【一一四】豈知秋禾登 禾は穀類をいふ、登はみのあるをいふ、豈知とは今かく穀物ができやうとは知らなかつた、の意、兒の死後のみりしが残念なりとの意。【一一五】貧窶 窶はみすばらしきこと。【一一六】倉卒 あわただし。【一一七】生 生活をいふ。【一一八】免租稅 作者右衛門尉兵曹參軍たり、此句によれば官たる故に租稅を課せられざるものとみゆ。【一一九】誰征伐 誰は屬すること、征伐にやらるべき人名の都類に屬する、即ち軍務に服せしめられるをいふ。【一二〇】撫歸 跡は平生の行跡なり、撫とはそれにそつて考へてみること。【一二一】顧 自分でさへなほ。【一二二】屢辛 つらし。【一二三】平人 一般の人人、特典にあづからぬ人人。【一二四】屢解 紛擾の貌。【一二五】默思 だまつてかんがへる。【一二六】失業徒 農民兵役にやられ農業に従ふを得ざるは業を失ふなり。【一二七】遠戍卒 遠地へまもりやられてある兵卒。【一二八】憂婦 憂のほし。【一二九】齊 ひとし、高まひとしきをいふ。【一三〇】終南山の名、長安の南にあり。【一三一】朔 天地の初、氣の分れざる貌、もやもやとしたさま。【一三二】微 音マツ、拾ふこと、手に取るをいふ。

【題義】長安より奉先縣へ赴いたとき心に感じたことをよんだ詩。奉先のことは「橋陵詩」にみゆ。製作時は天寶十四載十一月初の作。この歳の冬十月に玄宗は驪山温泉宮に幸ありて滞留せらる。作者の妻子は當時奉先縣にあり、蓋し楊奉先が保護の下にありしならん。作者之を訪ふために奉先に赴けるなり。安祿山は十一月丙寅の日に反しその報は同月九日に長安に達したり。詩中には反のことを言はざれば、事實反せしとして之を知らざりしなり。

【詩意】杜陵に一人の布衣の臣が居るが、このものは年がよつてからその抱いてゐる志意はいよいよ世間むきではなくなつた。彼は自己に許すことがどうしてあのやうに愚なのであらうか。内心では自己を昔の稷だの契だのにたぐへてをる。そんな大きな志をもつてゐるうちにそのまま零落してしまつたが、もとより白髪になつても艱難辛苦することは甘んじてそれにたへてゐるのである。自己の價值如何は一切萬事死後に棺に蓋をされてからきまるものとおもうてゐるから、いつも氣心を豁大にしてよくよせぬやうにとねがうてゐる。この者は一年中人民の身の上をしんばいし、なげいて腸が内腑で熱くなる。少年時の同學の友などから笑はれるが、彼は大にうたふことはいよいよ激烈である。彼は江海へのがれ去つてのんきに月日を送らうかとおもはぬでもないが、せつかく堯舜のやうな聖天子に生れあはせたので、すぐ之と永久のおわかれをするには忍びない。今日朝廷に在る人物は大屋を構へる良材として缺けてゐるとはいはぬが、自分の心はひまはりが大關の光の方へ傾くやうに君に向つて傾くので物の本性は實に他からそれを奪ひとるわけにゆかぬものである。よく考へてみると今の世に富貴を得てゐるけらむし、ありむしのやうなものどもは、ただ自己の住むに都合のよい穴を求めてゐるのだ。自分は彼等のまねをせず、なんで大鯨を慕うていつも大海の水に偃さうとするのか。こんなことではとてもろくな生活は立て得ないにきまつてゐるとは悟つても、どうしても自分としては權門富貴の前に何かを求めめるために面會をねがふやうなことは恥かしくてできぬ。かくてちつとし

たまま(或は不安のまま)今日に至つたが、どうして徒らに塵埃に此身を埋没させてしまふことにながなできやうぞ。昔の隱遁者たる巢父や許由に對しては結局愧づるけれども初の志節を易へて世間から引退してしまふことはできぬ。世間から引退せずには不平煩悶が多いから飲酒にひたつて聊かそれをおしのけ、きままに歌をうたうて強烈な愁をはらしてゐる。今はちやうど歳が暮れかかつてきまぎまの草が零落して、速度の強い風がふいて高い岡地が裂げんばかりである。空中の天路はくもつてうすぐらさがたかくそびえてゐる。自分はこのとき旅客として夜中に長安を出發した。霜はきびしくおいて衣の帯がちぎれる、しかし指が棒のやうでそれを結ぶことはできぬ。日の出かかる頃に驢山にさしかかる、いまはこの山の高いところに我が君の御椅子が設けられてゐる。寒空には蜺光の旌雲がふさいでゐる、あるいてゆくと崖や谷の路が氷結して滑かである。温泉のあたりは湯氣がたてこめてゐて、羽林軍のたてならべてゐる儀仗の器がからからすれあうて音をたててゐる。我が君とこの從臣とがここに逗留しておもしろいことをしてござるので、山石の嶮しきあたりには音樂を奏する音が殷殷とひびいてゐる。我が君から浴みを賜はるものは皆長い縷を垂れた貴い位の人人であるし、御宴に加はるものは短褐を着た貧乏ものではない。御所のお庭から臣下へお分ちになる帛はもと貧乏な女の手から出たものだ。その女の家にむちをあててそれをこちらへとりこんで、それを御城門へみつぎものにさしだしたものだ。聖天子がそれを竹のかごにいられて御恩寵として賜はるのはこの國

家人民が活きるやうにとおぼしめされてのことだ。であるのに臣たるものももしこの國家の最上に治まることについて怠るならば、(すまぬことだ。)天子はまさかその品物をお棄てになるおつもりではあるまい。朝廷には人物がたくさんみちてはをるが、この事を考へると仁慈の心あるものはみぶるひしておそれなければならぬ。」ましてや聞けば禁中の黄金の大皿の様な貴重品もすつかり衛氏や霍氏の(楊氏の)室へいつてをるとのことでないか。また奥ふかき御座敷には神仙のやうな美人がゐて煙霧のやうな著物で玉のやうな肌をおほうてをられるとのことであり、寒さ知らずのお客さまたちは「てん」の毛ごろもを着け、笛の音は悪の音によりそひ、御馳走には「らくだ」の蹄肉のあつものをすすめ、みかんの上にはだいたいがうづだかくつんである。かく一方に富貴の門には酒や肉がありあまつて腐臭を發してゐるが、他方路旁にはこえて死んでゐる人の骨がよこたはつてをる。わづか八寸か一尺離れると榮華と衰枯がこんなになちがふ、わがうらめしい胸のうちは之をくりかへしてはのべることができぬ。」驢山のそばから車のかち棒を北へむけて涇水・渭水の方へと就いて、官から設けられた渡りばでまた舊路とちがつたみちをとる。たぐさんの氷が西の方から流れくだる、みきはめるとそれは高くて山のそばだつやうだ、その氷は崆峒山あたりから來るので、それに觸れたら天の柱も折れはせぬかとおもはるほどである、幸に河の舟橋はまださげず、そのつかへばしらがぎゆうぎゆうあぶなさうなこゑをたててゐる、それへ旅客たちがわれもわれもとよちてひつつかまる、が川のはばが廣くて

なかなか渡りにくい、」いま我が老妻は他縣(奉先)に寄寓してをるので十人の家族と我とは風雪をへだててをる。だれがこの家族をながく見まはずに居られやう、どうか往いて餓も渴も一しよにしたいと思ふのだ。(やがて到着して)門にはひると家のものがなきさげふ聲がきこえる、なせかといふと我がをさな子は餓えてもはや死んでしまつたといふ、自分は死兒に對しなんで一哀するをやめやうぞ、自分のさまをみて近所の人たちもむせびなきをしてくれる。ただ自分ははづかしいとするのは、苟も人たるものの父親でありながら、食物が無いために子どもにわか死をさせたといふことである。もし秋までまてるものであつたら秋には穀物がよくみのつたのだ、さりとて知る由もなかつたのだ、貧乏の境遇はまことに手が届かずあわただしいものではある。」自分は生活中に於ていつも租税を課せられることから免れてをり、姓名は征伐にやられる人名のなかに屬せしめられずにある。比較的割りのいい自分でありながらそれでさへなは過去の行跡にそうてかんがへてみるとつらいことなのだ、ただの一般人はまことにざわついた生活をしてゐるにちがひない。生業を失つた人人のことをだまつてかんがへ、それにつけて遠方へまもりにてゐる兵卒らのことをおもふと、自分の憂のはしは終南の山の高さにひとしいほどたく、雲氣のやうにもやくやとして之を手にとらうとしてもとることができぬ。



奉先劉少府新畫山水障歌

奉先の劉少府の、新に畫ける山水の障の歌

堂上不<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>楓樹、  
 怪底江山起<sub>レ</sub>煙霧、  
 聞君掃却赤縣圖、  
 乘興遣畫滄洲趣、  
 畫師亦無數、好手不可遇、  
 對此融心神、知君重<sub>レ</sub>毫素、  
 豈但<sub>レ</sub>祁岳與<sub>レ</sub>鄭虔、  
 筆跡遠過楊契丹、  
 得非<sub>レ</sub>玄圃裂<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>瀟湘翻、  
 悄然坐<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>天姥下、  
 耳邊已似聞<sub>レ</sub>清猿、  
 反思前夜風雨急、

堂上合に楓樹を生すべからず、  
 怪む底の江山か煙霧起る。  
 聞く君が赤縣の圖を掃却して、  
 興に乗じて滄洲の趣を畫か遣ひと。  
 畫師も亦無數なり、好手には遇ふ可らず。  
 此に對すれば心神融す、知る君が毫素を重んずるを。  
 豈に但祁岳と鄭虔とのみならむや、  
 筆跡遠く過ぐ楊契丹。  
 玄圃の裂くるに非るを得ば、乃ち瀟湘の翻るなる無<sub>レ</sub>  
 悄然我を天姥の下に坐せしむ、  
 耳邊已に清猿を聞くに似たり。  
 反つて思ふ前夜風雨急なりしを、

からむや。

乃是瀟城鬼神入、  
 元氣淋漓障猶濕、  
 眞宰上訴天應泣、  
 野亭春還雜花遠、  
 漁翁暝踏孤舟立、  
 滄浪水深青溟濶、  
 欽岸側島秋毫末、  
 不見<sub>レ</sub>湘妃鼓瑟時、  
 至今斑竹臨<sub>レ</sub>江活、  
 劉侯天機精愛畫入<sub>レ</sub>骨髓、  
 自有<sub>レ</sub>兩兒郎揮灑亦莫<sub>レ</sub>比、  
 大兒聰明到、  
 能添<sub>レ</sub>老樹巖崖裡、

乃ち瀟城に鬼神入る。  
 元氣淋漓として障猶濕ふ、  
 眞宰上り訴へて天應に泣くなるべし。  
 野亭春還つて雜花遠く、  
 漁翁暝に孤舟を踏みて立つ。  
 滄浪水深くして青溟濶し、  
 欽岸側島秋毫の末。  
 湘妃瑟を鼓する時を見ざるも、  
 今に至つて斑竹江に臨んで活す。  
 劉侯天機精なり、畫を愛して骨髓に入る。  
 自ら兩兒郎有り、揮灑亦比莫し。  
 大兒は聰明到る、  
 能く老樹を添ふ巖崖の裡。

小兒心孔開

小兒は心孔開く、

貌得山僧及童子

貌し得たり山僧及び童子

若耶溪雲門寺

若耶の溪、雲門の寺

吾獨胡爲在泥滓

吾獨り胡爲ぞ泥滓に在る、

青鞋布襪從此始

青鞋布襪此從り始めむ

【字解】「劉少府、この劉は橋陵詩の「王劉英竹園」の劉なるべし、「文苑英華」の題注に奉先尉劉單宅作、とあれば、名は單なり、少府は縣の尉官（警察の事務を掌る）の敬稱なり。【二】新畫、あたらしくみがく、これを畫きし人が劉少府なるや否やは詳ならず、説は本文に出たす。【三】卿、ついで。【四】堂上、劉單が家の座敷のうへ。【五】合、まさに云云すべし。【六】底、なんの、俗語なり。【七】問君却却赤縣圖、乘興遣畫滄洲趣、蒼解は「君が赤縣の圖を却却すと聞き、我、興に乗じて君をして滄洲の趣を畫かしむ」ととく。而して却却は劉がかくこと、赤縣圖は奉先縣の山水の圖、乘興は劉が興に乗ずること、遣畫は社市が劉をして畫かしむること、滄洲趣は海上仙境の趣ととく。余はすべて劉が他の畫師をしてかかしめしものと考ふ。因つて却却するも他の畫師にかかせること、遣畫も劉が他の畫家にかかせることとみる。愚解にては「問君」の二字は下句までかかり、蒼解はただ上一句にのみかかる。【八】好手、畫の名工。【九】對此、此とはこの畫障をさす。【一〇】歇心神、歇とは畫と一つになりとるけこむをいふ、心神は觀者たる社市の心神なり。【一一】重毫素、毫は筆、素は絹をいふ、この畫障をさす、重とは之を貴重とするをいふ。【一二】郡岳、郡、並に唐代の名畫家。【一三】楊契丹、隋の參軍にして其畫、骨氣豊なりと稱せらる。【一四】支圖、又縣圖といふ、見書にある仙苑なり、山についていふ。【一五】裂、裂けて飛び來る。【一六】瀟湘、洞庭湖の南にある川、水についていふ。【一七】翻水がひつくりかへる。【一八】悄然、しんぼり。【一九】天姥、浙江省紹興府剡縣の南にある山の名、社市畫障の地。【二〇】

反思、以下四句は實に神あるをいふ。【二一】蕭城、奉先縣の舊名。【二二】鬼神入、鬼神がはひつてくる。【二三】元氣、字官問の元氣。【二四】淋漓、したたるさま。【二五】眞宰、心の主宰をいふ、昔者の精神をいふならん。【二六】上駟、天へのぼつて天帝に昇へる。【二七】天應位、畫者の精誠に感動して天が泣く。【二八】野亭、野に立てる亭、以下六句は畫面を説く。【二九】春遊、遊とば來るをいふ。【三〇】雜花、さまざまの花。【三一】遠、畫面にて遠方にみえるをいふ。【三二】帆、暮のくらがり。【三三】論、論、青き水をいふ、或は曰く川の名なりと。【三四】青篋、あなきひろうみ。【三五】秋岸、そばだてるきし。【三六】側島、かたむけるしま。【三七】秋寒束、秋の風毛はほそきものなり、これは畫形の微細なるをいふ。【三八】湘妃鼓瑟、舜の妻娥皇・女英の二人が舜のあとを追ひかけ湘水までゆき、舜の死せしことをきき湘水に身をなげて死し、湘水の女神となる、それが湘妃なり、この湘妃が洞庭の月夜に瑟を鼓くといふ古傳説あり。【三九】斑竹、斑紋ある竹、湘水の地方に産す、その竹は湘妃が涙を流したあとに生じたるものなりとの傳説あり。【四〇】江、湘江をさす。【四一】天機杼、心のはたらきが精微なり。【四二】入骨髓、愛畫の念が骨がらみになつてゐる。【四三】兒郎、男のこと。【四四】筆運、筆をふるひ墨汁をそそぐ、畫をかくこと。【四五】亦莫比、この「亦」の字が「父しかき子も亦た」の意にみえ、劉自身畫をかくに似たるも、劉がかかせる畫者に對しての「亦」とみればよし。【四六】心孔開、知識がひらきかけた。【四七】貌得、貌の音バク、かたちをにせてかくこと。【四八】若耶溪、紹興府會稽縣の南にあり、此の以下四句は題外に於て自家の感をもつたり。【四九】雲門寺、會稽縣南三十里にあり。【五〇】泥滓、滓は「かす。【五一】青鞋、わらぢ。【五二】布襪、ぬのでつくつくたつくした、旅裝をいふ。【五三】從此始、此とは今をさす。

【題義】奉先縣の尉官たる劉單の新畫の山水の圖のついたての歌。製作時は奉先にての作なるも前の「詠懷五百字」より前か後か不明。

【詩意】この座敷のうへに楓の樹が生えるといふ理窟はないが、（生えてゐる）。また不思議でないか、なんとといふ江か山か、そこから煙や霧がたちのぼつてゐる。（が實は不思議なわけではない）。聞けば君

は赤縣の圖をかかせたので、進んで興に乗じて更に滄洲の趣をも畫かせたのださうである。」世の畫師といふものは無數にたくさんあるが、うまい名工には遇ふことがむづかしい。然し此の畫に對すると精神がとろけこむやうな氣がする、君がいかにこの畫を貴重するかもうかがはれる。」この畫をかいた者は現代の祁岳や鄭度以上であるばかりでなく、その筆の跡は遠く隋の楊契丹よりもまさつてゐる。」崑崙山にあるといふ玄圃が裂けて飛んできたのでなければ、南方の瀟湘のかは水がぶちまけられたのではなからうか。この畫にむかつてゐると自分をしよんばり天姥峯の下に坐らせてくれたこちになり、耳のあたりですんだ猿の聲がきこえるやうである。ひるがへつてかながへてみるに前の夜に風雨が急であつたが、あれはすなはちこの蒲城縣へ鬼神がいきこんで來たのだ。(その鬼神がこの畫をかくことを助けたのだ。)いまみると宇宙の元氣が淋漓としただつてついでにまだ漏うてゐる。これは畫者の精神が天上へあがつて天帝に訴へたので天帝も感動して泣かれた爲なのであらう。」畫面をみると野なかの亭に春がもどつたかさまざまの花が遠くに咲いてゐる。すなごりの老人がくちらがり一つさびしい舟をふんで立つてゐる。青い水が深さうにたたへ、ひろうみがすつと廣くひらいてみえ、かたむいた岸や鳥が、すつと遠く毛すぢのさきほど小さくみえてゐる。湘妃が瑟をかきならすさまは見えないが、まだら竹は現に今も江のそばに生きてゐる。(畫面に斑竹あるなり)劉君は心のはたらきが精微であつて、その畫を愛する情は骨がらみになつてゐるといつてよろしい。だから自然

に二人のお子さんもその感化をうけたものか、畫をかくことがたぐひなく上手である。大な方のお子さんははや知識が十分ませてゐてこの畫面の崖の處へ老樹をかきそへられた。小さい方のお子さんは知識がひらけかけた處で、山寺の僧だの、童子だのをよくかかれた。」(この畫をみると南方へ旅行がしたくなる)あの若耶の溪、雲門の寺よ。自分ばかりはなんでこの塵世の泥かすの中にあるのだ。こんな處からのがれ出て、わらぢばき、布のくつたびの姿であそこをさしてこれから旅行を始めたく思ふ。

奉同郭給事湯東靈湫作

郭給事が湯東の靈湫の作に同じ奉る

東山氣濛鴻宮殿居上頭

東山氣濛鴻たり、宮殿上頭に居る。

君來必十月樹羽臨九州

君の來るは必ず十月なり、羽を樹て九州に臨む。

陰火煮玉泉噴薄漲巖幽

陰火玉泉を煮る、噴薄巖に漲つて幽なり。

有時浴赤日光抱空中樓

時有つてか赤日を浴せしむ、光は抱く空中の樓。

閩風入轍跡曠原延冥搜

閩風轍跡に入る、曠原冥搜を延く。

沸天萬乘動觀水百丈湫

天に沸いて萬乘動く、水を觀る百丈の湫。

幽靈斯可怪王命官屬休

幽靈斯れ怪む可し、王官屬に命じて休せしむ。

奉同郭給事湯東靈湫作

初聞龍用壯壁石摧林丘。  
 中夜窟宅改移因風雨秋。  
 倒懸瑤池影屈注滄江流。  
 味如甘露漿揮弄滑且柔。  
 翠旗澹偃蹇雲車紛少留。  
 簫鼓蕩四溟異香泱泱浮。  
 鮫人獻微綃曾祝沈豪牛。  
 百祥奔盛明古先莫能儔。  
 坡陀金蝦蟆出見蓋有由。  
 至尊顧之笑王母不遣收。  
 復歸虛無底化作長黃虬。  
 飄飄青瑣郎文采珊瑚鈎。  
 浩歌淶水曲清絕聽者愁。

初め聞く龍壯を用ひ、石を擧つて林丘摧く。  
 中夜窟宅改まる、移ることは風雨の秋に因ると。  
 倒懸に懸る瑤池の影、滄江の流れに屈注す。  
 味は甘露の漿の如し、揮弄すれば滑にして且つ柔なり。  
 翠旗澹として偃蹇たり、雲車紛として少しく留まる。  
 簫鼓四溟を蕩かす、異香泱泱として浮ぶ。  
 鮫人微綃を獻じ、曾祝豪牛を沈む。  
 百祥盛明に奔る、古先も能く儔する莫し。  
 坡陀たる金の蝦蟆、出見する蓋し由有り。  
 至尊之を顧みて笑ふ、王母收め遣めず。  
 復た虚無の底に歸し、化して長き黄虬と作る。  
 飄飄たる青瑣の郎、文采珊瑚の鈎。  
 浩歌す淶水の曲、清絶聽く者愁ふ。

【字解】【一】聞 和するをいふ、他人が詩を作りたるに、我はその詩につけて我が言をのぶるなり。【二】郭給事 郭は姓、名は不詳、給事は官名、給事中をいふ。【三】揚東雪浪 揚は廬山の温泉をいふ、雪浪とは龍の住む不思議な池をいふ。【四】東山 廬山をいふ、長安の東に在ればなり。【五】氣 温泉の氣。【六】波瀾 或は鴻濤に作る、もやくや。【七】宮殿 華清宮をいふ。【八】上頭 上方。【九】君 玄宗。【一〇】十月 玄宗遊樂のため十月に行幸あり、後遊きて歸る。【一一】樹羽 羽旗をたつ、羽旗は羽をかざりし旗なり、華先縣陳賈詩の羽林相摩夏と同意ならん。或は樂器の裝飾ととも恐らく非ならん。【一二】臨九州 九州は天下をいふ、天下に臨むとはこゝにて政治を觀らるるをいふ。【一三】餘火 地の底の火。【一四】玉泉 温泉のうつくしき水。【一五】噴薄 湯氣の下よりふきだすさま。【一六】浴赤日 山海經に養和が日を甘泉に浴せしむる話あり、こゝは温泉が太陽の光りをひたすをいふ。【一七】空中樓 離宮の高きをいふ、宮に觀風樓、翔鼓樓等種種あり。【一八】閭風 崑崙山に三角(隅)あり、其の一角を閭風の巖といふ。【一九】入轍跡 周の穆王、八匹の駿馬に駕し崑崙の上に升れり、玄宗が廬山に遊ぶを穆王が崑崙に遊ぶに比したり、又句の造り方は天子の馬車が閭風を踏むといふべきを逆に閭風が轍跡に入るといへるなり、轍跡はくるまのわたちのあと。【二〇】曠原 崑崙東北隅の野の名。【二一】延冥搜 延はまねきよめる、冥搜は奥ふかくさぐることを、これも上句の如く、天子が曠原を冥搜すといふことを、曠原の方が天子の冥搜をひくといひなせるなり。【二二】沸天 やかましき響聲が天邊にわきおこる。【二三】萬樂助 天子の一行が助きだす、樂は車一臺をいふ、昔、天子の園は兵車萬樂を出す、又天子出御せらるれば千樂萬騎のお伴あり。【二四】懸水 水は靈湫の水。【二五】百丈 ふかさをいふ。【二六】幽壑 湫の中にすむ怪物をさす。【二七】王命官屬休 これ「穆天子傳」中の語を用ひたり、玄宗、臣下に命じ休息をたまはるるをいふ、それは幽壑を觀、且つ祭るためなり。【二八】初聞 まへかたきく。此の下四句は昔のことなまかのぼりて敘す。【二九】龍用壯 壯とは龍の壯なる力をいふ。【三〇】擊 わかつ。【三一】摧 くだける。【三二】窟宅 いはあなのすみか、これは龍がこの湫へ來ぬ以前に棲息せる所をさす。【三三】改 かはる。【三四】摧 移、こちへ移轉すること。【三五】風雨秋 風雨のある秋の時節。【三六】倒懸、この湫上にさかさまにぶらさがり、影がうつるをいふ。【三七】瑤池影 瑤池は廬山の温泉をさす、こゝは温泉宮全體をさしその宮殿樓閣の影を影といへり。【三八】屈注 屈折して

そそぐ、この湫は冷水（又は零水）となりて北の方清水にそそぐといへり。【六〇】 清江流、ひろき川の流れ、これは清水をさすならん。【六一】 漿、しる。【六二】 揮弄、ふるひもてあそぶ。【六三】 清且柔、水質のきめよきこと。【六四】 翠旗、天子の旗は翠羽を以て、森（かざりのふき）としてつけるゆゑ、之を翠旗といふ。【六五】 滄儀、長門賦にみゆ、滄は動くさまと注せり、儀はうねりたる貌。【六六】 雲車、五色の雲を畫きし車、これは楊貴妃の車をさせるならん。【六七】 紛、みだるさま。【六八】 少留、しばしとどまる。【六九】 雷、震ひうごかす。【七〇】 四溟、四海、こは水の四面をいふならん。【七一】 異香、なみなみならぬよき香、龍を祭るときくゆらすなり。【七二】 洗滌、廣大なる貌。【七三】 鮫人、搜神記に南海に鮫人ありて魚の如く水中にすみ、紡績をなし、時時水ないでて人家に來りて簾（うすぎぬ）を賣るといへり、鮫人は人魚の類なり、こにては舟人をさしていへるなるべし。【七四】 鮫、龍にむかつて獻するなり。【七五】 微斯、いとほそきうすぎぬ。【七六】 會説、穆天子傳にみゆ、會は重（かまなる）なり、會説とは累代説を兼とするものないふか、説は「ばふり、神と人の媒介をするもの。【七七】 沈家牛、蒙牛は毛のふさふさした牛、沈むるは之を龍にささぐるなり。【七八】 百祥、さまざまのめでたきしるし。【七九】 奔馳、奔とは相奔逐するをいふ、盛明は天子の德をいふ、何焯の説に「百祥」の二句は當時の慶を獻する徒が是の語を爲すなりといへり、蓋し然らん、作者がかく情じて言ふには非ず。【八〇】 古先、むかし、先代。【八一】 真能、備は「たぐひ、今とならぶものなしといふなり。【八二】 峻、高大なる貌。【八三】 金銀、黄金色のひきがへる、是は安祿山のことなたとへたりといへり、蓋し然らん。【八四】 出見、見は現なり。【八五】 五尊、玄宗。【八六】 之、蝦蟇をさす。【八七】 王母、西王母、楊貴妃をたとへていふ。【八八】 不道、敬とは捕へるをいふ、他人に命じて「ひきし、なつかめさせぬ。【八九】 歸、もどる。【九〇】 虛無底、靈湫のそこ。【九一】 龍、龍の角なき者、蝦蟇の一段は貴妃のために驪山が增長するにいたりしことを寓せしなるべし。【九二】 風飄、後逸なる貌、郭の人からないふ。【九三】 青瑣、給事中をいふ、漢の時、給事中門侍郎は日暮に青瑣門に入りてこたふ。【九四】 文采、文章のあや。【九五】 珊瑚、珊瑚は龍をつるすかきなり、「さんご」にてそれを造る。【九六】 浩歌、大聲にてうたふ。【九七】 渾水曲、古の詩曲の名なりといへり、如何なる歌辭なりしや詳ならず、郭給事の原作をさす。【九八】 清絶、香調が非常に清らかなこと。【九九】 聽者愁、きく人がかなしくなる。

【題義】 給事中の郭氏が驪山温泉の東にある靈湫について作つた詩に和して作つた詩。製作時は安祿山の反は天寶十四載十一月にあり、此の時はその反跡ありて猶反せざりし時の作ならんといへり。或は作者が奉先縣に赴くときの作とせり、しかし他人の詩に和したるものなれば、必ずしも奉先に赴くときの作なりとも断定しがたし。

【詩意】 長安の東にあたる驪山にもやくやと煙氣がたちこめてゐる、その上方に宮殿がおかれてある。我が君がここへおいでになるのはきつと十月で、ここに羽旗をたてて天下の政をこらんにする。ここでは地のそこにある火が美しい温泉の水を煮て、その湯氣がふきだして巖にみなぎつてくらくつばくある。その温泉の水は時には赤き太陽をひたし、その光は空中たかくそびえた樓を包んでゐる。ここへ我が君は周の穆王のやうに行幸になり、閭風ともいふべき仙山は君の轍のあとにはひり、曠原ともいふべき原野は君の御さぐりをまねくことになつた。すなはち萬乗の御車がうごいてそのひびきは天上にわかかへり、温泉の東にある百丈の湫に水をこらんにする。湫の中には怪物がある。ここで君は從臣のものたちに休息を賜はつた。まへかた聞くに、龍が力をだして石をわつて林や丘をくだいた。さうしてその龍は夜なごろ自分のすまひのいはやをかへて、風雨の秋に乗じてこの湫へ移轉してきたといふことだ。今この湫には瑤池ともいふべき温泉宮の影がさかさまにかかつてうつり、湫からあふるる水は屈折して大かほの流れにそそぎこむ。この水をなめてみると甘くして甘露のしるのや

奉天郭給事楊東嶽作

うであり、手でなぶつてみれば滑かに柔かである。」ここへ天子の御旗がうねうねとうごいてやつてき、五色の雲を畫いた車が多くみだれあつまつてきてしばしとどまる。簫や太鼓の音が湫の四面をふるひうごかし、えならぬ香りがひろびろとうかぶ。鮫人のやうな舟人はほそく纏つたうすぎぬを湫の盤にたてまつり、會祝のはふりは毛の多い牛をにへにしづめる。君の盛明の徳にあひてさまざまのめでたいしるしがかげめぐり、古代とても今にたぐふべきものはないほどである。時の人のいふところでは、そんな時世だから、このあたりに岡ほどもある大きな金色の蝦蟇が出現するのも由来があるのである。我が君はその蝦蟇を顧みてお笑ひになる。西王母(楊貴妃)もその蝦蟇をつかまへさせもされない。そこで蝦蟇はふたたびがらんだうの水底へもどつてしまひ、さらに化けて長い黄いろな虬となつてしまつた。」ここに細事にはかかはらぬ我が青瑣の郎たる郭給事はその文采のうつくしきことは珊瑚の鈎の如くである。その人が作つたこの湫に關する詩、昔の涿水曲にも比ぶべきその詩を、大聲にうたふと、音調非常に清かであつて聽く人はみなかなしくなるのである。

後出塞 五首

後出塞 五首

男兒生世間。及壯當封侯。  
戰伐有功業。焉能守舊丘。

男兒世間に生る、壯なるに及びては當に侯に封せらるべし。  
戰伐すれば功業有り、焉ぞ能く舊丘を守らむ。

召募赴薊門。軍動不可留。

召募せられて薊門に赴く、軍動いて留まる可らず。

千金裝馬鞭。百金裝刀頭。

千金馬鞭(鞍)を裝ひ、百金刀頭を裝ふ。

閭里送我行。親戚擁道周。

閭里我が行を送り、親戚道周を擁す。

斑白居上列。酒酣進庶羞。

斑白なるは上列に居る、酒酣にして庶羞を進む。

少年別有贈舍笑。看吳鉤。

少年は別に贈有り、笑を含みて吳鉤を看る。

【字解】(一) 及壯封侯、後漢の班超・班固、みなかかる言をなしたり。(二) 舊丘、故郷のかをいふ。(三) 召募、上から召されたつられる。(四) 薊門、關の名、今直隸省順天府薊州にあり、安祿山の根據地の方面なり。(五) 裝、裝飾する。(六) 馬鞭、鞭を鞍に作れる本あり、鞍の方よろしからん。(七) 刀頭、つかがしらの鍔。(八) 閭里、閭も二十五家をさす、こゝは己がむらなをいふ。(九) 擁、たしかかへる、包圍狀をなすこと。(一〇) 道周、周とは道の曲りめをいふ。(一一) 斑白、こまじほめたまの老人。(一二) 上列、上座。(一三) 進庶羞、進とは行者の前へもちだすこと、庶羞はもろもろのすすめもの、御馳走の出品。(一四) 少年、年わかき人。(一五) 贈、行者に對する贈りもの、即ち矢句の吳鉤。(一六) 舍笑、行者がにつこりする、吳鉤を贈られしうれしきなり。(一七) 吳鉤、吳の地方でできる彎曲したつるぎ。

【題義】前に「前出塞」の詩あり、これは事が後にある故に後出塞といふ。然れどもその名づけかたは前には單に「出塞」とありしをこの後の出塞ができてのちに之を「後出塞」とし、前なるを「前出塞」と名づけしなるべし。天寶十四載三月壬午の日に安祿山は奚・契丹と漢水(大遼河)に戰ひて之を敗る、而して洛陽の兵を發して漁陽の方に赴かしむ、この詩は之がために作る。製作時は第五首を

みるに祿山の反に言及せり、反後まぢかき頃の作なるべし。

【詩意】男兒たるものこの世に生れた以上は、壯年になつたら侯の位に封せらるべきである。從軍して戦伐をすれば功業ができる。(功業ができれば侯に封せらるることが出来る。)どうして故郷の丘ばかり守つてじつとしてゐることができやうぞ。(以上の考から)自分は召募されて荊門の方へと赴く、ひとたび軍が動きたすと一つとところにとどまつてゐるわけにはゆかぬ。自分も千金を費して馬の鞍を(或は鞍)を裝飾し、百金をだして刀鏃のかざりごしらへをしてこれからでかけるのだ。このとき村の人たちは自分のでかけるのを送つてくれ、親戚の者どもは道の曲りめのあたりを包圍してゐる。その中で斑白の老人は上席にゐて、その人が酒たけなはなるころ、自分にさまざまのごちそうを進めてくれる、また少年の人は別に自分に對して吳鉤の贈りものをくれる。自分はそれをもらつてまことにうれしくおもひ、につこりとしてそれをながめるのである。

〔一〕

〔二〕

朝進東門營暮上河陽橋。

朝に東門の營より進み、暮に河陽の橋に上る。

落日照大旗馬鳴風蕭蕭。

落日大旗を照らす、馬鳴いて風蕭蕭たり。

平沙列萬幕部伍各見招。

平沙萬幕列す、部伍各々招かる。

中天懸明月令嚴夜寂寥。

中天明月懸る、令嚴にして夜寂寥たり。

悲筋數聲動壯士慘不驕。

悲筋數聲動く、壯士慘として驕らず。

借問大將誰恐是霍嫫媯。

借問大將は誰ぞ、恐らくは是霍嫫媯ならむ。

【字解】(一) 進、前へ進出するをいふ。(二) 東門營、東門は洛陽の城の東門、營は東門外に在るべし。(三) 河陽橋、河陽は縣の名、古の孟津、洛陽の東北、黄河の近くにあり、そこに舟楫を設けて北へわたす。(四) 馬鳴風蕭蕭、「詩經」の車攻詩に蕭蕭馬鳴とあるに本くといふ、蕭蕭はしづかなるさま。(五) 萬幕、多くのまく、兵舎の用に供するもの。(六) 部伍、分隊をいふ。(七) 見招、人員の點呼をうくるなり。(八) 令、指揮官の命令。(九) 寂寥、ひっそり。(一〇) 悲筋、かなしげなあしおえ。(一一) 動、なりだす。(一二) 誰、ものがなし。(一三) 不驕、あがりたる氣色なし。(一四) 借問、かりにとよ。(一五) 霍嫫媯、漢の武帝の時の名將霍去病なり、嫫媯校尉となる。

【詩意】自分は朝に洛陽の東門の營から前進して、暮には河陽の舟橋のあたりまでやつてきた。落ちかかる太陽が陣中の大旗を照らしてゐるし、馬はいないで風がしづかに吹きわたつてゐる。河ちかくの沙はらには宿舎の用意とてたくさん幕がたつらなつてをり、各隊の分隊はそれぞれ點呼をうける。そのころはそのもなかに明月がかかつて號令のこゑいかめしくひびいて夜はしんとしてゐる。また悲しげなあしおえがふたこゑ三こゑなりだすと、いかな壯士ものあはれさ身にしみていつものたかぶりもみえぬ。かりにたづねん、かかる軍隊をひきゐる大將はもだれであるかと。それは恐らくは漢の霍去病のやうな人であらう。

〔三〕

古人重守邊。今人重高勳。

古人は守邊を重んず、今人は高勳を重んず。

豈知英雄主。出師互長雲。

豈に知らむや英雄の主、師を出だして長雲互る。

六合已一家。四夷且孤軍。

六合已に一家なるに、四夷に且つ孤軍。

遂使貔虎士。奮身勇所聞。

遂に貔虎の士をして、身を奮つて聞く所に勇ならしむ。

拔劍擊大荒。日收胡馬羣。

劍を抜いて大荒を撃ち、日に胡馬の羣を收め、

誓開玄冥北。持以奉吾君。

誓つて玄冥の北を開いて、持して以て吾が君に奉せむ。

【字解】 守邊 國をかひをまもること、敵を攻めず、敵から侵されぬやうにつとめるをいふ。【二】高勳 高いいさをしをたてること、これは戰爭をしてたてるなり。【三】豈知 意外なるをいふ。【四】英雄主 えらい人主、玄宗をさす。【五】互長雲 長き雲のひきはふ如くなるをいふ、多きをたとへいふ。【六】六合 天地と四方。【七】一家 天下一統して一家のことし。【八】四夷且孤軍 此句は孤軍の二字に屬すべき勳詞を省略したる不完全句なり、孤軍を「出だす」とか「留む」とかいふ語を添へてみるべし、四夷は四方のえびす、四夷に對して孤軍をいふ。【九】貔虎士 つよき兵士、貔は豹の如き獸なり。【一〇】奮身 身の力をふるふ。【一一】勇所聞 我が耳にした所に對して勇氣をだす、耳にした所とは、天子が四夷にむかつて兵を用ふるおぼしめしなりとのことをさす。【一二】拔劍 以下四句は兵士の決心をいふ、即ち「勇所聞」の事實なり。【一三】大荒 遠方不毛の地をさす。【一四】日收 毎日とりこむ。【一五】胡馬 北方のえびすの馬。【一六】玄冥 北方の神の名、北方の地をさしていふ。【一七】奉 たてまつら、ままげる。

【詩意】むかしの人は消極的に國をかひを敵に對して守るだけを重んじたが、今の人は之に反して戰をしかけて高い勳功をたてることを重んじてゐる。意外にも我が英雄君主たるおかたもいくさをたくさん外へおだしになつてまるで長い雲がひきはへたる如きさまである。今や天下は統一されて一家の如くであるのに四方の夷にむかつて孤軍をおだしになる、君主がこんなおぼしめしであるから、つひに勇猛貔虎の如き兵士をして身をふるつて自分が聞いてゐる所（君主のおぼしめし）に對していさみたせるやうにならせるのである。すなはち彼等兵士は劍をぬいて極遠の荒地をうち、毎日敵から胡馬のむれをうばひとり、心に誓つて玄冥の神が支配する土地の北を開拓して、それを持つて吾が君主にたてまつりたいものだといふやうにかんがへてゐる。

〔四〕

獻凱日繼踵。兩蕃靜無虞。

凱を獻すること日に踵を繼ぐ、兩蕃靜にして虞無しと。

漁陽豪俠地。擊鼓吹笙竽。

漁陽は豪俠の地なり、鼓を撃つて笙竽を吹く。

雲帆轉遼海。稔稻來東吳。

雲帆遼海に轉ず、稔稻東吳より來る。

越羅與楚練。照耀與臺驅。

越羅と楚練と、與臺の驅に照耀す。

主將位益崇。氣驕凌上都。

主將位益崇く、氣驕りて上都を凌ぐ。



邊人不<sub>レ</sub>敢<sub>レ</sub>議<sub>レ</sub>議者<sub>二</sub>死<sub>レ</sub>路<sub>一</sub>衢

邊人敢<sub>レ</sub>て議せず、議する者は路衢に死す。

【字解】【一】獻凱 周禮 大司樂に王の師大に捷つときは凱樂を奏せしむ、凱或は愷に作る、やばらくこと、からいくさにはやばらぎたる音楽を奏してかへりきたる、この獻凱は捷報を奏することないふ。【二】鐵籠 籠は「くびす」、使者の足があとからあとからつづくないふ。祿山は天寶十三載の二月、四月、十四載の四月にみな突、契丹を破りしことを奏せり。【三】兩蕃 突契丹の二蕃。【四】廣 広、おそれ、しんばい。【五】漁陽 今の直隸順天府の地方をいふ、唐のとき幽州といひ、范陽郡といひ、又そのうちに薊州を折ち、漁陽郡といへり。【六】秦快 なたたての氣風。【七】鼓鼙、竿、みな軍中の宴樂に用ふ。【八】雲帆 雲を帯びた帆、船をいふ。【九】轉、うつつてゆく。【一〇】遼海 遼東方面の海、唐の時は揚州(江蘇省)に倉を置き水運によりて貨物を東北に輸送せり、祿山范陽に居るによりて南方より船が赴くなり。【一一】粟稻、ワルンネ。【一二】東吳 江蘇省地方。【一三】越嶲 浙江省地方でできるうすぎぬ。【一四】楚練 湖南湖北邊でできるれりぎぬ。【一五】照耀 てりががやかす。【一六】吳臺、左傳(昭公七年)に士以下の臣を順に息、吳、楚、齊、魯、秦とかがあがりたり、いやしきものなり、こゝは現に兵士となりなるものをなます。【一七】驅み、からだ。【一八】主將 主人たる大將、安祿山。【一九】崇、たかし。【二〇】上都 天子の都をいふ。【二一】邊人 國の邊鄙の地に居るもの、祿山の管内のものをなます。【二二】讎、かれこれうはます。【二三】死、殺されてしぬ。【二四】路衢、衢は「ちまた」。

【詩意】漁陽の方から長安の方へ、毎日毎日またもかつた、かつたとの報知がつづいて奏せられ、突、契丹はしづかでないもしんばいはいはないといはれる。漁陽は俠客風の土地がらで軍中では太鼓をうつたり、笳や竿を吹きならしたりさわいである。南方から船は海路遼海へと轉じ、食料の米も吳の地方からくる。また越の羅や楚の練が賤しい兵士らの中からだをてりかがやかす。主人たる大將(祿山)はいよいよ位はたかくなり、その意氣は驕つて都をもしのぐありさまである。それでもこのひなかに居

る人たちは主人のことについてかれこれ批評がましいことはせぬ、なせといへば批評をしたが最後に路ばたで死なねばならぬから。

【五】

【五】

我本良家子出師亦多門

我は本良家の子なり、出師亦た門多し。

將驕益愁思身貴不足論

將驕りて益、愁思す、身の貴きは論するに足らず。

躍馬二十年恐孤明主恩

馬を躍らすこと二十年、明主の恩に孤かんことを恐る。

坐見幽州騎長驅河洛昏

坐ろに見る幽州の騎、長驅河洛昏し。

中夜問道歸故里但空邨

中夜問道より歸れば、故里但空邨なり。

惡名幸脫免窮老無兒孫

惡名は幸に脱免せるも、窮老にして兒孫無し。

【字解】【一】良家子 良家とは普通のよき人家をいふ、無賴の賤民、若くは罪人などの出身に非ることないふ。【二】出師 師をいだが大將がだすなり、こゝはそのいたす師に従うてでることないふ、從征多門と同様に用ふ。【三】多門 門は將門をいふ。いろいろな大將の門。【四】愁思 謀反でもしやうな嫌子ゆゑしんばいする。【五】身貴 自分からだが貴位にのぼり出世する。【六】不足論 そんなことばどうでもよい、とりあげていふほどのことばない。【七】孤、そむく。【八】明主 聖明の天子、玄宗をさす。【九】坐見 浦船は坐見を行見、立見の意にして其の期迫れるをいふのみとなせども、坐の字に必しも豫想の意はなからぬ、現にしかしつあるを「坐る」といひうべけん、余は現に起りかけたるをみる義となす。【一〇】幽州騎 漁陽は幽州に屬せ

り、幽州の騎とは鞍山部下の騎兵をいふ。【二】長驅。道のりする。【三】河洛。河は黄河、洛は洛水、洛陽にせまるをいふ。昔とは兵馬のため塵埃起りてくらくなるなり。【四】問道。わけみち。【五】故里。ふるさと。【六】空。住民たちさり、だれもをらぬむら。【七】惡名。謀叛の賊軍に従ふとの名。【八】脱免。そのなからのがれでる。【九】窮老。びんばふてとよる。【一〇】無見孫。こもこもない。これは自己が軍隊を逃走せしを殺されたるなりとくもあつても殺されしと否とは知るべからず、ただこもたすのさびさもないへるならん。

【詩意】自分はあたりまへの家からでた人間であつて、従軍するにいろいろの大將の門をくぐつたものだ。今の大将(鞍山)は意氣が驕つて(謀叛もしかねない)ゐるので内心ますますしんばいしてゐる、一身の貴くなるならぬなどはいふほどの値さへない。いままで二十年も馬を驅らせて軍務にしたがひ、ただ聖明の天子のご恩にそむきはすまいかとおそれてゐるのだ。それがどうだ、幽州の騎兵はそろそろごきだして河洛の方まで遠みちをかけ、あたりにはこりをくらくたせつある。(自分はそんな軍隊になかまいいりしてゐる氣はないから)夜なかにこつそりぬけみちからもどつてくると、ふるさととはみんな逃げたあととみえてだれもゐないあきむらになつてをる。自分は賊軍のなかまといふ惡名からは幸にのがれることはできたが、一私人としてかんがへると子も孫もない身なのだ。(かなしいことである。)

【餘論】かかる軍人が實在せしや否やは疑問なり、恐らくは作者が自己の理想を現實化してうたへるものならん。

蘇端薛復筵簡薛華醉歌

蘇端薛復が筵にて薛華に簡せる醉歌

文章有神交有道  
端復得之名譽蚤  
愛客滿堂盡豪傑  
開筵上日思芳草  
安得健步移遠梅  
亂插繁花向晴昊  
千里猶殘舊冰雪  
百壺且試開懷抱  
垂老惡聞戰鼓悲  
急觴爲緩憂心擣  
少年努力縱談笑  
看我形容已枯槁

文章には神有り交には道有り、  
端復之を得る名譽蚤し。  
客を愛して滿堂盡く豪傑、  
筵を開いて上日に芳草を思ふ。  
安んぞ健步遠梅を移し、  
亂れて繁花を挿みて晴昊に向ふこと  
千里猶殘る舊冰雪、  
百壺且試みて懷抱を開く。  
垂老聞くことを惡む戰鼓の悲しきを、  
急觴爲めに緩うす憂心の擣くを。  
少年努力談笑を縱にす、  
看よ我が形容已に枯槁せるを。

【字解】【一】有神。高歌有鬼神。下。蘇如神の神と同じく神助あるが如き妙あるをいふ。【二】有道。道とは道義にかなへるをいふ。【三】得之。之とは文の神と交の道とをいふ。【四】蚤。はやし。【五】上日。朔日、一日をいふ、これは正月の一日。【六】思芳草。花なき故なり。【七】安得。どうしたならばかくかくなることができやうか、希望の辭。【八】健步。健脚をいふ。【九】移遠梅。遠地にある梅をこゝへうつしてくる。【一〇】亂插繁花。梅のしげき花を亂雑に挿にはさむ。

【一】晴昊。はれたるそら。【二】急觴。前年からあるゆゑ、舊といふ。【三】且試百壺。且試百壺と同義、しばらく百壺の酒を試みに飲む。

座中薛華善醉歌

歌辭自作風格老

近來海內爲長句

汝與山東李白好

何劉沈謝力未工

才兼鮑照愁絕倒

諸生頗盡新知樂

萬事終傷不自保

氣酣日落西風來

願吹野水添金杯

如渾之酒常快意

亦知窮愁安在哉

忽憶雨時秋井場

座中の薛華善く醉歌す、

歌辭自ら風格の老ゆるを作す。

近來海内長句を爲る、

汝と山東の李白と好し。

何劉沈謝は力未だ工ならず、

才鮑照を兼ぬ絶せむことを愁ふ。

諸生頗る盡くす新知の樂み、

萬事終に傷む自ら保せざるを。

氣酣に日落ちて西風來る。

願くは野水を吹いて金杯に添へ、

渾の如きの酒常に意を快くせむ。

亦た知る窮愁安くに在るや。

忽ち憶ふ雨時秋井の場るるを、

【一】開寶池、むねにいだいてある

所を外へだしてしまふ。【二】重

老、老ゆるになんなんとして。

【三】職放、安祿山の反軍を討つ

ための太鼓の悲音。【四】急、急

やつきにつぐまかづき。【五】爲

爲、自己のためにゆるやかにする、

緩やかとは遅緩にならざることを。

【六】掃、つく、心が米をつくやう

にどきどきするをたとへていふ。

【七】少年努力、古樂府に少年不

努力、老大徒傷悲とあり、この努

力は行樂につとむるをいふ。【八】

氣、ほしいままにする。【九】枯

枯、枯もかれること、枯木のやうに

生気が無くなる。【十】歌辭、歌

の文句。【十一】風掃、歌の姿の

老熟するをいふ。【十二】長句、律

詩を長句といふことあれども、これ

古人白骨生青苔

如何不飲令心哀

如何不飲令心哀

如何不飲令心哀

如何不飲令心哀

如何不飲令心哀

如何不飲令心哀

如何不飲令心哀

如何不飲令心哀

如何不飲令心哀

如何不飲令心哀

如何不飲令心哀

如何不飲令心哀

古人の白骨青苔を生ず。

如何ぞ飲ずして心をして哀ましめむ。

如何ぞ飲ずして心をして哀ましめむ。

如何ぞ飲ずして心をして哀ましめむ。

如何ぞ飲ずして心をして哀ましめむ。

如何ぞ飲ずして心をして哀ましめむ。

如何ぞ飲ずして心をして哀ましめむ。

如何ぞ飲ずして心をして哀ましめむ。

如何ぞ飲ずして心をして哀ましめむ。

如何ぞ飲ずして心をして哀ましめむ。

如何ぞ飲ずして心をして哀ましめむ。

如何ぞ飲ずして心をして哀ましめむ。

如何ぞ飲ずして心をして哀ましめむ。

は歌行の類をさせるものならん。

【一】山東李白、李白は唐西成紀の

人にして蜀の彭明無青蓮地に生れた

【二】才兼鮑照、鮑照は宋の代の人、

絶倒とは

【三】新知樂、未知の人とあたらしく知りあひになるといふたのしみ。

【四】氣酣、酒めぐりて意氣のさかんになりしとき。【五】野水、野

【六】如渾之酒、多量の酒をいふ、「左傳」昭公十一年「有酒

【七】亦知、一に亦を不

【八】秋井場、この井は

【九】秋井場、この井は

【十】秋井場、この井は

【十一】秋井場、この井は

蘇端薛復が宴席にて薛華に手紙代りに寄せたるさかゝるひの時の歌。製作時は仇氏は天寶十

五載正月初旬の作との説を取り、詩中の「聞戰鼓悲を引き、諒山を討つこと」をいへりとなせり。

【詩意】文章はその妙なるに至つてはそこに人力以上のあるものが有り、また人間の交際に於てはそ

こに利益をはなれて眞の道義がある。蘇端・薛復はこの二つをもつてをるといふ名譽をやくからにな

うた。二人は賓客をこのんでその滿堂の人人は皆豪傑の士である、けふもけふとて二人は正月の一日に酒の筵をひらいて春のわか草でもながめたくかんがへた。自分ではできるならば健脚のものを煩はして遠方から梅をここへ移植してもらひ、晴れたそらにむかうてむらがる花を次第もなく髪にさしてあそんでみたく思ふ。」千里の遠きにわたつてまだ昨冬以來の冰雪がのこつてゐる、それに對して試みに百壺の酒をのんでむねのなかを開かうとする。この老境にさしかかつて戰太鼓の悲しい音をきくのはいやであるから、せきたててつぐ酒をのんで早鐘のやうにむねうつ心の動悸をゆるやかにしようとする。若い人たちはつとめて遊ぶつもりで自由に談笑をしてをるが、わたしの外貌はいまはやこんなに枯木のやうになつたのをみてくれるがよい。」一座では薛華がうまく酔うて歌をうたふが、その歌辭は自然に老熟した風格をなしてをる。ちかごろ天下のうちで長句の詩をつくるものは、君と山東の李白とがじやうずである。君にくらべると昔の何遜・劉孝綽・沈約・謝朓は詩力未だ巧みではないし、君の才はさらに飽照をも兼ねてをるから、飽照もまかされはせぬかと愁へるのである。」ここでわかい人人と同席して知りあひになつて十分樂みをつくしたが、結局萬事に於て自分はその一身へ安全に保てないことをいたましくおもふ。自分の醉がまはつて意氣さかんになつたころには太陽が落ちかかつて西風が吹いてくる。この風は我が手にする金杯の酒の上に野面の水を吹き添へて、瀝水ほどの多量の酒となつていつも我が意を快くさせてくれるわけにはまゐらぬか。さすれば窮愁もどこへ飛ん

でいつてしまふかわからぬのである。ここでよとおもふのは秋の長雨のときに我家の井がはの土のくづれることだ。(或は貴人の墳墓のくづれることだ)また古人の白骨も已に横はつてから久しく青い苔が生じてをるではないか。それこれをかながへると、どうして酒を飲まずに我が心をかなしくさせてゐることができやうぞ。

晦日尋崔賅李封

晦日、崔賅李封を尋ぬ

朝光入甕牖、尸寢驚敝裘。

朝光甕牖に入る、尸寢驚敝裘に驚く。

起行視天宇、春氣漸和柔。

起行して天宇を視る、春氣漸く和柔なり。

興來不暇懶、今晨梳我頭。

興來つて懶なるに暇あらず、今晨我が頭を梳づる。

出門無所待、徒步覺自由。

門を出づるに待つ所無し、徒歩自由なるを覺ゆ。

杖藜復恣意、免值公與侯。

杖藜復た意を恣にす、公と侯とに値ふことを免る。

晚定崔李交、會心眞罕儔。

晚に定む崔李の交り、會心眞に儔罕なり。

每過得酒傾、二宅可淹留。

過ぐる毎に酒を得て傾く、二宅淹留す可し。

喜結仁里懽、況因令節求。

仁里の懽を結ぶことを喜ぶ、況や令節に因て求むるをや。

李生園欲荒、舊竹頗脩脩。  
 引客看掃除、隨時成獻酬。  
 崔侯初筵色、已畏空樽愁。  
 未知天下士、至性有此不。  
 草芽既青出、蜂聲亦暖遊。  
 思見農器陳、何當甲兵休。  
 上古葛天民、不貽黃屋憂。  
 至今阮籍等、熟醉爲身謀。  
 威鳳高其翔、長鯨吞九州。  
 地軸爲之翻、百川皆亂流。  
 當歌欲一放、淚下恐莫收。  
 濁醪有妙理、庶用慰沈浮。

李生園荒れむと欲す、舊竹頗る脩脩たり。  
 客を引いて看るみる掃除す、時に随つて獻酬を成す。  
 崔侯初筵の色、已に畏る空樽の愁あらむかと。  
 未だ知らず天下の士、至性此有るや不や。  
 草芽既に青出す、蜂聲亦暖遊す。  
 農器の陳せらるるを見むと思ふ、何か當に甲兵休すべき。  
 上古葛天の民、黄屋の憂を貽さす。  
 今に至つて阮籍の等、熟酔身の謀を爲す。  
 威鳳高く其れ翔る、長鯨九州を呑む。  
 地軸之が爲めに翻り、百川皆亂流す。  
 當歌一放せむと欲す、涙下りて恐くは收むる莫らむ。  
 濁醪妙理有り、庶くは用て沈浮を慰せむ。

【字解】【一】朝光 朝の日光。【二】東顧 したひにてふまきたる土意、食量のまどをいふ。【三】尸衰 尸は屍(しがばれ)

なり、死人の如く下ぶしになりてれるをいふ。【一】駭姿 やぶれたまへも。【二】起行 おきてあるく。【三】天字 やれに似たる天空。【四】不暇顧 ぶしやうをしてあるひまがない。【五】樓 くしげづる、頭髪を「くし」でとす。【六】出門 わが家の門からでかける。【七】無所持 持つとはそれなかりなければならぬことをいふ、車馬儀仗の類をなす。【八】徒歩 ちちあるき。【九】杖藜 「あかぢ」のつみをつく。【一〇】志意 志は「ほしいまま」がつてにする。【一一】値 あふ。【一二】公侯 貴爵をもつ人。【一三】曉定 晩年になってからきめる。【一四】崔李交 崔李封との交際。【一五】會心 我が心にびつたりあふこと。【一六】翠錦 たぐひ少し。【一七】相遇 過とは「ちちから先方の宅へ過訪すること。【一八】二宅 崔と李との宅。【一九】淹留 ひましく逗留する。【二〇】結債 たがひによるこびかはすこと。【二一】仁里 仁者のなる場處、崔李の居地をなす、文字は「論語」に本く。【二二】令節 唐の時は正月晦日を令節とす、令節は祝日なり。【二三】求 尋れゆくをいふ。【二四】李生 封をいふ。【二五】借備 長き親。【二六】引客 お客をみちびく、お客とは自己をいふ。【二七】看 みるみるうちに。【二八】掃除 さうぢする。【二九】隨時 つがふのいい時に。【三〇】獻酬 獻は主人より客へ杯をなすこと、次に客より主人へかへす、之を酬といふ、次にまた主人より客へなす、之を酬といふ。【三一】崔侯 我をいふ。【三二】初筵色 酒宴の開け初めしときからの顔色。【三三】畏 おそれる。【三四】空樽愁 さかだるがからなるとのしんげい。【三五】天下士 一般世上の人。【三六】至性 至誠の性情。【三七】思見 作者がおもふなり。【三八】農器 耕作の器具。【三九】陳列 何 何時、いつか。【四〇】甲兵休 甲冑兵器の使用を止めること。【四一】葛天民 葛天氏は上古の君、葛天氏は其時の人民。【四二】貽 のこす、人におくりのこと。【四三】黄屋憂 天子のごしんばい。黄屋とは天子の馬車のほろのうらが黄色のきぬにて作られたるをいふ、因つて天子のこととす。【四四】阮籍等 阮籍は魏の世の人、竹林七賢人の一なり、こは借りて作者自身等をなす。【四五】熟醉 よひどれになる。【四六】爲身謀 一身の謀をなす。【四七】威鳳 威嚴ある鳳皇、賢人をたとへていふ。【四八】長鯨 身長のがさくくちら、悪人をたとへていふ、これは安祿山をなす。【四九】濁醪 九州 天下ちう。【五〇】地軸 地球のちう。【五一】當歌 うたをいふ、曹操の時に對し酒當歌、とみゆ。【五二】一放 ひとつたびか

つてにうたふ。【六】英歌、とりかたづけることができなからう。【七】酒、にこりさけ。【八】有妙理、ふしぎな道理作用がある。【九】座、れがはくは。【一〇】用、その酒を以て。【一一】沈浮、身の増減のうきしづみ。

【題義】正月のみそかに崔哉及び李封をたづねたる詩。製作時は天寶十五載正月ならんといふ。

【詩意】貧乏家屋の「もたひ」をあてた土窓に朝の日光がさしこんできた、屍のやうに伏せつてゐた自分は目をさましてやぶれごろもをきてゐるのにびつくりした。それから起きいであるきながらそらをよくながめてみると春の陽氣がふはりとやはらかに感ぜられる。かく興がうごいてくるといつもの様なふしやうをやつてゐるひまはなく、けふのあさは自分の頭髪をくしでとかす、(友を訪問の用意なり) 門から出かけるにあたつても自力以外にいりようなものはない、かちで歩くのは却て自由でぐあひがいいとおもふ。』あかざの杖をつきつつゆくのまきままでいい。公達の侯だのといふ連中にあふ世話がない。自分は崔李二君とはおそく交つたが、自分の氣にあうたことは真にたぐひが少い。この二人を訪問するたびに酒を得てはそれを傾ける、この二人の家ならばなく逗留することができ。二君の如き仁者の居る里でたがひによろこびかすことのできるのはうれしい、ましてけふの訪問は正月のみそかといふ祝日にあたつて訪ねたのであるにおいてをや。』李君はその圖が荒れかかつて、まへからある竹がよほどながくのびてゐる、ふだんは庭さうちもしてないのだが自分がかきたので自分を案内してくれながらみるうちに掃除をやり、をりのまにまに酒杯のとりやりをする。崔君は酒

筵の開けはじめたときからその顔つきが酒樽のからになりはせぬかときづかふ様子をしてゐる。今の世間の人たちに、その至誠の性情のこんなのがあるかどうかは自分にはわからぬ。(多分ありはずまい。』草の芽も、はや青みが出た。蜂の聲も暖かさをおうてあそんでゐる。この春の耕作時に自分は農具がもちだされるのを見たいと思ふ。いつになったら甲冑だの兵器だの用を止めることができるのであらう。上古葛天氏の時代の人民は平和で天子に心ばいをつけるやうなことはなかつた。(今は謀叛人が起つて心ばいをかけてゐる、それなのに) 今日では既籍の様な者どもが(自分たち)酒に酔ひどれになつて天下のため如何よりも自己一身につがふのいくふうをしてゐる。』鳳皇のやうな賢者は高くかけり去つてしまひ、長鯨のやうな悪人がはびこつて九州を呑まうとしてゐる。大地の軸も之がためにひつくりかへり、多くの川水はみなみだれて流れつつある。自分は十分さままに一つ歌をうたはうとおもふが、うたひだしたら涙が下つて收めきれなくなりはせぬかと恐れる。このときこのにぐり酒といふやつはなんといふ不しぎな道理作用をもつたものか自分にものおもひを忘れさせる效をもつてゐる、自分はどうぞこの酒をのんでそれでもつて我が身の浮き沈みのものうさをなぐさめやう。

白水崔少府十九翁高齋三十韻 白水の崔少府十九翁が高齋、三十韻

客從南縣來浩蕩無與適 客南縣従り來る、浩蕩として與に適する無し。

旅食白日長、況當朱炎赫。  
 高齋坐林杪、信宿游衍闋。  
 清晨陪躋攀、傲睨俯峭壁。  
 崇岡相枕帶、曠野迴迴一咫尺。  
 始知賢主人、贈此遺愁寂。  
 危階根青冥、曾冰生淅瀝。  
 上有無心雲、下有欲落石。  
 泉聲聞復息、動靜隨所激。  
 鳥呼藏其身、有似懼彈射。  
 吏隱適情性、茲焉其窟宅。  
 白水見舅氏、諸翁乃仙伯。  
 杖藜長松下、作尉窮谷僻。  
 爲我炊雕胡、逍遙展良覲。

旅食白日長し、況や朱炎の赫たるに當るをや。  
 高齋林杪に坐す、信宿遊衍闋たり。  
 清晨陪して躋攀し、傲睨峭壁に俯す。  
 崇岡相枕帶す、曠野迴にして咫尺なり。  
 始めて知る賢主人、此を贈つて愁寂を遣らしむるを。  
 危階青冥に根す、曾氷淅瀝たるに生ず。  
 上には無心の雲有り、下には落ちむと欲する石有り。  
 泉聲聞こえて復た息む、動靜激する所に隨ふ。  
 鳥呼びて其身を藏す、彈射を懼るるに似たる有り。  
 吏隱情性に適す、茲焉に其れ窟宅とす。  
 白水舅氏を見る、諸翁は乃ち仙伯なり。  
 藜を杖く長松の下、尉と作る窮谷の僻なるに。  
 我が爲めに雕胡を炊く、逍遙良覲を展ふ。

坐久風頗怒、晚來山更碧。  
 相對十丈蛟、欵翻盤渦坼。  
 何得空裏雷、殷殷尋地脉。  
 煙氛靄崑崙、峯巒森慘戚。  
 崑崙崑崙嶺、回首如不隔。  
 前軒頽反照、纈絕華嶽赤。  
 兵氣漲林樾、川光雜鋒鏑。  
 知是相公軍、鐵馬雲霧積。  
 玉觴淡無味、胡羯豈強敵。  
 長歌激屋梁、淚下流衽席。  
 人生半哀樂、天地有順逆。  
 慨彼萬國夫、休明備征狄。  
 猛將紛填委、廟謀蓄長策。

坐久しくして風頗る怒る、晚來山更に碧なり。  
 相對す十丈の蛟、欵ち盤渦を翻へして坼く。  
 何ぞ得む空裏の雷、殷殷として地脉を尋ぬるを。  
 煙氛靄として崑崙、峯巒森として慘戚。  
 崑崙崑崙の嶺、首を回せば隔たらざるが如し。  
 前軒反照類る、纈絶華嶽赤し。  
 兵氣林樾に漲る、川光鋒鏑に雜はる。  
 知る是れ相公の軍、鐵馬雲霧積めることを。  
 玉觴淡として味無し、胡羯豈に強敵ならむや。  
 長歌屋梁に激す、涙下つて衽席に流る。  
 人生哀樂半ばなり、天地順逆有り。  
 慨す彼の萬國の夫、休明には征狄に備へしを。  
 猛將紛として填委す、廟謀長策を蓄ふ。

東郊何時開帶甲且未釋（東郊何時開帶甲且未釋） 東郊何時か開けむ、帶甲且未だ釋けず。

欲告清宴罷難拒幽明迫（欲告清宴罷難拒幽明迫） 清宴の罷むを告げむと欲す、幽明の迫るを拒み難し。

三款酒食傍何由似平昔（三款酒食傍何由似平昔） 三款す酒食の傍、何に由つてか平昔に似む。

【字解】【一】白水 同州府白水縣、前にみゆ。【二】崔少府十九翁 崔十九翁は崔明府とは別人なるべし。前の「白水明府舅宅喜雨」の詩は崔明府なり、明府は縣令の敬稱、少府は縣尉の敬稱なり。【三】高齋 山岡の上にある書齋。【四】春 作者自己をいふ。【五】南嶽 奉先縣をさす、白水縣は奉先の北に在り。【六】浩蕩 悠遊不定止之貌なり、心のとりとめなくただよふさま。【七】無與適 無<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>吾意<sub>一</sub>適者なり、意にかなへる者なし。【八】旅食 たびすまひする。【九】白日長 日の長きこと、時夏にあたるをいふ。【一〇】朱紫絳 太陽のあかきほのほがあかあかとて、こればあつきをいふ。【一一】坐 設けの席にあるをいふならん。【一二】林杪 杪は、すみ、高き林木の上にあるをいふ。【一三】宿 二日宿するを宿といふ、宿は数日滞在するをいふ。【一四】遊衍 衍は廣がること、遊衍はさまざまにくつろいであそぶこと。【一五】閑 さいしきさま。【一六】清鏡 さいばりしたあまがた。【一七】階 崔翁のおとしする。【一八】閉學 のほり、よちる、高齋に向つてのぼるなり。【一九】僧説 ぬばりつながらめる。【二〇】僧 上からうつぶしてみおろす。【二一】僧壁 けはしくきつたてになつた岩壁。【二二】樹間 たかいたか。【二三】杖 杖しめひ、帯のやうにまつぱりあふ。【二四】野 野ひろの。【二五】道 道に作れる木あり、それに従ふ、道ははるかなり。【二六】尺 尺、八寸、一尺、まぢかく見ゆるをいふ。【二七】賢主人 主人とは崔十九翁をさす、我（作者）を客としてなす人なればかくいふ。【二八】階此 此とはこの高齋からの眺望をさす。【二九】道 道、やる、おひばらふ。【三〇】恐 恐、作者が抱いてをるうれひ、さびしき。【三一】危階 たかくてあぶなげなきざし。【三二】根青冥 根とは根ざし生ずるをいふ、青冥はあをそらなをいふ、階の高きを形容していへり。【三三】曾冰 層氷に同じ、いくへにもかさなつてきてあるこほり。【三四】漸 漸、これは溪谷間の風木の音をいふなる

べし、生漸は漸進たる處に生ずるをいふ。【三五】泉聲 泉（たき）の聲なり。【三六】聞復息 きこえたりまたやんだり。【三七】動靜 泉聲の動靜なり、聲が聞えるは動、息むは靜なり。【三八】隨所激 激とは風が水に激するをいふ、風のぶつかりしで泉聲が動いたり靜かになつたりする。【三九】疎其身 からだをあらはさま。【四〇】彈射 彈丸で射とめられること。【四一】東顧 背裏でありながら隱居者の生活をさす。【四二】適 かなふ。【四三】情性 主人のこころをいふ。【四四】茲焉 ここにての義。【四五】寗宅 いはや、なりどころ。【四六】舅氏 母方ををち、案ずるに、これは崔明府をさすならん、諸家の注みな舅氏たる崔明府とこの崔少府とを混同せり。【四七】歌翁 此はひろく他の諸翁をさして崔十九翁をその中にこめていへるならん。【四八】仙伯 仙人の伯の階級にある者、或は曰く伯は長、かしら、なりと。【四九】杖藜 あかさのつみをつく、これは自己についていふ。【五〇】窮谷僻 ゆきつまつた谷のかたよれるところ。【五一】秋 かしぐ、たいてくれる。【五二】臨湖 湖未なりといへり。【五三】展良體 展は志をのびやかにする、良體は良會なり、心おきなき會合なれば良會といふべし。【五四】十丈鏡 十丈の身長あるみづら、白水の川の水中の魔物をいふ。【五五】秋 たちまち。【五六】盤渦 わにまくうづまき。【五七】罅 罅、水面を裂開するをいふならん。【五八】何得 反語、不得といふの意、さうはありえないのに、なんでさうであるのかとがめていふこころなり。【五九】空裏雷 空中で鳴るかみなり。【六〇】股股 雷の鳴る音のさま。【六一】恐地脉 地脉までたづね来てそとで鳴る、これは實景を敘し、兼れて上の盤渦罅を形容していふならん、水聲雷のごとく地面まで雷が尋ね来てしやうなるをいふ。【六二】蟻氣 氣は妖氣（わるいき）なり。【六三】蕩 蕩もやくやとして。【六四】嵩阜 高峻なる貌。【六五】懸壺 川潭の神にして三歳の小兒のごとき状をなし、赤黒色にして、赤目、長耳、美髪のものなりといへり。【六六】森 しづかにたちならぶさま。【六七】慘戚 かなしみうれふる。【六八】崑崙 崑崙、崑崙に仙人の居る山、案ずるに、これは裏面に皇居を意味せるものか。【六九】前軒 南面ののきば。【七〇】類反照 夕陽のてりかへしのおとろへかかるをいふ。【七一】絶冠 非常にけげし。【七二】華嶽 華山、鄂州華陰縣にあり、白水よりは南方にあたりてみゆ。【七三】兵氣 いくさの氣。【七四】鏃鋒鏑 鏃は刃のほさま、鏑は矢のかぶら、これは鏃鏑の光りをいふ、鏑とは川の水の光と鏃鏑の光とがいりまじること。【七五】相公軍 相公は宰相の職にある番符輪をさす、安祿山反するや輪を以て太子先鋒兵馬元帥となし、明



年(天寶十五載)正月、尙書左僕射・同中書門下平章事に遷位す。時に輸二十萬の兵を統べて潼關を守る。潼關は華州の東にあり。【主】  
 鶴馬 よろほうたうま。【主】 雲霧積 雲霧の如く堆積する、多くあつまるをいふ。【六】 玉船 主人が自己にだしてくれたさか  
 づきをいふ、玉とほふるはしく飾りていへり。【七】 胡羯 えびす、安祿山の軍をいふ。【八】 長歌 聲をひいてうたふうた。【八】  
 屋簷 うつばり。【九】 祗席 衣のつま及びむしろ、坐すれば祗と席とは同此にあり。【九】 牛哀樂 哀しみと楽しみとが半分づ  
 つある。【一〇】 順道 順道と逆道、臣が君に對して謀叛するは道理に違らうた道なり、哀樂、順道と違へたれども哀、逆を主として  
 いふなり。【一一】 愜 なげく。【一二】 萬國夫 諸國の兵士たち、これは主として安祿山の賊軍に服従せしものをさしていふ。【一二】  
 休明 休は美なり、天子の徳の美にして明かなりしとき、平和なりし時期をさす。【一三】 備征狄 夷狄を征伐する用意にそなへ置  
 きたるものなり。【一四】 紛壤委 紛は多くありてみだるるさま、壤は塞がる、委は積もること、たくさんそのままおいてあるをい  
 ふ。【一五】 廟謀 朝廷のばかりごと、大事は宗廟に於てはかる故に廟謀といふ。【一六】 長策 馬を御する長き、むち、善良なる計略  
 をいふ。【一七】 東郊 長安の東方の野外、華州潼關などは東郊なり。【一八】 開 道路開通するをいふ。【一九】 帶甲 よろひをおび  
 てゐる。【二〇】 未解 ときてすることができぬ。【二一】 告 人が報知すること。【二二】 清室 福は「やむ、をばること。【二三】  
 相 こばむ、否定すること。【二四】 幽明 晝夜をいふ、夜を主としていふ。【二五】 平昔 ありしむかし、平和なりし時期をさす。

【題義】 白水縣の尉官たる崔十九翁が高齋にて作れる詩。製作時は天寶十五載夏の作とせらる。

【詩意】 自分は南の奉先縣からこの白水へやつて來たが心はとりとめなくうごいて自分の意になかう  
 たものはない。ここに食客となつてゐるといたづらに日が長く、ましてあかあかと夏の日のてりつく  
 頃にあたつてゐるのだ。自分は高い書齋の林のこすゑのやうなところに坐つて數日をすごすに、氣  
 はのんびりとしてゐるがいたつてもさびしい。けふのさつぱりしたあさげ主人に陪してこのとこ

ろへよちのぼつて傲然とめつつけながら絶壁をみおろしてみた。するとたかい岡は互にかきなりあう  
 たり、めぐりあうたりしてゐるし、ひろい原野はとほくはあるが咫尺の近くにある様な感じがする。  
 そこで始めて悟つた、我が賢い主人崔十九翁は此の景色眺望を自分へ贈つてくれてそれで自分のうれ  
 ひ、さびしさをおひやつてしまはせやうとしてゐるのだといふことを。この書齋の危げな階はあを  
 ぞらに生えてゐるかと思はれる、深間の風音のさわいでゐるあたりには幾重かの氷が生じてゐるほど  
 つめたい。上をみあげると無心の雲がかんである、下をみれば落ちかかつてゐる石がある。たきの  
 音はきこえたりやんだり、風の激しかた如何によつて動きたしたり、靜かになつたりしてゐる。また  
 鳥はどこぞで聲をだして呼んでゐるがからだはかくして現はさぬ、他人から彈丸で射られるのがこ  
 はいといふ様に。主人は吏であつて隱遁者の生活をするのがその情性になうてゐるのでそれでか  
 やうな場所を自己の棲地としてゐるのだ。自分は白水で舅氏崔明府に面會しに來たのだが諸翁た  
 ち(崔少府を)はみな仙伯とも申すべき人人だ。自分はここへきてせのたかい松の木の下であかざの杖を  
 ついてやすむ、あなたはこんな奥まつてだれもこぬ様な溪谷地に尉官となつてをられて(即ち仙人じ)自分  
 のために菑米をたいて下される。それで自分もここでぶらぶらしながらみなさんとの御面會するこ  
 ろを十分にのべることができぬ。しばらくここに坐つてをると風があれだす。日も夕方になつて山  
 の色はいつそう碧にみえる。川の方面では十丈もある蛟がにはかにうづまきをひつくりかへして水面

を裂く、まさか天上の雷が地面まで尋ねて来てごろごろ鳴りだすこともできないはずと思ふのにその様な昔がする。悪氣がもやくやとして山のそびゆる様に高くたち、罔兩の怪物もひつそりとしてかなしんでゐる。しかし嵐嶺、嵯峨の仙山はみまはしてみると遠く隔たつてゐるとはおもはれぬ。」(之は居に連想して華嶺兵氣) 南の軒にはてりかへしが衰へかかつてきた。きつたての華嶺がまつかみえる。軍の氣が林や巒にみなぎり、川の光りは鋒鏑の光りとまじりあうてゐる。(これは實景としては白水から見える云云に言ひ及ぶならん) それはないかといふと哥舒翰相公の軍隊がそのあたりに駐屯してゐるのでよろほうた馬が雲霧の様にたくさんあつまつてゐるのだといふことがわかる。それをかんがへると手にする杯もさつぱり水くさくて味がなない。まさかえびすどもは強敵ではあるまいに。(それが事實強きはど) 我がうたふ長歌はうつばりに激し、涙はくだつて衣のつまやむしろに流れる。人生には樂みと哀みは半分づつある。天地の間に順道ばかりはない。逆道がある、(今は真逆) なげかはしい事である。あの諸國の兵士どもも太平の時にはそれで夷狄を征伐する用意に置かれてあつたのだ。(それが賊につくとほ) 猛將はたくさんあるがそのままおいてある。朝廷にはなにか善い計略を蓄へてをらるのであらう。いつになつたら都の東の方面が開ける様になるだらう。いまよろひをつけたものがまだそれを解きすてることができずにをる。今やけふのさかもりも終止を告げんとしてゐる、夜がせまつてくるのをふせぎとめるわけにはゆかぬ。この主人のごちそうのそばながら自分はいくたびも歎くのだ、どうしたならありしむかの太平の時の様になることができればならうかと。

三川觀水二十韻

三川水を觀る、二十韻

我經華原來、不復見平陸。  
北上惟土山、連天走窮谷。  
火雲出無時、飛電常在目。  
自多窮岫雨、行潦相應蹙。  
羲旬川氣黃、羣流會空曲。  
清晨望高浪、忽謂陰崖踣。  
恐泥竄蛟龍、登危聚麋鹿。  
枯查卷拔樹、礧礧共充塞。  
聲吹鬼神下、勢閔人代速。  
不有萬穴歸、何以尊四瀆。

我華原を經て來る、復た平陸を見ず。  
北上すれば惟土山、連天窮谷に走る。  
火雲出づるや時無し、飛電常に目に在り。  
自ら窮岫の雨多し、行潦相應蹙す。  
羲旬として川氣黃なり、羣流空曲に會す。  
清晨高浪を望む、忽ち謂ふ陰崖の踣るるか。  
泥を竄る蛟龍、危きに登りて麋鹿聚まる。  
枯查拔樹を卷き、礧礧として共に充塞す。  
聲は鬼神を吹きて下す、勢は人代の速なるを閔す。  
萬穴の歸する有らずんば、何を以てか四瀆を尊しとせむ。

及觀泉源漲反懼江海覆  
 漂沙圻岸去激壑松柏禿  
 乘陵破山門廻幹裂地軸  
 交洛赴洪河及關豈信宿  
 應沈數州沒如聽萬室哭  
 穢濁殊未清風濤怒猶蓄  
 何時通舟車陰氣不黪黷  
 浮生有蕩汨吾道正羈束  
 人寰難容身石壁滑側足  
 雲雷屯不已艱險路更跼  
 普天無川梁欲濟願水縮  
 因悲中林士未脫衆魚腹  
 舉頭向蒼天安得騎鴻鶴

泉源の漲るを観るに及んで、反つて江海の覆へるを懼る。  
 沙を漂はして圻岸去り、壑に激ぎて松柏禿す。  
 乘陵山門破れ、廻幹地軸裂く。  
 洛に交りて洪河に赴く、關に及ぶ豈に信宿ならむや。  
 應に數州を沈めて没せしむるなるべし、萬室の哭するを  
 穢濁殊に未だ清からず、風濤怒り猶蓄ふ。「聴くが如し」  
 何時か舟車を通じて、陰氣黪黷ならざらむ。  
 浮生蕩汨有り、吾が道正に羈束せらる。  
 人寰身を容れ難く、石壁滑かにして足を側つ。  
 雲雷屯已ます、艱險路更に跼す。  
 普天川梁無し、濟らむと欲して水の縮まむことを願ふ。  
 因つて悲む中林の士、未だ衆魚の腹より脱せず。  
 頭を擧げて蒼天に向ふ、安んぞ鴻鶴に騎ることを得む。

【字解】【一】華原 陕西省西安府耀州治。【二】平陸 平地。【三】北上 北に向つてのほりみちする。【四】土山 華原縣の東南なる土門山をいふ。【五】連天 連日のこと。【六】窮骨 ゆきつまつた山、穴のある山を指す。【七】火氣 あかくやけたくし。【八】出無時 時のさまりなくでる。【九】窮船 ゆきつまつた山、穴のある山を指す。【一〇】行旅 道路上をおしながす雨。【一一】懸壑 壑は、かまびすし、水と水とがうちあうてやがましいこと、壑は水相迫つてちぢめあふこと。【一二】垂骨 垂はしげるさま、骨はかさなるさま。【一三】川氣 川面の濁流の氣。【一四】羣流 多くの水流。【一五】會 あつまる。【一六】空曲 さびしき山のくま。【一七】圓 おもふ。【一八】陰崖 日光をうけぬがけ。【一九】踏 たふれる。【二〇】泥 なづむ、滑也また陷也と訓べり、そこに往は破と同じ、「いかだ」、これは水中の浮き木をいふ。【二一】重 にげかくれる。【二二】危 危は高くあやふき場所をいふ。【二三】枯室 室は破と同じ、「いかだ」、これは水中の浮き木をいふ。【二四】勢 勢、まきこむ。【二五】扶樹 あたらしく根からわけた樹木。【二六】壑石 のかさなる壑。【二七】光壑 みちふさがる。【二八】塵吹 吹を去塵によみ音塵とよく説あるし、下旬の勢園の岡が動阿なるにより考ふれば吹も平聲にて動阿として用ひしならん、水の聲、風が鬼神を吹きおろす聲なりといふなり。【二九】勢 水勢。【三〇】人代造 人間の世の造にすぎ去ること。【三一】萬穴歸 多くの孔穴のけつきよくおちつくをいふ。【三二】四瀆 瀆は「みぞ」、四瀆は江、河、淮、濟の四水をいふ。【三三】泉源 即ち源泉なり。泉は潤の代字。【三四】漂沙 水勢が沙をただよぼす。【三五】圻岸 圻は江、河、淮、濟の四水をいふ。【三六】萬室 萬室 即ち萬室なり。泉は潤の代字。【三七】折岸 折は堤と同じく、岸也、界也、去とばくづれてなくなることを。【三八】激壑 水が大きなたにこそまきこむ。【三九】禿 髪がわけてはげになる様に樹木が無くなるをいふ。【四〇】乘陵 水勢がのほりしのご。【四一】破山門 左右の山崖がこぼれる。【四二】地軸 水勢がめぐり、めぐらす。【四三】地軸 大地をささへるちく。【四四】交洛 水勢が洛水にまじはる、この洛水は延安府より鄜州を経て同州府に入り朝邑縣にて黄河に會する川をいふ。【四五】洪河 大なる河、黄河をさす。【四六】及關 關は潼關をいふ、洛水は黄河に入りて潼關のところへつきあたる、及ぶとはそこへ達するをいふ。【四七】信宿 再宿を信といふ、一晚や二た説といふこと。【四八】萬室 萬室なり。【四九】何時 いつか、この二字は下句までにかかる。【五〇】陰氣 雨ぐもりの氣。【五一】黪黷 垢つき黒きこと、黪黷の高祖功臣諱に上座下墮の語あり、因つて黪を地に作るべしとの説あり。【五二】浮生 きまらぬ生活。【五三】鴻鶴

【註】高は高く、旧は水のはやく流るるさま。【三】福来、きつなをつけ、しはられる。【四】人寰、人のなる區域。【五】骨身、わがからだをいれておく。【六】側足、足をそばだてる、はばはとあるけす、わきへそばめてあるくないふ。【七】屯、なやみ、難備。【八】脚、せぐくまる。【九】普天、天下どう。【一〇】川梁、梁は「ふなばし」。【一一】洪、わたる。【一二】水船、船はちぢむ、量の減ずること。【一三】中林士、林中士と同じ、山林のなかに退棲せる者。【一四】衆魚、多くの魚の腹、溺死すれば魚にたべられてしまふ。衆は衆の字の訛ならん、衆魚は即ち淵魚なりとの説あり、「草堂詩集」本には衆を非に作れり、非ならば簡明なり。【一五】安得、希望の辭。【一六】騎海鶴、この鳥にのりて水災より離脱するなり。

【題義】三川（西晉豫州の南）にて大水にあひたることをのぶ。三川とは華池水・黒水・洛水の三川が會する處なるによりて名く。製作時は天寶十五載にあるべし。作者奉先より白水に赴き、前の「高齋」の詩あり。更に白水より華原を経て鄜州に赴く。

【詩意】自分は華原の地を經過しつやつて來たがこのあたりにはこれまでの様に平地をみることはない。北へとのぼりみちすればただ土山がつづいて毎日毎日ゆきつまつた谷を走つてゐる。空にはいつとはなく赤燒けの雲が現はれでるし、かけゆくいなびかりはいつも目にもみえてゐる。だからおのづと山の雨が多く押しだす雨水はやかましくうちあうてゐる。川面にはこんもりたてこんだ濁流の氣が黄ばんでみえ、さまざまの流れが一しよにさびしい山のくまにあつまつてなされる。ああした高い浪をながめると奥まつたがけがたふれはせぬかとおもふ。ちつとしてゐてはそこにちつつけられてしまひはせぬかと恐れて蛟龍もどこかへにげかくれるし、あぶなさうな高い處へあがつて麋鹿があ

つまつてゐる。枯れた浮き木は抜けてきた大木を一しよにまきこんで、うづだかくかさなつていつばいになつてゐる。水の聲のすさまじさは天から鬼神を吹きおろすかとおもはれ、水の勢のはやきは人世の經過の速さをうかがはしめる。若し萬穴の水の歸著する所が無かつたなら、どうして四瀆の大川が尊ばれるねうちがあらう。（四瀆の尊きはこれらの洪水をひきうけて集めるところにある）川流の淵源であるこの山地の水の漲るのをみては、あべこべに江や海の水がふちまけられるのでないかとおそれるのである。その水勢は沙をただよはすによつて山の岸はなくなつてしまひ、壑にそそぐによつて松や柏もぬけてしまふ。又その水の勢が高くのぼるによつて山の崖門が破壊され、水勢がめぐりめぐらす力によつて地軸も裂けてしまふ。この水流は洛水と交りて黄河の方へ赴くのであるが、潼關へ達するには一二泊とはかからぬ（すぐに達する）さだめしいくつかの州を沈没させてしまふことであらう。萬家の人の哭する聲を現に耳にきくかの様である。水のけがれにごりはすむには至らぬが、風にあれくるふ濤はまだ怒りをたくはへてゐる。いつになつたら舟や車を自由に交通させて、陰氣がうすぐろくたなびかないやうになり得るのだらうか。自分の浮浪生活には水の漂ふ如きものがあり、吾がゆく道は他からしはられてゐる。それで人の世界には身を容れおくこともむづかしく、かく山中へくればここではまた石壁の路なめらかに足をそばめてあるかねばならぬ。雲雷の雨水のなやみは止まず、山行の險にその路はせぐくまりつつ進まねばならぬ。』みわたすに天がしたどこにもふなばし

は無し、川をわたるにつけてはただ水量の減するのをねがふばかりである。それにつけて悲むのはこの山林に居る人人、彼等はまた魚の腹からのがれることはできずにをる。自分は頭をあげて天をむいてみる、どうしたならば鴻や鶴につて空へかけあがつてこの水災からはなれ得るであらうかと。

月夜

月夜

今夜鄜州月 閨中只獨看

今夜鄜州の月、閨中只だ獨り看む。

遙憐小兒女 未解憶長安

遙に憐む小兒女、未だ長安を憶ふを解せず。

香霧雲鬟濕 清輝玉臂寒

香霧雲鬟濕ひ、清輝玉臂寒からむ。

何時倚虛幌 雙照淚痕乾

何時か虚幌に倚りて、雙び照らされて涙痕乾かむ。

【字解】(一) 鄜州 西安府の東北に在り、妻子の在る所なり。(二) 閨中 夫人のねやのうち。(三) 看 夫人がみるなり。

【憐】 憐 作者があらはれむなり。(四) 兒女 ことどもたち。(五) 未解 解は識悟するをいふ、幼小にしてそこまで知識がとどかぬ。

【憶】 憶 長安 長安になる文なる自分をおもふ。(六) 香霧 秋の夜のきり、夫人の髪なれば香といふ。(七) 雲鬟 雲形のかつら。

【清輝】 清輝 月のひかり。(八) 玉臂 夫人のうつくしきひぢ。(九) 倚 よりそふ。(十) 虚幌 虚は他に人の居らぬこと、幌はとばりのまく。(十一) 雙照 夫婦二人にて照らされる。(十二) 淚痕乾 乾は濕の反對。

【題義】 天寶十五載の八月に作者は鄜州より肅宗の行在に赴かんとして賊軍の中に陥りたり。己は長

安にあり、家族は鄜州にあり、因つて妻子を思ひて此詩を作る。

【詩意】 今夜は鄜州での月は、閨の中で我が妻がただひとり(自分といふものなしに)みてをるであらう。自分をはるかにおもひやつていたいけなうおもふが、わがこともたちはまだ頑是ないのでこの

おやちがある長安の方を憶ふことなどは知らぬのである。妻の室には香霧がこめて雲のかつらもうる

ほひ、月の清きひかりをうけて玉のかひなもつめたく感じてゐることであらう。いつになつたら他に

人の居らぬまどかけのそばによりそうて、二人そろうて月光に照らされて涙のあとなしにながめるこ

とができやうか。

哀王孫

哀いかな王孫

長安城頭頭白鳥

長安城頭頭白の鳥

夜飛延秋門上呼

夜延秋門上に飛んで呼ぶ。

又向人家啄大屋

又人家に向つて大屋に啄む、

屋底達官走避胡

屋底の達官走つて胡を避く。

金鞭折斷九馬死

金鞭折斷して九馬は死す、

【字解】(一) 頭白鳥 頭の白い

「からす」之を言ふは體異を記すな

り、鹿の俣鹿が短きしときにも、頭白

の鳥が朱雀門の樓に集まりしといへ

り。(二) 延秋門 長安の宮苑の西

面の二門のうち、その北なるを玄武

といひ、南なるを延秋といふ。(三)

人家 たたびの家。(四) 啄大屋

大きな屋根で、食物をあまりてつ

つ

骨肉不得一作同同馳驅。骨肉も同じく馳驅するを得ず。

腰下寶玦青珊瑚。腰下の寶玦青珊瑚、

可憐王孫泣路隅。憐む可し王孫路隅に泣く。

問之不肯道姓名。之に問へども肯て姓名を道はず、

但道困苦乞爲奴。但だ道ふ困苦なり乞ふ奴と爲らんと。

已經百日竄荆棘。已に百日荆棘に竄するを經たり、

身上無有完肌膚。身上完き肌膚有ること無し。

高帝子孫盡隆準。高帝の子孫は盡く隆準、

龍種自與常人殊。龍種自ら常人と殊なり。

豺狼在邑龍在野。豺狼邑に在り龍野に在り、

王孫善保千金軀。王孫善く保てよ千金の軀。

不敢長語臨交衢。敢て長語して交衢に臨まず、

且爲王孫立斯須。且つ王孫の爲めに立つこと斯須。

く。【一】連官 高位の官をいふ、

高位の官は其の人の姓名、君に通達するによりて之を連官といふ。【二】

胡 へびす、嶽山の賊軍をます。【三】

金難折斷 黄金をかざつたむちがなれる、ひどく馬をうつ故なり。【四】

九馬死 漢の文帝が代の地より迎へられしとき、九匹の名馬あり。【五】

こゝは玄宗一行の初どもの馬匹をいふ、死とはあまり速に走らせらるるために死するをいふ。【六】

骨肉不得 骨肉とは親屬なるをいふ。我(王孫)は天子と血つづきなれども云云することができぬ、骨肉不特ならば、天子は骨肉にてある所の我が云云するを得つてくれぬの意。【七】

【八】問之 一しよに走つてにげらる。【九】寶玦 玦は環の一部が開いてあるもの。【一〇】青珊瑚

昨夜東風吹血腥。

東來秦駝滿舊都。

朔方健兒好身手。

昔何勇銳今何愚。

竊聞天子已傳位。

聖德北服南單于。

花門勢面請雪恥。

慎勿出口他人狙。

哀哉王孫慎勿疎。

五陵佳氣無時無。

昨夜東風血を吹いて腥し、

東來の秦駝は舊都に滿つ。

朔方の健兒は好身手、

昔何ぞ勇銳に今何ぞ愚なる。

竊に聞く天子已に位を傳ふと、

聖德北服せしむ南單于。

花門面を撈きて恥を雪がむと請ふ、

慎みて口より出す勿れ他人に狙れむ。

哀い哉王孫慎みて疎なること勿れ、

五陵の佳氣は時として無きは無し。

【一】 昨夜 前の夜、漠然といふ。此句より結句まで又作者の言。【二】 東風吹血腥 昨夜の強き方位、吹血腥とは戰爭あり人死せしをいふ。【三】 秦駝 ちくた、賊の使用するもの。【四】 舊都 長安。【五】 朔方健兒 朔方軍の武卒をいふ、朔方軍は始めは陝西の鞏州に鎮在し、後に山西の兗州に鎮在す、哥舒翰は阿難、朔方の兵、及

び善兵二十萬に將として嶽山の軍を復讐に拒ぎて敗れたり。【三】好身手、好身とは體格のよきこと、好手とは戰の技術のうまさのこと。【四】昔、今とは晉舒倫が吐蕃を撃ぎし當時をいひ、今とは今回の敗軍時をいふ。【五】天子、玄宗。【六】傳位、位を太子肅宗におつたへになつた。【七】聖德、肅宗の德、玄宗の德とく者あれども取らず。【八】南軍子、漢の時、匈奴に南北あり、南部の會長が南軍子なり、こゝは回紇の會長をさしていふ、唐の威徳が回紇に及びしをいふ。【九】花門、唐地理志に、甘州寧遠軍東北、有居延海、又北三百里、有花門山堡、又東北千里、至回紇衝帳一とあり、花門は山堡の名にして回紇の衝帳から西南千里、居延海の北三百里の地に在る處なり、たゞこゝは花門即ち回紇種族として使用せり。【一〇】房面、「後漢書」に渠面とあり、勝又は渠とは面の皮を割りさくをいふ、これは誠意を表示する回紇の風習なり。【一一】請聖恥、請とは唐へたのむこと、聖恥とは唐の官軍が賊に敗れたばぢをすすぎきよめること。【一二】出口、上述の事を口からそとへもらす。【一三】狙、ねらふ。【一四】勿疎、疎は疎略、疎忽の意、自己の舉動をかるがるしくすること。【一五】五鼓、漢の五鼓をさす、長安にあり、高祖の長陵、軍帝の安陵、景帝の陽陵、武帝の茂陵、昭帝の平陵、是なり、唐にも高祖より肅宗まで五陵あれども、これは漢をかりて唐をさし、直接に唐をさす。【一六】佳氣、帝運興隆の氣象をいふ。【一七】無時無、いかなる時たりとも是れ無きときとはなし。

【題義】安祿山の亂に或る皇族が零落して民間に潛んでをるのを見てあはれにおもつて作れる詩である。製作時は至徳元載(即ち天寶十五載)の九月頃の作なるべし。事蹟は次の如し。天寶十五載の六月九日に潼關が賊山の軍に破られた。楊國忠は玄宗に獨り逃れることをすすめ、十一日(甲午)の夕、陳玄禮に命じて軍隊を整へ九百の駝馬をひそかに選びおかしめ、十二日(乙未)の朝白あけに玄宗は楊貴妃、その姉妹、王子、妃主、皇孫、楊國忠、韋見素、陳玄禮及び親近の宦官、宮人と長安の延秋門から外へ逃れいでたまうた。時に居あはさなかつた人人はすべておきすてて去つた。

【詩意】長安の城の上にあつた頭の白い鳥が、夜なかに延秋門の上へ飛んできた。それから又普通の民家に向つてなかに大宅の屋根へとびうつつてそこでこつこつ嘴でなにかつついてゐる。それはそのはずで、その屋根下に住んでゐた大官はもはや賊軍を避けるために逃げ走つてしまつたのである。ここに一人の貴公子どの。逃げだした天子御一門はめつたやたらに馬を鞭つてかけたのでその黄金の鞭は折れ、馬は九匹も乗りつぶしたがこの貴公子どのの骨肉でありながらその人人と一しよにかけてゆくことはできなかつた。(とりのこされたのだ)それで腰のあたりに青色珊瑚の寶珠を帯びながら、氣の毒にも路ばたに泣いてござるのだ。自分(作者)は「どなた」とおたづねしても先方は姓名をいふことをきかれない、ただ「非常にこまつてをるからどうぞ奴僕でも何でもよいからなりたいたい」といはれる。ざつと百日ばかりも荆棘のあひだをにげかくれてをられたので、おからだの上はきすだらけで無傷完全のはだとはないのである。漢の高祖の御子孫は御先祖の血統をひいてみんな鼻高でをられる、どうしても龍の種は龍でただの人間とはおのづとちがつてゐる。いま豺狼の様な賊軍は都邑へはひりこみ、天子の龍は野へのがれてをられるといふ場合だ。あなたはよく千金の貴いおからだを無事にお保ちなさるがよい。こんな人のゆききのしげきちまたにさしかかつて自分はなげなしをせぬつもりであるがしかしこの王孫のためにはなほしばし立ちとまつてものがたる。「昨夜、東風が戰場の血を吹いてなまくさを送つて來た。さうして東からやつてきた賊軍の「らくだ」が長安の舊

都へいつばいにいりこんだ。一時は體格・技術できこえた朔方軍の武士たちも、なんで昔はあんなに勇  
 銳であつたにかかはらず今は愚鈍になつたのか。(遺憾なことでないか)「ただひそかに聞くところに  
 よれば玄宗皇帝はもはや太子に御位をおつたへになり、新帝(肅宗)の御聖徳は北の方、南軍子といふ  
 べき同統の長をも悦服せしめられ、同統のものどもは面皮を割りさいて誠意を表はして我が唐のため  
 恥辱をそそぎたいとなつたのんで来たさうである。この事はあなたにこつそりお聞かせするのである、あ  
 なたは之を口外して他人に話してはなりません。他人はあなたの身をねらつて危害を加へやうとして  
 むるものがありますぞ。まことにお氣の毒なおん事でござる。王孫よ氣をつけて自身をかがろし  
 くふるまうてはなりません。五陵の佳氣はいつでも存在してたちのぼつてをりますからまたも王室  
 が御隆盛になることは疑ひありません。その日をお待ちあそばされよ。」

悲陳陶

陳陶を悲しむ

孟冬十郡良家子。

孟冬十郡良家の子、

血作陳陶澤中水。

血は陳陶澤中の水と作る。

野曠天清無戰聲。

野曠しく天清くして戰聲無し、

【字解】【一】孟冬、冬の初の月

即ち十月。【二】十郡、十箇所の

郡。【三】良家子、良民の子弟にし

て兵卒となるもの、因人又は召募

の無頼漢に非るをいふ。【四】無戰

聲、これは倒裝の法にて下句の事實

四萬義軍同日死。

四萬の義軍同日に死す。〔箭を洗ふ〕

羣胡歸來雪。

一作 洗箭。羣胡歸り來つて箭を雪洗す。(或は血)

仍唱夷歌飲都市。

仍つて夷歌を唱へて都市に飲む。

都人廻面向北啼。

都人面を廻らして北に向つて啼く、

日夜更望官軍至。

日夜更に望む官軍の至るを。

なれば水であらば血の箭を血を以て洗ふといふなり、血の字却つて勝れるに似たり。【一】仍、仍つて、そのまゝ。【二】夷歌、  
 えびすのうた。【三】飲、酒をのむ。【四】都市、長安のまちをいふ。【五】廻面、面を胡兵からそむけるをいふ。【六】向北  
 北とは肅宗の居らるる靈武の地の方向をさす。【七】官軍、肅宗の兵。

【題義】陳陶斜に於ける官軍の敗北を悲しんで作れる詩である。事實は次の如し。至徳元載十月に房

瑄は自ら賊を討たんと請ひ、軍を分ちて三とし、楊希文は南軍に將として宜壽(名)より入り、劉慈は

中軍に將として武功(名)より入り、李光進は北軍に將として奉天(名)より入り、瑄は自ら中軍に將と

して前鋒たり。二十一日辛丑に中軍・北軍は賊と陳陶斜に遇ひて敗績す。二十三日癸卯に瑄は自ら南軍

を以て戦ひ又敗る。このとき瑄は古法にならうて車戦を用ふ。賊軍風に順つて火を縦つて之を焚く。

人畜大に亂れ、官軍死傷する者四萬餘人。陳陶斜は咸陽縣の東にあり、斜とは山澤をいふ、故に詩中



に陳陶澤ともいへり。製作時は至徳元載十月。

【詩意】冬の初めの月に凡そ十郡の良家出身の兵卒たち。彼等の血は流れて陳陶の澤の水となつてしまつた。それは即ち四萬といふ忠義の官軍が同日に死んだためで、死の後は戰場の野は曠しくそらもすつきりとしてさらに戦の聲さへもせずひつそりしてゐる。勝ちほこつた賊の胡兵どもは都市の方へともどつて来て血の箭をあらひきよめ、(或は血を以てあらひ)そのままえびす歌を唱へながら酒を飲んでゐる。都の人たちは之を見て面をそむけて北方に向いて啼き、日となく夜となく官軍が到着してくればよいとのぞんでゐる。

悲青坂

青坂を悲しむ

我軍青坂在東門

我青坂に軍して東門に在り、

天寒飲馬太白窟

天寒く馬に飲ふ太白の窟。

黃頭奚兒日向西

黃頭の奚兒日に西に向ふ、

數騎彎弓敢馳突

數騎弓を彎いて敢て馳突す。

山雪河冰晚

一作 蕭瑟 山雪河冰晚蕭瑟たり、

【字解】

【一】青坂 大抵成陽の東門外にある地ならん。【二】東門 成陽城の東の門。【三】飲馬 飲は馬に水をませること、「水かふ」。【四】太白窟 太白は山の名、武功縣にあり、長安を去る二百里、第一二の句は倒裝なり、武功を経て東門に來れるをいふ、窟は「いぼ」。【五】黃頭奚兒 黃頭とは黄色の狐皮にて

青是烽煙白是人骨 青は是れ烽煙白は是れ骨。

焉得附書與我軍 焉ぞ書を附して我が軍に與へ、

忍待明年莫倉卒 忍んで明年を待て倉卒なる莫れといふ。

「ふことを得む」

して突出してゆく。【一〇】山雪河冰 山には雪ふり、河には氷が結ぶ。【一一】晚 野に作れるがよろしからん。【一二】蕭瑟 風のさびしく吹くさま。【一三】烽煙 のろし火のけむり。【一四】白是骨 是を人に作れる本あり。人がよろしからん。【一五】焉得 希望の辭なり。【一六】附書 手紙をとどける。【一七】忍待 以下が書中の意なり。【一八】倉卒 あわてるかたち、こちらの用軍とのほかに賊軍へ攻めかかるをいふ。

【題義】官軍が青坂で敗れしことを悲しみて作る。事は前の「悲陳陶」詩の條にいだせり。此の敗軍は癸卯南軍の敗についていふなり。製作時は至徳元載十月二十三日以後。

【詩意】我が官軍はこの冬の寒ぞらに太白山の窟に馬に水かひ、進んで成陽の東門ちかく青坂に陣取つてゐる。賊軍の黃頭の奚兒等は勝ちに乘じて毎日だんだんと西へ向つてくる。それをいまいましながら味方(官軍)の二三騎が弓をひいてむりに馳せて突出してゐる。(が大勢官軍は敗軍でどうにもならぬのだ。)山には雪ふり河には氷がはり、原野は風がさびしく吹いてゐて、青くみゆるのはのろし火の煙であり、白くみゆるのは戦死者の白骨だ。(今むりに軍をしてても仕方がない。)どうしたならば我が

官軍へ手紙をとどけ與へて「我慢して明年を待てよ、さうしてあわてて軍をしかけてはならぬぞ」と言つてやることができるだらうか。

避地

地を避く

避地歳時晚竄身筋骨勞。地を避けて歳時晩る、身を竄して筋骨勞す。

詩書遂牆壁奴僕且旌旄。詩書遂に牆壁に、奴僕すら且旌旄。

行在僅聞信此生隨所遭。行在僅に信を聞く、此の生遭ふ所に隨ふ。

神堯舊天下會見出腥臊。神堯の舊天下、會す腥臊より出づるを見む。

【字解】(一) 歳時晚 歳は一年をいひ、時は四時をいふ、晚は暮るるをいふ。(二) 竄 かくれる。(三) 避地 避地は「牆壁の上」に「避」の字の如き文字を省略したる書法なり、世亂れては詩經や書經も用を爲さぬ故之を牆壁の間に藏して後世を待つをいふ。(四) 且旌旄 「旌旄」の上に「且」の字の如き文字を省略したる書法なり、旌は羽のふさをつけし「はた」、旄は牛の尾をつけたる「ばた」なり、旌旄をたつるは地方の高位の武官についていふ、田乾真、蔡希德、崔乾祐が輩をさすといへり。(五) 行在 東宋の行在所。(六) 信 たり。(七) 此生 自己の生涯。(八) 隨所遭 であふがまにする。(九) 神堯 唐の高祖をいふ。(十) 會 必ず同じ、俗語なり。(十一) 出 脱出するをいふ。(十二) 腥臊 大卒の臭氣を腥臊といふ、これは安祿山等賊軍の臭氣をいふ。

【題義】賊軍のはびこる土地をさけて亂のない處にのがれつつありしときの作。蓋し白水・鄭州のあたり

に在りしなるべし。製作時は至徳元載冬の作なるべし。

【詩意】 騷亂の土地をさけつつある間に一年四時がくれかかつてきた。一身をにげかくれさせつつある間に筋骨が疲勞して來た。詩經書經の經典も今の世では無用で之を牆壁に藏しておく外はなく、奴僕の様な下賤の輩でさへ武權を握つて旌旄をたててゐる。このごろ新天子肅宗皇帝の御行在所についてやつとすこしおたよりを耳にした。自分の生涯の如きはその時時のであふままになすばかりだ。ただあの高祖神堯皇帝の建てたまうた我が唐の舊天下はきつと今のなまくさから脱出する日があるにちがひない。

對雪

雪に對す

戰哭多新鬼愁吟獨老翁。戰哭多くは新鬼なり、愁吟するは獨り老翁。

亂雲低薄暮急雪舞廻風。亂雲薄暮に低れ、急雪廻風に舞ふ。

飄棄樽無淥爐存火似紅。飄棄てられて樽淥無く、爐存して火紅を似す。

數州消息斷愁坐正書空。數州消息斷ゆ、愁へ坐して正に空に書す。

【字解】(一) 新鬼 新しき戦死者。(二) 老翁 自己をさす。(三) 薄暮 たそがれ。(四) 廻風 吹きまはす風。(五) 飄棄 飄棄

酒つきたる故壘がなげすらるる。【三】澤、隄と通ず、清酒の色をいふ。【七】似、示と同じ。【八】書空、晋の殷浩といふもの言をやめられ、終日手を以て空中に「咄咄怪事」の四字を書きたりといふ。不平のままなり。

【題義】雪に對して威を述べ。製作時は至徳元載の冬の作。此年の十月には房琯が陳陶嶺に敗軍せしこと「悲陳陶」詩に見えたるが如し。

【詩意】戰場で哭する聲がするが、それは多くは近ごろ戦死した人人の聲である。そんな聲をききつゝ愁へて吟じつつあるものはこのひとりのおやちである。いまたそがれ時にみだれた雲がひくくたれさがつて、急にふりそそぐ雪が吹き回す風につれて舞ひくるうてをる。樽には酒の緑色が無くなくなつて自然その酒を小出しにする瓢もなげすてられてある。爐のみは消えずにゐて火が紅色を呈してゐる。二三の州は賊軍の手にも歸したものがどうか消息がとだえてをる。それがため自分は愁へつつ坐してもやうど殷浩の様に手で空中に文字を書いて不平を遣つてをる。

元日寄韋氏妹

元日寄韋氏妹に寄す

近聞韋氏妹迎在漢鍾離。

近々聞く韋氏妹、迎へられて漢の鍾離に在りと。

耶伯殊方鎮京華舊國移。

耶伯は殊方に鎮す、京華は舊國移る。

秦城廻北斗郢樹發南枝。

秦城北斗廻ぐる、郢樹南枝發かひ。

不見朝正使啼痕滿面垂。

朝正の使を見ず、啼痕滿面垂る。

【字解】【一】漢鍾離、漢代の鍾離郡の地、今の安徽省鳳陽府臨淮縣。【二】耶伯、伯は年長者をいふ、耶伯は夫をなす。【三】殊方、異方と同じ。自分とちがつた地方をいふ。【四】鎮、軍事の長官として駐在するをいふ。【五】京華、都をいふ、長安なり。【六】舊國移、舊國とは舊都なり、移とは以前は都が長安にありしも今は兵亂のため天子他地方におはせば都はそこへ移りしと同様なり。【七】秦城、長安をいふ、自己の居る地。【八】廻北斗、北斗星の柄がめぐりて東をなす、これは年が新しく改まるをいふ。【九】郢樹、郢は楚の都、鍾離は昔楚の地なりしを以てかくいふ、實は鍾離地方の梅樹などをさしていふなり。【一〇】發南枝、南むきの枝の花がひらく。【一一】不見、來ぬ故見られぬなり。【一二】朝正使、正月の元旦のお祝ひにでる使者、これは鍾離から妹の夫たる人が朝廷へさし送る人をいふ、平年ならばこの人が長安へ来る、隨つて妹の消息もそれに託せられて通ずるわけなり。【一三】啼痕、作者の泣面の涙のあと。

【題義】至徳二載の元日に韋氏に嫁してゐる妹のところへやつた詩。

【詩意】ちかごろ聞けば韋氏妹そなたは鍾離の地へ迎へられて來たといふではないか。おまへの夫は地方で軍務の長官をしてをられるが、この長安の都はもとの都の位置が移つて他の地へいつてしまつた。今新春が來て長安の城では北斗の柄がひとめぐりした。そなたの居る楚の地方では梅の樹の南の枝に花がさきかけたことであらう。遺憾なのはそちらから元旦祝賀の使者が見えぬのでわしはそなたの消息をきくこともできず、ただかほちう泣きの涙の痕がたれさがつてをるばかりである。

春望

春望

國破山河在，城春草木深。

國破れて山河在り、城春にして草木深し。

感時花濺淚，恨別鳥驚心。

時に感じて花にも涙を濺ぎ、別を恨みて鳥にも心を驚かす。

烽火連三月，家書抵萬金。

烽火三月に連る、家書萬金に抵す。

白頭搔更短，渾欲不勝簪。

白頭搔けども更に短し、渾て簪するに勝へざらむと欲す。

【字解】【一】國、國都をいふ。【二】破、賊軍のために破壊せられしをいふ。【三】在、そのままかばらず存在すること。【四】城、長安の城。【五】深、生ひしげりたるをいふ。【六】時、時事。【七】花濺淚、花をみるにつけても涙をそそぐをいふ、花の上にそそぐことに非ず。【八】恨別、別とは家族との別れない。【九】連三月、舊説に三月とは春の第三月をいひ、三箇月をいふに非ずといへり。然れども連三月とし三月を三箇月と解し得ざるに非ず、蓋し作者は至徳元載の極末期に長安に入りこみしなるべく、その家族と別れて以後の計算とみれば暮春の月まで三箇月にて可なり。【一〇】家書、我家族からの手紙。【一一】抵、あたる、匹敵、相當の意。【一二】萬金、多くの金銀。【一三】搔、手でかく。【一四】短、髪がみじかきをいふ。【一五】渾、すべて。【一六】欲、將にしの意。【一七】不勝簪、かんざしをさすにはたへぬ、冠をつけるには簪をさす。

【題義】長安の春にあひながめつつ感じをのぶ。製作時は至徳二載の三月。

【詩意】國都は賊に破壊されたが山や河は依然として存在してゐる。この都の城はまさに春が來て草や木がしげつて深くたちこめてゐる。自分は時事に感じていつもならおもしろくながめる花につけて

も涙をそそぐし、家族たちと別居してをることを恨みては、鳥の音を聞くにつけてさへ心を驚かす。兵亂の急をつけ知らず烽火は前から今の三月の節まで(或は三箇月)つづいてゐる。この際の家からの手紙は貴くて萬金にも相當する。自分はだんだん年寄りになつて白い頭をかいなでても毛髪はかへつて短くなつてきて、まつたく簪をさすにもさせないほどにならうとしてゐる。

得舍弟消息 二首

舍弟の消息を得たり 二首

近有平陰信，遙憐舍弟存。

近有平陰の信有り、遙に憐む舍弟の存するを。

側身千里道，寄食一家邨。

身を側つ千里の道、食を寄す一家の邨。

烽舉新酣戰，啼垂舊血痕。

烽は舉る新酣戰、啼は垂る舊血痕。

不知臨老日，招得幾時魂。

知らず臨老の日、幾時の魂をか招き得む。

【字解】【一】平陰、舊注に山東・河南の二説を擧ぐ、蓋し河南平陰をいふならん、河南の平陰は河南府孟津縣の東にあり、之により弟は東京(洛陽)附近の某處にありしものと推定す。【二】舍弟、家弟と同じ。【三】存、生存する。【四】側身、側とは危害にあはぬやうわきへよりてあるをいふ。【五】寄食、他人の所に寄寓して食す。【六】一家邨、僻村をいふ。【七】新酣戰、あたらしき戦のまかり。【八】啼垂、啼くときたるなり。【九】血、血の涙をいふ。【一〇】臨老、老いかかる。【一一】日、時と同じ。【一二】招得、生きてゐる人(弟をさす)の魂をよびもどす。【一三】幾時、何の時と同じ、招得幾時魂とは何時我招得汝魂といふ。

の意なり、招き得る時はあるまじきかの意。

【題義】わがやの弟のたよりを得たときに作る。何處にありて作りしや明かならず。張遠は弟は東京に、作者は西京にありといへり。製作時は天寶十五載の作ならんといふ。

【詩意】ちかごろ平陰からのおまへの音信があつて、それによつておまへがまだ生きのこつてゐたことをはるばるきどくにおもふのである。おまへは遠き千里の道に身をたよせてあるき、人家稀少の村に食客の身となつてゐる。最近にはげしい戦があつて烽火はあがる。自分の暗きがほにはむかしながらの血涙の痕がたれてをる。自分はいまや老いかかつた時節にせまつてをるので、おまへのいつの魂を招きかへすことができるのやらわからぬ。(ことによればおまへの魂をよびもどす時がなくて死んでしまふかもしれぬ。)

〔一〕

〔二〕

汝儒歸無計吾衰往未期

汝儒にして歸るに計無し、吾衰へて往くに未だ期あらず。

浪傳鳥鵲喜深負鵲鶴詩

浪に傳ふ鳥鵲の喜び、深く負く鵲鶴の詩。

生理何顔面憂端且歲時

生理何の顔面ぞ、憂端且つ歲時。

兩京三十口雖在命如絲

兩京の三十口、在りと雖も命絲の如し。

【字解】〔一〕儒、おくびやう。〔二〕歸、都へもどる。〔三〕往、弟の方へゆく。〔四〕期、とき。〔五〕孤、みだりに。〔六〕鳥鵲、誰に乾鶴而行人道といへり、「かまさき」がさわれば旅人がかへつてくるといふなり。弟がかへりさうなたよりのあつたことといふ。〔七〕負、そむく。〔八〕鵲鶴詩、「詩經」の常棣の時に脊令在原、兄弟念離、とあり、せきれいの鳥がつれだちて飛ぶ如く兄弟は念離の場合に互になすけあふことをいへり。〔九〕生理、くらしむきをいふ、くらしむきは貧乏なり。〔一〇〕何顔面、面目なきをいふ。〔一一〕憂端、うれひのはし。〔一二〕歲時、一年四時、一年中の意。〔一三〕兩京、東京(洛陽)西京(長安)をいふ。〔一四〕三十口、弟と自己の家族の口數三十人。〔一五〕在、存在。〔一六〕如絲、危くして絶えんとするをいふ。

【詩意】おまへは臆病でこちらへもどるによいふんべつもないし、自分は老衰してこちらへゆくにいつといふあてでもない。せつかくおまへがかへるかとおもつたが、それは一時のぬかよろこびであつた。自分は古人が急難のとき兄弟互に助けあへとうたうた脊令の詩の意味にふかくそむいてをる。自分のくらしむきは貧乏で他人に向ける面目もない、心ばいはそれでも年中しつづけである。こんなさまで東西二京にある家族三十口、彼等の生命は存在してゐるとはいふものの絶えだえなること絲すぢの様なものである。

憶幼子

幼子を憶ふ

驥子春猶隔鶯歌暖正繁

驥子春猶隔たる、鶯歌暖くして正に繁し。

別離驚節換聰慧與誰論

別離節の換るに驚く、聰慧誰とか論せむ。

憶幼子

湖水空山道柴門老樹村。

湖水空山の道、柴門老樹の村。

憶渠愁只睡炙背俯晴軒。渠を憶うて愁へて只だ睡る、背を炙りて晴軒に俯す。

【字解】【一】隔、兩地相へたるをいふ。【二】繁、多きをいふ。【三】節候、時候のかはること。【四】難、宗武のちみづくこと。【五】與、與、已一人なるをいふ。【六】湖水(二句)、鄜州のさまをいふ。【七】空山、人の居らぬ山。【八】柴門、しほのしん、鄜州の家の門をさす。【九】渠、「かれ、宗武をさす。【一〇】炙背、太陽の光にむけてせなかなあぶる。【一一】俯、身をかがめる。【一二】晴軒、日のあつてあるのきは、第七・八の二句は倒装なり。

【題義】長安にて鄜州の羌村に在るをさなごを憶うて作る。この幼子は作者の第二子宗武なり、宗武の幼名を驥子といふ。製作時は至徳二載の春。

【詩意】春にはなつたが驥子とはまだかけはなれてゐる。暖かになるにつれて鶯のうたふ歌のこゑもしげくなつてきた。わかれてからかくも時候がかはつたかとおどろかれる。さだめしきやつも懶口になつたであらうが、そのことをだれと言ひあはう様もない。あの空山の道で湖水のながれてゐるところ、あの老木の生ひしげつてゐる村の柴門のあるところ。そこへ思ひを馳せて、日あたりのいいこのさばでうつつむいて背なかあぶりをして、「きやつ」をおもつて愁へつつむねむりをする。

一百五日夜對月

一百五日夜、月に對す

無家對寒食、有淚如金波。

家無くして寒食に對す、涙の金波の如くなる有り。

斫卻月中桂、清光應更多。

月中の桂を斫卻せば、清光應に更に多きなるべし。

低離放紅蕖、想像青蛾。

低離に紅蕖放つ、想像す青蛾襲まむことを。

牛女漫愁思、秋期猶渡河。

牛女漫に愁思す、秋期には猶河を渡る。

【字解】【一】一百五日、前年の冬至の後一百五日をいふ、即ち「寒食」の節なり。【二】無家、家は室家、妻をさす。【三】對、寒食、此句寒食に對すとあるも寒食は節にして節は相對すべきものに非ず、對とは題の「對月」をうけて月に對すること、寒食は副詞にて「寒食のときにあたりて」の意。【四】金波、月の銀語なり、涙に月光のうつるによりてかくいふ。【五】斫卻、きりさる。【六】月中桂、月の中に桂樹ありとの傳説あり、西陽雜俎に曰く、月桂高五百丈、下有二人、常斫之、樹創癒合、人、姓吳名剛、西兩人、學仙、有過、誦命伐之、と。【七】低離、「詩經」中谷有蕖當に、有少女低離とあり、低とは別なり、低離はわかれてなること、妻につけていふなり、句意は「低離の時にあたつて」の意。【八】放、はなつ、開くをいふ。【九】紅蕖、桂花の濃く黄ばみたる色により紅といふ。【一〇】想像、こちらが想像するなり。【一一】青蛾、ひそむ、眉根にしむをよめる。【一二】青蛾、蛾は蛾眉、美人の眉、青は青黛の色、古は青すみにて眉をまがく、妻の眉をいふ。【一三】牛女、牽牛星・織女星なり、この二星は一年一回七月七日の夕に天の河にて相會すとの傳説あり。【一四】漫愁思、漫にとほせなくともいふ愁思をさすといふなり。【一五】秋期、七月七日の夕をさす。【一六】猶、それでも、人間に比較していふ。【一七】渡河、天の河を渡つて相會す、第七・八の二句は牛女の方が自己夫妻よりも幸福なるをいふ。

【題義】寒食節の夜に月に對して妻をおもつて作れる詩なり。場所は長安、製作時は至徳二載の寒食、

節。

【詩意】自分は寒食の節にあたつて妻なしでゐながら月に對してゐる。すると涙が金波の様にあふれながれる。もし月の中にあるといふ桂の樹をきりたふしてしまふならば清き光はもつと多くなることでもあらう。この夫妻別別にをるときに、あいにくと月桂の紅花がさきだしてゐる。察するに之に對して妻も悲んで眉根をちぢめてをることであらう。天上の牽牛・織女の星たちはいりもせぬ心配ごとをしてゐるもので、彼等はめつたに會へぬというても、それでも秋の時期（七夕）になれば天河を渡つて會ふことができてゐるではないか。（それにくらべると自分たち夫妻の方がもつとあはれでないか。）

遣 興

興を遣る

驥子好男兒前年學語時

驥子は好男兒なり、前年語を學びし時。

問知人客姓誦得老夫詩

問知す人客の姓、誦し得たり老夫の詩。

世亂憐渠小家貧仰母慈

世亂れて渠が小なるを憐む、家貧にして母の慈を仰ぐ。

鹿門攜不遂雁足繫難期

鹿門攜ふること遂げず、雁足繫ぐることを期し難し。

天地軍塵滿山河戰角悲

天地軍塵滿つ、山河戰角悲しむ。

儻歸免相失見日敢辭遲

儻くは歸りて相失ふことを免れば、見る日敢て遲きを辭し

【字解】(一) 學語 言語をならひおぼゆること。(二) 人客 客人をいふ。(三) 老夫 作者自らをさす。(四) 渠 「かれ」驥子をさす。(五) 母 驥子の母、作者の妻。(六) 鹿門 山の名、湖北有襄陽府に在り、後漢の龐德公妻子をたづさへてこの山に登り樂を採つて返へらず、作者も隱遁の念あるをいふ。(七) 雁足 蘇武が故事、妻からの手紙をいふ、蘇武漢の使となりて匈奴にあり、匈奴之を留む、漢より別の使者ゆきて匈奴をあさむきていふ、天子上林中に弓を射て雁を得たるに、雁の足に帛書を繫けたるあり、之によつて蘇武の所在を知ると。(八) 軍塵 塵は「はたしのたぐひ」。(九) 戰角 角はつのおえ。(一〇) 儻 もしくは、ひよつと、萬一。(一一) 相失 みうしなふ。(一二) 見日 面會する時日。

【題義】ふと興にふれて作れる詩。やはり長安にて驥子をおもて作りたるなり。製作時は至徳二載ならん。

【詩意】驥子はいいこた、前年彼がやつとことばをならひはじめのじぶん、客人の姓をとうてきき知つたり、わしの作つた詩をそらでいうたりしたほどである。この世のみだれたときに彼がまだ幼少であるのはかはいさうにおもふ、貧乏な家だからとりわけ母親のなきけによつてゐることであらう。自分は龐德公の様に妻子をたづさへて鹿門山に隱遁でもしようかとおもふがそれもなしとげられず、蘇武が雁の足に手紙をかけてよこした様に先方から手紙でもくるかといふにそのあてもない。天地には

軍のはたが滿ち、山河には戰の角聲が悲しくひびいてゐる。もし萬一家にかへることができて互に見失ふことを免かれ得るならば面會の時はいくらおそくなつてもかまはない。

塞蘆子

蘆子を塞ぐ

五城何迢迢、迢迢隔河水。五城何ぞ迢迢たる、迢迢として河水を隔つ。

邊兵盡東征、城內空荆杞。邊兵盡く東征す、城內空しく荆杞あり。

思明割懷衛、秀巖西未已。思明は懷衛を割き、秀巖は西して未だ已まず。

迴道略大荒、來峭函蓋虛爾。迴に大荒を略し來らば、峭函は蓋し虚ならむ爾。

延州秦北戸、關防猶可倚。延州は秦の北戸なり、關防猶倚る可し。

焉得一萬人、疾驅塞蘆子。焉ぞ一萬人もて、疾驅して蘆子を塞ぐことを得む。

岐有薛大夫、旁制山賊起。岐に薛大夫有り、旁ら山賊の起るを制す。

近聞昆戎徒、爲退三百里。近う聞く昆戎の徒、爲めに退くこと三百里なりと。

蘆關扼兩寇、深意實在此。蘆關は兩寇を扼す、深意實に此に在り。

誰能叫帝關、胡行速如鬼。誰か能く帝關に叫ばむ、胡の行く速なること鬼の如し。

【字解】【一】塞 ふさぐ、兵を屯せしめてそこをふさぐといふ。【二】蘆子 關の名、陝西省鄜州府の北に延安府あり、延安府安塞縣に蘆子關あり。【三】五城 朱勳帥に據れば朔方節度使の領する所の定邊、豐安、東中、西の三受降城をさすといへり。【四】迢迢 ばるかなる貌。【五】邊兵 邊境の兵、即ち五城の兵。【六】東征 賊の起つた方へ征伐にゆく。【七】城內 五城の城の內。【八】荆杞 いばら、くこの木。【九】思明 史思明をいふ、思明は天寶十四載に安祿山に隨つて河陽に反す、懷・鄭の二州爲めに賊の手に陥る。【一〇】秀巖 高秀巖なり、秀巖はもと哥舒翰の麾下の將なり、後ち史思明の下に河東節度使となる。【一一】西未已 至德二載正月に思明は博陵より、秀巖は大開より兵を引いて太原に趨す、これよりまさに西に向つて進出せんとす。【一二】迴道 大荒來 迴は迴に作るべし、迴はばるかとなり、略は取る、こと、大荒とは塞外不毛の地をさす。【一三】峭函 峭は峭山、二谷あり、河南省の陝州にあり、函は函谷、陝州の靈寶縣にあり、河南より長安へ進出する途に當れる要害の地なり。【一四】虛 虚設をいふ、實際防禦の用をなますかざりしものたるにすぎざるをいふ。【一五】延州 即ち延安府、時に唐宗は靈武に在り賊將は長安に據れり、而して延州は長安と靈武との南北の間に當れり、黄河を隔てて東面すれば太原なり、太原は思明・秀巖等が力を合せて來り攻めんとする處、故に作者この蘆子關を塞ぎて賊軍の西進をとどむべしと爲す。【一六】秦北戸 長安の北方の門戸。【一七】關防 せきを設けてふせぐ。【一八】倚 倚賴する、たよる。【一九】希聖の辭。【二〇】岐 陝西省鳳翔府岐山縣。【二一】薛大夫 扶風の太守薛堂山をいふ。【二二】山賊 山中に横行する盜賊。【二三】昆戎 昆夷・犬戎は周代西方のえびすなり、こゝは吐蕃にあてたり、吐蕃は思明等と連絡して西より東に向つて侵入す。【二四】扼兩寇 兩寇とは思明・秀巖をさす、扼はくひとめる。【二五】深意 自己のこの關を塞がんとおもふわくそ。【二六】叫帝關 天子のこもんにさげ呼べる。【二七】胡行 胡は賊軍、行は行進すること。【二八】鬼 鬼神。

【題義】蘆子關に兵を駐屯せしめて賊軍の侵入を防ぐべしとの意見をのべたる詩なり。製作時は至徳



二載の作ならんか。

【詩意】五つの城はどうしてあの様にはるけくあるのか、はるばると黄河の水をへだてて立つてをる。ところがその邊境守備の兵はすつかり東の方へ征伐にでかけたので城内には人のけがなく荆や杞などはかりしげつてをる。今や史思明の軍は懷州や衛州の地方を割きとつたし、高秀巖はこれまた西に向つて進行してやまぬ。もし彼等がさらにはるかに河塞不毛の地のあたりをかすめとり來つたならば長安を護るべき内地の要害である崤山・函谷の險は有れども無きが如きものにすぎぬであらう。この延州は長安にとつては北方の門戸であつて、ここに關を置いて防備をすればまだ大にそれに倚頼することができるのである。どうしたならば一萬人ほどの兵を以てすばやく驅けてきてこの蘆子關の入口を塞ぐことができるであらう。岐山の地方では扶風の太守薛景山があつてその附近處處で山賊の起るのをおさへつけてをる。ちかごろ聞けば之がために今の昆戎ともいふべき吐蕃のものどもは三百里も退却したとのことである。(だから蘆子關で防備をすれば一層效がある)蘆子關は史・高の二つの寇のどくびをおさへてくひとめるところだ。自分がここを塞げといふ深意は實にここに在るのである。だれか我が天子の御門に叫んでこの事を申しあげてくれることはできぬか、胡賊の進行の速なことは鬼神のやうだから、ぐづぐづしてをると彼等に先きを制せられてしまふ。

哀江頭

哀いかな江頭

少陵野老吞聲哭。

少陵の野老聲を吞みて哭す、

春日潛行曲江曲。

春日潛行す曲江の曲。

江頭宮殿鎖千門。

江頭の宮殿千門鎖す、

細柳新蒲爲誰綠。

細柳新蒲誰が爲めにか綠なる。

憶昔霓旌下南苑。

憶ふ昔霓旌南苑に下りしを、

苑中萬物生顏色。

苑中の萬物顏色を生ず。

昭陽殿裏第一人。

昭陽殿裏第一の人、

同輩隨君侍君側。

輩を同じくし君に隨つて君側に侍す。

鞞前才人帶弓箭。

鞞前の才人弓箭を帶ぶ、

白馬嚼齧黃金勒。

白馬嚼齧す黄金の勒。

翻身向天仰射雲。

身を翻へし天に向て仰ぎて雲を射る、

一笑箭正墜雙飛翼。

一笑正に墜つ雙飛翼。

哀江頭

【字解】

【一】少陵野老 少陵に住んでゐる田野の老人、作者自らいふ。少陵は長安の南郊にあり。【二】春日 春の日のびなきする。【三】潛行 賊の横行してゐる中をひそんである。【四】曲江 長安城の東南遊園地、離宮宮苑あり。【五】曲水のくま。【六】江頭宮殿 曲江の南に紫雲閣・芙蓉苑あり、西に杏園・慈恩寺あり、宮殿は芙蓉苑中のものをさす。【七】鎖千門 多くの門がとちである。【八】細柳 柳の細い柳。【九】新蒲 生えだての「がま」。【一〇】鞞 何人の爲めに綠色を呈してゐるのか、之を賞玩する天子おるすなるをいふ。【一一】嚼齧 以下八句は往時を追憶す。【一二】白馬 實の如き色彩ある「ばた」。【一三】下 皇居からこゝへおくだり

明眸皓齒今何在

明眸皓齒今何在

血汚遊魂歸不得

血汚して遊魂歸り得ず

清渭東流劍閣深

清渭は東流し劍閣は深し

去住彼此無消息

去住彼此消息無し

人生有情淚沾臆

人生情有り涙臆を沾す

江草水一江花豈終極

江草江花豈に終に極あらむや

黃昏胡騎塵滿城

黃昏胡騎塵城に滿つ

欲往城南望城北

城南に往かむと欲して城北を望む

一作望城北

品の官なり。【一】帶弓箭、弓や箭を腰におびる。【二】嚙、口にくはへる。【三】黃金勒、黃金でかざつたくつわ、玄宗の御件に女官騎馬の一段があることなむ。【四】騎、からだをひれりかばす、女官隊の一人が爲すなり。【五】一笑、楊貴妃がにっこりとする。【六】箭、一箭ならば射手の一矢にての盡。【七】雙飛翼、雌雄一對の鳥、翼はつばさなるも鳥を意味す。【八】明眸皓齒、すつきりしたひとみ、まつしろな歯、楊貴妃の美しきさまをいふ、以下又現在を敘す。【九】何在、何處にあるか。【十】血汚、玄宗劉に向つて逃れんとし馬東坡（西安府興平縣にあり）に至りしに軍隊に追られ已むを得ず楊貴妃を殺す、故に血がその屍體をけがす。【十一】遊魂、貴妃のさまよへるたましひ。【十二】歸不得、不得歸と同じ、都へしどることができぬ。【十三】清渭東流、

になる。【一】南苑、皇居より南にあるその、芙蓉苑をさす。【二】生顏色、天子の行幸あれば草木鳥獸までも活き活きしたかほつきをだす。【三】昭陽殿、これは漢の成帝の后趙飛燕の詠が居りしおつほれの名なり、唐人の詩には飛燕が昭陽に居りしとし、飛燕を玄宗の楊貴妃にあてて用ふる例多し、これも其一なり。【四】第一、第一の美人。【五】同輩、天子と同じてぐるまにのる。【六】君、玄宗をさす。【七】才人、女官の階級の名、正四

劍閣深、去住彼此無消息、二句連貫す、清渭は渭水の清き流をいふ、これは東の方長安の方へと流れる、貴妃の側につきいふ、劍閣は蜀に入る途中に在る險阻なり、深とは萬山の奥深くにあるをいふ、これは玄宗の逃げゆきし側につきいふ、去住彼此の去、彼は玄宗の側をいひ、住、此は貴妃の側をいふ、住はとどまること、馬尾に死んでじつとどまつてなる、無消息とは作者自己に對して御兩方の消息がないといふこと。【一】人生有情、人間と生れては情といふものをもつてなる、情は作者自己の情をいふ、活きしものであつて死物同様の無感覺のものに非ることをいふ。【二】塵、むれ。【三】江草（一作水）江花、曲江の草（或は水）や花。【四】黃昏、暈とば、はてし、どうしてはてしがあらうや、はてしが無いとは年年春來れば草花は榮えて重環して施まりあることなきをいふ。【五】黃昏（二句）、この二句は倒置法なり、塵滿城は望みたる結果なり、結果を先きに敘す、黃昏はたそがれどき、胡騎は賊軍の騎兵、塵滿城とは賊の兵馬横行するゆみちりほこりが一ぱいになる。【六】城南、長安城の南方、これは少陵の故屏をさしてゆくなり。【七】望城北、長安城の北の方向をふりかへつてながめる。望城北を忘、城北、忘、南北などに作りて解くは誤字を基にして怪異を喜ぶ者の取る所なり。宋の王安石の杜詩集句に二問まで「望城北」となしあるにれば望の字の正確にして勘がす可らざるを知るべし。

【題義】長安の南郊、少陵の故居へかへらんとして賊軍の間をぐりぬけ、曲江のほとりを經過して見る所、感ずる所をのぶ。製作時は至徳二載の春。

【詩意】少陵の野老たる自分は賊をはばかりしのびねになきながら、春の日にあたつて曲江の水のくまをこつそりと歩いてゆく。江のほとりの宮殿には多くの門がしまつてゐる、その外でははだれ柳だの蒲の新芽などが嫩をあらはしてゐるが誰に見てもらはうとてそんなさまをしてゐるのか。おもへばその昔、玄宗皇帝の霓の旌がここの南苑におくだりになつたことがあつた。あのときは御苑のなか

の萬物ばんぶつみないきいきした顔色かほいろをだしてゐた。それから昔むかしの昭陽殿せうやうてん中第一等ちゆうだいいちとうの人趙飛燕てうひえんともいふべき人ひと（楊貴妃やうきひ）が君きみと同じ手車てぐるまにのり君きみのおともをして君きみのおそばに侍まじつてゐた。そのお手車てぐるまの前まへでは才人さいじんなどの女官にょくわんの騎馬隊きばたいがめいめい腰こしに弓矢ゆみやを帯おびび、黄金こうごんの勒りやくをかませた白馬はくばにまたがつて先驅せんきよをつとめる。その中の或者あるはが身をひねつて天てんにむいて雲くもを射やると貴妃きひのにつこりとせられる笑顔えんごの前に一對いっとうの鳥とりが射墜しだうされてくる。それも過去の夢ゆめで今日けふはあの明眸皓齒めいぼくこうしの人ひと（貴妃きひ）はいづこにをられるか、不幸ふこうにも人手にんずにかかつて血ちは屍しかばねを汚よごし、そのさまようた魂たましひはこの都みやこへ歸かへることができぬ。渭水ゑいすいは車くるまに流れ、劍閣けんかくは萬山ばんざんの奥おくにある。その渭水ゑいすいちかくにとどまれる此こゝ、劍閣けんかくのあなたに去いれる彼かれ、兩方りうほうともその後如何そののちいかんあそばされたか自分等自分らの方かたへはさつぱり消息そくしがたえてをる。この人事じんじの變轉へんてんに拘かまらすこの江邊かうべんの草くさや花はながさりともし知らずがほに年年春ねんねんはるにつれて窮極きゆうごくなく循環じゆんかんして榮さかゆるに逢あうては、情じやうといふものをもつてをる自分自分としてどうして感動かんとくせず居ゐられやう、感動かんとくして涙なみだが胸臆きょうよくをうるほすのである。今いま、長安ちやんあん城じやうの南みなみの方かたへ往ゆかうとおもつて、城じやうの北方ほくほうを遠望えんぼうすると、たそがれに際まぎして賊兵そくへいの騎馬きばが横行こウかうして城じやうは塵ちんだらけになつてをる。

大雲寺贊公房 四首

大雲寺の贊公の房 四首

心在水精城衣露春雨時

心は水精の城に在り、衣は露ふ春雨の時

洞門盡徐步深院果幽期

洞門盡く徐歩、深院果して幽期

到扉開復閉撞鐘齋及茲

到扉開いて復た閉づ、撞鐘齋茲に及ぶ

醍醐長發性飲食過扶衰

醍醐長へに性を發せしむ、飲食衰を扶くるに過ぐ

把臂有多日開懷無愧辭

臂を把る多日有り、懷を開く愧辭無し

黃鸝度結構紫鴿下罌罍

黃鸝結構を度り、紫鴿罌罍より下る

愚意會所適花邊行自遲

愚意適する所に會ふ、花邊行くこと自ら遅し

湯休起我病微笑素題詩

湯休我が病めるを起たしむ、微笑して題詩を索む

【字解】 〔一〕水精城、精は品と通ず、水精は水晶なり、寺は清淨の地なるゆゑ水晶の城といふ。〔二〕洞門、奥つかの門と門とむきあひたる處をいふ。〔三〕深院、奥には。〔四〕幽期、幽靜なれかしとの期待、これはその期待にかなふをいふ。〔五〕到扉、我がまゝに到着せし所の堂舎の扉。〔六〕撞鐘、かねをつく。〔七〕齋及茲、齋はおとよきの御飯、及茲とはちやうどそのときの意。〔八〕醍醐、パタの類、歌乳の精液なり。〔九〕發性、本性をよびおこす、止觀修行に見是慧性、發必依觀、禪是定性、發必依止、とみゆ。〔一〇〕過扶衰、過の字解しがたし。根論は過、謂三相待禮意有增加、となし、過を禮意のすぐることとす、然れども飲食過扶衰とあるに「禮意」の二字をどこより導き出さんとするや、草堂詩箋本に過は一に過に作るといへり、余は暫くこの過の字に従ふ、或は過は個の訛ならんもしれず、ただ過も個も略と同義なれば個に改むるに及ばざるなり、過とはちやうどさやうのめにあつたといふこと、扶衰とは飲食の滋養が自己の老衰をたすけるをいふ。〔一一〕把臂、ひちをとる、親しく交はるをいふ。〔一二〕有多日、大雲寺贊公房

しきないふ。【三】開懐、むねのうちをあけはなして遠慮なくものがたる。【四】無愧辭、愧辭とは自己を飾り飾ることばないふ、自己を飾り飾ることばは自己の良心にたづねてみるときには自ら愧つべき辭なればなり。【五】責、うぐひすの類。【六】度、わたる、つたひある。【七】結構、材木をくみたてしところ、はりしなどをさす。【八】紫錦、紫の毛色の「はと」。【九】下采置、采置は屏ついたて、すかしばりの戸、のきばに張る鳥よけの網等の諸義あり、こは蕭郎の網をいふならん、下とはそこから庭上へくだり来るをいふ。【一〇】思意、自己のころ。【一一】會、であふ。【一二】所適、適は意になふ、氣に在ること。【一三】湯休、南朝の宋の僧湯惠休、詩を善くし通俗し更となる、こは僧の義を借り用ひ、貴公をさす。【一四】起我病、我が病めるを起たしめる、漢の枚乘の「七發」に病に伏したる太子に種種なる娛樂をすすめ起たしめんことをいへり。【一五】歡笑、貴公がほほむむなり。【一六】素、もとむ。【一七】題詩、詩をかきつける。

【題義】長安の大雲寺の僧贊公の室に過宿せしことをのぶ。大雲寺は大雲經寺にしても光明寺といふ、則天武后初めて此の寺に幸せしとき沙門宣政、大雲經を進む、經の中に女主の符あり、因つて名を改め天下の諸州に大雲經寺を置かしむと。寺は長安城朱雀街の南なる懷遠坊の東南隅にあり。

【詩意】俗世界に住んでゐる自分も心は水晶世界ともいふべき佛地にあるので春雨のころ衣のうるほふのをかまはずたづねてきた。奥深くあひ向きになつてゐる門のあひだをみんなとほつてそろそろあゆんできた。来てみると奥にはでは豫想した通り幽靜なる期待にかなうてゐる。自分が到着した堂の扉は開けられてまた閉ぢられた。それはちやうどそのとき鐘をつき鳴らしてお齋飯をたべるときであつたのだ。自分は醍醐の味を嘗めて佛法の悟りでも得た様に本性を發動せしむることができ、また

飲食の效によつて衰老をたすけ得る機會にあつた。自分と贊公とは臂をとつて親しく交ることは長い年月のことであり、胸のなかをかくす所なく語りあうて、自己を飾り飾る様なことばは一つもいはない。みるとうぐひすは梁のあたりをわたりあるいてゐるし、紫色の「はと」は簾の張り網から庭へおりてきてゐる。自分のころはまことに氣にいつた處にぶつつかつてゐて、花のさいてゐるあたりをあるくにも自然とゆつくりとあるく。宋の湯惠休ともいふべき贊公は自分の病みたる心地をも健全にして奮ひ起たしめ、ほほむむながら自分に詩を作つてかきつけよとせがむのである。

(一)

(二)

細軟青絲履 光明白氎巾  
細軟なる青絲の履、光明なる白氎巾。  
深藏供老宿 取用及吾身  
深く藏して老宿に供す、取用吾が身に及ぶ。  
自顧轉無趣 交情何尚新  
自ら顧るに轉た趣無し、交情何ぞ尚ほ新なる。  
道林才不世 惠遠德過人  
道林才世ならず、惠遠徳人に過ぐ。  
雨瀉暮簷竹 風吹春井芹  
雨は瀉ぐ暮簷の竹、風は吹く春井の芹。  
天陰對圖畫 最覺潤龍鱗  
天陰りて圖畫に對すれば、最も覺ゆ龍鱗の潤ふことを。

【字解】【一】細軟、ほそくやばらか。【二】青絲履、青色のきぬいとであんだくつ。【三】光明、つやある。【四】白氎巾、白

色のほそき毛織物の手巾。【一】深殿。おくふかくしまつておく。【二】老宿。年よりかぶの高僧。【三】取用。とりて用ふる。  
 【四】及香身。自分のやうなもの身に於て。【五】自願。我と我が身をかへりみてみる。【六】轉。うたたいよいよ。【七】無  
 趣。高尙なる煩悩なし。【八】何尙新。どうして今もやはり前にかはらぬか。【九】道林。晋代の高僧、支遁字は道林、本姓は關氏、  
 陳留の人。【一〇】不世。不世出のこと、世ごとにはでぬ人、どの世にでもといふ人でない、めつたに出ぬ人。【一一】惠遠。晋時  
 の高僧、本姓は賈氏、雁門の人。【一二】暮齋。夕ぐれのものさば。【一三】春井芹。春の井戸端にばえたせり。【一四】圓畫。張彦遠  
 の名畫記に曰く、大雲寺の東の浮圖(塔)に三寶塔あり、初伽によりて車馬井に輓幕人物を畫く、已に剝落せり。東壁西壁は鄒法輪  
 が畫、西壁は田僧亮が畫、外邊の四壁は楊契丹が畫、と。是れ外壁の楊畫をさせるならん。【一五】龍騎。龍のうろ、蓋し楊畫に照  
 あるならん。

【詩意】細く軟かな青色の絹絲でつくつた「くつ」、つやのかがやいてゐる白色の毛織の手巾、此の二  
 物はこれまで深くしまつてあつて贊公の如き老宿の高僧の用に供へられるはずであつたのだが、贊公  
 の御親切から自分ごときものに於てとり用ふることになつた。自分は我と我が身をかへりみてみるに  
 何の煩悩もない人間であるが、贊公の自分に對する交情はどうして今もなほかくまでかはらず新しい  
 のであらうか。贊公は今代の支道林でその才はいつの世にも出てくる様なものでない。贊公は今代の  
 惠遠でその徳は常人にすぎてゐる。夕暮ののきばの竹に雨がふりそぐ、春の井ばたの芹のうへを春  
 風が吹く、この天のくもつたをりこの贊公と共に塔壁の圓畫に相對すると最も龍のうろこがうるほう  
 て飛動するかの如き看がある。

【三】

【三】

燈影照無睡 心清聞妙香  
 夜深殿突兀 風動金瓊璫  
 天黑閉春院 地清棲暗芳  
 玉繩迴斷絕 鐵鳳森翱翔  
 梵放時出寺 鐘殘仍殷牀  
 明朝在沃野 苦見塵沙黃

燈影照らして睡る無し、心清くして妙香を聞く。  
 夜深くして殿突兀たり、風動かして金瓊璫たり。  
 天黒くして春院閉づ、地清くして暗芳棲む。  
 玉繩迴に斷絶す、鐵鳳森として翱翔す。  
 梵放たれて時に寺を出づ、鐘残つて仍牀に殷たり。  
 明朝沃野に在らむ、塵沙の黄なるを見るに苦しむ。

【字解】【一】聞妙香。寺なれば香の氣がするをいふ、維摩經に衆香園ありて菩薩、香樹の下に坐し妙香を聞けば一切を獲といへ  
 り、その心をかけていへるならん。【二】突兀。たかき貌。【三】金。鈴なり。【四】瓊璫。音のさま。【五】棲暗芳。棲とはやど  
 りてあること、暗芳はくらの草花のかりなり。【六】玉繩。北斗の玉衡星の北の四星をいふ。【七】鐵鳳。鳳凰の棲の中央に  
 すまつけ同形式を以て風の方向にむく所の鐵製の鳳凰。【八】森。しづかに立ちならぶ貌。【九】迴。廻り。【一〇】仍。なほ、やつぱり。【一一】殷  
 はめぐりとよぶ。【一二】梵放。梵は梵唄、梵音のうた、放は高き音が外部へもれたすこと。【一三】鐘殘。鐘は梵の中央に  
 林。殷は音のひびくさま、林は梵唄。【一四】沃野。こえた原野、關中之地、沃野千里、といふ。これは京師の近郊、即ち社殿へかへ  
 るとき經過すべき原野をさせるならん。【一五】塵沙。塵埃のさかんなるをいふ。

【詩意】燈の影が枕元を照らしてゐるがねつかれぬ、心はすみわたつたたへなる香の氣がきこえてく

る。夜もふけて戸外の佛殿をみると突元とたくそびえてゐる、風は風鈴を動かしてその音がチリンカランとなつてゐる。そらはまつろで春の奥庭がとちられてあり、其地は清らかにしてなかに暗がりの草花のかをりがやどつてゐる。玉繩星は屋根の上のはるかかなたにとだえてみえ、織製の鳳凰がしづかに飛ばんとしてゐる。そのうちに坊さんのよむ梵唄の音が高くなりだして寺のそとまで流れいで、曉をつげる鐘の音はのこつてそのまま寝どこまでひびいてくる。朝になつてこの寺院を辭し去つて城外の原野に身を置いたならば、黄色の沙塵の吹き起るを見るのにこまることであらう。

【四】

【四】

童兒汲井華。慣撻瓶上手。  
露灑不濡地。掃除似無帚。  
明霞爛複閣。霽霧牽高牖。  
側塞被徑花。飄飄委堦柳。  
艱難世事迫。隱遁佳期後。  
晤語契深心。那能總銷口。  
奉辭還杖策。暫別終回首。

童兒井華を汲む、撻きに慣れて瓶手に上る。  
露灑地を濡さず、掃除掃無きに似たり。  
明霞複閣に爛たり、霽霧高牖に牽く。  
側塞たり徑に被れる花、飄飄たり堦に委せる柳。  
艱難世事迫る、隱遁佳期に後る。  
晤語深心契る、那ぞ能く總べて口を銷せむ。  
辭を奉じて還策を杖かむ、暫く別るるにも終に首を回らす。

泱泱泥汚人。狎狎國多狗。

泱泱として泥人を汚す、狎狎として國に狗多し。

既未免羈絆。時來憩奔走。

既に未だ羈絆を免れず、時に來りて奔走を憩はしめむ。

近公如白雪。執熱煩何有。

公に近づけば白雪の如し、熱を執る煩何か有らむ。

【字解】【一】井華 天明けの最初に汲める井水をいふ。【二】慣撻 ばやくつるべ體をたぐりあげることになれてゐる。【三】露灑 灑にうち水をする。【四】掃除 木の葉其他塵芥の類をばきよめる。【五】明霞 暁でいたのであるがほかないかのやうだ。【六】霽霧 朝のあかるい霧。【七】側塞 かがやくさま。【八】飄飄 高くまきあげる。【九】委堦 土敷までたれる。【十】高牖 たかいまど。【十一】艱難 花の多き貌。【十二】飄飄 ばれわたるさま。【十三】世事迫 うきよの事が身にさしせまる。【十四】佳期 よき時節。【十五】隱遁 隠れわたる。【十六】晤語 土敷までたれる。【十七】契深心 底の心が一致する。【十八】那 何ぞ。【十九】銷口 口を閉する。【二十】杖策 つまなつて來訪するをいふ。【二十一】暫別 しばらくのわかれ。【二十二】國多狗 狎狎は犬の吠ゆる貌。【二十三】羈絆 羈非子外鎖に國にも狗あり、大臣は猛狗なりといへり、當時賊將張通假官更を捕へて賊の偽官を授け、從はざる者なば之を殺す、暗に其意をこめて泥汚人、國多狗といへるなりと。【二十四】執熱 執熱、あつしの手にとること。【二十五】詩經 卷末に「詩經」執熱、道不以泥汚といへり。【二十六】煩何有 煩はあつくるさまをいふ、何有とは無きをいふ。

【詩意】 寺のこともが曉の井の初水を汲む、すばやく汲むことになれたものでつるべがすぐ手もとま

でのぼつてくる。その水でうち水をするが地面がうるはぬ程度であり、また箒で塵あつたをはききよめるがその結果は箒をつかはなかつたかの様に自然にさつぱりとしてゐる。それからかさなつた欄干のあたりにあかるいかすみがかがやく、はれあがる霧は高まどのあたりまで垂れたしだれ柳は風にゆらゆられてゐる。自分は浮き世の難儀なめに迫られて、適當な隠遁すべきよい時節におくれたのである、こゝへ来てあなたとであうて物語りすると奥底の心がびつたりと一致する、さればどうしてすつかり口を動かさずだまつてゐることができやう。(十分に心おきなく話をする) 自分はいづれおことはどほりまたつゑをついてここへおたづねするつもりだが、しばしの別れにかかはらずわかれとなると結局うしろがみ引かるる心地で首をふりむけてみる。今、道路では洪水の様に泥が人をけがす、國にはわんわんと吠えて人をかまうとする猛犬が多い。自分は世の果の繩から離れられぬのであるが、時にはこの穢な處へきて平日の奔走の身をやすませるであらう。あなたに近づくこと白雪に近づいた穢なもの熱いものを手にしたときのあつくるしさごときはなんでもなく消えうせてしまふ。

雨過蘇端 〔原注〕端置酒

雨に蘇端に過ぎる

雞鳴風雨交久旱雨亦好

雞鳴いて風雨交はる、久旱には雨も亦た好し。

杖藜入春泥無食起我早

杖を杖いて春泥に入る、食無うして我を起たしむる早し。

諸家憶所歷一飯跡便掃

諸家歴し所を憶ふに、一飯にして跡便ち掃ふ。

蘇侯得數過歡喜每傾倒

蘇侯には數、過るを得たり。歡喜す毎に傾倒するを。

也復可憐人呼兒具梨棗

也復可憐の人なり、兒を呼んで梨棗を具へしむ。

濁醪必在眼盡醉據懷抱

濁醪必ず眼に在り、醉を盡くして懷抱を據ぶ。

紅稠屋角花碧秀牆隅草

紅は稠し屋角の花、碧は秀す牆隅の草。

親賓縱談謔喧鬧慰衰老

親賓談謔を縱にし、喧鬧衰老を慰む。

況蒙霈澤垂糧粒或自保

況や霈澤の垂るるを蒙る、糧粒或は自ら保たむ。

妻孥隔軍壘撥棄不擬道

妻孥軍壘を隔つるも、撥棄して道はむと擬せず。

【中解】【一】雞鳴 夜明をつげるにはとりがなく。【二】風雨交 ふきより。【三】久旱 ながひでり。【四】入春泥 春の泥途にはひりこむ、蘇端を訪問にでかけるをいふ、此句訪問を豫想していふ。【五】無食 食料に缺乏す、貧なるをいふ。【六】起我早 早起きをさせる。【七】憶所歷 此句は憶所歷之諸家と義同じ、歴とは嘗て經過せしことあるをいふ。【八】一飯 一問の食事。【九】跡便掃 我が足跡をそこら消してしまふこと、再び住かぬこと。【一〇】蘇侯 侯は敬稱、君の如し。【一一】數過 數回、こちらからたびたび過訪する。【一二】歡喜 自分がよろこぶ。【一三】每 毎時、いつもの義。【一四】傾倒 先方が心をかたむけ

て親切をつくす。【一】也、俗語、亦に同じ。【二】可憐人、愛すべき人物。【三】兒、蘇蘭の兒。【四】酒、にこりま  
 け。【五】在眼、眼前にある、無いはなき義。【六】此、こちらが十分酔ふ。【七】羞、のべる。【八】懷抱、こころの  
 心置。【九】多、多くなる。【一〇】親賓、親戚賓客。【一一】餐談、はなしやおどけなまにする。【一二】喧鬧、やかまし、  
 にぎやか。【一三】衰老、こころの衰へて老いたること。【一四】需澤、あふれるばかりの惠澤。【一五】重、敬語、先方がこころに與  
 へてくれるをいふ。【一六】糧粒、食用に充つる糧米をいふ。【一七】自保、飢饉にならず自身を保全し得る。【一八】妻孥、妻子。  
 【一九】關軍壘、此の時作者の家族は鄭州に在り、鄭州と長安との間にいくつもの軍のとりであり、故に隔つといふ。【二〇】探業、  
 ふりすてておく。【二一】不獲道、口にだしてはいはずとさへせむ。

【題義】大雨のつづいた頃、友人の蘇端が家を訪問し酒のもてなしをうけしことをのぶ。至徳二載の三月癸亥より大雨あり、甲戌の日に至りて止むといふ。製作時は至徳二載の春、長安の賊中にありての作。

【詩意】雞が鳴いて夜明になつたが雨風の吹きふりだ。しかしだいが長い日でありあつたので雨も亦たよろしい。けふは藜の杖をついて泥途に入つて友だちをたづねるつもりなのだ。食物もない貧乏さがこのわたしを早起きさせてはたらかすのだ。自分はこれまで経過したことのあるいろいろな家のことをかんがへてみるに、その家で一度食事をしたらその家からわたしの足跡はなくなるのである。ところが蘇君の家へだけは自分たびたび経過することができて、蘇君がいつも自分を心をかたひけて親切にしてくれるのを喜ぶ。そのうへ蘇君は愛すべき人物で、こどもを呼んで梨や棗を自分に具へ

させる。自分の眼の前には必ずにこり酒がおかれてある。自分はそれを飲んで十分酔をつくして心のなかをのべる。いへのかどには紅の花が多くある、かきねのすみには碧の草が秀でてゐる、そのながめのうちに親戚賓客ははなしやおどけをきままにやり、にぎやかなさまで自分の衰老をなぐさめてくれる。さらにまた自分は蘇君のあふれるばかりの恵みのつゆをたれてもらふので糧米も不足なくそれでもつて自分を保全することができらう。こんなわけで妻子等は遠く軍壘をへだてた土地にゐるのであるがすておいて口に言ひださうとさへせずゐる。

喜晴

晴を喜ぶ

皇天久不雨、既雨晴亦佳。  
 出郭眺西郊、肅肅春增華。  
 青燐陵陂麥、窈窕桃李花。  
 春夏各有實、我饑豈無涯。  
 干戈雖橫放、慘澹鬪龍蛇。  
 甘澤不猶愈、且畔今未除。

皇天久しく雨ふらず、既に雨ふれば晴も亦佳なり。  
 郭を出でて西郊を眺す、肅肅として春華を増す。  
 青燐たり陵陂の麥、窈窕たり桃李の花。  
 春夏各、實有り、我が饑豈に無涯ならむや。  
 干戈雖横放して、慘澹として龍蛇鬪ふと雖も、  
 甘澤猶愈らずや、且畔今未だ除ならず。



丈夫則帶甲婦女終在家。

丈夫は則ち甲を帶ぶるも、婦女は終に家に在り。

力難及黍稷得種菜與麻。

力、黍稷に及び難きも、菜と麻とを種うるを得。

千載商山芝往者東門瓜。

千載商山の芝、往者東門の瓜。

其人骨已朽此道誰疵瑕。

其の人の骨已に朽つ、此の道誰か疵瑕とせむ。

英賢遇轆軻遠引蟠泥沙。

英賢轆軻に遇へば、遠く引いて泥沙に蟠る。

顧慚味所適回首白日斜。

顧みて慚づ適く所に味きを、首を同らせば白日斜なり。

漢陰有鹿門滄海有靈查。

漢陰に鹿門有り、滄海に靈查有り。

焉能學衆口咄咄空咨嗟。

焉ぞ能く衆口を學んで、咄咄空しく咨嗟せむ。

【字解】 皇天、おほそら。郭、城のそとくるわ。眺、ながめる。西郊、西方ののぼら。蕭蕭、  
整齊なる貌。曾華、華美をます。青炎、あなぐひかる。陵波、をか、どて。窮窳、美人の心算のすつくし  
き貌。各有實、麥と桃李とそれぞれ實を結ぶ。豈無涯、無涯はばてしなきこと、豈無涯は反語になりはてあるをいふ。  
干戈、たて、ほこ。横放、かつてはうだいにほびこる、安陸山の亂をさす。慘澹、ものすこく。開龍蛇  
籠(天子)と蛇(陸山)とが相たたかふ。甘澤、大雨のよきしめりいふ。不銜金、この雨は久旱後の雨なれば早書  
に比較していふ。雨の方がまだ早よりはまさつてはゐないか。且、且は銀なり、銀は「田地をすく」こと、時たがへずこ  
と。今未驗、驗はばるるか、遠し、適當時期にまだ近し、おそすぎぬといふこと。丈夫、男子、夫をます。帶甲

よるひを身につける、戰壕へてゐること。婦女、妻をいふ。乘機、きび、あは。千載、遠き昔をいふ。  
南山老、南山は長安の東南商州にある山の名、漢の高祖の時四人の老人あり秦の亂をまけてその山に隠れ芝を採りてくらふ。  
往者、さきには、これも時をさす。東門瓜、漢の初、邵平といふもの長安の城の東門外にて五色の瓜を作りて賣る、  
彼はもと秦の東陵侯たりといふ。其人、四人の老人、四皓」と邵平とをさす。此道、隱遁の道。疲暇、  
す、缺點。英賢、ひいでたかしこい人。轆軻、車の平かならざる貌、人の不遇のさまをいふ。遠引、遠く退引  
すること、買置が就に風漂漂而高飛、固自引而遠去、とみゆ。蟠泥沙、これは徹の動かぬさま、泥や沙のなかにわだかまつて  
ゐる。味所適、自分の往くべき所をばつさり知らぬ、世の中へ出てあらはれもせず、山中に入りて隠れしめぬをいふ。鹿門、  
白日前、人生の晩事に近づきしをいふ。滄海、漢水の南。靈查、山の名、湖北省襄陽府にあり、後漢の龐參公が妻子  
を擲へて隠れし處。治海、ひろうみ。聖壺、ふしぎないかた、壺は壺と同じ、張華が「博物志」に天の河と海と通じ  
てなり、或人が不思議な様子のつてつひに天の河にいたりしことを載す。學衆口、凡衆の口まねをする。咄咄、晋の  
殷浩が退けられて家に居り空中に「咄咄怪事」の四字を書せしとの故事。咨嗟、なげく。

【題義】 雨つづきのあとに晴れとなりしことを喜べる詩なり。製作時は前の「雨過蘇端」の條にいへ  
る處によつて考ふるに、至徳二載三月甲戌に雨止みし後の作なるべし。

【詩意】 天は久しく雨ふらなかつた。それが降りだしてなが雨になつた。既にふりだすと晴れたのも  
亦よろしいものである。自分は晴れに乘じて城郭からでかけて西の野外をながめると春の景色すつか  
りとのうて春の華やかさを増してきた。をかやどての上へ生えてゐる麥は青青としてかがやいてゐ  
るし、桃や李の花もうつくしくさいいてゐる。春と夏とに桃李や麥はそれぞれ實を結ぶから自分の饑も

はてが見えてゐる。」今は戦亂で干戈がはびこり、龍蛇がものすごくたたかつてをるが、このたびの甘露の雨は先の早よりかよほどましではないか、今、鋤耕にとりかかりさへすれば決しておそまきとはしない。なるほど男どもはよろひをきて戦争にでてゐるが女どもは結局家にするすをしてゐるのだ、女の方は黍や稷を世話することまで手がとどかぬとしも、野菜や麻は種ゑることはできる。」千年昔の商山で芝を採つた人、またそのかみ東門で瓜つくりをしてゐた人、彼等はその骨はもはや朽ちてしまつたが、彼等の取つた隠遁の道はだれがそれを缺點ありとしやうや。英賢の人人は不遇の境涯にであへば遠く自己の身を退け引いて龍のやうに泥沙の間にわだかまるのである。自分は自分自身を顧みて自己の往くべき方向に明かでなかつたことをはづる。今氣がついたが首を回らしてみればもはや太陽は西の方へ傾きつつある、(自分は晩年に近づきつつある、しかしまだおそしとはせぬ) 漢水の南には鹿門山があり、滄海の上には不思議な橋がある、(自己の決意によつてはその山にかくれることも、その海の様子に浮んで去ることもできる) なんて多くの凡衆の口まねをして咄咄などというていたづらになげくことをしやうぞ。

### 杜少陵詩集 卷五

#### 送率府程錄事還鄉(原注)程攜酒饌相就取別

率府の程錄事が郷に還るを送る

鄙夫行衰謝、抱病昏忘集。  
 常時往還人、記一不識十。  
 程侯晚相遇、與語才傑立。  
 薰然耳目開、頗覺聰明入。  
 千載得鮑叔、末契有所及。  
 意鍾老柏青、義動脩蛇蟄。  
 若人可數見、慰我垂白泣。  
 告別無淹晷、百憂復相襲。

鄙夫行くゆく衰謝す、病を抱きて昏忘集まる。

常時往還の人、一を記して十を識らす。

程侯晩に相遇ふ、與に語れば才傑立す。

薰然として耳目開く、頗る聰明の入るを覺ゆ。

千載鮑叔を得、末契及ぶ所有り。

意は老柏の青きに鍾まる、義は脩蛇の蟄するに動く。

若人、數に見る可くんば、我が垂白の泣を慰せむ。

別を告げて淹晷無し、百憂復た相襲ぐ。

内愧突不黔庶羞以關給

内は愧づ突の黔せざるに、庶羞以て關給す。

素絲挈長魚碧酒隨玉粒

素絲長魚を挈げ、碧酒玉粒隨ふ。

途窮見交態世梗悲路澀

途窮して交態を見る、世梗して路澀を悲しむ。

東風吹春冰泱泱后土濕

東風春氷を吹く、泱泱として后土濕ふ。

念君惜羽翮既飽更思戢

念ふ君が羽翮を惜みて、既に飽くも更に戢めむことを思ふ。

莫作翻雲鶴聞呼向禽急

翻雲の鶴の、呼を聞きて禽に向ふこと急なるを作す莫れ。

【字解】 中府 太子左・右衛中府なり、程は左に屬せしや右に屬せしや知る能はざるも、作者が嘗て右衛に屬せしによりて齋するに同じく右に屬せしか。【一】程 姓なり、名は不詳。【二】程 程事參軍なり。【三】程 地方不詳。【四】程 程夫、いやしきなと、作者自ら謙遜していふ。【五】行武衛 だんだん體力衰へて此の世から辭職する。【六】程 精神くらぐものわすれすること。【七】當時 平生。【八】往還 往來。【九】記 記、おぼえる、しりわける。【一〇】程 程侯。【一一】程 程君。【一二】程 晩年。【一三】與語 その人とかたりあふ。【一四】獨立 傑出。【一五】蕭然 香にてくすべる如く先方の感化をうけるさま。【一六】耳目 作者の耳目。【一七】聽引入 耳には聴目には明がはびつてくる、昏忘が除去されるをいふ。【一八】飽叔 戰國の頃齊の管仲と鮑突あり、互に知己たり、程なます。【一九】末契 末は謙遜の辭、先方がこちらと交つてくれることをいふ。【二〇】及 我方に及ぶ。【二一】意圖 意は先方の心意、僅は「あつまる」。【二二】老相背 松相は歳暮のときも背者としてゐる、老相とは作者が自己の晩節をかへぬ處をたとへていふ。【二三】親對 義とは先方の友義なり、勳とは「こちらへはたらかぬをいふ。【二四】曾如堂 ながきへびの穴ごもり、これは作者の不過の境にあるを自らたとへていふ。【二五】若人 此くの如き人、程なます。【二六】數見 しばしば面會

する。【二七】兼白泣 兼白は白髪を垂れること、老年をいふ、泣とは涕泣する處境をいふ。【二八】告別 わかれることをつげる。【二九】淹暮 ひさしき時間。【三〇】契 つぐ、かざる。【三一】内愧 心内にてはづる。【三二】突不黔 かまと黒まず、墨子は世を救ふため東奔西走して自家のかまどに火を焚かぬゆゑ、かまどくろすまざりしといふ、こは貧なるをいふ。【三三】庶羞 もろもろのこころ、即ち程がこちら來りし酒債をいふ。【三四】關給 になげしめたへる、已にくれしこと。【三五】素絲 しらぬいと。【三六】挈 ひつさぐ。【三七】長魚 身長のあるまかな。【三八】碧酒 碧色のさけ。【三九】隨玉粒 玉粒は米をいふ、隨とは酒のあとにしたがふをいふ。【四〇】途窮 窮境になること。【四一】交態 程のこちらに對し交はりの厚さま。【四二】世梗 世路の兵亂のためふさがること。【四三】路澀 道路交通のなめらかでないこと。【四四】泱泱 水のひろき貌。【四五】后土 大地。【四六】禽急 念、こちらがおもふ。【四七】君 程。【四八】惜羽翮 鳥にたとへいふ、翮は「たちばね」、惜とは大切にすること。【四九】地 地、あく、滿腹する。【五〇】既 ばれをすばめる。【五一】翻雲鶴 雲中にひるがへる「たか」。【五二】聞呼 呼とは人がよびかけること。【五三】向禽急 とは急に禽に向つて飛びかからうとすること。「たか」が飽けばすなはち飛び去ること已にしてはば見えたり。

【題義】 太子右(カ)衛率府の錄事參軍たる程某がその故郷に還るを送る作。ただし程某はこのとき自ら酒食を備へて作者を訪ひ別れを告げしなり。製作時は仇氏は天寶十五年春ならんといへり。

【詩意】 わたしはゆくゆく衰へて死ぬのである。病をもちつつ精神のはつきりせぬことや、ものわすれがしきりと一身に集つてきた。平生往來してゐる人でも一人はおぼえてゐるが十人はみしらぬといふありさまだ。君とは晩年にであうたのだが、はなしあうてみると、その才は傑出してゐる。しらすしらすの間に自分の耳目が開かれて、昏忘のかはりに聰明がよほどはひりこんだかと思はれる。自分分は千年の後、管仲に於ける鮑叔ともいふべき君を得た、君は自分ごとき者にまで交契を及ぼしてく

れた。君の意は自分ごとき老柏の青青たる處に集り、君の義はこの不遇の境にかがんでゐる穴ごもりの蛇たる自分に向つてはたらかされてゐる。君の如き人がしばしば面會し得るならばわたしの老境の涕泣も慰められるであらう。然るにどうしたのか君は別れを告げて久しくはとどまらぬのである。それでいろいろの心配がまたまたかさなりつぐのである。自分は内心に愧ぢる、自分は貧乏でかまどに火も焚けないのに、君の方からいろいろの御馳走を持つて来てにぎはしてくれる。即ちしろい絲で長い魚をつないでひつさげ來り、また碧色の酒のあとには玉粒のやうな米を興へてくださる。自分は窮境にゐて君のかかるうつくしい交りのさまを見る。それにつけて君の旅立つにあたつては亂世で世路がふさがり道路交通の困難なることを悲しくおもふ。いまはる風が氷を吹きといて、大地には水がなみなみとただようて地面がしめつてゐる。自分はこのから君が出かけても君がかくあれかしと念ふのである。君はせいせい自己の羽を大切ににして食に飽いてもその羽をすばめてのばさず、彼の雲中にひるがへる鶴のやうに、人の呼び聲をきいたからとて、急に獲物の禽に向つてとびつく様なことをせない様に、と。

鄭駙馬池臺喜遇鄭廣文同飲

鄭駙馬が池臺にて、鄭廣文に遇ひ同じく飲むことを喜ぶ

不謂生戎馬何知共酒盃 謂ざりき戎馬生せむとは何ぞ知らむ酒盃を共にせむとは。

燃臍耶塢敗握節漢臣回 臍を燃して耶塢敗れ、節を握つて漢臣回る。

白髮千莖雪丹心一寸灰 白髮千莖の雪、丹心一寸の灰。

別離經死地披寫忽登臺 別離死地を經、披寫忽ち臺に登る。

重對秦簫發俱過阮宅來 重ねて秦簫の發するに對し、俱に阮宅に過り來る。

留連春夜舞淚落強徘徊 留連春夜の舞、淚落ちて強ひて徘徊す。

【字解】 【一】 不謂 意外なるをいふ。 【二】 生戎馬 兵亂の起りしこと。 【三】 何知 これも意外なるをいふ。 【四】 共 鄭廣文とともにするをいふ。 【五】 燃臍耶塢敗 後漢の董卓が故事を借りて安祿山の敗をいふ。董卓は塢（とり）での退防）を罷（今陝西省鳳翔府の鳳縣）に築き之を高城と號す。而して卓は呂布に攻め破られ屍を市にさらさる、その屍肥えふとりたるにより屍の番人火を臍の上に燃やしたるに光明曜に達しけるとぞ。至徳二載の正月に嚴莊、祿山が子虜結と謀り、李猪兒といふものをして大刀を以て祿山が腹を斬らしむ、祿山、臍に潰えて死す。 【六】 握節漢臣回 漢の蘇武が故事を借りて鄭廣文がかへりしことをいふ、節は「ばた」、使者のしるしなり、漢臣は蘇武をいふ、武、匈奴に使して留まること十九年にして回れり。 【七】 白髮 歳についていふ。 【八】 千莖 ちすぢ、多くの髮數。 【九】 丹心 君に對する忠義のまこと。 【一〇】 一寸灰 一寸の厚さの灰、心臓は一寸四方なるを以て一寸といふ、これは丹心がもえて火の如くなりしが十分にしまえて今は灰になつたといふなり、鄭廣文は賊軍に陥りて賊の政府より水部郎中の官を授けられたり、詩句はとりなして言へり。 【一一】 別離 彼我わかれぬをいふ。 【一二】 死地 死ぬべき境。 【一三】 披寫 心のそこをなぶりまけそぐ、披は「ひらく」、かくきぬこと、寫は内からそとへ出すこと。 【一四】 登臺 臺は池臺をいふ。

【一】秦篇 秦の穆公の女弄玉と蕭史が故事、偕りて鄭尉馬をいふ。【二】發 蕭聲のおこるをいふ。【三】俱 郎と我と。【四】阮宅 阮咸が宅なり、鄭尉馬の宅をいふ、咸は籍が姪にして、鄭尉馬は鄭虔が姪なり、その關係を以て尉馬の宅を阮宅といふ。【五】留連 ながくとどまる。【六】舞 醉うて舞ふをいふ。【七】強辨 辨は舞ふさま、強ひてとはこんな際の時ゆゑあまり舞がのらめけれども「むりに」といふ意なり。

【題義】 尉馬都尉鄭潛曜が長安の池臺に於て、廣文館博士鄭虔に遇うていつしよに酒をのみしことをうれしくおもひて作る。製作時は至徳二載の春なるべし。

【詩意】 祿山の太亂がおこらうとはおもはぬことであつたが、その太亂のなかでまたかやうに一しよに酒盃を手にしたことが、できるとはもつとも意外とする所である。ちかごろ祿山は董卓が鄆場で敗れて脚を火でやかれた様に敗れてしまひ、あなた(鄭虔)は使節を握つて蘇武がかへつた様にかへつてこられた。あなたは頭髪が白くなつて千笠の雪かともがひ、平生忠義の丹心は今もやされつくして灰の如くになつてしまはれた。おたがひに別れてゐたときは死なんばかりの境地をへたのであるが今日はおかやうに遠慮もなく思ふままの話をして俄にこの池臺に登ることができた。さうしてもろともにあなたの姪たる阮咸ともいふべき鄭宅へやつて来て、ふたたび往時の如く秦の蕭史夫妻が吹きながら簫聲にうちむかふ。なが居をしてつひに夜ともなつて春の夜の舞をたちまへば、感愴の餘涙が落ちて舞も平日の様に氣のりがせないながらも無理に足をはこぶのである。

自京竄至鳳翔喜達行在所 三首

京より竄れて鳳翔に至り、行在所に達することを喜ぶ 三首

西憶岐陽信 無人遂卻回 西のかた岐陽の信を憶ふに、人の遂に卻回する無し。  
眼穿當落日 心死著寒灰 眼は穿たれて落日に當る、心は死して寒灰を著く。

茂樹行相引 連山望忽開 茂樹行くゆく相引く、連山望忽ち開く。  
所親驚老瘦 辛苦賊中來 親しむ所老瘦に驚く、辛苦賊中より來り。

【字解】 【一】京 長安。【二】竄 かくれながら。【三】鳳翔 陝西鳳翔府扶風縣、時に扶風を改めて鳳翔と稱せり。【四】行在所 行とは天子の旅行なり、行在所とは行所(地)の義なり。御座さきのおぼします處をいふ。【五】岐陽信 岐陽は岐山の陽、鳳翔府岐山縣をさす、行在のある地方をいふ、信は消息。【六】卻回 もどつてくること、當時の常言なり。【七】眼穿 あまりみつめるため眼に穴があく様なるをいふ。【八】當落日 太陽の落つる方、即ち西方に直面する。【九】心死著寒灰 「莊子」齊物論に心固可使如死灰乎とあり。死灰は冷灰をいふ、寒灰を著くと、心、活氣を失ひ死せる如くひえきつてゐるをいふ、寒梅のさまならん。【一〇】茂樹 しげれる樹、道路の並み木をさす。【一一】行相引 引とはこちらなてびきし、案内してくれること。【一二】連山 岐陽の連山。【一三】望 眺望。【一四】所親 親しき人。【一五】老瘦 自己の老い且つやせたこと。【一六】辛苦 賊中来、これは老瘦について自ら辨解する語とみるべし。(九注は所親が驚き問ふ詞とせり。【一七】題義 長安からにげみちして鳳翔に至り、肅宗皇帝の行在所に達せしことを喜びて作れる詩。製作時は至徳二載夏四月。

自京竄至鳳翔喜達行在所

【詩意】自分は西のかた岐陽の方の消息があるかとおもつてゐたが、いつまでたつてもどつて天子の消息をしらせてくれる人がない。(それで自分自身がでかけた)自分の眼はいつも落日をみつめて西へと走るので眼に穴があくほどであり、賊軍をくぐつてゆくのであるから心は死んでつめたい灰をつけた様に活氣を失うてゐる。道路の並み木にみちびかれながらすすみつつあるあひだに、忽ち連山の眺望が目の前に開かれて鳳翔の方へつくことができた。平生親しくしてゐた人人は自分の年よつたのと瘦せたのどに驚いてゐるが、驚くのもつともことだ、千辛萬苦して賊軍の中からやつて來たのだから。

〔一〕

〔二〕

愁思胡笳夕 淒涼漢苑春 愁思胡笳の夕、淒涼たり漢苑の春。

生還今日事 問道暫時人 生還今日の事、問道暫時の人。

司隸章初曙 南陽氣已新 司隸章初めて曙る、南陽氣已に新なり。

喜心翻倒極 嗚咽淚沾巾 喜心翻倒の極、嗚咽涙巾を沾す。

【字解】(一) 愁思、うれひのものおもし。(二) 胡笳、賊軍の吹きならすあしぶえ。(三) 淒涼、しのびしきさま、賊軍侵入せるを以てなり。(四) 漢苑、漢代の御苑、唐の長安の宮苑をなす。(五) 生還、いきながらへてかへる。(六) 問道、わけみち。

【七】 曹時人 書注にては、「生命を保ち得ることがしばらくに過ぎぬ、いつ殺されるかも知れぬ」といふこととく。余はただ事實をのべしもののみて、問道を通過せし期間の長くなかりしことをいへばものとみる。【八】 司隸章 後漢の光武帝の故事。光武が更始の命により司隸校尉の職を行ひしときすべて舊來の法則どほりにせしといふ、傅亮の通宋公孫宋王語に、東京父老、重觀司隸之章とあり、詩句は之に本く。章は典章(注則)をいふ。【九】 南陽氣 後漢書光武紀に、望氣者(氣を望みて豫言を爲すもの)蘇伯阿といふもの王莽がために使となりて南陽(河南省南陽府、光武帝の生れし地)に至り、遙かに南陽の郭を望み見て、氣佳哉、鬱鬱葱葱といへりと。佳氣とは帝王の興るべきめでたき氣なり。【一〇】 翻倒 びつくりかへる、顛倒の類なり。【一一】 嗚咽 じせびなく。

【詩意】自分は今さびしい長安の宮苑の春にあふが、かつては賊軍が夕に吹きならす胡笳をきいてうれひの思ひを抱いてをつた。今日は生きてかへるといふめにであふことができたが、かつてはしばし問道をくぐりぬけつつあつた身だ。肅宗皇帝は已におたちあそばされて、むかし後漢の光武帝が興つたときの様に司隸校尉の行ふ規則も舊來のとほりなるのを見ることができ、南陽に新しく天子の氣が動いた様に帝運隆興の氣がうごきだしてきた。だから自分の喜びの心は躍りくるうて顛倒のきはみであり、うれしなきにむせびなきせられて涙が手ふきをうるほすのである。

〔三〕

〔四〕

死去憑誰報 歸來始自憐 死しまらば誰に憑てか報せむ、歸り來つて始めて自ら憐む。

猶瞻太白雪 喜遇武功天 猶瞻る太白雪、喜ぶ武功の天。

自京望至鳳翔喜逢行在所

影靜千官裡心蘇七校前。影は静かなり千官の裡、心は蘇す七校の前。  
今朝漢社稷新數中興年。今朝漢の社稷、新に數ふ中興の年。

【字解】【一】 遷謫報。何人によつてその事をつけしらせやうか。【二】 歸來。鳳翔の方へもどつたこと。【三】 自憐。自分自身をいぢらしくおもふ。【四】 太白。山の名、武功縣の南にあり、長安を去ること三百里。【五】 武功。縣の名、鳳翔府に屬す、劉關の二句は行在所に近づきしを喜ぶなり。【六】 影靜。影は自己の身影をいふ、この影の字にて死から免れ來つた姿をあらはす。【七】 千官。多くの文官の官員。【八】 心蘇。心は自己の心、蘇は「よみがへる」、第一首の「心死」の反對。【九】 七校。漢の武帝は中壘・屯騎・步兵・越騎・長水・胡騎・射聲・虎賁の八校尉を置く、そのうち胡騎校尉といふは常設せず、故に七校といふ、これは武官の護衛にあたる者なす。【一〇】 漢社稷。唐の天下をいふ。【一一】 中興。中の字去聲によみ、興るに「あたる」と訓すべしといへり。

【詩意】 自分がここへ逃げてくる途中で死んでしまつたとしたら、それをだれによつて他へつけしらせやうか。今無事でここへもどつて來たのではじめて我と我自身をいぢらしくおもふのである。うれしくも肅宗皇帝の行在所ちかき武功の天にであふことができた。まだ南にあたつてあの太白山の雪がまつしろにみえてゐる。死ぬべくおもはれた自分の身影は無事に千百の文官のなかに静かに立つてをり、減息した心は七種の校尉の護衛の前にいさかへつてゐる。けふの朝からはじめて我が唐の天下は、新しく中興の御年がはじまるものとかぞへだしてしかるべきだ。

送樊二十三侍御赴漢中判官 樊二十三侍御が漢中判官に赴くを送る

威弧不能弦自爾無寧歲。威弧弦する能はず、爾りし自り寧歲無し。  
川谷血橫流豺狼沸相噬。川谷血横流す、豺狼沸として相噬む。  
天子從北來長驅振凋敝。天子北從り來り、長驅凋敝を振ふ。  
頓兵岐梁下卻跨沙漠裔。兵を頓す岐梁の下、卻つて沙漠の裔に跨る。  
二京陷未收四極我得制。二京陥りて未だ收めざるも、四極我制するを得。  
蕭索漢水清緬通淮湖稅。蕭索漢水清し、緬に淮湖の稅を通す。  
使者紛星散王綱尙旒綴。使者紛として星散す、王綱尙旒綴す。  
南伯從事賢君行立談際。南伯從事賢なり、君行きて立談の際。  
坐知七曜曆手畫三軍勢。坐に知る七曜曆、手ら畫す三軍の勢。  
冰雪淨聰明雷霆走精銳。冰雪聰明淨く、雷霆精銳走る。  
幕府輟諫官朝廷無此例。幕府諫官を輟(綴る)、朝廷此の例無し。  
至尊方旰食仗爾布嘉惠。至尊方に旰食す、爾に仗つて嘉惠を布く。





難なり。【一〇】假入、召して朝廷へ入れる。【二〇】柱史、侍御史のこと、周の柱下史、或は侍御史が後世の侍御史にあたる。【三〇】  
 長征、長はあした、上の「蕃」に對す、征は征行なり、放路へでかけやうとすること、題はちよつとやすむこと、是は作者と別れんとす  
 るためなり。下節の颯風吹獨樹の句は、この「題」の字をうけて書かれたり。【四〇】秋、兵亂の時をいふ。【五〇】霜、ふる。【六〇】  
 長久計、美が判官となりて行在の糧食等の通運を掌るは一時の計に非ずして未來長久にわたりの計なり。【七〇】颯風、ふきまは  
 す風。【八〇】獨樹、一本の大木、これは偶々別處にありしものを寫す。【九〇】照、照映、映。映映と別れを惜みてあひての扶をつかま  
 へること、そのうへに太陽がてりかかる。【一〇〇】若、若、若。若とは上の獨樹の根なり、そのうへに青煙がよこたはる。【一一〇】山門、門  
 の如く立ちたる山峰。【一二〇】萬重、いくへにも。【一三〇】居人、此句は自己をいふ、居人はここにゐる人。【一四〇】弄、花漢とし  
 てたよりなきさま。【一五〇】半席、おちぶれるさま。【一六〇】遊子、美をなす。【一七〇】道遠、高低ありて且つばるかなるさま。【一八〇】  
 持酒、さまよふ。【一九〇】悲生、此句自己をいふ、美との生別をかなしむ。【二〇〇】周徒、身のせせくまるさま。自己をいふ。  
 【二一〇】老、一世、この一代に於て老いゆく。【二二〇】陶唐歌遺民、「左傳」襄公二十九年に吳の季札、魯に至り周の樂を觀んと請ひ、魯  
 が「唐」の詩を歌ひけるに、思ふこと深い哉、其れ陶唐氏の遺民有る乎といへり。昔時、唐に民が陶唐氏を謳歌せしことく、今の唐民は  
 唐を思ふことないふならん。【二三〇】後漢更列帝、更列帝とは代代の帝が過ぎつぎにかはりしをいふ。これはかはりしをいふが主  
 にあらず、光武帝の中興ありてその後ながくつづきしをいふなり、唐も亦肅宗の中興以後しかあるべしといふなり。【二四〇】匡復、  
 君の過失を正し、王室を回復するの實績。【二五〇】從此道、道とは去ること、ここを去りて山林中に向つて住き隠れること、此より  
 とは今よりといふこと。

【題義】侍御史の官たる樊某が漢中王の判官となりて任に赴くを送る詩。製作時は至徳二載の初、鳳  
 翔の行在所に赴きしころの作。

【詩意】我が唐の朝廷は威力あるべき弓に弦を加へてその威力を發揮させることができなかつたので  
 それからこのかた安寧なる年としては無くなつた。川や谷には戦血が横さまに流れ、豺狼の様な盜賊が  
 お湖のわきたつやうに起つて人をかみつゝある。そのとき我が肅宗皇帝は靈武の北地から鳳翔の  
 方へおいでになり、遠地を驅け來られて人民の凋敝をおすくひになる。岐山梁山の下なる鳳翔の地方  
 に兵をとどめられてはゐるが卻て他方には回紇と連絡をとつて遠く沙漠のはてまで足をのばされる。  
 長安・洛陽の二京は賊軍に陥つてまだ官軍の手へは收められないが、四方のはてまで我が朝廷が之を  
 制御し得るのである。いまこのさびしい漢水の清く流るところ、漢中の地ははるかに淮水兩湖の地  
 方の租税を通運し得る場所である。中央朝廷から使者が八方へとび散つてをり、帝道はなほ張られ  
 てあつて遠方の地方は王室に對して旗のびらびらが旗についてゐる如くつながらつてはなれずにあるの  
 である。南方の伯たる漢中王はその部下に賢者が集つてをる。君はそこへ赴任するのであるが、そこ  
 へいつて立ちながらはなしをするとき、君は胸には七星の曆のことをよくこころえながら、手づから  
 三軍の形勢を圖にかきしめし、冰雪の様なすつきりした聰明さで、軍の精銳を雷霆の如く走らせるで  
 あらう。地方の幕府でありながら諫官の職にあつた人をつなぎつけておくといふ事は朝廷にこれま  
 で先例の無いことだ。(君の場合に於て始めて始めて之をみるのである。)今軍務多忙で陛下は食事さへ日たけ  
 てからなされるといふ始末で、君の力によつて人民に對し恵をしかれんとしてをる、やつと夕方に補  
 闕の官として君をおめし入れになつたのに、農にはその柱史(侍御史)がまた旅立ちの路に就かんとし

てしばし路傍にいこふ。いまはちやうど國家艱難の時によつつかつてをる。之を救ふには實に經濟上の供給をうまくやるといふ長久の計によらねばならぬ。君に別れやうとすれば、路傍の一本木を吹きまはしの風が吹く、君の袂を手にする所を太陽が照らしかける。自分が蒼煙横はる所の樹根に備哭すると、周囲には門の如くつつ立た山山がいくへにも閉ざしてゐる。この居残る自分は茫漠としてよるべなくおちおれてゐる。旅人たる君はそれをすてて傾斜地をはるかにすすんでゆく。自分はあたりをさまよひながら君との生きわかれを悲しくおもひ、かくもせぐくまつてのびることのできなさいまでこの世に老いゆくのかと思ふ。陶唐氏は永く遺民に歌はれて忘れらるることなく、後漢は光武帝の中興以後幾人か代代の天子がかはられた。我が唐もその様に遺民はその徳をしたひ、その君は幾代もつづくことであらう。ただ自分は不才であつて君失を正し王室を回復するに足るだけの資質をもたぬから、今からここをたち去つて山林へゆかうとおもふのである。(不才の者が立ち去るは當然にして、しからは原文の聊字用無きに似たり、或は去つて山林にゆくに非ず、漢中の樊の方へゆかんとの意に非ざるか。疑ありと雖も暫く奮解に従つて上の如くとく。)

送韋十六評事充同谷防禦判官

韋十六評事が、同谷の防禦判官に充てらるるを送る。

昔没賊中時潛與子同遊  
 今歸行在所王事有去留  
 偏側兵馬間主憂急良籌  
 子雖軀幹小老氣橫九州  
 挺身艱難際張目視寇讎  
 朝廷壯其節特詔令參謀  
 鑾輿駐鳳翔同谷爲咽喉  
 西扼弱水道南鎮枹罕  
 此邦承平日剽劫吏所羞  
 況乃胡未滅控帶莽悠悠  
 府中韋使君道足示懷柔  
 令姪才俊茂二美又何求  
 受詞太白脚走馬仇池頭

送韋十六評事充同谷防禦判官

四一七

昔賊中に没せし時、潛に子と同遊せり。  
 今行在所に歸す、王事去留有り。  
 偏側たり兵馬の間、主憂へて良籌を急にす。  
 子軀幹小なりと雖も、老氣九州に横はる。  
 身を挺す艱難の際、目を張つて寇讎を視る。  
 朝廷其の節を壯とし、特に詔して謀に參せしむ。  
 鑾輿鳳翔に駐す、同谷は咽喉爲り。  
 西は扼す弱水の道、南は鎮す枹罕の陬。  
 此の邦承平の日、剽劫は吏の羞とする所。  
 況や乃ち胡未だ滅せず、控帶莽として悠悠たるをや。  
 府中の韋使君、道懷柔を示すに足る。  
 令姪才俊茂なり、二美又何を求めむ。  
 詞を受く太白の脚、馬を走らす仇池の頭。

古色沙土裂積陰雲雪稠

古色沙土裂け、積陰雲雪稠し。

羌父豪猪靴羌兒青兕裘

羌父豪猪の靴、羌兒青兕の裘。

吹角向月窟蒼山旌旆愁

角を吹いて月窟に向ふ、蒼山旌旆愁ふ。

鳥驚出死樹龍怒拔老湫

鳥驚いて死樹を出で、龍怒つて老湫より抜く。

古來無人境今代橫戈矛

古來無人の境、今代戈矛を横ふ。

傷哉文儒士憤激馳林丘

傷しい哉文儒の士、憤激して林丘に馳す。

中原正格鬪後會何緣由

中原正に格鬪す、後會何にか緣り由らむ。

百年賦命定豈料沈與浮

百年賦命定まる、豈に沈と浮とを料らむや。

且復戀良友握手步道周

且つ復た良友を戀ひ、手を握つて道周に歩す。

論兵遠壑靜亦可縱冥搜

兵を論じて遠壑靜ならば、亦た冥搜を縱にす可し。

題詩得秀句札翰時相投

詩を題して秀句を得ば、札翰時に相投せよ。

【字解】 〔一〕 章十六。 章は姓、名は未詳。 〔二〕 評事。 官名。 〔三〕 同谷。 今甘肅省成州成縣の治所。 〔四〕 防禦判官。 天寶十四載冬、安祿山の反によりて同谷郡に防禦使を置、判官はその屬官なり。 〔五〕 首夜賊中。 前年鄭州より行在に走らんとして、長安に

て賊軍の中に陥りしことをなす。 〔六〕 滯。 ひそかに。 〔七〕 子。 章評事をなす。 〔八〕 今。 至徳二載をいふ。 〔九〕 行在所。 鳳翔の行在所。 〔一〇〕 王事。 天子の命せらるるしこと。 〔一一〕 去留。 去は車をいひ、留は自己についていふ。 〔一二〕 個個。 いきづまる貌、長懷のさま。 〔一三〕 主要。 主は君主、庸宗をいふ。 〔一四〕 息良。 善は「はかりごとし、良きはかりごとを何より第一とする。 〔一五〕 軼。 軼格のこゝろ。 〔一六〕 老氣。 老成の氣象。 〔一七〕 橫九州。 九州は天下をいふ、横とはひろがりおほふをいふ。 〔一八〕 挺身。 挺とはひとり前へぬきんづるをいふ。 〔一九〕 張目。 怒りまなむ。 〔二〇〕 寇讎。 あだ、かたき、賊軍をなす。 〔二一〕 壯其節。 其節とは章評事の忠節なること。 〔二二〕 參謀。 同谷防禦使の帷帳の謀に參與せしめる。 〔二三〕 擊輿。 鳴る所の「すす」のついたおし、天子の御乗物なり、因つて天子をなす。 〔二四〕 壯。 とどまる。 〔二五〕 咽。 のど、要害の地。 〔二六〕 扼。 おさへつける。 〔二七〕 弱水。 甘州刪丹縣より張掖縣の北に流れ入る所の川。 〔二八〕 嶺。 まもりとなること。 〔二九〕 袍罕。 縣の名、唐の河州の治所なり、今甘肅省蘭州府河州の治なり。 〔三〇〕 障。 障隔をいふ、こゝは高地にて遠處にある地なるを以ていへり。 〔三一〕 此邦。 同谷をなす。 〔三二〕 承平日。 太平を承けし日、平和なりし時期をいふ。 〔三三〕 割地。 割は暴力にて人の物を取ることを、割も同義。 〔三四〕 吏。 同谷の吏をいふ。 〔三五〕 差。 郡内に盜賊あれば政治の悪きことを示す、故に之を差とす。 〔三六〕 胡。 賊軍。 〔三七〕 控帶。 同谷の地勢は遠方胡や羌の地をひかへ、帯びてなる、つらなつてなること。 〔三八〕 莽怒。 花隈としてけるかにつらなる。 〔三九〕 府中。 幕府の中、防禦使の役所をいふ。 〔四〇〕 章使君。 使君は州郡の長官に對する敬稱なり、此語と下文とによれば、時の防禦使は必ず章評事の叔にあたる人なりしならん。 〔四一〕 道。 その人の道徳。 〔四二〕 示懷柔。 懷柔とは遠民をなづけ安んずること、手なづけけること。 〔四三〕 命。 命をいふ。 〔四四〕 後茂。 すぐれ、しげし。 〔四五〕 二美。 叔姪二人の才徳の美はしきこと。 〔四六〕 又何求。 他に求むる所あるを要せず、それだけにて十分なるをいふ。 〔四七〕 受調。 天子のおこぼをうける。 〔四八〕 太白。 山の名、前に見ゆ。 〔四九〕 仇池。 成州の南八十里に仇池山あり。 〔五〇〕 古色。 ふるびた色。 〔五一〕 積陰。 陰氣のつしめること。 〔五二〕 稠。 多し。 〔五三〕 羌。 種族の名。 〔五四〕 父。 兒。 父は老年者、兒は少年をいふ。 〔五五〕 豪猪靴。 野猪なり、その皮にて靴をつくる。 〔五六〕 青兕裘。 兕は青色の野牛、その皮にてかばころもとなす。 〔五七〕 吹角。 つのぶえを吹きならす。 〔五八〕 月窟。 西極にありと考へられたる地、ぼん

やり鼠蕃山あたりなます。【六〇】者山 行路によたはる青き山山。【六一】旄施愁 「はた」まへ懸懸の色を帯ぶ。【六二】死樹 枯樹なり。蓋し枯樹のうつろなふ。【六三】拔老漱 漱は龍の居る「ふち」老と古くから存在するをいふ、拔とは「ふち」からぬけでること、鳥も龍も兵亂に驚かされて安處されぬゆゑさわざたつ。【六四】横戈矛 戈は二たまたにて枝が曲がつるぬほこ、矛は三つまたのほこ、横とは人人がよこたへるをいふ。【六五】文儒士 文學に従事する儒者たる人、章評事をさす。【六六】憤激 國難をみて怒る。【六七】中原 洛陽方面をいふ。【六八】格調 から手でうちあうてたかふ。【六九】後會 後日の會合。【七〇】何樂由 何によつてできやうか。【七一】百年 一生涯の長さ。【七二】賦命 天の分ち與へし運命。【七三】沈興浮 一身の榮枯をいふ。【七四】良友 章評事をさす。【七五】握手 別れを惜むさま。【七六】道周 みちばた。【七七】論兵 章評事が幕府に在つて論ずるなり。【七八】遠望 彼處に見る説あり、之によれば「遠方の山壁の崩別なる處にて」の義ととく、論兵の結果とみる説あり、之によれば「異日遠方の山壁が崩壊なるに至らば」ととく、今後の説を取る。【七九】縦 ほしいままにする。【八〇】冥搜 幽奇の境地をふかくさぐる。【八一】秀句 佳句。【八二】札輪 てがみ。【八三】相投 こちらへ投寄する。【八四】冥搜 幽奇の境地をふかくさぐる。

【題義】評事章某が同谷郡防禦使の判官となりて任に赴くを送る詩。製作時は至徳二載。

【詩意】昔、賊軍の中へ陥ちこんだとき、あなたとはこつそり往來して一しよに遊んだ。今、ここの鳳翔の行在所におちついたところが王事の爲とはいへ、一人は去り一人は留まるといふことができてきた。今は亂世で兵馬の間で人がいきづまる様になつてを。主上にも大に御心配になつてどうしてもこの亂をしづめる良いはかりごとを急務だとせられてを。あなたは身なりこそ小さいが、その老成の氣象は天下ぢうにも横はるほどで、難難の際に己が一身を前方へのりだし、目をみはつてあたかたきたる賊軍をみつめてをられる。それで朝廷におかせられてもその忠節な點を壯なりとせられ、特

別に詔があつてあなたを同谷郡防禦使の參謀たらしめられることになつたのだ。我が君の御乗物は現に鳳翔におとどまりになつてゐる、同谷はちやうどそののどくびにあつてゐて、西の方は弱水の道をおさへ、南の方は砲罕の邊隅をしづめるに足る地勢である。此の地方は平和の時期ならば追ひはぎ強盜があつてもそれは更たる者の自分の恥辱とする所である、まして今は祿山等の胡賊がまだ滅びず、その地は更に羌の居る邊境へかけて遠くつらなつてをるに於てをや。幕府にをられる長官章君はその道徳はもとより遠方の民を懷柔し得ることを示すに十分であるのに、その部下としてゆかるる令姪(あなた)もその才がすぐれて且つしげくあられる、この二美がそろへば他に何も求むるところは無い様なものである。あなたは天子のおこしを太白山の麓でお受けして、仇池山の方へと馬を走らせてゆく。その道路經過する所を想ひやれば、古びた色の沙土が裂けくづれ、陰氣のつもるところ雲や雪やおびただしくあるであらう。また士民の羌族の老年のものは豪猪の皮の靴をはき、少年は青兕の毛ごろもを着け、角ぶえを吹きならして月窟の方へと向へば青山のつらなるあたり陸の色さへうれはしく見ゆるであらう。それから鳥も驚いて枯れ樹のうつろから飛び出し、龍も怒つてふるくからある「ふち」からぬけだすであらう。これみな、昔から人も住まなかつた場所が、今代では人人が戈矛を横へていくさすることになつたからである。傷ましいことではある、あなたの様な文學儒者の士が、國事のために憤激して林や丘の地方に馳せゆくといふことは、今は中原の地方でもちやうど

うちあひをしてたたかうてゐる、あなたと今日お別れすれば後日の會合は何によつてできるかみこみはつかぬ。自分の百年の壽命は之に對して天から與へられた運命はきまつてをる。わたしは別に將來一身の浮き沈みがどうかうのと推量はせぬつもりだが、しかしそれであなたの様な良友とお別れするとなればあなたがこひしく、ここにあなたと手を握りあうて道のべにともあるく。あなたはあちらへついで兵略を論せられ遠方の山壑も静まるに至つたならば、おいそがしいなかでも幽奇の境地を自由に探られることもできるであらう。そのときもし詩を題せられて秀句を得られたならば、手紙にかきしるして時としてわたしの方へ寄せてくれるやうにおたのみするのである。

述 懷

懷を述ぶ

去年潼關破妻子隔絕久。  
 今夏草木長脫身得西走。  
 麻鞋見天子衣袖見兩肘。  
 朝廷慙生還親故傷老醜。  
 涕淚受拾遺流離主恩厚。

去年潼關破れてより、妻子隔絶すること久し。  
 今夏草木長じて、身を脱して西走するを得たり。  
 麻鞋にして天子を見る、衣袖兩肘を見はす。  
 朝廷生還を慙み、親故老醜を傷む。  
 涕淚して拾遺を受く、流離主恩厚し。

柴門雖得去未忍即開口。  
 寄書問三川不知家在否。  
 比聞同罹禍殺戮到雞狗。  
 山中漏茅屋誰復依戶牖。  
 摧頽蒼松根地冷骨未朽。  
 幾人全性命盡室豈相偶。  
 嶽岑猛虎場鬱結迴我首。  
 自寄一封書今已十月後。  
 反畏消息來寸心亦何有。  
 漢運初中興生平老耽酒。  
 沈思歡會處恐作窮獨叟。

柴門去るを得と雖も、未だ即ち口を開くに忍びず。  
 書を寄せて三川に問ふ、知らず家在りや否や。  
 比る聞く同じく禍に罹りて、殺戮雞狗に到ると。  
 山中の漏茅屋、誰か復た戸牖に依らむ。  
 摧頽せる蒼松の根、地冷にして骨未だ朽らざらむ。  
 幾人か性命を全うせむ、室を盡くして豈に相偶せむや。  
 嶽岑たる猛虎の場、鬱結我が首を廻らす。  
 一封の書を寄せし自り、今已に十月の後。  
 反つて畏る消息の來らむことを、寸心亦た何か有らむ。  
 漢運初めて中興、生平老いて酒に耽る。  
 沈思す歡會の處、恐らくは窮獨の叟と作らむ。

【字解】「去年」天寶十五載、即ち至德元載をさす、至德の改元は七月にあり。「潼關破」十五載の六月九日、哥舒翰が官軍を率ゐて潼關を守り、吐蕃にうち破られしことかゝいふ。「三川」瀋州、作者の妻子は瀋州の羌村に寄寓せしめあり。兩者の間へたたる。

【今夏】至徳二載の夏。【長】せがのびる。【脱身】賊軍のなからぬけだす。【西北】長安から西の方鳳翔に向つて走る。【△】麻鞋、あまのわらじ、旅装のままなり。【見天子】肅宗皇帝に謁見す。【見兩將】そでやぶれたる故に左右のひぢをあらばす。【二】態、あばれむ。【三】生還、いきてもどつてきたこと。【三】親故、親しい人人や、ふるなじみの人人。【傷老眼】作者の老いてみにくくなりしことを氣のどくが。【涕淚】なみだながらに。【△】受拾遺、拾遺は官名、供奉諷諭を掌る、作者は至徳二載五月十六日に中書侍郎張融致命を奉じ左拾遺に任ぜられたり。【△】凌離、零落のさま。【△】主恩、天子の御恩。【△】柴門、鄭州羌村にある家の門、前に「柴門老樹村」とありし柴門と同じ。【△】去、そこへゆくことをいふ。【三】即開口、すぐに口を開いてそのことを言ひだす。【三】寄書、手紙をやる。【三】三川、即ち鄭州地方にて羌村の方をいふ。【△】家在否、自分の家が存在してあるかどうか。【△】比、このごろ。【△】天、同福禍、自分の家も他の家と同じく兵禍にかつた。【△】殺戮、ころす。【△】到鐘狗、鐘や狗までも。【△】元、山中漏茅屋、漏茅屋は雨のもるかやぶきの家。【△】依戶欄、戸やまどによりそつて立つ。【△】推頭、くだけ、くづれる。【△】地冷骨未朽、愚茶するに此句は作者が今遂に殺戮されしと想像せる家族について其の死何久しからざるをいふ。舊解多く一般の死者をいふとなすし今取らず。【△】全性命、無事にいきながらへる。【△】遺室、一家全體かくることなく。【△】相偶、偶とはならんで坐するをいふ。【△】巖岑、岑は或は巖に作る。巖岑は山のけしき貌。【△】猛虎揚、盜賊のほびこる地をいふ、即ち鄭州の方をいふ。【△】鬱結、心のむすばれること。【△】題我首、鄭州の方へと首をふりむける。【△】一封書、一通の手がみ。【△】十月後、十箇月の後なり、此詩の作が何月にあるや不明なるも、左拾遺の任命が五月十六日、後の「北征」の詩が閏八月初吉なるより推すときは其の中間に在りてしかも任官後あまりほどとほからざるならん。限りに六月頃とすればその十箇月以前は前年の九月頃となる。【△】消息、鄭州の妻子からのたより。【△】寸心、むねのうち、支那人は心のほたらきを一寸四方の心臓に在りとかんがへたり。【△】亦何有、なにもなきをいふ、心し消えうせるばかり。【△】漢運、唐の國運をいふ。【△】初中興、初めて興るにあたる、肅宗皇帝の即位されしをさす。【△】平生と同じ。【△】沈思、ふかかかんがへる。【△】歡會處、よろこんで一家聚會合する場合のこと。【△】窮獨夏、貧窮

で單獨なる老人、家族どもはみな殺されてしまへばかくなるなり。

【題義】鳳翔に於て肅宗皇帝に謁見し、左拾遺の官を拜命して以後、鄭州の家族の安否を問ひ、消息なほ來らざりしときおもひをのべたる作。製作時は至徳二載の夏。

【詩意】去年潼關が破れてから、妻子とは久しくかけはなれてゐた。今年の夏は草木が生長するころに、賊の中からぬけだして西の方鳳翔の行在所をめぐりて走りだした。幸に行在所に到着ができ、麻のわらじのまま肅宗皇帝におめみえをしたが、衣のそでは破れて兩ひぢが現れてゐた。朝廷ではこの自分がいきて戻つてきたのをおあはれみ下され、親しきもの、ふるなじみのもの等は自分の老い且つ醜きをきのどくがつてくれた。おかげで自分は涙ながらに左拾遺の官をおうけた。この流浪零落の時にわが君の御恩はいかにもお厚いことである。家族の居る鄭州の家の方へは若し願ひでるならばゆくことはできるのであるが、とても今すぐそんな事を口を聞いて言ひだすには忍びないのである。自分は今また新しく手紙をやつて三川(鄭州方面)の方の様子をたづねる、いつたいわが家は現に存在してゐるのかどうか。このごろ聞けば、我が家も他の家同様に兵禍にかかつて雞や狗までも殺されてしまつたともいふ。あの山の中の雨もりのする茅屋、そこでは誰がまた以前の様に戸や牖によりそつてゐやう。また殺された家族どもはあのかくれくだけた松の樹の根もとに、地面は冷たくあるその下に埋められて骨はまだ朽ちずにゐることであらう。今の様な時節に無事でいきながらへ得るものが幾人

あらうか。どうして一家一人も缺けずうちを坐するなどいふことができやうか。こんなことを考へて、自分はけはしい猛虎のはびこれる地方に向つて、心むすばれつ首をふりむけてながめやる。」前回手紙をやつた時から數へると、今は早十箇月の後である、それになんにもたよりがない。實は反つてたよりが来るのを畏れてゐるのだ、(そなたよりは家族全滅をいらしてきはしないかと) この方寸の心は消えうせるばかりだ。今や我が唐の國運は肅宗皇帝の御即位で中興のみよになつたが、このおやぢは平生、年よりながら酒にふけてゐる。じつと考へてみると妻や子とのうれしい會合の場合、それは夢であつてこの身が貧窮孤獨の老人としてのこるのではないかと恐れるのだ。

得家書

家書を得たり

去憑遊客寄一云休來爲附家書。去るは遊客に憑りて寄す、來るは家書を附するが爲なり。  
今日知消息他郷且舊居。今日消息を知る、他郷なるも且つ舊居なり。  
熊兒幸無恙驢子最憐渠。熊兒は幸に恙無し、驢子最も渠を憐む。  
臨老羈孤極傷時會合疎。老に臨みて羈孤極まる、時を傷みて會合疎なり。  
二毛趨帳殿一命侍鸞輿。二毛帳殿に趨し、一命鸞輿に侍す。

北關妖氣滿西郊白露初

北關妖氣滿つ、西郊白露の初。

涼風新過雁秋雨欲生魚

涼風新に過雁、秋雨魚を生せむと欲す。

農事空山裡眷言終荷鋤

農事空山の裡、眷みて言に終に鋤を荷はむ。

【字解】「去」此の「去」の字は人にかけて見るべきか書にかけて見るべきか不明なり、下句の「來」が人にかれる以上それに對すれば人にかけてみるべし。しかし「寄去」の二字を分用したるものとし、書にかけてみるも亦確を爲す。余は後の解を取る。即ち去とは書を寄せしむることをいふ。【一】「憑遊客」鄭州の方へ往遊する客なだのみて。【二】「寄」書を家族によせしむること。【三】「來」さきに書を依頼してやつた同じ遊客が風翔へもどり來りしをいふ。【四】「附家書」附とはこちらへ附與し、わたすこと、家書は鄭州の家族からの返事のがみ。【五】「消息」たより、様子。【六】「他郷」此句以下三句は書中の意と自己の感とを一しよにのべたり、他郷とは鄭州をさす。【七】「且舊居」且は「まゝ」といふほどの意、舊居とは先村の以前の住居をいふ、他處へ移轉せむこと。【八】「熊兒」長子宗文の幼名。【九】「無恙」恙は毒蟲の名、恙無きは無事なること。【十】「驢子」次子宗武が幼名。【十一】「臨老」俗語「かれ、驢子なます」。【十二】「鸞輿」年老よりかかつて。【十三】「趨」趨は「たびにてのひとりばつち」。【十四】「侍」傷時、時世の事をいふ。【十五】「會合疎」家族たちとの會合がめつたにない。【十六】「二毛」頭髮に黒白二種の毛あるをいふ、老境のこと。【十七】「趨」參りおもむく。【十八】「帳殿」てんと「ばりの御殿、肅宗のこさる行在所のごてん。【十九】「一命」天子より最初の任官の命を蒙る、左拾遺に任ぜられしことをさす。【二十】「雙輿」「送章十六評事」時に雙輿の字あり、雙、雙、みな「すず」をいふ、すずのついたおみこし、天子のお乗りものなり。【二十一】「北關」長安の北門の小門をいふ。【二十二】「妖氣」悪い氣、兵亂の氣なり、安慶緒の勢のまかんなるをいふ。【二十三】「西郊」王城の西方の野外をいふ、支那古語には王者たるもの立秋には秋の氣を西郊に迎ふることあり、こは長安に對して風期の地をいへり。【二十四】「白露初」初めて白露の降るころ、「禮記」月令に孟秋之月、涼風至、白露降とみゆ、此句及次の「涼風」の句によれば此詩の作られし時の七月なるを知るべし。【二十五】「天」涼風、すすしいかぜ。【二十六】「過雁」かりしが通過する。

【一】秋生魚 秋の出水のため平地にも魚がわきいでんとする。【二】農事 農事が山中にあることをいふ。【三】空山人の居らぬ山、鄜州羌村の地をさす。【四】春言 言は「ここに」又は「われ」と訓じ、古語なり、春は「かへりみる」、そちらに目をくれば、愛顧の意。【五】有知 「すき」をになふ、耕作に従事すること。

【題義】前の「述懐」の詩に見えたる如く、作者より安否問ひあはせの手紙を出させしち、家族の方より返事を得て作れる詩なり。時に作者鳳翔に在り。製作時は至徳二載の秋七月。

【詩意】自分は鄜州の方へ往遊する客があつたからそれにならんで家族への手紙を寄せたが、その同じ人がまた家族からの手紙を自分へとどけてくれるために鳳翔へ来た。それに由つて今日は家族の消息を知ることができた。その消息によると、家族は他郷とはいひやつぱりもとの住居にそのまゝ居るさうだ。長男の熊兒は幸にも無事であり、次男の驥子、彼をば自分は最もかはいさうにおもふ。自分は年老いかかつて極端なひとりぼちの旅すまひをし、時世のことを氣にやみながら家族たちとはめつたにあへずをる。自分はこの白髮まじりの頭で行在所の御殿に参り、最初の任官を拜して君の御乗りものの御そばに侍つてゐる。長安の北關では安慶緒等賊軍の悪氣が充満してをり、この西郊には白露が降りそめた。すす風がたつてはつ雁もとほりすぎ、雨もふりつづいて魚がわきださうとしてゐる。鄜州のさびしい山中では農事もあることだらう、自分の心はどうもそちらへとひかれる、自分は結局そちらの人間となつて鋤を荷ひたいとおもふのである。

送長孫九侍御赴武威判官 長孫九侍御が武威の判官に赴くを送る

驄馬新鑿蹄銀鞍被來好 驄馬新に蹄を鑿つ、銀鞍被り來つて好し。

繡衣黃白郎騎向交河道 繡衣黃白の郎、騎して向ふ交河の道。

問君適萬里取別何草草 君に問ふ萬里に適くに、別を取るに何ぞ草草たる。

天子憂涼州嚴程到須蚤 天子涼州を憂ふ、嚴程到ること須らく蚤かるべし。

去秋羣胡反不得無電掃 去秋羣胡反す、電掃する無きを得ず。

此行收遺貳風俗方再造 此の行遺貳を收めむ、風俗方に再造せむ。

族父領元戎名聲國中老 族父元戎を領す、名聲國中の老なり。

奪我同官良飄飄按城堡 我が同官の良を奪うて、飄飄城堡を按せしむ。

使我不能餐令我惡懷抱 我をして餐する能はざら使む、我をして懷抱を惡しくせしむ。

若人才思濶溟漲絕島 若人才思濶なり、溟漲絶島を溟す。

樽前失詩流塞上得國寶 樽前詩流を失し、塞上國寶を得。

皇天悲送遠雲雨白浩浩 皇天送遠を悲しむ、雲雨白くして浩浩たり。



東郊尙烽火朝野色枯槁 東郊尙烽火朝野色枯槁す。  
 西極柱亦傾如何正穹昊 西極柱亦傾く、如何が穹昊を正しうせむ。

【字解】(一) 長孫九侍御 侍御は官名、長孫は姓、名は未詳。(二) 武威 甘肅省涼州府武威縣、即ち河西節度使の治所。(三) 列官 河西節度使の屬官なり。(四) 應馬 青白色の毛の馬、後漢の桓典驛馬にのりしより御史の故事には應馬を用ふ、こゝは長孫侍御の乘馬をさす。(五) 聖鑒 氣あらし馬をならすため、ひづめに穴をあける。(六) 銀鞍 銀でかざつた鞍なり。(七) 被かぶせる。(八) 來 動作の前よりつづき來ることならはす辭。(九) 繡衣 わびとりした衣、漢の武帝が太初四年に暴勝之といふ者にちさちきの命をさづけて、繡衣をきて奔をつき監獄を捕へしめしことより御史の故事となる。(一〇) 黃白郎 黃は金印の色、白は銀の色、金印若くは銀印を身に帶ぶべき郎官。(一一) 駟馬にのる。(一二) 交河 河名より來る、今の新疆省の吐魯番のあたりをさす。(一三) 君 長孫侍御をさす。(一四) 遙 ゆく。(一五) 取別 別れをすること。(一六) 草草 せばしなき貌。(一七) 涼州 甘肅省涼州府。(一八) 嚴程 嚴重な旅程、一日幾里と定められたとほりに進まればならぬこと。(一九) 到 先方へ到着すること。(二〇) 憂 ばやし。(二一) 去秋 通鑑に至德二載、河西の兵馬使董庭倫、武威の九姓の南胡安門物等と、節度使周密を殺す、武威は大城の中に小城七有り、賊、其の五に據る、度支判官崔僉討つて之を平ぐ、との記事あり、討平は二載の正月にして事變の發生は去年の秋にありしなり、去秋とは之をさす。(二二) 羣胡反 多くの胡がそむく、上の事變なり。(二三) 電掃 いなづまの如くはやくとりかたづけける。(二四) 收遺賊 收とは散じたものなりあつめること、遺賊は賊亂にのこされた貧民。(二五) 再造 たてなほす、「天子」より「再造」までは、長孫侍御の答言なり。(二六) 族父 父のいとこ、至德二載五月に武部侍郎杜鴻漸を以て河西節度使となす、鴻漸をさして族父といふ。(二七) 償元夜 詩經六月に元戎十乘、以先啓行とみゆ、元戎は大なるいくさぐるまなり、償はひきまること、元戎を領すとは節度使たるをいふ。(二八) 名聲 ひやうばん。(二九) 關中老 朝廷でのとしよりかぶ。(三〇) 我 作者自らいふ。(三一) 同僚 拾遺も御史も同じく謀むる役なり。(三二) 良 良友をさす。(三三) 眞 眞 だたよびおち

つかわさま。(三四) 按城使 按はかんがへしらべること、僅はとりで。(三五) 不能食 食事することができぬ、良友と列るるを患しむために。(三六) 惡懐抱 むねこちをわくるさませる。(三七) 若人 かくのごとき人、長孫侍御をさす。(三八) 才思 才ある思想がひろい。(三九) 圓 圓 ひろうみの水のみなざり。(四〇) 深 びたす。(四一) 絶局 かけはなれたしま、此句は才思圓の形容。(四二) 樽前 宴上、この二句は前後を置きかへてみるべし、樽前は酒樽のほとり、宴上は邊地の要塞のほとり。(四三) 失詩流 詩のなまを失ふ、これは私情よりいふ。(四四) 得國寶 國家の寶ともいふべき人物を得る、長孫侍御をほめていふ、これは公義の上からいふ。(四五) 皇天 あみだら。(四六) 惡途 惡途とは道行を危ること。(四七) 浩浩 大なる貌。(四八) 東郊 鳳翔の行在所よりさしていふ、長安、洛陽方面をさす。(四九) 烽火 兵亂を告げるのろしび。(五〇) 朝野 朝廷の人も在野の人も。(五一) 色 顔色。(五二) 枯槁 かれてうるほひの無きこと。(五三) 西極 西のはての地、涼州地方をさす。(五四) 柱亦傾 柱は天をささふるはしら、昔、女媧氏が葦の足を断ちて天の四すみに柱を建てたるに、共工氏が顛頊と帝たらんことを争うて怒つて不周山に觸れしに天柱折れ地維絶えたりとの古傳説あり。(五五) 如何 どのやうにしてか。(五六) 正 位置のまがれるを正しくする。(五七) 穹昊 ゆみなりのそら、天をさす。

【題義】侍御史の官たる長孫某が武威の河西節度使の判官となりてゆくを送る詩。製作時は至德二載。

【詩意】新らしく蹄に手をいれた驃馬、そのせなかに銀の鞍をかおせたところはなかなかなよろしい。いま繡衣をつけて金印銀印を帶ぶほどの郎官たる長孫侍御はその馬に騎つて遠く交河の道に向はれるのである。君はこれから萬里の地にゆくのである。どうしてそんなにあわただしく自分に別れをなすのであるか。(君は答へていふ)いま天子は涼州の事をご心配になつてを。定められた旅程どほりを守つて自分はなるべく早く先方へ到着せねばならぬ。去年の秋、多くの商胡どもが謀反した、それらをすばやくあとかたづけをせないわけにゆかぬ。このたびの赴任はその騒亂にのこされた貧民た

ちをも收集し、風俗のたてなほしをせなければならぬのである。」自分(作者よりいふ)の父のいとこにあたるもの(杜鴻漸)が今君のゆく武威で長官をしてゐるが、彼はその名聲は朝廷での元老である。彼は自分の同僚の良友たる君を奪ひ去つてあつちこつちと城や堡をみまはらせることとした。それゆゑ自分をして食事をすることもできなくし、また胸中の氣分をわらくさせる様にさせてしまつた。」君の如き人は才思が宏闊で、たとへば大海の水がかけはなれた島をひたしてゐる様だ。君が去つてしまへば塞上では國寶の様な人物を得るが、自分にとつては酒樽のほりに詩友を失ふのだ。天も我が君の遠行を送るのを悲んでか、雲や雨が白くひろがつてわきおこる。」長安、洛陽の東方はまだ烽火がたえぬ、朝廷の人も在野の人も顔色に生氣がみえずひからびかかつてゐる、このとき涼州の西のほても天をささえる柱がゆがみつがある、どうすればその柱をまつすくにして弓なりの青天井を正しい位置になほすことができるのか。

送從弟亞赴河西判官

從弟亞が河西判官に赴くを送る

南風作秋聲、殺氣薄炎熾。

南風秋聲を作す、殺氣炎の熾なるに薄る。

盛夏鷹隼擊、時危異人至。

盛夏鷹隼撃つ、時危くして異人至る。

令弟草中來、蒼然請論事。

令弟草中より來る、蒼然事を論せむと請ふ。

詔書引上殿、奮舌動天意。

詔書引いて殿に上らしむ、舌を奮つて天意を動かす。

兵法五十家、爾腹爲筐笥。

兵法五十家、爾が腹篋爲り。

應對如轉丸、疎通略文字。

應對轉丸の如く、疎通文字を略す。

經綸皆新語、足以正神器。

經綸皆新語、以て神器を正しくするに足れり。

宗廟尙爲灰、君臣俱下淚。

宗廟尙灰と爲る、君臣俱に涙を下す。

崆峒地無軸、青海天軒輕。

崆峒地軸無く、青海天軒輕す。

西極最瘡痍、連山暗烽燧。

西極、最も瘡痍あり、連山烽燧暗し。

帝曰大布衣、藉卿佐元帥。

帝曰大布衣、卿に藉りて元帥に佐たらしむと。

坐看清流沙、所以子奉使。

坐に流沙を清むるを看む、子が使を奉ずる所以。非ず。

歸當再前席、適遠非歷試。

歸らば當に再び席を前むべし、遠きに適くは歷試するに。

須存武威郡、爲畫長久利。

須らく武威郡を存し、爲めに長久の利を畫すべし。

孤峰石戴驛、快馬金纏轡。

孤峰石驛を戴き、快馬金轡を纏ふ。

黃羊飢不翔 蘆酒多還醉

黃羊飢けども翔ならず、蘆酒多ければ還た酔ふ。

踴躍常人情 慘澹苦士志

踴躍するは常人の情なり、慘澹たるは苦士の志なり。

安邊敵何有 反正計始遂

邊を安んずる敵何か有らむ、正に反へす計始めて遂げむ。

吾聞駕鼓車 不合用駢驥

吾聞く鼓車に駕するには、駢驥を用ふ合らずと。

龍吟迴其頭 夾輔待所致

龍吟其の頭を廻らさむ、夾輔致す所を待つ。

【字解】 〔一〕從弟、年節したのいと。〔二〕亞、杜亞をいふ、杜亞字は次公、自ら云ふ京兆の人なりと、少くして學に涉り、善く物の理及び歴代の成敗の事を言ふ、肅宗の靈武に在るや、上書して時政を論じ、校書郎に擢でらる、其の年杜鴻漸河西に節度となり、明して從事となす、異りに評事、御史を授けられ、東都留守に終る。〔三〕河西列官、河西節度使杜鴻漸の屬官なり、河西節度使は甘肅省涼州府武威縣に治す。〔四〕南風、南方より吹く風、夏の風をいふ。〔五〕秋聲、秋かぜのおと。〔六〕殺氣、殺伐の氣、物の生氣を奪はんとする氣。〔七〕薄、ぜまる。〔八〕炎熾、炎熱の氣のさかんなること。〔九〕盛夏、まなつ。〔一〇〕僦車、たかばやぶさが他の禽鳥にむかつてうちかかるをいふ、案するに起りの三句は時侯の變をいひ且つ僦車を以て杜亞に比していへり。〔一一〕異人、非凡なる人物。〔一二〕至、風翔へ來りしこと。〔一三〕合弟、よき弟、亞をさしてほめていふ。〔一四〕草中東、草野の間、賊軍のうちなくぐりて來れるをいふ。〔一五〕蒼然、蒼卒、蒼皇の意なりといふ、蒼は倉の假借字、あわたたしき貌。〔一六〕論事、事は國事なり。〔一七〕引、みちびく。〔一八〕蒼舌、蒼舌なふるふ。〔一九〕天意、天子(肅宗)のころ。〔二〇〕五十家、漢書の屬文志に見え其家の番五十三家を列す。〔二一〕爾、亞をさす。〔二二〕彼節、はこ。〔二三〕應對、天子の問に應じ答へる。〔二四〕轉丸、たまをころがす如くすらすらと滑りなきなり。〔二五〕疎通、甲乙間の論旨をよくとほらせること。〔二六〕略文字、文字のことばはよいていへぬ。〔二七〕經綸、軍務の大方針をたてること。〔二八〕新語、これまで人の言はぬことば、新説をいふ。〔二九〕正神、

神器は天下をいふ、天下いま賊軍に奪はる。これ不正なり、正とはしとの主人へかへすをいふ。〔三〇〕宗廟、唐の天子のおたまや。〔三一〕益友、益にやかれしこと。〔三二〕峭嶮、山名、臨洮(甘肅鞏昌府岷州)にあり。〔三三〕地無輪、雲華の博物志に、地下に四柱あり、三千六百の輪ありて互に相牽くといへり。その輪とは柱をささへるためのものとみえたり。〔三四〕青海、甘肅の西、新疆の東部、峻嶺、青海は麓に河西節度の統ぶる所。〔三五〕天駟、軒は車の前部が地について後部ががること、駟とは車の後部が地について前部ががること、即ち上下低昂せしむることをいふ、天があがつたり、まがつたりするとは位置の不安定なるをいふ。〔三六〕西極、西方のはて、河西の地をさす。〔三七〕蒼黃、蒼りきす。〔三八〕殊健、畫のろし火を燈、夜のを燈といふ。揚雄曰く「送長孫侍御詩」にみえたる九姓胡胡の反亂をさすと。〔三九〕帝、肅宗。〔四〇〕大布衣、布衣とは無官のものをいふ、大は稱讃していふ、杜亞をさす。〔四一〕霜、よる、依頼する。〔四二〕稱、おまへ、亞をさす。〔四三〕佐、輔佐の役とする、列官となすをいふ。〔四四〕元帥、軍務の長官、杜鴻漸をさす。〔四五〕集看、そそろにみんとす、そのうちにさやうになるであらう。〔四六〕清、兵塵のけがれなきよめる。〔四七〕流沙、新疆の東部、羅布喇湖の地方、武威の西北にあたる。〔四八〕所以、わけ。〔四九〕子、亞をさす。〔五〇〕奉使、天子の使命を奉ずる、列官として赴くをいふ。〔五一〕歸、天子の御居所へかへる。〔五二〕再前席、前席は話しにみがいりて座席の前方へと體をのりだすこと、漢の文帝のとき、賈誼が長沙の地よりよびかへされ、一夜鬼神のことを論じたるに文帝は前席たりとの故事あり、再とは亞が今回の論事に肅宗が席を前めたることを想像していふ。〔五三〕適遠、遠地にゆく、列官となり、武威にゆくをいふ。〔五四〕非歴試、歴試とは舜の故事、いろいろの難難の場合を一へて試験すること、歴試に非ずとは一舉にして此の官に任ぜられしをいふ。〔五五〕存、我が手に保存すること、敵にとられぬ様にするをいふ。〔五六〕憂憂、國家のためにかかる。〔五七〕長久利、永遠の利益。〔五八〕孤峰、一つのみね。〔五九〕石鏡、驛路が巖石のうへについてゐる。〔六〇〕飲馬、あしはやき馬。〔六一〕金羅帳、黄金で「たづな」の飾りをつける、帯は我邦にて「くつわ」と譯するは異なる。〔六一〕飲馬、あしはやき馬。〔六二〕飲、あく。〔六三〕鐘、羊くまきし。〔六四〕塵酒、あし」のくだにて吸ひてのむ酒なり、あまり濃からず、しかし多くめば酔ふといへり。〔六五〕塵、塵、よるこんでをとりあがる、官に任ぜられし時の心もち。〔六六〕常人、ただびと。〔六七〕慘澹、心を苦

しめるさま。【六九】苦士志 心を苦しめる人の志、さかさまに志士の苦といふも大差なかるべし、士は亞をます。【七〇】安邊 國さかひを安らかにする。【七一】何有 無きが如くなるをいふ。【七二】反正 公羊傳に撥亂反正の語あり、正に反へずとは亂宗をなして復び長安に還御せしむることをます。【七三】駕鼓車 駕は馬を車のから棒につなぐこと、鼓車は太鼓をのせる車なり、鼓車に駕すとは鼓車につけてそれをひかせるをいふ、後漢の光武帝の建武十三年に異國より名馬を獻じたるに、光武は聞してその馬をば鼓車に駕せしめたりとの事あり。【七四】合 俗語、まさに何何すべし。【七五】駝馬 駝馬なり。【七六】他吟 龍は龍馬杜亞をたとへていふ、吟はいなくこと。【七七】題其頭 河西の西地から都の東方へと頭をめぐらしもどくる。【七八】夾轄 左傳「僖公二十六年に夾輔成王の語あり、左右からばさんでかく様にしてたすけること。【七九】特 作者が亞に對して期待するなり。【八〇】所 諸家この致の字に注せず、風案するに致は君免罪の致ならむ、天子の身地をしてそこまで盡せしむることを「致す」といふなり。

【題義】いとこの杜亞が河西節度使の判官となりて赴任するを送る詩なり。製作時は至徳二載の夏、鳳翔にありて作る。

【詩意】南から吹く夏の風が秋風の音をたて、炎熱のさかんな所へ殺氣がせまつて来た。さうして夏であるのに鷹や隼が他の獲物を撃ちだす、このとき、國家危急の際に非凡な人物がやつて来た。おまへは賊軍の間から草をわけてやつて来て、あわただしくも國事を論じてみたいと願ひだ。願ひ許されて、詔書によつて、みちびかれて君の御殿へのばらしめられたので、おまへは辯舌をふるうて天子の御意を感動させた。古來兵法を説いたものが五十家もあるが、おまへの腹はその兵法をいれておくはこであつて、君との應答は丸をころがす様にすらすとされ、文字上の事などは省略して、諸説の意を互によく通らせる様にのべた。かやうにしておまへののべた國事處理の大方針はすべて新

説であり、これならば十分不正にある天下を正當にすることが出来る。今は賊のため宗廟も焼かれてまだ灰になつてをり、君臣ともに涙をたれてをる。加ふるに醜胡の地方はその地を支へる軸無く、青海の地方は天さへあがつたりさがつたり不安のさまにある。この西極の地は最も刃傷をうけたものが多く、つづく山山に晝夜ともろし火が暗くとさしてゐる。そんな時節だから天子はおまへの議論をおききになるや、一平民なる大人物よ、おまへに依頼して元帥の輔佐となつてもらはう。とおほせられた。おまへが河西の方へ使命を奉じてゆく様になつたわけはこんな次第なので、自分等はゆくゆくおまへが流沙の地方の戦塵を掃ひ清めるのをみることもおもつてゐる。おまへが他日こちらへもどつて来るときは君はおまへの話にみがいつて座席の前へ身をのりだされることは豫期されるが、今はおまへが遠くへゆくことになつたのは突然の拔擢で、一一諸役を経て能力を試験されてのことではないのだ。おまへはこの知遇の點を考へてどうしても武威郡を我が朝廷の手に保存し、國家のために永遠の利益をはからねばならぬ。おまへの通過する道路では、或る處は單獨の山が聳えて、驛路が巖石のうへにあり、そこを黄金でまといひかざつた手綱をくりながらはやあしの馬を驅つてゆく。途中では十分たべてもくさくない黄羊の肉をたべたり、たくさんのめばやつぱり酔ふ所の蘆酒をのむこともあらう。一官にありついてをどりあがつて喜ぶのは凡人の情であるが、志士のころはかへつて苦しめること慘澹たるものがある。おまへの才を以てすれば邊地を安らかにすることはうけあひで敵な

どはなんでもない、おまへの此の行によつて我が天下を正位にかへすの計が始めてなすとげられるであらう。』自分の聞くところでは、太鼓をのせる車などをひかせるに麒麟の名馬を用ひてはならぬものである。(おまへの如き人物を河西の判官ぐらゐに用ひておくのは麒麟に鼓車をひかせるの看がある)因つて麒麟即ち龍馬はたかくいなないてその頭を西から東へひかへ、再び朝廷にもどり来るであらう。さうしておまへが天子を輔佐し、成王までかそれとも堯舜までか、どこまでかの位置まで天子を達せしむるのを自分は期待するのである。

送靈州李判官

靈州の李判官を送る

羯胡腥四海、回首一茫茫。

羯胡四海腥し、首を回らせば一に茫茫たり。

血戰乾坤赤、氣迷日月黃。

血戰乾坤赤く、氣迷うて日月黄なり。

將軍專策略、幕府盛才良。

將軍策略を専らにす、幕府才良盛なり。

近賀中興主、神兵動朔方。

近賀中興の主、神兵朔方に動くを。

【字解】(一)靈州、靈武なり、即ち朔方軍節度使の治所。(二)李判官、其名は未詳。(三)羯胡、安祿山の賊軍をさす、唐の靈武州、隴山を屬する語に、故本靈州牧李判官といひ、麒麟物、何不送殺我といへり、羯は去勢したる牡羊をいふ、借りて屬語に充

つ、胡は夷種なり。【一】腥、なまぐさし。【二】四海、天下ちう。【三】茫茫、めあてなくばんやりした貌。【四】血を流して戰ふ。【五】氣迷、兵亂の惡氣がたちまふ。【六】將軍、朔方軍節度使郭子儀をさすならん。【七】專策略、軍略を專一に講究する。【八】幕府、節度使の役所。【九】才良、才ありて忠良なる人物、李判官の如きものをさす。【一〇】近、此の一字により肅宗即位後ほど進からざるを知る。【一一】中興主、肅宗をさす、又近賀云云とあるにより作者がなほ肅宗と同地に在るに非ざるを知る。【一二】神兵、不思議の力ある兵。【一三】動、はたらきたす。【一四】朔方、靈武をさす、朔方に於て兵がうごくは賊軍を討伐して長安、洛陽等の回復をなさんためなり。

【題義】朔方軍節度使の判官李某が靈州へゆくを送る詩なり。製作時は或は之を乾元二年の作とするも前四句の語を玩味すれば隴山の反を去ること遠からず、後二句の意を察すれば肅宗即位ののち軍威漸く盛ならんとするころ(至徳元載八月以後)の作ならんか。

【詩意】安祿山のえびすめ等が謀叛して、天下ちうがなまぐさくなつた。首をひねつてみまはしてみても、まつたく前きのめあてもつかぬ。諸處で血を流して戰ふから天地もまつかになり、兵亂の惡氣がたち迷ふので日月の光も黄ばんでみえる。このとき君の主人たる將軍は軍略を專一に講究し、その幕府には人才が盛にあつてゐる。ちかごろ祝賀することはあちらでは中興の天子(肅宗)がお立ちになり、神力をそなへた兵が朔方(君の赴かんとする處)にはたらきたしたことである。

奉送郭中丞兼太僕卿充隴右節度使三十韻

郭中丞が太僕卿を兼ね、隴右節度使に充てらるるを送り奉る、三十韻

詔發山西將秋屯隴右兵。詔して山西の將を發し、秋隴右の兵を屯せしむ。

淒涼餘部曲輝赫舊家聲。淒涼部曲餘る、輝赫家聲舊りたり。

鳴鶴乘時去驂驢顧主鳴。鳴鶴時に乘じて去る、驂驢主を顧みて鳴く。

艱難須上策容易即前程。艱難上策を須つ、容易前程に即く。

斜日當軒蓋高風卷旆旌。斜日軒蓋に當り、高風旆旌を卷く。

松悲天水冷沙亂雪山清。松悲しみて天水冷かに、沙亂れて雪山清し。

和虜猶懷惠防邊詎敢驚。虜に和するすら猶惠に懷づく、邊を防ぐに詎ぞ敢て驚か

古來於異域鎮靜示專征。古來異域に於ける、鎮靜にして專征を示す。さむや。

燕薊封豕奔周秦觸駭鯨。燕薊封豕奔り、周秦駭鯨觸る。

中原何處蹟遺孽尙縱橫。中原何ぞ地蹟なる、遺孽尙縱横たり。

箭入昭陽殿笳吹細柳營。箭は入る昭陽殿、笳は吹かる細柳の營。

内人紅袖泣王子白衣行。内人紅袖に泣き、王子白衣行く。

宸極妖星動園陵殺氣平。宸極妖星動き、園陵殺氣平かなり。

空餘金盃出無復總帷輕。空しく餘す金盃の出づるを、復た帷の輕き無し。

毀廟天飛雨焚宮火徹明。毀廟天雨を飛ばし、焚宮火明に徹す。

累恩朝共落榆枿夜同傾。累恩朝に共に落ち、榆枿夜同じく傾く。

三月師逾整羣胡勢烹。三月師逾整ひ、羣胡勢烹らるるに就く。

瘡痍親接戰勇決冠垂成。瘡痍親ら接戦す、勇決冠垂成に冠たり。

妙譽期元宰殊恩且列卿。妙譽元宰を期す、殊恩且つ列卿。

幾時迴節鉞戮力掃樓槍。幾時か節鉞を廻らし、力を戮せて樓槍を掃はむ。

圭竇三千士雲梯七十城。圭竇三千の士、雲梯七十城。

恥非齊說客祗似魯諸生。恥づらくは齊の説客に非るを、祗魯の諸生に似たり。

通籍微班忝周行獨坐榮。通籍微班を忝くす、周行獨坐榮ゆ。

隨肩趨漏刻短髮寄簪纓。肩を隨へて漏刻に趨き、短髮簪纓に寄す。

徑欲依劉表、還疑厭禰衡。  
漸衰那此別、忍淚獨含情。  
廢邑狐狸語、空邨虎豹爭。  
人類墜塗炭、公豈忘精誠。  
元帥調新律、前軍壓舊京。  
安邊仍扈從、莫作後功名。

徑に劉表に依らむと欲す、還た疑ふ禰衡を厭はむかと。  
漸く衰ふ那ぞ此に別れむ、涙を忍びて獨り情を含む。  
廢邑狐狸語り、空邨虎豹争ふ。  
人類りに塗炭に墜つ、公豈に精誠を忘れむや。  
元帥新律を調へ、前軍舊京を壓す。  
邊を安じて仍つて扈從し、功名に後るることを作す莫れ。

【字解】【一】郭中丞 御史中丞郭英父なり。【二】太僕卿 太僕寺の卿の官。【三】隴右節度使 唐の隴右道は鄯州(今、甘肅省西寧府張伯嶺治)に治す、節度使はその軍務の長官なり。【四】山西將 漢書趙充國傳に、山東出相、山西出將とみゆ、山は太行山をいふ。郭英父は瓜州長樂の人(瓜州は今の甘肅省安西州治)ゆゑ山西の將といふ。【五】屯 とどまらせておく。【六】隴右 隴下の注にいだせり。【七】遠涼 ものかなしきさま。【八】節部曲 節部は小部隊なり、餘とはまだのこりなるをいふ。英父の父は知運といひ、鄯州都督、隴右節度使たり、英父は父の功によりて官に任ぜられたり、其の配下には父の時の部隊が残つてをるといふなり。漢の時、大將軍の營は五部あり、部に校尉一人あり、部の下に曲あり、曲に軍候一人あり。【九】燧鼓 燧を一に列に作る、煙はあつていこと、如は火の明かなること、鼓は火のあかきこと。【一〇】番 ふるびたること、父祖以來なればなり。【一一】家聲 家名のこと。【一二】屬國 古マヤカ、カガの類、英父をたてていふ。【一三】夷時 時節につけていふ、秋の節にあたるをいふ。【一四】歸師 千里の名馬、英父をいふ。【一五】曠土 主は主人、天子をさす。【一六】疆場 國家のなんぎ。【一七】須上策 須つとは「いりよう」のこと、上策は最上のばかりのこと。【一八】容驂 たやすく。【一九】前將軍 旅程にのぼる。【二〇】銜日 ゆふひ。

【三】軒蓋 くるまのかさ。【四】高風 たかく吹く風、秋の風なり。【五】帝旆 「はた」をふきまく。【六】松風 松風の香しかなしげなり。【七】天水 郡の名、甘肅省秦州西南。【八】雪山 甘肅省蘭州府河州の西南にあり、一に雪嶺と名く。【九】和聲 唐と和陸すること、唐とは夷狄をさす。【一〇】懷惠 こゝらの恵みになづける條にする。【一一】防邊 國の邊地を防禦する。【一二】阻 なんぞ。【一三】驚 震聳せしむるをいふ。【一四】於異域 於とは「對しては」といふこと、異域は外國をいふ、こゝは隴右の邊境たる吐蕃の地などをさす。【一五】傑許 おちついてしづかにすること。【一六】示專征 示とは敵手にみせること、專征とは節度使が天子から征伐を專斷施行してよいとの權力を委任されてあることをさす。【一七】燕趙 燕は六國時の國名、趙は鄆州、燕の都なり、共に今の直隸州天府の地、安祿山の根據とせる處。【一八】封豕 大なるぬのしし、安祿山を譬へいふ、左傳に、吳爲封豕長蛇、腹食上國とみゆ。【一九】周秦 周は洛陽をいひ、秦は長安をいふ。【二〇】掃蕩 陳琳の檄に、若賊鯨之觸網とみゆ、賊鯨はおどろく所の「いさな」、觸とは「あみ」にふるること、洛陽長安を網に安祿山を鯨にたとふ、鯨がふるれば網はめちやめちやに破られる。【二一】中原 河南地方。【二二】地頭 地を或は地に作る、地に従ふ、地は混池として清澄ならざる貌、濁はけがれる。【二三】進擊 擊は妾媵の子をいふ、木のひこばえの類とみてかきいふ、祿山の妾子安慶緒をさす。【二四】總旗 勢はびこること。【二五】箭入 矢がとびこむ。【二六】昭陽殿 昭陽は漢の成帝の皇后趙飛燕の妹の居りし殿舎の名、ただし唐人は飛燕を楊貴妃にたとへ、昭陽を貴妃の居所としてたとへ用ふる例多し。直江頭詩にも昭陽殿裏第一人と見えたるがごとし。【二七】笛吹 あしぶえが吹きならされる、吹の字或は吟に作る、吟とは音がすること。【二八】細柳營 漢の周亞夫が兵を屯せし處、陝西省西安府咸陽縣の西南にあり、こゝは武帝の營所をさす。【二九】内人 玄宗敬初を設けて伎女に歌舞を教ふ、そのすぐれたるものを宜春院に入れる、院に入りたるものを内人といふ。【三〇】紅袖 あかきそで、伎女の装なり。【三一】王子 諸王のこどもたち。【三二】白衣行 粗服をつけて路にさまよふこと。【三三】宸極 天の中心をいふ、帝星の在る所。【三四】妖星 不吉をあらはす星。【三五】動 星の光がうごく。【三六】關陵 天子の山陵をいふ、陵には固ありて屬す。【三七】殺氣平 殺伐の氣が高い陵を平におほふ。【三八】空餘 いたづらにそんなことがこつてある。【三九】金盤出 盤或は碗に作る、金盤は黄金のおわん、陵墓中に葬れる器物、出とは掘られて人間界へでること。

と、諸將にも早時金銀出人間とあり、漢武故事に都縣に市に玉杯を賣るものあり、吏之をしらべたるに茂陵(武帝の陵名)の中の物なりしと。沈炯の表文に、甲帳朱廉、一朝奪落、茂陵玉盤、早出人間とみゆ、杜詩は二事を活用せるものなり。【六〇】 魏惟輕、魏は細くしてめあらし布なり、魏惟とはそれにて作りし、まぐ、魏の曹操死するとき遺言して副將益上に六尺の牀を施し魏惟を張り、その前に伎樂を奏して生日の如く西陵(魏の墓)を望ましめたり、魏惟が副將の時に、魏惟魏、并幹、云云とみゆ、玄宗の陵墓を望みて伎樂を奏するものなしといふなり。【六一】 魏廟、賊軍洛陽長安の宗廟を毀つなり。【六二】 天飛雨、雨は天の誤なり、天も感動して雨をふらす。【六三】 英宮、兩京の宮殿をやく。【六四】 微明、明は天明、よあけ、微ぼとほる、よあけまでとほしてもえる。【六五】 翠憲、蕭梁に張りたる鳥よけの網、見大雲寺贊公房詩。【六六】 槍機、槍は「カス」に似たる木、機は「たるき」。【六七】 同傾、ひとしく傾がむ。【六八】 三月、玄宗の長安より逃げたせしは天寶十五載(即ち至德元載)の六月なり、この詩八月の作とすれば凡そ三箇月を經たり。【六九】 師遊臺、官軍がいよいよとのふ、時に王思禮は武功に軍し、王繼得は西原に軍し、郭英父は東原に軍す。【七〇】 翠胡、しろもろの胡賊。【七一】 就差、差うでの刑に處せられかかつてゐる。【七二】 槍機、きりきす。【七三】 親接戰、英父自身に敵と戰をまじへる、是年二月に安守忠武功に寇す、英父戰つて利あらず、流矢に頭を貫かれて走る。【七四】 勇武果決、【七五】 冠蓋威、冠は他人の首となるをいふ、垂成は成るになんなんとする、功が成就しかけてゐるをいふ、功垂、成の時に於て英父の勇武第一なり。【七六】 妙譽、世上の美しきほまれ。【七七】 元華、宰相。【七八】 殊恩、天子の特別のおほしめし。【七九】 列朝卿の列位にあるもの、御史中丞は正四品下なり、太僕寺卿は從三品なり、今英父は中丞にして卿を兼ねるは優厚より出づ。【八〇】 幾時、何の時と同じ。【八一】 題節節、節制とは天子より軍權を御委任あるしとして賜はる「まさかり」、題とは隨右道の方面から長安の方へとむけかへるをいふ。【八二】 勳力、中央の人人と力を合はせること。【八三】 掃檣檣、檣檣は「ぼうきほし」、兵亂の象とさる風なり、掃とはばらひのけること。【八四】 主賢、禮記、儒行篇に幕門主賢とみゆ、賢、同、主賢とは門の傍の諸のくぐり穴なり、その穴の頂邊が將某のこまの頭のごとく鋭角をなせるものなり、賢士の居のさま。【八五】 三千、多きをいふ、蓋し孔子の弟子三千人より取りたり。【八六】 雲梯、「墨子」に楚の莊王が公輸若をして雲梯を作りて宋を攻めしむる話あり、雲梯は雲まで届く高きはしこなり、之を用ひて敵城にのぼる。【八七】 七十城、多くの城をいふ、漢の鄒食其辯舌を振うて齊の七十餘城を降らしめし話あり、此二句は次の「恥非」の句を言ひだすために置く「恥非」二句以下は作者自己についていふ。【八八】 齊說客、說客は遊説の人、即ち歸食其の輩をさす。此句上の「雲梯」の句を承ぐ。【八九】 職、ただ。【九〇】 魯諸生、魯の國の書生たち、魯には儒學を修むる人物多し、此句上の「主賢」の句を承ぐ。【九一】 通籍、名ふだな宮中に通じおく、仕官すること。【九二】 微班、つまらない位列、左拾遺は從八品上なり。【九三】 恣、かたじけなくす、その位をはつかしめる、謙遜の辭。【九四】 周行、魯耳の詩にみゆ、周之列位とく、周之列位とは周の朝廷の臣をさす。【九五】 獨坐榮、後漢の宣秉といふ者御史中丞となりしとき光武帝は之をして司隸校尉、尚書令と並に席を専らにして坐することを許したり、時に京師にては之を三獨坐と號したりと。今英父もさやうの特遇をうけて榮をになふといふなり。【九六】 隨肩、我が肩を先方のあとにしたがへること、つまりはすかひに一步後れてあるく、郭のあとにつくをいふ。【九七】 趨備刺、趨刺は水どけいなり、參朝の時刺をいふ、趨はおもむくはしる、でかけてゆくこと。【九八】 短髮、作者老後に入りて髪がみじかくなる。【九九】 寄管綬、寄とは我身を寄託しておくこと、管綬は冠をとめるかんざし、ひもなり、官吏の禮裝なり。【一〇〇】 慳、ただちに。【一〇一】 依劉表、劉表は三國の時荆州の長官たり、魏の王粲は之に依る、今、王粲を以て自ら比し、劉表を以て郭に比す。【一〇二】 通、また。【一〇三】 原圖術、後漢の圖術文才あり、曹操之を殺さんと欲して黃祖が性急なるを知り、祖がもとに赴かしむ、圖つひに之を殺す、術を以て自ら比す、取ふとは郭がいとふなり。【一〇四】 漸衰、自らいふ、だんだん老衰する。【一〇五】 那此別、どうしてここに別れられやう。【一〇六】 含情、むねのうちにつまさをじつともちこたへてゐる。【一〇七】 服色、すたれた服色。【一〇八】 狐狸語、きつね、たねきがかりあふ。【一〇九】 空帶、人なき「むら」。【一〇〇】 人、人民。【一一〇】 鹿豕、鹿や猪がけんくわする、狐狸、虎豹は盜賊をたとへていふ、服色、空村は兵亂にあらされた地方をいふ。【一一一】 公、郭をさす。【一二】 精誠、朝廷に對してはげみ誠をつくす。【一二三】 元火のなかにおちたほどの苦しみをうけること。【一二四】 公、郭をさす。【一二五】 精誠、朝廷に對してはげみ誠をつくす。【一二六】 元帥、廣平王假(玄宗の子)をさす。【一二七】 調新律、易、師卦に師出以律とあり、律は銅管のふえなり、その音によりて軍樂をととのへる、調は音聲をととのへること、意は新に軍紀を整備するをいふ。【一二八】 前軍、李嗣業が軍をさす、假が下に副將をして長安を回



復せしめん」とす。【一〇】舊京 長安。【一一】安邊 邊地(隴右)な安泰ならしめる。【一二】仍 よつて、そのまま。【一三】恩從 恩はあとに従ふこと、恩從とは天子の車駕のあとにつきしたがふをいふ。【一四】後功名 他人が功名をたてるのよりもおくれる。

【題義】御史中丞郭英父が太僕卿の官を兼ねながら、隴右節度使に充てられしを送る詩。製作時は至徳二載の秋八月。

【詩意】このたび天子(肅宗)の詔を以て山西出身の將であるあなたを出發させ、秋の時節に隴右での兵卒を駐屯せしめられる。隴右ではあなたの父君以來の部隊のものがなしい心もちをしなながらのこつてをる、あなたの御家名は今に始めぬかがやいたものである。あなたはこの秋に乗じて鸚鵡のやうにあちらへゆかれる、が驍驍の駿馬のやうに舊主をふりかへつて嘶かれる。今、國事のなんぎな時で之を救ふには最上のはかりごとを要する。だからあなたは私情をふりきつてたやすく前方の旅程にとつかれるのである。あなたの行くてを想像してみると、馬車のかさには夕日が照らしかけ、空吹く風は旌などをふきまくる、天水のあたりは松風の音も悲みをふくみて土地冷く、沙石風にみだれて遠く雪山の清きを望むことであらう。元來えびすと和睦するにさへ彼等を我が恵みになづける様にするのである。いま邊境を防備するにあたつてはどうして其の地方の人人を驚かせる様にしてよからうや。昔から朝廷の外國に對せらるるに當つては、こちらはおちついてしづかにしてゐながら、いざといふ時は征伐專行の權をもつてをるぞといふことを示しておかれるのである。燕薊の地方では安藏

山といふ大石のししが奔りだし、洛陽長安では駭く所の鯨が網にふれてそれをうち破る。洛陽方面はどうしてあんなにうすぐらくけがれてゐるのか、祿山ののこした子ども(安慶緒)の勢がまだはびこつてゐる。長安の方では女官の居る昭陽殿に敵の矢がとびこみ、官軍の將軍の居る細柳の營には鼓の聲が吹きならされてゐる。宮内に養はれてゐた内人たちは紅の袖をきたまま泣いてゐるし、王子たちは飾りもなにもない白衣のままであるきさまよつてゐる。帝星がかがやいてゐるべき天の中心では不吉をあらはす星が光りをうごかし、天子の山陵には殺氣が陵と平らぐらゐに高くみなぎつてゐる。一旦御陵にうめられた黄金の「わん」が掘られてまた人間界へ出だすといふ様なことがいたづらにあるばかりで、嘗て魏の曹操がした様に御陵を望んで伎樂を奏するために臺上に輕らかに繡帷をひるがへすといふ様なことはまたと無い。また賊が來て宗廟を毀てば天も爲めに泣くかの如く雨を飛ばし、宮殿を焚げばその火は夜明けまで燃えとほす。御殿の簷ばに張られた鳥よけの網はもろともに朝に落ちちり、楡の木のとるきはもろともに夜かしがつてしまふ。上の如き亂暴狼藉であつたが、かれこれ三箇月ほどして我が官軍も愈々整頓してきて、さまたまの胡賊たちもその勢が釜うでの刑に處せられさうなさまになつて來た。この時、あなたは身にきずをうけながら敵と戦をまじへられ、殆ど成功に近い時にあたつてあなたの勇決は第一等に見える。だから世間のほまれではあなたが宰相になられる様に期待してをるが、我君におかせられては特別の御恩を加へられとりあへずあなたを列卿の位にお

とりたてになつた。いつになつたらあなたは隴右の僻地から節鉞をむけかへて中央の方へ来られ、中央の諸臣と力をあはせて兵亂の表象ともいふべき「はうき星」をはらひのけてしまはれることであらうか。魯には圭璧の門内に住む儒士が三千人もある、齊には雲梯で攻むべき城が七十もある。自分は恥かしながら鄒食其の如く辯舌で敵の城を降らしめ得る様な齊の説客でなく、ただ圭璧に居る魯の書生たちみた様な者である。あなたは朝廷の列位に於て天子から專席獨坐を賜はる程の榮えをされてゐるが、自分はやつと仕籍を宮中に通じて下位をかたじけなくしてをる、さうしてあなたとは肩さがりにあとにつき従つて朝參の時刻にはまかりいで、老衰の短い頭髪をしながら身を管輅に託してをる。あなたが隴右へゆかるれば自分もすぐさまむかし王粲が劉表に依つた様にあなたにたよらうかとおもふのだが、また禍衝がきはれた様にあなたが自分をおいとひになりはしまいかと疑ふのである。今の自分の機にだんだん衰へかかつてはどうしてここにお別れをすることができやう。ただはふり落ちんとする涙をこらへてひとりてじつと胸のつらさをもちこたへてゐるのである。騷亂の結果、すたれた縣邑では狐や狸があたりあうてゐるし、住む人も無い村では虎や豹が争うてゐる。人民どもは頻りに塗炭の苦しみにおちてをる、あなたはどうして君國に對して精誠の念を忘れることができませうか。元帥、廣平王假は新しき銅管を吹いて音調をととのへて軍紀を正し、その前軍の將李嗣業は長安を壓せんとしてゐる。あなたも隴右の邊境を安んせられるとそのまま天子の車駕のおともをして都の方へとちかへられ他人が功名を立つるのにおくれる様なことをしてはなりません。

方へとちかへられ他人が功名を立つるのにおくれる様なことをしてはなりません。

送楊六判官使西蕃

楊六判官が、西蕃に使するを送る

送遠秋風落西征海氣寒。  
帝京氣祲滿人世別離難。  
絕域遙懷怒和親願結歡。  
敕書憐贊普兵甲望長安。  
宣命前程急惟良待士寬。  
子雲清自守今日起爲官。  
垂淚方投筆傷時即據鞍。  
儒衣山鳥怪漢節野童看。  
邊酒排金盃夷歌捧玉盤。  
草肥蕃馬健雪重拂盧乾。

遠きを送れば秋風落つ、西征海氣寒し。  
帝京氣祲滿つ、人世別離難し。  
絶域遙に怒を懷く、和親して歡を結ばむことを願ふ。  
敕書贊普が、兵甲長安を望むことを憐む。  
宣命前程急に、惟良士を待つ寛なり。  
子雲清く自ら守る、今日起つて官と爲る。  
涙を垂れて方に筆を投ず、時を傷みて即ち鞍に據る。  
儒衣山鳥怪し、漢節野童看る。  
邊酒金盃を排し、夷歌玉盤を捧ぐ。  
草肥えて蕃馬健に、雪重くして拂盧乾く。

慎爾參籌畫從茲正羽翰 慎みて爾籌畫に參し、茲從り羽翰を正しくせよ。  
歸來權可取九萬一朝搏 歸り來らば權取る可し、九萬一朝にして搏たむ。

【字解】(一) 楊六判官 事蹟詳ならず、至德元載に吐蕃、使を遣はし和親を請ひ、國を助けて賊を討たんと願ふ。二載の三月に吐蕃、使を遣はし和親す、唐よりは給事中南互川を遣はして命を報ぜしむ。楊六は蓋し南互川の使事を贊ぐるために行ける者ならん。(二) 西蕃 吐蕃をさす。關都は温州城なり。(三) 邊遠 楊の遠く行くを送るなり。(四) 秋風落 落とは蓋し推落をいふ。木の葉をゆりおとすをいふ。又案するに落は高處より吹きおろすをいふ。(五) 西征 西の方へゆく、吐蕃は唐の西にあり。(六) 海氣 寒 沙漠、瀟水、みな海といふ、こは青海をさす。(七) 帝京 長安。(八) 氣殺 殺も亦妖氣なり、兵亂の惡氣。(九) 絕域 かけはなれた土地。吐蕃をさす。(一〇) 憤怒 安祿山の反きしことに對して怒りの念をいだく。(一一) 和親 唐となかよくする。(一二) 結歡 即ち上の和親と同じ、歡びの心を結びあふ。(一三) 歡書 唐の天子からのおかけつけ。(一四) 僞贊普 贊普は吐蕃語なり、贊とは強雄の義、普とは丈夫の義、その君長たるものをさして贊普といふ。僞とは唐となかよくしたしとの志をあはれむなり。(一五) 兵甲 吐蕃の兵、よろひ。(一六) 望長安 吐蕃が望むなり、長安をさして唐を助けにゆかんとながめやる。(一七) 立命 天子からの命を吐蕃に對してのべつたへること、南互川の使事をいふ。(一八) 前投象 前送のゆくさまをいそぐ。(一九) 惟良待士 惟良は地方長官をさす、唐の宣帝の詔に、與我共理者、其惟良二千石乎とみゆ、良二千石とは二千石の職をうくる長官をいふ、惟良の二字は此に本く、これ楊判官を推薦したる郡守をさすならんといへり、ただし愚案するに此に南互川以外にまた一の郡守を假定しては事あまりに重複となるを以て、南互川が嘗て郡守たりしことあるものとみ、惟良即ち互川と考ふるが願富なりとおもふ。待士の士は楊をさす、待つとは判官の特選を與へしをいふ、宜は寛大。(二〇) 子雲 漢の揚雄が字、雷りて楊判官に比す。(二一) 清自守 清貴を以て己を守る。(二二) 起爲官 無官の地から起ちあがつて判官となる。(二三) 取漢、投筆、傷時、泣血 みな楊が爲すなり、投筆は後漢の班超が故事、超は官の儲蓄となり久しく勞苦す、筆を投じて嘆じて曰く、丈夫當立二功與城二安能久事二筆硯乎と。漢超

は後漢の馬援が故事、援五萬の軍を討たんと請ひ、據鞍顧盼以示可用と。(二四) 懼衣 楊がきてある懼者の衣服。(二五) 怯 ぬなれぬもの故あやしむ。(二六) 漢節 蘇武が匈奴に使せしとき漢節を持す、漢の使者のたじろしなり、こは唐の使者のたじろしをいふ。(二七) 野童 田野にあそんでゐることし等。(二八) 邊酒 邊地のさけ。(二九) 排 ならべらる。(三〇) 金盤 黄金でかさつたおわん。(三一) 夷歌 えびすのうた。(三二) 捧 楊等にむかつてささげる。(三三) 玉盤 玉でつくつた大平鉢、肴饌を盛るもの。(三四) 蕃馬 吐蕃の馬。(三五) 雪重 重とは厚くつもるをいふ。(三六) 神廬 吐蕃のテント、吐蕃の贊普は靈帳にこげのまくしを纏れて生活す、之を大拂廬といひ、中に數百人を容れ得べし、部人は小拂廬に居る。(三七) 乾 寒氣つよきも濕氣なきをいふ。(三八) 爾 楊をさす。(三九) 參 あづかる、參預する。(四〇) 歸來 正使南互川のばかりこと。(四一) 從茲 今よりの意。(四二) 正判官 下の「九萬」句の餘語なり、楊を薦めたとしていふ、論は大羽なり、羽翰を正しくするとは羽翼を訓ひ蓋ふるをいふ、事實をいはば使命なりつげにはたすをいふ。(四三) 歸來 唐の方へもどる。(四四) 權可取 諸説あり、權可取、權可取、權可取、權可取等是なり、余は最後の解をとる、權とは權勢の位をいふ。取は己に取得すること。(四五) 九萬搏 九萬里にばねうつこと、「莊子」逍遙遊に鶴を説き、搏扶搖(鶴ふきまくかぜ)而上者、九萬里とみゆ。(四六) 一朝 にはかにして。

【題義】楊某が判官として吐蕃國に使ひにゆくを送る。製作時は至德二載の秋。なほ長安をとりかへさざりし時。

【詩意】あなたが遠くへ行かれるのを送る今は秋風が木の葉をゆりおとすとときであつて、西の方へとゆかれるならば青海あたりの水気が寒い時である。都では賊軍の惡氣が充滿してをる、この時この世でお別れをすることはつらくてわかれにくくおもふ。「我が唐とはかけはなれた土地でありながら吐蕃は賊軍が起つた事についてはるかに憤怒の念をいだいて、我が唐と和親し、我と歡心を結びたいと

いうてゐる。それで我が君も敎書を以て贊普が兵甲のいくさの用意をして長安を望んで援助にでかけやうとしてゐる心根をお憐みになつた。我が君の御命令を先方へ宣べつたへる正使(南巨川)の役目は前程はなはだとり急ぐことであり、その惟良なる正使は自己の屬官として士を待遇するに甚だ寛大な方法によつた。それで平生揚子雲の様に清貧を以て自らを守つてゐたあなたも今日は起つて官員となることとなつた。あなたは感激して涙を垂れて筆をすててたちあがり、時事を傷んですぐさま馬鞍につかまられた。途中あなたの儒衣のすがたを見ては山の鳥も不思議がるであらう。あなたの一行の使者の節施をば野らの子どもはめづらしとみるであらう。あちらへ到着するれば、ゐなか酒をもちだして金のお碗をならべかけ、ひなうたをうたうては玉盤の御馳走をささげるであらう。また草は肥えて彼の地の馬は健に、雪は重くつみて而も大テントは乾燥してゐるであらう。あなたは注意ぶかくこのたびの使事のはかりごとにくははり、今から羽翼をととのへられるがよい。さすればもどつて來れば容易に權勢の地位を得ることができ、あだかも大鵬のとりの様に九萬里の青ざらも一朝にして羽うつてのばることができ。

哭長孫侍御

長孫侍御を哭す

道爲詩書重名因賦頌雄

道は詩書の爲めに重く、名は賦頌に因つて雄なり。

禮闈曾擢桂憲府屢乘馳

禮闈會て桂と擢かる、憲府屢に馳に乗す。

流水生涯盡浮雲世事空

流水生涯盡き、浮雲世事空し。

惟餘舊臺柏蕭瑟九原中

惟餘す舊臺柏、蕭瑟たり九原の中。

【字解】(一)道 其人の道徳。(二)詩書 詩經・書經。(三)重 世に重んぜられしをいふ。(四)名 名譽。(五)賦頌 共に頌文の體の名。(六)擢 すぐれたもの。(七)禮闈 尙書省の禮部をさす、唐にては初は進士の試験は吏部の考功にて掌りしも開元の末には禮部の侍郎が之をつかさどる。(八)桂 晉の劉琨が武帝に對へたる語に、臣舉賢良、對策爲天下第一、論桂林一校とみゆ、擢桂とは桂林の一校としてぬきたされたといふこと、後等にて試験に及第せしことなむ。(九)憲府 御史の役所をいふ。(一〇)乘 履 後漢の相典が故事、已に屢見ゆ。(一一)流水生涯 生涯は長孫の一生をいふ、流水の如くとは一去還らざるをいふ。(一二)浮雲世事 世事とは世間の人事、浮雲の如く空しとはあてどなく消滅し去れるをいふ、長孫の死についていふ。(一三)舊臺柏 臺は御史臺、柏は御史の故事なり、漢書の朱博傳に、御史府中、列柏樹、常有野鳥數千、棲宿其上とみゆ、柏は「レノキ」の類。(一四)蕭瑟 風がとさびしきさま。(一五)九原 また九京といふ、春秋の時、晉の卿・大夫の墓地なり、是ただ墓所をさしていふ。

【題義】侍御史長孫某を哭したる詩。前に「送長孫九侍御赴武威判官」詩あり。本詩の長孫侍御は即ち長孫九なるや否や不明なり。また高仲武の、「中興間氣集」に杜誦の作とす。製作時不明なり。

【詩意】君の道徳は詩書の教あるによりて世に重んぜられ、君の名譽は賦頌に巧みであることによつてすぐれてゐた。君は禮部の試験をうけたときは桂枝としてぬかれ優等を以て及第し、仕官しては御

史の役所に於てしばしば驄馬に乗つたことである。しかるに君の生涯は流水の如く盡きてしまつた。まことに世間の事は浮雲の消ゆる如くになつてしまつた。ただ御史の役所のむかしながらの柏樹だけがこつてゐるだけで、君の葬られてゐる墓所のあたりは風の吹く音のみさびしくある。

奉贈嚴八閨老

嚴八閨老に贈り奉る

扈聖登黃閣明公獨妙年

聖に扈して黃閣に登る、明公獨り妙年なり。

蛟龍得雲雨鵬鷃在秋天

蛟龍雲雨を得、鵬鷃秋天に在り。

客禮容疎放官曹可接聯

客禮疎放を容る、官曹接聯す可し。

新詩句句好應任老夫傳

新詩句句好し、應に老夫が傳ふるに任するべし。

【字解】【一】嚴八 嚴八は嚴武なり、嚴武の父挺之は作者の友なり、武は後輩なり。【二】閨老 唐人は給事中をよぶに閨老といへりとぞ、また宰相は相呼ぶに堂老といひ、兩省のもの相呼ぶに閨老といふといへり。蓋し閨老は兩省相呼ぶの稱にして給事中をよぶに限れるに非るべし。又このとき武は給事中、作者は左拾遺なれば同じく門下省に屬し同省なるも、兩省相呼ぶ語を用ひしものならん。【三】扈 扈にしたがふこと。【四】聖 聖天子。【五】黃閣 門下省をいふ、開元の時、門下省を黃門省といひしことあり、故に黃閣といふ、朱鶴節の説に、開元閨に作るべし、開元夾室、又は後魏の通名にして、開元門傍の小戸なり、門下省は黃を以て門に繪るを以て黃閣といふ、杜詩の黃閣は少な黃閣に改むべし、と。【六】明公 聰明なる人、武をさす。【七】妙年 としわか、

嚴武は房琯の薦めにより給事中となる、時に年三十一。【八】蛟龍得雲雨 吳志、周瑜が劉備を評したる言に、蛟龍得雲雨、勢非池中物とみゆ。【九】鵬鷃 ぐまたかしの類。【一〇】秋天 秋のそら、たかしの類は秋になりて勢をふるふ。【一一】容禮 賓客としての禮をつくす。【一二】容 武がいてくれる、寛大にとりあつかふこと。【一三】疎放 作者のむとんぢやく。【一四】官曹 役所の部屋。【一五】接聯 つづく。【一六】新詩 武があらたにつくる詩。【一七】老夫 作者自らいふ。【一八】傳 世人につたへる。【題義】嚴八閨老に贈つた詩。製作時は至徳二載。【詩意】ここの行在所で我が聖天子(肅宗)のおともをして黃閣に登るものなかでは、あなたが一人年わかである。たとへば蛟龍が雲や雨を得たやうなものであり、また鵬鷃が秋のそらに飛んでゐるやうなものである。あなたは賓客の禮を以て自分をもてなし、自分のむとんぢやくをおほめにみてくれるし、あなたとの部屋はつつきあひになつてゐることが出来る。あなたの近作の詩は毎句みなよろしい。それはこのわたしをして自由に世間に傳へさせてくださることとおもうてゐる。

月 月

天上秋期近人間月影清  
天上秋期近く、人間月影清し。  
入河蟾不沒搗藥兔長生  
河に入りて蟾沒せず、藥を搗いて兔長生す。  
只益丹心苦能添白髮明  
只だ丹心の苦しきを益す、能く白髮の明なるを添ふ。

千戈知滿地、休照國西營。 千戈知滿地、國西の營を照らすことを休めよ。

【字解】【一】入河、河はあまのがほ。【二】嶺、嶺嶺（ひきかへる）なり、月に嶺嶺（ひき）ありとして考へらる、こは月そのしのみをます。【三】摘樂、月の中には鬼ありて樂をつくると考へらる。【四】丹心苦、中心の苦しき。【五】白雲明、しらかがはつきりみえること。【六】干戈、たて、ほこ、兵亂をいふ。【七】滿地、世間いつばいに。【八】休照、若し營を照らさば軍士みな月を見て歸家の念を起して悲まん、故に「照らすことをやめよ」といふ、此の詩一たとへとして時事にひきつけてよく解あり、今取らす。【九】國西營、國とは關都長安をいひ、國西とは鳳翔をさしていふ、營は屯兵の舎なり。

【題義】鳳翔にありて月をみてよめり。蓋し至徳二載七月の作。

【詩意】天上では秋の時節が近づいて、人間では月のひかりも清らかにみえるやうになつた。あまのがはらのなかへと月のがまははひりこむがそのなかにかくれてはしまはぬ。月世界ではいつまでも鬼が生きてゐて樂をついてゐる。この月の光りのさえはただ自分の心中のくるしみをますものであり、またたださへ見える白髪のかかるさを一層あかるくしてくれるのである。いまや兵亂でどこも干戈でいつばいになつてゐる。だからお月さまも國西にあたるこの鳳翔の軍營は遠慮して照らさぬ様にしてもらひたい。（若し照らせば軍士も自分と同じく悲しみにたへぬであらうから。）

留別買嚴二閣老兩院補闕得雲字 買嚴の二閣老兩院の補闕に留別す

田園須暫往、戎馬惜離羣。 田園須らく暫く往くべし、戎馬に離羣を惜む。

去遠留詩別、愁多任酒醺。 去ること遠くして詩を留めて別る、愁多くして酒の醺す。

一秋常苦雨、今日始無雲。 一秋常に雨に苦しむ、今日始めて雲無し。

山路時吹角、那堪處處聞。 山路時に角を吹く、那ぞ堪へむ處處に聞く。

【字解】【一】留別、詩中に留別とある如く詩を留めおきて別るをいふ。【二】買嚴、買至と嚴武となり、至は時に中書舍人たり、武は前詩にみゆる如く給事中たり。【三】閣老、前にみゆ。【四】兩院補闕、或は之を、兩院遺補諸公に作れる本ありといふ、補闕は遺補に作るをよしとす。遺補とは拾遺と補闕となり、共に官名、唐制にては門下省に屬するもの給事中四人、左拾遺二人、中書省に屬するもの右補闕二人、右拾遺二人あり。補闕も亦諫官なり、兩院は蓋し左右の兩院をいふ。【五】田園、はたけ、鄭州の羌村をます。【六】暫作、ちよつとゆく。【七】戎馬、兵馬、騷亂の際をいふ。【八】離羣、なからばなれる、買嚴等とわかるるをいふ。【九】去遠、遠方へゆく。【一〇】醺、よひのまはること。【一一】山路、途中の山路。【一二】吹角、兵卒がつのぶえを吹きならす。【一三】那、なんぞ。【一四】聞、作者がきく。

【題義】中書舍人買至、給事中嚴武及び同僚たる兩院の拾遺・補闕の諸官に別れるときに書きのこしたる詩。製作時は至徳二載八月、鳳翔より鄭州に往きて家族を見舞はんとせしときの作、「北征」によれば出發が八月初吉なれば作詩は七月末にあらん。

【詩意】自分は家族の居るゐななかへちよつといつてこなければならぬが、この兵馬の時節に諸君とわ

かれるのはをしくおもはれる。自分のゆくのはよほど遠いところだから詩をのこしてお別れをする、また心の愁が多いから酒を十分のんで酔ひのまはるにまかせ。さてこの秋は秋ちう雨ばかりふつてこまつたが、けふ始めて雲がなくはれあがつた。ゆくさきで山路に兵卒がつのぶえを吹き鳴らしてゐるだらうが、どうして自分はその音を處處で聞くにたへられやうか。

晩行口號

晩行口號

三川不可到 歸路晚山稠

三川には到る可らず、歸路晚山稠し。

落雁浮寒水 饑鳥集戍樓

落雁寒水に浮び、饑鳥戍樓に集まる。

市朝今日異 喪亂幾時休

市朝今日異なり、喪亂幾時か休せむ。

遠媿梁江總 還家尚黑頭

遠く媿づ梁の江總が、家に還りしとき尚黒頭なりしに。

【字解】 三川、郾州をいふ。不可到、到るを得ずの意、からあるきにくみのばかどらぬ故なり。歸路、家をさしてゆく路なれば歸路といふ。晚山、夕ぐれの山。稠、おほし。落雁、そらよりくだれる「かり」。戍樓、家を香兵の居る樓。市朝、王城にては官吏の命する朝廷の所在と、商賈の命する市とを區別して位置を設く、これ國都のさまをいふ。異、従前とさまがかわる。喪亂、人のなくなり、世のみだること。幾時、何時。休、止むこと。

【注】 遠媿、遠は時間のうへにていふ。梁江總、梁の太清三年に襄陽附る、總、年三十一、これより外に流離すること十四

五年、陳の天嘉四年に至りて朝に還る、總年四十五、謂はゆる還家尚黒頭なりと、是、顯奕武の說なり。此詩至第二聯の作として杜市は四十六歳なり、而して白髮多かりしなるべし。黒頭、頭髪の黒きなり。

【題義】 郾州へ赴く途中にて、日ぐれにあるきながら口ずさみたる詩。

【詩意】 三川にはなかなかゆきつけぬが、家ちをいそぐと夕ぐれの山山が多くそびえゐる。あまくだる雁は寒さうな水に浮いてゐるし、饑えて食をあさる鳥は兵卒の番をしてゐる樓のうへに集まつてゐる。今日は國都の市朝のさまも以前とはかはつてしまつた。いつになつたら兵亂がやむことであらう。自分は家へもどるとはいふものの年老いてしまひ、むかし梁の江總がまだ黒い頭をしながら家へ還つたのに對してはぢいる次第である。

獨酌成詩

獨酌詩を成す

燈花何太喜 酒綠正相親

燈花に何ぞ太だ喜べる、酒緑にして正に相親しむ。

醉裡從爲客 詩成覺有神

醉裡客と爲るに従ふ、詩成つて神有るを覺ゆ。

兵戈猶在眼 儒術豈謀身

兵戈猶眼に在り、儒術豈に身を謀らむや。

苦被微官縛 低頭媿野人

苦むらくは微官に縛せられ、頭を低ること野人に媿づ。

晩行口號 獨酌成詩

【字解】【一】燈花。とししびに花さく、火がホコホコするさま、燈花さけば吉事ありとの民間信仰あるべし。【二】何太喜。喜は作者が喜ぶなり、なぜそんなにひどくよろこぶのか。【三】酒餘。餘は酒の色。【四】親。作者が親しむなり、此句は上句の答語なり。【五】從。まかす。【六】覺有神。有神とは神助あるをいふ。【七】儒術。儒者の道術。【八】豈。豈は反語、儒の道はそんなものではない、天下を救ふに在るをいふ。【九】微官。微官、左拾遺をさす。【一〇】歸。しるる。【一一】從。まかす。【一二】覺有神。有神とは神助あるをいふ。【一三】儒術。儒者の道術。【一四】豈。豈は反語、儒の道はそんなものではない、天下を救ふに在るをいふ。【一五】微官。微官、左拾遺をさす。【一六】歸。しるる。【一七】從。まかす。【一八】覺有神。有神とは神助あるをいふ。【一九】儒術。儒者の道術。【二〇】豈。豈は反語、儒の道はそんなものではない、天下を救ふに在るをいふ。【二一】微官。微官、左拾遺をさす。【二二】歸。しるる。【二三】從。まかす。【二四】覺有神。有神とは神助あるをいふ。【二五】儒術。儒者の道術。【二六】豈。豈は反語、儒の道はそんなものではない、天下を救ふに在るをいふ。【二七】微官。微官、左拾遺をさす。【二八】歸。しるる。【二九】從。まかす。【三〇】覺有神。有神とは神助あるをいふ。【三一】儒術。儒者の道術。【三二】豈。豈は反語、儒の道はそんなものではない、天下を救ふに在るをいふ。【三三】微官。微官、左拾遺をさす。【三四】歸。しるる。【三五】從。まかす。【三六】覺有神。有神とは神助あるをいふ。【三七】儒術。儒者の道術。【三八】豈。豈は反語、儒の道はそんなものではない、天下を救ふに在るをいふ。【三九】微官。微官、左拾遺をさす。【四〇】歸。しるる。【四一】從。まかす。【四二】覺有神。有神とは神助あるをいふ。【四三】儒術。儒者の道術。【四四】豈。豈は反語、儒の道はそんなものではない、天下を救ふに在るをいふ。【四五】微官。微官、左拾遺をさす。【四六】歸。しるる。【四七】從。まかす。【四八】覺有神。有神とは神助あるをいふ。【四九】儒術。儒者の道術。【五〇】豈。豈は反語、儒の道はそんなものではない、天下を救ふに在るをいふ。【五一】微官。微官、左拾遺をさす。【五二】歸。しるる。【五三】從。まかす。【五四】覺有神。有神とは神助あるをいふ。【五五】儒術。儒者の道術。【五六】豈。豈は反語、儒の道はそんなものではない、天下を救ふに在るをいふ。【五七】微官。微官、左拾遺をさす。【五八】歸。しるる。【五九】從。まかす。【六〇】覺有神。有神とは神助あるをいふ。【六一】儒術。儒者の道術。【六二】豈。豈は反語、儒の道はそんなものではない、天下を救ふに在るをいふ。【六三】微官。微官、左拾遺をさす。【六四】歸。しるる。【六五】從。まかす。【六六】覺有神。有神とは神助あるをいふ。【六七】儒術。儒者の道術。【六八】豈。豈は反語、儒の道はそんなものではない、天下を救ふに在るをいふ。【六九】微官。微官、左拾遺をさす。【七〇】歸。しるる。【七一】從。まかす。【七二】覺有神。有神とは神助あるをいふ。【七三】儒術。儒者の道術。【七四】豈。豈は反語、儒の道はそんなものではない、天下を救ふに在るをいふ。【七五】微官。微官、左拾遺をさす。【七六】歸。しるる。【七七】從。まかす。【七八】覺有神。有神とは神助あるをいふ。【七九】儒術。儒者の道術。【八〇】豈。豈は反語、儒の道はそんなものではない、天下を救ふに在るをいふ。【八一】微官。微官、左拾遺をさす。【八二】歸。しるる。【八三】從。まかす。【八四】覺有神。有神とは神助あるをいふ。【八五】儒術。儒者の道術。【八六】豈。豈は反語、儒の道はそんなものではない、天下を救ふに在るをいふ。【八七】微官。微官、左拾遺をさす。【八八】歸。しるる。【八九】從。まかす。【九〇】覺有神。有神とは神助あるをいふ。【九一】儒術。儒者の道術。【九二】豈。豈は反語、儒の道はそんなものではない、天下を救ふに在るをいふ。【九三】微官。微官、左拾遺をさす。【九四】歸。しるる。【九五】從。まかす。【九六】覺有神。有神とは神助あるをいふ。【九七】儒術。儒者の道術。【九八】豈。豈は反語、儒の道はそんなものではない、天下を救ふに在るをいふ。【九九】微官。微官、左拾遺をさす。【一〇〇】歸。しるる。

【題義】これも前詩と同じく鄜州の家へかへる途中の詩。蓋し野店にて獨り酒を酌みつつ感をのべしなり。

【詩意】ここで燈の火がホコホコと花のさく様になつてゐるがそれに對して自分はどうしてうれしさうにしてゐるか、それは綠色のすんだ酒とちやうど親しむことができただからだ。酔ひのなかにをれば旅客の身でゐても平氣であるし、詩ができあがれば神の助あるかとおもはれるぐらゐ快心のもののである。いま天下は亂れて兵や戈は眼中からはなれぬ。我我備衛を行はんとするものがなんで一身の利益などのことを謀らうや。こまつたことは微小な官に居るために自分の身をしばられて上官に頭をさげねばならぬこと、この點では田野の民に對してかへつてはぢいる次第である。

徒步歸行 贈李特進自鳳翔赴鄜州途經邠州作

徒步歸行 李特進に贈る、鳳翔より鄜州に赴くとき、途邠州を經て作る。

明公壯年值時危  
經濟實藉英雄姿  
國之社稷今若是  
武定禍亂非公誰  
鳳翔千官且飽飯  
衣馬不復能輕肥  
青袍朝士最困者  
白頭拾遺徒步歸  
人生交契無老少  
論心何必先同調  
妻子山中哭向天

徒步歸行

明公壯年時の危きに値ふ、經濟實に英雄の姿に藉る。國の社稷今は若し、武定禍亂を定むるは公に非ずして誰ぞ。鳳翔の千官且つ飯に飽く、衣馬復た輕肥なる能はず。青袍の朝士最も困める者、白頭の拾遺徒步して歸る。人生交契老少無し、心を論ずる何ぞ必しも同調を先にせむ。妻子山中哭して天に向ふ。

【字解】【一】明公。李嗣業をさす。【二】值。あふ。【三】時危。時勢の危急な場合、是は高祖に從ひ西魏方面に功を建てしことをさす。【四】藉。すぢみちを立て世を救ふこと。【五】藉。よる。【六】英雄。雄姿。季のすぐれたさま。【七】社稷。社は土を祀り、稷は穀を祀る、宗廟と共に祭祀さるるもの重きものにして國家と終始を同じくする者なり。【八】今若是。今とは作詩の時なす、若し是とは安史の兵亂によりて現に見る如く危き様子なるをいふ。【九】武。武力。【一〇】定。平定する。【一一】公。李をさす。【一二】鳳翔。行在所のある地、扶風をいふ。【一三】千官。多くの官員。【一四】且。まあまあ、かりに。【一五】青袍。復都にありしときの如くまたといふこと。【一六】輕肥。輕は衣についで、肥は馬についていふ。【一七】



須公權上追風驃 須公が權上の追風の驃を。

青袍、青色のうばぎ。朝士、朝廷へでる人、役人。朝士、朝士。無と論ぜざるをいふ。【一】白頭拾遺、作者自らいふ、年よりたる左拾遺。【二】交契、心のびつたりあつた交際。【三】無老少、無とは論ぜざるをいふ。【四】論心、あひ手の心術如何をせんぎする。【五】先同調、同調とは同じ調子のもの、同題味をいふ。【六】文官と文官、武官と武官とを同調とみたるならん、李は武官、作者は文官なれば異調にてあるなり、先とはそれを重しとする。【七】妻子、作者の妻子。【八】山中、鄭州の山中。【九】須、まづ、必要とする。【一〇】公、李。【一一】權、うまやのふみ板。【一二】追風驃、驃は黄白色の馬、追風は秦の始皇の七馬の一の名、千里馬なり。

【題義】鳳翔から鄭州へかへらうとしたとき鄭州(陝西省西安府鄭州)を経過し、李嗣業に贈り馬を借らんことを請うた詩である。嗣業は高仙芝に従ひ石國及び突騎施を平ぐるにより特進を加へらる。徒歩歸とはあるいてかへること、詩題は詩中の語を用ふ。行は「うたし、作者拾遺の官にありながら長き道途をあるいてゆかねばならぬ苦をうつたへたるなり。製作時は至徳二載八月。【詩意】あなたは壯年のころ時世の危いときにであはれた、その時の世を救ふには實にあなたのやうな英雄の姿をもつた人の力によつたのである。今やまた我が唐の社稷の危いことは現にみらるるとはりのさまである、この際武力を以て禍亂を平定する者はあなたでなくてはなからうか。鳳翔の行在所の多くの役人たちはともかくもやつと食事に飽くだけぐらゐの生活でとても長安時代のやうに輕い衣を着、肥えた馬にのつたりすることはできぬのであるが、青袍をきてゐる役人中でいちばんの

貧困者は自分であつて、その自分、即ち白頭の拾遺はこのたび鄭州へかへるのにかちあるきでかへるのである。』いつたい人生に於て交際の上で心が互にびつたりあふならば老年たると少年たるとを論じなくてよいはずであり、あひ手の心如何をせんぎして交るには、なにも自分と同官職であるものを第一とせなければならぬことはいはずである。自分の妻子はあちらの山中で天に向つて哭しつゝある。それをみまふにはどうしてもあなたのうまやにかつてある千里の馬を必要とするのである。

九成宮

蒼山入百里、崖斷如杵臼。

蒼山入ること百里、崖斷えて杵臼の如し。

曾宮憑風迴、岌案土囊口。

曾宮風に憑りて迴(迴)に、岌案たり土囊の口。

立神扶棟梁、鑿翠開戶牖。

神を立てて棟梁を扶け、翠を鑿ちて戸牖を開く。

其陽產靈芝、其陰宿牛斗。

其の陽には靈芝を産し、其の陰には牛斗宿す。

紛披長松倒、揭嶮怪石走。

紛披として長松倒れ、揭嶮として怪石走る。

哀猿啼一聲、客淚迸林叢。

哀猿啼くこと一聲、客淚林叢に迸る。

荒哉隋家帝、製此今頽朽。

荒なる哉隋家の帝、此を製して今頽朽せり。

向使國不亡焉爲巨唐有

向に國をして亡びざら使めば、焉ぞ巨唐の有と爲らむ。

雖無新增修尙置官居守

新に増修する無しと雖も、尙官を置きて居守せしむ。

巡非瑤水遠跡是雕牆後

巡は瑤水の遠きに非ず、跡は是雕牆の後なり。

我行屬時危仰望嗟嘆久

我行きて時の危きに屬す、仰望して嗟嘆すること久し。

天王狩太白駐馬更搔首

天王太白に狩す、馬を駐めて更に首を搔く。

【字解】(一) 香山 あなき山。(二) 入 はひりこむ。(三) 如梓白 キネ・ウスの様である、この形を想像するに白に梓を入

れ置きたる者の庭斷面の如くなるをいふならん、園 即ち園の如くなるべきか。【四】 會宮 會は層に同じ、層宮とは幾重にもかさなれる宮殿。【五】 惡風 惡の字を週に作れるあり、週の字よろしからん、週は「はるか」なり、週は「よる」なり、風によつてはるかとは、はるかに風の吹く高處によりてみゆるをいふ、越めぐる。にては宮殿が折れまがつてあることになり、上圖の如き形状と合はず。【六】 荒葉 高く峻しき貌、これは層宮の貌なり。【七】 土囊口 土囊とは谷の口をいふ、兩峽の入り口なり、上圖とおもひあはずべし、宮がかかる峽口に在るは、その最も邊邊に過せる點なり。【八】 立神 神は神靈、これは實際の神像を立てることをいふならん。【九】 扶掖 むなき、ばりをたすける、神の力が之を扶助するをいふ。【一〇】 聖翠 翠は出翠にて山のみどりなる翠氣の色をいふ。【一一】 戸闕 闕は土まどなり。【一二】 隔 山の南面、日光をうける處。【一三】 望 望は出翠にて山のみどりなる翠氣の色をいふ。【一四】 陰 山の北面、日光のあたらぬ處。【一五】 宿 せどる。【一六】 牛斗 牛宿、斗宿。【一七】 紛披 みたたる貌。【一八】 長松 せのたかいまつの木。【一九】 揚塵 塵のつみかさなれ貌。【二〇】 客淚 旅客としての淚、作者目已つ涙をいふ。【二一】 迹 ほとばしる。【二二】 荒 尙書「五子之歌に色荒、禽荒の文字あり、荒とはその事に耽りて精神迷ひ亂るるをいふ。【二三】 隋家帝 隋の煬帝をいふ。【二四】 此 此、この宮をさす。【二五】 類朽 くづれ、くつ。【二六】 向 向、同じ、まきに。【二七】 巨唐 大唐、大は自ら尊ぶ解。【二八】 有 もちもの。【二九】

【題義】 鄭州へ赴く途中、九成宮のほとりを經過して作れる詩である。九成宮は鳳翔府麟遊縣の西五

里にあり。山九層あるにより九成といふと。もと隋の仁壽宮なり、唐の貞觀年中に修繕して避暑の用に供し、名を九成と改む、宮のめぐりの垣、千八百歩、太宗・高宗みなここに臨幸あり。魏徵が九成宮醴泉銘序に、九成宮、隋仁壽宮也、冠山抗殿、絶壑爲池、跨水架橋、分巖竦闕、高閣周建、長廊四起、棟宇膠葛、臺榭參差、仰視則迢遼百尋、下臨則崢嶸千仞、珠壁交映、金碧相輝、照三約雲霞、蔽三虧日月、觀其移山週洞、窮泰極侈、以人從欲、良足深尤とあるは宮の侈麗なりしことをみるべし。宮の官制には、總監一人、副監一人、丞簿・錄事各一人あり。

【詩意】 あをあととした山へはひりこむこと百里ばかりにして前方を見ると崖がとだえて白に杵をおいたものの縦斷面の様な形状を示してゐる。即ちそれは幾重にもかさなつた宮殿が風の吹く高處に遠

くそびえ、しかもその宮殿は峽口にたかく立つてをるのがさやうにみえてゐるのである。」その宮殿は神靈を立てて棟や梁を扶助してもらひ、山翠の色をうがつて戸や牖を開けてをる。その南面には靈芝がはえるし、その北面には牛・斗の星辰がやどつてゐる。またたけたかき松の木がみだれて倒れてゐたり、怪状をなした石がけはしくつらなり走つてゐる。頃しもかなしさうな猿の啼きこゑが一聲する。それをきいては旅人たる自分も感に迫つて涙が林藪に向つてほとばしるのである。」隋國の天子（煬帝）はまことに土木の事に心のみだれたものではないか、むかしこんなりつばな宮殿をこしらへたのであるが今はこんなにくづれくちてしまつた。もしさきにその國を亡びない様にさせたならば、どうしてこれが我が大唐の所有物となることができやうか。我が唐では新しく宮殿を増修はせぬが、しかしそれでも官を置いて留守番をさせてある。さうして隋がやつた雕牆の奢侈の後をうけて、時時天子もここへ御巡幸になる、たとひそれは穆王が西王母に會したといふ様な遠方へおでかけになるのではないにしても。自分の旅行して来たのはちやうど時世の危急な時であるので、この宮殿を仰ぎ望んでやや暫くなげく。今や我が天子（肅宗皇帝）には太白山の在る地方に巡狩されてゐるのである、そんなことを考へて自分ののつてゐる馬のあしをとどめてさらに首をかきつつ立ち去りかねてゐる。

玉華宮

玉華宮

溪廻松風長着鼠竄古瓦  
不知何王殿遺構絕壁下  
陰房鬼火青壞道哀湍瀉  
萬籟眞笙竽秋色正蕭灑  
美人爲黃土況乃粉黛假  
當時侍金輿故物獨石馬  
憂來藉草坐浩歌淚盈把  
冉冉征途間誰是長年者

溪廻りて松風長し、蒼鼠古瓦に竄る。  
知らず何の王殿ぞ、遺構絶壁の下。  
陰房鬼火青く、壞道哀湍瀉ぐ。  
萬籟眞に笙竽、秋色正に蕭灑たり。  
美人も黄土と爲る、況や乃ち粉黛の假なるをや。  
當時金輿に侍せしに、故物獨り石馬あり。  
憂へ來つて草を藉きて坐す、浩歌涙盈に盈つ。  
冉冉たり征途の間、誰か是れ長年の者ぞ。

【字解】(一) 溪廻 たに川がうねる。(二) 長 遠くより吹き来る。(三) 蒼鼠 胡麻しほの毛色のねずみ。(四) 竄 かくれる。(五) 古瓦 落ちちつてあるふるがはら。(六) 何王殿 如何なる「王者の宮殿」であるか、作者宮が寺となれるを知らざるにばあらず、ちよつと疑ひを起すのみ。(七) 遺構 のこつてゐる建造物。(八) 絶壁 きつたてのいばかべ。(九) 陰房 北面のへや。(一〇) 鬼火 燐の火。(一一) 壞道 こぼれた道路。(一二) 眞瀟 かなしき音をたててながるる泉水のたぎり。(一三) 瀉 そそぐ。(一四) 萬籟 から風の吹きならすさまざまな音響。(一五) 笙竽 共に樂器の名、笙は十三簧、竽は三十六簧、黄ば空気を振動させる舌なり、笙竿を吹き鳴らす如くなるをいふ。(一六) 秋色 秋げしき。(一七) 蕭灑 さつぱりとしたさま。(一八) 美人 宮女なり。(一九) 爲黄土 死して土に化するをいふ。(二〇) 粉黛假 粉ばおしろい、黛は眉を黒く用ふる青色のすみ、假とは假借のものの

意、これは上の美人と對す、美人はその肉類の腐るうつくしき體をさしていふ。この粉黛はその肉體を粧飾するかりのものたるに過ぎず。舊解に宮の近くに晉の符堅の墓ありて木偶さばりの人形を肉葬す、美人粉黛はそれを指すなどいへるは是に非ず。當時必ず太宗の宮女の宮園に葬られしものあるによつて作者此感み發せしなり。【二】當時、太宗の時をさす。【三】侍金興、金興は黄金にてかざりしもの、天子の樂るもの、侍とは美人が生前それにそば近くはんべりしこと。「金興に侍せしは」云云と訓す可らず。侍せしは「云云といへば下句の故物が侍せし様になりて不都合なり。「侍金興」と故物」との句の中間にはその美人は已に存在せずの意を含む、略していばざるまでなり。【三】故物、在來からあるふるもの、太宗の頃建てられしものなれば故物なり。【四】石馬石を刻してつくりたる馬、これは墓道に建つるもの、美人墓前の物なり。【五】蕭しく。【六】清歌、大なる聲にてうたふ。【七】盈把、ひとにぎりに滿つ。【八】冉冉、漸漸と同義、次第に時日の進行するさま、時間の上にていふ、道路についていふに非ず。【九】征途、たびぢ。【一〇】長年、永久の壽を保つもの。

【題義】鄭州へ赴く途次其地をすぎて作る。唐の太宗の貞觀二十一年七月、玉華宮を作る、務めて儉制に従ひ、正殿のみは瓦をふき、其餘は茅をふかしむ。その清涼なることは九成宮にまさると稱せらる。宮の位置は唐地理志によれば坊州宜君縣の北七里鳳凰谷に在り。(太平寰宇記はいふ、宜君縣西四十里にありと)高宗の永徽二年に之を廢して玉華寺と爲す。宜君縣は今鄭州の中部縣(即ち唐の坊州)の南にあり。杜甫が此地を經過せしときは玉華寺にてあるべきはずなるも、舊名によりて玉華宮と題せしものならん。

【詩意】たに川がうねつてゐてそれにそうて松風が遠く吹いてくる、散らばつた古瓦に胡麻しほの毛の風が人をおそれるかの様にかくれこむ。あの絶壁の下に建て物がのこつてゐるが、あれはいつた如何なる王宮なのであらうか。近づいてみると北向きの部屋には燐の火が青くもえてをり、こはれた道にはかなしげな水のたぎりが流れそいでゐる。から風がさまざまの物の音を鳴らす、それはまことに笙や竿の音をきくこちとする、秋の景色もちやうどさつぱりとしてゐる。この宮邊に美人の墓がある。いくらうつくしくてもその美人の眞肉體は死しては黄土にかはつてしまふ。まして美人の美を補ふに過ぎない假物たる粉黛の如きものはもちろん消滅してしまふ。美人はそのかみ天子の金輿の傍にはんべつてゐた。(がそれはうせてしまつた)眼前に存在して見得るものとはただひとり墓前に立つてゐる石刻の馬だけである。かうかんがへると心ばいがわいて來るままに自分は草をしたじきにして坐り、大聲に歌ひだし一にぎりにあまるほどの涙がながれる。自分はたびちのうちに次第次第に年老いつつあるが、だれが果して永久の壽を保ち得る者であらうか。(そんな者はゐない、早晩みな美人同様に消えうせてゆくのだ。)

羌村 三首

羌村 三首

崢嶸赤雲西、日脚下平地。  
崢嶸たる赤雲の西、日脚平地に下る。

柴門鳥雀噪、歸客千里至。  
柴門鳥雀噪ぐ、歸客千里より至る。

羌村

妻孥怪我在。驚定還拭淚。

妻孥我が在るを怪しみ、驚くこと定まりて還た涙を拭ふ。

世亂遭飄蕩。生還偶然遂。

世亂れて飄蕩に遭へり、生還偶然に遂げたり。

鄰人滿牆頭。感歎亦歎歎。

鄰人牆頭に滿つ、感歎して亦歎歎す。

夜闌更秉燭。相對如夢寐。

夜闌にして更に燭を秉る、相對すれば夢寐の如し。

【字解】【一】輝燦 たかくそびゆる貌。【二】赤雲西 赤雲は夕焼けの赤いくも、西とは「西より」の意、下句の「日脚」と關係せる語なり。【三】日脚 太陽の光線の横あし。【四】下平地 日が落つるに従つて光線は地平線と平行するやうになる。【五】鳥雀噪 仇氏は雀は牆に作るべしといへり。必しも改むるに及ばず。「西京雜記」に漢の陸賈の語を記し、夫目擊(まはたきする)得酒食、燈花傳、錢財、乾酪、饌而行人至、細雜來而百事喜、云云といへり。民間の「つちうら」にては牆(かまきぎ)がさわげば旅人がかへつてくるとせられたり。仇氏は此の故事にかかりて詩の字をとる。しかしその意のみをとりしものとみれば雀に從にて可なり。唯は「さわぐ」。

【六】歸客 もどりたる旅人、作者自己を稱す。【七】妻孥 妻子。【八】怪我在 在は存在、生存をいふ。【九】驚定 定とは「おどくし」こと。【一〇】還 また。【一一】拭 わぐふ。【一二】飄蕩 あちらこちらとただよはされる、漂泊生活をいふ。【一三】生還 生きてもどる。【一四】偶然遂 ふとなしとけ得た、豫定はできなかつたことないふ。【一五】鄰人 近所の人たち。【一六】感歎 頭 我家の土塙のさき。【一七】亦 彼等もまた我等とともに。【一八】歎歎 すすりなきする。【一九】夜闌 闌は「たけなほ」、さかりなきころ。【二〇】更秉燭 さらにらふそくをとりて火をつけたす。【二一】相對 家人とむきあふ。【二二】如夢寐 れて夢をみてゐるやうだ、自分で自分の存在が疑はれるないふ。

【題義】鄭州の羌村に到着し家族に會したることを敘ぶ。鄭州は洛交縣に治す、羌村は洛交の村墟なりといへば城外近郊の村とみゆ。

【詩意】そら高くそびえた赤い夕焼け雲の西の方から太陽の光線の横あしがさしてきて、その横脚が平地にさがつた。我が家の柴の戸では鳥雀ががやがやいつてゐる、そこへ自分は千里の遠くからかへりつた。妻子等は自分が存在してゐたことを不思議に思ひ、はじめはびつくりしてゐたが、驚きの情がおちつくとこんどは泣かれてはふりおつる涙を拭うた。自分は世の亂れた時にあたつてあちらこちらただよはされる運命にであうたのでどこで死ぬかわからなかつたのだ、生きてかへるなどいふことはほんのふとしたことからなしとげ得たのである。自分のかへつたことを知つて近所の人たちも土塙のさきに一ばいあつまつてきて、なげきながら我我ともにすすりなきをしてくれる。自分等は久しぶりで會合なので夜ふけすぎてもまたあらためて蠟燭をつけかへ、家族どうしむきあうてゐるとまつたく夢をみてゐる様でこの無事の會合の現實さが疑はるるほどである。

〔一〕

〔二〕

晚歲迫偷生。還家少歡趣。

晚歲偷生に迫る、家に還るも歡趣少し。

嬌兒不離膝。畏我復却去。

嬌兒膝を離れず、我を畏れて復た却き去る。

憶昔好追涼。故繞池邊樹。

憶ふ昔好し涼を追ひ、故に池邊の樹を繞りしことを。

蕭蕭北風勁、撫事煎百慮。

蕭蕭として北風勁し、事を撫すれば百慮煎る。

賴知禾黍收、已覺糟牀注。

頼ひに知る禾黍の收めらるるを、已に糟牀の注ぐを覺ゆ。

如今足斟酌、且用慰遲暮。

如今斟酌するに足れり、且つ用つて遲暮を慰めむ。

【字解】「蕭蕭」晩歲、追送生。此句は發生晩歲追と同義なり、晩歲とは一年の晩末をいふ、ただし秋以後はみな晩と言ひ得るものにして我のいふ年末をいふにはあらず、追とは近づいてくること、發生は「生をぬすむ」、兵亂中に死ぬべく見えたるなから生きかへりしをいふ。【一】「歡」おもしろみ。【二】「嬌兒」あいらしき、女兒ならん。【三】「却去」却はあとしざりをする、しりぞく。【四】「德音」昔とは昨年をいふ。【五】「追深」すすしさを追ふ、暑氣をさけすみにでること。【六】「故機」すすむためにわざと油のまばりなめぐる。【七】「蕭蕭」さびしささま。【八】「勁」つよし。【九】「撫事」撫、附はみな同義、その事にそつて考へる。この「事」とは生計上の事などをふくむなるべし。【一〇】「煎」にえくりかへる。【一一】「百慮」さまざまの心ばい。【一二】「賴知」頼ひに頼りて」ともむも可なれど頼は「申に」と訓するがた早わかりなり、こちらがそのおかげをうくる意なり。【一三】「禾黍」さび類。【一四】「收」かりいれること。【一五】「糟牀」酒の糟をしぼる臺。【一六】「注」そそぐ、酒のしるがしたたるをいふ。【一七】「賴知」如今、いま。【一八】「斟酌」酒をくむ。【一九】「且」まあまあ。【二〇】「用」その酒を以て。【二一】「遲暮」遅は晩なり、晩暮は人生の晩年をいふ。

【詩意】いのちからがらで生きてもどると歳晩がちかづきつつある。家にはかへつたがおもしろみもすくない。あいらしい子どもが自分の膝から離れずにあるかとおもふと、やがて自分を畏れてあちらへしりぞいてゆく。昔はその子等とすすみがてら池のほとりの樹木をよくぐるぐるめぐつたものである。今はさびしげに北風がつよく吹いてきた。(段段歳のくれに近づくのだ)あれこれと事からをかながへると、さまざまの心ばいが胸のなかでにえくりかへるのである。ただありがたいことにはもはや「さび」などもとりいれがすんだので、今から酒の糟をしぼる臺に酒のしるがしただるかのこころがする。いまはそれを十分くんでのむことができる。外にしやうもない、まあまあの酒でものむことによつて自分の晩年を慰めやう。

(三)

(三)

羣雞正亂叫、客至雞鬪爭。

羣雞正に亂叫す、客至るとき雞鬪爭す。

驅雞上樹木、始聞叩柴荆。

雞を驅つて樹木に上らしむ、始めて聞く柴荆を叩くを。

父老四五人間、我久遠行。

父老四五人、問ふ我が久しく遠行せしを。

手中各有攜傾榼、濁復清。

手中に各々攜ふる有り、榼を傾ければ濁復た清。

莫辭酒味薄、黍地無人耕。

辭する莫れ酒味の薄きを、黍地人の耕へす無し。

兵革既未息、兒童盡東征。

兵革既に未だ息まず、兒童盡く東征すと。

請爲父老歌、艱難愧深情。

請ふ父老の爲めに歌はむ、艱難深情に愧づ。

歌罷仰天歎 四座涕縱橫 歌罷みて天を仰いで歎ず、四座涕縱横たり。

【字解】 一、 羣 多くのにはと。 二、 正 まさに、ちやうど。 三、 龍 叫みだれさげよ、きやあきやあいふ。 四、 客 至 客は即ち下文の父老なり、至とは我が歌へやつてきたこと。 五、 驅 かる、おひたてる。 六、 叩 柴荆 客たる父老が叩くなり、柴荆は柴や荆にて作れる門。 七、 父老 年よりの人人。 八、 問 慰問する。 九、 有指 指は「たづさへたもの」をいふ。 一〇、 傾 傾は酒器なりとあれど「左傳」成公十六年行人執轡、承飲造子子重などの語によれば、酒樽又は酒壺の口の「ふた」にして内面をくりたるものなるべし。後世は酒を盛る器として用ふ。杜詩の此の場合亦然り。 一一、 濁 清にこりさけ、すんださけ。 一二、 莫辭 莫辭より「盧東征」までは父老がいふことばなり、辭は辭退すること。 一三、 委地 きびはたけ。 一四、 兵革 干戈などいふ語と同じ様に戰爭をいふ。 一五、 息 止むこと。 一六、 東征 洛陽方面へでかける。 一七、 銀燭 世事のなんざなとき。 一八、 慳深情 酒までもつて来て慰めてくれる情のふかいのに對してはぢい。 一九、 四座 滿座、一座の意、その席にあるものすべて。 二〇、 涕 或は涙に作る、涕もまた「なみだ」なり。 二一、 縱橫 次第なく顔にあふれながれるさま。

【詩意】 多くの難どもがちやうどがやがやさげびだした。そのときお客がたづねて来てくれたのだが難のけんくわのまつさいちうである。自分はその難どもをおひたてて樹の上へあがらせてからやつとお客が我家の門を叩いてゐるのをききつけた。みると年よりの人たちが四五人でわたしがながなが遠くへいつてゐたことについて慰問に来てくれたのだ。彼等の手のなかにはめいめいがなにかもつてゐる。そのもつてゐる酒壺の口を傾げると中には濁酒やら清酒やらがはひつてゐる。(彼等はいふ)「この酒の味はうすくてまづくはあるが御辭退くださるな。黍はたけはあるがそれを耕へす人間がゐ

ないのだ。戰爭はやまないし、こどもたちはみんな東の方へ賊軍征伐のためでかけてしまひました。(酒などはとてもよくできぬ)と。「いやそれはありがたう。わたくしは御年寄がたのために自分の心もちをうたひませう。このなんざな時世に、さほどまでしてお見舞ひ下さつた御親切のおころに對してはなんともはぢいいる次第でござる。かく歌ひをはつて天を仰いでなげく。そのときは一座の人人みんなが感にたへかねてかはぢう次第もなく涙をながすのである。

北 征

北 征

皇帝二載秋 閏八月初吉

皇帝二載の秋、閏八月初吉。

杜子將北征 蒼茫問家室

杜子將に北征して、蒼茫家室を問はむとす。

維時遭艱虞 朝野少暇日

維時艱虞に遭ふ、朝野暇日少し。

願慙恩私被 詔許歸蓬華

願みて恩私の被るを慙づ、詔して蓬華に歸るを許さる。

拜辭詣闕下 怵惕久未出

拜辭して闕下に詣り、怵惕久しうして未だ出です。

雖乏諫諍姿 恐君有遺失

諫諍の姿に乏しと雖も、恐らくは君に遺失有らむことを。

君誠中興主 經緯固密勿

君は誠中興の主なり、經緯固に密勿たり。

東胡反未已臣甫憤所切  
 揮涕戀行在道途猶恍惚  
 乾坤含瘡痍憂虞何時畢  
 靡靡踰阡陌人煙眇蕭瑟  
 所遇多被傷呻吟更流血  
 回首鳳翔縣旌旗晚明滅  
 前登寒山重屢得飲馬窟  
 邠郊入地底涇水中蕩潏  
 猛虎立我前蒼崖吼時裂  
 菊垂今秋花石戴古車轍  
 青雲動高興幽事亦可悅  
 山果多瑣細羅生雜橡栗  
 或紅如丹砂或黑如點漆

東胡反して未だ已まず、臣甫が憤の切なる所。  
 涕を揮ひて行在を戀ふ、道途猶恍惚たり。  
 乾坤瘡痍を含む、憂虞何時か畢らむ。  
 靡靡として阡陌を踰れば、人煙眇として蕭瑟たり。  
 所遇多は多く傷を被る、呻吟して更に血を流す。  
 首を回らす鳳翔縣、旌旗晚に明滅す。  
 前みて寒山の重れるに登る、屢、飲馬の窟を得たり。  
 邠郊地底に入る、涇水中に蕩潏たり。  
 猛虎我が前に立つ、蒼崖吼ゆる時裂く。  
 菊は垂る今秋の花、石は戴く古車轍。  
 青雲高興を動かす、幽事亦悦ぶ可し。  
 山果多くは瑣細なり、羅生橡栗を雜ぶ。  
 或は紅にして丹砂の如く、或は黒くして點漆の如し。

雨露之所濡甘苦齊結實  
 緬思桃源內益歎身世拙  
 坡陀望郵時巖谷互出沒  
 我行已水濱我僕猶木末  
 鷓鴣鳴黃桑野鼠拱亂穴  
 夜深經戰場寒月照白骨  
 潼關百萬師往者散何卒  
 遂令半秦民殘害爲異物  
 況我墮胡塵及歸盡華髮  
 經年至茅屋妻子衣百結  
 慟哭松聲迴悲泉共幽咽  
 平生所嬌兒顏色白勝雪  
 見耶背面啼垢膩脚不襪

雨露の濡はす所、甘苦齊しく實を結ぶ。  
 緬かに桃源の内を思ひて、益、身世の拙なるを歎す。  
 坡陀郵時を望む、巖谷互に出沒す。  
 我が行は已に水濱、我が僕は猶木末なり。  
 鷓鴣鳴べし、黄桑に鳴く、野鼠亂穴に拱す。  
 夜深くして戰場を経れば、寒月白骨を照らす。  
 潼關百萬の師、往者散すること何ぞ卒なりし。  
 遂に半秦の民をして、殘害せられて異物と爲ら合む。  
 況や我胡塵に墮ちて、歸るに及びて盡く華髮なり。  
 年を経て茅屋に至る、妻子衣百結。  
 慟哭すれば松聲迴る、悲泉共に幽咽す。  
 平生嬌とする所の兒、顔色白きこと雪に勝れり。  
 耶を見て面を背けて啼く、垢膩脚襪せず。



牀前兩小女補綴一作才過膝、補綴才に膝を過ぐ。  
海圖拆波濤、舊繡移曲折。海圖波濤拆く、舊繡移りて曲折す。  
天吳及紫鳳、顛倒在短褐。天吳及び紫鳳、顛倒して短褐に在り。  
老夫情懷惡、嘔泄臥數日。老夫情懷惡し、嘔泄して臥すること數日。  
那無囊中帛、救汝寒凜慄。那ぞ囊中の帛の、汝が寒くして凜慄たるを救ふ無きや。  
粉黛亦解苞、衾稠稍羅列。粉黛亦苞を解き、衾稠稍く羅列す。  
瘦妻面復光、癡女頭自櫛。瘦妻面復た光る、癡女頭自ら櫛けづる。  
學母無不為、曉妝隨手抹。母を學びて爲さざる無し、曉妝手に隨つて抹す。  
移時施朱鉛、狼藉畫眉潤。時を移して朱鉛を施す、狼藉畫眉潤なり。  
生還對童稚、似欲忘饑渴。生還童稚に對す、饑渴を忘れむと欲するに似たり。  
問事競挽鬚、誰能即嘖喝。事を問ひて競うて鬚を挽く、誰か能く即ち嘖喝せむ。  
翻思在賊愁、甘受雜亂聒。翻つて賊に在しときの愁を思ひ、甘じて雜亂の聒しきを  
新歸且慰意、生理焉得說。新に歸つて且意を慰む、生理焉ぞ説くことを得む。受く。

至尊尙蒙塵、幾日休練卒。至尊尙塵を蒙る、幾日か卒を練るを休めむ。  
仰觀天色改、坐覺妖氣豁。仰いて天色の改まるを観る、坐ろに妖氣の豁なるを覺ゆ。  
陰風西北來、慘澹隨回紇。陰風西北より來り、慘澹回紇に隨ふ。  
其王願助順、其俗善馳突。其の王助順を願ふ、其の俗善く馳突す。  
送兵五千人、驅馬一萬匹。兵を送る五千人、馬を驅る一萬匹。  
此輩少爲貴、四方服勇決。此の輩少きを貴しと爲す、四方勇決に服す。  
所用皆鷹騰、破敵過箭疾。用ふる所は皆鷹騰、敵を破ること箭疾に過ぎたり。  
聖心頗虛佇、時議氣奪。聖心頗る虚佇、時議氣奪はれむと欲す。  
伊洛指掌收、西京不足拔。伊洛掌を指して收めむ、西京も拔くに足らず。  
官軍請深入、蓄銳可俱發。官軍深く入らむと請ふ、銳を蓄へて俱に發す可し。  
此舉開青徐、旋瞻略恒碣。此の舉青徐を開かむ、旋た瞻む恒碣を略するを。  
昊天積霜露、正氣有肅殺。昊天霜露積めり、正氣肅殺たる有り。  
禍轉亡胡歲、勢成擒胡月。禍は轉せむ胡を亡さむ歲、勢は成らむ胡を擒にせむ月。

胡命其能久皇綱未宜絶  
 憶昨狼狼初事與古先別  
 森臣竟蕞醜同惡隨蕩析  
 不聞夏殷衰中自誅褒妲  
 周漢獲再興宣光果明哲  
 桓桓陳將軍仗鉞奮忠烈  
 微爾人盡非於今國猶活  
 淒涼大同殿寂寞白獸闕  
 都人望翠華佳氣向金闕  
 園陵固有神掃灑數不缺  
 煌煌太宗業樹立甚宏達

胡の命其能く久しからむや、皇綱未だ宜しく絶ゆべからず。  
 憶ふ昨狼狼の初、事古先と別なり。  
 森臣竟に蕞醜にせらる、同惡蕩析に隨ふ。  
 聞かずや夏殷の衰へしとき、中自ら褒妲を誅せしを。  
 周漢再興を獲たり、宣光果して明哲なり。  
 桓桓たり陳將軍、鉞に仗つて忠烈を奮ふ。  
 爾微りせば人盡く非ならむ、今に於て國猶活す。  
 淒涼たり大同殿、寂寞たり白獸闕。  
 都人翠華を望む、佳氣金闕に向ふ。  
 園陵固より神有り、掃灑數缺けず。  
 煌煌たり太宗の業、樹立甚だ宏達なり。

【字解】【一】皇帝 唐宗。【二】二載 玉德二載。【三】問 問。【四】朝古 朝日一日。【五】杜子 作者自身。  
 北征 北の方郡州へゆく。【六】蒼茫 ぼんやりしてはつきりせぬ貌、家族の様子知れぬなり、蒼茫念慮の貌とするは不可、竟敢

の貌とするは可。【一】問家室 問はたづねにゆく、家室は妻子をいふ。【二】離時 離はただ離なり、時にといふこと。【三】皇  
 帝 なんぎ、しんばい、敵軍叛きしことをさす。【四】朝野 在朝の人人も、在野の人人も、朝は朝廷、野は民間。【五】少暇日  
 いそがしくひまなし。【六】颯然 かへりみてはづる。【七】思私被 思私とは天子の自分へたまはる特別の恩寵なり、私は自分  
 一己へのこひいき、被とは「かうむる」にちがそれをなうけること。【八】詔許 詔を以てお許しになる。【九】蕞華 華は華と通ず、  
 刑(いばら)なり、いばら、竹にて門をつくる、蓬は「よもぎ」の草、二字にて自己のいふせき家をさす。【一〇】拜辭 おいとまごひのあ  
 いさつ。【一一】語 いたるしまかりでる。【一二】闕下 行在所の御殿の小門のそば。【一三】恍惚 心にうれひおそれをいだく。  
 【一四】出 退出する。【一五】諷諷委 君をおいさめするすがた、兼質、これは作者は左拾遺にて諫官の職にあるゆゑにいふ。【一六】君  
 蕭宗。【一七】遺失 おておち、あやまち。【一八】中興主 隆興に中りし御主人。【一九】歸釋 歸のたて歸、よこいと、國事を歸  
 番すること。【二〇】南勿 風馳といふとおなじくつとめる貌。【二一】東胡 安處結をさす。【二二】反 むほん。【二三】區市 區  
 たるわたくし、名をあぐるば区禮を以て申すなり。【二四】所切 切とは身にびしひしとせまるをいふ。【二五】揮灑 なみだをふるふ、  
 揮とはふるひおとすなり。【二六】行在 天子のかりみや。【二七】遺途 前途をいふ。【二八】恍惚 心うつとり、どちらへ向いて  
 ゆくべきかばつきりせぬ。【二九】乾坤 天地、世のなか全體。【三〇】含新機 戰爭によるきずを内部にもつてある。【三一】憂虞  
 自己心中のうれひ、しんばい。【三二】舉 上げる。【三三】塵跡 塵迹なり、みちのばかどらぬさま。【三四】險 険、ゆ。【三五】肝  
 隔 南北の路を肝、東西の路を隔といふ。【三六】人烟 人家のけむり。【三七】眇 かがすか。【三八】蕭瑟 さびしきさま。【三九】所  
 遇 であふ所の人。【四〇】被傷 きずをかうむつてある。【四一】呻吟 うなる。【四二】同音 あとみふりかへる。【四三】風翔舞  
 扶風縣、師ち行在所のある地。【四四】旌旗 軍隊の「はた」。【四五】明滅 みえたりかくれたり。【四六】前空 前は前へとすすむ。  
 と。【四七】寒山 さむざらの山。【四八】重 山の峯のかまなること。【四九】飲馬窟 馬に飲ふいはや。【五〇】筵筵 涇州の野外、  
 邠州は風翔の東北にあたる。【五一】入地底 四方高く、中央深くくぼみたるをいふ。【五二】灑水 甘肅省の涇州に源を發し邠州の  
 中央を貫き東南流して陝西西安府高陵縣に至りて渭水に入る。【五三】中 中央部に於て。【五四】瀉瀉 水の流るる貌。【五五】石梁

古車。石が古き車のわたちのあとをいたく、石の上になわたちのあとがあるをいふ。【六〇】青雲 空高き雲。【六一】動高興 まがんな興味をうごかした。【六二】幽事 山中の幽静なること。【六三】山泉 山の水のこと。【六四】山果 山のこのみ。【六五】賣酒 こまか。【六六】羸生 つらなり生ずる。【六七】羸 羸まざる。【六八】椽栗 ちのみ、くり。【六九】丹砂 たんしゃ。【七〇】點漆 ほつちりとしたうるし。【七一】澗 うるほす。【七二】甘苦 あまきも、にがきも。【七三】芥 ひとしく、一様。【七四】結實 みなむすぶ。【七五】蘊思 はるかにおもふ。【七六】桃源 陶淵明の記文に見えたる武陵の桃花源なり、世をばなれた仙境をいふ。【七七】身世猶 一身此世の謀の猶きこと、俗塵の間に奔走し仙境に住すること能はざればかきいふ。【七八】峻陀 高く廣き貌、二字那時を形容す。【七九】那時 時は土を高くもりあげたる祭壇の地なり、むかし秦の文公、黃蛇天より下りて、鄭衙（即ち大原野）に止まると夢みて那時を作り、三牲（牛半羊豕）を用ひて白帝を郊祀すと傳ふ、鄭州は鄭衙の在る所、之を望むは已にほど鄭州に近づきしことを示す。【八〇】巖谷五出沒 此句善解は那時のさまとく。余は作者自己の居地についていふものとみる。巖と谷と二つ巖は巖崖をいひ、谷は深谷をいふ。出の字は巖をいひ、沒の字は谷をいふ。出沒は高低あるをいふ。下旬の「水澗」は「谷」をうけ、「木末」は「巖」をうけていふ。【八一】我行 我がゆく所は。【八二】水澗 谷底の水のほとり。【八三】僕 しもべ。【八四】木末 崖上の木のうへの方。【八五】鳴鳥 鳥を鳴に作れる本あり、鳴鳥よろしくらん、よふくろふ、なり。【八六】黃桑 枯れかかった桑。【八七】野風 のにあちれずみ。【八八】拱 兩手をあはせかかへる様にする。【八九】亂穴 次第もなくやたらにある穴。【九〇】白骨 戦死者の骨。【九一】澗關百萬師 澗關は同州府華陰縣の軍にあり、天寶十五載六月九日官軍の將哥舒翰關より出で河南の董實縣の西原にやどり、賊軍に乘ぜられ、官軍互にふみあひ黄河に墜ちて死するもの數萬人、遂に關の守りを失ひ玄宗の逃脱となれり。【九二】往者 さきには。【九三】數 官軍の離散せしこと。【九四】卒 卒、絆と同じ、にはか。【九五】牛秦民 秦は陝西省をさす、牛とはその大牛をいふ。【九六】殘害 そのなふ、殺され又は餓死せしをいふ。【九七】爲異物 死するをいふ。【九八】殘胡虜 えびすの塵のなかにおつる。賊軍の中に陥りしをいふ。【九九】歸 鄭州へかへる。【一〇〇】華髮 しろが。【一〇一】鬢年 年すきて。【一〇二】茅屋 かやぶきの家。【一〇三】百結 むすびめだらけ。【一〇四】慙笑 うなつてなく。【一〇五】松蘿 懸とは風がふきまはすこと、松蘿は

松かざのおと。【一〇六】悲泉 かなしめるが如き泉のおと。【一〇七】共 我等人間とともに。【一〇八】幽咽 ふかくむせぶ。【一〇九】所觸見 あいらしとしてあたことども。【一一〇】耶 着と同じ、ちちおや、作者自らいふ。【一一一】背面 面をむける。【一一二】垢膩 あか。あぶら。【一一三】換 かつたび。【一一四】擘 れたい。【一一五】補綴 きしのほつれをおぎなひつづる、綴を成は絵に作る、絵は「ほころび」なり。【一一六】才 機と同じ、わづかに、やつと。【一一七】過膝 ひざからすこしさがる。【一一八】海國 海なまがいたもの、これは紙なり。【一一九】拆 ちやく。【一二〇】波濤 潮の波濤なり。【一二一】舊舖 ふるいぬひとり、これは若しののきれ地にぬひをしたもの。【一二二】移曲折 ばしよがかはつてなれまがる。【一二三】天吳 山海經にみえたる動物、かつげの類、虎より人面、八百八足八尾、背青黄色なるものなりと。これは海國に屬するもの。【一二四】紫風 紫毛ある風皇、これは衣箱に屬するもの。【一二五】説に同と袖とを區別せず、海國も天吳も紫風もみな袖の模倣なりとみるものあり。【一二六】顛倒 位置がひつくりかへる。【一二七】粗糲 粗末な毛織りの「上にきるちよつきし」、裡は薄、童監所著之篇に「楊は毛布なり」といへり。【一二八】老夫 おやぢ、作者自らいふ。【一二九】情懷 思、むねこころをさす。【一三〇】嗚嗚 はきくだしをする。【一三一】那 なんぞ。【一三二】蕭中帛 ふくろの中のきぬ。【一三三】汝 こどもをさす。【一三四】濼 ぶるぶるふる。【一三五】粉黛 おしろい、まゆずみ。【一三六】解香 香は包の假借字、つつみのをいふ、解はほどくこと。【一三七】衾 衾は「かいまき」綯は「ひとへれまき」なり。【一三八】稍 やうやく、しだいに。【一三九】羅列 ならべられる。【一四〇】覆衣 やせたつま。【一四一】面復光 すこしかほにつやがでる。【一四二】織女 智恵のゆかむすめ。【一四三】櫛 くしげづる、かみをとす。【一四四】母 即ち作者の妻。【一四五】無不爲 一一みなする。【一四六】嗚嗚 あまのおつくり。【一四七】隨手抹 手あたりしだいにすつりつける。【一四八】移時 ややしはしの時間たつて。【一四九】施朱鉛 朱は口べにをいふ、鉛はなまり、おしろいのこなをいふ、施とはぬること。【一五〇】狼藉 したたしどろに。【一五一】童眉 眉のぬけたほどはびるに書きまゆができた。【一五二】生還 生きてもどる。【一五三】童稚 こどもをさす。【一五四】同事 子どらにがなにかたづける。【一五五】觀捲 巻きそうて頼のひげをひつづる。【一五六】即 すぐさま。【一五七】嗚嗚 怒聲をだしてどなりつける。【一五八】朝 かへつて。【一五九】在賊營 賊軍のなかにゐたころの勢。【一六〇】甘受 平氣でう

北 征



の名、所在は考を俟つ。【三三】 都人、長安の人民。【三四】 望、來れかしたながある。【三五】 翠華、天子の旗、旗上に翠羽のふきをつけるによりてかくいふ。【三六】 佳氣、帝運隆興すべきめでたき氣。【三七】 向、行在所の方から長安の方へ向つて起りつあること。【三八】 金闕、黄金をかきりたる傍門。【三九】 園陵、唐の先代のみまさき、陵には附屬の園あり。【四〇】 有碑、神靈が存する。【四一】 掃壇、はきさうち、天子都に住居せらるれば園陵の掃除しゆきとどく。【四二】 散、禮數といふこと、禮制には必ず度數が伴ふ。【四三】 不飲、かくなることなし。【四四】 煌煌、かがやく貌。【四五】 太宗業、太宗のたてたまつた帝業。【四六】 樹立、うまつけ立てたこと。【四七】 宏遠、宏大通達なり、おほきくて且つ終始をつらぬきとほるをいふ。宏は面積のうへ、遠は時間のうへよりいふ。

【題義】 鳳翔の行在所より鄭州の家を見舞ひにゆきしことを記す。鄭州は鳳翔の東北にあたる。北にゆくを以て北征と名づく。時の事情は下の如し。房瑄陳陶斜に敗軍す、至德元載十月、瑄、瑄、琴師董庭蘭が事によりて罪を得、宰相を罷めさせられんとす。杜甫瑄は醇儒にして大臣の體あるを以て微罪によりて罷免す可らざるを言ふ。肅宗怒つて甫を三司門史大夫・中書の推問に附す。中書侍郎平章事張鎰が救ひにより、幸に推問を放免せられ、六月一日鄭州に歸ることを許さる。是れ作者が此の旅行ありし所以。製作時は至德二載九月頃か。八月初に鳳翔より出發して鄭州に到着して以後に作れり。

【詩意】 肅宗皇帝の至德二載の秋の閏八月一日に自分は北方にでかけて、はつきりせぬうちにも我家の妻子の様子をたづねやうとする。この時は賊軍の謀反でなんぎ、心ばいにいくはした頃で、朝廷の者も民間の者もせはしくて暇がないのである。それに自分はどうか特別に天子の御恩寵を被つて仰せによりていふせきあばらやへ歸ることを許されたのははぢいつたことである。御暇乞の御挨拶に行在所の御門ちかくまかりでたが恐縮して心にうれひおそれをいだしながらいつまでも退出ができぬ。自分は左拾遺の官を辱うしてゐる、君をお諫めするといふ程の資質も無いのではあるが萬一我が君におちおちでもありはせぬかと恐れるのである。我が君におかされては誠に中興の君主であらせられ、國政を経營せらるることまことに御勉強なことである。それに東方の胡賊(安慶緒)が叛いてまだ止まないことは臣下たる自分の痛切に憤る所のものである。お別れの涕をふるひおとしては心中に行在をこひしたひ前途にふみださうとはするがどこへゆくべきか心もうつとりしてしまふ。今天下どこでも戦争のためのきずをもつてゐる、自分の胸中のしんばいはいつをはることであらうか。心はあとにのこつてあゆみもおそく縦横の道路を踰えてゆくと、遠く眇に入里の煙がさびしく見える。自分が途であふ所の人多くは傷をうけてゐて、うなつてゐる上に血を流してゐる。鳳翔縣の方をよりむいてみると夕方には軍隊の旗がみえたりかくれたりしてゐる。それからなほも前進して重疊してゐる寒ざらの山に登るとしばしば馬に水を飲ませる窟にであふ。鄭州の野外へかかると低地で地の底へはひるかとおもはれ、其地の中央部には涇水がたぎつて流れてゐる。ともすると猛虎が自分の面前に立ちあがる、その吼ゆるときは蒼崖も裂けるばかりである。また菊はことしの秋の花を垂れてをるし、路上の石には古いわだちのあとがついてゐる。空にうかべる青雲をながめるとそれが

自分のさかんな興味をわかせることもあり、また山路の旅はいろいろの悦ばしい幽静な事にであふ。即ち山中の果物は多くはちひさいのであつて、それとやらんで生えてをるものには椽や栗の木などがまざつてゐる。或るものは紅なること丹砂のやうであり、或るものは黒くてぼつちりした漆のやうである。それが雨や露にうるほされて甘きものも苦いものも一樣に實を結んでゐる。この様な場所をとほるとはるかに「桃源」の仙郷のことがおもはれるのであり、反對にいよいよ自分の處世のまづさをなげかはしくおもふのである。そのうちに鄭州もまぢかになつてきて、高く廣い鄭時の岡が眺められる。自分の経過してゐる處は巖崖と深谷とが互に高低出沒してゐる。自分が谷川の水のそばを歩いてゐるのに、自分の僕はあとの崖の木の上の方に居るといふ風である。ふくろふが枯れ葉に鳴いてゐたり、野らねすみ穴だらけの所に兩手をこまぬいたりしてゐる。夜ふけに戰場を經過すると寒さうな月の光が死者の白骨を照らしてゐる。ああ、前年潼關の戦にどうして百萬の官軍があんなに俄に敗散して、殆ど關中の半分の人民を死人にしてしまつたのであらうか。まして自分はさきに賊軍の中に陥り、いま家へ歸るにあたつてはすつかり白髪になつてしまつた。一年目に茅屋へ來てみると妻や子はぼろをつぎあはせた衣をきてゐる。慟哭すると松風の聲が吹きめぐる、悲しげな泉の水さへ自分等とともにむせびなきしてゐる。ひごろ愛らしとしてゐた子どもは榮養不良で顔色が雪よりもまつ白である。彼はこのおやちを見て面をあらむけにしてなきだす。みると彼の脚は垢やあぶらがきたなく

ついでゐて、くつたびもはいてゐない。ねだいの前には二人の少女がゐるが、彼女等ははごろびをつづもあはせた著物をきてゐるがそのたけはやつと膝がかくれるほどである。彼女等は上著の「ちよつき」をきてゐるがそれは海圖とよるびた繡とりのある切地でつぎあはせてある。圖の波濤はひきさかれてゐるし、繡は椽は位置がうつつて曲りくねつてゐる。すなはち圖の天吳の繡、繡の紫鳳の狀などが「ちよつき」の上であちこち顛倒してみえてゐる。これをみては自分はむねのうちがきもちわるくなつて、はいたり、くだしたりして、二三日は臥てしまつた。どうして自分には汝等が寒がつてふるへてゐるのを救ふことのできうる囊中の帛がないのであらうか。それでもおもしろいや眉蹙をいれた包みものがほどかれるやら、かいまきや、ひとへ寝まさもだんだんとならべられ、瘦せた妻も面に光りがあるやうになり、智慧はのゆかぬむすめたちも自分自身で頭の髪をくしげづる。むすめどもは母のすることならなんでもまねをして、朝のおつくりにも手あたりしだいになかかほになすりつける。ややしばらく時をつひやしてべにやおしろいをつけるが、できたところを見るとまぬけたばびろのかき眉ができてゐる。自分は生きてかへつてことも等に對すると餓も渴も忘れるほどである。彼等がものめづらしげに自分に何かをたづねて、たがひに争うて自分のほひげをひつづつたりするが、だれがすぐにそれをどなりつけることができやうか。一方に賊軍の中に陥つてゐたときの愁のことをかんがへれば現在のがやがやかましいぐらゐることは自分の甘んじて受ける所のものである。家へ

かへりたての自分はこんなことでまゝ自分のところを慰めてゐる。暮しむきのことなどどうして口からだせるものではない。」我が君にはまだ兵塵をさけて他方においてになる、いつになつたら兵卒を訓練することをやめることができるだらう。それでも上を仰いでみると天の色もこれまでとははつた様だ。そぞろに兵亂の悪氣も散らばる様な氣がする。西北の方から陰氣な風が吹いてきた。その風はものがなく同乾にくつついてきたのである。同乾の王は唐の官軍を助けたいと願ひでた。同乾の習俗は馳突がうまい。それが我が唐へ五千人の兵を送り、馬一萬匹を驅つてよこした。彼等は少壯なものを貴ぶ習慣で、彼の國の四方の者はその勇決に服従してゐる。彼等の用ふる者はみな鷹のあがるが如く勇猛であり、敵軍をうち破ることは矢のはいよりもはやい。世論は同乾などを使つてはと後難をおそれて氣を奪はれ様としてゐるが、我君のみ心では平氣で彼等の援助をまつてをられる。」今後は伊水洛水の地方(洛陽)は掌中の物を指す様にたやすく回收することができやう。長安も抜きとるほどのものがなくなつたやすく抜けるであらう。官軍は進んで賊の根據地まで深く攻め入らうとねがひでゐる、餒氣を蓄へて同乾とともに出發するがよろしい。このたびの擧は青州徐州の方面を開くことになるであらう。また恒山・碣石をも略取することになるであらう。大それたには霜露がつもり、天地の正氣がきびしいものがある。胡賊を亡すときには今の禍は轉じて福となるであらう。胡賊を擒にするときには宜軍の勢もできあがるであらう。胡賊の運命はどうしてながつづきできるものか、人間の

大道は斷絶してはならぬはずである。」おもふに、前年都にて俄の出奔の事變が起つたとき、朝廷でとられた御處置は昔の事とはちがつてゐた。我が朝では姦臣(楊國忠)は刑罰に處せられ、そのなかまの惡黨らもおつばらひちらされてしまつた。諸君は夏殷の衰へたとき、宮廷の中で御自身に褒姒・妲己の毒婦を誅したまうたことを聞かないか。(楊貴妃は玄宗御自身を誅せられたではないかの意。)さうして周や漢は再び興ることができた。宣王といひ光武といひ豫想せし如く果して明哲の君主である。(唐は再興して、新君肅宗皇帝は明哲であるの意。)まことに桓桓と勇武である、彼の陳將軍は。彼は天子から授けられた鉞をついて忠義ないさを奮うた。あのときもおまへが居なかつたならば唐の人民はみんな今見るやうな安泰なものであることができなかつたであらう、おまへのおかげで今も我が唐の國はいきることができるのである。」長安にある大同殿はものさびしくある。白獸圖はひとつそりしてゐる。その都にゐる人たちは早く天子の御旗がおかへりになる様にとながめてをり、その希望のやうに帝運隆興のめでたい氣が行在所の方から御所の金闕に向つて起りつつある。我が唐の皇室御先代の山陵にはもとより祖宗の神靈が存在してござる、それに對する御子孫皇帝の灑掃の禮數は決して缺くことがない。我が唐の基礎をお置きになつた太宗の帝業はそのうゑつけ立てられたことは廣大であり且つ終始をつらぬいて後後までもとほるのである。唐の國運が中絶することはない。

行次昭陵

行くゆく昭陵に次る

舊俗庸主羣雄問獨夫、  
 讖歸龍鳳質威定虎狼都、  
 天屬尊堯典神功協禹謨、  
 風雲隨絕足日月繼高衢、  
 文物多師古朝廷半老儒、  
 直詞寧戮辱賢路不崎嶇、  
 往者災猶降蒼生喘未蘇、  
 指麾安率土盪滌撫洪鍾、  
 壯士悲陵邑幽人拜鼎湖、  
 玉衣晨自舉鐵馬汗常趨、  
 松柏瞻虛殿塵沙立暝途、  
 寂寥開國日流恨滿山隅、

舊俗庸主に披る、羣雄獨夫を問ふ。  
 讖は歸す龍鳳の質、威は定む虎狼の都。  
 天屬堯典を尊び、神功禹謨に協ふ。  
 風雲絶足に隨ひ、日月高衢に繼ぐ。  
 文物多く古を師とす、朝廷半老儒。  
 直詞寧ぞ戮辱せられむ、賢路崎嶇たらず。  
 往者災猶降る、蒼生喘ぎて未だ蘇せず。  
 指麾率土を安んじ、盪滌洪鍾のごとく撫す。  
 壯士陵邑に悲しみ、幽人鼎湖に拜す。  
 玉衣晨に自ら舉る、鐵馬汗して常に趨す。  
 松柏に虚殿を瞻、塵沙に暝途に立つ。  
 寂寥たり開國の日、流恨山隅に滿つ。

**【字解】** 一、舊俗、唐以前の歴代の風俗をいふ。二、庸主、庸主とは凡庸の君主、六朝以前の愚なる天子をさす、彼とは漢  
 敵すること、つかれてやぶれる。(或はいふ、庸主、獨夫ともし所の響をなすこと。) 三、羣雄、多くの英雄、隋末に天下を一統せんと  
 起つた李密、竇建德等をさす。四、問獨夫、問とはその罪を問ふこと、獨夫とは天子たる資格なき單獨のひとこと、「孟子」滕惠王下  
 に「夫豺とあり、尙書」泰誓下に獨夫受とみゆ。此句の獨夫は隋の煬帝をさす。五、讖、讖言の辭、唐の太宗四歳のとき蒼生あり、  
 之を見て曰く、龍鳳之姿、天日之表、年將二十、必能濟世安民と、蒼生、太宗の未來について預言せしなり。六、天屬、龍鳳質、上の蒼生の  
 言にみゆ、太宗の美賢をいふ。七、威、太宗の武威。八、虎狼都、秦の都長安をいふ、二解あり、一は「史記」蘇秦傳の秦虎狼  
 之國を引く、一は天官書の西宮、參爲白虎、東一星曰狼に據り、秦は虎狼星の分野にあたるを以て虎狼都といふととく、虎狼を實獸  
 とみるか星とみるかなり、いづれにても通すべし。九、天屬、天然自然の血屬をいふ、父子の關係をさす、これは唐の高祖と太宗の間  
 がら、父たる高祖が子たる太宗に帝位を譲られしをさす。十、尊堯典、尙書の堯典篇にては帝堯が賢人たる舜に位を禪りしこと  
 を書きたり、太宗は長子ではなく弟なれども賢なるゆゑ高祖より位をゆづられたといふなり。これ堯典の總旨を尊ぶなり。十一、神  
 功、太宗の人力以上の功。十二、協禹謨、尙書の禹謨の大意に、禹の功をのべて、九功惟敘といへり、太宗の無業にも七德九功録あ  
 り、これ禹謨にかなふなり。十三、風雲隨絶足、絶足は絶足に同じ、駿馬をいふ、太宗をたとへていふ、風雲は諸臣をたとへていふ、諸  
 臣みな風雲の會に乘じて太宗にしたがふ。十四、日月繼高衢、これは日月の光りが高衢に於て繼ぐ意ならん、高衢は天上の路なり  
 太宗が高祖の徳光をつぐをいふ。十五、文物、唐の國家の制度文物なり、雅樂を製し、律令を定め、封建を議する等、みな文物なり。  
 十六、師古、古代にのりとる。十七、半老儒、半分以上は老いたる儒者なり、これは虞世南等の十八學士等をさす。十八、直詞、  
 直言して諫むること、王珪、魏徵の諫めのごとき是なり。十九、崎嶇、刑せられづかしめられる。二十、賢路、  
 賢人の進む路。二十一、不崎嶇、崎嶇は道路けはしきさま、崎嶇たらずとはけはしくなきこと、太宗は馬周、劉子翼等を擧げ用ひたり。  
 二十二、往者、さきには、貞觀の初年をさす、隋末に大水あり嶺者野にみちしが、貞觀の初に至りてもしきりに大水あり。二十三、災猶降、  
 上にみゆ。二十四、蒼生、人民。二十五、喘、あへぐ。二十六、蘇、よみがへる。二十七、指麾、はたにてさしまれく、區下を御するを



いふ。【三〇】 率土にそびたる處、すべての土地、天下。【三一】 豐饒、うごかしそそぐ、きたなきものをふりうごかしであらふ。豐饒は高に作る。【三二】 撫洪鐘、洪鐘のごとく撫するなり、洪鐘は大なる火をもやすらひ、造化自然をたとへていふ、撫は愛してなでさするなり、歐陽修曰く、此句は開元陶成天下、如洪鐘と。以上「往者」以下の四句みな太宗の事として説きたり、朱鶴齡曰く「往者」二句を玄宗の天寶の災とし「指塵」二句を希望とみなし、今かある功を爲すもの無きを歎すといへり、一説に充つべし。【三三】 壯士昭陵を守る武士をいふ。【三四】 陵邑、昭陵の地をいふ。【三五】 幽人、幽静な人、作者自らいふ。【三六】 拜、禮拜する。【三七】 鼎湖、黄帝が天に昇りし地、昭陵をたとへていふ。【三八】 玉衣、玉衣（一）句、玉を金縷にてつづりぬのごとくせる衣、昔漢の高祖の崩から御衣が出て殿上に舞ひたる話あり。【三九】 鐵馬（一）句、鐵馬はよろぼうたる馬、安祿山事蹟に潼關の戦に官軍敗れ、賊將崔乾祐といふもの白旗を領し左右を引いて驟突せしに、黃旗軍數百降出でて崔が軍とたたかふこと一度ならず。後日昭陵より奏していふ、當日靈宮の前の石人石馬、汗流れたり。【四〇】 玉衣、鐵馬二句は太宗の神靈存してかかる靈異ありといへるなり。【四一】 松栢、陵樹なり。【四二】 塵、あふぎみる。【四三】 虛殿、人の居らぬこゝ。【四四】 塵沙、すなほこりのなご。【四五】 暎造、くらかりのみち。【四六】 寂寥、ひっそり。【四七】 開國日、開國は太宗が唐の國家をはじめて開設するをいふ。日とは時をいふ、其の時は巳に遠く去りて今はひっそりしてある。【四八】 流恨、ただよへるうちらみの念。【四九】 山隅、山陵の四隅。

【題義】 鄜州へ歸る途すがら昭陵のほとりにやどりて作る。昭陵は唐の太宗の陵なり。陝西省西安府醴泉縣の西北六十里九嶷山に在り。封内周圍百二十里、陪葬せらるるもの諸王七、公主二十一、妃嬪八、宰相十二、丞郎三品五十三人、功臣大將軍等六十四人。太宗の乘りし六轡の石像は陵後にありしが今は持ち出だされたり。又、陵そのものは「唐會要」に「昭陵は九疊の層峰に因りて、山の南面を鑿ち、深さ七十五丈、玄宮を爲る。巖に傍ひ梁を架して棧道を爲る、懸絶すること百仞、繞回する

こと二百三十歩にして始めて玄宮の門に達す。頂上にも亦遊殿を起す」とあるによりて大略をうかがふことを得べし。

【詩意】 歴代の愚な君主がつづいたため在來の民風はつかれやぶれてきた。そこで多くの英雄たちが起つて帝徳を失ひ一人とも見なすべき隋の煬帝に對してその罪を問ふの師をした。その中で未來の天子たるべしとの豫言は龍鳳の寶質をそなへた我が唐の太宗に歸し、太宗の武威は虎狼の國ともいふべき地方の都即ち長安の地方を平定せられた。太宗は高祖に對しては血屬は父子であつてしかも「堯典」の趣旨を尊んで賢者に位をゆづるといふ仕方をとられたし、太宗の人力以上の功は「大禹謨」にしろされてゐる萬の功にもかなうてゐる。高材逸足ともいふべき太宗がたちあがれると風雲に乗じて起つたいろいろの臣下が之につきしたがうた。さうして太宗は天路にかがやく日月の光をついで此の世を照された。太宗の爲されかたは文物制度のうへでは多く古代の良法を師法とせられ、朝廷に用ひらるる人人は半以上は老儒者であつた。その時にはいくら直言をして諫めても刑罰にされはづかしめをうけるといふことはなく、賢人が仕進する路はちつともけはしくなくすらすらとほることができた。さきに隋末に於て人民たちはなんぎにあうて息ぐるしくあへぎつあつてよみがへるには至らなかつたのに、太宗が出現せられて羣臣を指麾して全天下を安んせられ、從前の汚濁をあらひきよめて世界をあたたかい大なるあろりの様に愛撫せられた。今自分はこの太宗の御陵のほとりをと

はると、御陵の番兵は悲しさうにしてゐる、自分はここにつつしんで禮拜をささげる。太宗の神靈は天上におはすが寢殿に藏してある玉衣はひとりで晨に舞ひあがり、武裝した石刻の馬も活きてゐて汗をながしていつもはしつてゐるかとおもはれる。自分は松柏のたちならんでゐるあたりになき御殿をみあげ、沙ほこりのなかに夕ぐれの途にたたすんでをると、太宗のこの國をお開きになつた當日は遠き過去となつてさびしく、ただあふれる恨の念が山陵の四隅にいつばいになるばかりだ。

重經昭陵

重ねて昭陵を經

草味英雄起謳歌曆數歸

草味英雄起る、謳歌曆數歸す。

風塵三尺劍社稷一戎衣

風塵三尺の劍、社稷一戎衣。

翼亮貞文德丕承戡武威

翼亮文德を貞しくす、丕承武威を戡む。

聖圖天廣大宗祀日光輝

聖圖天のごとく廣大に、宗祀日のごとく光輝あり。

陵寢盤空曲熊羆守翠微

陵寢空曲に盤る、熊羆翠微を守る。

再窺松柏路還有一見五雲飛

再び窺ふ松柏の路、還た見る五雲の飛ぶを。(還た五雲の飛ぶ有り)

【字解】

【一】草味「馬車詩の象辭に天道草味とみゆ、草味は草創冥昧なり、攻められ、光明かならざるをいふ、隋末世亂れて漢

池たりし時なます。【二】英雄「草の秀でたるものを英といひ、獸の特なるものを雄といふ、すぐれたる人物を英雄といふ、ここは太宗なます。【三】謳歌「その人の徳をうたにつくりてうたふこと。魏の民が魏の子を謳歌せしめて身を謳歌せしこと、孟子「萬章上にみゆ。【四】曆數「堯曰篇にみゆ、天位之列女と注す、天子たるべき順位なり。【五】歸「太宗に歸着する。【六】風塵「戰亂によりおこるかぜほこり。【七】三尺劍「漢の高祖三尺の劍を提げて天下を取る。太宗も亦かくのごとし。【八】社稷「天下をいふ。【九】一戎衣「武成篇に一戎衣天下大定とみゆ、周の武王が一たび戎衣(軍服)をきて殷の紂王をうちほろぼしたによつて天下が大に定まりたりといふなり、太宗も亦かくのごとし。【一〇】翼亮「たすけ、たすく、太宗が高祖を輔佐せしこと。【一一】貞文德「貞は正しくして固きなり、固く守りてかはらぬなり、文德は平和の徳なり、「尙書」君牙、「五子」滕文公下に丕承戡武威とみゆ。周の武王の功烈は文王の意を繼承したりといふなり、太宗も亦かくの如し。【一二】戡武威「戡は「かきむる、鳥が羽をすばめること、その際武力の威なりかたづけしてしまふ。【一三】聖圖「太宗のほかりこと。【一四】天廣大「天のごとく廣く大なり。【一五】宗祀「宗としてまつること、宗とは祖について大功ある君としてみるをいふ、後嗣の天子が太宗をまつるをいふ。【一六】日光輝「日のことく光輝あり。【一七】陵寢「山陵・寢廟なり、廟は木主を藏し、寢は平生の衣冠等を藏する建物。【一八】盤「わたかまる、建築物の曲折して立つをいふ。【一九】空曲「空曲、人無き山のくま。【二〇】熊羆「くま、ひぐまの類なつゝい香兵。【二一】守「香を守る。【二二】翠微「山の中腹以下をいふ、空気がみどりにならわたる處なるを以ていふ。【二三】再窺「再とは第二回なるを以ていふ。【二四】還「有、還見、有、見、いづれにても通ずるも余は見の字を受す。【二五】五雲「五色の雲。

【題義】第二回に昭陵の地を經過せしとき作る。此詩は已に鄜州に到着の後、更に鄜州を發し長安に赴かんとするとき作れるものにして、時は後に屬すれども同じ昭陵の詩たる關係にて前詩の次に録しおかれしものならん。

【詩意】隋末世が亂れて混沌としてゐた草わけの時に英雄（太宗）が起つて、その人は世の人から徳をうたはれ、天子の位をふむべき順位がその人に歸した。その人は兵馬の塵の間に三尺の劍を提げてたち、一たび軍服をつけて社稷を安んずるに力をつくした。それから父たる高祖をたすけて文の徳をかたく守り、高祖の意を繼承して自己の世には武力の威を全くとりかたづけてしまつた。その生時のほかりごとは天の如く廣大であり、その死後まで中興の宗としてあがめらるるおまつりは太閤のごとく光輝がある。いまこゝは御陵、寢廟がさびしき山のくまわに盤つてをり、熊羆の様な兵士が山の半腹をみまもつてゐる。自分は前同もこゝをとほつたが、さらに第二回にきて松柏のしげつてゐる御陵道をうかがひみるに、やはり五色の雲が飛んでゐるのをみとめるのである。

彭衙行

彭衙行

憶昔避賊初北走經險巖  
夜深彭衙道月照白水山  
盡室久徒步逢人多厚顏  
參差谷鳥吟不見遊子還

憶昔昔賊を避けし初、北に走つて險巖を經たり。  
夜は深し彭衙の道、月は照らす白水の山。  
室を盡くして久しく徒步す、人に逢うて厚顏多し。  
參差として谷鳥吟す、見ず遊子の還るを。

癡女饑咬我啼畏虎狼聞  
懷中掩其口反側聲愈嘖  
小兒強解事故索苦李餐  
一句半雷雨泥濘相攀牽  
既無禦雨備徑滑衣又寒  
有時經契澗竟日數里間  
野果充糲糧卑枝成屋椽  
早行石上水暮宿天邊煙  
少留同家窶欲出蘆子關  
故人有孫宰高義薄曾雲  
延客已噤黑張燈啓重門  
煖湯濯我足剪紙招我魂  
從此出妻孥相視涕闌干

癡女饑えて我を咬む、啼いて畏る虎狼の聞こゆるを。  
中に懷きて其の口を掩ふ、反側して聲愈々嘖る。  
小兒強ひて事を解す、故らに苦李を索めて餐ふ。  
一句半雷雨、泥濘相攀牽す。  
既に雨を禦ぐの備無く、徑滑かにして衣又寒し。  
時有つてか契澗たるを經、竟日數里の間。  
野果を糲糧に充て、卑枝を屋椽と成す。  
早には行く石上の水、暮には宿す天邊の煙。  
少しく同家窶に留まり、蘆子關を出でむと欲す。  
故人孫宰有り、高義曾雲に薄る。  
客を延くとき已に噤黒なり、燈を張りて重門を啓く。  
湯を煖めて我が足を濯はしめ、紙を剪つて我が魂を招く。  
此從り妻孥を出だす、相視て涕闌干たり。

衆難爛漫睡喚起盤餐  
 誓將與夫子永結爲弟兄  
 遂空所坐堂安居奉我歡  
 誰肯艱難際豁達露心肝  
 別來歲月周胡羯仍構患  
 何當有翅翎飛去墮爾前

衆難爛漫として睡る、喚び起して盤餐に霑はしむ。  
 誓つて將に夫子と、永く結びて弟兄と爲らむとす。  
 遂に坐する所の堂を空しくして、居を安じて我が歡を奉ず。  
 誰か肯て艱難の際、豁達心肝を露はさむ。  
 別來歲月周る、胡羯仍患を構ふ。  
 何か當に翅翎有つて、飛び去つて爾が前に墮つべき。

【字解】【一】憶昔 昔とは前年至德元載をさす。【二】遊賊 率先より白水に往きしことをいふ。【三】彭衙 題意の下にいたす。【四】白水 上に同じ。【五】塵壘 全家こそつて。【六】多厚 厚顔は面皮あつし、恥知らぬさま、世亂れて家族離散するもの多き時に自己のみ全家をさす。【七】遺子 遺棄された子。【八】頑女 頑固な女。【九】頑 頑固。【一〇】吹 吹かむ、かじりつく。【一一】參差 たがひちがひにとよまむ。【一二】其口 其の口。【一三】反側 反側。【一四】向 向かへ。【一五】向 向かへ。【一六】向 向かへ。【一七】向 向かへ。【一八】向 向かへ。【一九】向 向かへ。【二〇】向 向かへ。【二一】向 向かへ。【二二】向 向かへ。【二三】向 向かへ。【二四】向 向かへ。【二五】向 向かへ。【二六】向 向かへ。【二七】向 向かへ。【二八】向 向かへ。【二九】向 向かへ。【三〇】向 向かへ。【三一】向 向かへ。【三二】向 向かへ。【三三】向 向かへ。【三四】向 向かへ。【三五】向 向かへ。【三六】向 向かへ。【三七】向 向かへ。【三八】向 向かへ。【三九】向 向かへ。【四〇】向 向かへ。【四一】向 向かへ。【四二】向 向かへ。【四三】向 向かへ。【四四】向 向かへ。【四五】向 向かへ。【四六】向 向かへ。【四七】向 向かへ。【四八】向 向かへ。【四九】向 向かへ。【五〇】向 向かへ。【五一】向 向かへ。【五二】向 向かへ。【五三】向 向かへ。【五四】向 向かへ。【五五】向 向かへ。【五六】向 向かへ。【五七】向 向かへ。【五八】向 向かへ。【五九】向 向かへ。【六〇】向 向かへ。【六一】向 向かへ。【六二】向 向かへ。【六三】向 向かへ。【六四】向 向かへ。【六五】向 向かへ。【六六】向 向かへ。【六七】向 向かへ。【六八】向 向かへ。【六九】向 向かへ。【七〇】向 向かへ。【七一】向 向かへ。【七二】向 向かへ。【七三】向 向かへ。【七四】向 向かへ。【七五】向 向かへ。【七六】向 向かへ。【七七】向 向かへ。【七八】向 向かへ。【七九】向 向かへ。【八〇】向 向かへ。【八一】向 向かへ。【八二】向 向かへ。【八三】向 向かへ。【八四】向 向かへ。【八五】向 向かへ。【八六】向 向かへ。【八七】向 向かへ。【八八】向 向かへ。【八九】向 向かへ。【九〇】向 向かへ。【九一】向 向かへ。【九二】向 向かへ。【九三】向 向かへ。【九四】向 向かへ。【九五】向 向かへ。【九六】向 向かへ。【九七】向 向かへ。【九八】向 向かへ。【九九】向 向かへ。【一〇〇】向 向かへ。

【三】石上水 漢のいばまの水。【四】天邊 高峰のけむり。【五】少留 しばらく滞在する。【六】同家 白水驛の郷村の名ならん、孫宰の居る所。【七】遺子 鄭州よりさらに北にあり、襄武へ進する路、已に「塞遺子」の詩の條にいたす。【八】故人 ふるなじみの人。【九】孫宰 黃希の脱には三川の宰なりとせり、諸家多く姓は孫、宰は名とみる。【一〇】高義 義理のたかいこと。【一一】得 せまる。【一二】曾 曾、同。【一三】延 延、同。【一四】延 延、同。【一五】延 延、同。【一六】延 延、同。【一七】延 延、同。【一八】延 延、同。【一九】延 延、同。【二〇】延 延、同。【二一】延 延、同。【二二】延 延、同。【二三】延 延、同。【二四】延 延、同。【二五】延 延、同。【二六】延 延、同。【二七】延 延、同。【二八】延 延、同。【二九】延 延、同。【三〇】延 延、同。【三一】延 延、同。【三二】延 延、同。【三三】延 延、同。【三四】延 延、同。【三五】延 延、同。【三六】延 延、同。【三七】延 延、同。【三八】延 延、同。【三九】延 延、同。【四〇】延 延、同。【四一】延 延、同。【四二】延 延、同。【四三】延 延、同。【四四】延 延、同。【四五】延 延、同。【四六】延 延、同。【四七】延 延、同。【四八】延 延、同。【四九】延 延、同。【五〇】延 延、同。【五一】延 延、同。【五二】延 延、同。【五三】延 延、同。【五四】延 延、同。【五五】延 延、同。【五六】延 延、同。【五七】延 延、同。【五八】延 延、同。【五九】延 延、同。【六〇】延 延、同。【六一】延 延、同。【六二】延 延、同。【六三】延 延、同。【六四】延 延、同。【六五】延 延、同。【六六】延 延、同。【六七】延 延、同。【六八】延 延、同。【六九】延 延、同。【七〇】延 延、同。【七一】延 延、同。【七二】延 延、同。【七三】延 延、同。【七四】延 延、同。【七五】延 延、同。【七六】延 延、同。【七七】延 延、同。【七八】延 延、同。【七九】延 延、同。【八〇】延 延、同。【八一】延 延、同。【八二】延 延、同。【八三】延 延、同。【八四】延 延、同。【八五】延 延、同。【八六】延 延、同。【八七】延 延、同。【八八】延 延、同。【八九】延 延、同。【九〇】延 延、同。【九一】延 延、同。【九二】延 延、同。【九三】延 延、同。【九四】延 延、同。【九五】延 延、同。【九六】延 延、同。【九七】延 延、同。【九八】延 延、同。【九九】延 延、同。【一〇〇】延 延、同。

【題義】前年彭衙の地を過ぎしことを追憶して作れる詩なり。彭衙は漢代の縣の名、陝西省同州府白

水縣の東北六十里にあり、白水に同家窪あり、孫宰なるもの(杜詩の中に孫宰、王宰などいへる宰はその人の名なるや、邑の長をいふものなるや判明せず)其地に居る。作者前年鄭州に赴き更に蘆子關をへて靈武に達せんとせしとき、白水を経て孫宰の厚遇を受く。今年(至徳二載秋)鄭州の家を見舞ふにあたりて白水の西を過ぎてしかも孫を訪ふ能はざるによりて往事を追憶して此篇を作る。但、途上の作なるや、鄭州に著後の作なるやは明かならず。

【詩意】今もおもふ、前年賊を避けたころ北に向つて走つてなんぎな處を経過した。彭衙の道に夜は深けて、白水の山山を月が照らしてゐた。あのとき自分たちは一家内そろつてながくかちあるきをしてゐたので人にあへばあつかましい様なきもちがした。谷まの鳥はたがひちがひにとんでないてゐるが、だれも他に旅人が家路へもどつてくる様なものは見うけない。智慧はのゆかぬ娘が腹がへつたというて自分にかじりつく。なきたてては虎や狼の聲がきこえるというてこはがる。自分が胸をあけてだきこんでやりその口をおほふ様にすると身をそむけてかへつていよいよつりごゑをだす。また小兒は半わかりでたべることならぬ苦い李をねだつてたべたりする。凡そ十日のうち半分は雷雨がする、みちはぬかるみで、なにかにつかまつたり、手でひつぱりあうたりしてやつとすすむ。雨をふせぐ用意がないうへに小みちはすべり、著物もうすぎである。時としてはなかなかのなんぎをつづける、一日中かかつてやつと二三里しかあるけぬことがある。野生のくだものを「かて」の代り

にたべたり、樹木の卑い枝をたるき代りにしてその下でいねたり、朝早くに谷間の水にそうてあるくやら、暮がたに峰のをの天ちかき煙のあたりでとまるやら。自分たちはしばらく同家窪で滞在してそれから蘆子關を出て北進しようと思つた。同家窪にはふるなじみの孫宰といふものがゐてその高義は雲にせまるほどであつた。彼は自分たちを案内してくれたときはもはやうすくらがりであり、あかりをつけて幾重かの門をあけてくれた。さうしてお湯をわかつて我我に足をあらはせ、紙をきつて我々の生き霊をよびかへしてくれた。それから自分は妻子をだして彼にひき合せたが、お互にみあつてともに涙をながした。子どもたちをみるとみんなさかんによくねむつてゐる。それをよびおこして御飯のもてなしにうるほはせる。そのとき孫宰は自分にむかつて「誓つてあなたと永く交りをつ結んで兄弟となりませう」というて、とうとう自己の坐してゐる座敷をからにかけて自分たちの居を安かにして我我がなるたけよろこぶ様にとしてくれた。このなんぎな時節にだれが孫宰の様にからりと自己のはらのなかをうちあけてよう親切をつくしてくれるものがあらうぞ。おもひまはせばあなたと別れて以來まる一年ばかりはたつた。が、胡賊等はやつぱり患難をしでかしてゐる。いつになつたら自分のからだにはねがはえて、飛んでいつてあなたの前におちることができであらうか。

喜聞官軍已臨賊境二十韻 官軍已に賊境に臨むと聞くを喜ぶ、二十韻

胡騎潛京縣官軍擁賊壕

胡騎京縣に潛み、官軍賊壕を擁す。

鼎魚猶假息穴蟻欲何逃

鼎魚猶息を假す、穴蟻何に逃れむと欲する。

帳殿羅玄冕轅門照白袍

帳殿玄冕羅り、轅門白袍照る。

秦山當警蹕漢苑入旌旄

秦山警蹕に當る、漢苑旌旄に入る。

路失羊腸險雲橫雉尾高

路は羊腸の險を失す、雲横はりて雉尾高し。

五原空壁壘八水散風濤

五原空しく壁壘、八水風濤散す。

今日看天意遊魂貸爾曹

今日天意を見るに、遊魂爾が曹に貸す。

乞降那更得尙詐莫徒勞

降を乞ふも那ぞ更に得む、詐を尙ふは徒に勞する莫らむや。

元帥歸龍種司空握豹韜

元帥龍種に歸し、司空豹韜を握る。

前軍蘇武節左將呂虔刀

前軍蘇武が節、左將呂虔が刀。

兵氣回飛鳥威聲沒巨鼉

兵氣飛鳥を回へす、威聲巨鼉を沒せしむ。

戈鋌開雪色弓矢向秋毫

戈鋌雪色開き、弓矢秋毫に向ふ。

天步艱方盡時和運更遭

天歩艱方に盡く、時和運更に遭ふ。

誰云遺毒螫已是沃腥臊

誰か云ふ毒螫を遺すと、已に是れ腥臊に沃ぐ。

睿想丹墀近神行羽衛牢

睿想丹墀近く、神行羽衛牢し。

花門騰絕漠拓羯渡臨洮

花門絶漠に騰り、拓羯臨洮を渡る。

此輩感恩至羸俘何足操

此の輩恩に感じて至る、羸俘何ぞ操るに足らむ。

鋒先衣染血騎突劒吹毛

鋒先ちて衣血に染む、騎突きて劒毛を吹く。

喜覺都城動悲憐子女號

喜は覺ゆ都城の動くを、悲は憐む子女の號ぶを。

家家賣釵釧只待獻香醪

家家釵釧を賣り、只だ待つ香醪を獻するを。

【字解】 胡騎、胡賊の騎兵。 京縣、都近くの縣。 官軍、廣平王の軍ある軍をさす。 龍種、賊の據つた叛婁(ほり)を我物としかかへまじる。 雁魚、かなへの中で煮られる魚、賊の危きことをなたとへていふ。 假息、いきふくことをかし與へてある、しばし生命をあつておくこと。 穴蟻、穴のなかのあり、これ賊の危きなたとへていふ。 何逃、何は何處なり。 帳殿、テントはりの御殿、風翔の存在所をいふ。 轅門、つらなるならぶこと。 雲橫、くろきかんむり、公卿の禮冠なり。 旌旄、軍門なり、軍中の門は旗(くるまのながえ)を以てつくる。 羊腸、照てりがややく。 白袍、白きうはき、これは援助に來た回紇のきる衣なり。 秦山、長安附近の山をいふ。 當、當(あたる)とは警蹕すべき地位にあるをいふ、警蹕は天子の出入に道路上の人拂ひをすること、出づ

喜聞官軍已臨賊境二十韻

喜聞官軍已臨賊境二十韻

喜聞官軍已臨賊境二十韻

喜聞官軍已臨賊境二十韻

るには魯と稱し、入るには魯と稱す。【一八】漢苑 長安にある唐の御苑をいふ。【一九】入苑苑 苑苑は官軍のほた、入るとは「はたし」のたてらるる範圍内にはびるをいふ。【二〇】路失 失はこれまで有りしも今はなくなる。【二一】羊腸散 羊のほらわたのやうにうねうねと曲った路のある山隘。【二二】雲積 この雲は實物に非ず堆尾扇のむらがるをたとへていへる辭。【二三】堆尾高 天子の大駕の御座には堆尾扇・小圓堆尾扇・方堆尾扇・小堆尾扇等のたぐひあり。堆尾とは堆の尾にて作りたる「うちばし」なり。【二四】五原 長安附近の五つの原（高地）をいふ。畢原・白鹿原・少陵原・高陽原・細柳原これなり。【二五】空壁壘 とりでだけがいたづらに存す、無用となり功をなまぬこと。【二六】八水 涇・渭・漆・澠・滻・灃の八を關内八水と稱す。【二七】散風濤 散とは集の反對、今までは風濤が多く集まつてゐたが今は散らばつてなくなつた。【二八】天意 天のこころ。【二九】遊魂 ふらふらしたたましひ。【三〇】貨備賈 賈は汝等なり、汝等とは賊軍をさす、貨はかしたる。【三一】乞降 降参をたのむ。【三二】惡更得 どうしてできやうぞ、降参もできぬとは必ず誅殺せらるべきをいふ。【三三】尙許 いつぱりをたふとぶ、官軍に對し詐略を用ふる。【三四】某徒勞 莫は反語、徒勞はむだばれなること。【三五】元帥 廣平王をいふ。【三六】龍種 皇族なるをいふ。【三七】司空 郭子儀なり、時に副元帥となる。【三八】豹額 支那の兵法の書、六額は文・武・龍・虎・豹・犬の六部に分つ、豹の部が豹額なり。【三九】前軍 前鋒なり、李嗣業が軍をいふ。【四〇】蘇武節 漢の武帝の時、蘇武は匈奴に使し、歸りて典屬國（外國掛り）の官となる、李嗣業が軍、蕃夷の兵を率ゐるを以て蘇武を以て比す、節は使者の持た。【四一】左將 朔方左前兵馬使僕固懷恩をいふ、香積の戦に懷恩は賊を撃ちて略ど之を討滅す。【四二】呂虔刀 晉の呂虔、徐州の刺史として王暉を召して司馬となす、虔佩刀あり、刀工之を相していふ、三公の服すべきものなりと。虔乃ち之を王暉に與ふ。懷恩亦公位に居るべきほどのものなるをいふ。【四三】兵氣 兵は官軍の武器をいふ、兵氣は武器精銳の氣なり。【四四】回飛鳥 回は回遊せしむるをいふ。【四五】威聲 官軍のつよいといふ評判。【四六】沒瓦鼓 沒とは水の底に深くしづんでしまふ。鼙はうみがめ、賊の鼙をたとへていふ。【四七】戈鋌 鋌は小き矛。【四八】血色 刃のいろをいふ。【四九】向秋金 秋老は秋の獸毛、秋は毛すぢほそし、向秋老とはどんな微細なものにも中るをいふ。【五〇】天歩 白華の詩に天步難とみゆ、天の歩みといふは時運といふが如し、國家の運命なり。【五一】懸なんぎ。【五二】時和 四時陰陽の氣よく調和すること。【五三】運更道 そのめぐりあはせにまたあふ。【五四】遺毒孽 遺は「のこす」、殘存すること、毒孽はどく蟲のほり、賊の黨をさしていふ。【五五】沃醜醜 沃とは醜醜をそそぎかけること、醜醜はなまくさきなり、なまくさしとは賊をさす。【五六】夢想 天子のみおほひ。【五七】丹墀 御所のあかすなを敷いた土えん。【五八】神行 天子の行をいふ。【五九】羽衛 羽をかざつたばたましものをたてたてた警衛。【六〇】卒かたし。【六一】花門 回紇をさす。【六二】騰勢よく飛びあがる。【六三】襜褕 造き沙漢。【六四】拓羯 拓を或は拓に作る、拓羯は夷語、戰士の義なりと、これは安西（唐時交河城或は龜茲に都護府を置けり）の兵をさす。【六五】臨洮 甘肅省鞏昌府岷州治。【六六】此輩 花門・拓羯をさす。【六七】恩 唐の天子の恩。【六八】廉俘 つかれたるとりこ、賊中の老幼のとりこをいふ。【六九】操執なり、とらへること。【七〇】鋒先 先は先だちすすむこと、鋒は官軍の銳鋒。【七一】騎突 突は突き出る、騎は官軍の騎兵。【七二】劍吹毛 干將の名劍は吹く毛、遊べる塵を決つといへり。【七三】喜覺、悲憫 喜は都城の人に、悲は子女に屬す、覺と憫とは作者に屬す。【七四】都城勳 都城は長安をいふ。勳はさむぐこと、甚しきをいふ。【七五】子女雛 男子女兒等の泣きさげふこと、こればなかに戦死者の家族あるをいふ、但し此句は客にして喜覺の句が主なり。【七六】飯餉 かんざし、うでかさり。【七七】只待 ただまつ。【七八】獻 官軍にささげる、たまつる。【七九】香醪 かんばしきさけ、香を一に春に作る。

【題義】官軍が賊軍の居る地へさしかかつて攻めこまうとしてゐることを聞き喜んで作れる詩。至徳二載閏八月、賊、鳳翔に寇す。崔光遠 崔尹、西京留守探訪使たり、が行軍司馬王伯倫等衆を率ひて賊をふせぎ、勝に乗じて中渭橋を攻め、追撃して苑門に至る。賊の大軍、武功に屯せしもの營を焼いて去る。九月丁亥、廣平王、朔方等の軍及び回紇、西域の衆十五萬に將として鳳翔を發し、壬寅長安城西に至り、賊將安守忠等と香積寺の北、灑水の東に戦ふ。賊大に敗る。首を斬ること六萬。賊の帥張通備、京城

を棄てて陝郡に走る。癸卯、王の大軍京師に入る。甲辰、捷書、鳳翔に至る。以上は當時の前後の事實なるが、此詩は官軍の形勢益々賊軍を壓迫して長安附近に至りしことをききて作れるならん。

【詩意】胡賊の騎隊等は都近くの縣にもぐりこみ、官軍は賊の據つた壘壁をわがものとしてゐる。賊の境遇は鼎のなかに煮られかけてゐる魚がいきをふくだけの猶豫をあたへられてゐる様である、また穴のなかの蟻でどこへ逃げやうとおもつてゐるか、とてもにげられはすまい。いま鳳翔の行在所のかりこんでんでは玄冕をつけた公卿がたがならんでをり、軍門には援助に来てくれた回紇兵の白衣がたりわたつてゐる。都近くの山山は我君の行幸の御警蹕あるべきすぢみちに當つてゐるし、都の御苑も官軍の旗のたてらるる範圍内にはひらうとしてゐる。さしてゆく路には羊腸の險阻もなくつて平な道がひらかれ、御行列にはただ雉尾扇の雲が高く横はるであらう。五原もいたづらに壘壁のこり、八水も風濤がすつかりなくなつてしまふ。今日天のころをみるにしばしのあひだふらふらした魂を汝等(賊)にかけてあるのである。いまさら降参をたのんでもできるわけではないし、なにか詐りごとをしてこちらをだまさうとしてもそれはむだ骨折ではなからうか。天下兵馬大元帥の職はかたじけなくも皇族のお方(廣平王(假))に歸したし、司空(郭子儀)はその副となつて豹韜の軍略をにぎつてをられる。前軍の長(李嗣業)は蘇武の如き節をもち、左將(僕固懷恩)は呂虔の如き刀を佩びてゐる。我が官軍の武器のいかめしさには飛ぶ鳥もおそれてそこから避けて方向を轉するし、官軍の威名は大

なうみがめ(賊のかしら)を水底に沈ませることができぬ。官軍の戈や小矛は雪の様な白い刃をあらはし、弓や矢はどんなけすちほどのものに向つてもよく射あてる。圖運の艱難もやつとこれできぬなり、陰陽二氣の調和する時運にもいちどであはうとしてゐる。毒や蟲の針のやうなわるものどもがまだのこつてゐるとだれがいふか、そんなものはのこらない。もはやなまくさい悪氣にはすつかり熱湯をかけてあらひきよめた様なものだ。我が君のおん考へでは、まもなく御所の丹墀のそばにかへれるとおぼされ、その行幸のときには御警衛の行列がたくお守りをするとかんがへられる。遠い沙漠に飛騰してゐる回紇、臨洮をわたつて来た安西の拓羯、彼等はいづれも我が君のご恩に感じて援兵にやつて来てゐるのだ、賊黨の強いやつ等を退治すればそれでよいのでんで老幼ごときつかれたとりこ人などをとらへる必要があらうか。味方の前鋒はまつさきかけて戦衣は血にそまり、味方の騎隊は突出してそのふりかざす劔は吹く毛をきりたつばかりきれあちがよい。かかるありさまだから、戦死者の遺族たる子女等が悲しんで號ぶのはきのどくであるが、都城の人大體は大喜びでその喜びのため溝城ゆるぐかと覺ゆるのである。どの家もどの家も婦人たちが釵や劔を賣つて、それで買つた香のいい酒を官軍がはひつて来たらささげてやらうと待つばかりである。



收京三首

京を收む三首

仙仗離丹極 妖星照玉除

仙仗丹極を離れ、妖星玉除を照らす。

須爲下殿走 不可好樓居

須らく下殿の走を爲すべし、樓居を好む可らず。

暫屈汾陽駕 聊飛燕將書

暫らく汾陽の駕を屈す、聊か飛ばす燕將の書。

依然七廟略 更與萬方初

依然たり七廟の略、更に萬方と初めむ。

【字解】〔一〕仙仗 天子の儀仗、仙の字は天子をさす、仗は儀仗のとき執りてならぶたさしもの類。〔二〕離 去てんから離れ去ること。〔三〕丹極 去てんをいふ、丹は宮廷に丹泥をぬるを以ていふ、極は蓋し中樞の義、天子の位居をいふ、此句は上皇(玄宗)についていふ。〔四〕妖星 不祥の星、凡二十一種あり。〔五〕玉除 除は土えん、階下をいふ、玉はうつくしきこと、此句は安祿山についていふ。〔六〕下殿走 誰に與悉(星名)入南斗、天子下殿走といへり、曠の武帝之により跳足にて殿より下りて之を顧ひたりといふ。〔七〕好樓居 「漢書武帝紀に公孫卿が曰く、仙人好樓居」と、此詩句は玄宗と楊貴妃とのことをいふ。〔八〕燕將 莊子に生活は仙人樓居の生活のことし。〔九〕暫屈 屈とは地位高きものが身をかがめて卑きことを爲すをいふ。〔十〕汾陽 莊子に魏が四子を襄姑射の山、汾水の間に見、實然として其の天下を與へりとの話あり、玄宗の對へ出奔せしことを魏が有道の人を見るため汾陽へゆきしことを以てたとへていふ。〔十一〕燕將書 燕將を降参させる手紙をいふ。曠國の野、燕の將、聊城を攻め下して之を守り、田單之を攻むるも下す能はず、魯仲連矢に書をくくりて之を城中に射こみたるに燕將感じ故いて自殺せり、これは官軍より賊將を降らしむるの書をとばすをいふ。〔十二〕依然 しっかりとほり。〔十三〕七廟略 天子は七廟を置く、古昔は廟にて國家の大事についての謀略を定む、故に國謀を廟略といふ。〔十四〕萬方 天下四方といふも同じ。〔十五〕初 更始の義、これまでとはやりかたをなかへてあたらしくはじむるをいふ。

【題義】官軍の手に長安をとりこみたるにつけて作る。肅宗は至徳元載七月十三日甲子に靈武に於て即位し、制書を以て大赦す。二載十月十九日長安に還る。十月二十八日壬申、丹鳳樓に出御してまた制を下す。制書の下ること前後二回なり、故に詩中に「又下」の語あり。又、生意甘衰白、天涯正寂寥の句によれば作者は鄭州の家に在りて詔を聞くなり。製作時は至徳二載十月末か、十一月初の作。【詩意】妖星の光りが御殿の土えんを照らし、(即ち安祿山等の兵氣が盛なりしたために)儀仗が御所から離れられる様になつた。(上皇玄宗はおにげになつた)かかる際には天子たるものは梁の武帝がした様に御殿からおりてはだして走るといふ風にあるべきであつて、仙人めいて二階住居を好んでゐるといふ風であつてはならぬ。上皇が堯の様に汾陽の駕を屈せられたとてそれは暫時のことであるし、また燕將ともいふべき賊軍の將を降す矢ふみはすこしは發せられてゐることでもある。(やがて天下も平定するであらう)幸にも我が大唐の廟略は依然として存在してゐる。天子は今後は天下四方とも従前のしかたをやりなほす様しなければならぬ。

〔一〕

〔二〕

生意甘衰白 天涯正寂寥

生意衰白を甘んず、天涯正に寂寥。

忽聞哀痛詔 又下聖明朝

忽ち聞く哀痛の詔、又聖明の朝より下るを。

羽翼懷商老、文思憶帝堯、羽翼商老を懐ひ、文思帝堯を憶ふ。  
叨逢罪己日、灑涕望青霄、叨りに己を罪するの日に逢ひ、涕を灑ぎて青霄を望む。

【字解】 ① 生童、いきてゐるこゝろのなか。 ② 衰白、老衰して頭髮の白きこと。 ③ 天涯、天のはて、鄭州はあなかつふ長安よりみて天のはてなり。 ④ 哀痛詔、天子が自らをいたまらるみことなり。 ⑤ 又下、又とは一回にあらぬをいふ。 ⑥ 羽翼、商老は商山の四皓（四人の老人）なり、漢の高祖のとき張良が計にて老人山より出て來りて高祖の太子の輔佐となれり、羽翼とは輔佐となるをいふ、詩意は李泌が廣平王假の輔佐たらんことをおもふをいふ。 ⑦ 文思、《魏典》の序に見ゆ、智、天地を思録するに足るを文といひ、智の深きを思といふ、楚の屈をのべし辭なり。 ⑧ 帝堯、玄宗をいふ。 ⑨ 叨、みだりに、謙遜の辭。 ⑩ 罪己、天子が自己を罪せらるること、自分がわるかつたと仰せらるるなり。 ⑪ 灑涕、涕は鼻水。 ⑫ 青霄、あなぞら。長安の天をいふ。

【詩意】 自分は生きつつ老衰の境を甘んじて天のはてにさびしくくらしめてゐる。このときにはかに我が君の自己をおいたみになる詔が朝廷からまたくだつたことを耳にする。それにつけて四皓の様な人が皇子（廣平王）を輔佐してくれたならばとおもうたり、文思の徳のあらせられた帝堯（玄宗）のこゝなどをおもふのである。自分はおもつたもなく我が君が自己を罪せらるるといふ様な時にであうてなみだをそそぎながら都のそらながめるのである。

〔一〕

〔三〕

汗馬收宮闕、春城鏖賊壕、汗馬宮闕を收め、春城賊壕を鏖むとす。  
賞應歌林杜、歸及薦櫻桃、賞は應に林杜を歌ふなるべし、歸るは櫻桃を薦むるに及  
雜虜橫戈數、功臣甲第高、雜虜戈を横ふること數なり、功臣甲第高し。 ばむ。  
萬方頻送喜、無乃聖躬勞、萬方頻に喜を送る、乃ち聖躬の勞するなる無からむや。

【字解】 ① 汗馬、馬にあせなかがす、馬を勞せしこと。 ② 宮闕、長安の宮殿。 ③ 春城、明春の長安城。 ④ 鏖、けつりて平にする。 ⑤ 賊壕、賊が防禦に掘り置きし「ほり」。 ⑥ 林杜、詩經に見ゆる詩經の名、凱旋する將帥をねぎらふ作なり。 ⑦ 歸、王師の都へもどること。 ⑧ 薦櫻桃、禮記「月令」に天子が仲夏の月に食糧を庭前にすすむることを記せり、食糧・櫻桃は同物にて「さくらんぼ」なり、これはその時節をいふ。 ⑨ 雜虜、同前諸蕃の官軍を助けしものをいふ。 ⑩ 横戈、ほしいまに戈をふるふ、武威をかりてゐるをいふ。 ⑪ 數、しばしば。 ⑫ 功臣、功臣軍功ある武臣。 ⑬ 甲第、天子から功臣に賜はる第一等の第宅、第宅に甲乙の次第あるなり。 ⑭ 送喜、中央へおめでたいといひおくる。 ⑮ 無乃、反語なり、ではなからうか、だらう。 ⑯ 聖躬、天子のおからだ。

【詩意】 兵馬の力で長安の宮闕を回收した。明春にはこれまであつた賊軍の窟をなくしてしまふであらう、官軍將士の凱旋するとき之を賞するには「林杜」の詩篇でも歌ふことであらうし、そのかへりつくのは宗廟に「さくらんぼ」を供へる仲夏のころであらう。これまでさまさまのえびすたちが武威をかさにきてゐばつたし、功臣も論功行賞で高大な第宅を賜はつた。これからそんなことがくせ

になりはしないか。いま四方からしきりに喜びをいひやるけれども我が君におかせられては將來のこ

とをおかんがへになつて却つてごじしん御勞苦をあそばされてをるのではあるまいか。  
【餘論】右作者在鄭州の作とみたるを以て「春城」の句豫擬の言として解きたり、若し此作乾元元年春の作ならんには實事となる。

送鄭十八虔貶台州司戶傷其臨老陷賊之故

闕爲面別情見於詩

鄭十八虔が台州の司戶に貶せらるるを送る、其の老に臨み賊に陥るの故を傷み、面別を爲すことを闕く、情詩に見ゆ

鄭公樛散鬢成絲、鄭公樛散鬢絲を成す、

酒後常稱老畫師、酒後常に稱す老畫師と。

萬里傷心嚴譴日、萬里心を傷ましむ嚴譴の日、

百年垂死中興時、百年死に垂とす中興の時、

蒼惶已就長途往、蒼惶已に長途の往に就く、

【字解】「樛」鄭虔、已に前に見

ゆる。「散」髪により官をおとさ

れる。「老」台州司戶、台州は今の

浙江省台州府、司戶は司戸參軍なり。

「嚴」嚴老陷賊、老年になりて賊軍の中へおちこみその偽官を受けし事、

邂逅無端出餞遲、邂逅無端無く出餞遅し。

便與先生應永訣、便ち先生と應に永訣するなるべし、

九重泉路盡交期、九重の泉路盡く交期。

かされて賊より水部郎中の官を授けられたり、至徳二載十二月に賊に陥りし官は六等に分ちて罪を定む。虔は死刑たるべかりしを權國といふもの救ひにより貶官にせられたり。

【一】故 事のわけないふ、虔は賊に陥り官を授けられしも風疾(ふうしき)にかこつけ市の役人となり潛に賊情を朝廷へ報知せし等の事あり。【二】面別 直接對面して別れをする。【三】樛散 樛は、莊子と逍遙遊篇に、散木は同書人間世篇に見ゆ、樛は無用の大木の名、散木とは不材のためうちすてある木をいふ。こゝは老朽無用の地にあるをいふ。【四】成絲 しがのほつれしさをいふ。【五】酒後 酒のみしの際後をいふ。【六】稱 虔が自らいふ。【七】老畫師 虔は時畫畫を善くし玄宗之を三絶とほめられしほどの人。【八】萬里 台州まで遠ければいふ。【九】傷心 作者が心をいためること、詩題の傷其云々の傷と同じ。【一〇】嚴譴日 きびしきおしかりを受けし時。【一一】百年 人の一生をいふ。【一二】垂死 虔が死にちかづきつあること。【一三】中興時 肅宗賊を逐ひばらひ、帝都をとりしとされし時節。【一四】畫師 虔を或は實に作る。蒼黃、倉皇ともにあわだちし貌。【一五】長途往 長き旅程へとでかける。【一六】邂逅 であふこと。【一七】無端 無由とおなじ、邂逅無端は無由邂逅の意、王慎中は此句を不成語と評したれども必しも然らず。【一八】出餞送 餞は「はなむけ」、みおくること。遅は時間がおそすぎること。此の三字は上の邂逅無端の原因を説く、ただ詩句は「遅かつたためあへぬ」というてあるも、事實は情に忍びずわざと見送りにゆかざりしことは題下の文に見ゆるとほりなり。【一九】便 すなはち。【二〇】先生 虔をさす。【二一】應永訣 應の字推量の辭、永訣は死にわかれをいふ。【二二】九重泉路 幾層もの泉下、冥途をいふ。【二三】交期 交情の期する所の地なるをいふ。

【題義】鄭虔が台州の司戸參軍に貶せられてゆくのを送る詩である。虔が老境になつて賊軍に陥るに至つた次第をきのおもひ自分をはかかに面會して別れを告げることをしてしないのだ、自分のこころ

もちはこの詩のなかにあらはしてある。至徳二載十二月、作者已に長安に在りての作なるべし。

【詩意】鄭公は老朽無用の地に居られてその鬢毛はほつれて絲のごとく、酒をのみて後はいつとも自分は老いたる畫かきにすぎぬというてをられた。この二匹殿前を蒙つて遠き萬里の地へながされるといふは實にお氣のどくで吾が心をいたましめる、この聖天子の中興せられたためたい時節に公の生涯は死になんなんとしてゐるのである。自分はお見送りにすることが遅かつたため自然におあひするにも由が無く、公はもはや長き旅程に就いてしまはれた。このわかれでこれが先生との永久のおわかれとなるのであらうかとおもふが、先生と自分と交情相期するの地はこの現世かぎりではない九重の黃泉の下もまたその地である。

臘日

臘日常年暖尚遙  
今年臘日凍全消  
侵陵雪色還萱草  
漏洩春光有柳條

臘日常年暖尚遙かなり、  
今年臘日凍全く消す。  
雪色を侵陵するも還た萱草、  
春光を漏洩するは柳條有り。

【字解】【一】常年 平生の年。  
【二】遙 それまでに距離がある。  
【三】凍 水のごほること。  
【四】侵 陵をかししのご、まけすうちかつこと。  
【五】還 また、萱草もまたの義。  
【六】萱草 うきわすれぐさ、くわんさう。  
【七】漏洩 もらす。

縱酒欲謀良夜醉  
還家初散紫宸朝  
口脂面藥隨恩澤  
翠管銀罌下九霄

縱酒謀らむと欲す良夜の酔、  
還家初めて散す紫宸の朝。  
口脂面藥恩澤に隨ふ、  
翠管銀罌九霄より下る。

の名、朝は朝廷の集りをいふ、作者左拾遺の官なれば參朝するなり。【一】口脂面藥 口につけるあぶら、顔面にのるくすり、これは凍傷を防ぐものとみゆ。【二】還 歸したがふ、まにまにといふこと。【三】恩澤 天子のおめぐみ。【四】翠管銀罌 翠管は翠色で飾りし象牙の筒、これは口脂を盛るものならん、銀罌はぎんのかめ、これは面藥を盛るものならん。【五】九霄 九重のあなぞら、宮中をさしていふ、酩酊の句以下は側後法を用ふ。

【題義】唐は大寒の後の辰の日を臘日とす、日は時代により同じからず。もと臘により獸を取りて先祖を祭るより起るといへり。此日官民ともに宴飲あり、唐の宮廷にては近臣に食、物品を賜ふ。作者は至徳二年十二月己に長安に還りて此日にあひ賜物をうけしによりて此詩を作る。

【詩意】いつもの臘日は暖かきまでになかなか遠いのだが、ことしの臘日はすつかりこほりがきえうせてしまつた。すなはち萱草までもが雪の色を侵してあらはれいで、柳のこえだのめぐみが春の光りをもたらしてゐる。自分はやつといましがた紫宸殿の朝參から退散して自宅へもどつたのだが十分さま

まに酒をのんでひとつ今夜の酔をとる工夫をしやうとおもふ。我が君のおめぐみのまにまに口脂面藥を翠管銀鬚にいられて九重の高きそらから賜物さへさがつたことでもあるし。

奉和買至舍人早朝大明宮

買至舍人が早めて大明宮に朝するを和し奉る

五夜漏聲催曉箭。五夜の漏聲曉箭を催す、  
九重春色醉仙桃。九重の春色仙桃酔ふ。  
旌旗日暖龍蛇動。旌旗日暖かにして龍蛇動き、  
宮殿風微燕雀高。宮殿風微にして燕雀高し。  
朝罷香煙滿袖。朝罷みて香煙滿へて袖に滿つ、  
詩成珠玉在揮毫。詩成りて珠玉揮毫に在り。  
欲知世掌絲綸美。世、絲綸を掌るの美を知らむと欲せば、  
池上于今有鳳毛。池上今に于て鳳毛有り。

【字解】 和 他人の作りし詩に就て我が意をのべて作ること。

【買至】 買至の子なり、曾は貴雲中に中書舍人たりし人なり、至は字は幼鄭、玄宗が蜀に奔りしとき之に従ひ起居舍人・知制誥を拜命す。玄宗が肅宗に位を傳へらるるとき書文は至が之を撰したり、玄宗は、昔先天の壽命は汝の父之を爲りしに今この書文を汝又之を爲るは美を濟すといふべしといはれたりと、至はさらに中書舍人となる。【早朝】

元日の朝早く朝廷へ参賀にでること。【大明宮】 唐の長安城には三箇の大内あり、西なるを太極宮、これを西内といふ、その東なるを大明宮、これを東内といふ、又東南に興慶宮あり、之を南内といふ。大明宮は最もしばしば朝を受くる處なり。【五夜】 夜の時間を甲乙丙丁戊の五つに分つ。【漏聲】 水時計の水のしたるおと。【曉箭】 水時計に鑄金の人形を作りその人物は左手に箭を抱き右手にて刻をさし示す様にしかけてある、箭は今の針の用をなす。【九重春色】 禁中のはるげしき。【醉仙桃】 諸家の解一ならず、蓋し曙色の紅なるを形容していへるものならん。仙桃の紅なること酔へるが如しの意にて之を用ひてまた春色をたとへたり。【旌旗】 旌は鳥の羽をばさばさにして頭に飾りにつけたるはた、旗は龍を交又して畫きたるはた。【龍蛇】 はたの模様なり。【燕雀】 燕雀は鳥の羽をばさばさにして頭に飾りにつけたるはた、旗は龍を交又して香のけむり。【揮毫】 揮毫は筆をふるふこと。【世掌】 世掌、代つかさどる、父子二代をさす。【絲綸】 王の首即ち詔敕をいふ。「禮記」緇衣に王言如絲、其出如綸、王言如綸、其出如綸とあり、綸はよりいと、絲はなほしなり、王の言は出だした所は細くても下へ傳はるにつれて大となるをいふ。【池上】 池は鳳凰池をいふ、中書省にある池、買至が原作に「鳳池」の語あり。【鳳毛】 昔の祖溫、王勳がその父王導に似たるを見て之を有鳳毛と評し、宋の孝武帝が謝鳳の子超宗の文才あるを稱して超宗殊有鳳毛といへる、鳳凰の如き羽毛あるをいふ、この詩句は買至を比す。

【題義】 中書舍人たる買至が作った「早朝大明宮」の詩を和した作。乾元元年の春左拾遺として長安にありて作る。

【詩意】 夜の水どけいのしたたりのおとがだんだん曉の時刻にちかづいてきて、九重の禁中の春の曙の色が桃の花の紅の酔へるが如きさまになつた。(このとき参内してみると)日光暖かになつてたてられた旌旗には龍蛇のすがたが動いてゐるし、宏壯な宮殿ののきばには風かすかに吹いて燕や雀が高

くとんでゐる。このとき買舎人はもはや朝廷の参賀もすんで殿中の香煙をそのまま袖にたづさへて戻り來り、できた詩を筆をふるうてかきつけると珠玉のやうなりつばなものができあがつてゐる。なるほど君の御家は代詔敎を起草するのであつてその世襲がいかにみごとであるかを知りたいとおもふならば現に今も鳳凰池上に鳳毛とも評すべき君が居らるるのをみればわかることである。

【餘論】左に買至の原作と同時諸人の和作とを附記す。

早朝大明宮呈兩省僚友

買至

銀燭朝天紫陌長、禁城春色曉蒼蒼。千條弱柳垂青瑣，百轉流鶯遶建章。劍佩聲隨玉墀步，衣冠身惹御爐香。共沐恩波鳳池裏，朝朝染翰侍君王。

和前

王維

絳幘雞人報曉籌，尚衣方進翠雲裘。九天闔闔宮殿開，萬國衣冠拜冕旒。日色纔臨仙掌動，香煙欲傍衞龍浮。朝罷須裁五色詔，佩聲歸向鳳池頭。

和前

岑參

雞鳴紫陌曙光寒，鴉嚙皇州春色闌。金闕曉鐘開萬戶，玉階仙仗擁千官。花迎劍佩星初落，柳拂旌旗露未乾。獨有鳳凰池上客，陽春一曲和皆難。

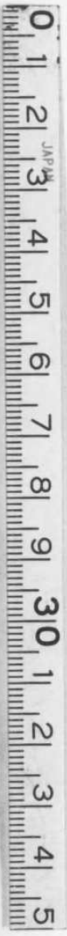
終

續國譯漢文大成

文學部 十六

309  
65

映  
入



始





續國譯漢文大成

文學部第十六册 (第四帙の四)  
杜少陵詩集 上の四

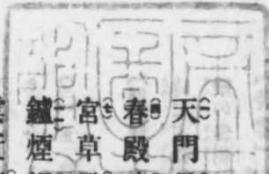
吉田持郎氏

寄贈本



杜少陵詩集 卷六

宣政殿退朝晚出左掖



天門日射黃金勝  
春殿晴曛赤羽旗  
宮草霏霏承委珮  
鐘煙細細駐游絲  
雲近蓬萊常五色  
雪殘鳩鵲亦多時  
侍臣緩步歸青瑣  
退食從容出每遲

宣政殿より退朝して、晩に左掖より出づ  
天門日は射る黄金の勝、  
春殿晴曛す赤羽の旗、  
宮草霏霏として委珮を承け、  
鐘煙細細として游絲を駐む。  
雲蓬萊に近うして常に五色、  
雪鳩鵲に残るも亦多時。  
侍臣緩歩して青瑣に歸る、  
退食從容として出づる毎に遲し。

宣政殿退朝晚出左掖

【字解】 ① 天門 宮殿の門。  
② 日射 日は夕日のひかりをいふ。  
③ 黃金勝 こがねを以て飾りし扇帳。  
④ 春殿 春のなりのごてん、宣政殿をさす。  
⑤ 晴曛 はれてはるがすこしくらくなりかけてある、題の「晩」の字をあらはす。  
⑥ 赤羽旗 赤羽鳥（朱雀）をよびがきたる旗。  
⑦ 宮草 宮殿にはえてある草。  
⑧ 霏霏 こまかき水蒸氣のとぶ貌、元來煙雨を形容する辭なり、こは露氣のさまをいへるか。一に微微に作る、それは幽静なる貌、草色をいふ。  
⑨ 委珮 承草がそれを受ける。  
⑩ 青瑣

宣政殿退朝晚出左掖

東はわびもの、委は地につくこと。【一】舖物、香爐のけむり、これ恐らくは殿庭にあるものなるべし。【二】細細、ほそほそ。【三】駐游絲、駐はとどむ、游絲は「いとゆふ」、「かげろふ」なり、駐の字「游絲ニ駐マル」と自動にみれば煙がそこにとどまるなり、游絲ヲ駐ム」と他動に分れば煙が游絲をおさへつけておくなり。兩義並に通ずるも余は後解なとれり。舊説は駐游絲とし「游絲のごとく駐まる」又は「游絲の駐まることし」として之を煙の形容とみたり、是は蓋し香爐を殿中にあるものとみなしたるに由る、余は香爐を殿庭にありとみる、故に游絲は實物とみなす。【四】蓬萊、殿の名。【五】翔鶴、漢の時の製の名、今借用す。【六】侍臣、天子のおそばに仕ふる臣、作者左拾遺なれば自らをいふ。【七】鶴歩、ゆるゆるとあるく。【八】青瑣、鎖形に聯類をほどこし青色にありたる門、門下省の門をさす。【九】退食、「嘉平」詩にみゆ、公の門より退きて食事するをいふ。【一〇】從容、ゆつたり。【一一】出、退出する。【一二】毎、毎時、いつも。

【題義】宣政殿は東内に屬し、含元殿の後(北)に在り。左掖とは左(東)側の小垣門をいふ、作者時に左拾遺の官にあり、門下省に屬す、門下省は東内の東に在るを以て左垣門よりいづるなり。宣政殿の參朝から退きて、夕方に左垣門を出て門下省の方へかへらうとしたときの作。

【詩意】宮殿の門では夕日のひかりが黄金の額を射、春のごてんの庭では朱雀を思がいた旗が晴れてはゐるが夕ぐれの色をにははせつつある。このとき自分が玉璣をひきすつて來ると庭の草は露氣を含みながらそれをうけ、香爐の煙はいとゆふのうへを重く壓してほそほそとのぼつてゐる。このあたりを浮んでゐる雲は蓬萊宮に近いからいつも五色のいろをしてゐるし、鷓鴣観かとおほゆる建物にはすゐふんながく雪が残つてゐる。かくして自分はゆつくりとあるいて青瑣門の方へ歸るのだが、自分の

詰め所へまかりさがるには、今日にはじめすいつもゆつたりとして時刻おくれ退出するのである。【餘論】舊解に此篇の前の四句外部より内部に、また早朝以來のさまをのぶとなすものあり。余はすべて退出時のさまとみることに上述の如し。

紫宸殿退朝口號

戸外昭容紫袖垂

紫宸殿より退朝するとき口號  
戸外の昭容紫袖垂る、

雙瞻御座引朝儀

御座を雙瞻して朝儀を引く。

香飄合殿春風轉

香飄りて合殿春風轉じ、

花覆千官淑景移

花千官を覆ひて淑景移る。

晝漏稀聞高閣報

晝漏聞ゆる稀にして高閣報じ、

天顏有喜近臣知

天顏喜び有つて近臣知る。

宮中每出歸東省

宮中より毎に出でて東省に歸る、

會送夔龍集鳳池

會送す夔龍の鳳池に集まるを。

の姿勢をとる。【七】香飄、香は花香。

【八】合殿、殿庭なり、殿内全體をいふ。

【九】轉、

吹き轉ずること。【一〇】花覆、花は殿

【字解】【一】戸外、殿の戸のそと。【二】昭容、女官の階級の名、正二品の位なり。【三】紫袖垂、むらさきの袖をながくたれる。【四】雙瞻、ならびみる、左右の各列から昭容が御座へ目をつけること、昭容は左右各一人、文武の兩班の羣臣を前導して殿内に入る。【五】御座、天子の座。【六】引朝儀、引はみちびくこと、朝儀は參朝の儀列をいふ。昭容が前導するとき羣臣に面してあとさりしつ御座の方へと進むといへり。然らば御座への注目には少しく上體を斜にし半ばうしろむきの

庭の花、覆はおほふ、實際おほふにはあらず、附近に多く映く故かくいふ。【一】淑景移 淑景はよき日かげ、春日の光をいふ、移とは時相のかはること、殿中奉對のため時間のたつないふ。【二】畫福 福の福刻、みづどけい。【三】高閣報 高閣より報知し來る、外庭の高閣に於て宮女之を奉りて刺を報ずといへり。【四】天眞 天子のおかほ。【五】近臣 近侍の臣、ひろくいふ、但し作者左拾遺にてその一人なり。【六】宮中每出 每出宮中としてみるべし、この毎の字、歸の字までへかかる。出は退出。【七】東省 門下省をなす。【八】會送 同僚相會して送る。【九】雙龍 舞の時の臣、雙は音楽を典り、龍は民言を君に納ることを掌る、こは唐の大匡宰相なす。【十】集 舊説に作者等が集まるととく、今從はず、これは雙龍等が集まるをいふ。【十一】風池 中書省にある池をいふ、晉の荀勗が故事にて、扇、中書省を翻めしとき等、我風風池といひしによる。このとき唐の政事堂は中書省にあり、故に宰相等そこに集まるなり、而して作者等自己の本省にかへらんとしてその人人を會送するなり。

【題義】紫宸殿も東内に屬す。南より北へ順次に含元殿・宣政殿・紫宸殿あり。宣政は前殿にして紫宸は便殿なり。口號とは口づから吟ずること。此詩は紫宸殿へ朝して、それより退出するとき口ずさめる作なり。乾元元年 左拾遺たりしときの作。

【詩意】戸の外では女官の昭容が紫色の袖を垂れて、左右にわかれて各殿内の御座の方へ目をくれつつ班列をみちびき入れる。殿内には春風に吹きまはされてくまなく香氣がひるがへり、むらがる羣臣のうへに花影を被らしめつつ春の日あしはうつる。殿内におくふかく漏刻の音も聞えぬため外庭の高き閣から時間を知らせてくる。この日は君の御顔もにこやかに御機嫌うるはしきこと近侍の臣の知るとはりである。自分はいつものごとでんから退出して東の方、門下省の方へかへるので、そのときは

ついでに大臣がたが中書省の方へお集まりになるのをうちごらうてお見送りするのである。

春宿左省

春左省に宿す

花隱掖垣暮 啾啾棲鳥過  
星臨萬戶動 月傍九霄多  
不寢聽金鑰 因風想玉珂  
明朝封事數 問夜如何

花に隠れて掖垣暮る、啾啾として棲鳥過ぐ。  
星は萬戸に臨みて動き、月は九霄に傍ひて多し。  
寝ねずして金鑰を聴き、風に因りて玉珂を想ふ。  
明朝封事有り、數問ふ夜如何と。

【字解】【一】花隱 隱はその形のみえなくなること。【二】掖垣 宮側のかき。【三】啾啾 鳥のなくさま。【四】棲鳥 ねぐらにとまらんとする鳥。【五】星 星光をいふ。【六】萬戸 宮殿の多くの戸。【七】月 月光をいふ。【八】傍 そふ、近づく意。【九】九霄 二のへのそら、宮中の天をいふ。【十】金鑰 鑰は錠前のさしこみのかき、之なさいれいてあける。【十一】因風 風が河原をつたへ來らんことを想ふ。【十二】玉珂 珂は貝の類もつくれる馬の飾、その數は官位によりて等數あり、これは玉珂とあれば玉にてつくれるならん、他の臣僚についていふ。【十三】封事 囊に取めた密封の上書なり、作者左拾遺にて大事は延にて陳請し、小事には封事をたてまつる。【十四】數 しばしば。【十五】夜如何 夜の時刻いかに、天明くるや否やなきづかふなり。

【題義】左省は東省、即ち門下省なり。春、門下省にとまりばんをした時作る、前詩同年の作。

【詩意】宮殿のそばのかきが花にかくれて暮れてしまひ、ねぐらにすむ鳥がちやくやとないてすぎゆ

く。それから星の光は宮殿の多くの戸ごとに向つてりだし、月の光は九重のそらちかければことき  
ら多きこちす。寝ねもやらずしてかぎにて門をあけるおとをきき、風のふくままに早朝の人人が玉  
珂を鳴らしてきはせぬかと想像す。自分にはあすのあさともならば君にたてまつるべき封事があるの  
である、だから夜あけを待ちかねてたびたび夜のさまいかにと他の人にとうてみる。

晚出左掖

晚に左掖より出づ

晝刻傳呼淺春旗簇仗齊

晝刻傳呼淺く、春旗簇仗齊し。

退朝花底散歸院柳邊迷

退朝花底に散じ、歸院柳邊に迷ふ。

樓雪融城濕宮雲去殿低

樓雪融けて城濕ひ、宮雲去りて殿低し。

避人焚諫草騎馬欲雞棲

人を避けて諫草を焚く、馬に騎れば雞棲ならむと欲す。

【字解】 晝刻 晝の水どけいの時間。 傳呼 宮衛のものどもの火の用心とよばはるこみ。 淺 卑の小なるこ  
と、深しといはば大層あげて奥深くまでさしゆる様にするなり、淺はその反對に近くだけさしゆるほどによははる。 春旗 春  
は時を記す、旗は近衛の兵の持する儀仗の旗をいふ、簇仗の仗と同物なり。 騎馬 むらがるさしもの。 雞棲のそら  
ふこと、舊説に、二句は朝参のときのことをいふとなす。 歸院 院は門下省の左拾遺の詰め所をいふ。 樓雪 宮儀の  
雪。 城濕 城は城壁、その樓の基礎の方をいふ。 殿低 雲近きとき殿高くみえしも、雲去りたるのちばひくきがごとく

みゆるなり、此の第五第六の二句は上三字下二字にて文を成す、變態の句なり。 【二】 避人 人のみの様子をさける。 【三】 雞棲  
草 天子をおいさめ申す文章の草稿、詰め所に草稿をのこし置き、他人が君の過失を知らんことを恐るるなり。 【四】 騎馬 會の方  
へかへらんとするなり。 【五】 雞棲 にはとりがねぐらにすまんとする、夕方をいふ。

【題義】 左掖は東内の東側垣門なり、前に見ゆ。此詩は蓋し或日の夕がたこの門より出でて自己の麻  
舎に歸らんとせしことをいへり。

【詩意】 ひるの時刻には宮衛のよばはる聲もはしちかにて儀仗の羽旗をろひてならびたるうちにこて  
んに參朝す。事畢りて朝より退出して花樹の下にて解散し、省中の院に歸らんとして柳樹のあたりに  
さまよふ。みれば宮樓の雪はとけて樓礎の城壁うるほひ、いままでありし雲が消え去りてのちはあり  
しごてんひくくなりしかとおもはる。人のみぬ場所にて諫疏の草稿をやきすて、詰め所のおとがたづ  
けをして、いざとばかり馬に騎りておのが舎に向はうとすればはや雞がねぐらにつかうとする頃で  
ある。

題省中院壁

省中の院壁に題す

掖垣竹埤梧十尋

掖垣の竹埤梧十尋、

洞門對霤常陰陰

洞門對霤常に陰陰。

晚出左掖 題省中院壁

【字解】 掖垣 宮側のかき。

【二】 竹埤 竹にて圍みたるひくき  
かきね。 【三】 梧 あまぎり。 【四】  
尋 八尺。 【五】 洞門 門と門と

落花遊絲白日靜

落花遊絲白日靜かに、

鳴鳩乳燕青春深

鳴鳩乳燕青春深し。

腐儒衰晚謬通籍

腐儒衰晚謬つて籍を通ず、

退食遲廻遠寸心

退食遲廻遠寸心遠ふ。

衰職曾無一字補

衰職曾一字の補無し、

許身愧比雙南金

身を許す愧づらくは雙南金に比せし。

向ひあひて測の如くなるをいふ、諸院多く相違ればなり。【一】對置。謂は屋根の雨おちのころをいふ、對とは向ふ側とむきあふないふ。【二】陰除。くらつばいさま。【三】遊絲。いとゆるふ。【四】乳燕。子をうみしつばめ。【五】青春。五行の思想にて春の色を青とす。【六】腐儒。自己をさす。【七】衰晚。老衰、晩暮。【八】通籍。禁中へわ

が名ふだを通じおくこと、仕官の義なり。籍とは二尺の竹ふだに年がら姓名その他の様子をかさつけ入門のとき本人と照らしあはす用に供するものなり。【一】退食。已に見ゆ。【二】遲廻。定刻よりおくるをいふ。【三】寸心。他詩に「心事遠」の語あり、同義なり、おもふことかなほぬをいふ。【四】衰職。衰とは老き極のついた衣、天子の禮服、衰職とは天子の職をいふ。「庶民」の時に、衰職有間、維仲山甫補之とみゆ。【五】許身。我と我身にかくかくの資格ありとしてゆるす。【六】愧。作者がはづるなり。【七】雙南金。南金は南方荆州揚州の地に産する金銀の類をさす、雙は一對をいふ、何を單位としていへるか明かならず、或は兩錠（錠は二十四兩）をいふか。

【題義】門下省のなかにある左拾遺の官の役所の壁にかきつけたる詩。前詩同期の作。

【詩意】宮側の垣壁の細竹のかきねに十尋の高い梧桐がはえてをり、院院相違つて洞門をなし、雨お



ちのむきあうてゐる處、いつもくらくつばい。さすがにいま花がはらはらとおちちり、かげろふもえてまひるの日のひかり静かに、鳩が鳴き、燕が子をかへすなど春もいとたけなはである。このとき腐儒たる自分は晩年衰へかけてゐるのに、まちがつて仕官をしたのであり、役所のひげ時にもためらうて他人よりおそくまかりさがるが爲さんとしたことはできず本志はくひちがうてゐる。左拾遺といふ天子をお諫め申す役でありながらまだ一字でも君の御職務の關けた點を補ひたてまつたこともない、これでは以前我と我が身に許して自己を南金の如き貴重なものに比べたことをはづかしくおもふ。

【餘論】此詩獨體として律詩の變格なり。

送賈閣老出汝州

賈閣老が汝州に出づるを送る

西掖梧桐樹空留一院陰

西掖の梧桐樹、空しく留む一院の陰。

艱難歸故里去住損春心

艱難故里に歸る、去住春心損す。

宮殿青門隔雲山紫邏深

宮殿青門隔たる、雲山紫邏深し。

人生五馬貴莫受二毛侵

人生五馬貴し、二毛の侵すを受くる莫れ。

【字解】【一】西掖。中書舍人は中書省に屬し、中書省は東内の西にあり、東内より中書省へ出入する四個の垣を西掖といふ、會送賈閣老出汝州

人の院はそこにあるなり。【一】空。其人をさるゆゑ、空しくといふ。【二】院。院全體、院は舍人の詰所。【三】松。樹。【四】世事のなんぎ。【五】故里。故郷、至の故郷は洛陽なり、そこを離て汝州へ赴く、故に「歸る」といふ、かへりきりにかへるには非ず。【六】去住。去ると、とどまると、去は賈至についていひ、住は自己につきていふ。【七】損。損傷の意。【八】青門。長安城の東、霸城門のこと、此句は至よりいふ。【九】雲山。雲のある山。【一〇】紫雲。山の名、汝州崑崙山にあり、これは作者よりいふ。【一一】五馬貴。五馬は太守の美稱なり。之を五馬といふは郡の太守（長官）は驕馬（四匹の馬）を用ふるも部内をめぐるときは更に一馬を加ふる故なりといひ、また太守、秩中二千石を加へらるるとき（餘だか正味二千石を受く）五馬を用ふる故といひ、また北齊の柳元伯なる者五人の子、同時に郡を領せしよるといふ。【一二】受使。なにかされる。【一三】二毛。黑白二種の毛髮、白髮のふえることはいふ。

【題義】賈は賈至、時に中書舍人たり、閑老とは舍人の年深きものをいふ尊稱とし、或は兩省相呼びていふ稱とす、至をさしていふ。汝州は河南省南陽府に屬す。至は河南洛陽の人なり。此の詩は中書舍人たる賈至が長安から河南の汝州へ刺史として出かけるのを送るために作る。乾元元年春の作。【詩意】中書省の垣門のそばの梧桐の樹。あの樹は君が居なくなつてはいたづらに院内にわたるこかげをとどめてをるばかりである。君はこの世路のなんぎなときに故郷の方へとかへり、いつてしまふ君もとどまつてをる自分もともに春の心をいたむるのである。君からみればこの都の宮殿の方ははるかに青門がへだたつてをり、自分からみれば君の居る紫雲の雲山はおくふかく遠い。人生に於て五馬を用ふるほどの官となれば貴い位置である。どうぞ年よらずにわて白髮なんぞに侵されぬ様にせられたい。

送翰林張司馬南海勒碑 【屢注】相國製文

翰林張司馬が南海に碑を勒するを送る

冠冕通南極 文章落上台

冠冕南極に通ず 文章上台より落つ

詔從三殿去 碑到百蠻開

詔して三殿從り去らしむ 碑は百蠻に到りて開く

野館穠花發 春帆細雨來

野館穠花發き 春帆細雨來らむ

不知滄海使 天遣幾時廻

知らず滄海の使 天幾時か廻らしめむ

【字解】【一】冠冕。唐の文官のかぶる禮冠をいふ。【二】通。交通すること。【三】南極。南のぼて、南海をさす。【四】文章。碑文。【五】落。上國より下國へもちゆくこと。【六】上台。天に上台・中台・下台の六星あり、上台の二星は文昌星に近し、これは宰相の位をいふ、文が宰相の手より成れるを以ていふ。【七】三殿。麟德殿（大明宮中にあり）に三面あるゆゑ之を三殿といふとぞ。【八】百蠻。多種の野蠻人の居る地。【九】開。刻石があらはさるるをいふ。【一〇】野館。原野の旅宿。【一一】穠花。うつくしき花。【一二】春帆。はるの舟。【一三】細雨。こまかなあめ。【一四】滄海。原野の海。【一五】使。使者、張司馬をさす。【一六】天。海路は風波多きゆゑ、かへれると否とは天意による。【一七】遣。して、せしむる。【一八】幾時。いつ。【一九】廻。こちらへもどりくる。

【題義】翰林は翰林院、翰林には司馬の官なし、張司馬は其人詳かならず、南海は廣東地方、勒碑

送翰林張司馬南海勒碑

は石碑に文字をほりつけること。碑文は時の宰相某のつくれるものなり。此詩は翰林の張司馬が南海の地へ碑文をほりてたつるために往くを送るものなり。

【詩意】 堂堂と衣冠をつけた我が唐の文官が南方のはての地と交通して上台の高所からあまくだつた様な碑文をもつてゆく。これは天子の詔によりて殿上からゆかしめられるのであり、君が百蠻の地に著くのを待つてこの石碑がそこにはあらはさるであらう。君が陸路を過ぐるときは野館にうつくしい花などさいてゐるであらうし、また海路をわたるときは、春の帆に向つて細細とした雨がふりそぐことであらう。ただ天は果していつ海上の使者たる君を安穩にかへらせてくれるのであらうか、それは自分のよくわからぬ所である。どうか無事でもどつてくれたまへ。

曲江陪鄭八丈南史飲

曲江にて鄭八丈南史に陪して飲む

雀啄江頭黃柳花。雀は啄む江頭黃柳の花、

鷓鴣瀟湘滿晴沙。鷓鴣瀟湘晴沙に滿つ。

自知白髮非春事。自ら知る白髮春事に非るを、

【字解】 雀、ついでむ。【江頭】 曲江のほとり。【黃柳花】 黄ばわか葉の色をいふ、花は即ち柳葉なり。【鷓鴣】 五位置の類。【瀟湘】 をしどり。【晴沙】 はれたるすなばら。【春事】 「春事に過するものに非るをいふ。

且盡芳樽戀物華。且つ芳樽を盡くして物華を戀ふ。

近侍即今難浪跡。近侍即今跡を浪にし難し、

此身那得更無家。此の身那ぞ更に家無きを得む。

丈人才力猶強健。丈人の才力猶強健なり、

豈傍青門學種瓜。豈青門に傍うて瓜を種うるを學ばむや。

【一】 盡、のみつくす。【二】 芳樽、花樽のさかだる。【三】 物華、景物のばなやかさ。春事といひ物華といふは、上二句の花鳥についての事象をさしていふ。【四】 近侍、天子のおそばちかき地位、左拾遺の職位をさす。【五】 即今、ただいま。【六】 浪跡、仕事をまじめに爲さず

ぶらついてゐること。浪迹していふ。官の職責を十分に盡くさずして俸祿を受くるは浪跡なり、此語によれば作者已に辭官の意あり。【七】 無家、家とは妻子をさす、家無しとは實に之なきに非ず、妻子を安養し得ずして離散にいたるをいふ。【八】 丈人、長者をいふ、都なます。【九】 傍、附近によるをいふ。【一〇】 青門種瓜、秦の東平侯邵平といふもの亂にあひ青門の側に隱居し五色の瓜を種う。青門は前にみえたり。

【題義】 曲江は長安の南にあり、丈は年長者の尊稱、南史は名なるべし、此の詩は曲江にて鄭南史にしたがつて酒をのみて感をのぶ。

【詩意】 雀は江のほとりの柳の花をくちばしでつついて餌をあさり、ごむさぎだの、をしどりだのがたくさんはれた沙はらにゐる。自分は白髪のおぢいさんで春げしきにふさはしからぬことは知つてはをるが、まあまあ花鳥のさまをこひしたうて酒だるのさけをのみはしてゐる。天子のおそばちかく仕



へる地位ではたたいまはさうさうぶらしてゐるわけにはゆかぬし、さりとしてまたこの身にとつてはどうして妻子なしでゐることができやう、妻子もやしなはねばならぬ。(實はこまつたものだ。)之に反してあなた(鄭をさす)なんぞはまだ才も力もつよくすこやかである、どうしてあの隱遁者の邵平のやうに、青門ちかくで五色の瓜をうゑるまねをすることがいりませうぞ。

曲江 二首

曲江 二首

一片花飛減卻春。

一片花飛びて春を減却す、

風飄萬點正愁人。

風萬點を飄へして正に人を愁へしむ。

且看欲盡花經眼。

且つ看る盡きむと欲するの花眼を経るを、

莫厭傷多酒入脣。

厭ふ莫れ多に傷はるるの酒脣に入るを。

江上小堂巢翡翠。

江上の小堂に翡翠巢くひ、

苑邊高塚臥麒麟。

苑邊の高塚に麒麟臥す。

細推物理須行樂。

細に物理を推すに、須く行樂すべし、

何用浮名絆此身。

何ぞ用ひむ浮名此の身を絆すことを。

【字解】 春 春光

花 花

萬點 萬片

人 春世に對する人人。

且看 且つ看る

欲盡 欲するまで

花經眼 散り散りてなくならうとする花。

莫厭 眼が眼前を經過する。

傷多 傷む多し

酒入脣 傷む多し

江上 江の邊

小堂 ちひさな室

巢翡翠 翡翠の巢

苑邊 苑の邊

高塚 高き塚

臥麒麟 麒麟を臥す

細推 細く推す

物理 事物の道理

須行樂 行樂すべし

何用 何ぞ

浮名 虚名

絆此身 此の身を絆す

曲江 曲江

二首 二首

曲江 曲江

二首 二首

曲江 曲江

二首 二首

曲江 曲江

二首 二首

曲江 曲江

二首 二首

曲江 曲江

二首 二首

曲江 曲江

二首 二首

曲江 曲江

二首 二首

曲江 曲江

二首 二首

曲江 曲江

二首 二首

曲江 曲江

二首 二首

曲江 曲江

二首 二首

曲江 曲江

二首 二首

からだを傷害する所の酒。【一】入脣 唇はくちぎるし、入脣は飲むこと。【二】江上 江は曲江。【三】小堂 ちひさな室。【四】翡翠 翡翠。【五】巢 鳥が巢くふとは住む人なきまなり。【六】苑邊 苑は曲江のほとりなる芙蓉苑。【七】高塚 貴人のつか。【八】臥 たふれふす。【九】麒麟 墓道にある石造の置きものなり。【一〇】推物理 事物の道理を推しはかつてみる。【一一】行樂 ぶらぶら同行しつつたのしむ。【一二】何用 無用。【一三】浮名 虚名 虚名 虚名の意、官にありてその職を盡くさすただ官名をになふ、これ實なき名なり。【一四】絆 ほどす、つなぐ。【一五】此身 自己のからだ。

【題義】 曲江にて春のおもひをのぶ。

【詩意】 ひとひらの花が飛びちつてもそれだけ春の光をへらすのだ、まして風が萬片を吹きただよはすに於ては正に之を見る人をして愁へさせるのである。さりながら花の散るのをせきとめておくわけにもゆかず、無くならうとしてゐる花が眼の前をすぎるのをまあまあとながめる、また多くのめばからだをそこなふ酒ではあるがそれを口中へつぎこんでもかまひはせぬ。見よ、江上の人住まぬ家の小さなざしきには「かはせみ」が巢くひ、御苑ちかくの貴人のたかい塚には石の「きりん」がねてゐるではないか。物の道理をこまかにおしはかつてみると人生すべからく行樂すべきものである、このからだを虚名につながれてゐることは無用のことである。

曲江 二首

曲江 二首

朝回日日典春衣。

朝より回りにて日日春衣を典す、

【字解】 朝回 朝起よりかへる

典 質におく。

江頭 江は曲江。

盡醉 十分

每日江頭盡醉歸、酒債尋常行處有、人生七十古來稀、穿花蛺蝶深深見、點水蜻蜓款款飛、傳語風光共流轉、暫時相賞莫相違。

毎日江頭に醉を盡くして歸る。酒債は尋常行處に有り、人生七十古來稀なり。花を穿つての蛺蝶深深として見え、水に點するの蜻蜓款款として飛ぶ。語を傳ふ風光と共に流轉して、暫時相賞せむ相違ふこと莫れしと。

によふ。【一】酒債、飲酒料金の負債。【二】尋常、あたりまへ、めづらしくもなく。【三】行處、でかけてゆく先き先き。【四】人生、(一)句蓋し古詩なり。【五】穿花、穿とは花のしげみを奥ふかくいりこむこと。【六】蛺蝶、てふてふ。【七】點水、おくふかき點。【八】點水、點はばらばらと尻にてたたくさま。【九】蜻蜓、とんぼ。【一〇】款款、緩慢と同じ、ゆるやか。【一一】傳、

【詩意】自分は朝廷からもどると日々に春のきものを質において錢にかへ、曲江のほとりていつも十分の酔をきはめて歸るのである、酒の借金はめづらしいことではなくどこでもゆく先先にあるし、古來七十までいきる人はまれである。(借金があるからきものを質におくのであり、長生きが少いから酔をきはめるのだ。)花の木のまをくぐつてゆくてふは奥深く見えるし、水面にお尻をたたくとんぼ

は緩やかに飛びつつある。いかにも春だ。自分は因つてこの風光にことづてをする、我は汝風光と共にここに徘徊して、しばしその眺めをめぐるから、汝は自分にそむかぬ様にしてもらひたい、と。

【餘論】此詩の尾二句諸解あり、

傳語、豈言同舍郎一乎。(分門集註、草堂詩箋)

右は同儕に傳語すととく、

傳語風光共流轉、傳語時人、使知人生與風光、共爲流轉、難得而易過者也。(邵寶、分類集註)

右は傳語(時人)、(人生)風光共流轉ととく、

共流轉、共字對花蝶等一言。(仇氏詳註)

右は風光が花蝶とともに流轉すととく、

傳語二句、作者寄語風光解、言、爾只管共物情流轉、豈知人生相賞、乃暫時事、爾莫便相違。(浦氏心解)

右は傳語風光、爾風光共(物情)流轉、暫時相賞、(爾)莫(便)相違ととく、

曲江對酒

曲江にて酒に對す

苑外江頭坐不歸、

苑外江頭に坐して歸らず、

【字解】【一】苑、芙蓉苑。【二】曲江、曲江。【三】水精宮殿、水精は水晶なり、水精宮殿とは蓋解に或は

水精宮殿轉霏微、  
 水精の宮殿轉た霏微たり。  
 桃花細逐梨花落、  
 桃花細かに梨花を逐うて落ち、  
 黃鳥時兼白鳥飛、  
 黃鳥時に白鳥と兼に飛ぶ。  
 縱飲久判人共棄、  
 飲を縱にし久しく判して人共に棄つ。  
 懶朝眞與世相違、  
 朝するに懶く眞に世と相違ふ。  
 吏情更覺滄洲遠、  
 吏情更に覺ゆ滄洲の遠きを、  
 老大徒傷未拂衣、  
 老大徒に傷む未だ衣を拂はざるを。

宮殿の水に近きをいふとし、或は大  
 藥園に水精を以て柱となせる宮ある  
 をひきてとく。余は水晶を用ひて飾  
 りし宮殿かとおもふ。【轉】う  
 たた、いよいよ、看る看るうちに  
 よいよなり。【霏微】霏、霧、  
 光掩映の貌とせり、蓋し霏微は水晶  
 のこまかにとぶさまをいひ、こま  
 水晶の光のちらつくさまをいへるな  
 らん。【細】花なる微小物が微  
 小物を逐ふ故に「こまか」といふ。

【題義】元來は「おひばらふ」讀なれども唐時俗用にては「おひすがる」義にも用ふ。遺涼といふべきを逐涼といふは猶是なり、こ  
 も彼の義を用ふ。【△】梨花 諸本「梨花」に作る、仇氏は桃と梨花の時間じからずとて梨花を是とすといへるも然らず、當に  
 「梨花」に従ふべし、梨花は梨に同じ、梨花は柳絮なり。【△】兼、かね、今便宜のため「ともに」と訓す。【△】縱飲、かつてに酒  
 をのむ。【△】判、已に卷三重過何氏詩の第五首に見ゆ。判、辨、辨、みな同義、物を辨ひ棄つることなり、こまは自棄の義に  
 て、すて身、くそやけ、の意。【△】人共棄、世間の人みなともに我をすつ、あひてにせぬをいふ。【△】懶朝、朝廷へ参向する  
 にもうし、病氣缺動をすること。【△】吏情相違、世人とあひそむいてゐること、ひとまじらひをせぬ。【△】吏情、官吏とし  
 てのこころ、作者は現に左拾遺の官たり。【△】更覺、更とは未仕以前に對していふ、これまでよりもつとの義。【△】滄洲、  
 仙樂をいふ。【△】徒、こちらとへだたりがある。【△】老大、自己のとしよりの身なるをいふ。【△】徒傷、むだになしむ

いたむ。【△】拂衣、衣のちりをばらうてこゝを去り滄洲に向ふをいふ。

【題義】曲江のほとりて酒にむかひて作れる詩。前詩同年の作。

【詩意】自分はこの芙蓉苑の外、曲江の頭で合にもどらずちつとすわりこんでながめると、水晶で飾  
 つた宮殿はみればみるほどその光りをちらつかせてゐる。それから落ちちる桃の花は微細にもやなぎ  
 の花のちるあとをおひかけて落ちちるし、黄色の鳥たちは時として白色の鳥たちといつしよに飛んで  
 ゐる。自分はきままに酒をのんでながいあひだくそやけ気分になつてをり、世間の人みながらみはな  
 されてをるし、參朝することがおつくうで實際自分も世の人とは違背してをるのである。官吏として  
 の今のこころもちでは、これまでよりもつと滄洲の仙境とへだたりができた様な気がするのであつ  
 て、老大の身にとつてはいまだに衣を拂うて仙境に向つて去らぬことをいたづらにいたみかなしむの  
 である。

曲江對雨

曲江にて雨に對す

城上春雲覆苑牆、  
 江亭晚色靜年芳、

城上の春雲苑牆を覆ふ、  
 江亭晩色年芳靜かなり。

【字解】

城上、苑中、  
 苑牆、  
 江亭、  
 静、

林花著雨燕支濕、  
水荇牽風翠帶長、  
龍武新軍深駐輦、  
芙蓉別殿漫焚香、  
何時詔此金錢會、  
暫醉佳人錦瑟傍、

林花雨を著けて燕支濕ひ、  
水荇風に牽かれて翠帶長し。  
龍武の新軍に深く輦を駐め、  
芙蓉の別殿に漫に香を焚く。  
何時か詔して此の金錢の會あつて、  
暫く醉はむ佳人錦瑟の傍。

【題義】曲江にて雨に對して作る。蓋し乾元元年三月上巳節の作。  
【詩意】城樓のうへの春の雲が芙蓉苑の土塚におほひかぶさり、自分のやすんでゐる江邊の亭ではあ  
たりが暮れかかつて花や草がしづかによこたはつてゐる。すなはち林の花は雨をつけて「えんじ」色  
【慶宮】に在り出遊せず、故に、深く輦をとどむといふ。南内より曲江まで夾城を築きて往來に便にせしこと已に前に見ゆ。【三】  
芙蓉別殿 芙蓉苑にある離宮。【二】龍武新軍 留守居の宮女などが香を焚く、漫とは玄宗の出遊もなきにいたづらにといふこと。  
【一】龍 肅宗の御命令をいふ。【四】金錢會 上巳節には曲江の山亭にて區僚に宴を賜はることあり、又、承天門に宴して、維興  
として幕下に金錢を撒きて區下をして之を拾はしむることあれば、この金錢會もかかる例ありしことをいふに似たり。【五】佳人  
美人、教坊の伎女をいふ。【六】錦瑟 錦の模様ある瑟。

がうるほひ、水のなかの「あさぎ」は風にひかれて翠色の帯が長くひきはへられてゐる。このとき上  
皇（玄宗）は新に置かれた龍武軍に衛られて興慶宮の奥にふかく輦をとどめられてをり、この芙蓉苑  
の別殿では上皇の出遊もないのにただみだりに香を焚いてお待ちしてゐる。上巳といへば前代（玄宗  
の代）にはさかんなものであつたが、いつ今の天子（肅宗）から仰せごとがでて、金錢を拾はせる様  
の御會を催され、自分も教坊の美人のかなで錦瑟のかたはらで、しばし醉ふことができることであら  
うか。

奉答岑參補闕見贈

岑參補闕が贈らるるに答へ奉る

窈窕清禁闈、罷朝歸不同、  
君隨丞相後、我往日華東、  
冉冉柳枝碧、娟娟花蕊紅、  
故人得佳句、獨贈白頭翁、

窈窕清禁の闈、朝罷みて歸ること同じからず。  
君は丞相の後に隨ひ、我は日華の東に往く。  
冉冉として柳枝碧に、娟娟として花蕊紅なり。  
故人佳句を得、獨り白頭翁に贈る。

【字解】【一】窈窕 おくふかくしづかな貌。【二】清禁 ちり気なき禁中の小門。【三】罷朝 参朝のこと了るをいふ。【四】  
歸 めいめいの院へかへる。【五】丞相 宰相。【六】日華東 日華は門の名、宣政殿の前面に東西兩廡（廡は廊下なり）ありて、  
各一門あり、東なるを日華門といふ、その東は門下竹なり、之を左省といふ、即ち作者の屬する所なり。西なるを月華門といふ、そ

の西は中書省なり、即ち岑参の属する所なり。【一】丹舟、したいにのびる船。【二】娟娟、美しくき麗。【三】故人、ふるなじみ、岑参をさす。【四】佳句、よき詩句、即ち岑参の原作をさす。【五】白頭翁、作者自己をいふ。

【題義】岑参補闕は右補闕岑参をいふ。参は作者の推薦によりて此の官に任せらる。右補闕は中書省に属す、此詩、参が任官の後、

聯歩趨丹陛。分曹限紫微。曉隨天仗入。暮惹御香歸。白髮悲花落。青雲羨鳥飛。聖朝無闕事。自覺諫書稀。

なる詩篇を贈りよこせしに對して答へたるものなり。

【詩意】塵埃の氣なく清らかな御所内の宮門は奥深い。参朝了つてそこよりめいめいの院へかへるとき我は所屬がちがふので東西別別にかへる。すなはち君は宰相のあとについて西なる中書省へとゆき、自分は日華門の東へでて門下省の方へとかへるのである。今しも柳枝の葉がのびて碧であり、桃杏などの花蕊がくれなゐにうつくしくさいてゐる。かかるをりに舊友である君はよい句を得て、特別にこの老人に贈つてくださった。（まことにかたじけないことである。）

奉贈王中允維

王中允維に贈り奉る

中允聲名久如今契闊深。

中允聲名久し、如今契闊深し。

共傳收庾信不比得陳琳。共に傳ふ庾信を收むと、比せず陳琳を得るに。

一病緣明主三年獨此心。一病明主に緣る、三年獨り此の心。

窮愁應有作試誦白頭吟。窮愁應に作有るなるべし、試みに誦す白頭吟。

【字解】【一】中允、維をさす。【二】如今、いま。【三】契闊、動苦なる貌。【四】共傳、世間の人がともにいひつたへる。【五】收庾信、魏の侯景の亂の時、簡文帝は庾信をして朱雀航に留せしむ、景至る、信、衆を以て江陵に奔る。元帝、信を以て御史中丞となす。收とは收録し、採用すること。【六】不比、くらべられぬ。【七】得陳琳、魏の曹操、袁紹と相争ふ、初め陳琳は紹がために操を討つ檄文を草す、後ち操に事ふ。得とは操が之を得て用ふるをいふ。【八】一病、病といはりしこと。【九】明主、天子（玄宗）をさす。【一〇】三年、天寶末より乾元初年までの間。【一一】此心、節を守る心。【一二】窮愁、戰國趙の虞卿が故事、窮して愁ふる、維の困窮をいふ。【一三】作、詩をつくること。【一四】試誦、作者が誦する。【一五】白頭吟、舊解、漢の司馬相如が妻卓文君、夫の妾を買はんとするをききて賦せる「白頭吟」を引き、維が詩、君に對して二心なきをいふことと似たりとく。又、鮑照が「白頭吟」の直如「朱絲繩、清如玉壺水」を引き維が心事潔白なるをいふとなす。これは鮑に白頭吟を以て維が作にたとふとみるなり。余は之に従はず、白頭吟とは作者が自己の詩即ち此の詩篇をさしていふものとみる。作者の寄「楊五桂州詩」に、江邊送孫楚、遠附白頭吟といひ、示「兩兒」に、聞聞思弟妹、行盡白頭吟といひ、舍弟觀處、藍田、取妻于云云に、歌劇提攜如意舞、喜多行集白頭吟といへる、みな自己の作をさして白頭吟といへり。此詩の場合も同じ。

【題義】太子中允たる王維に贈れる詩。乾元元年の作なるべし。王維は天寶の末年に給事中の官なりしが玄宗蜀に奔りしとき從ふに及ばず、賊軍に得らる、維、藥をのみて病を取り詐りて瘡の病なりと稱す。安祿山もとより之を憐みしが、人を遣はして洛陽に迎へ來らしめ普施寺（或は曰く菩提寺）に拘

す、維、詩を賦して曰く、

萬戸傷心生野煙。百寮何日更朝天。秋槐葉落空宮裡。凝碧池頭奏管絃。  
と。賊迫りて偽官に署す。賊平ぎて賊に陥りし官は罪せらるべかりしとき前詩を奏す、肅宗之を宥して太子中允を授く。此詩は作者が其の頃維に贈れるもの。

【詩意】あなたの名聲あることは久しいものであるが、ただ今では非常に深い動苦をしてをられる。世人のいひつたへる所ではあなたは庾信が元帝に採用せられたやうに採用されたといふことだが、曹操が陳琳を得たことなどはくらべものにならぬのである。あなたはただ明天子を忘れず思はるるがために病氣となられたのであり、三年のあひだただただ守節の心を持ってをられたのである。あなたは窮愁の境遇に居られてはさだめしお作があることであらう、それをきかんと欲して、自分は先づ試みにこの拙吟をくちさんでみるのである。

送許八拾遺歸江寧觀省甫昔時嘗客遊此縣

於許生處乞瓦棺寺維摩圖樣志諸篇末

許八拾遺が江寧に歸り觀省するを送る、甫昔時、嘗て此縣に客遊し、許生の處に於て、瓦棺寺の維摩の圖樣を乞ひき、諸篇末に志す

詔許薛中禁慈顏赴北堂

詔して中禁を辭するを許さる、慈顏北堂に赴く。

聖朝新孝理祖席倍輝光

聖朝孝理新に、祖席倍輝光あり。

內帛擊偏重宮衣著更香

內帛撃ぐることに偏に重く、宮衣著けて更に香し。

淮陰清夜驛京口渡江航

淮陰清夜の驛、京口渡江の航。

竹引趨庭曙山添扇枕涼

竹は趨庭の曙を引き、山は扇枕の涼を添ふ。

十年過父老幾日賽城隍

十年父老に過る、幾日か城隍に賽せむ。

看畫曾飢渴追蹤森茫

畫を見て曾に飢渴、追蹤森茫たるを恨む。

虎頭金粟影神妙獨難忘

虎頭が金粟の影、神妙獨り忘れ難し。

【字解】 許八拾遺、許は姓、其名は詳ならず、拾遺とあれば作者の同僚なり。 江寧、今の江蘇省江寧府。 觀省、

許によれば母にお目みえをなし安否を宥するなり。 客遊、旅客としてあそぶ。 此縣、江寧。 許生、許八。 新孝理、

五棺寺、棺の字は官に作るを正とす、晉の武帝の時建つといひ、又、東晉哀帝の興寧二年(三六三)に、詔して陶官を淮水の地に

移し、南岸の帝地を僧伽力に施して瓦官寺を造らしむといふ。建康(即ち江寧)の城の西南隅にありし寺なり。 乞維摩圖樣、

乞とは作者が乞を得んことをいひしなり、圖樣とは模寫の圖をいふならん、維摩圖とは維摩之の畫きたる維摩詰の像をいふ。 志、誌に同じ。 中禁、禁中なり。 慈顏、母のかほ。 赴、一に拜に作る。 北堂、母の室。 新孝理、

孝理は孝治、以孝治天下の略語、去年(至德二年)上皇(玄宗)を長安に迎へ、今年(乾元元年)正月上皇に尊號をたてまつる、天子

がその親に事ふる能を示さるるなり、之によりて臣下にも歸省をゆるされしとみゆるなり。【二】祖席、送別の宴席、別にあたりて古人、道阻神をまつる、故に祖席といふ。【三】内帟、宮中より下賜のきぬ。【四】奉、ささげる。【五】宮衣、宮中より下賜の衣。【六】淮陰、江蘇省淮安府山陽縣。【七】清夜、春の夜をいふ。【八】暉、しゆくば。【九】京口、江蘇鎮江府丹徒縣、對岸の揚州より江をわたりてこへつき、それから江寧へはひる。【十】渡江航、江は揚子江、航は舟。【十一】竹、家にある竹林。【十二】引、みちびく。【十三】趨庭、孔子の子伯魚が故事、「論語」にみゆ、こゝは母のおいでになる室の中庭へでむくをいふ。【十四】扇枕、後漢の黃香が故事、香、夏のあつき夜、親の枕をあふぎにてあふく。【十五】十年過父老、晁日葉城國（一に賜書詩父老、善酒樂、城隍に作り、或は春隔難入畫、秋期燕子涼、に作る）父老とは故郷の老人たちをいふ、妻はお禮まありすること、城隍は土地の神にして民の生活を保護してくれるものなり。今日も一般にまつる。清の顧炎武は北齊書の慕容紹がことな引きて、史傳に城隍神の見ゆる初なりとせり。【十六】會、層に同じ。【十七】銀鬚、饑まで食を飲し、渴して飲を飲することく畫を欲求せしこと。【十八】追隨、過去の行迹をいまから追憶する。【十九】蕊花、とほくはなれてはてもなき貌、この二字「追隨」へかかる、「恨」へかかるに非ず、句法「恨追隨之蕊花」と同じ。【二十】虎頭、顧愷之、字は長康、小字は虎頭、晉陵無錫の人、愷之、瓦官寺の壁に繡摩詰の像をみぎ開眼の日に三日にして百萬錢を觀衆より得て寺に施せしといふ。【二十一】金粟影、金粟如來の畫、繡摩詰は那提の子、漢譯「淨名」の義、過去に成佛して金粟如來と號せしといふ。【二十二】神妙、畫の絶妙なること。

【題義】同僚許君が江寧へかへつてその母をみまふのを送る作である。自分はむかし江寧にあそんだとき許君のところへ瓦官寺の顧愷之筆繡摩詰圖の寫しをもらつたことがある。自分はその圖をひどく愛したもので、そのことはこの詩篇の末にかきつけてある。

【詩意】君は詔をうけて禁中からおいとまごひして立ち去ることをゆるされ、これから母上のおかはを拜するのためにその居らるる室へとゆかれるのである。このたび聖朝では新に孝治の教をしかれる

ので君もその御趣旨にそふべく歸郷するのであるから送別の席も一層ひかりがあるのである。君は御下賜のきぬをいと重さうにささげて出で、御下賜の衣裳を着けてゆくとき、それは今までよりもつと香ばしくにはふのである。君は淮陰あたりの春の夜の驛路を通り、渡江の舟で京口をすぎ、家へ著かれることであらう。そこではあけぼののころ母上の御機嫌うかがひにでるには庭のくれ竹のみらびくがままにでむくことであらうし、君が母上の枕を扇ぎまわらすときには山の氣もおのづからその涼しさをたすけそへることであらう。君は十年ばかりしていま故郷の老人たちのところをよざられるのである、さぞめづらしからう。いくにちぐらゐしたら城隍の神へおまゐりにゆかれることであらうか。自分はそれにつけておもひですが、以前瓦官寺の畫を看てしきりに饑渴の念をうごかしたものだ、あのときのことをかながへてみると恨めしくも時のへだたりのためはつきりせぬくらゐだ。ただ君から模寫品をもらつたほどのあの顧愷之の金粟如來の像、あれだけはその神妙さがいまにも忘れることができぬ。

因許八奉寄江寧旻上人

許八に因りて江寧の旻上人に寄せ奉る

不見旻公三十年、旻公を見ざるること三十年、

因許八奉寄江寧旻上人

【字解】【一】旻公、公は敬語、上人をさす。【二】三十年、作者の

吳越に遊びしは開元十九年、年二十歳の頃に於て今此時たる乾元元年に

封書寄與淚潺湲、  
 舊來好事今能否、  
 老去新詩誰與傳、  
 棋局動隨幽澗竹、  
 袈裟憶上泛湖船、  
 問君話我爲官在、  
 頭白昏昏只醉眠、

於ては相贈る二十七年なり、三十といふは大凡にいていふ。【一】封書封じた手紙。【二】寄與 上人へやる。【三】潺湲 ながるる貌。【四】舊來 旧からの。【五】好事 しのすき、即ち詩や碁を好めることをさす。【六】老去 作者が老ゆるをいふ。【七】新詩 作者の近作。【八】誰與傳 與を爲に作れる本あり、同義なり、此句は誰與我傳之於人との義なり、「何人が自分のために」として。【九】我より彼(受公)に。【一〇】憶 追憶する。【一一】上 上。【一二】問君 問の字語本間に作る、間に。【一三】君(許)よりばなせ、下句まで

【詩意】自分は上人にあはざつと三十年ほどであるが、このたび手紙をやるにつけしきりに涙ながれる。上人よ、あなたはもとの物すきところが今でも以前どほりにできますか。私も年よつてからは近作があつてもあなたといふ人がゐないから、だれが私のためにそれを世間へ傳へてくれるものがあるませう。往年は、私はあなたのお住居の幽澗の竹のほとりでごばんのおあひてをしたこともあり、また私が湖にうかべた船に、あなたがおのりになつたこともあることをおもひだす。許君よ、上人が自分のことについてたづねられたならば君はお話ししてください。私は役人をして達者でをり、あたは白くなつてたどうとうと酒に酔うて眠つてばかりくらししてゐる」と。

【字解】【一】老夫 作者自ら稱す。【二】清晨 ばれたあした。【三】玄都道士 玄都に觀(道教のてら)の名長安の朱雀街崇業坊にありしもの、道士は道教の僧なり、即ち題の李尊師をさす、尊師は尊者といふごとく道士を敬していふ。【四】握髮 握髮と髪を握つていふ。【五】提手 提手と手をつかむのけなきりつ

題李尊師松樹障子歌

老夫清晨梳白頭、  
 玄都道士來相訪、  
 握髮呼兒延入戶、  
 手提新畫青松障、

題李尊師松樹障子歌



障子松林靜杳冥。  
憑軒忽若無丹青。  
陰崖卻承霜雪幹。  
偃蓋反走虬龍形。  
老夫平生好奇古。  
對此興與精靈聚。  
已知仙客意相親。  
更覺良工心獨苦。  
松下丈人巾屨同。  
偶坐似是商山翁。  
悵望聊歌紫芝曲。  
時危慘澹來悲風。

障子の松林静かにして杳冥。  
軒に憑れば忽ち丹青無きが若し。  
陰崖卻つて承く霜雪の幹、  
偃蓋反つて走らす虬龍の形。  
老夫平生奇古を好む、  
此に對して興精靈と聚まる。  
已に知る仙客の意相親しむを、  
更に覺ゆ良工の心獨り苦しむを。  
松下の丈人巾屨同じ、  
偶坐是れ商山の翁なるに似たり。  
悵望聊か歌ふ紫芝の曲、  
時危くして慘澹悲風來る。

畫のすがたがへつてさやうだといふなり。【一】虬龍形 みづち、たつのやうにうねりくりたりたるかたち。【二】奇古 かけつ

たふるめかしきもの。【一】對此 此とは畫をさす。【二】興 作者の感興。【三】精靈 畫者の精神。【四】仙客 李尊師を  
さす。【五】意相親 この畫障をわざわざもつてきて見せてくれたるはこちらと親密なればなり。【六】良工 畫のめいじん、こ  
の畫障の業者をさす。【七】心獨苦 ひとりて苦心する。【八】松下丈人 丈人は老人、松下の老人とは畫中の人物をさす。【九】  
巾屨同 丈人等のづきんくつが互に同じ。一説に丈人等の巾屨が商山の老人たちと同様である。【一〇】偶坐 對坐なり、我(作者)  
之と對して坐するをいふ。【一一】商山翁 漢の高祖の時、秦の亂を避けて商山に隠れ居りし四人の老人をいふ。【一二】悵望 うち  
めしくながめる。【一三】紫芝曲 商山の四皓(四人の老者)は東園公・綺里季・夏黃公・角里先生なり、もと秦の博士なりしが世のみ  
だれしにより山にかくれて探芝の歌をつくる、その歌四言十句ありて、終りに「嗚呼紫芝、可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>療<sub>レ</sub>飢、唐虞往矣、吾當<sub>レ</sub>安<sub>レ</sub>歸<sub>レ</sub>」の語あり。  
【一四】時危 時世安泰ならぬこと、安祿山、史思明の亂未だ平がぬをいふ。【一五】慘澹 ものかなしきさま。【一六】悲風 人をか  
なしませる様なかぜ。

【題義】 玄都觀の道士李が示したる松をゑがいたついたてに題せる歌なり。乾元元年の作とする説に  
從ふ。

【詩意】 自分はけふのはれたあした、しらがあたまをとかしてゐたとき、玄都觀の道士李尊師がたづ  
ねてこられたので、大いそぎで髪をにぎりながら、こどもをよんで之を戸内へ請じいれた。みると尊  
師は手にかかれたばかりの松の木の畫のついたてをひつさげてゐる。そのついたての松林はしづか  
にとほくらくつらなつて居て、のきによつてながめると俄に畫が消えて實物ばかりがある様におも  
はれる。くらつばいそばがけは霜雪をしのぐ松の幹をうけてをり、のさばつた松葉の屋根がかへつて  
龍のやうなさまを走らせてゐる。自分はふだん奇古なものを好むが、この畫に向ふと、自己の感興

ついで實物をむかへるさま。  
【一】憑 ころへと相請する。  
【二】手捉 手は李の手。【三】障  
子の障子と同じく「ついたて」のこ  
と。【四】杳冥 ぼろかにくらし。  
【五】憑軒 のきげによつてながめ  
る。【六】若無丹青 丹青とは畫  
の彩色をいふ、若無とは畫そのもの  
は無いやうで、實物があるやうだと  
いふこと。【七】陰崖 日のあた  
らぬそばがけ。【八】却承 松幹  
が崖を壓するさまをいふ、崖よりい  
ふ故に承くといふ。【九】霜雪幹  
霜雪をしのぐみき、松のみきをいふ。  
【一〇】偃蓋 のさばつたおほひ。三  
畫松の如く松の枝葉のかさなりあり  
たさまをいふ。【一一】反走 幹が  
走るならば普通であるが、これは偃

は忽ち畫者の精神といつしよになつてしまつた。仙客といふべき李尊師のごしんせつはもとよりわかつたが、之をかく時の畫者がどんなにひとりで心を苦しめたかといふことに一層つよくこころづくのである。』松の木の下に老人たちがかいてあるが、そのいでたちはどれも互に同じである。(或は四皓と同じ様である。)之と對坐してゐるとどうもその老人たちは商山の老人であるかのやうである。自分も恨然として商山の方をながめてちよつと四皓等が作つたと稱する紫芝のうたをうたふといふと、時世なほ安泰ではなくしてものがなしく悲風が吹き來るのである。

得舍弟消息

舍弟の消息を得たり

風吹紫荆樹色與春庭暮

風は吹く紫荆樹、色は春庭と暮る。

花落辭故枝風迴返無處

花落ちて故枝を辭す、風廻りて返るに處無し。

骨肉恩書重漂泊難相遇

骨肉恩書重し、漂泊相遇ひ難し。

猶有淚成河經天復東注

猶涙の河を成す有り、天を經りて復た東に注ぐ。

【字解】「紫荆樹」(酸漿屬)に、田廣・田慶・田慶・兄弟三人財を分たんと欲す、其の夜、庭中の三刑樹すなはち結る。兄弟嘆きてまた財を合せしに、樹またものごとく榮少との語あり。こゝは兄弟分財のことに用ひたり。【辭】辭故枝 辭はまたば落葉がもとの樹枝を離れることを子弟が父母の命をばなれ居ることに用ふるば、六朝以來の習はしなり。【註】風迴 迴は吹きめぐると、花ししたがって吹かる。【註】枝にかへる。【註】骨肉 兄弟のちすぢ。【註】恩書 恩愛の情こもりし手紙。【註】重 貴重なこと。【註】猶 今もなほ。【註】河 あまのかほら。【註】經天 經は「わたる」、ひきはへる、上句河の雜語なり。【註】東注 東方に向つてそそぐ、河南は長安の東にあり。

【題義】舍弟は家弟に同じ、弟をいふ、名は詳ならず。時に、弟は河南にあり、作者は長安に在り。長安にて河南にある、弟のたよりを得て作れる詩。

【詩意】風が庭前の紫荆樹を吹いて、樹の色が庭の色とおなじく暮れてゆく。その花はもとの枝から辭し去つて、それが風に吹きつけられ、もとの枝へかへらうとしてもかへるべき處とてはない。漂泊の身の上で互にであふことはむつかしいので、この際のうちすぢのものの手紙はことに重んずべきものである。自分は今もなほ涙が天の河の様にながれ出て、それが大空をわたつておまへの居る東の方へむけてそそぎつつあるのだ。

送李校書二十六韻

李校書を送る、二十六韻

代北有豪鷹生子毛盡赤

代北に豪鷹有り、子を生めば毛盡く赤し。

渥洼驥兒尤異是虎脊

渥洼の驥の兒、尤異なるは是れ虎脊。

李舟名父子清峻流輩伯

李舟は名父の子、清峻流輩の伯なり。

人間好少年、不必須白首。  
 十五富文史、十八足賓客。  
 十九授校書、二十聲輝赫。  
 衆中每一見、使我潛動魄。  
 自恐二男兒、辛勤養無益。  
 乾元元年春、萬姓始安宅。  
 舟也衣綵衣、告我欲遠適。  
 倚門固有望、斂衽就行役。  
 南登吟白華、已見楚山碧。  
 萬籟咸陽都、冠蓋日雲積。  
 何時太夫人、堂上會親戚。  
 汝翁草明光、天子正前席。  
 歸期豈爛漫、別意終感激。

人間好少年、必しも白首なるを須みず。  
 十五文史富み、十八賓客足る。  
 十九校書を授けらる、二十聲輝赫たり。  
 衆中に毎に一見す、我をして潜かに魄を動かさしむ。  
 自ら恐る二男兒、辛勤養ふも益無からむことを。  
 乾元元年の春、萬姓始めて宅に安んず。  
 舟也綵衣を衣て、我に告ぐ遠く適かむと欲すと。  
 門に倚る固より望む有り、衽を斂めて行役に就く。  
 南登白華を吟す、已に見る楚山の碧なるを。  
 萬籟たる咸陽の都、冠蓋日に雲積す。  
 何時か太夫人、堂上親戚を會せむ。  
 汝が翁明光に草す、天子正に席より前む。  
 歸期豈に爛漫たらむや、別意終に感激す。

願我蓬屋資、謬通金閨籍。  
 小來習性懶、晚節慵轉劇。  
 每愁悔吝作、如覺天地窄。  
 羨君齒髮新、行己能夕惕。  
 臨歧意頗切、對酒不能喫。  
 迴身視綠野、慘澹如荒澤。  
 老雁春忍饑、哀號待枯麥。  
 時哉高飛燕、綯練新羽翮。  
 長雲濕裊斜、漢水饒巨石。  
 無令軒車遲、衰疾悲宿昔。

願みるに我蓬屋の資、謬つて金閨の籍を通す。  
 小來習性懶なり、晚節慵轉劇し。  
 毎に愁ふ悔吝の作るを、天地の窄きを覺ゆるが如し。  
 羨む君が齒髮新に、己を行うて能く夕惕するを。  
 臨みて意頗る切なり、酒に對して喫する能はず。  
 身を迴らして綠野を視れば、慘澹として荒澤の如し。  
 老雁春饑を忍び、哀號して枯麥を待つ。  
 時なる哉高飛の燕、綯練たり新羽翮。  
 長雲裊斜を濕す、漢水巨石饒し。  
 軒車をして遅からしむる無かれ、衰疾宿昔を悲しむ。

【字解】【一】代北、山西省代州の北。【二】蓬屋、大さい「たが」。【三】濕注、西域にある水の名、已に「沙雁行」にみゆ。

【四】懶、一日千里をゆく馬。【五】尤異、すぐれて他とことなるもの。【六】虎脊、虎のときせなか、虎の字或は龍に作る。

【七】名父、有名な父、即ち岑なます。【八】清峻、人品の清らかにすぐれたさま。【九】流輩、なかま。【一〇】伯、かしら、長。

【一一】人間、人間に於ては。【一二】好、よきこと。【一三】須、もちろぬ、まづ、いりようとする。【一四】白首、白くつつきり白き。

【一】富文史。よみおぼえたる書物多し。【二】足。十分多きこと。【三】校書。校書郎の官。【四】聲名。【五】聲名。【六】聲名。【七】聲名。【八】聲名。【九】聲名。【一〇】聲名。【一一】聲名。【一二】聲名。【一三】聲名。【一四】聲名。【一五】聲名。【一六】聲名。【一七】聲名。【一八】聲名。【一九】聲名。【二〇】聲名。【二一】聲名。【二二】聲名。【二三】聲名。【二四】聲名。【二五】聲名。【二六】聲名。【二七】聲名。【二八】聲名。【二九】聲名。【三〇】聲名。【三一】聲名。【三二】聲名。【三三】聲名。【三四】聲名。【三五】聲名。【三六】聲名。【三七】聲名。【三八】聲名。【三九】聲名。【四〇】聲名。【四一】聲名。【四二】聲名。【四三】聲名。【四四】聲名。【四五】聲名。【四六】聲名。【四七】聲名。【四八】聲名。【四九】聲名。【五〇】聲名。【五一】聲名。【五二】聲名。【五三】聲名。【五四】聲名。【五五】聲名。【五六】聲名。【五七】聲名。【五八】聲名。【五九】聲名。【六〇】聲名。【六一】聲名。【六二】聲名。【六三】聲名。【六四】聲名。【六五】聲名。【六六】聲名。【六七】聲名。【六八】聲名。【六九】聲名。【七〇】聲名。【七一】聲名。【七二】聲名。【七三】聲名。【七四】聲名。【七五】聲名。【七六】聲名。【七七】聲名。【七八】聲名。【七九】聲名。【八〇】聲名。【八一】聲名。【八二】聲名。【八三】聲名。【八四】聲名。【八五】聲名。【八六】聲名。【八七】聲名。【八八】聲名。【八九】聲名。【九〇】聲名。【九一】聲名。【九二】聲名。【九三】聲名。【九四】聲名。【九五】聲名。【九六】聲名。【九七】聲名。【九八】聲名。【九九】聲名。【一〇〇】聲名。

る、音は「恨辱を取る」をいふ、作は「おこる」。【七〇】早。せまし、身の容れどころなきこと。【七一】前髪。髪を新「は」かみのけのふるびすわかわかきこと。【七二】行己。自己の事をおこなふ。【七三】夕陽。易の乾卦九三に、君子終日乾乾、夕陽若厲、无咎、夕陽とは夕にもおそれて行ひにつきおそれいしむるをいふ。【七四】故。えだのさいたまち。【七五】意。作者の別意。【七六】時。時節。あれたぬま地、一説に八荒八溟。【七七】老。作者自己をたへていふ。【七八】枯。暮年の結白馬賦にみゆ、注に疾弱とあり。【七九】時。時節にかなへるをいふ。【八〇】蕭。李舟をたへていふ。【八一】結。暮の成熟するをいふ。【八二】難。難たらばれ。【八三】長。ながくつらなつたこと。【八四】衰。漢中府にある谷の名、北口が對谷、南口が衰谷、その間七百里。【八五】漢水。漢中府の中央部を東流し、南して更に湖北省に入る。【八六】鐘。多きこと。【八七】軒。軒車。軒は「くるま」。【八八】還。かゝることのおそきなり。【八九】衰。衰疾。作者自己のさま、老衰、疾病。【九〇】宿。まへかた。非宿言とはまへかたの感情をおもひて今別ればならぬかとなしむなり。裏面には「だから早くかへられよ」といふなり。

【題義】校書郎李舟が蜀の地へ母を迎へにゆくを送る詩なり。舟、字は公度、隴西の人、虔州刺史。隴西縣男たり、父岑は嘗て水部の郎中、眉州刺史となる。仇氏は、その母は恐らくは天寶の亂のとき眉州に在りしものならんといへり。

【詩意】代州の北に大きい鷹があるが、その子をうむや、こだかの毛はみんな赤い。渾注の水の千里の馬の兒は虎の脊の様なせなかのかはりものである。ちやうどそのやうに、李舟は李岑といふ有名な父の子であつて、その人品の清峻なことはなかまでのかしらである。人間社會でよい少年は必ずしも色白の美男子であることを要せぬ。李舟は十五歳で十分多く讀書をし、十八で多く賓客に接し、十九で校書郎の官を授かり、二十で名聲はてりかがやいた。自分は衆人のなかで舟を「た」び見るたびに、

ひそかに驚きてたましひをうごかすのである。舟にくらべてみると自分のうんだ二人の子（宗文、宗武）などはいくら骨折つて養育しても益がないときづかはれてならぬ。ことしの春（乾元元年）は萬民がはじめておちついて生活することが出来る。このとき李舟は昔の孝子がしたやうに五色のきものを身につけて、自分に遠方へ旅立ちしようとおもふことを告げた。なるほど舟のおつかさんは門に  
よりながらその子のくるのをながめてをらるので、舟はきものつまをつくるひながら旅路につくのである。南の途にとのほり親に孝養をつくす心をうたうた「白華」の詩を吟じてでかけると、はやくも楚山の碧なのが目にはひる。此の人物多くあつまつてをる咸陽（實は長安）の都では貴顯の士の冠蓋が日日雲の機につまれてゐる。いつになつたら君の母上はここへおかへりになつて座敷に親戚を會合せられることになるのであらう。君の父上は明光殿に於て詔を起草する職に居られ、天子の寵を蒙つて天子がいつもその話の座では席をすすみでられるほどである。してみれば君はいま旅にたつとしてもその歸る時期はあてどなしといふわけではないのだが、君は自分に對して別れの意をひどくうごかしてゐる。他方に自分のことをみてるに、自分は元來草むらの宿に住んでをるべき素質のものであるのに、認つて仕官をする身となつたのだ。ちさいときからぶしやうのならばしてあるのが、晩年になつてはものうさが一層はげしくなつてきた。いつも自己の行爲について悔吝の念が起るのを心配し、天地の廣きもわが身を容れるにはせまきをおぼゆるのである。羨ましいのは君は年わかで齒

も髪もわかわかしく、それで身を行ふには「易」に言うてある君子の如く、夕にもおそれていましめるといふ風であることだ。かかる君に關してはわかれちのぞんで自分の意はすこぶる切であり、別れの酒に對してもそれをのむことができぬ。ふりかへつて綠色の原野をよくみるに、ものがなしい様子であれたぬまちの機である。老いたる雁（自分）は春にあたつて饑餓をしのんで、かなしくさげびながら夏麥の成熟する日待つてゐる。時節にかなつて高くとぶ燕（君）はたちばねがあたりらしく、その飛びかたはいとはやくある。君の行く手に於ては、長くつらなつた雲が斜谷、褒谷をうるはしてゐる、漢水には大きな石がたくさん横はつてゐる。そんな地方へゆくのだが、どうか君の歸りの車をおそくさせぬ様にしてもらひたい。自分は老衰疾病の身で、ただ君との過去の歎情についておもひうかべて悲しんでゐるのであるのだ。

偏側行贈華四曜

偏側行、華四曜に贈る

偏側何偏側

偏側何ぞ偏側たる

我居巷南子巷北

我は巷南に居り子は巷北

可憐隣里間

可憐む可し隣里の間

【字解】「偏側」或は相迫而

居とし、或は巷之臨隔なるをいふと

す、しばらく追近の說に従ふ、場所

がくつついてあること。巷、小路。隣里、五家を隣とし、五隣を里とな

十日不一見顔色

自從官馬送還官

行路難行澀如棘

我貧無乘非無足

昔者相過今不得

不是愛微軀

非關足無力

徒步翻愁官長怒

此心炯炯君應識

曉來急雨春風顛

睡美不聞鐘鼓傳

東家蹇驢許借我

泥滑不敢騎朝天

十日一たびも顔色を見ず

官馬官に送還せしより

行路行き難く、澀、棘の如し

我貧にして乗無きも足無きに非ず

昔者相通りしも今は得ず

是微軀を愛するならず

足力無きに關するにも非ず

徒步せば翻て愁ふ官長の怒らむことを

此心炯炯たり君應に識るなるべし

曉來急雨春風顛す

睡美にして聞かず鐘鼓の傳はるを

東家蹇驢我に借すを許すも

泥滑かにして敢て騎りて天に朝せず

【一】自從、二字にて「より」

【二】官馬、政府所有の馬

【三】澀如棘、棘は「か」

らたち、からたちの生じたる路はゆ

きにくし

【四】乘、のりもの、馬

をいふ

【五】相過、畢應が家へ

過訪せしこと

【六】不得、過ぎ

るを得ざるをいふ

【七】不是、非

と同じ

【八】愛微軀、自分の

からだを愛するをいふ

【九】翻、かへつ

て

【一〇】官長、上司をいふ

【一一】此心、畢を見んと欲して見る

を得ざるころ

【一二】炯炯、か

がやく貌

【一三】蹇驢、おれくるふこと

【一四】許、許すこと

【一五】泥滑、美はこちよきこと

己令請急會通籍

男兒性命絕可憐

焉能終日心拳拳

憶君誦詩神凜然

辛夷始花亦已落

況我與子非壯年

街頭酒價常苦貴

方外酒徒稀醉眠

速宜相就飲一斗

恰有三百青銅錢

己に急を請はしむ會通籍に通せむ

男兒の性命絶た憐む可し

焉ぞ能く終日心拳拳たらむ

憶ふ君が詩を誦して神凜然たるを

辛夷始めて花さくも亦己に落つ

況や我子と壯年に非るをや

街頭の酒價常に貴きに苦しむ

方外酒徒醉眠する稀なり

速に宜しく相就いて一斗を飲むべし

恰も三百の青銅錢有り

【一】東家、東どなりの家

【二】蹇驢、らんばひきのあば

【三】許、許すこと

【四】泥滑、朝、宮中へ参朝する

【五】請急、急とは休暇のこと、請急は休

暇むがひ

【六】會通籍、會は、必

ず、通籍とは註籍こと、休暇不参

のことに簿籍にかきつける

【七】一説に、會通籍ことよませ、己に宮門へ通じ

てある名籍にてらしめばせて不参と

しておく義とせり

【八】今前説をとる

【九】男兒性命、自己のこと

【一〇】相就、奉持する貌、先方を見んことのみを

おもひ居るさま

【一一】速宜、速に宜し

【一二】相就、先方から、

ちらへ來り就く

【一三】恰、あたかし、ちやうど

【一四】方外、道士、僧をいふ、莊子に彼遊三方之外者也とみゆ

【一五】酒徒、酒のみなかも

【題義】 偏側の二字は本篇の首の二字をとりて題とし用ふ。行は「うた」なり、詩友畢曜におくれる詩、雨中に来訪せんことをのぞむよしをうたへり。

【詩意】 自分たちはどうしてこんなに近い處に住んでゐるのか、自分は小路の南に居るし、おまへは北に居る。それに氣のどくなことに、こんな近所にゐながら十日のうちに一べんもかほを見ることができぬ。」自分は政府の馬を政府へ送りかへしてからは、路をゆかうとしてもそのゆきにくいことは、からたちの路でもゆく様である。自分は貧しくて乗馬はないが足が無いのではない。が、昔はおまへのところをたづねたが今はたづねられぬ。是は自分のからだを愛して骨をしみをするのではなく、足に力がなからでもない。しかるべき官位に居るものが、かちであるいは長官におこられはせぬかときづかはれるのだ。君を見たいとおもひつつある我が心のいかにありあがりかやいてゐるかは君もしつてゐることだらう。」けふはあけがたから急にふりそぐ雨で春風も吹きくるうてゐて、自分はいきもちぐつすりねむつて鐘や太鼓の音の傳はつてくるのさへきこえつけぬほどであつた。東の家では自分に「ろば」をかしてくれるとのことだつたが、このどろのすべる路では、自分はそれによつて參朝することはようせぬのだ。だからもはや缺動とどけをして休暇をねがひださせたので、その旨紙面にかきこまれたであらう。このさまでは自分といふもののいのちもきのどくなものではないか。」自分とてどうしてけふ一日君にあひたい、あへぬ、などいふことばかり思ひつめて居られや

う。さぞ君は自己の近作の詩でも吟じて、神氣凛然たるものがあるであらうなどとおもふ。こぶしの花も始めて咲いた、それもはや落ちちつた。(春光はすぎやすい)まして自分もおまへもはや壯年のものではない。(どうしてただでゐるものか。)まちの賣り酒のねだんのかいにはいつもこまゐる、このごろは僧、道の友、酒のみなかま、なども酔つて眠ることがごくすくない。おまへはすこしもはやく自分のところへたづねてきて自分といつしよに一斗の酒をのむがよろしい。自分の手もとにはちやうど青銅錢が三百文あるのである。

贈畢四曜

畢四曜に贈る

才大今詩伯、家貧苦宦卑。才大なり今の詩伯、家貧にして宦の卑なるに苦しむ。

飢寒奴僕賤、顔狀老翁爲。飢寒奴僕のごとく賤しく、顔狀老翁の爲す。

同調嗟誰惜、論文笑自知。同調嗟誰か惜まむ、論文笑うて自ら知る。

流傳江鮑體、相顧免無兒。流傳せむ江鮑の體、相顧みるに兒無きを免る。

【字解】 才大、文章の才、偉大なり。 詩伯、伯は長なり、詩伯は詩壇の長。 宦卑、仕宦の地位、やくしくひくし、

飢寒、食なく衣なきこと。 奴僕賤、申涵光の説にこの語には、(イ)奴僕賤主。(ロ)奴僕自賤。(ハ)奴僕爲人所賤。の

出せん、奴僕を「賤」の字の副詞とし、(ニ)奴僕ノオトクヲ賤シ、と訓する是なり。【一】君翁翁、君翁のさまをなす。【二】同調、自分と調子を同じくする、同じく高い古調をなすをいふ。【三】曉、あ。【四】論文、文章に關することゝなかりあふ。【五】自知、自分で會得する。【六】流傳、世上へつたばる。【七】江鮑體、宋の鮑照、梁の江淹が詩の體、彼我二者の詩につきていふ。【八】免、無兒、兒のないといふ、遠逝からまぬかれる、兒あるをいふ。畢に何等の兒ありしや明かならず。作者は宗文・宗武あり。此詩前四句は畢に就き、後四句は彼我相共に寫せり。

【題義】畢曜におくれる詩。時は前詩と同年にあるべし。

【詩意】君は文章の才、偉大であつて今の世の詩壇の長であるが、こまつたことに家は貧しく官地がひくい。それで飢寒にせまられて士人でありながら奴僕のやうに賤位にあるものがうくべき飢寒をうけ、かほの様子はその年でもないのでおきな然たるさまをしてゐる。君は自分と調を同じくする人だが誰が君の才を惜しんでくれやう、君と文を論じあふときにはおたがひにただ各自がそのうちの真趣を會得するだけだ。(外人のうかがひ知ることをゆるさぬ)おたがひの身のうへをみてるのに、幸に子もたすの境涯ではないから、めいめいが作つた江、鮑の詩體は必ずしも世間へつたててくれるであらう。(これをおもへば聊か慰むるに足るものがある。)

題鄭十八著作丈故居

鄭十八著作丈が故居に題す

【字解】【一】台州、浙江省台州府、鹿が渡されたる地。【二】地、地。【三】鄭十八、鄭君の字。【四】著作丈、著作の尊稱。【五】故居、故郷の宅。【六】題す、題する。

台州地闊海冥冥、雲水長和島嶼青。  
亂後故人雙別淚、春深逐客一浮萍。  
酒酣懶舞誰相拽、詩罷能吟不復聽。  
第五橋東流水恨、皇陂岸北結愁亭。  
賈生對鵬傷王傅、蘇武看羊陷賊庭。  
可念此翁懷直道、也需新國用輕刑。  
福衡實恐遭江夏

台州地闊くして海冥冥たり、雲水長へに島嶼と青し。  
亂後故人雙別淚、春深うして逐客一浮萍。  
酒酣にして舞ふに懶し誰か相拽かむ、詩罷みて能く吟するも復た聽かず。  
第五橋東流を流す水、皇陂岸北愁ひを結ぶ亭。  
賈生鵬に對して王傅傷み、蘇武羊を見て賊庭に陷る。  
念ふ可し此の翁直道を懷き、也た需ふ新國の輕刑を用ふるに。  
福衡實に恐る江夏に遭はむことを、

題鄭十八著作丈故居

【一】冥冥、くらき貌。【二】長、雲水の横はれる海水。【三】和、つれに、いつまでも。【四】島嶼、島、嶼(と)と同じ。【五】浮萍、與(と)と同じ。【六】鵬、鳥、鵬はこじま。【七】故人、先方よりみたる故人にて作者自己をなす。【八】雙別淚、雙は雙眼よりくだすをいふ。【九】春深、鄭君は至徳二年十二月に台州へ流さる、今「春深」といふは聖乾元元年の季春をいふなるべし。【一〇】逐客、放逐されしもの、度をなす。【一一】浮萍、うきくさ、よるべなき身をたとへていふ。【一二】鵬、舞とは作者が相拽、拽は手にてひくこと、舞をなすをなす。【一三】蘇武、蘇武は匈奴に捕はれ、羊を飼はせられたる。【一四】直道、正しく、曲とは改め罷むこと、即ちいろいろとなすすべき處をなほしすること。



方朔虚傳是歲星。方朔虚しく傳ふ是れ歳星なりと。

窮巷悄然車馬絶。窮巷悄然として車馬絶え、

案頭乾死讀書螢。案頭乾死す讀書の螢。

【一】 龍吟 時とは作者が吟誦するなり、他詩に新詩改題自長吟ともみゆ。【二】 復讐 驛とは處がきくなり。【三】 第五橋 章曲附近の名勝。【四】 流恨水 恨を流す水、

その水なみれば我が恨を生ずる水ないふ。【一〇】 皇陵 皇子陵なり、第五橋・皇子陵共に已に鄭虔と何將軍の山林に遊べる詩の中にみえたり。【一一】 結怨亭 その亭なみれば我が怨を結ばしむる所の亭。【一二】 賈生對馬傷王傳 漢の文帝の時、賈誼は長沙王の大使に貶せられ、あるとき鴈鳥（ふくろふ）が家に入るをみて不吉としてかなしみて賦を作る、賈生と王傳とは同一なり、傷王傳とはやはり賈生がいたむことなり、此の句は鄭虔かつて書八十餘篇を著はして忌諱にふれ諱せらるること十年なりしといふ過去の事をさすといふは舊解なり、しかし、ここに過去の事ならざる必要なきやに考ふ、故に余は現在の事についていふとみる、即ち台州に於ける虔の感傷は賈生の長沙に於ける感傷とひとしとの義なるべし。ただし傷の字は傷王傳と固じて作者が之をいたむともみらるべし。【一三】 蘇武看羊附賦庭 漢の蘇武は匈奴に使してひきとめられ、匈奴は之を北海の人なき處に徙して豚（なひつじ）をかばせ、豚が子をうまば豚へらしめんといへり。看羊の看は看守すること、ひつじのばんをするなり、虔が忠心を抱きながら安祿山の賊軍に囚へられ水部郎中を授けられしを武の事を以て附議していへるなり、賊庭は安祿山が軍中をいふ、附はそこへおちこむこと。【一四】 此集 集の字を公に作れるあり、公ならば尊敬の意あり、翁ならば親しむ意あり、ともに虔をさす。【一五】 懷直道 正直の道を保持する。【一六】 也 俗用にて「もまた」、雅言の「亦」の字にあたる。【一七】 霜 思にうるほふ。【一八】 新國用輕刑 「周禮」の大司寇の職に、刑「新國」用「輕典」とみゆ、新國とは天子から新しく君を立ててやつた國をいふ、かかる國に刑を用ふるときにはなるべく定めてある刑典のなかで輕い刑を用ふといふなり、それは新國の人民はまだその刑典に通じてゐるものがすくないからである、唐の肅宗が中興せしは他から國をたててもらひしに非れども新興の朝なるを以て古語を借用せるなり、「輕刑を用ふ」とは虔はもと死刑に

處せらるるはずなりしを崔園の筆力にて流罪にされしをさす。【一九】 兩衛連江夏 後漢の水に兩衛、文才あり、曹操之を江夏の太守黃祖がもとに遇りて殺させたり、江夏とは江夏の太守黃祖をさす、此句によれば虔を懐かしむるやうばかりし人ありしなり。【二〇】 實恐 恐るとは作者がきづかふなり。【二一】 方朔、歲星 漢の東方朔は歲星の生れかばりとの説あり、漢の武帝はその事がらをみとめたり。【二二】 虛傳 歲星だといひつたへだけありてそれが天子（肅宗）にはみとめられぬ、故に「虚しく」といふ。【二三】 窮巷 鄭虔の住宅のある小路をいふ。【二四】 悄然 しみじみり、びつそり。【二五】 案頭 つくみのうへ。【二六】 乾死 ひからびて死す。【二七】 讀書堂 讀書を照らしはたる、膏の車風といふもの實しくして油なく豆には螢を籠に聚めて書を照らしてよみしといふ。鄭虔の博學は當時及ぶものなし、その多く書をよみしことを知るに足れり、今、聚螢のことを借用す。

【題義】 鄭著作とは鄭虔をいふ、虔、嘗て著作郎となる、丈とは長者を尊びていふ稱、故居とはもとに住居をいふ、長安の南郊に樊川あり、川にそひ章曲あり、章曲の東に韓莊あり、韓莊の東南に鄭莊あり、即ち鄭虔の居なり、作者の杜陵の宅と遠からず。鄭虔が台州へ流されし後にその住居をすきて題したる詩なり。

【詩意】 鄭虔がながされてゐる台州はここからは遠くはなれてその海上はくらく、雲の横はつた海水はいつも島のむれとともに青くみえる。騷亂をへたのちの自分は兩眼からいつも別れの涙をながしてゐる、この春深き時節にあたつて逐客となつてゐる君はよるべなきことうき草のやうである。酒たけなはに興に乗ればむかしは舞ひだしたものだ、今は君がわぬから舞ふにもものうく、舞うてもだが自分がたすけひいてくれる者があらう。詩ができあがつて吟ずることは今も吟ずるがふたたびそ

れをきいてくれるものはない。かつて君と遊びを共にした第五橋の東に流るる水、それは今では我が恨みをながしつつかある水である。皇子岐の岸の北の亭、それは今は我が愁を結ぶところの亭である。台州にゐる君はちやうどむかし賈誼が鵬鳥に對して心を傷ましたやうなものであらう、不幸にも君は忠心を抱ける蘇武が匈奴で羊のばんをさせられた如き心をもちながら賊軍のなかへおちこんだのであつたのだ。自分はふかくおもふ、君といふ老人は正直の道をいだいてゐたのだ。(それに刑罰に處せられた)それでも不幸中の幸は我が新興の朝廷におかれては君を死刑にせず軽い刑を用ひられたことである。自分は君が福衡が江夏の太守にであうた様な運命になりはせぬかとときづかふ、東方朔が歳星だとうのはさだけはあつたが、うはさだけで實は天子からおみとめにはなつてゐない。今自分が君の舊宅へきてみると、ゆきつまつた小路はひつそりとして車や馬のおともたえ、つくゑのうへにはかつて君が讀書を照らしたはずの螢がひからびて死んでゐる。(此詩の體は七言の排律なり。)

瘦馬行

瘦馬行

東郊瘦馬使我傷  
骨節碎兀如堵墻  
絆之欲動轉欬側

東郊の瘦馬我をして傷ましむ、骨節碎兀として堵墻の如し。之を絆さむとすれば動かむと欲して轉欬側す。

【字解】 ① 東郊、長安の城の東の野外。 ② 骨節、ほれぐみ。 ③ 碎兀、骨だかき頭。 ④ 堵墻、ついで、かき、骨體が壁のごとく立つをいふ。

此豈有意仍騰驥  
細看六印帶官字  
衆道三軍遺路旁  
皮乾剝落雜泥滓  
毛暗蕭條連雪霜  
去歲奔波逐餘寇  
騁驩不慣不得將  
士卒多騎內廐馬  
惆悵恐是病乘黃  
當時歷塊誤一蹶  
委棄非汝能周防  
見人慘澹若哀訴  
失主錯莫無晶光

此豈に仍騰驥せむとするに意有るか。細かに看れば六印官字を帶ぶ、衆は道よ三軍路旁に遺すと。皮乾きて剝落泥滓雜はり、毛暗くして蕭條雪霜連る。去歲奔波餘寇を逐ふ、騁驩には慣れず將ることを得ず。士卒多く騎る内廐の馬、惆悵恐る是れ病める乘黃なりしならむ。當時歷塊誤つて一蹶す、委棄せらるること汝が能く周防するに非ず。人を見て慘澹哀訴するが若く、主を失ひて錯莫晶光無し。

【註】 ① 絆、ほだす、なげにてからげる。 ② 欬、咳。 ③ 側、馬がうごかうとする。 ④ 蹶、うた、いよいよ。 ⑤ 轉、側、そばたち、かたむく、直立せざること。 ⑥ 此、馬のその態度をさす。 ⑦ 仍、なほ、いままでのやうに。 ⑧ 騰、をどりてあがる、馬のいさまさま。 ⑨ 細、細くはしくみる。 ⑩ 六印、六箇所の印なり、一に六を火に作る、火印ならばやき印をいふ。 ⑪ 帶官字、唐の官馬は其の楯無用途如何により馬の尾側、左右髀(もも)、左右髀(かた)、項(うなじ)、頰

天寒遠放雁爲伴。天寒く遠く放たれて雁を伴と爲し、  
日暮不收鳥啄瘡。日暮れて收められず鳥瘡に啄む。  
誰家且養願終惠。誰が家にか且つ養はむ願はくは惠を終へむ。  
更試明年春草長。更に試みむ明年春草の長きに。

五七〇  
〔ほし等に幾き印を押す、其の文字には年時、牧豎の名あり、龍形・三花の印あり、又、「官」の字、「飛」の字、「風」の字、「脚」の字、「出」の字の印あり。この

馬は六箇處に官にて押せし印あるものならん、上句もし「火印」とせば帶官字は「官」の字をおぶと解すべし。【一〇】兼道、兼人いふ。【一一】三軍、天子の軍。【一二】遺、遺棄する。【一三】皮乾、脂肪光澤のなくなれるさま。【一四】割瘡、はげちよる。【一五】泥洋、どろ、にじりかす。【一六】毛暗、暗とは光澤を失ひしをいふ。【一七】蕭條、さびしきさま。【一八】連營、營連と同じ、營霜とは白つほさ色なたとへていふ。馬病むときは毛のさきほこりを帯び、色つやあしし、そのさまが營霜のつらなれるに似たるなり。【一九】去歲、至徳二載。【二〇】奔波、狂奔すること、官兵がはしりまはること。【二一】運餘寇、餘寇とは安祿山賊軍のこと、り、至とは官兵之をおふこと。【二二】驕驕、千里の馬。【二三】不慣、騎るになれぬ。【二四】一説にのりならされてならぬものとく。【二五】不得解、解は「ひきふる」なり、「騎りひきふる」なり。【二六】士卒、官軍の兵卒。【二七】騎、のる。【二八】内殿、天子のおうまや、そこには訓練を経た名馬がたくはへてある。【二九】惘惘、うらむ顔、作者が今日よりさかのぼりてうらむなり。【三〇】恐足、恐とはきつつかふこと、これも作者がきつつかふ。【三一】病乘黃、病める乘黃、乘黃とは神馬なり、内殿の駿馬にして上句の「驕驕」といへるも同じ、この駿馬は乘黃ではあるが不幸にもその病めるものであつたであらう、といふなり。【三二】當時、逐寇のときをさす。【三三】歷塊、漢の王褒の聖主得賢臣にかひ、一個のつちくれなとほる、歴は「へる」。【三四】厭、つまづく。【三五】委棄、うちすてる。【三六】汝、瘦馬をさす。【三七】能周防、非汝能周防は非汝之所能周防、といふに同じ、周防はておちなくふまへることよふまへることのできるものでない、とは「運命だといふほかなし」といふこと。【三八】見人、他人をみる。【三九】餘物も

のがなしきさま。【一】失主、かひぬしをなくする。【二】銷英、落英といふがごとし、さびしきさま。【三】晶光、すきとほりかがやくひかり、蓋し眼光をいふならん。【四】天寒、ふゆせらないう。【五】遺放、かひて無きゆゑ遠方まではなたれてある。【六】不取、取とは人がうまやへいれてくれるをいふ。【七】嗒嗒、さりきずのある處をくちばしでつつく。【八】且養、しほらく飼養してくれる。【九】願終惠、願延年騎白馬賦に願終惠養二藤本枝一符とあるに本々、願は馬之をれがふなり、終惠とは始め飼養するといふ惠をあたへるならばそれを最終まであたへてくれるをいふ。【一〇】更試、試とは行走の脚力をためしみることを。【一一】明年、早につきのとしをさす。

【題義】道傍のやせうまを見て感をのぶ。至徳二載房琯相を罷めしがために作るとの説あれども非ならん。けだし乾元元年作者左拾遺の官をやめられ華州の司功參軍に貶せられしにより、自己の境遇を馬に託してうたへるものなるべし。詩中の天寒遠放の語によれば元年冬の作か。  
【詩意】長安の城の東ののほらに瘦せた馬があるが之をみると自分はかなしくなる、その馬の骨ぐみはでこぼこ浮きだし、側面からみると土塚が立つてる様だ。これを細でつなぐとすると動かうとしていよいよからだをよこにする、その様子では、この馬はやせてはゐるがまだ以前のやうにをどりあがらうとするきもちがあるのだらうか。仔細にみるとこの馬には官でおした焼き印が六箇所ばかりある、人人のいふ所では官軍がみちばたにすてたのださうだ。その皮はひからびてはげちよろけて、泥やきたないかすが糞つてをり、毛のつやはうせてさびしくまつしろい色ががつづいてゐる。去年官軍は狂奔して賊軍の餘黨を逐ひましたが、その士卒どもは千里の駿足にはのりなれぬからのることが

できず、彼等は多くおとなしく訓練されてゐる宮中のおうまやの馬にのつた。自分のいたましくおもふのは、そのときこの瘦せ馬もおうまやの駿馬であつたのだが、病氣でもしてをつたのではあるまいか。病氣でもあつたのでそのころ土くれのうへをとほるときふとしたことであつた。それで防しすてられた、そんなわけですてられたのなら、そのすてらるることたるやとても汝（瘦馬）が防し得る所ではないのだ。（運命なのだ）今この馬は人を見てはものがなしさうにしてかなしみうつたへるが如く、主人を失ひてはさびしく眼の光もうせてゐる。このさむざらに遠くへはなたれて雁を伴侶となし、日がくれてもとどいれられず、鳥がきてきりきすの處をつついてゐる。（以下馬に代りてその心をもつ）何人かの家で自分（馬）をかりに飼養してくれるものはないか、もしあるならばどうかそのめぐみを最後までつづけてもらひたいものだ。そしたら、自分は明年春のわかぐさののびたときに更に自分の力をためしてみやうとおもふのだ。

義鶴行

義鶴行

陰崖二蒼鷹、養子黑柏頭。

陰崖の二蒼鷹、子を養ふ黒柏の頭。

白蛇登其巢、吞噬恣朝餐。

白蛇其の巢に登り、吞噬朝餐を恣にする。

雄飛遠求食、雌者鳴辛酸。

雄飛びて遠く食を求む、雌者鳴いて辛酸なり。

力強不可制、黃口無半存。

力強くして制す可らず、黄口半存する無し。

其父從西歸、翻身入長煙。

其の父西從り歸る、身を翻へして長煙に入る。

斯須領健鶴、痛憤寄所宣。

斯須健鶴を領す、痛憤宜ふる所に寄す。

斗上振孤影、嗷哮來九天。

斗ち上りて孤影を振し、嗷哮して九天より來る。

修鱗脫遠枝、巨穎拆老拳。

修鱗遠枝より脱す、巨穎老拳に拆く。

高空得踰躑、短草辭蜿蜒。

高空に踰躑たるを得、短草に蜿蜒たるを辭す。

折尾能一掉、飽腸皆已穿。

折尾能く一たび掉ふ、飽腸皆已に穿たる。

生雖滅衆難、死亦垂千年。

生衆難を滅すと雖も、死も亦千年に垂る。

物情有報復、快意貴目前。

物情報復有り、快意目前なるを貴ぶ。

茲實驚鳥最、急難心炯然。

茲實に驚鳥の最なり、急難に心炯然たり。

功成失所往、用舍何其賢。

功成りて往く所を失ふ、用舍何ぞ其れ賢なる。

近經瀟水澗、此事樵夫傳。

近ろ瀟水の澗を經、此の事樵夫傳ふ。

飄蕭覺素髮、凜欲衝儒冠。

飄蕭素髮の、凜として儒冠を衝かむと欲するを覺ゆ。

人生許與分只在顧盼間  
聊爲義鶻行用激壯士肝

人生許與の分、只在顧盼の間に在り。  
聊か義鶻行を爲り、用つて壯士の肝を激せしむ。

【字解】 一 陰崖 北むきのがけ。 二 蒼巖 二を或は有に作る、有の字自然なるに似たり、二とは雌雄をさす。 三 黒柏 柏の葉色くろきならん、即ち老柏。 四 願 いただき。 五 嗔 かも。 六 幸酸 つかい思ひをする。 七 力強 白蛇の力つよし。 八 黃口 だかのくちばし黄なる者。 九 無牛存 子の牛放さへし残存せぬ。 一〇 其父 父とは雄をさす。 一一 新須 須臾に同じ、しほのま。 一二 領 ひきある、つれてくる。 一三 健力 つよきこと。 一四 痛憤 痛憤のいたましきいきどほり。 一五 寄所宜 所宜とは體に向ひてのべ訴ふる所の言辭をいふ、寄とは寄託する、憤を辭に託するなり。 一六 斗上 斗、陸、同じ、たちまち、いきなり。 一七 上はのぼること。 一八 孤影 體のただひとつの身影。 一九 嗷嗷 はげしく鳴く。 二〇 九天 八方及中央の天。 二一 修脚 修は傳なり、長きこと、長きうろことは蛇の身ないう。 二二 脫遺枝 脫は脱離、柏の枝にからみついてゐたのを、そこからはなされるなり、遺枝とは梢ちかき枝なり。 二三 巨額 大なるひたひ、蛇首をいふ。 二四 拆さく 老拳 體のかたいこと。 二五 高堂 たかき所ら。 二六 得贈 贈はつかれる貌、それを得とは蛇のよわるをいふ。 二七 短草 地上のみじかき草。 二八 醉倒 倒はうれる貌、それを辭すとはしかあることを得ざるをいふ。 二九 折尾 なれた尾。 三〇 掉ふるひうごかす。 三一 飽腸 たかの子にたべあきたはらわた。 三二 穿穴をあける。 三三 垂千年 垂とは垂を後世までたれのこすをいふ。 三四 物情 事物の實情。 三五 報復 しかへし。 三六 快意 ころもきこと。 三七 黃日前 日のまへ手近にみるほど貴くわががたい。 三八 茲 此をさす。 三九 驚 つかもと。 四〇 最 いちばん。 四一 危念 危念難を救ふをいふ。 四二 心惘然 心、公明正大なるをいふ。 四三 功成 功とは蛇を殺せしことをさす。 四四 失所住 ゆくへがわからなくなる。 四五 用舍 行藏の義、用舍行藏は「論語」にみゆ、用ひらるれば行き、舍かるれば藏る、或は進退とさるも可。 四六 瀟水 長安の杜陵にあり、皇子陵より西北流して渭水に入

る。 四七 雨 ほとり。 四八 飄風 風にふかるさま。 四九 蒼髮 しがら。 五〇 噴 びきしまり、ぞつとするさま。 五一 新儒冠 髮がたちあがつて冠をつきささうとする、儒冠は儒者のかんむり、自己の冠をいふ。 五二 許與分 許與は我が意氣を人にゆるしあたふるなり、分は情分、分置、あひてあひてに應ずる心づくしなり。 五三 顧盼 ちよつとよこをふりむいてみる、ことつかのまをいふ。 五四 激 げげます。 五五 壯士 天下の勇壯なる人たち。

【題義】 義理ある鶻のことをよめるうたなり。鶻は「あをだか」の類、「ぬくめどり」といふ猛鳥なり。詩によれば作者の杜陵の住居に近き瀟水のほとりにて機夫よりききたる話にて、鶻が蒼鷹のために白蛇を殺し、こだかをくひしかたきを討ちたることをのべたり。乾元元年長安にての作。

【詩意】 北むきのがけに二匹のあをだかをだかかゝりて、黒い柏樹のつべんで子をそだててゐた。白蛇がきてその巢にのぼり、その子だかを呑んだりかんだりして、かつてに朝の食事をしてしまつた。時に雄だかは遠く食物を求むるために飛びだしてゐたが、巢ごもりしてゐた雌だかは鳴きつつつらいおもひをしてゐた。蛇の力はつよいからこの雌だかの力では制止しきれず、とうとう黄色いくちばしのこだかは半分ものこらすたべられてしまつた。そこへ雄だかは西の方からかへつてきた。(見るとこのありさまなので)身をかはしてまた煙のながくひきはえた天邊へとはひつてゆき、暫くするとつよい鶻をつれてきた。そして自分の抱いて居た憤りのところをばのべだすことばに託してすつかりはきたした。それをきくと鶻はいきなり空へとあがり、そのひとつのすがたを螺旋状に回轉してくだり、

はげしくさげびほえつつ天からおりて来た。この瞬間、蛇の長身は上方の枝からはなされ、蛇の大きなひたひは鶴のかたいこぶしにめちやめちやにさかれ、高い空でぐなぐなのためにあはされ、もはや地上の草でうねりくねつてゐるわけにはゆかなくさせられた。折られた尾はびくつとうごかしはするが、飽満した腸はすつかり穴をあけられてしまつた。この蛇は生きては多くのこだかをくひたやしたが、死んでほはじめな手本を千年の後までたれ残すことになつた。すべて事物に於てはしかへしといふことがある、この蛇が鶴にかたきうちされたことは眼前におこつたことで愉快さはいつそうである。この鶴は猛鳥のうちいちばんで、他の急難の折にそれを救うてやる心がかくもかがやいてをり、仇討ちの功ができあがるとどこへいつたかわからなくなつてしまつた。その進退出處はなんとかしこいことではないか。自分(作者)はちかごろ滴水のほとりをとほつたとき、このはなしを樵夫がかたりつたへてくれた。それをきくや自分は、ぞつとして風にそよぐしらが冠をつきさすがごとくにおもはれた。人生に於て他人に對し意氣相許すといふ情分のおこるのはただちよつとした瞬間にあるものである。世上の人もこの鶴のはなしから義心を起すかもしれぬ。それで自分はいささかこの詩をつくつて天下の壯士の忠義の肝腸を激勵しようとおもふのである。

畫鶴行

畫鶴行

高堂見生鶴、颯爽動秋骨。

高堂生鶴を見る、颯爽として秋骨動く。

初驚無拘攣、何得立突兀。

初は驚く拘攣無きに、何ぞ立つこと突兀たるを得るやと。

乃知畫師妙、巧刮造化窟。

乃ち知る畫師の妙、巧に造化の窟を刮り、

寫此神俊姿、充君眼中物。

此の神俊の姿を寫して、君が眼中の物に充つるを。

烏鵲滿樛枝、軒然恐其出。

烏鵲樛枝に滿つ、軒然として其の出でむことを恐る。

側腦看青霄、寧爲衆禽沒。

腦を側けて青霄を看る、寧ろ衆禽の沒を爲さむや。

長翻如刀劍、人寰可超越。

長翻刀劍の如し、人寰超越す可し。

乾坤空崢嶸、粉墨且蕭瑟。

乾坤空しく崢嶸たり、粉墨且蕭瑟たり。

緬思雲沙際、自有煙霧質。

緬かに思ふ雲沙の際、自ら煙霧の質有るを。

吾今意何傷、顧步獨紆鬱。

吾今意何をか傷む、顧步して獨り紆鬱たり。

【字解】【一】高堂、たかいざしき。この畫を見たるばしよ。【二】生鶴、生は生きてあること、畫とは見なさぬなり。【三】颯爽、威風あたりたはらふさま。【四】動秋骨、秋節に於ける鶴の骨のふしぶしが動いてゐる様だ。【五】初驚、このふをみた最初、驚は作者がおどろくなり。【六】拘攣、拘束のことし、寧ろ「つなぐ」なり、ひもにてくりおかないふ。【七】立突兀、突兀立に同じ、突兀はそびえたつさま。【八】乃知、よくみてこそ知る。【九】刮、けづりたる。【一〇】造化窟、造化は天然、窟はいはあな、む

くそこをいふ。【二】 神俊姿、すぐれたすがた。【三】 君、主人をさす。【四】 物、してあそびもの。【五】 探枝、下方へまがりたれたる枝。【六】 軒然、あがる貌。【七】 其出、其は畫鶴をさす、出とはそとへとびたすこと。【八】 側頭、あたまをかたむける。【九】 青背、あなぞら。【一〇】 穿鼻、なんぞなさんや、反語。【一一】 飛禽、しるしものとりのごとく草樹の間に埋没すること。【一二】 翮、たはれ。【一三】 人寰、人間世界。【一四】 乾坤、天地。【一五】 空際、静候はたかくひろさま、天地の間大なる、もしその間に飛び得れば静候たるに意義あり、畫に過ぎずして實に飛ぶ能はず、故に「空しく」といふ。【一六】 粉墨、畫の色影をいふ、粉はごふん。【一七】 且前塵、蕭瑟はさびしささま、且はまあまあの意。【一八】 籠、はるかに。【一九】 雲沙際、雲沙は沙漠地方の雲や沙をいふ。【二〇】 煙霧質、幽照が舞鶴狀に鶴の毛色の煙霧と同じきをのべて、煙交霧凝、若無毛質、といへり、いま鶴に借用す、煙霧質とは煙霧のごとき毛質、眞の鶴の毛をさす。【二一】 何處、何をかいたむ。【二二】 躡步、左右をふりかへりみてあゆむ。【二三】 軒、こころのむすばれるさま。鶴のごとく飛翔する能はざるをかなしむなり。

【題義】 鶴の畫をみて感したる所をのべた詩である。乾元元年、なほ朝廷にありて志を得ざりしとき、の作ならんか。

【詩意】 この高いさしきで生きた鶴がをるのを見る、その鶴は意氣颯爽として骨ぶしが動いてゐる。自分はこれを初めてみたとき、ひもでつないでもないのでに飛び去りもせず、なんでたかくつたつてゐるのであるかと驚いたが、よくみるとやつと次のことがわかつた、畫かきがうまくて、巧に天然の奥底をけづりとり、このすぐれた姿をうつして君(主人)がながめる品物としたものである、と。』  
庭前の垂れさがつた木の枝には鳥だの鶴だのがたくさんゐるが、彼等はこの鶴がたかくあがつて外部へとびだしはせぬかときづかうてをる。この鶴は首をかしげて青ぞらをながめてゐる、どうして多

くの凡鳥のやうに草樹の間に埋没してゐるやうなことをしやうぞ。その長いちねは刀劍の如くするどい、人間世界ぐらゐはたかくとびこえることができる。ただいかにせん、これは畫鶴で眞鶴ではないから、天地の間大もこの鶴にとつてはいいたづらに静候たるものであり、粉墨の色ばかりさびしく横はつてゐるのである。』それにつけても自分にははるかに思ふに、沙漠の雲沙の地に於ては、煙霧の毛質をそなへた眞の鶴がひとりで居るはずである。さやうな鶴がのぞましいのである。自分は今、心のなかで何事をいたんでゐるのか。(眞鶴のごとくなり得ざるをいたむのである。)左右をふりかへりつつあゆみ、自分ひとりであふさいでゐるのはどうした事か。

端午日賜衣

端午の日衣を賜ふ

宮衣亦有名、端午被恩榮。

宮衣亦名有り、端午恩榮を被る。

細葛含風軟、香羅疊雪輕。

細葛風を含んで軟かに、香羅雪を疊んで輕し。

自天題處濕、當暑著來清。

天よりして題處濕ひ、暑に當つて著來清し。

意內稱長短、終身荷聖情。

意内長短に稱ふ、終身聖情を荷ふ。

【字解】 【一】 宮衣、宮女のつくくりし衣、即ち下の葛、羅を以て製せしもの。【二】 亦有名、我亦有名の義、賜衣者の列内に自己

の姓名も亦これあるをいふ。【二】端午 夏曆にては正月を寅とし、五月は午にあたる、五月午なるため五の日をまた午とす、端は初  
の義、端午とは五月の初旬の午の日の義なりと。【三】恩榮 天子のこおんによる榮譽。【四】細葛 ほそくすのいにてつくりし  
衣をいふ。【五】含風 氣孔多くして風をいれやすし。【六】軟 やはらかしなやかなこと。【七】香羅 かんばしきうすぎぬの衣、  
香とは香なたきこめしならん。【八】墨雲 雲とは純白色をたとへていふ、白雲たみてあるを雲をたとひといへるなり。【九】輕  
ふわりとしてある。【一〇】自天 題署自天子を略し、題の字を下にいだせり、天子お手づから名を題したまへるをいふ。【一一】輕  
題處 かきたまうたところ、此句は首句の「有名」を承く。【一二】温 温の眞がうるほふ、かきたてなるをいふ。【一三】當暑 あ  
つさのなりに。【一四】著來 つけ來ればの義。【一五】清 さっぱりしてすがすがし。【一六】堂内 自己のこころのなかではかつ  
てみる。【一七】殿に天子の堂内とす、然れども恐くは天子一臣下の身の寸法をはかりたまはじ。【一八】稱 かなふ、つりあひよろ  
し、去聲によむ。【一九】長短 きものせたけ、そでたけ等の長し短しなり。【二〇】有 になふ、いただいてある。【二一】聖情  
聖君のおなまけこころ。

【題義】乾元元年の五月五日に宮中より衣をたまはりしことをのぶ。作者時になほ左拾遺たり。

【詩意】こんど賜はつた宮中でつくられた衣については、自分ほどのものの姓名まで御下賜者のなかにあつて、端午のおいはひ日にありがたき榮譽を被つた。そのきものは、細い葛の絲を用ひたのは風をふくんでしなやかであり、香をくゆらしたうすぎぬのものは雪色をたたんでふわりとしてゐる。御筆で題されたところは墨のあとまだ乾かず、暑さにあたつて之を身につければいとすがすがしい。はらのなかでつもつてみるにこのきものはまことに自分のからだの寸法によくあうてをる。これくださつた我が君のおなまけのかたじけなさは自分が一生涯になふ所である。

酬孟雲卿

孟雲卿に酬

樂極傷頭白 更長愛燭紅

樂極まりて頭の白きを傷み、更長うして燭の紅なるを愛す。

相逢難袞袞 告別莫匆匆

相逢ふこと袞袞たり難し、別を告ぐる匆匆たること莫れ。

但恐天河落 寧辭酒盞空

但だ恐る天河の落ちむことを、寧ぞ辭せむ酒盞の空しきを。

明朝牽世務 揮淚各西東

明朝世務に牽かれ、涙を揮ひて各西東ならむ。

【字解】【一】樂極 樂とは親友共歡のためしみをいふ。【二】頭白 自己の老いたるをいふ。【三】更長 更は更漏、みづどけいの刻限、長しと刻の多くたつないふ。【四】愛 愛惜すること。【五】袞袞 袞袞、つづく貌。【六】匆匆 せはしきさま。【七】天

河 あまのがは。【八】落 落ちてきゆる、あけがたのさま。【九】酒盞空 さかづきのからになること。【一〇】西東 一は西し、一は東して相わかれる。

【題義】乾元元年六月、華州の司功とせられ長安より去らんとせしとき、友人孟雲卿に返答としておくりし詩。

【詩意】樂しみのほては身の老いてかしろの白くなつたことをいたみ、夜のふくるままにともし火の光のくれなるををしむ。友だちどうし相逢ふことはひきつづきにくいものであるから、別れを告げることはせはしさうにしてはならぬ。ともにかたりあふ夜はあまのがはが落ちてあけがたになることのみをきづかふのであつて、酒をのみつくしてさかづきがからになることをどうしていなまうぞ。



あしたともならば俗事にひかれて、涙をおしぬぐうてめいめい東西にわかれねばならぬ身の上ではな  
いか。

至徳二載甫自京金光門出間道歸鳳翔乾元初從

左拾遺移華州掾與親故別因出此門有悲往事

至徳二載、甫、京の金光門より出で、間道より鳳翔に歸す。乾元の初、左拾遺より華州の掾に移され、親故と別る。因て此門を出で、往事を悲しむ有り

此道昔歸順西郊胡正繁

此の道昔歸順す、西郊胡正に繁し。

至今猶破膽應有未招魂

今に至つて猶膽を破る、應に未招の魂有るなるべし。

近侍歸京邑移官豈至尊

近侍して京邑に歸る、移官豈に至尊ならむや。

無才日衰老駐馬望千門

才無くして日日に衰老す、馬を駐めて千門を望む。

【字解】京、長安。金光門、長安の外郭の城の西側に三門あり、北なるを開道門、中なるを金光門、南なるを延平門といふ。金光門を西に出づれば昆明池の方へゆく。間道、わけみち。鳳翔、おしむく。移、轉任させられる。華州、華州の司功參軍をいふ、華州は長安の東百八十里にあり。親故、親戚故舊。往事、すぎしむかしのこと。此道、金光門よりでるみち。昔、至徳二載。歸順、順に歸すとは官軍につきしことをいふ。西郊、

長安城西のほら。胡、賊兵をさす。雲、讀本儀に作る。至今、今とは乾元元年六月。破膽、さしを  
やぶるとは驚くことの甚しきをいふ。未招魂、魂は作者自己のたましひ、生き霊をいふ、招かざるの魂とは魂飛びりて人之  
ないまだ呼びかへざるをいふ。楚の宋玉、その側服原が魂をよびかへすことなれば「招魂」を作る。近侍歸京邑、近侍して  
とは左拾遺の官を以て天子のそばに侍るをいふ、京邑とは長安の都をさす、歸とは鳳翔よりどり来るをいふ。この句は君寵  
を示せるものとみるべし。此句、仇氏は「杜陵」を引き、「近侍ヨリ京邑ニ歸カシム」とよませ、近侍の地位(左拾遺より京師の近侍(華  
州)に赴かしめし職)ととき、侍從して京に還るとよく説は是に非ずといへり。然れども仇氏の説の如くんばその意は「移官」の二字に  
盡く、何を苦しんでそれと同義義なる「近侍歸京邑」の五字を更に其前にのぶる要あらんや。故に余は「侍從還京」の説をとる。  
【五】移官、長安から華州へ轉任させる。【六】豈至尊、豈出於至尊之意の義、天子の御本意からでたものではない。事實は作  
者は房琯を救はんとせしが琯は乾元元年五月に官をおとされ、六月にいたりて自身もいださるるに至りしものにて、琯及作者を肅宗  
にそしりしものは實顯進明なる者なりし。【七】千門、宮殿の諸門をいふ。

【題義】至徳二載に自分は長安の金光門からで、ぬけみちをとほつて肅宗皇帝のおはした鳳翔の方  
へとおもひいた。乾元の初年に自分は左拾遺の官から華州の掾の役へと轉任させられ、親戚故舊らと  
別れ、それにつれてまたこの同じ金光門を出たので、まへのことをおもひだしてかなしみ、この詩を  
つくつた。蓋し乾元元年六月の作。

【詩意】この道は自分がむかし賊軍のなかから脱出して鳳翔の方へ歸順しにいつたときとほつた道  
だ。あのとき城西野外では賊軍らがいっぱいいた。あのときのきものやふれた様なおどろきは今でも  
まだつづき、魂が飛び去つたまままだよびかへされずにあるものがあるであらう。自分は鳳翔で左拾

遣の官をたまはり、おそばちかくおともをしてこの長安へもどつてきたほどだ。せつかく都へきて都からみなかへ官をうつされるといふことはどうして我が君ごじしんのみこころからでたことであらうや。(そんなことをさせたものが別にゐるのだ)自分は元來才のないものであるがそれが日日夜夜へ老いゆくのである、これが別れとおもふとはかにはたちさりかね、馬の足をとどめてちつと諸門をながめるのである。

寄高三十五詹事

高三十五詹事に寄す

安穩高詹事、兵戈久索居。

安穩なりや高詹事、兵戈に久しく索居す。

時來知宦達、歲晚莫情疎。

時來らば官の達せむことを知る、歲晚情疎なること莫れ。

天上多鴻雁、池中足鯉魚。

天上に鴻雁多く、池中に鯉魚足れり。

相看過半百、不寄一行書。

相看て半百を過ぐるに、一行の書を寄せず。

【字解】【一】安穩、おだやかに無事。【二】兵戈、いくさ。【三】索居、散居なり、朋友ちりぢりになつてゐる。【四】鴻雁、知。【五】時來、よき時節がきたらば。【六】知、作者が誰れ知る。【七】宦達、仕宦のみちよくとほる、將軍についていふ。【八】歲晚、一年及人生の晩事をかねていふ、秋より以後は歲晚といふ。【九】情疎、こころがうとくなる。【一〇】鴻雁、鯉魚、表面は實物、裏面は「てがみ」のこと、漢の蘇武が雁の足につけたるてがみを天子射て得たりといふはなしあり。また古人はきめに書信

をかきそれを鯉魚の形に結びたりといへり。【一〇】相看、たがひにみるみるうちに。【一一】半百、五十歳、これは過が年齢に就いていふならん、作者は今年四十七歳。【一二】一行書、いちきやうばかりのみじかいてがみ。

【題義】太子少詹事の官たる高適に寄せたる詩である。高適は至徳二載に揚州大都督府長史・淮南節度使となりしが、永王璘敗れて、官者李輔國しは適を天子にあしざまにいふ、因つて太子少詹事を授けらる。詹事は東宮の三寺・十率府の政令を掌る、少詹事は詹事の副官にて正四品上なり。乾元元年の作ならん。

【詩意】高君よ、君は無事であらしてゐるのか、いくさの騒ぎで久しくはなればなれになつてゐる。君は節度使から少詹事とされ官をおとされたが、自分はまだ時節がくれば君がきつと榮達することを知つてをる、歳のかかるをりに疎遠にはしてくれたまふな。そらには鴻雁が多くとび、池の中には鯉魚がたくさんをる。(てがみをよこすつではいくらかもありさうなものだ)かれこれしてをるうちに君は五十歳以上になつたではないか、それに一行ぐらゐのてがみさへよこしてはくれぬ。(いつたいうしたのであるか)

贈高式顔

高式顔に贈る

昔別是何處相逢皆老夫。

昔別れしは何の處なりしぞ、相逢へば皆老夫。

寄高三十五詹事 贈高式顔

故人還寂寞，削迹共艱虞。 故人還た寂寞、迹を削られて共に艱虞。

自失論文友，空知賣酒墟。 論文の友を失ひしより、空しく知る賣酒の墟。

平生飛動意，見爾不能無。 平生飛動の意、爾を見ては無きこと能はず。

【字解】(一) 老夫 老人。(二) 故人 式類をさす。(三) 寂寞 さびし、おろぶれてなるまなまをいふ。(四) 削迹 あしあとをまこからけづりてなくせられる、放逐されるをいふ、此句によるに式類もまた作者の貶せられしとき貶せられしか。(五) 艱虞 なんざ、しんばい。(六) 論文友 高適をいふ、失友とは仇氏は邈が揚州にあるをいふといへるも乾元元年には邈揚州にあらざるなり、けだしただ同じく居らぬことをいふ。(七) 賣酒墟 晋の王戎、嵇康・阮籍等の死後にもかし彼等と贈飲せし黄公の墟を過ぎて嗟歎せしこと「世説」にみゆ、墟は「へつつい」なり、そのうへに酒具をならぶ處なり、作者壯年時代に高適・李白等と宋・驥の地に遊び賣文贈飲、贈遺贈酬せしこと五古「遺懷」にみゆ、中に遺興高李輩、賣文(魯魯年譜引、交作、文)入酒墟の語あり。(八) 飛動意 活潑にうごきたしとおもふころ。往年の英氣勃勃たりしころもちをさす。(九) 爾 式類をさす。(一〇) 無 上の「意」の字をうく、不能無意とつづく。

【題義】高適が姪なる高式顔におくつた詩。作詩の年代に諸説あるも、詩中の「削迹」の語によれば華州にいだされし時の作なるべし。であひし處は仇氏は華州と洛陽との間なるべしといへるもさだかならず。

【詩意】君とむかしどこでお別れをしたのであつたか、今おあひしてみるとおたがひに老人になつてゐる。我が舊知である君もちかごろは景氣がわるくさびしさうであり、貶官放逐のめにあうて、かか

る自分とともになんざしんばいをしてをられる。君のおちさんにあたる高適は自分とは文をかたりあふ親友であつたが、彼を失うてからは、自分にはただ嘗て彼といつしよに飲んだ酒屋のありさまでだけがあつてゐる。いま君をみるにあたつては、ひごろからもつてゐる物然たる意興がおこらぬわけにはゆかぬ。

題鄭縣亭子

鄭縣亭子澗之濱

戶牖憑高發興新

雲斷岳蓮臨大路

天晴宮柳暗長春

巢邊野雀羣欺燕

花底山蜂遠趁人

更欲題詩滿青竹

晚來幽獨恐傷神

題鄭縣亭子

五八七

鄭縣の亭子に題す

鄭縣の亭子澗の濱

戶牖、高きに憑れば發興新なり。

雲斷えて岳蓮大路に臨み、

天晴れて宮柳長春に暗し。

巢邊には野雀羣がりて燕を欺り、

花底には山蜂遠く人を趁ふ。

更に詩を題して青竹に滿てむと欲するも、

晚來幽獨にして恐らくは神を傷ましめむ。

【字解】(一) 鄭縣 華州の城郭にくつつきて置かれたる縣の名。(二) 亭子 ちん、小さな休みばしよ。

(三) 憑 たにの水、鄭縣にある西溪をいふ。

(四) 發興 興は副詞にみるべし。

(五) 暗 暗はかべのまど、この二字は副詞にみるべし。

(六) 欺 高、たかいたころによつてながめる、戸牖からながめるなり。

(七) 趁 興、興味をおこす。

(八) 岳蓮 興

華山の姿をいふ、華山は華州の東南にあり、蓮花峰をいふ、山頂に池ありて千葉蓮花を生ずるによりて名くといへり。【一】大路、街道をさす。【二】宮、長春宮のやなぎ。宮の字を一に宮に作る、官柳は官よりうみたやなぎをいふ。【三】晴、葉のしげりてかすめるさまをいふ。【四】長春、宮の名、陝西同州朝邑縣にあり、黄河をへだてて華州よりは東北にあたる、肉眼ではそのあたりまで見えずるならんもさやうに感ぜらるるをいふなり。【五】葉、つばめのすをいふ。【六】款、常用のときは款悔の義、「あなどるし」ことにて「あざむく」とは異なり。【七】花底、百花の中央をつきぬけるをいふ、他の詩に「穿花」とあると同意。【八】地、おふ、あとからおびついてくること。【九】滿、青竹、青竹はえてある竹のみきをいふ。滿はいつばいにかきつける。【一〇】幽、しづかにただひとりなる。【一一】傷、こころをいたましめ、かなしましめる。

【題義】華州の縣にある亭にかきつけたる詩、實はそこにある竹に題せし詩なり。作者華州へ赴任せんとするときの作ならん。

【詩意】縣の「ちん」がたにまの水のほとりにある、その「ちん」の戸やまどから高處によりてながめると新しく興がわきおこる。雲がとだえて華岳の遠峰が大道にさしかかつてをり、そらははれわたつて河むかひの長春宮のあたりに柳が小暗くみえてゐる。ややちかくでは燕の巢のそばへ野らのすずめどもがやつてきてそれをあなどつてをり、花樹のあひだをとほつてゆく人を山ばちがおなじやうにとどこまでもとくつついてゆく。(遠景近景ともにおもしろい)そこで自分をもつと詩をかきつけて「ちん」のそばの青竹の幹にいつばいになるほどにしやうかとおもふのではあるが、いかにせん、夕かたまけてさびしいひとりみのことであれば、ただこころがいたましめられることをきづかふので

ある。(だから詩もそんなにたくさんはできまい。)

望岳

岳を望む

西岳峻嶒竦處尊、  
諸峰羅立似兒孫。  
安得仙人九節杖、  
拄到玉女洗頭盆。  
車箱入谷無歸路、  
箭栝通天有一門。  
稍待秋風涼冷後、  
高尋白帝問真源。

【字解】【一】峻、山の高き貌。峻は聳と通ず、そびゆる、あがる。處は居ること、上座にふむ。【二】羅立、つらなりたつ。立を一に列に作る。【三】安得、希望をいふ。【四】仙人九節杖、九節杖は九つのふしのある竹のつみ、仙人のつくもの。【五】拄、ささへる。【六】玉女洗頭盆、山頂の玉女祠前に石臼あり、ながの水澄碧にしてつねに臂減なし、之を玉女の頭を洗ふ盆と號す。【七】車箱、谷の形状をいふ、箱は車體なり、或は谷名とする解あり、車箱入谷とは車箱の空みのぞめばわづかに明光をみるといふ、箭栝は蓋し穿穴の形状、通天とはそこより高處にかよふをいふ。【八】一門、上述のまき一道をたとへていふ。【九】白帝、西方の神にて華山を支配す。【一〇】真源、仙道のまことの本源。

【題義】華州に赴任するとき、途にて華山をのぞんで作れる詩なり。華山は支那五岳のうちの西岳にあたる、華州華陰縣の南にあり。

【詩意】西岳である華山はたかくけはしく、そのそびえて居すわつてゐるさまはたふとくみえる。それにくらべると他のもろもろの峰峰はつらなり立つてゐるが華山といふおほおやちの兒どもか孫たちのやうである。自分はどうかして仙人がもつてゐるといふ九節の竹杖を得て、その杖にからだをささへられつつ頂上の玉女の洗頭盆のあたりまでゆきたいとおもつてゐる。この山はその車箱形をした谷へはひるともどりみちもなく、やはすのやうなせまくほそい天へのかよい路がただ一門あるばかりだ。だんだん秋風がすすしくつめたくなるのをまつて、自分は白帝の鎮座してゐるこの山をたづねて仙道の本源を問ひただしたいとおもふ。

早秋苦熱堆案相仍

早秋熱に苦しむ、堆案相仍る

七月六日苦炎蒸。對食暫餐還不能。常愁夜來皆是蠍。

七月六日炎蒸に苦しむ、能はず。食に對して暫く餐せむとするも還た常に愁ふ夜來皆是れ蠍なるを、

【字解】(一) 夜來、よるからかけて、來は以來の義、一に夜中に作る。(二) 皆是蠍、蠍は人をさす蟲の名、或は自足、蠍に作る。(三) 東帶、衣冠をつけ帯をしめる、官の禮服をつけること。(四) 憂狂、こころが狂ひだす。(五) 簿書、官文

況乃秋後轉多蠅。

況や乃ち秋後轉多きをや。

東帶發狂欲大叫。

東帶狂を發して大に叫ばむと欲す、

簿書何急來相仍。

簿書何ぞ急に來ること相仍るや。

南望青松架短壑。

南望すれば青松短壑に架す、

安得赤腳踏層冰。

安んぞ赤脚踏層氷を踏むことを得む。

か。(一〇) 赤脚、すあし、はだし。(一一) 層氷、あつくはりたるこほり。

【題義】はつ秋のとき炎熱にこまつてゐるところへ、つくゑのうへに山とつまれる官文書がひききりなしにくる、そのことをのぶ。乾元元年の秋、華州にての作。作者は六月に華州にいだされしに、この詩に七月六日とあれば蓋し赴任後まもなくつくりしものならん。

【詩意】七月の六日、むしあつくて苦しくてしかたがない。食事にむかうてもよつとたべやうかとおもふがとでもたべられぬ。いつも夜分になると自分をおそうてるやつは蠍ばかりなので心配してゐるが、ましてそのうへ秋になつてからはいよいよ蠍が多くなつた。窮屈な官服で身をかためてゐると氣ごころもくるひだして大聲でもださうかとおもふ。かかるときにどうして急に書類がひききりなしにやつてくるのだらうか。南をながめると、きつたてのたにのうへに青い松が横にはえてゐる、どう

したならばあの山の奥へはひりこんですあしであついで水をふむことができやうか、できればさうしてみたい。

觀安西兵過赴關中待命 二首

安西の兵の過ぐるを觀る、關中に赴きて命を待つなり 二首

四鎮富精銳、摧鋒皆絕倫。 四鎮精銳富めり、鋒を摧くこと皆絶倫なり。

還聞獻士卒、足以靜風塵。 還た聞く士卒を獻すと、以て風塵を靜かならしむるに足る。

老馬夜知道蒼鷹饑著人。 老馬夜道を知る、蒼鷹饑ゑて人に著く。

臨危經久戰、用急始如神。 危に臨みて久戰を経たり、急なるに用ふれば始めて神の如くならむ。

【字解】 一、安西、安西都護府をいふ、元德元載に安西節度は鎮西とあらためられしに、ここに安西といへるは舊稱にしたがへるなり。 二、關中、邠州をすぐるなり、東より來て西に向ふなり。 三、關中、長安附近をいふ、東は函谷關、西は隴西關を以て界とし、その以内の地を關中といふ。 四、待命、天子のおほせをまつ、軍の行動についての指揮の命令をまつなり。 五、四鎮、龜茲・疏沙・鐵勒・焉耆の四鎮、みな安西都護府の統ぶる所なり。 四字一に西に作る、西なれば即ち鎮西をさす。 六、精銳、くばしくするどき兵卒。 七、摧鋒、敵軍のほこさきをうちくだく。 八、獻、天子にたてまつる。 九、靜風塵、ほこりをしづめるといふ。 十、老馬、韓非子に齊の祖公が孤竹國を伐ち、還るとき道を失ひたるに、管仲は老馬之智可用也といひ老馬を放ちてそのあとよりしたがひたりといふ。 主將の職になれしことこの老馬の道を知るがごとくなるをいふ。 十一、蒼鷹、鷹の一種

兼が故事、已に見ゆ。兼は鷹のごとく鷹うれば人に附き、鷹は高く翔びさる、士卒勇悍にして鷹の體を以て人につき用を爲すことくるをいふ。 二、臨危、あやふきときに際して。 三、用急、急の字は上句の危の字に接す、急なるに用ふ」とは國家危急の時に於て其力を用ふればの義。(節長節の説に用フルト急ナレバ」とよませ、用兵の法が急速なればの義とせり。) 四、如神、兵の效を奏する人力以上のものあるをいふ、如を二に知に作る。

【題義】 安西都護府に屬する兵が華州を過ぐるのを觀て作れる詩。その兵はこれから關中へゆきて將來の行動について天子の仰せを待つものである。乾元元年六月、李嗣業、懷州(今の河南懷慶府河内縣治)の刺史となり、鎮西北庭行營節度使に充てられ、八月、郭子儀等と同じく歩騎二十萬に將として安慶緒を討つ。これは李嗣業の兵が懷州から長安へ赴く道すがら華州を經しものにて八月討伐にでかけざる以前のことなり。

【詩意】 四鎮(或は西鎮)には精銳の兵がたくさんをつて、かれらが敵鋒をくだくことはたぐひをこえてをる。さけばその四鎮はこのたび天子に兵卒を獻じて御用をつとめるさうだが、彼等ならば十分世のちりはこりをしづかにすることができる。彼等將士は其の智は老馬が夜にも道を知つてをること、其の意氣は鷹が饑ゑて人についてゐるやうなものだ。天下の危きにあたつて、彼等はながながのいくさの經驗をもつてをる、之を急の場合に用ふるときには始めて彼等の奏する效は不可思議なるものがあるであらう。

〔一〕

奇兵不在衆萬馬救中原

奇兵衆に在らず、萬馬中原を救はむとす。

談笑無河北心肝奉至尊

談笑河北を無みず、心肝至尊に奉ず。

孤雲隨殺氣飛鳥避轅門

孤雲殺氣隨ひ、飛鳥轅門を避く。

竟日留歡樂城池未覺喧

竟日留まりて歡樂す、城池未だ喧しきを覺えず。

〔三〕

【字解】 〔一〕奇兵 晉の安帝のとき、沈田子が曰く、兵貴用奇、不必在衆と、首句其意をとる。〔二〕萬馬 多くの兵馬。〔三〕中原 黃河南北の地方。〔四〕談笑 將士が談笑するなり。〔五〕無河北 無は無視すること、河北は河北道をさす、河北道は孟・懷・魏・博・相・衛・貝・洹等の二十九州を領す、時に賊將安慶緒は相・衛に據れり。〔六〕心肝 心ころ。〔七〕奉 さまさげたまつる。〔八〕至尊 天子(肅宗)。〔九〕隨殺氣 殺氣が雲にしたがひ下よりたかくのぼる。〔一〇〕避轅門 轅は兵車のかち棒、車をつみて、その棒をむかひあはせに門形をつくる、轅門は軍門、避くとはその威風をさけてあたりをとほらぬなり。〔一一〕竟日 終日。〔一二〕留 鄭州に逗留する。〔一三〕城池 鄭州のしろ、ほり。

【詩意】 兵法は奇策を用ふるのが貴いのであつて、人數のたくさんあるといふことにあるものではない。この安西の兵は萬馬を以て中原の地方を救はうとしてゐるのだ。わらひばなしのうちにもはや河北の賊境など眼中に無しとするかの如く、その心はひとすぢに我が君へとささげてゐるのだ。天に一片の雲がかうかべば殺氣はその雲までなかくのぼり、飛ぶ鳥も威風をはばかつて軍門のあたりをよけてとほる。かかる軍隊で紀律も正しいから終日ここにのこつて歡樂しつゝあるけれども、ここの城ではちつともやかましさをおぼえぬのである。

【餘論】 「草堂詩箋」は此詩を乾元二年秋七月作者が官を棄てて秦州に居りし以後の作とせり。之によれば兵は西よりして東にむかひしことになり、兵の過ぎた場所は秦州となる。

九日藍田崔氏莊

九日、藍田の崔氏が莊

老去悲秋強自寬 老い去つて悲秋に強ひて自ら寛うす、

興來今日盡君歡 興來つて今日君が歡を盡くす。

羞將短髮還吹帽 羞らくは短髮を將て還帽を吹かるる。

笑倩傍人爲正冠 笑ふ傍人を倩うて爲めに冠を正すこゝとを。

藍水遠從千澗落 藍水遠く千澗より落ち、

玉山高竝兩峰寒 玉山高く竝びて兩峰寒し。

明年此會知誰健 明年此の會知ら(す)誰か健なる、

醉把茱萸仔細看 酔うて茱萸を把りて仔細に看る。

【字解】 〔一〕悲秋 ものがなしき秋の節、悲秋とよむも可ならん。

〔二〕自寬 自己の悲憤をくつみけ、なぐさむる。

〔三〕盡君歡 他人が我をよるこぼさうとしてその八分をうけ二分のこすが君子の體とせらる、こゝは先方の歡待を十分にうけつくすをいふ。君は主人崔氏。

〔四〕短髮 作者の老いてみじかくなりしかみのけ。〔五〕還 また、我もまたの意。

〔六〕吹帽 晉の孟嘉、桓温が參軍となり、九日に龍山に遊びしとき、たまたま風きたりて

孟嘉が帽を吹き落す、嘉おちつきてひろひてまたがぶりしといふ、杜詩には風をいはずしてただちに「吹」といふこと往來あり。【一】情、やとよ。【二】傍人、そばのひと。【三】爲、我がために。【四】正冠、冠は即ち上句の帽なり、正とはまがらぬ様になほすこと。【五】藍水、藍田にある川の名。【六】千湖、多くのたにま。【七】玉山、藍田にある山の名、即ち藍田山。【八】兩峰、余は玉山に屬する二つの峯かとおしふ、舊解は兩峰を玉山と別物とす、而してその兩峰をば或は華山及び泰山なりとし、或は華山の東北なる雲臺山の兩峰なりとなす、別物とするときは玉山高竝は「玉山と高く竝びて」とよむべし。【九】知微、知の下に疑詞があるときは「知」は「不知」の義となる、即ち不知誰健の意、古來「知る」とよまずと雖も其義をなます。【一〇】把、とる。【一一】茶黄、ぐみ、九日に「ぐみ」を佩び菊酒をのめば長壽なりとせらる。沈徳潜は茶黄を酒の名とす。【一二】仔細、くばしく。【一三】看、蓋し茶黄の枝をみつめるなり。古來多くこの義にとけり。沈徳潜は茶黄をみることの無意味なるをいひ藍水と玉山とを看ることとす、即ち「酒を把つて山水をみる」ととく、但、茶黄をみるとする決して無意味には非ず、上句に「誰健」とありて主賓の健康を意としての語なれば長壽のしるしたる茶黄を仔細にみるは却つて意深し。

【題義】陰曆九月九日重陽の菊の節句の日に藍田縣の崔氏が別莊に於て作れる詩。藍田は長安の南にある縣の名、華州より八十里ばかりへだたる、乾元元年華州司功たりしときの作。

【詩意】自分はだんだん年老いて悲しき秋にあたつて無理にむねのうちをくつろげんとし、今日は興のわくままに十分に君がささげてくれる歡情をうけつくした。はづかしいことには老いの短いかみのけながらにまた昔の孟嘉あつかひにして風が帽子を吹きおとすし、わきの人にたのんでその帽子のかぶりぐあひをさちんとなほしてもらふなどは自分ながらをかしい。莊外をながめると、多くのたにまの水をあつめて遠くそこから藍水が落ちてくるし、玉山はその二つのみねが高くならんで寒色をた

たへてゐる。今日は主賓ともにかくおもしろくすごすが、さて明年のこの會には、はたしてだれがかはりなくなつしやでゐるであらうか、それをおもつて自分は酔ひながらぐみの枝を手にしてくはしくながめるのである。

崔氏東山草堂

崔氏が東山の草堂

愛汝玉山草堂靜。

愛す汝が玉山草堂の靜かなるを、

高秋爽氣相鮮新。

高秋の爽氣相鮮新。

有時自發鐘磬響。

時有時か、自ら發す鐘磬の響、

落日更見漁樵人。

落日更に見る漁樵の人。

盤剝白鴉谷口栗。

盤には剝ぐ白鴉谷口の栗、

飯煮青泥坊底芹。

飯には煮る青泥坊底の芹。

何爲西莊王給事。

何爲ぞ西莊の王給事、

柴門空閉鎖松筠。

柴門空しく閉ちて松筠に鎖す。

【字解】【一】玉山、已にみゆ。

【二】高秋、天たかき秋。【三】爽氣、さわやかな氣。【四】相鮮新、鮮新は新鮮なり、あたらしくあざやか、相とは蓋し山色に關していふ、山色の翠と秋氣の澄碧とがたがひにその新鮮をきそふをいふ。【五】鐘磬、こる。【六】鐘磬響、かれ、磬石のおと、これは附近に寺あるなるべし。

【七】漁樵人、魚をとる人、たきやしばをとる人。【八】盤、大きなまら。【九】剝、はぐ、皮をむくこと。

【一〇】白鴉谷、縣の東南二十里にある谷の名、栗によろしき地なりと。

【一一】西莊、縣の東南二十里にある谷の名、栗によろしき地なりと。

【一二】柴門、松筠に鎖す。

【一三】松筠、松と竹。

【一四】鎖、くはしく。

【一五】柴門、松と竹に鎖す。

【一】青泥坊、坊は防と通ず、「つつみ」をいふ、青泥城は縣南七里にありといへば防はその城の水をたくはふるつつみなり。【二】崔氏東山草堂



序 沈德潜の註に序は十二文の韻字なれば寒の字の誤なるべしといへり、序は「せり、専は「じゅんさい」。【一】西莊 崔氏草堂の西にある別荘。【二】王給事 王維がこと。王維は宋之間が藍田の別墅を得て住せり。即ち輞川莊なり。肅宗長安に遷るや維は太子中允となり、また給事中となれり、このとき維は長安にありて莊に在らざるなり。【三】柴門 王維が莊の柴でつくりし門。【四】鶴松筠 鶴は竹の膚の青色をいふも竹そのものの義として用ふ、松筠に鎖すとは松竹の林の中にとざるをいふ。尾二句につきては作者が王維に早く仕をやめてかへるべきことを願せしなりとの説あれども余は之を取らず、ただたまたま維の不在を見て之を思ふ情みのべしものとみる。

【題義】 前詩の崔氏と同じく藍田の崔氏なり、東山は藍田縣の東南にある藍田山、即ち玉山なり、草堂はかやぶきの堂なり。此の堂は前詩の別荘とは異なるものなり。此の詩は崔氏が東山の草堂にて作る。前詩と同時期の作。

【詩意】 自分は深く愛す、君のこの玉山の草堂は閉静であつて、秋の爽かな氣と山の色とがたがひに新鮮をきそつてをる様であることを。また時としては近い寺でもならずのか鐘や磬のおとがひとりでにおこつてくるし、日の落ちかかるときそのうへ漁夫樵人らがかへりゆくのをみることができ。また食物についてみると、大きな皿には白鶉谷のほとりのでとれた栗が皮をむいて盛りだされ、ご飯にませては青泥坊でとれたせり（或はじゆんさい）が煮られる。ここへ西どなりの王維でも居るといつそういいのだが、どうしたためか彼の別荘はいたづらに柴門が閉ぢられて松竹林中にかぎをおろしてある。

遣興 三首

興を遣る 三首

我今日夜憂諸弟各異方

我今日夜憂ふ、諸弟各一方を異にす。

不知死與生何況道路長

死と生とを知らず、何ぞ況や道路の長きをや。

避寇一分散飢寒永相望

寇を避けて一たび分散し、飢寒永く相望む。

豈無柴門歸欲出畏虎狼

豈柴門の歸るべき無からむや、出でむと欲して虎狼を畏る。

仰看雲中雁禽鳥亦有行

仰いで雲中の雁を看る、禽鳥にも亦行有り。

【字解】 【一】 諸弟 年したのいとこ等までをふくむ。 【二】 異方 方位をべつべつにする。 【三】 避寇 寇とは賊軍をさす。 【四】 柴門 柴門之可、歸者をいふ、洛陽の家をさす。 【五】 虎狼 盜賊をいふ。 【六】 行 行列、雁の行列は兄弟長幼の順位をあらはす。

【題義】 さびしき感興をはらひのけるために作つた詩である。洛陽の兄弟、故宅、舊交等をおもふことをのべたり。乾元元年官をやめて後の作。

【詩意】 自分はいまひとなく夜となくしんばいしてゐる、なせかといへば、弟どもがそれぞれ別の方向の地にをる。その死も生もわからぬうへに、彼等とのあひだをへだててゐる道路は長い。賊軍をさけたときひとびちりちりになつてから、飢寒の間になく彼等の居る方をながめてゐるばかりで

ある。自分がかへるべき柴門の家がないわけではないが、でかけやうとしては虎狼の様な盜賊をおそれて、できることができない。そらをあふいで雲まの雁をみると、とりでさへ一定の行列がある。(しかるに我我は別離してをるために列をなすことができぬ。)(この詩は兄弟をおもふことをのぶ。)

(一)

(二)

蓬生非無根。漂蕩隨高風。  
天寒落萬里。不復歸本叢。

蓬生する根無きに非ず、漂蕩高風に隨ふ。  
天寒くして萬里に落つ、復た本叢に歸せず。

客子念故宅。三年門巷空。

客子故宅を念ふ、三年門巷空し。

悵望但烽火。戎車滿關東。

悵望すれば但烽火、戎車關東に滿つ。

生涯能幾何。常在羈旅中。

生涯能く幾何ぞ、常に羈旅の中に在り。

【字解】蓬、よもぎぐさ。【二】漂蕩、ただよひうごく。【三】高風、そらたかく吹く風。【四】天寒、そのそらをいふ。【五】落、墜がおつる。【六】萬里、遠地をいふ。【七】本叢、もと生じたくさむら、故郷をたとへていふ。【八】客子、たびびと、作者自己なます。【九】故宅、昔居のものとやしき。【一〇】三年、前詩の蓬生を五原元載とすれば三年にて乾元元年が三年となる。【一一】門巷、故宅の門巷にだれもぬ。【一二】戎車、兵車。【一三】關東、函谷關の東、洛陽、河北方面をいふ。【一四】羈旅、たび、羈は寄なり。

【詩意】よもぎの草が草むらに生えるには根が無いわけではないが空たかく吹く風のまにまにただよ

はされ、冬のさむそらに萬里の遠方の地へ吹き落され、ふたたびもとの草むらにもどることがない。(自分の身のうへはちやうとそんなものだ。)たびびととしての自分は故郷の宅のことをおもふが、いまで三年の間、家のあたりの小路にだれもをらぬのだ。うらみつつふるさとの方をながめるとただ危急を報するのろしびばかり見え、いくさぐるまが關東に充滿してゐる。自分の生涯はどれほどの年月あるといふのか、あまりおほくもないのに、いつもたびのうちにくらしてゐるのである。(此詩は故宅をおもふことをのぶ。)

(一)

(二)

昔在洛陽時。親友相追攀。

昔洛陽に在りし時、親友相追攀す。

送客東郊道。遊遊宿南山。

客を送る東郊の道、遊遊南山に宿す。

煙塵阻長河。樹羽成阜間。

煙塵長河を阻す、羽を樹つ成阜の間。

回首載酒地。豈無一日還。

首を回らす載酒の地、豈に一日の還るべき無からむや。

丈夫貴壯健。慘感非朱顏。

丈夫壯健なるを貴ぶに、慘感として朱顏に非ず。

【字解】洛陽の南の山、即ち龍門の伊闕山。【二】煙塵、兵馬のちり。【三】阻、へだつ、あひだをじやますこと。【四】長河、黃

河なます、即ち洛陽近くあるもの。【一】樹羽、樹は立てること、羽は羽につけた旗、軍に用ふるもの。【二】成華、華の名、河南の汜水縣の東南二里にあり。【三】龍池地、龍酒は揚雄が故事、龍酒の地とは友だちどうし酒をのせてゆきさせしところ。【四】一日還、可還之一日ないふ。【五】參威、かなしくいたむすがたないふ。【六】朱顔、少壯時の血色あかきかほはせ。

【詩意】自分がむかし洛陽にゐたときは親しい友だちと互にすがりついてはなれなかつた。あるときは遠方へゆく客を東郊の道で送つたり、或時はあそびたのしんで南方の山にとまつたりもした。ところが今は兵馬の塵がじやまをして黄河をへだて、羽をつけた軍旗が成華關のあたりにいつぱいになつてをる。むかし友だちと酒をのせてゆききしたところをふりかへつてみると、そこへ還ることのできる日がないでもない、あるひはあるだらう。ただうらむのは、丈夫たるものは壯健なのを貴ぶのに、自分はかなしさうなさまをしてゐて、そのかははもはやむかしのあからがほではないといふことだ。

獨立

獨立

空外一鷺鳥、河間雙白鷗。

空外の一鷺鳥、河間の雙白鷗。

飄飄搏擊便容易、往來遊。

飄飄搏擊便なり、容易ならむや往來して遊ぶこと。

草露亦多濕、蛛絲仍未收。

草露亦濕ひ多し、蛛絲仍未だ收めず。

天機近人事、獨立萬端憂。

天機人事に近し、獨立して萬端憂ふ。

【字解】【一】空外、空は天をいふ。【二】鷺鳥、つよいとり、たかしの類。【三】鷗、かしめ。【四】飄飄、風のただよふさま。【五】搏擊、搏も「うつ」なり、狐兎禽鳥のことき獲物をうちとる、便は便利。【六】容易、仇氏は「容易ならんや」と反語によみたり。【七】蛛絲、くものいと。【八】收、かたづけること、「くもしが絲であみをはるは餌をとるためなり。【九】天機、天然のなかにひそむ微妙なばたらき、鳥と蟲とのことをさす。【一〇】近人事、近とは近似するをいふ、人事とは人事についての道理をいふ。【一一】萬端、端は緒なり、萬緒とはさまざまにといふこと。

【題義】獨り立ちて偶然見とめた景物について感のをぶ。或は李白・鄭虔のごときものが禍の網にふれんとしてをることを諷したものであらうかといへり。ただ他人のことについてか、自己のことに ついてかは明かならず。乾元元年華州にての作ならんといふ。

【詩意】天外にとぶ一つのたけき鳥。河の波まにういてゐる一對の白いかもめ。たけき鳥は風の吹くに乘じて獲物をうちとるに便利がよいが、そんな鳥がねらつてゐるのでは、かもめはどうしてたやす く往つたり來つたりしてあそぶことができやうぞ。また夕方はどすぎて草のうへの露もしめりが多くなつてきたころだのに、くも蟲はやつぱり網の絲をはつてかたづけやうともせず、なにかをそれでひつかげんとしてゐる。この鳥と蟲とが他物を害せんとしてゐるさま。このなかにふくまれてゐる天然の微妙なばたらきは、人事上の道理とも似たことである。之をおもつて、自分はひとり立ちながらさまざまにしんばいしつつかあるのだ。

至日遣興奉寄北省舊閣老兩院故人 二首

至日興を遣り、北省の舊閣老・兩院の故人に寄せ奉る 二首

去歲茲晨捧御牀

去歲茲の晨御牀を捧す、

五更三點入鵝行

五更三點鵝行に入る。

欲知趨走傷心地

知らむことを欲す傷心地に趨走し、

正想氤氳滿眼香

正に氤氳たる滿眼の香を想ふことを。

無路從容陪語笑

從容として語笑に陪するに路無し、

有時顛倒著衣裳

時有つてか顛倒して衣裳を著く。

何人却憶窮愁日

何人か却て憶はむ窮愁の日、

日日愁隨一線長

日日愁は一線に隨つて長きことを。

【字解】【一】至日 冬至の日。

【二】遣興 前に見ゆる如く、憂興を排遣するなり。

【三】北省 唐のとき門下省・中書省をさして北省といふ。

【四】閣老 兩省の官、たがひに敬稱するとき之を閣老といふ。

【五】兩院 兩省の院をさす。院は「つめしよ」ないふ、拾遺・補闕の官のつめしよをさす。

【六】故人 舊知の人人、即ち作者の同僚。

【七】去歲 至德二載。

【八】茲晨 去年の冬至のあした。

【九】捧 捧さす

【一〇】御牀 天子の御椅子。

【一一】鵝行 鵝は、おほとり、行は行列、官員の列をたとへいふ。

【一二】從容 隨つて長きことを。

【一三】陪 陪は、おほとり、行は行列、官員の列をたとへいふ。

【一四】語笑 在京の閣老故人の語笑。

【一五】顛倒 顛倒著衣裳、これは長安の宮中にてのさま。

【一六】窮愁 窮愁日、日とは時に同じ、窮愁は困窮し且愁ふること、職闕道の廣卿が故事、これは作者のさま。

【一七】一線 一線に二義あり、一は縫管間の習俗にて宮中にて紅き線を以て日影を量るに冬至以後は日影が一線の長さだけながくなるといふ、一線は長さ(尺寸)については記載を見ず、二は唐の宮中にては女工を以て日の長短をはかるに、冬至からはいつもいくらべて一線分だけ多くしことができるといふ。同じ一線なれども前者は空間的、後者は時間的のほかりかたなり、後説よろしからんといふ。

【一八】題義 冬至の日にむねのおもひをやるため門下・中書兩省の舊官や兩省の院にゐる知りあひの人人に寄せた詩。蓋し乾元元年十一月華州にての作。

【一九】詩意 自分は去年の冬至のあさげには御所へまかりでて御牀をあふぎたてまつり、五更三點のあさはやく諸官員の行列のなかへはひりこんだ。ことしは華州にをるのである、自分ばかりかゝるゐなかのかなしいところで上官の前で奔走しつちやうどいまは長安の宮殿で諸員の眼中香煙がもやもや立ちのぼつてゐるのだなと想像してゐる、このことを諸君から知つてもらひたくおもふ。自分は上官からよばれるので時として(けふもさうだが)大急ぎにあわてて衣と裳とをあべこべに著けてでかけた

りするが、もはやゆつたりとして諸君にしたがつてともに笑話するといふみちはない。自分はいま窮愁の境遇に在つて、その愁たるや冬至以後の太陽の時間が婦女の線ぶんの仕事だけながくなつてゆくとおなじ様に長くなつてゆくといふことをだれがおもてくれるであらうか。

〔一〕

〔二〕

憶昨逍遙供奉班。

憶ふ昨逍遙たり供奉の班、

去年今日侍龍顏。

去年今日龍顏に侍す。

麒麟不動爐煙上。

麒麟動かす爐煙上り、

孔雀徐開扇影還。

孔雀徐に開きて扇影還る。

玉几由來天北極。

玉几は由來天の北極、

朱衣只在殿中間。

朱衣は只在り殿の中間。

孤城此日腸堪斷。

孤城此の日腸斷ゆるに堪へたり、

愁對寒雲雪滿山。

愁へて寒雲に對すれば雪山に滿つ。

は左右より扇を合はせ、升りなほりたまへばまた扇を左右に開く。【一】徐開 左右から合はせた扇をしづかにばなす。【二】玉几 天子のおよりになる玉の脇息。【三】天北極 天子の位は天上星宿界にては北極星の座に比す、因つてかくいふ。【四】朱衣 御史大夫の從官のきるさしのなり、このものは朝會のなり、かけこゑして百官を班位に就かせる。【五】雀を作者の眼とみる説あるし今取らず。【六】只在 只今從在の意、此二字は上句の「由來」とともに想像を加へてのべし語なり。【七】殿中間 殿の中間、こゝで人のなかほど。【八】孤城 孤立した城、華州のしろをさす。【九】寒雲 冬そのの雲。【一〇】山 長安の方位にあたりてみゆる踏山。

【詩意】おもひだしてみる、前年自分はゆつたりと供奉の列にあつて、去年のけふは龍顏にはんべつてゐた。そのときは宮中で麒麟の香爐がちつとすわつてそれから香の煙がたちのぼり、しづしづと孔雀の團扇が左右にひらかれてそれぞれの位置へとつき天顏があらはれた。ところがことしはそこへだたつて、御座の脇息はもとより天の北極の位にあつてかはらぬが、百官に著席をうながす朱衣の屬官のすがたはただ長安のこゝのまんなかになつてはみられぬ。かかるしだいでの華州の孤城ではけふは自分の腸が十分ちぎれさうであり、愁へながらに冬そのの雲にうちむかへば遠山には雪がいつばいかぶさつてみえる。

路逢襄陽楊少府入城戲呈楊四員外綰 (原注)甫赴華州日許寄員外伏蒼

路にて襄陽の楊少府が城に入るに逢ひ、戲れに楊四員外綰に呈す (原注)甫、華州

路逢襄陽楊少府入城戲呈楊四員外綰

寄語楊員外山寒少茯苓。

語を寄す楊員外、山寒くして茯苓少し。

歸來稍暄暖當爲斷青冥。

歸來稍く暄暖ならば、當に爲めに青冥に斷りて、

翻動龍蛇窟封題鳥獸形。

龍蛇の窟を翻動し、鳥獸の形に封題し、

兼將老藤杖扶汝醉初醒。

兼ねて老藤杖を將て、汝が酔ひの初めて醒むるを扶くべし。

【字解】

【一】路、華州より洛陽へゆく路。【二】襄陽、華州の人にて華州の尉官なるべし、名は詳ならず、少府は尉の職稱なり。【三】入城、城は華州の城。【四】員外、楊員外、字は公權、華陰の人、憲宗の位に即くや、賊中より鳳翔の行在に赴き起居舍人知制誥に除せられ、司勳員外郎、職方郎中を歴たり。司勳員外郎、員外といふ。館、時に華州にありしなるべし。【五】寄語、このことばをおまへにいうてやる。【六】楊員外、館。【七】山寒、山は華州の山、けだし華山をいふ、この「山寒」以下結句まで全部こつての語なり。【八】茯苓、千年の松の樹の下に生ずといはるる藥草なり、「まつほど」といふ。【九】歸來、今は洛陽へでかける路なるゆゑ華州へしどり來つたとときといふなり。【一〇】暄、あたたか。【一一】當爲、當の字は尾句までかかる。爲とは「汝が爲めに」の義。【一二】斷、刀を地にさし草根をきるをいふ。【一三】青冥、松樹の色をいふとの解あるも取らず、山の高地の空氣の色をいふものとみるべし。【一四】翻動、ひつくりかへす。【一五】龍蛇窟、龍蛇のすむやうな深いいはや、茯苓の在るところをいふ。【一六】封題、封じてうけがきをす。【一七】鳥獸形、陶隱居の「本草」に茯苓は皮黒くして皺あり、内は堅く白く、形、鳥獸龜鼈の如き者良し、とみゆ。【一八】老藤杖、老いたる藤づるの杖、これも華州の産物。【一九】扶、たすく、からだをささへさせる。【二〇】醉初醒、酔ひをたすけさせるをいふ、押韻のために醒むることまでをいへり、館は酒好きの人とみえたり、結語は館れの意を帯びたり。

【題義】洛陽へゆく路で楊少府が華州城へ入りこまうとするのであつた。そこでたはむれに楊館にこの詩をおくつた。自分は華州へ赴任したときに館に茯苓といふ藥草をやるといふ約束をしておいたのだ。此詩は乾元元年冬の暮、作者が華州からでかけて洛陽へゆかうとしたとき作つたもので、華州よりは東方で楊少府とてあひ、それに楊館へのことづてをたのんだのである。

【詩意】自分は楊館に對することづてをする。いま華州の山は冬の寒さで茯苓はすくない。だから自分がまた華州へもどつてだんだんあたたかになつたなら、高山の青冥なるところへいつて、地面をきれものでつきさし、龍蛇のゐる様ないはやをひつくりかへし、ほりあてた鳥獸の形した茯苓は、それを封じてそのうはがきををし、またそのうへに約束はしてゐないがふるい藤づるでこしらへた杖をもそへて、おまへの酔ひぎめのよろめきをたすけさせることにしようとおもつてゐる、と。

冬末以事之東都湖城東遇孟雲卿復歸劉顥

宅宿宴飲散因爲醉歌

冬末、事を以て東都に之かむとし、湖城の東にて孟雲卿に遇ひ、復び劉顥に宅に歸りて宿す。宴飲散す、因つて醉歌を爲くる

疾風吹塵暗河縣

疾風塵を吹いて河縣に暗し、

【字解】

湖城東遇孟雲卿復歸劉顥

行子隔手不相見。湖城城東一開眼。駐馬偶識雲卿面。向非劉顥爲地主。懶回鞭轡成高宴。劉侯歡我攜客來。置酒張燈促華饌。且將欸曲終今夕。休語艱難尙酣戰。照室紅爐簇曙花。縈窗素月垂秋練。天開地裂長安陌。寒盡春生洛陽殿。

行子手を隔てて相見ず。湖城の城東一たび眼を開く。馬を駐めて偶々識る雲卿が面。向きに劉顥が地主たるに非んば、鞭轡を回らして高宴を成すに懶し。劉侯我が客を攜へて來れるを歡び、酒を置き燈を張り華饌を促がす。且つ欸曲を將て今夕を終へむ、語るを休めよ艱難尙酣戰すと。室を照す紅爐曙花を簇らし、窗に縈(焚か)なる素月秋練を垂る。天開け地裂く長安の陌、寒盡き春生す洛陽の殿。

冬のくれ。【一】之。ゆく。東都。洛陽。【二】湖城。縣の名、河南陝州開封縣の東、その地に開湖ありて太古黃帝が鼎を鑄たるころなりといひつたふ。【三】孟雲卿。前に見ゆ。【四】復歸。この語によれば作者は劉顥の宅より出發していままたかへり來りしなり。【五】劉顥。蓋し縣令ならん。【六】河縣。黃河に沿うた縣、卽ち湖城縣をいふ。【七】行子。たび人、みちゆくもの。【八】隔手。あまりの風塵ゆゑ手を以て目を遮るをいふ。【九】不相見。お互にみえぬ。【一〇】雲卿。孟雲卿。【一一】向。さきに、「一たび已にそこにやどりしことをさかのぼりていふ。【一二】地主。土地の主人役。【一三】懶。ものうし、氣がすすまぬ。【一四】回。ひきめぐらす。【一五】

豈知驅車復同軌。可惜刻漏隨更箭。人生會合不可常。庭樹雞鳴淚如霰。

豈に知らむや車を驅る復た同軌、惜む可し刻漏更箭に隨ふ。人生會合常にす可らず、庭樹雞鳴きて涙霰の如し。

んぎ。【一】驅車。このとし九月、九節度の兵、安慶緒を都にかこむ。【二】更箭。火の形容なり。【三】刻漏。諸本みな漏とあれど余は更の誤に非るかと思ふ、箭は「めぐる」なり、更は「あきらまし」なり。【四】素月。しろき月。【五】秋練。秋のねりさねは白し、以て月光の白きをたとふ。【六】天開地裂。京房の易古の語なりといふ、曰く天開陽不足、地裂陰有餘、皆兵起下害之上之象と。これは前年長安の賊に陥りしことをさす。【七】陌。市街の道をいふ。【八】寒盡春生。實際の氣節をいひ、策れて亂極まりて治まらんとし、洛陽の回復されし意をふくみていふ。【九】驅車復同軌。雲卿と共に同じ車路をとほり來りしをよろこぶなり、(天下一統、同文同軌の意とする説は之を取らず)。【一〇】別離。みづどけい。【一一】更箭。時間を示す「や」。【一二】涙如霰。別離せざる可らざるを悲しむなり、霰を一に積(いとすぢ)に作る。

【題義】冬のくれある用向きで洛陽の方へゆかうとしたところが、湖城の東で孟雲卿にであうた。それでまた劉顥の宅へもどつてとまつた。その夜、宴會がすんでからこの酔中の歌をつくつた。【詩意】とく吹く風がほこりをふきつけて河ぞひの縣がまつくらで、みちゆく人たちも手で目をおさへるとどちらもあるひてがめにみえぬ。自分は湖城の東でちよつと眼をあけて、馬をとめてみたらふと

孟雲卿のかほをみるとめた。それですぐ雲卿を劉顛が宅へひつばつてきた。若しこの土地の主人に劉顛がなつてゐなかつたとしたならば自分も鞭やたづなをひきめぐらしてあとへもどつてさかんな宴會をするなどといふきもちになれなかつたであらう。」劉君が自分がおきやく(雲卿)をつれてきたのをよろこんで酒を設けともし火をつり、りつばなごちそを急がせてこしらへさせてくれた。自分たちはうちくつろいで心おきなうこんばんをかたりあかすべきであつて、世事なんぎでまださかんに官賊たかかひをつづけてゐるなどはなしはせぬがよい。へやぢう爐の火がかんかんあかく照つてあけぼの花がむらがつた様にみえるし、まどにかがやく白色の月光は秋のねりぎぬをたれたかとおもはれるほどだ。」さきに長安のまちのみちは「天開き地裂くる」といふひどいめにあうたが、いまや洛陽の宮殿では寒がつきて春が生せんとしてゐる。このとき意外にも自分は孟雲卿と同じみちを車馬を驅つてきてうれしいのだが、いかにせん惜しいことには水どけいの箭がすすむにつれて刻限がうつるのである。人生において會合はいつもできるわけのものではない、それに庭の樹でははとりが鳴きだした、別れねばならぬ。自分は悲しくて涙があられのごとくはふりおつるのである。

閩郷姜七少府設餼戲贈長歌

閩郷の姜七少府餼を設く、戲れに長歌を贈る

【字解】 閩郷 今河南省陳州開封縣なり、漣

陽より東、函谷陽より西に

姜侯設餼當嚴冬

姜侯餼を設く嚴冬に當る

昨日今日皆天風

昨日今日皆天風ふく

河凍味魚不易得

河凍つて味魚得易からず

鑿冰恐侵河伯宮

氷を鑿たば恐くは河伯の宮を侵さむ

饗人受魚鮫人手

饗人魚を受く鮫人の手

洗魚磨刀魚眼紅

魚を洗ひ刀を磨けば魚眼紅なり

無聲細下飛碎雪

聲無くして細かに下りて碎雪飛ぶ

有骨已剝薺春葱

骨有るは已に剝し薺(薺)は春葱

落礎何曾白紙濕

礎に落つる何ぞ曾て白紙濕はむ

放筋未覺金盤空

筋を放にするも未だ覺えず金盤の空しきを

偏勸腹腴愧年少

偏へに腹腴を勸めらるる年少に愧づ

軟炊香飯緣老翁

軟に香飯を炊ぐは老翁に緣る

新歡便飽姜侯德

新歡便ち飽く姜侯の徳

閩郷姜七少府設餼戲贈長歌

六一三

あたる。字體しと誤に作りしが後漢のとき閩に改むといふ。【一】姜七少府姜は姓、少府は縣尉の職稱。【二】餼 魚肉のいきづくり。【三】姜侯 姜君の意。【四】嚴冬 寒さのきびしきふゆ。【五】天風 そら、風ふく。【六】河凍 黄河の水こぼる。【七】味魚 一に鮫魚に作る、鮫はイナナシの類。【八】鑿氷 こほりにあなをあける。【九】河伯宮 河の神のすみか。【一〇】饗人 料理する人。【一一】鮫人 南海にすむもの、こゝに魚を捕へるものないふ。【一二】魚眼紅 生けるがこくなるをいふ。【一三】細



清觴異味情屢極。

清觴異味情屢極。極まる。

東歸貪路自覺難。

東歸路を貪る。自ら難きを覺ゆ、

欲別上馬身無力。

別れむと欲して馬に上れば身力無し。

可憐爲人好心事。

憐む可し人と爲り好心事、

於我見子眞顔色。

我に於て見る子が眞顔色。

不恨我衰子貴時。

恨まず我が衰へて子が貴き時、

悵望且爲今相憶。

悵望するは且今の相憶の爲めなり。

下。こまかにきざみて下方へおろす。【五】碎雪

こまかくこられた白魚肉の形容。【六】刻。きりくたく。【七】鶯春。此語

講家解一ならず、胡夏客は鶯を鶯とす、鶯は肉ある骨

なれば之によれば鶯春意とよむべし、骨つきの肉は春

の「れぎ」のごとくきりき

さむをいふ、また「心解」

【八】鶯春。鶯は上の「細下」の「下」のごとし、きりておと

す、鶯は石と同じ、魚を料理する石のだい。【九】何曾白紙。きり肉は水にて洗はぬゆゑ紙にのせても紙がしめらぬ。【一〇】放

筋。放の字、仇氏は箸を「おく」(放停の義)とみたるも、浦氏に従ひ「ほしいままにする」義とみるべし、筋は箸と同じ、「ほし」

【一一】未覺。これはからになるまでむさぼり食ふ意にもみられ、分量多きゆゑいくらたべてもからになるのがわからぬ意ともみら

れる。いま「餘りある」意とみる。【一二】金盤。うつくしい大皿(落華何曾白紙。放筋未覺金盤意の二句はもと偏動腹腹腹半

少、飲飲香飯飯老翁の次ぎにありしな、仇氏は「杜康」に従ひて「こにうつしたり。【一三】腹腹。魚の腹邊の肉のあぶら、さき、こ

の肉は尊者に供すといふ。【一四】懷年少。作者老人として貴はるるをなほづるなり。【一五】飲飲。やはらかにたく。【一六】香飯

ごまのめし。【一七】老翁。としより、作者自身。【一八】新歡。姜少府とは朝對面なるゆゑ新といふ。【一九】飽。飽。既解」の時に

みえたる。【二〇】清觴。すんだ酒のさかづき。【二一】異味。かばつたあぢはひ、味をさす。【二二】情屢極。情は姜の情、屢とは

酒といひ魚といひ色の點に於てたびたびといふこと、極とは至極をつくすこと。【二三】東歸。洛陽へかへる。【二四】貪路。おそ

ないそぐ、一日中になるべく多くの路をゆかんとの意心なです。【二五】無力。意がすすまぬゆゑからだにも力なし。【二六】爲人。爲人

妻の人から。【二七】好心事。いいきだてのもの。【二八】於我。我に對する關係に於て。【二九】子。妾。【三〇】眞顔色。まことの

かほつき、心。【三一】我衰子貴時。時の字かろし、後日についていふ、貴は顯貴の地位にのぼること。【三二】悵望。うらめしくな

がめる。【三三】且爲。且は「いささか」、「まあ」、爲は去聲によむためなり。【三四】今相憶。今ただちに君をおもふ、この末段

が般にあたる。【三五】題義。閬郷縣の尉官をしてゐる羌某が自分のために魚のいきづくりをこしらへてごちそうをしてく

れたので、たはむれにこの長いうたを作つておくつた。乾元元年冬、華州を離れて洛陽に赴かんとす

るとき途中の作。【詩意】姜君はこの嚴寒の冬にあたつて魚の生きづくりをこしらへてくれるといふのだが、きのふも

けふもいづれも風が吹いてゐる。氷にあなをあけるのでは黄河の神のすまひを侵すおそれがあるし、

河のこぼつたときには鮓魚を得やうとしてもなかなか得られぬ。(それに生きづくりをこしらへたの

だ)れふしの手から料理人が魚をうけとる。魚をあらひ刀をといで、きりにかかるとうをはあかいま

なこをしてゐる。料理人の庖刀はおもたてず魚肉をきりおろすと雪のこながとぶ。骨のあるところ

はすつかりきりくだいてしまひ、骨つきの肉は春の葱のやうに白くほそくこしらへる。それを石のま

ないたのうへへおとしても、しいてある白紙をもすこしもしめらさぬ。いくら箸をふりまはしてむさばりたべても之を盛つた金盤はからにはならぬ。自分をば尊客あつかひをして、腹のあぶら肉のころをしきりとすすめてくれるが、これは自分がわかい人人にはづる所である。またこのおやちのためだとしてごまの飯をやはらかにたいてくれるのである。」あらたにうちとけたなかだのに、はや自分は姜君の徳に満腹した。清腹といひ異味といひ君は一再ならず自分のために情のありたけをつくしてくれた。自分は旅程を食つて洛陽の方へかへるのだが、君のなさをおもふとそれもむつかしい。別れやうとして馬にはのぼるが気がぬけてからだに力がない。まことにいちらしい、君の人からは氣だてがよい。君のまことのかほつきは自分に對する關係に於てそれがうかがはれる。自分は將來、君が榮達をし、自分が老衰する時節がくるなど遠いさきことは恨みはしないが、ただ今即坐の君をおもうて忘れられぬところからうらめしくながめやるのである。

戲贈閬郷秦少府短歌

戲れに閬郷の秦少府に贈る、短歌

去年行宮當太白

去年行宮太白に當る、

朝回君是同舍客

朝より回れば君是れ同舍の客

【字解】 去年、五德二載。

行宮、風翔のあんぐう。

太白、太白は山の名、已に見ゆ、

當とは、山のみゆる地にあたるをいふ。

朝回、行宮の參朝からもどる。

君、秦をさす。

同心不減骨肉親、 同心減せず骨肉の親、  
 每語見許文章伯、 每語許さる文章の伯と。  
 今日時清兩京道、 今日時清し兩京の道、  
 相逢苦覺人情好、 相逢苦だ覺ゆ人情の好きを。  
 昨夜邀歡樂更無、 昨夜邀歡樂み更に無し、  
 多才依舊能潦倒、 多才舊に依つて能く潦倒す。

はだしくしか願する。【一】人情好、人のこころがしんせつになる。【二】邀歡、秦が自分をむかへて歡待してくれた。【三】樂更、それほどのたのしみは別にはない、樂しみの極點であつた。【四】多才、秦をさす。【五】依舊、もとほりに。【六】能潦倒、潦倒はおちぶれるさま。能とはさやうにしてゐることができるといふこと。浦氏はこの「能」の字の用法を賞めたり。秦氏が多才でありながらこの尉官やらんで満足してゐてくれたればこそ自分は十分たのしめをしたのである、とて他人のおちぶれてゐるのをよろこぶが如くいひたるところが「戲れ」なり。末の二句他の諸解あれどもみな取らず。

【題義】 閬郷の尉官秦某におくつたみじかいうた。前詩と同時の作。唐制にて縣の尉官は一人なるに同地に姜・秦の二尉あるは疑ふべし。

【詩意】 去年はちやうど太白山のみゆる處に我が天子の行宮があつた。あのとき朝廷からさかると君は自分と宿舎を同じくしてくらしてゐた。兩人のあひだにへだてた心がなかつたことはちすぢの親戚

かなんどもまけぬぐらゐであつて、君は口ぐせの様に自分を文壇の霸長として許してくれた。」としのけふは時節が平和に東西兩京の道も風塵が清らかなり、一般人とであうてみても非常に親切心もでてきたやうにおもふ。ことにゆふべは君に招待されてうちとけばなしをしたがあんな楽しみはほかには無い、これといふも君の多才でありながらいつものとほりおちおちされることを平氣でこなすなかの縣に居てくれるからだとおもふ。

李鄠縣丈人胡馬行

丈人駿馬名胡驪

丈人の駿馬胡驪と名く、

前年避賊過金牛

前年賊を避けて金牛を過ぐ。

迴鞭却走見天子

鞭を廻らして却走して天子に見ゆ、

朝飲漢水暮靈州

朝には漢水に飲ひ暮には靈州。

自矜胡驪奇絕代

自ら矜る胡驪奇代に絶ゆ、

乘出千人萬人愛

乗り出づれば千人萬人愛すと。

一聞說盡急難才

一たび急難の才を説き盡くすを聞く、

【字解】(一) 李鄠縣 鄠縣の縣

命李某、鄠縣は西安府に屬す。(二)

丈人 尊長かますことば、前にみゆ。

(三) 胡馬 蓋し西域に産せるうまならん。(四) 胡驪 驪はくりげす

ま。(五) 前年 天寶十五載。(六)

迴鞭 鞭は遼山の兵。(七) 過金牛

金牛は縣の名、四川省保寧府昭化縣東南、金牛を過ぐとは玄宗の蜀に奔るに従つて其地を過るをいふ。(八)

自矜 初め南に向ひしを北へとめぐるす。(九) 却走 あとへしどりで

轉益愁向驚駘輩

轉益 驚駘の輩に向ふことを愁ふ。

頭上銳耳批秋竹

頭上の銳耳は秋竹を批ち、

脚下高蹄削寒玉

脚下の高蹄は寒玉を削る。

始知神龍別有種

始めて知る神龍別に種有り、

不比俗馬空多肉

俗馬の空しく肉多きに比せざるを。

洛陽大道時再清

洛陽の大道時再び清し、

累日喜得俱東行

累日俱に東行するを得るを喜ぶ。

鳳臆龍鬣未易識

鳳臆龍鬣未だ識り易からず、

側身注目長風生

身を側てて目を注げば長風生ず、

竹をばすかひにそぎきりたるがことし。

【三】 神龍別有種 駿馬は龍の精氣をうけてうまるとかんがへらる。よみて龍の種といふ、丈人の馬をさす。

【四】 多肉 馬は筋骨たくましきをよしとす、肉多きはあしきまなり。

【五】 俱東行 仇氏は作者が丈人と同行すとく。(浦氏はこの馬とともに東行す、即ち李丈人よりこの

【一〇】 轉益 作者が愁ふるなり。

【一一】 批 批は「うつ」、秋の

【一二】 削寒玉 玉をけづりたる如し。

【一三】 俗馬 凡俗の

馬をかりてそれにのりてゆくことなかくいへるものなせり、今従はず。【三】風塵、風塵の塵なむれ。【四】龍響、龍のひれのやうなたてがみ。【五】側身、我が身をかたむける。【六】注目、馬にめをつけてみる。【七】長風、とほくまで吹くかぜ。

【題義】鄂縣の縣令李某の外國産の馬のことをよめるうた。乾元元年冬洛陽へ赴くときの作。

【詩意】李丈人の駿馬は胡地の産にかゝる栗毛馬だといはれてゐる。丈人は前年この馬にのつて賊兵をさけて玄宗皇帝のおとをおうて金牛縣のあたりまでゆきすぎた。それから鞭をめぐらしあともどりしてまた肅宗皇帝におめみえをした。即ちこの馬には、朝には漢水に於て水筒ひ、暮には靈州にみづかうたのだ。丈人はほこりていふ、この馬は非凡世に絶えたもので、之にのつてでかけると千人も萬人もがみながこれを愛する、と。自分はこの馬が人の急難を救ふ才能があることを十分に説かれるのを丈人の口からきくと、いよいよおぞまなどに向ふことをうれはしく感ずるのである。丈人の馬はその頭の上のするどい耳は秋の竹をそいたごとく、脚の下部のたかくあがつたあついひづめは寒玉を削つたやうだ。これをみてはじめて神龍は別にその種があるもので、とてもいたづらに肉の多い凡俗の馬などくらべものにならぬことがわかつた。いまや洛陽の大道も平和の時節がふたたびきたので、自分はこの旅行中いくにもいくにも丈人と同行し得ることをよろこぶ。丈人の乗つてゐるこの馬が果して名馬の相にかなうた風塵龍響をそなへたものかどうかはしりにくい、身をかたむけて目をつけてみると馬のゆくところ遠く遠く吹く風のおこることははつきりわかる。

觀兵

兵を觀る

北庭送壯士、貔虎數尤多。

北庭壯士を送る、貔虎數尤も多し。

精銳舊無敵、邊隅今若何。

精銳舊敵無し、邊隅今若何。

妖氛擁白馬、元帥待瑠戈。

妖氛白馬を擁す、元帥瑠戈を待つ。

莫守鄴城下、斬鯨遼海波。

守る莫れ鄴城の下、鯨を斬れ遼海の波。

【字解】【一】北庭、北庭節度をいふ。【二】送、おくりこせしむる。【三】貔虎、壯士のつよきものなたとはいふ、貔は虎のたぐひ、猛獸なり。【四】精銳、精銳されしとす。【五】邊隅、かたよりたる地方、范陽あたりをさす。(舊説鄴城とす、凡そ敵境に接したる地を邊といふと。)【六】妖氛、兵氣をいふ、わるい氣。【七】擁白馬、白馬は貔の鞭脊侯景が故事、既にみゆ、こゝは史思明等の賊將をさす、史思明は時に魏州(直隸大名府元城縣東)を陷る。【八】元帥、郭子儀をさす、郭子儀はさきに副元帥となりて洛陽を回復せり、今、元帥を以て子儀に授けられんことをのぞむなり。【九】瑠戈、瑠戈はほりものなしたは、天子より元勳に賜はるものなり。【一〇】鄴城、河南彰徳府安陽縣治、即ち唐の相州なり。【一一】鯨、賊軍のかしら、史思明が軍をさす。【一二】遼海、遼東の海、これは渤海灣にありて史思明が根據地たる范陽と遠からず、故にいふ。

【題義】乾元元年の冬、洛陽にありて北庭の李嗣業の兵の來りしを觀しことをよめり。この年九月に朔方節度使郭子儀、淮西の魯兗、鎮西北庭の李嗣業等七節度に命じ、步騎二十萬に將として、賊將安慶緒を討たしめ、李光弼・王思禮之を助く。之を九節度の軍と號す。十一月、九節度の軍、鄴城を

【詩意】 明年に至り、正月李嗣業軍中に卒し、三月史思明鄴を救ふ。官軍大敗す。此篇は前の「觀安西兵過」詩と併せ看るべし。

【詩意】 北庭節度の方からこちら（洛陽）へ壯士を送つてよこした。この軍には貔虎のやうなつよい兵の数がいちばん多いのである。彼等の精銳なことはもとから敵するものがないのであるが、今邊隅の場所である范陽あたりの様子はどうか。妖氛は叛將の白馬をつつんでゐる、副元帥は元帥として弼弋をさづけられかけてをる。官軍たるものは鄴城の下ばかりにへばりついてゐてはならぬ。直に進んで賊の巢穴をついて遼海の波に鯨を斬りすてる様にせねばならぬ。

憶弟二首（原注）時歸在河南陸渾莊 弟を憶ふ 二首

喪亂聞吾弟、饑寒傍濟州。

喪亂に聞く吾が弟、饑寒濟州に傍ふと。

人稀書不到、兵在見何由。

人稀にして書到らず、兵在り見ること何にか由らむ。

憶昨狂催走、無時病去憂。

憶ふ昨狂走を催がし、時として病の憂を去ること無かりき。

即今千種恨、惟共水東流。

即今千種の恨み、惟水と共に東流す。

【字解】 一 喪亂、人の死すると、世のみだると。二 傍、そば。三 濟州、山東省濟寧州。四 書、弟よりのがみ。

【一】 兵在、兵卒の依然として存すること。【二】 見、弟と面會すること。【三】 狂催走、作者が狂せんばかりに自己の光ることゝみうながす、賊を避けんがためなり。【四】 病去憂、憂とは自分が弟を思つてうれふるなり、病は作者の病氣。【五】 恨、作者のうらみ。【六】 東流、濟州の方位は東にあり。

【題義】 濟州にありし弟をおもつて作る。作者は乾元元年の冬、華州より洛陽に赴く、時に賊將安慶緒洛陽を棄てて走りし故に洛陽にかへるを得たり。題注の陸渾莊については、疑あり、陸渾山（河南嵩縣の東北四十里にあり）に在る別莊をいふか、或は首陽山にある宋之問の別莊の別名か。第二首によれば乾元二年の春、河南にての作なり。

【詩意】 いま天下喪亂のあひだにて聞くに、吾が弟は饑寒にせまられて濟州のあたりにゐるさうだが、往來する人もまれで手がみもこす、どこにも依然として兵卒がゐるのでは何によつて弟を見ることができやう。おもふに前年自分は賊を避けんがため狂ふが如く自己の逃走をうながし、病身ながらにおまへを思ふの憂をのぞき得る時としては無かつた。現在離れてゐるとおまへまの恨の念がわき、その念だけがただ水とともにおまへの居る東の方へむかつてながれるのである。

(11)

且喜河南定、不問鄴城圍。

且喜ぶ河南の定まれるを、問はず鄴城の圍み、

百戰今誰在、三年望汝歸。

百戰今誰か、三年汝が歸るを望む。

故園花自發 春日鳥還飛。 故園花自發 春日鳥還飛。 斷絕人煙久 東西消息稀。

【字解】(一) 河南定。定は平定、洛陽の賊軍の手より回復されしことをなす。(二) 不問。問題とせぬをいふ。眞に問題とせざるに非ず、喜びによりてしばらく意を用ひざるをいふ。(三) 鄆城。乾元元年十一月九節度が之をかこみしこと。前の「關兵」にみゆ。(四) 三年。至德二載以後をいふ。(五) 故園。ふるさと、洛陽をなす。(六) 人煙。民家炊事のけむり。(七) 東西。東は東、西は自己。(八) 消息。たより。

【詩意】自分は故郷へたちかへつてまづまづこの河南地方が平定されたのをよろこんで、鄆城の園みへがもどつてくるのを望んでゐる。しかし、このふるさとは花もひとりでひらき、春の日に鳥もまた飛ぶのに、已に久しく人家の炊煙はとだえ、東西ともにたよりがめつたにない。

得舍弟消息

舍弟の消息を得たり

亂後誰歸得 他鄉勝故鄉。 直爲心厄苦 久念與存亡。 汝書猶在壁 汝妾已辭房。

亂後誰か歸り得む、他郷故郷に勝れり。 直に心の厄苦することを爲す、久しく念ふ與に存亡せむ。 汝が書猶壁に在り、汝が妾已に房を辭す。

一ことを。

舊犬知愁恨 垂頭傍我牀

舊犬愁恨を知り、頭を垂れて我が牀に傍ふ。

【字解】(一) 鄆。河南の方へかへる。(二) 他郷。濟州をなす。(三) 故郷。河南。(四) 直。ひとすぢにの意。(五) 心。作者自身のころ。(六) 厄苦。こまりくるしむこと。(七) 與存亡。弟と生死を同じくする、第三句は第四句の結果なり、結果なきにのぶ。(八) 汝。弟をなす。(九) 書。書翰。(一〇) 壁。壁間をいふ。(一一) 汝妾。弟の侍女。(一二) 辭房。房は「へや」、主人歸らぬためひまをとりて去る、この房は河南の莊の房なり。(一三) 舊犬。もとからかはれてゐる「いぬ」。(一四) 愁恨。作者のうれひ、うらみ。(一五) 飾。そばによる。(一六) 牀。れたい。

【題義】弟のてがみを得てつくる。前の「憶弟」と近き時期の作ならん。

【詩意】天下のみだれてからのちはだれが故郷へかへることができやうか。故郷というたとてあれば、てて他郷の方がそこよりもまさつてゐるぐらゐである。自分ながらくおまへといつしよに生死したといとおもうてゐるのでそれが自分をしてかく心をくわしませるめにあはせてをるのである。いまこゝ(河南の莊)ではおまへの讀みのこした書籍はやはり壁の間にそのまゝのこつてゐるが、おまへの妾はもはやひまをとつて部屋からさつてしまつた。今昔のことにおもひふけて自分がかなしみうらんでをると、前からゐる犬もそのこゝろもちをさとしてか、頭をたれて自分のねだいのそばへよりそうてゐる。(後半の四句は消息に對する返事となる)

【餘論】此の詩前半の四句、弟の消息の意とみられざるに非ず。ただ舊解は皆作者の意をのぶるものと

するが故に暫く之に従つてとけり。仇氏は汝書猶在壁、汝妾已辭房につきて、辭房即書中之語、下旬因上、といひ、書をてがみとみ、汝妾已辭房は、てがみの内容とせり、其說首肯し難し。故に従はず。

不歸

歸らず

河間猶戰伐、汝骨在空城。  
河間猶戰伐す、汝が骨空城に在り。

從弟人皆有、終身恨不平。  
從弟人皆有り、終身恨み平かならず。

數金憐俊邁、總角愛聰明。  
數金俊邁を憐み、總角聰明を愛す。

面上三年土、春風草又生。  
面上三年の土、春風草又生す。

【字解】 一、河間、直隸河間府。 二、空城、人の居らぬさびしき所、河間府城をさす。 三、終身、しやうがい。 四、恨、作者のいにくらみ、從弟をもたなくなりしことをうらむなり。 五、數金、漢の時の童謡に河間野女工、數金とあり、その縁にて數金をいふ、數金とは金銀をかぞへること、いとこの幼時數を知りしことをおしひうかべていへり。 六、俊邁、すぐれたること。 七、總角、つのがみ、童形をいふ。 八、面上、仇氏は「墳土の上」なりととく、墓の表面とみしなり、之に従はば結の二句は面上三年土、春風草又生とし、こゝより河間の方を想像してのべしこととなる。ただ墓を想像していふ要なきに似たり。今取らず、面は作者の顔面なり。 九、三年土、土は塵土（ちりほ）なり、三年の間、風塵に奔走して顔面にほこりを帯ぶるをいふ。 十、草、文生、時令をいふ、蕭蕭にいま春が来たといふなり。

【題義】 作者の從弟の死してかへらざるものをいためる詩なり。詩中に「三年土」とあり、蓋し天寶

十四載に安祿山の軍河北の諸郡を陷れ、作者の從弟は十五載に死せしものならん。十五載より乾元二年までにて三年となる。詩は乾元二年春洛陽に在りての作。

【詩意】 いまでも河間地方では戦伐がつづいてゐる、おまへの骨はそのさびしい城に横はつてゐるのだ。人はみなだれも從弟をもつてをるが自分もたなくなつた。しやうがいこの恨みは平靜なることはできぬ。おまへはちひさいときよく鏡かんちやうなどして、自分はそのほかのこともよりすぐれてゐることをあはれんだ。つのがみを結ふころには自分はさらにおまへの聰明なことを愛した。（それも昔のこととすぎ去つた）自分はその後東西に奔走して三年の間、面上に塵土をあびてゐるがいまやこの地に春風が吹きて草がまた生えるころとなつた。（このとき特におまへの今昔をおもふ。）

贈衛八處士

衛八處士に贈る

人生不相見、動如參與商。  
人生相見ず、動もすれば參と商との如し。

今夕復何夕、共此燈燭光。  
今夕復何の夕ぞ、此の燈燭の光を共にす。

少壯能幾時、鬢髮各已蒼。  
少壯能く幾時ぞ、鬢髮各、已に蒼たり。

訪舊半爲鬼、驚呼熱中腸。  
舊を訪へば半鬼と爲る、驚呼して中腸熱す。

不歸 贈衛八處士

六二七

焉知二十載、重上君子堂。

焉ぞ知らむ二十載、重ねて君子の堂に上らむとは。

昔別君未婚、男女忽成行。

昔別れしとき君未だ婚せず、男女忽ち行を成す。

怡然敬父執、問我來何方。

怡然父の執を敬して、我に問ふ何れの方より來るやと。

問答未及已、驅兒羅酒漿。

問答未だ已むに及ばず、兒を驅りて酒漿を羅ぬ。

夜雨剪春韭、新炊間黃粱。

夜雨に春韭を剪り、新炊黃粱を問す。

主稱會面難、一舉累十觴。

主は稱す會面の難きを、一舉十觴を累ぬ。

十觴亦不醉、感子故意長。

十觴も亦醉はず、子が故意の長きに感ず。

明日隔山岳、世事兩茫茫。

明日山岳を隔てば、世事兩ら茫茫たらむ。

【字解】【一】重上、二屋の名、めつたにめぐりあはぬほしなりといふ。【二】君子、衛をさす。【三】君、衛。【四】男女、衛のこどもら、男の字或は兒に作る。【五】助、喜ば喜知の友。【六】鬼、死者。【七】君、衛をさす。【八】君、衛。【九】男女、衛のこどもら、男の字或は兒に作る。【一〇】怡然、よろこぶ貌。【一一】父執、禮記「曲禮上」にみゆ、同志の友を執といふ、けたし、執志同じきをいふならん。【一二】何方、方は方位。【一三】問答、こどもらとの問答。【一四】驅兒、兒を驅るといへば、父たる衛がなさしめることとなる。【一五】二字或は兒女に作る。【一六】羅、羅列。【一七】酒漿、漿はのみもの。【一八】剪、きりとる。【一九】春韭、春の「にら」。【二〇】新炊、あたにかしぐ、あたらしくこはんをたく。【二一】間、離ふるなり。【二二】黃粱、よきあは。【二三】主、主人衛某。【二四】稱、口にていふ。【二五】一舉、一たび手をあげ、うごかして。【二六】累、つづげさまにのむ。

【元】十觴、さかづき十杯。【七】鬼、作者がよふ。【八】君子、衛をさす。【九】君、衛。【一〇】怡然、從前どほりの親切心がいまでつづいてある。【一一】山岳、いづれの山が詳ならず、彼我兩地の中間にあるもの。【一二】世事、世上の人事。【一三】兩、君し我し兩方ともにこの意。【一四】茫茫、世事常なくはかり知るべからざるまをいふ。

【題義】處士たる衛某におくれる詩。處士とは仕へず隱遁しをる者をいふ。衛某に關しては其の人、其の地、共に明かならず、乾元二年春作者華州にありしとき其の家を訪ひしならんといふ。【詩意】人生に於てはおたがひ面會せぬことがあつて、ともすると參商の星のやうにめつたにめぐりあはぬものだ。しかるにこんばんはどういふいばんなのか君といつしよにこのともしびのひかりにてらされることが出来る。人間のわかいときはどれほどもないもので、おたがひ鬢や髪はすでにこまほになつてしまつた。舊友のだからはどうかとたづねてみると半分はあの世の人になつてをる。これをきいては驚きさげんで腸のおくも熱せざるを得ぬ。自分にとつてはおもひもよらぬことである、二十年めにふたたび君が家のおざしきへあがることにならうとは。昔し別れたときには君は未だ結婚してゐなかつた。いまみれば男女のお子さんがにはかに行列をしてゐるではないか。さうしてお子さんがたのしげにおとうさんの友だちである自分を尊敬してくれ、自分に「どちらからおいでになつたか」などたづねてくれる。この問答がすむかすまぬうちに君は子どもらにさしづして酒やのみものを席前へならべさせる。それから夜の雨ふりのなか春の「にら」をきりとり、あたらしくこは



んをたいて、米麥のほかに黄粱をませてくれる。主人たる君は、おたがひの面會はなかなか容易ではないぞ」といふ。それで自分はいきに十盃ぐらゐつづけさまにのむ。その十盃をのみはするが自分  
は酔はぬ。ただただ君の親切心がまへにかはらずいまにつづいてゐることをふかく感ずるのである。  
この親切な君とあたりあふのも今夜だけで、あすにもなつて別れをしておたがひに山をへだてる様  
なればそれからさきは兩方とも世事の前途あてどもないことになつてしまふのである。(それをおもふ  
と酔ひがまはらぬのである。)

洗兵行

行、舊作馬。〔原注〕收京後作。

洗兵行

中興諸將收山東、  
捷書夜報清晝同、  
河廣傳聞一葦過、  
胡危命在破竹中、  
祗殘鄴城不日得、  
獨任朔方無限功。

中興の諸將山東を收む、  
捷書夜報じて清晝も同じ。  
河の廣さも傳聞す一葦過ぐと、  
胡危くして命は在り破竹の中、  
祗鄴城を殘すも日ならずして得む、  
獨り任す朔方無限の功。

【字解】

【一】中興諸將。郭子儀等をいふ。乾元元年十月郭子儀は杏園より黄河を渡り、東して靈武に至り、安太清を破る。太清衛州に在る子儀之を圍みて捷を告ぐ。魯吳は關武より濟り、李嗣業、皆子儀に衛州に會り濟り、李嗣業と皆子儀に衛州に會す。安慶緒鄴中の衆七萬を以て來り救ふ。子儀また大に之を破り、慶緒が弟麗和を獲て之を殺す。遂に衛州を拔く。衛州は今河南衛輝府の汲縣

京師皆騎汗血馬、

京師皆騎る汗血の馬、

回紇饒肉葡萄宮、

回紇肉を饒す葡萄宮。

已喜皇威清海岱、

已に喜ぶ皇威の海岱を清うするを、

常思仙仗過崆峒、

常に思ふ仙仗の崆峒に通りしを。

三年笛裡關山月、

三年笛裡の關山月、

萬國兵前草木風、

萬國兵前草木の風。

成王功大心轉小、

成王功大にして心轉小なり、

郭相謀深古來少、

郭相謀深うして古來少なり。

司徒清鑒懸明鏡、

司徒の清鑒の鏡を懸く、

尙書氣與秋天杳、

尙書の氣は秋天と杳なり。

二三豪傑爲時出、

二三の豪傑時の爲めに出で、

整頓乾坤濟時了、

乾坤を整頓して時を濟ひ了る。

東走無復憶鱸魚、

東走復た鱸魚を憶ふ無く、

清なり。【二】收山東。東とは開收せしこと、山東とは太行山の東、河北の地をさす。【三】捷書。帛に文字をかき筆にかかげ、かちいくさをしらすもの。【四】清晝。晝し夜とおなじやうにかりのしらせがくる。【五】河廣。河は黄河。【六】一葦。詩經「衛風河廣に誰謂一葦之之」とみゆ。一葦は、「ひとたばのあし」をいふ、黄河の水の廣さも一東の葦なうかべいかたのごとくしてわたれるといふなり。一葦過とは一葦杭のごとく容易にわたるをいふ。【七】胡危。賊軍の形勢のあやふきこと。【八】命。運命。【九】破竹中。晉書杜預傳に今兵威已振、譬如破竹、數節之後、迎刃而解、とみゆ、竹をわるときは一節われば他のふしはたやすくからからとわれば

南飛覺有安巢鳥  
青春復隨冠冕入  
紫禁正耐煙花繞  
鶴駕通宵鳳輦備  
雞鳴問寢龍樓曉  
攀龍附鳳勢莫當  
天下盡化爲侯王  
汝等豈知蒙帝力  
時來不得誇身強  
關中既留蕭丞相  
幕下復用張子房  
張公一生江海客  
身長九尺鬚眉蒼

南飛巢に安んずるの鳥有るを覺ゆ。  
青春復た冠冕に隨うて入る。  
紫禁正に煙花の繞るに耐へたり。  
鶴駕通宵鳳輦備はり、  
雞鳴寢を問ふ龍樓の曉。  
攀龍附鳳勢當る莫し、  
天下盡く化して侯王と爲る。  
汝等豈に知らむや帝力を蒙るを、  
時來るも身の強に誇ることを得ず。  
關中既に留む蕭丞相、  
幕下復た用ふ張子房。  
張公一生江海の客、  
身の長九尺鬚眉蒼たり。

伊く、もろくわれんとする勢のなか  
にあるをいふ。【一〇】 麗。ただ  
あますをいふ。【一一】 鄆城。即ち相  
州なり、相州は武德元年に置かれ、天  
寶元年には鄆郡と改め、乾元二年に  
鄆城とす、即ち河南省彰德府安陽縣  
治なり。賊安慶緒破れて鄆に走れる  
を以て鄆子儀、許叔冀、董奉、王思禮  
等と之を圍む。【一二】 不日。多くの  
日かすをまたす。【一三】 得。官軍の  
手に得ること。【一四】 朔方。朔方  
節度使郭子儀をいふ、朔方軍は始は  
靈州に鎮せしがのち鄆州に鎮す。  
【一五】 無風功。大功。【一六】 京師。  
長安、京は火、師は衆、大にして人  
多き故京師といふ。【一七】 昔朝。  
同乾の兵がみなあるをいふ。【一八】  
汗血馬。血の汗をかす名馬。【一九】  
同乾。西北夷種の名、唐の官軍の援

微起適遇風雲會  
扶顛始知籌策良  
青袍白馬更何有  
後漢今周喜再昌  
寸地尺天皆入貢  
奇祥異瑞爭來送  
不知何國致白環  
復道諸山得銀甕  
隱士休歌紫芝曲  
詞人解撰清河頌  
田家望望惜雨乾  
布穀處處催春種  
淇上健兒歸莫懶

微され起つて適遇ふ風雲の會  
顛を扶けて始めて知る籌策の良きを  
青袍白馬更に何か有らむ、  
後漢今周再び昌なるを喜ぶ。  
寸地尺天皆入貢す、  
奇祥異瑞争うて來り送る。  
知らず何の國か白環を致す、  
復た道ふ諸山銀甕を得たりと。  
隱士歌ふを休めよ紫芝の曲、  
詞人撰することを解す清河の頌、  
田家望望雨の乾くを惜む、  
布穀處處春種を催がす。  
淇上の健兒は歸るに懶なること莫れ、

助に來りしなり。【一〇】 魏内。唐  
より彼等を變ふをいふ、能はくらは  
しむること、漢書張耳傳に如く以て内  
使。虎とみゆ。【一一】 鄆宮。漢の  
上林苑にありし宮の名、唐の御苑内  
の宮にかり用ふ、事實は乾元元年八  
月、同乾、其の臣骨曠特勃及び帝德  
をつかばし、驍騎三千をもつて安慶  
緒を討つを助けしむ。天子、朔方左  
武衛使僕固懷恩をして、之を領せし  
むといふことあり。【一二】 皇威。  
天子のご威光。【一三】 渤海。海  
は渤海、俗は泰山、海傍にて山東省  
より直隸北部をかけていふ、安祿山  
等の軍の根據地なり、前とは風塵を  
さよめ、亂を鎮定すること。【一四】  
常思。いつもおもふ、作者がおもふ  
なり。【一五】 仙仗過晴曉。肅宗の  
靈武に往來せられしことをさす、仙

城南思婦愁多夢

安得壯士挽天河

淨洗甲兵不用

城南の思婦は愁へて夢多し。

安んぞ壯士天河を挽きて、

淨く甲兵を洗うて長く用ひざるを

得む。

伏は天子の道路行列にたてるもの、  
峻嶒は山の名、甘肅省平涼府固原州  
の西百里にあり。【三】三年 至  
徳元載より今乾元二年の初までをい  
ふ。【毛】 惟嘉慶山月、關山月

は從軍の意をうたへる笛の曲の名、笛曲中に之を吹き奏すとは戦のつづきしことをさす。【三】 萬國 天下の諸地をさす。【三】  
兵前 官軍討伐の前番。【三】 草木風 草木の風になびきふすことと服従せんとするをいふ、「三年」の句は「仙仗」の句を承け、  
「萬國」の句は「皇威」の句を承けていふ、中興諸將より萬國兵前まで河北の捷報をきき官軍の必勝の望みあることをいへり。  
【三】 成王 肅宗の子、廣平王儼なり、儼、はじめ楚王となり、乾元元年二月成王に封ぜられ、四月皇太子となる、儼は兩京を收復す  
るに大功あり、故に之に言及す。【三】 心釋小 小心とは細愼な注意をすること、きしだまの小さきことと誤會すべからず。【三】  
郭相 中書令(即ち宰相)郭子儀をいふ、官軍の總指揮官なり。【三】 司徒 李光弼なり、時に檢校司徒を加へらる。【三】 將軍  
人物をみゆく力あるをいふ。【三】 聖明 かがみにたよふ。【三】 尙書 王思禮をいふ、時に兵部尙書に遷る、安慶緒を討つと  
きに肅宗は兩京の李光弼、澤潞の王思禮の二節度使をして、部下の兵をひきゐて之を助けしめたり。【三】 氣與秋 天古 氣は人の氣  
象をいふ、その氣象は、秋の澄みわたたりたる氣が天ともしたかくはるかなるに似たり、思禮の意氣の爽なるさまをいふ。【三】  
【三】 三 上に列舉せし人人をさす、萬人に懋するものを後、千人に懋するものを豪といふこと。【四】 時 その時世。【三】 登朝 乾  
坤 天地のかたむきみだれたるを正しくとのへなほす。【三】 濟時 時代をなんざからすくふ。【三】 東走(一句) 晉の張翰、  
世の亂れしを見、秋風の起るにあたり、故郷なる吳の專養、鱸魚を思ふとて官を辭してかへり、今は世が治まりしゆみさやうの人  
物無しといふなり、東走とは吳は東南なれば東といふ。【三】 南飛(一句) 古詩に越鳥南飛とみゆ、越(今の浙江省)は南の  
國なればその國の鳥はもし北方へゆけば木に巢をかまへるにも南の枝をえらびてすくふと、これは人民もこの越の鳥の如くわがすむ

べき居處におちついてゐるをいふ、南飛といふも南へとんでゆくにあらす、南枝にとよぶことなり。【三】 青春(一句) 青春はばる  
のこと、冠冕は高位の官のかぶりもの、之をかぶる人人をさす、入とは春もこれらの人人について都にはひりたりといふなり。【三】  
禁禁 天子の居は天の紫微宮にかたどる、因つて宮中を禁禁といふ。【三】 煙花 ばるの煙霞や花がとりかこむ、春色のたけなは  
なるをいふ。【三】 鸞駕 通臂鳳鸞、鸞駕同義、漢書、古來鸞解にて定説なき句なり、今浦氏の説に従ふ、鸞駕とは太子の駕をいふ、  
周の靈王の太子晉、白鶴に乗じて仙となり去る。因つて太子の駕を鸞駕といふ、太子儼の駕をさす。通臂とは、よどほしのことなるも  
儼がよる肅宗の安否をとふことをいふ。鳳鸞は天子ののりたまふおてぐるま、上に鳳鳥をのす、肅宗の乗する所のものをいふ。備と  
はその用意をととのふるをいふ。鸞鳴同義とは肅宗と儼と、父子相隨つて玄宗の安否を南内(興慶宮)に問ふをいふ、「禮記」文王世子  
に文王が太子たりしときその親の安否をたづねしことをのべて、鸞初鳴、至於殿門外、問内豎之御者、曰、今日安否何如、といへり。  
問渡とは殿門にいたりて問ふをいふ。龍樓曉は肅宗子としての禮を玄宗につくすこと漢の成帝に似たるをいふ。成帝太子たりしとき  
元帝急に之を召せしに龍樓門より出でて敢て馳道(天子の通るみち)をよこざりしといふ。龍樓は門の名にしてその上に銅龍あ  
るにより名づく。肅宗の即位の制に、復玄宗廟於西園、迎上皇(玄宗)於巴蜀、導擊輿、而反正朝、殿門以開、安、殿門畢矣、とみ  
え、作者その語を活用すといへり。「成王」の句より「鸞鳴」の句までは將相其人を得て王業の興らんとするをいふ。【三】 鸞駕附  
鳳 「漢書」の傳贊に、鸞駕附鳳、並乘天衢、鸞駕龍輿、化爲侯王、とみゆ、龍鳳は帝王をさす、そのよろこぶ、つばさにつかまりく  
つついて英雄豪傑が高き地位にのぼるをいふ。【三】 勢莫當 その英雄らの權勢さかんにして他のものは之に對當することができ  
ぬ。【三】 化爲侯王 出典は上にみゆ、人物がみな功によつて侯とか王とかの貴爵をもらふ。【三】 汝等 侯王をさす。【三】 豈  
知 知らぬ、といふば知らぬまに被つてゐるをいふ。【三】 聖帝力 天子のおかけをかうむる。【三】 時來 時運の到來すること。  
【三】 身強 強くして武功をたてしことをいふ。【三】 關中 函谷關の中をいふ、長安地方をさす、此句及び次の句、漢の事を以て  
唐の事をいふ。【三】 蕭丞相 漢の高祖の臣蕭何、唐の杜鴻漸をさす、肅宗即位の初に於て鴻漸は糧食器械等の事に力をつくす、肅  
宗喜びて靈武(肅宗即位の地)吾之關中、卿乃吾蕭何也といへり。(或は蕭華または房琯をいふとの説あり)【三】 幕下 帷帳のもと、

はかりごとをめぐらす場所をいふ。【二〇】 張子房 漢の三傑の一人張良、これは唐の張鎰をさす、至徳二載の五月に房瑒相を輔め、鎰之に代る、兩京を回救せるはみな鎰が相たりし時にあり。【二一】 張公 張鎰、ただし字面としては上句張子房の張の字をうく。【二二】 江海客 心を江湖にほしいまにする人、蓋し志氣闊大にして吏僚の習氣なき人なるをいふ。【二三】 銀 ほどひげ。【二四】 銀起 天子よりめされてたちあがる、鎰は布衣より左拾遺に任ぜられ、玄宗の劉に奔りしとき之に従ひ、玄宗の使者として鳳翔の肅宗の行宮にいたり、のち陳驥大夫となりまた房瑒に代り宰相となる、杜市は房瑒事件のとき鎰に救はれたるなり。【二五】 逸 たちだまへる、闕家の顯覆をふせぐをいふ。【二六】 龍象良 ばかりことよきこと。【二七】 扶闕 家屋のくつがへらんとするを手をそへてささぐ、青緋白馬番騎來、と、景、高陽の敗に錦を求む。朝廷給するに青布を以てす。景、ことごとく用ひて袍となし、彩色青きを尙ぶ。曰く、青緋白馬番騎來、と、景、高陽の敗に錦を求む。朝廷給するに青布を以てす。景、ことごとく用ひて袍となし、彩色青きを尙ぶ。景白馬に乗り青緋を袍となし、以て童話の語に應ぜんとす。青袍白馬は侯景が叛きしときのいでたちなり。今借りて賦詩史思明・安慶緒等をさす。【二八】 更何有 意とするに足らざるをいふ。【二九】 後漢今周 後漢は光武帝の中興をさす、今周は今日に於て周の宣王再起せしをいふ、並に肅宗をたとへていふ。【三〇】 再出 ふたたびさかんなり。「驍龍」の句より「後漢」の句までは、功臣屈龍をたのむべからず、宰相其人を得て、唐朝の復興の兆あるを喜ぶをいふ。【三一】 寸地尺天 いかになつづかの領土までも。【三二】 入貢 中央朝廷の方へ來りて貢をたてまつる。【三三】 寄許真璣 めづらしくかばつたためたきしもの、下句にいふ白雲銀鬃等をさす。【三四】 來遊 中央へおくりこす。【三五】 致白環 竹書紀年に帝舜の九年に西王母來朝し、白環玉環を獻すとの記載あり、白環は白玉の「わしなり、致とはこちらへよこすこと。【三六】 道 世間にいふなり。【三七】 銀髮 ざんものたひみか、瑒龍鬚といふ詩書に、王者、宴不及醉、刑罰中則銀髮出焉、といへり。【三八】 驍士 勇士をさす。【三九】 休歇 歌ふをやめよとはかくれず世にいよいよふなり。【四〇】 紫芝曲 湖山の四略のつくれる紫芝の歌をさす。【四一】 詞人 文學者。【四二】 解調 つくることを得てある。【四三】 清河頌 南朝、宋の元嘉中に河水濟水ともに清めり、時に鮑照「河清頌」をつくる。河水のすむは太平の象とせらる。【四四】 田家 農家。【四五】 望望 くびをのびしてながめる。【四六】 雨乾 ひでりにて雨なきこと、乾元二年春には旱

あり。【四七】 布穀 鳩の一種、糞積なりと。【四八】 催 うながす、「ほとしのなくば節をしらせてたれまきをませるなり。【四九】 春種 播るたれまきすること。【五〇】 洪上健兒 洪は水の名、衛州(衛輝府故縣)にあり、相州(鄴城)の南鄙の地、洪上とは洪水のほとり、健兒は武卒なり、洪上の健兒とは鄴城を圍むためにでむいてある官軍の兵卒をさす。【五一】 歸真驄 ぶしやうせつと早くかへれ。驄は「ものうし、ただし早く功をなしたげたらうへはやくかへれとの意。【五二】 城南 長安城南。【五三】 思 征伐に出てくる夫をおもうてあるつま。【五四】 惹客多 夢ばをつとについてのゆめ。【五五】 安得 希望のことば。【五六】 壯士 兵卒。【五七】 避 避ひく。【五八】 天河 あまのがは、そのかばみづをいふ、かば水にて兵を洗ふことはなけれども、雨が兵をあらふといふことあり、「説苑」に周の武王が殷の紂王を伐らしに大雨ふりたり、散宜生が曰く、此は妖にあらざるか、武王曰く、しからず、これ天、兵を洗ふなりと、天河といふは作者想像をもちひてかきいへり。【五九】 淨 さまよく。【六〇】 洗甲兵 よるひ、武器をあらふ、洗兵のことば上にみゆ、寸地尺天、以下の水段はいよいよ太平の來るのみあるをいひ、早く軍をやむるにいたらんことをかきいへり。【題義】 この詩の結句に淨洗甲兵長不用とある「洗兵」の二字をとりにて題とす、諸本「洗兵馬」に作る、仇氏「杜臆」に従ひて「洗兵行」とす。天の河の水で武器をあらひ去り、永久に用ひぬ様にしたいといふ意味をのべたるうたなり。九節度の官軍が相州(即ち鄴城)に敗れたるは乾元二年三月三日壬申にあり、此詩はしきりに官軍の捷報を得て未だ敗れざりしときに成りしものなれば、けだし同年二月中の作なるべし。浦氏は洛陽にての作とす。【詩意】 わが唐の中興の諸將らは山東河北の土地を賊の手から回救して、そのかちをしらせるかきものが夜中にくるが晝もまた同じやうにやつてくる。きくところによると官軍は黄河の廣い水も一東の濤をうかべてわたる様にたやすくすましてしまひ、賊軍は危くなつてその運命は破竹の勢に乗せられ

んとしてゐるほどせまつてゐる。ただのこつてゐるのは鄴城であるがそれも日かすのたたぬうちに吾が手に得られるであらうし、すべて官軍のこの形勢をきめることは朔方節度たる郭子儀のはかられざる功にまかしてあるのである。みやこでも同乾の兵が援助にきて彼等はみな汗血の馬にのり葡萄宮ともいふべき御苑の宮城で養はれつつある。一方にはもはやわが天子の御威光が渤海岱山の遠方までを鎮定するに至つたことを喜ぶとともに、他方には我が君がかつて鞍峒山のあたりまで御通過になつたことはわすれられぬことである。およそ三箇年といふものは笛中に關山月の曲をふいていくさになやんだが、いまやあらゆる地方が官軍の討伐の前面には草木の風になびく様に服従せんとするほどになつてきた。」いま要路にゐる人人を見るに、わが成王はうちたてられた功が大なるとともにその心はいよいよちひさく用意ぶかくせられ、宰相郭氏は謀のふかいことむかしからめつたにみぬほどであり、司徒李光弼は鑿賊あかるくあだかも鏡をかけたがごとく、兵部の王尙書の氣象は秋のそらともにはるかにすみわたつてゐる。これらの豪傑は時代を救はんがために出てきて天地のみだれたのをととのへて時代をすくひをはつたのである。だから張翰の權に東に走つて鱸魚がこひしいなどいう朝廷からにげだすものもなく、越の鳥が南枝にとんでおちついてその巢にとまつてゐる様に人人は安堵してゐる。都の回復とともに文武百官がりつばな冠をつけてはひりこんだにつれて春げしきもそれといつしよに入りきたつて、宮城のうちにはちやうど煙霞や百花がぐるりととりかこむにふさはしく

みえる。皇太子(成王)はよもすがら鶴駕にて天子の御安否をおたづねになり、それとともに天子もまた鳳輦をおそなへになつて、御父子つれだつて、とりのなくあかつきには御隱居の君(玄宗)の御安否を寢門の外(南内興慶宮の)におとひになるべく龍樓門にも比すべき御門からおでましになる。」この時にあたつて龍鳳の勢にしたがうて榮達したものの權勢は之に當るものはないほどえらいものであり、天下ちやうがほとんど猫も杓子もみんな候とか王とかいふ身分のものとはやがはりました。汝等はいよもや氣がつくまいがすべて天子の御恩徳のおかけをかうむつてゐるのである、好運がきたからとてわが身の強かつたためこんにちの位置を得たなどとはこつてはならぬのであるぞ。關内では已に蕭何に比すべき杜鴻漸をのこしおかれ、帷帳の謀臣としては張良に比すべき張鎰をお用ひになつてゐる。張公はその一生は江海の豪傑で、身のたけは九尺もありほはひげや眉毛は蒼然としてゐる。この人がおめしによつて風雲のとびたつ亂世のをりにであひ、國家のまさに顛覆せんとするのをたすけ起したので、はじめていかにこの人のはかりごとがよかつたかが知らるることになつた。もはや侯景の様な青袍白馬の叛將があつてもそんなものはないものである。後漢光武の世、周の宣王の世が今日ふたたびさかんになるに至つたことはよろこばしいことである。」一寸一尺のいかに權かの領土までもみな朝廷へ入貢するし、めづらしくかはつたためたいしるしものはあちからもこちからも争うておくつてくる。どこの國かはしらぬが白玉の環を獻じてよこしたさうだし、また世人のいふと

ころによるといろいろの山山で銀の「みか」がでたさうだ。隠遁者も四皓のやうに山の中で紫芝の曲などうたふことはやめてしまへ。文學者は鮑照ならずとも清河の頰をつくることをころえてゐる。ちかごろはひでりで農家ではうらめしさうに雨のすくないのを惜しんでゐる。「まめまはし」鳩はくうくうないて處處で種まきをさいそくしてゐる。都の城南のるすばんの妻はしんばいして夜な夜な夫を夢みることが多い、洪水の方へ征伐にでかけてゐる兵卒どもはどうぞ早く賊を平げてすばやく歸つてほしい。自分ではできるなら、壯士をやとうてあまのがはらの水をひつばつてきて、さつぱりとよろひや武器を洗ひ去つて永久に用ひぬ標にしたいたいものだとながふのである。

昭和三年七月十二日 印刷  
昭和三年七月十五日 發行

續國譯漢文大成 文學部 第四卷

〔非賣品〕

著作權所有

編輯者	國民文庫刊行會
右代表者	鶴田久作
印刷者	君島 潔
印刷所	共同印刷株式會社

東京市神田區淡路町二丁目十四番地  
東京市本郷區西片町十番地  
東京市小石川區久堅町百八番地  
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所

電話神田一八五三三五番  
振替東京一八五七二番

國民文庫刊行會

終